

めしにくい・ざ・ろっ
く！

布団は友達

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「今お金無いからご飯作って」

定期的に飯を食いに我が家を訪れる同級生——山田リョウト、俺のお話。

目次

一年前

寄生虫・山田リヨウ	2
鍵は返してね	17
ストレスと嫌がらせと安堵	35
一人にさせてくれない	55
最高のひとり	72
山田のベース好きだし	90
虹の日・前編	110
虹の日・後編	129
ベースリスト・山田リヨウ	147
壊れてしまった	165
噛み跡と爪痕	187

俺はロードハウナナフシ	211
何が悪い・前編	230
何が悪い・後編	248
オマエは助けず、君は救ける	268
至福のひととき	289
大晦日は寂しい？	306
幸先は悪くない	325
良い変化、なのだろうか	342
チヨコに詫びろ・前編	361
チヨコに詫びろ・後編	381
人知れず幸せに	396
綺麗だった	413
この正体は、私の■■■だ	437

真の陽キヤは光る | | | | | 459

原作開始

残っていたらしいチケット | | | | | 483

日頃から全力運動はしておこう

502 | | | | |

いつの間にか慣れてしまった | | | | | 517

明るいあの子の暗い話 | | | | | 536

乗り切れ、今日という日を！ | | | | | 559

イケナイ未来でした | | | | | 579

君の相談ってホントに当たるね

598 | | | | |

離れていくのは嫌だ | | | | | 618

壊れていく、何もかも | | | | | 640

もう私は諦めたい | | | | | 662

特級フラグ建築士 | | | | | 682

ヒーローは遅れてやってくる | | | | | 702

超刺激的な治し方だった | | | | | 730

頼る相手を間違えたの巻 | | | | | 752

ライブは後より前が疲れる | | | | | 770

一郎の味とは | | | | | 789

嘘じゃない、誤解だ | | | | | 809

身も心も、もう保たない | | | | | 832

文化祭ライブ……の直前 | | | | | 853

ヒーローになるしかないのに | | | | | 869

転がる君に○○が降る | | | | | 888

深く堕ちていく | | | | | 910

レベル3の試練：前編	932
レベル3の試練：後編	950
夜道のダークポイズン	966
BADEND「やさぐれ悪魔と天使様」	989
口説いてると気付かずに	1003
登場人物①	1021
今日は二回死ぬ日	1030
暴君、ここに	1047
遮られた言葉は？	1066
部外者は呼ぶべきではない	1085
疲労は人を駄目にする	1103
侵蝕される将来	1120

番外編『ホワイトデー』	1140
意識させたい	1150
大晦日とは穏やかに過ごす日	1168
明けても怖い	1186
ヒーローの幻・前編	1206
ヒーローの幻・後編	1224
好きになってごめんなさい	1247
来なきや良かった	1271
より輝く事を祈って	1295
今じゃない	1324
幸せになろうね	1337
気味が悪いと思ったら	1364
そういう事だな、神よ	1384

乙女にした男	1404
夜中のソレは完全にアウト	1424
私も一緒、だとき	1440
雑草食つてろ	1461
大人に頼ろう	1479
他で浮気始めたんだ？	1502
やられたら、やり返す	1524
【ボツ虹夏ルート】違う道でも	1547
BADEND 『やさぐれ悪魔と天使様』	1566

一年前

寄生虫・山田リョウ

高校から帰ってきた俺——前田一郎は、今日は借りてきた映画でも見ようと思つていた。

海外出張で親のいない静かな家に「ただいま」と告げる。返答は無いけど、何故かやつてしまうこの習慣は何だろうな。

手を洗つて、テレビの前に着く。

そうして映画を見ようとした時、インターホンが鳴った。

オートロックのマンション入口前を映す画面に、俺の部屋番号を押して通話してくる誰かが映し出されていた。

……何となく察しがつく。

誰が来たのか。

嫌な予感がしつつも、礼儀として応対する。

「今お金無いからご飯作って」

少女が画面越しに希っている。

襟足を短くした特徴的な青い髪をしていた。前髪の下で気怠げな瞳は緊張感が無く、金が無いという緊急事態における言動の割に落ち着いている印象を受ける。

コイツは、山田リヨウ。

俺と同じ高校に通う同級生だ。

校内では、あの陽キャの伊地知虹夏と関わっているところしか見た事がない。

普段は浮世離れた感じがした神秘的なキャラなんだが……。

若干、というか無表情なので全然キツそうには見えないが、よく見ると左右に小刻みに震えていた。

今月に入って何度目かの光景だ。

俺は嫌な気分になる。

もういい加減にして欲しい。

「山田」

「うん」

「帰ってくれ」

「……………」

きよとんとした顔で小首を傾げられた。

至極真つ当な事を言った筈なんだけど理解されない。

それどころか、未だに解錠されない扉と画面の方を交互に見ている。だから開けないって。

「週三で来るのをやめてくれよ」

「大丈夫。言われた通りに来る頻度は減らした」

「週四から一回減らしただけじゃん」

俺は怒鳴りそうになる声を抑えて訴えかける。

親がいないからって気軽に家が上がって来るのをやめて欲しい。飯目的で夕方に来るのをやめて欲しい。

この前なんてそれで……。

「週間で見れば一回、でも一月の通算で数えれば少なくとも四回は減らしている。これは骨身を削った立派な努力だと思う」

「面の皮が厚い」

俺がそう言う間も、今か今かとマンション入口を見つめる瞳には、全く開けられる事

への疑いが無い。

どうして入れると思ってるんだろう。

ただ、よく見れば傘を忘れたのか雨に濡れている。

髪から水が滴り、ギターケースを守るように抱いているところからすると門前払いするのは逆に可哀想なのかもしれないが……。

だめだ、考えると良心の呵責が聞こえてくる。

仕方なく、俺は解錠ボタンを押した。

扉が開くや否や、颯爽と山田はそちらへ進んだ。

俺は玄関前の床に足拭き用と体や髪を拭く用のタオル、さらにスリッパを用意しておいた。

これで良いだろう。

後は両親に連絡でもして迎えに来て貰うんだ。

長居なんて——絶ツツ対にさせない！飯を食う時間までには追い出してやる！

そ　う　思　っ　て　山　田　を　待　っ　て　……　待　っ　て　……　待　っ

……
来なくね？

俺の家は四階だけど、そう時間はかからない。

……まさか、途中の階段か何処かで足を滑らせた!?

アイツはローファーを履いているが、水で濡れているとかなり滑りやすいし、このマシシヨンの床との相性は最悪だ。

滑って頭でも打って気絶してるんじゃないや……大事だったらマズい！

外に出て助けに行こうかと考えた時、スマホに着信が入った。

『もしもし』

山田だった。

『君の部屋、何処だっけ』

「何回通ったら憶えるの、オマエ??」

生きててよかった。



山田を家上げて、彼女にタオルを差し出す。

どれくらい濡れているのか、間近で確認してみるとシャツが透けるくらいには濡れていた。下の黒い長袖インナーが見えている。

この様子だと中也濡れてるか。

着換え……は体格的に山田と合わないしな。

「前田、シャワー借りていい？」

「えっ」

「ありがとう」

「何も言っていない」

トコトコと脱衣所へ向かっていく。

他人を意に介さないマイペースさは羨ましいが、友だちにはしたくないタイプだなあ……とつくづく思う。

まあ、元から友だちではない。

今年に入ってから、こんな関係だ。

友だちでもないし、クラスメイトでもなく、ただ同じ学校で同学年というだけでほと

んど接点なんてまるで無い。

ああ、あの時にコイツと遭遇してなければ……。

そう思っていると、山田が風呂から出てきた。

早い、あまりにも早すぎてカラスの行水かと思える速度だった。

え、でも着替えはまだ用意してな——

……………はっ!?

「それ、何着てんの?」

「前田のシャツ」

「いやいやいや」

「他に何も無かった。てつきり私にこれを着せたいのかと」

「意味わからん」

「ベースギター拭く用のタオルも欲しい」

「コイツ……………」

おかしいよな。

世話になってる人間の態度ではない。

我が家も同然に寛ぐ姿に俺ですら錯覚しそうだが、コイツは山田であつて前田ではな

い!!

服が乾いたら一刻も早く退去して欲し……………待て。

「おい、山田。服は何処に」

「脱衣所に吊るして乾かしてある」

「え、ツツ」

俺は慌てて脱衣所の方へと走った。

扉を開ければそこに――。

「ぎゃああああああああ!!!」

水の滴る女子の下着が紐で吊るしてあった。

安心して欲しい。

俺の絶叫は興奮ではなく恐怖に由来する物だ。普段は海外出張で一人の生活をしているの、見慣れた脱衣所に女の子の下着が干してあったら普通にホラーな光景ではない。

俺の叫びにびくりとした山田がのそのそと俺の方へと歩き、後ろから脱衣所を覗いた。

「ごめん、床濡らして」

「そこじゃない！」

「……干し方？」

俺は洗濯機の蓋を開けた。

「ここ入れとけ！乾燥機かけとくから！」

「うむ、任せた」

え、あ、ちょ……俺が声をかける前に山田は去っていく。

俺に触れると、アレに……？

本人が許しているなら問題ないが、もう少し何ていうか生物学的にも考えて欲しい。……もう自分が何を言ってるか分からなくなってきた。

俺は頭を空っぽにして、山田の下着を乾燥機にかけた。

リビングに戻ると、山田がベースを弾いている。

相変わらず、持っている時の姿は様になっていた。

元々、校内でも少しだけ有名だ。

他クラスで関わりがほとんど無い陰キャな俺ですら度々だが友人づてに名前を耳にする。

中学の時は文化祭で何かやって話題になったらしいし……まあ、とにかく知る人ぞ知る人。

「私のことは気にしないで」

「……………」

「いないものだと思つて気軽に寛いで欲しい」

「何様だよマジで」

面の皮が三枚くらい重厚なの装備してるな。

どうやったたら、ここまで凶々しく育つんだ人つて？

さて、ヤツも寛いではいるが勘違いする前に言わなければならぬ事がある。

「あと三十分で乾くから、家に帰れよ」

「まだご飯食べてない」

「コイツ……………」

「それに、予報だとこれから明日まで更に雨が酷くなるって言つてた」

「そこは親に連絡——」

「雨が上がつてから帰れば大丈夫」

「なおさら親——」

「大丈夫」

コイツ、親を頼るのは頑なに避けるよな。
でも勘弁して欲しい。

この前は飯を食って寝呆けるコイツのスマホに着信が入り、画面に親らしき名前があつたので勝手に応答したらメチャクチャご両親に警戒された。

何でだよ、マジで俺が不憫。

しかも、親を呼んだのかとジト目で山田本人にも睨まれたし何でだよ。ただ両親とは全然仲が良さそうだったので尚更なんで頼るの嫌なのか疑問だった。

しかし、雨は酷くなるのか。

明日までとなると、これは帰るのが益々……待て。

「泊まる気か？」

「うん」

「正気か？」

「親がいない上にご飯も出て、客（私）用の布団も用意してある。実質、ここは私の家では？」

「何様だ帰れコラ」

思わず口汚く罵ってしまった。

どうやったたら帰ってくれるんだろうか。

いや、もう考えるのがバカバカしく思えてきた。

「映画でも見るか」

「映画？」

「ああ。オマエが来なかったら一人で浸りながら観てた」

「何て映画？」

『『死霊の○らわた』』

「……SF？」

「この題名でSFが想像できる?」

ギターを弾く手を止めて、山田も再生した映画を観る。

……まあ、これは題名から連想できると思うがホラーだ。しかもグロイ系なので、正直に言つて友だちと観る事はあまり推奨しない。……友だちそんなないけど。

山田はもういない者として扱う。

さあ、開幕……！

終盤になると、山田は俺の隣に移動していた。

ベースギターで顔を隠し、テレビを自分から遮っている。

片手はふるふるすると震えながら俺の腕を掴んでいた。

地味に痛い。

「終わった？」

「案外ホラーって苦手？」

「グロいのはムリ。平然としてる前田もムリ」

「自然な流れで視聴者まで否定すな」

エンドロールに入り、ようやく山田が顔を上げる。

無表情で大体分かりにくいのが、どうやら安堵している様子だった。

時間は………午後六時半。

そろそろ俺も風呂に入って、飯を作るか。……面倒くさい。

「ピザ頼むか」

「前田が作らないの？」

「もう疲れたから作りたくない」

「分かった。私が今から一曲弾くから、そうすれば元気が出るはず」

「何処から出てくるのその自信……？」

マイペースでポジティブ。

なるほど、道理でコイツの相手が疲れるわけだ。

もう耳栓がしたい。

「あー、もう……飯食ったら帰れよマジで」

「布団って何処だっけ」

「話聞けよ」

「明日には、ちゃんと帰る」

「今日を諦めるな。ご両親呼べて」

「……誰かに迷惑をかけたくはない」

「オイ。俺を見て言ってみろ、もう一度!!」

俺は呆れながらもキッチンに立った。

「今日も作るか……悲しい事に、飯を作れば一人分も二人分もそう変わらないのである。」

だからといって、調子に乗られても困るんだが。

そう、これは俺と俺の家に飯を食いに来る女の子――

「前田」

「ん？」

「先にお菓子食べていい？」

——みたいな寄生虫の話だ。

鍵は返してね

「前田って私以外に友だちいる？」

「……俺ら友だちなのか？」

「え」

「え」

テレビを見て二人で夕食を食べていたら、山田がそんな事を口にした。

今日は炊いた白飯、ソーセージとアスパラのカレー炒め、スープ餃子、豆腐ときゅうりと塩昆布を和えた物の四品である。お気に召したのか、山田の箸は進んでいた。

「じゃあ、何で『あのととき』に私を家に上げたの？」

「そりゃ、あんなの見たら……」

「前田は変だね」

「オマエに言われたくないんですけど」

「へへ」

「褒めてない」

思わず低い声で言うが、山田は意に介した素振りも無い。

和え物をぱくぱく食べている。

美味しそうに食べてくれたなら作り甲斐もあるのに、全く表情が動かないから悲しくなってくる。

味の感想は訊かないと答えてくれないが、何故かコイツに味の感想を求める事自体が恥ずかしい。逆に文句言ったら二度と食わせないけどな。

「映画、もう一本観よう」

「帰ってから観ろ」

「家にあるのは見飽きた」

「えー。じゃあ、何か貸してや——は！」

危ない！

映画を貸すなんて愚の骨頂だろ。

コイツが再び俺の家に来る理由を作らせてしまうところだった。だからといって学校での返却なんて、友だちの少ない陰キャの俺がコイツとそんな関係だと邪推する野次

馬の餌食にしなければならないしな。

何かを貸し借りするのは絶対にダメだ。

「前田？」

「……大体、何で映画なんて」

「曲作りのインスピレーションになるから」

「……山田って作曲もできんの？」

「うん」

「すげー。ちよつと尊敬するわ」

「崇める程じゃないよ」

「調子乗んな」

褒めたらすぐに調子に乗りやがって。

でも作曲って難しい印象があるが、楽譜も読めない俺レベルの素人からすれば何を見ても難しいので、逆に褒めるのは失礼かもしれない。

そういえば、バンドやってるんだっけ？

その中で作曲も担当しているのかもしれない。

「バンドで作曲もしてんの？」

「……………ん」

「ん？」

何か、声が低い。

不機嫌というより、触れて欲しくない感じか。

「良いから。親心配させる前に帰れって」

「面白い映画は……」

「おい。勝手に棚を漁るな」

「……この『巨〇天国』これから始まる□獄にあなたは蕩かされる』って何？」

「やめろ。ソレ父さんの秘蔵だから」

「前田も見たの？」

「観てないけど、興味はあ……ない」

山田が父さん秘蔵のDVDのパッケージに注目する。

やめろ、高校一年生の女子がそんなガン見して良い物じゃありません。

それは成人用のヤツ、所謂AVだ。

俺だって、まだ直視すると顔が熱くなるんだぞ。

「前田の趣味が一つ知れた」

「違う」

何故かやってやった感の顔をする山田。

それは俺の趣味じゃない、オマエが理解したのは前田父の趣味だ。
暫くすると、山田がため息をついて棚に戻す。

「でもコレ、あまり面白くなさそう」

な、なに……………？

顔を赤くするどころか、面白くなさそうだと……………？

普通、男の部屋でこんな物を見つけたらその瞬間から気まづかったり拒絶したり、態度が変わる。

俺が知る以上に、山田はもつとハードでエキサイティングな状況を経験しているのか……………!?

戦々恐々とする俺の前で、山田は尚も帰る事もせず映画物を収納している棚を掻き回していた。

我が家は多様なジャンルを手広く堪能している。

探せば、少しはお気に召す物もありそうだけど。

「前田、コレ観たい」

「ん？」

『〇人の翻訳家 囚われたベストセラー』

「ああ……ソレ面白かったな」

「前田がそう思うんだ？」

「コレは中々に良かったよ」

「よし観よう」

「いや帰ろうな？」

DVDを取り出す山田の手を後ろから掴んで止める。

十秒以上も抵抗されたが、根負けした山田が力を抜いたので颯爽とDVDを取り上げた。

危ないあぶない。

俺はDVDをパッケージに戻し、棚へと入れる。

その間もぼーっと俺を見ている山田なんだが、振り返るとモロにシャツ一枚の姿全体が見えてしまつて心臓が悪い。

「良いから親に連絡してこい」

「分かった。流石にこれ以上は迷惑かけられないし」

そう言つて山田がスマホを片手に立ち上がる。

ようやく分かつてくれたか……。

通話の為に、山田は別の部屋へと移動していく。

これで一人で夜を過ごせそうだ。

もう服も乾いただろうし、後は迎えに来るご両親に身の潔白を弁解しながら寄生虫を追いかうだけ――

「――友だちの家に泊まってくるって言っておいた」

「オマエ、電話の前に自分で何て言ってたっけ??」

俺にこれ以上は迷惑かけないんじゃないのかよ。

山田は悪びれもなく、スマホを机に置くと再び映画の棚からさっきの物を取り出した。

コイツ、意地でも帰らないつもりか。

山田が映画を挿入し、再生ボタンを押した。

「見よ、前田」

もう、諦める事にした。

エンドロールが流れる。

映画が観終わる頃、山田は俺よりも前で画面を見入っていた。

いや、クソ邪魔。

「面白かった」

山田が振り返ると、彼女の後ろ姿越しに画面を見ていた俺と視線ががっちり合う。本当に面白かったのかと思うくらい無表情だ。

コイツ、本当に人と感動を共有するのに向かないというか何というか。

「最後、びつくりする展開だよな」

「スカッとした」

「でも、それだけじゃないのがこの映画の良い所だ」

「途中のレーザービームがキレてたね」

「オマエ夢でも見てたの?？」

いつそんなシーンあったんだよ。

だからSFじゃねえって。

俺はDVDを取り出した。

それから通常のテレビ番組へ戻すと、丁度よく深夜アニメの時間帯になっている。

明日は土曜日……バイトだ、畜生。

本当なら、この二時間後にやっているアニメを観たいけど朝から出勤だし、録画しておくか。

「山田、俺は翌朝からバイトなんだけどさ」

「……前田、勤勉だね」

「この映画だって、俺の金で買ってるんだ。生活費は親に負担して貰って、小遣いも多めに貰ってるけど極力手え出したくないっていうか」

「意固地」

「言い方他にあるだろ」

変な意地だとは思う。

俺の両親は優しいし、山田の両親ほど溺愛してはいないと思うが、俺に対して比較的に甘い。

でも、それに浸るのは何か嫌だ。

「山田に一応、スペアの鍵を渡しておく」

「……」

山田の手に予備の鍵を一つ落とす。

「明日はこれ使つてくれ」

「なるほど。これで明日から好きな時に入れると」

「出る時に使うんだよ！鍵返せ！」

俺が手を伸ばすけど、山田がその分だけ逃げる。

くそ、もう少し考えて渡すんだった。

その後もしばらく抗戦は続いたが、やがて俺の方が根負けして大人しく鍵を渡したま

ま寝る事になった。

無念。

まあ、今日だけだ。

次こそは家に入れない。

早く寝て、そして綺麗さっぱり明日にはいなくなつて貰うんだ。

「前田、おやすみ」

「布団出したから、オマエも早く寝ろよ」

「前田のベッド使いたい」

クソが。

♪

♪

♪

♪

週明けの登校日、俺は目の前に見慣れた背中を見つける。
ギターケースを背負った少女だ。

声をかけたくないけど、鍵を返して貰いたい。
俺は仕方なく小走りになって向かう。

「山田」

「むぐ?……前田」

「おまつ……ソレまた野草?」

「コヒルガオ」

「うえ……」

いくら金欠で食い物に困窮しているとはいえ、やはりコイツ躊躇いが無いな。

大体、家が金持ちで両親からも溺愛されているのに食生活がこれって、一体どんな家庭だよ。

引き気味に見つめていると、何を思ったのか山田が俺の方へと野草を差し出した。

「前田でも食べられるよ」

「いや、食べたそうな目してた俺?」

「普段、私は君に何も返せていないから」

「何でよりにもよってソレが今なんだよ」

もつと別の機会で報恩して欲しい。

まあ、恩返ししたいという気持ちは貴重だし、ありがたくはあるけどさ。

おっと、本題を忘れるところだった。

「ほら、鍵」

「あ、そっか」

俺が差し出した掌に、山田がぼんと鍵を乗せる。

……………ん？

これ、俺の家の鍵と形が違う気がする。

「これ、私の家の鍵。私だけ持つてるのフェアじゃない」

「俺の鍵を返して」

何で貸し借り無しみたいな清々しい顔してんだコイツ。

普通に俺の鍵を返せばフェアだの何だの余計な事を考えなくて良いんだよ。

俺が改めて返却を要求すると、山田は無言でじっと見詰めてくるだけだった。

な、何だよ。

俺の顔に何かついてるんだらうか。

鍵を早く返して欲しいのに、他に気になる事でもあるのか？

「どうした、山田？」

「黙っていればやり過ぎせるかと」

「最低な発想だな」

コイツ、いよいよクソガキ認定したい。

無理やりにも鍵を奪ってやろうかと俺は身構える。

すると、山田も何故かファイティングポーズを………って何その構え方？

「何それ」

「サウジアラビアに伝わる格闘技『エポン』。昨日ネットで見つけた」

「そんなのあるのか!？」

どうやら、意地でも返したくないらしい。

結局、学校に着くまで絶妙に躲されて取り上げる事はできなかつた。

後で調べたけど、エポンなんて格闘技は無かつた。

丸つきり嘘だつた。

昼休憩の時間に俺は机で突つ伏していた。

あーあ、今日もバイトじゃん。

でも、来月入る新作映画も買いたいし。

俺はスマホで価格を調べつつ、今月入る給料などと照らし合わせて計算を始める。

「あ、前田くん！」

「んえ？」

元氣よく俺を呼ぶ声に振り返る。

教室の入り口で、手を振る女の子がいた。

サイドポニーの金髪を揺らし、まるで邪念なんて物とは無縁そうで綺麗な瞳で俺を見ている。

あ、あの人は……！！

「い、伊地知さん!？」

「ごめん、今ちよつとお話いい？」

い、伊地知さん来ター!!

実は密かに俺が想いを寄せる女の子——伊地知虹夏その人が、俺を教室の入り口で呼んでいる。

他クラスで普段は交流ないけど、一目惚れだった。

小柄で、明るくて、笑顔が可愛い。

入学当時に見かけてから彼女を目にするとドキドキする。

う、うわー！

何の用だろう！

わざわざ俺に……？

「な、何？」

「うん。実は渡したい物があつて」

渡したい物？

な、何だろう！超期待！

この際、ゴミでも何でも良い！

「はい！コレ、リョウが借りてた前田くんの鍵っ」

ぼん、と俺の手に置かれたのは……山田が借りパクしていた俺の家の鍵だった。

あー、用件って山田かー。

自分の中で一気にテンションが下がっていくのが分かる。

「話には聞いてたけど、リョウが借りたままだつて言つてて」

「あー、うん」

「でも、リョウだったら返さないつて言うから。だから寝てる間にこっそり取つて持つて

きたんだよ」

「ありがとう、伊地知さん」

「ううん、気にしないで！あー、でも寝てる間に人のバッグを漁る罪悪感があつたな、リヨウ相手なのに」

へへ、と伊地知さんが笑う。

か、可愛いー。

罪悪感なんてそんな、あなたは正義の味方です。

現にヤツに振り回された一人の哀れな男を救ったではありませんか！

「このお礼はいつかするよ」

「いやいや、こつちこそ」

「ん？」

「リヨウって私以外に友だちいないみたいだから。よく前田くんの話もするし……あと、リヨウが倒れずにいられるのも実質前田くんのお陰だから」

俺のお陰、なのだろうか。

単にアイツがロクな物を口にしていないからだと思うけど。

「これからよろしくね、前田くん！」

はいっ！

この笑顔ですべてがどうでもよくなる！

笑顔で手を振りながら去っていく伊地知さんに、俺も手を振って幸せな気分になり――

「では、改めて拝借いたす」

「あ？」

後ろから伸びた手に、俺の鍵が奪われた。

振り返れば、そこに山田がいる。

「前田って笑顔、似合わないね」

「おま、返せコラー！ー！」

山田が鍵を手に伊地知さんを追うように走って行った。

ストレスと嫌がらせと安堵

今日は散々だった。

結局あの山田は捕まえることができなかった。

鍵を奪われたままなのは由々しき事態だが、もうバイトの時間も迫っているので今は考えないようにしたい。

むしろ、それより気になる事がある。

学校を出てから……視線を感じていた。

何でだろう。

人の恨みでも知らない内に買っただろうか。

俺はバイトへの近道になる細い路地へと入った。そこは人気がなくすんなり通れるから遅刻しそうな時以外でも利用する頻度は高い。

あ、人いないの逆にマズくね？

「ねえ」

悪い予感的中した。

俺が一人だけの時を見計らうかのように俺に声がかけられた。

声から好意的な気持ちがなく感じられない。

敵意全開である。

振り返ると、女子三人が立っていた。

うん、どの子も知らない!!

「な、何ですか？」

「最近、山田さんと仲良くしてるけど何なの？」

「何なの、とは」

「彼氏かって聞いてんの!!」

……………何なんだ、この女子たちは。

なぜ山田と俺の関係が気になるんだ？

いや、昼の出来事だったりを見ていれば気になるヤツもいるだろうが、行動に移して、しかもこんなに険のある声と顔で詰問してくるヤツが出る程のことではない。

マジで何の因縁か分からん。

「彼氏じゃないです」

「はあ？じゃあ、何なの……………廊下で追いかけてたし」

「鍵を盗まれたので」

「山田さんがそんな事するわけないじゃん!!」

「その山田は絶対に人違いだ」

その山田さんフィルタールかかってませんか？

この子、山田を美化している節がある。

き、聞いたことがある。

山田は男子は勿論の事、一部の女子にも人気があるらしい。

この三人は、山田のファンか？

そうだとしたら納得だ。

過激派のように、山田に俺のような男子の影が近くにあると目障りなのだろう。……

そう思われる俺の方が気に障るけどな。

「いや、山田は君らが思ってるようなヤツじゃ……」

「何その反応」

「え？」

「アタシらより山田さんを知ってるってアピール？」

何だか気持ち逆撫でしてしまったらしい。

知ってるアピールっていうか、知りたくもないのに教えられてしまった感っていうか。

「何したいのか知らないけど、アンタみたいなのが——!!」

女子の一人が手を振り上げる。

え、何で山田の事で俺が叩かれなきや——!

「あれ、前田？」

場にそぐわない呑気な声でした。

野草の束を片手に俺たちを見ている。

げ……元凶が来た。

俺に向かって振り下ろされた手は寸前で停止した。

他の女子二人も、愕然と出現した山田に視線が釘付けになっている。

そして、頭を庇うように立つ俺。

「何してるの？」

「あ、山田、これは」

山田はしばらく俺たちの様子を訝しげに見て、何か得心して掌を拳で叩く。

それから、ポケットから俺の家の鍵を取り出した。鍵を指に引つ掛けて俺たちに見せびらかすように揺らす。

「邪魔してゴメン。前田、晩ごはん楽しみにしてる」

それだけ言つて、山田が去つていく。

俺の家に向かうつもりだろう。

山田のセリフからそれを察したのであろう女子三人の目に剣呑な光が宿る。

俺は凍りついた。

ヤロウ……火に油注いだけだった。

元凶がさらなる災いだけ残して帰るなよ、ていうか助けろよ、あと鍵返せよ！

恐るおそる女子たちの顔色を窺う。

すると、平手だった形が拳固に変わった。

他の二人からもメラメラと燃え滾る何かを感じる。

そつと……俺は頭を庇う腕の防御を固めた。

「同棲してるなんて、聞いてないー!!」

してません。

俺を殴ることなく、女子たちが泣きながら走り去っていった。
泣かしたのは俺じゃない、山田です。



——午後九時半。

俺は疲弊した体を引きずって帰宅した。

しこたま女子の暴行未遂に堪えた肉体をさらに労働で酷使した所為か、もう今の俺は
絞りカスも同然の死に体だった。

これ以上のストレスは死ぬ。

労らなくていい。

慰めなくていい。

ただ、何事もなくこの夜を過ごしたい。

「ん、おかえり」

そう思ってたら、特大のストレスがいた。

呑気にパジャマ姿で俺を迎える。

ソファに寛いでベースを弾いていた。

俺の家で悠々自適に過ごしている姿は、客人ならば許しただろう。招いてもいない山

田だから絶対に許さん。

「何で、いるんだよ」

「晩ごはん食べに来た」

「食うだけなのに、何でパジャマなんだよ」

「……前田は寝る時にパジャマじゃないの?」

「オマエ今ちゃんと俺と会話してる?」

すらすらと当然とばかりに山田が答える。

めき、と握った拳から音がする。

今の俺なら山を殴り碎ける気がした。

コイツの所為で、バイト前に知らない女子から暴力を受けそうになる謎の闇イベントがあつたというのに、どうして平然と俺にメシを乞えるのだろう。

殴つてもいい？

いや、如何に山田とて暴力はいけない。

「泊まる気か？」

「今回は一泊用の準備してきた。親にも連絡した」

山田が後ろに目配せする。

うん、何か荷物が展開されてるな。

「何で？」

「前田に服を借りたりして申し訳ないと思つてたから、今回はしっかり用意しようと思つて」

「申し訳なく思うなら今すぐ出てけ」

俺は脱力してその場に座り込む。

不思議そうに俺を見て、なぜか頬を指でつついてくる。

ウザい。

どうして俺がこんなヤツに振り回されなきゃいけないんだ。

悪いことなんて一切していない。

強いて挙げるとすれば、『あのとぎ』に山田を見捨てなかった事ぐらいだ。

でも、あの行いを後悔するのは何か違うし。

ああ……。

「前田、疲れてるね」

「見ての通りだよ」

「晩ごはん何？」

「気遣うフリしてメシの催促かよ」

俺は顔を上げて時計を見る……九時半過ぎ。

机を見ると、食器も何も無い。

まさか、山田は俺を待つて食事も摂っていないのだろうか。

こんな時間まで空腹に堪えさせたのか。

俺の料理を、そんなに楽しみにしていた……？

そう考えると申し訳、くない。

勝手に上がって飯食いに来たヤツの方が悪い。

第一、今日の俺は山田に施しを与える必要性が皆無だ。足を持って振り回し、ベランダから放り投げてもギリ許されるだけの迷惑を被っている。

でも、それをする体力が無い。

叱る気力も損なっている。

「はあ……もういいや」

俺はキツチンの方へと歩いた。

「今から焼肉ソース風の野菜炒めを作る。白飯も炊くから四十分くらい待ってくれ」

「美味しそう」

「あと、昨日の残り物のポテトサラダと味噌汁で良いか？」

「お、おとおお……！」

「完成するまで適当に過ごしててくれ」

「じゃあ、映画観る。お勧めは？」

「四十分間の暇潰しじゃないからソレ」

何で四十分の暇潰しに映画をチョイスするんだよ。

ううん、暇潰しって言ったって……。

大体、俺を酷い目に遭わせた上に助けてくれもしなかった山田なんかの為にどうしてメシだけでなく娯楽まで提供しなくてはならないんだ。

また腹が立ってき……あ、そうだ。

「じゃあ——『ハ〇テンション』」

俺は一本の映画を取り出す。

……パッケージは見せず、ハードディスクにそのまま挿入した。

山田が期待の眼差しでテレビの前に移動する。

「面白いの？」

「ああ、是非観てくれ」

「うむ、拝見いたす」

さあ、俺は料理に取り掛かろう。

その間に、山田には——絶望してもらおう。

料理が完成した頃、山田は……。

「前田、謀ったな……」

「バカめ」

テレビの前でぐったりとしていた。

そんな山田を見下ろして、俺は隠さず笑う。

そうさ、『ハ〇テンション』はゴリゴリのスプラッター映画だ。食事前に見たら肉なんて食えなくなるレベルでエグい。

この前のことで、山田はホラー系やグロ系が苦手だと知った。これで少しは意趣返しになっただろう。

俺はほくそ笑んで……食卓に、肉いっぱい野菜炒めを配膳した。

さあ、存分に食らうがいい。

案の定、食卓を見た山田が顔を顰めた。

「今お肉を食べられる気がしない」

「味付けは完璧だぞ」

「う……………」

「コラ。野菜炒めだけ遠ざけるな」

山田が箸を手にする。

そして、躊躇いがちに味噌汁から手を付けた。

汁を一口啜る……そして。

「ん……………美味しい」

ほう、と息をついて幸せそうに呟いた。

……散々な目に遭わされたけど、味を高評価してくれている反応に溜飲が下がりがけた。

いかん、いかん。

チヨロすぎるぞ、前田一郎。

俺も汁を一口啜る。

その間に、山田は野菜炒めに手を伸ばした。

「んん、空腹に沁みる……」

「食えるのかよ」

「食べ物に罪は無い」

「じゃあ、映画再生するぞー」

「え」

俺はリモコンで停めていた映画を再生する。

びくり、と山田の肩が跳ねた。

再び画面に繰り広げられた凄絶なシーンに山田は視線を背ける。ふ……………やべ、俺も食事中なの忘れてたわ。

胃にクるシーンを観る前に止めた。

お、俺も食べてる時はやめよう。

それから黙々と食事を続ける。

「前田、今日の放課後だけど」

「ん？」

「女の子たちと何話してたの？」

「……………別に」

放課後の女子三人の質問には答えたくない。

いま飯を幸せそうに食うコイツに、オマエのせいで殴られそうになりましたなんて事を言っても気分が悪くなる。

それに何だか、そう言うのは意地悪だ。

あと、飯が不味くなるから俺が嫌だと思った。

「私に話せない？」

「ああ」

「ふうん」

「……………そんな気になることかよ」

「……………」

山田が無表情で俺を見てくる。

何だ、また黙ってれば時間が解決してくれる作戦だろうか。

つくづく最低な戦法取りやがって。

「逆に、何だと思う？」

「——告白されてたとか」

「ぶっ」

味噌汁を食べていた途中で噎せた。

俺みたいな陰キヤが女子に告白されるワケが無い。

そんなケースが想定されるなら、山田が俺に今までの非礼を詫びる奇跡が起きてもい

い。あれ、謝罪だけでそんな可能性低いのか??

「お、俺がモテるわけないだろっ」

「そうかな」

「そうだろ」

「前田、料理もできるし。優しいし。面倒見も良いから」

「そ、そうか……?」

「すぐ調子に乗るけど」

「喧嘩売ってるなオマエ」

妙に褒めてくれるな、コイツ。

でも、それは思い違いだ。

俺は普段は一人だし、誰かの面倒を見る事はない。料理だって、ここ何年かは自分の為にしか作っていないんだ。

こうやって、ズケズケと俺の家に上がり込んでくる例外を除けば、こんな事は他のヤツにする機会すら無い。

「いいや、モテない」

「悲しいほどに全否定」

「そうだとしても、オマエ以外の面倒なんか見たことないよ」

「……………」

「いつも自分で手一杯なんだっての」

俺はそう返しておいた。

すると、山田がかすかに微笑んだ。

「そうなんだ。…………よかった」

ん、最後の方に何か言ったような…………？

よく聞き取れなかった。

もう一度繰り返し返して貰おうかと思ったが、山田が再び食事に集中し始めたようなので、尋ねるのをやめた。

食後にシャワーを浴びて、俺は居間に戻った。

山田は誰かと通話していた。

スピーカーモードでやっているのか、通話相手の声も聞こえる。

『良いなー、今日も泊まってるの?』

「うん。でも虹夏は無理だよ」

『え……何で?』

「だって鍵ないと前田は家に入れてくれない」

ああん?

いま物凄く聞き捨てならない事を聞いたぞ。

すぐにでも鍵を返せと言いたいが……あ、あああの伊地知さんにそんな乱暴なところを知られたくない!

でも、こっそり女子の荷物を触るのもキモいしな……。

「あ、前田が出たから切るよ」

『待って！私も前田くんと話したーい！』

「あと眠いし」

『オイ、ちよ——ぷつん。』

俺が逡巡している内に通話が終わった。

コイツ一方的にも程があるだろう。

伊地知さんの意見ゴリ無視して切りやがった。普通なら若干明日から友だちとの間に溝が出来そうな対応だけど山田を知る人間からすれば容認できそうだ、こういうヤツだし。

「俺も伊地知さんと話したかったな」

「虹夏、好きなの？」

「うえっ?! い、いや別に？」

「おやすみ」

「聞いておいてクソどうでもいいからって無反応なのやめろや」

山田が欠伸しながら……って何処に行く？

「山田、何処で寝るつもりだ」

「前田のベッド」

「……………はいはい。もう言うの疲れたから勝手に寝てくれ。部屋の物とかいじるなよ」

「ん。前田も、今日はごめん」

「え…………？」

急に謝罪…………え、謝罪!?

山田が、俺に？

「さっき虹夏から聞いた。私が人気すぎるせいで」

「あ、まあ」

「私の罪深さで前田に迷惑かけた」

「一々引つかかる言い方するな」

でも、謝ってくれた。

それで少しだけ胸がすく思いだ。

「今度から気をつける」

「お、おう」

「じゃあ、おやすみ」

俺の部屋へとよたよた消えていく山田を見送って、俺も客用の布団…………客用なのに、

俺が寝るので敷く。

今日は本当に疲れた。

しかし、意外だな。

山田が俺に謝るだなんて……もつと謝って欲しいけど。

とりあえず色々と片付けたら寝よう。

もう、これ以上のストレスなんて無く、ぐっすりと眠りたい。

「前田、明日の朝ご飯は何？」

滅べ、山田。

一人にさせてくれない

午前中に期末試験が終わって一息つく。

これから始まるのは夏休みだ……バイト尽くしの。

でも、夏休みはある意味で稼ぎ時だ。

特に友だちなんていないしな。

映画を観て、働いて、映画を観て、働く……それしかやる事が無い。

……。

「……やっぱりか」

俺はスマホを確認した。

メールで親から連絡が来ていた……今回の夏も帰る事は無いらしい。

申し訳無さそうなのが文章から伝わって来る。

小さい頃からのので慣れっこだし、取り敢えず『気にしないで』と打っておいた。

さて、今日はバイト無し。

帰ったら久々にゆっくり出来るな。

山田もこのテスト週間は家に来なかった。……何やら伊地知さんに付きつきりとかいう羨ましい日々を過ごしているらしい。

いいなー!!

何で山田はいつも良い思いしてんだよ。

「ま、俺も夏休みを満喫してやる」

俺は席を立ち、教室を出た。

すると、廊下に出てすぐ見知った顔を見つける。

「山田さん、暇？」

「みんなで打ち上げにカラオケ行かない？」

山田の周囲に人がいる。

へえ、アイツって人に誘われることあるんだ。

意外な光景に思わず足を止めて見てしまう。

それにしても、キラキラした女子に包围されているのは気の毒に思う。万が一にも俺の周囲に無い環境だが、あの場にいるのが俺だったなら死んでいただろう。

来てくれるかもしれないと期待に弾んだ声だ。

あんなの陰キャに断れる空気じゃない。

「ごめん、愛犬のイチローが家で留守番してるから」

……こ、断りやがった。

真正面から毅然とした態度で答える姿には少しだけ尊敬すら覚えてしまう。

それにしても、山田は犬を飼ってたのか。

イチローって名前がまた俺と重なってるようで何故か鳥肌が立つ。

「まーた嘘付いてるよ」

「うおっ」

「やほ、前田くんっ」

至近距離で声がして思わず跳ねてしまった。

隣を見ると、伊地知さんが笑顔で立っている。

ぐ、鎮まれ心臓……！

「リョウってば、あの手の嘘が豊富だよなあ」

「え、あれ嘘なの？」

「そもそも犬飼った事すらないからね」

呆れ気味に伊地知さんが暴露する。

アイツ、陽キャの手勢に真つ向から断るだけでも相当な胆力が要るといふのに、まさか堂々と嘘をつくとは大したもんだ。

道理で俺の家でふてぶてしく寛げるわけだよ。

「あ、その、伊地知さんはどうしたの？」

「私も帰るところなの」

「……そっか」

「これから夏休みだね。何かみんなに会えなくなると思うと寂しいな」

「伊地知さんが誘えばみんな来るでしょ」

「あー、私の家がライブハウスだからバイトで忙しいんだよね」

「ライブハウス？」

へえ、家がライブハウスか。

何かちよつとカッコいいな、それ。

っていうか、い、いい伊地知さんと会話できてるよ俺！

幸せだ、夏休み前にこんな良い事あるなんて。

「前田くんは夏休み何するの？」

「俺もバイト尽くしかな」

「お、休みもダラけずとは……偉いね」

ほほ、褒められたっ。

「伊地知さんみたいに家を手伝いたって綺麗な理由じゃないって。単にお金が欲しいだけだし」

「何か欲しい物があるとか？」

「映画とか……できれば一人旅してみたくて」

「えー！すごい！」

一タリアクションが眩しい。

話していて俺も幸福感に包まれる。

ああ、いつまでもこの時間が続いてほしい――。

「虹夏、何やってんの」

「ん？前田くんと話してたよ」

「前田、人の臍物の話とかしてなかった？」

「え、っ、どういふこと!?!」

「前田は食事前にグロい映画を観た後、肉料理を食べるのが好きな危ないヤツだから」

「違うからね、伊地知さん」

伊地知さんが青褪めた顔でこちらを見る。

違う、そんな特殊な趣向はしていない。

単に山田への意趣返しとしてであり、普段なら絶対にしない。

「適当言うなよ、オマエ」

「前田は酷い」

「いつもあんな事しないっつの」

「今日の夜はやめて欲しい」

「何さらつと家に来る予告してんだよ。来るなよ」

先月は週四の頻度で来ていた。

何でまた戻ってるんだよ。

最近は何の部屋に山田の私物となる雑誌が何冊か置かれていたり、いつの間にか自分の食器と箸が用意されているのには目が飛び出そうなほど驚いた。やめろ、俺のプライベート圏内を侵食するな。

「あ、私も前田くんの家に行ってみたい！」

え。

「駄目、かな？」

え。

「虹夏、それは流石にワガママ」

「どの口が言つとんじゃ」

え。

い、伊地知さんが俺の家に来る……？

そんなご褒美イベントが……でも幸か不幸か、山田のせいで来客用のお菓子とかの備えは充分にある。

どうしよう、心臓が痛い。

「あ、前田くん……今日はバイト？」

「いや。何も無いから帰って映画観ようかなって」

「映画かあ、どんなの？」

「それは——」

「あ、ゴメン電話。お姉ちゃんからだ！」

会話の途中で着信音が鳴る。

どうやら伊地知さんのスマホのようだ。

一言断つて、伊地知さんがそそくさと少し離れたところで通話を始める。

ほ、本当に来るのかな。

少しウキウキしていると、隣の山田から視線を感じる。

「虹夏を入れるの?」

「伊地知さんが良いなら勿論……緊張するけど」

「虹夏をすんなり入れるのは不平等だと思う。私はやっと許されてきたのに」

「許したつもりは一度も無いぞ」

何を勘違いしてるんだ、コイツは。

俺と山田が話していると、通話を終えた伊地知さんが急いでこちらに駆け寄るや合掌した手を面前に持ち上げる。

「ごめん! 今日忙しいみたいで急遽バイトが……」

「あ……………そう」

「えっ、私より残念そう!?!」

あ、来れないのか……………残念。

良いさ。

陰キヤが高望みしたって届かない物はある。

「ごめん! いつか必ず遊ぼうねー!」

「虹夏、バイバイ」

伊地知さんが手を振りながら走り去っていく。

山田とそれを見送って、俺は嘆息した。

「山田はバイトとかないの？」

「私も虹夏と同じとこでバイトしてるけど、連絡無いから大丈夫」

「あそ。じゃ、俺も帰るわ」

「私は本屋に寄って行くから」

分かった、そのまま自分の家に帰れよ。

もしこれで今日もオマエが現れても俺は絶対に中に入れてやらないから。
神に誓って、オマエはもう通さない。

俺は決意を胸にし、手を振る山田と別れた。



昼食を摂った後である。

俺は食後のコーヒーを淹れていた。

「前田、コーヒー淹れるの上手いね」

湯をフィルター内のコーヒー粉へ丁寧に注ぎ、少しずつサーバーの底に抽出された物が溜まっていく。

その過程を隣で山田が見ていた。

注いだ箇所から芳しい薫りが湯気と共に立って気分が落ち着く。

あれから山田の侵入を許してしまった自身への憤りも鎮められていくようだ。

「早く飲みたい」

「オマエ用じゃない」

「これに入れといて」

「話してる言語は同じはずなのに通じない」

結局、二杯分を淹れる事になった。

ちなみに一杯目は山田に譲った、無念。

二人でソファに座ってコーヒーを飲む。

うん、今年に入ってから練習しているけど最初に比べたら美味しい。

やはり淹れ方で味って変わるんだな。

上達が味で知れるのは何だか嬉しい。

「ん、美味しい」

「あ……そういえば、昨日の夜にバイトから帰ってきたチーズケーキがあつたな」
「頂いてます」

「いつの間に」

気づいた時には、山田がコーヒーと共に召し上がっていた。

いけしやあしやあとやりがった。

コイツ、俺がコーヒーを淹れている間に後ろで冷蔵庫でも漁っていたのだろう。浅ましい。

「うん、よく合う」

「俺のチーズケーキが……」

「前田、映画観ないの？」

山田がもくもくと食べながら俺の方を見る。

どうやったたら、人間はここまで凶太くなれるのだろうか。

呆れながらも、俺は観ようと思っていた映画のパッケージからDVDを取り出す。

「何それ」

「『ア○ファルト』ってヒューマンドラマ系の映画」

「洋画？」

「洋画……フランスの、だったと思う」

映画を再生する。

内容は、人の交流に視点を置いた物だ。

見ていると何だか心にじわりと色んな感情が滲むようで、最近ではホラーやサスペンスが多かったので比較的穏やかな気持ちで鑑賞し続けられる。

隣で山田もコーヒーを啜りながら集中しているようだった。

やがて映画が終わると、カップも冷めていた。

まだまだ日は高かった。

もう一本観る余裕はあるけど、少し休憩したい。

「面白かった」

「山田も？」

「眠くならなかったし」

「判断基準がそこかよ」

まあ、集中して観ていたからそうなのだろう。

選んだ身としては、嬉しい限りだ。

満足げな山田の顔、その口元にはケーキの残りカスがついている。……しばらく放置しておこう。

「何か弾きたくなくなってきた」

「……俺って、山田の曲とか聴いたことないよな。バンドとかの」

「……………」

「普段、どこで演ってるの？」

「前田は聴かなくていいよ」

「えっ、何で」

山田が一瞬だけ黙った。

そして。

「最近のは、つまらないし」

短く、冷たく言い捨てた。

俺に背を向けたまま、山田がベースギターを弾き始める。

声色がいつもと違うので、それ以上の言及はできなかつた。

俺は山田が空にした皿とカップを手にキッチンへ戻る。

それらを洗いながら、爪弾く彼女の横顔を盗み見た。

相変わらずの無表情だが、何となく暗い。

前もそうだけど、バンドの事になると妙に触れられたくない感があった。あれだけ自身の腕前を俺に見せつけるように弾いたりするのに、そういう部分は自分の口で語ろうとはしない。

……俺は友人じゃない。

変に踏み込むべきではないな。

「そういうえば、山田はテストどうだった？」

「……………」

「え、何その反応」

「大丈夫。留年しなければ問題ない」

「へー。そりゃ学年末考査が楽しみだな」

この言い方、さては勉強してないなコイツ。

意外に勉強できないんだな。

成績不振なら、伊地知さんとかが面倒見てくれそうだけど……。

「前田はどうだった？」

「手応え的に、今回も学年三十位以内は堅い」

「そういう嘘もつきたくないのは分かる」

「いつか後輩になりそうなヤツが言うな」

「ぐふっ……酷い」

俺の一言に、山田が胸を押さえてソファーに寝転がる。

いい加減に帰ってくれないかなあ。

何だか、この状況に慣れつつある自分にもじわじわと危機感を覚え始めている。

「……………前田」

「んっ」

「前田は普通だけど面白い」

「食後の運動に喧嘩でもしたいわけか」

「ううん」

ソファーから山田が体を起こす。

彼女の双眸が、じっと俺を真っ直ぐに見つめた。

「前田まで変わらなくて良いから」

思わず食器を洗っていた手を止める。

どういう意味なのか量りかねる。

返し方も分からなくて、俺も無言で視線を返した。沈黙が長く続くが、居心地の悪さは無い。

どうしてか、お互いにずっと相手を見ていた。

「山田」

「ん？」

「口の端にケーキのやつ付いてるぞ」

この妙に浸りたくなる沈黙からの誘惑に抗って、俺は山田の口にずっと付いていた物を指摘した。

指でそれを拭った彼女は、指先をぺろりと舐める。

「前田って夏休みはずっと一人？」

「まあ、そうだな」

「じゃあ、いつでも来れる」

いや、だから何でそうなるんだよ。

コイツは少し自重して欲しい。

まあ、コイツがいてもバイト以外はきつと去年と同じような時間を過ごすのだろう。何も変わらない。

山田に言われずとも俺は変わらない。

あ、けど——今年の夏休みは、一人じゃないのか。

「またご飯食べに来るから」

いや、頼むから一人にしてくれ。

最高のひとり

夏休み中はほとんど一人だ。

友だちなんていない上にバイト以外やる事が無い、娯楽もゲームか映画鑑賞だけ。

そう——意外と暇なのだ。

ただ、今年はそうならないと決まってしまったのだ。

それは先日の昼、バイトが休みなので新作映画でも探そうかとスマホで検索していたら、唐突に着信が入った。

相手は登録した番号——後藤家の物だった。

前田家と後藤家は親戚関係にある。

親が一年中仕事で家を空けるため、常に一人の俺を心配して年末年始は自分たちのいる金沢八景へ招いてくれる親切な人たちだ。

数少ない、俺を気にかけてくれる貴重な存在でもある。

「はい、もしもし」

『あ、一郎くん。急にゴメン、いま電話は平気?』

「大丈夫ですよ。暇してたところですよ」

声の主は、後藤家の大黒柱の直樹さんだ。

『あれ、一郎くん。また声が低くなつたかな』

「そうですか? 自覚は無いですけど」

『声の感じがお父さんに似てきたね』

ふ、声の変化なんて分からない。

こういうのは、友だちがみんなまで遊んでいる現場を撮影した物に混じる自分の声などを聴いて自覚するなどの機会があるのだが、俺には機会そのものが圧倒的に不足している。

ただ直樹さんには黙つとこう。

心配させるだけだし。

ただでさえ、娘のひとりが重症だしな……。

『実は一郎くん、頼みがあつて』

「何です? 俺に出来ることなら——」

『一泊二日だけ、そっちでひとりの面倒を見て欲しくてさ』

「……………」

俺の聞き間違いだろうか。

「ひとりを？」

『た、頼めるのが君しかいなくて』

「……………」

ひとり。

それは後藤家にいる二人の娘の内の一人だ。

俺と一歳差があり、妹みたいな子でよく可愛がった覚えがある。引っ込み思案で、人の輪に入れず困っているとボヤいていた。

それが最近は特に重症化している。

自意識過剰で一度自分の世界に入ると止まらない。

いつも俯きがちな顔は、はつきり言つて今まで見た中では超絶美人なのだが、人と目を合わせるとなると直ぐに原型も分からないほど崩壊させる。

「どうして俺の家には？」

『ほら、ひとりが高校受験するんだよ』

「たしかに今年で中学三年生ですからね……………」

『何でか分からないけど、下北沢方面の高校を受験するらしいから。下見とかさせよう
と思つて……』

何で近場じゃないんだ。

金沢八景つて横浜市内だぞ、下北沢とかなり離れている。

はつきり言つて高校の通学路としては長い。

よほどその志願校が受験したいと思わせる特色でも備わっていなければ、手を出す距離ではないぞ。

相変わらず、ひとりは何を考えているか不明だ。

「俺のところに泊まる、ですか」

『頼めるかな』

「でも、往復で帰れる距離ではありませんよ……?」

『いや……あの子はきつと、人の多い空間だし下見なんて一人で出来ないし、色々あつて
気疲れて倒れたりしたら大変だから近場で休ませた方がいいと思つて』

「あー……」

過保護、と言いたい。

でも、ひとりなら当然の処置とも言える。

「ひとりには、この事を話しました?」

『嬉しそうにしてたよ』

「あの子は……」

ひとりはこの話を了承したのか。

それならば、後は俺の意思のみである。

世話になってる後藤家からの頼みだし、近所で絶望しているひとりの姿なんて見たくもないどころか想像したくもない。

最初から、選択肢が有るようで無い案件だ。

「分かりました、いつからですか」

『今月の〇〇日なんだけど、そこは空いてるかな』

「はい」

『良ければ、見学にも付いて行ってくれと……』

「安心して下さい。ひとりを本当に独りにしたら、それこそ下北沢で死体になってますって」

『助かるよお』

うわ、直樹さん涙声だ。

娘想いなんだろうけど、逆にここまで心配されるひとりって……。

そういうワケで、俺は駅前にいた。

改札から出て来る人々から、待ち人の姿を探す。

すると、ギターケースを背負った制服姿の少女が俯きながら出てきた。

あの人波の中、誰よりも濃い影を背負っている。

若干、アイツを避けるように人流が変化していた。

目立ちたくない割に悪目立ちしてる……。

「おい。ひとり、こっちだー」

俺が呼ぶなり、はっと少女が顔を上げた。

初速から全力だと分かる速さでこちらに駆けると、勢いよく俺の腹部にダイブウウウ

ウウ!!

げほ、ごほ、えほっ。

支柱に凭れていたので、飛び込んできた少女とサンドされた胴体が潰れたかと思っ
た。

少女は俺の胸に顔を埋めて震えている。

相当不安だったのだろう。

あまり知らない土地だし、人も多いしな。金沢八景だって人はいるが、ひとりにそれ

は関係ない。知らない人間に囲まれていること自体が苦痛なのだ。

その影響なのか。

「かひゅー、かひゅー、かひゅー」

「ひとり。深呼吸しろ、深呼吸」

頭を撫でて落ち着かせる。

呼吸を整え終えた後、ようやく顔が上がった。

「無理、もう嫌だ……！」

「もうグロッキーかよ」

「い、いいいいいっくんが居るって思ったから来れたけど、こんなの無理……！」

「こつちに登校したら毎日コレだぞ」

「あ、そこは慣れると思う」

「急に落ち着くな、逆に怖いから」

周囲からの視線が集まりそうだったので、俺は取り敢えずひとりの肩を掴んで優しく引き剥がす。

「よく一人で来れたな、偉いぞ」

「えへ、ひへ、えへへへ」

褒めると、だらしなく相好を崩す。

緩みきつたひとりの手を引いて、俺は取り敢えず駅から出て家に向かう事にした。知り合いに見られてもマズいしな。

「ひとり、家まで我慢できるか？」

「う、うん。あ、いつもみたいにいつくんの後ろなら何とか」

「はいはい」

そう、これがお決まりの陣形。

前田の俺が先導し、後藤のひとりが追従する。

漢字を覚えたばかりのひとりが、名字に託けて「こうあるべき！」とか言い出し、二人で外出する時は前後の順を決めて歩くようになった。

何がこう在るべき、なのかは分からんが。

これで安心できるようだし、ひとりの意思を尊重しよう。

「元氣そうで良かったよ」

「あ、あ、い、いつくんもね」

ちよつと顔を赤くしながら、ひとりが笑う。

うん、可愛い。

「前田……と、誰」



『ブ——、ブ——、ブ——』

着信音がさつきから止まない。

音が鳴る都度にひとりごとりが後ろでびくりと跳ねて、振り返ると顔が暗くなっていた………何で？

理由は分からないが、取り敢えず頭を撫でた。

すると、顔色が戻って再び緩んだひとりになる。

しかし、さつきから本当にうるさい。

俺相手にそんな緊急の連絡を入れるなんてバイト関係だけだが、そういう時の為に特別な音源設定をしているので直ぐに分かる。

じ、じゃあ誰だろう。

プライベートでこんなかけてくる相手いるワケない。

「あの、いつくん……スマホ」

「何か怖くて出たくない」

「で、でも」

ひとりが不安そうに見ている。

丁度よく家に着いたので、玄関を開けて彼女を中に招いてから電話に応じる事にした。

「はい、もしもし」

『前田』

「山田か、今日は絶つつ対に家来るなよ」

『……………なんで』

何か声に棘がある。

今日は不機嫌なのか……………？

「色々あつて家に人泊める事になった」

『人……………』

「だからオマエが来ても寝る場所は無い」

『前田のベッドがある』

「俺のベッドは俺のだよ」

堂々と非常識なこと言いやがって。

山田が家に来てても百害あつて一利なしだ。

ひとりにあのマイペースで図々しいヤツを相手させたら、十分で生命活動を停止して

しまう。

メンタル的に間違いなく保たない。

悪いが俺は緩衝材のような人間には役不足だ。

『どれくらい』

「ん？」

『泊まるの、どれくらい？』

「え、一泊二日」

『分かった』

「分かってくれた？ようなら何よりだが」

『じゃ、また夜にかける』

ぶつり、と通話が切れる。

……何で夜に。

やめて欲しい、ひとりの相手で色々と忙しくなるので夜だろうとなんだろうと迷惑だ。

着拒にしたいが、そんな事したら学校で会った時に気まづくなりそう。

「いっくん？」

「あ、放置してごめんな。荷物は適当な所に置いといて」

「う、うん」

「見学って明日なんだろう？なら今日はゆっくり休もう」

「いいいいいいつくくん！明日、明日は一緒に……!!」

「勿論行くよ」

高校の下見とは言うが、単に貫ったパンフレットやネットのホームページから校内の様子や校風を確認したりして、実際に現地へ向かってやる事は通学路の確認くらいだろう。

それならお安い御用だ。

ただ……志願理由は気になるな。

「ひとり、何処受けるんだ？」

「秀華高校……」

「でも、たしか近くにも高校って無かったか？」

「わ、私を知らない人のいるまっさらな環境で一からやり直したい……やり直さないと、無理……」

なるほど、よく分からん。

俺の知らない間に学校で払拭し難い黒歴史でも大量生産してしまったのだろうか。

いや、この子はこういう子だ。

消極的で常に受け身、きつと色々あつて堪えられない何かがあつたのだ。

俺の役目は、ひとりの意思を尊重する事だけ。

辛いことばかりのこの子を甘やかすのが仕事だ。

「受験頑張れよ、ひとり」

「ひ、ひいつ……わ、私ごときじゃ高校は無理つてこと……!?そ、そのまま学校にも行かずニート……結婚も働きもせず、押し入れの中で夜を明かす日々……」

いけない。

いつものひとりの癖が始まってしまった。

なまじ想像力が豊かなので最悪の未来を辿る自身も鮮明に思い描けるのだろう。

駄目だ、そんな沼から引き揚げなければ。

「安心しろ、ひとりが失敗してもフォローする」

「ふ、フォロー……?」

そうだと。

「ひとりがそんな事になったら、俺が結婚して養うからな」

この可愛い妹分を一生面倒見る覚悟くらいはある。

それが後藤家への恩返しとなるなら、ひとりの安泰に繋がるのなら是非はない。伊地知さんとは恋人になりたいが、結婚までは今高校生なのもあって想像できない。ただ、仮に将来ひとりがそんな事になるなら俺は全力で助けるだけの意思は固めてい

る。
「ふえっ!?!」

俺が言い切ると、顔を真っ赤にするや驚倒してしまった。

頭を抱えて、小さく縮こまってしまった。

受験を不安に思っているのだろう。

「俺程度じゃ支えるのに不安かもしれないが、味方がいることを頭の片隅に入れておいてくれ」

「あ、あ、あ……!?!」

その後、「あ」しか言わなくなってしまった。

俺はひとりがシャワーを浴びている間、映画を観ていた。

夕飯も準備は完了している。

そういうえば、ここ最近はこの時間帯の居間を山田が占領しているから、こんな風に寛げないんだよな。

「あ、風呂出た？」

「う、うん……いつくん、映画？」

「そうだよ」

「……どんなの？」

「気になる？」

「せ、青春コンプレックスを刺激する物だったら観るの避けようかなって……」

「学園物じゃない。『最〇のふたり』ってやつ」

学園物ではなく、足の不自由な金持ちのお爺さんとお金の欲しい若者の交流を中心とする実話に基づいた話だ。

最初はただの雇用主と良いバイトに喜ぶ男という関係だが、次第に二人の間だけで芽生えていく独特の友情と、紆余曲折あつて一度は離れた二人が終盤にまた会うシーンは胸にぐつとくるんだ。これを何度も見返している。

視聴していると、ひとりが横で震え始めた。

「さ、最強……のふたり」

「え？」

「どうも……妹と違って最弱のプランクトンひとりです」

ひとりの妹がふたりという名である。

そんなところに着眼してたのか。

たしかに、題名の『ふたり』が平仮名表記なのもあつて意識しやすいのかもしれない。

……言われるまで俺も気にすら留めなかつたけど。

でも、ひとりは繊細なのだ。

いけない、また傷つけてしまった。

「安心しろ。ひとりは最高だ」

「うへへ、そ、そう〜？」

褒めるとすぐ調子に乗る。

この不安定さがあるから俺も不安でつい面倒を見てしまうのだ。

近くにいると目が離せない謎の魅力。……魅力？

とにかく、ひとりには何かの素質がある。

きつと、将来は俺の助けもなく自分の力で成長していくだろう。

それまでは、俺にできる範囲で。

「ひとり」

「は、はい！」

「（おまえが羽ばたける日まで）ずっと支えてやるからな」

「こひゆっ」

「ひとり!?!」

山田のベース好きだし

ひとりが八景に帰った翌日である。

「夏祭り、か」

店の壁にチラシが貼られていた。

昼上がりのバイト帰りにそれを見つけた。

夏の日差しの照り返しで見えず、腕で光を遮って再度見詰める。確認すると開催日はちようど今週末にあるようだ。

夏祭りか、懐かしい。

小学生の時に両親と一度行ったな。

それ以来、他の人と行った覚えは無い。気紛れに自分一人で向かう事もあったが、なぜか途中で家に戻ってしまうんだ。

俺はその場を離れて帰途につく。

どうせ今年も行く事は無い。

きつと、いつもと同じ夏が過ぎていくんだ。

四人組で歩くクラスメイトを見かけた。

男子一人と女子三人組……ハーレムかよ。

しかも、女子たちはたしか山田に関する勘違いで俺を攻撃した連中だ。気まずいけど、挨拶するほどの仲じゃないし素通りして行こう。

正面を向かず、景色でも見ているように歩く。

「おっ、前田じゃん」

「ん、どうも」

話しかけられてしまった。

どうしようか。

「みんな遊んでるの？」

「これからカラオケ。前田君は？」

「バイト終わり。これから帰るところ」

「そっか。……あー」

女子の一人が気まずそうに頭を掻く。

だろうね、叩こうとしたし。

「この前は、ごめんね」

「えっ、ああ、うん」

「いや、山田さんに聞いたらただの友だちだって言ってたから」

「あ、そう」

おい。

俺の言葉は信用しなかったのに、山田ならすんなり信じるのか。

つくづくアイツの人氣が分らない。

あんな人間に熱を上げる人間自体が不思議だ。

……そういえば、アイツあの電話以来なにも連絡来ないな。

どうしたんだろう。

「えと、あんなだけの事したしお詫びとか……」

「え？」

「だって、その、た……叩いて……」

「いいよ。謝ってくれたし」

正直、もう関わりたくないのので良いです。

「あ！そうだ前田君」

「ん？」

「今週末は暇？」

「まあ、午後からは暇だな」

「良かったら、ここにいる五人で夏祭り行かない？」

「夏祭り……」

その単語に、驚くほど俺は無感動だった。

ちらりとさつきから一人だけ会話で置き去りにされている男子を見ると、顔を嫌そうに顰めていた。

ああ、そういう。

男一人で楽しみたいのだろう。

こうやって自分以外に興味を示してるのも面白くないのだな。

「俺は良いよ。バイト後でたぶん疲れてるから」

「そっか……」

「誘ってくれてありがとう」

俺は手を振ってその場を離れた。

人の輪を乱してまで遊びたくはない。

それに、夏祭りなんて行っても楽しいとは思えないというのが今証明された。心が全く動かなかつたし、相手がどうかではな

何か荒んでるな、今の俺。

あと少しのストレスで限界に達してしまいそうだ。
帰ったら映画でも観よう。

そう思っていたら、スマホに着信が入った。

『今お金あるけど家行くね』

限界です。



家に帰ると、靴があつた。

明らかに俺の物じゃないお洒落な靴だ。
嫌に思いながらも居間へと向かう。

「……寛いでんな」

「ん、おかえり」

山田はソファーに腰掛け、映画を鑑賞している。

画面を見て、それが『フロッグ』だと分かった。

今は中盤、登場人物たちの異常性がじわじわと浮き彫りになり始める流れだ。

苦手そうなサスペンスホラー系の映画なのだが、山田は特に顔を背けたりもせず集中している。珍しい事もあるもんだと思い、キッチンへ行つて手を洗う。

何だか、今日のアイツは少し違う。

どう違うか説明しろと言われても難しいくらいには些細で、でも明確な違和感を呈している。

気になるが、取り敢えず放置だ。

湯を沸かし、コーヒーを一杯淹れる。

抽出した一杯分をカップに注ぎ、熱い内に山田の前に置いて彼女の隣に座った。

……あれ。

何で自然とアイツにコーヒーを供しているんだ？

山田は特に礼を言うことなく一口啜る。

それから、こちらに振り向いた。

「(バ)はんは？」

いらっ。

睨まなかつた俺は偉いと思う。

たしかに丁度よく昼時ではあつた。

「昼……もうインスタントラーメンで良いか」

「何でもいいよ」

「そうか」

「前田の手作りご飯なら」

「何でもよくないじゃん」

インスタントは嫌なのね。

呆れつつ、キッチンへと戻る。

とりあえず、パスタでも茹でる事にした。

チーズや卵、ベーコンなども用意して、作業を開始する。映画を観ている途中に横で

音を立てるのは失礼だと思ふが、マイペースな山田なら大丈夫だろう。

現に、こちらを気にした様子は無い。

そうこうしている内にカルボナーラが完成した。山田の前に出して自分も同じ物を食べる。

「これ、怖いね」

「苦手だろ」

「幽霊とか臓物の出るやつじゃなければ別に」

「ふうん。……幽霊、怖いんだな？」

そう言うと、山田は眉間に小さなシワを作る。

「一昨日の話だけど」

「ん？」

「駅で前田の背中に貼り付く女の人の霊を見た」

「ノンフィクションの怖い話やめろ」

俺の後ろに貼り付く霊だと？

そういう類を信じた事は無いけど怖くなってくる。

呪われてるんじゃないか、俺。

どうしよう、ひとりに乗り移ってたりしていたら大変だ。これから受験だから悪影響になる物なんてあの子に憑いて欲しくないのに。

「勘弁してくれよ」

「怖い？」

「普通にぞつとするだろ、何てこと言うんだよ」

カルボナーラを食べる山田の眉間からシワは消えない。

コイツ、さつきから何なんだ。

何が気に食わないのだろう。

こういう顔は、バンドの話をした時しか見せない。

俺からすれば別にどうでも良いが、それで八つ当たりされても困る。

「俺より山田に憑いてそうだけどな」

「何で？」

「趣味で廃墟巡りしてるんだろ。そういう所に蟠る物なんじゃないか、幽霊とか怨念つて」

俺がそう言うと、山田がはつとする。

「じゃあ、私がいつも金欠なのも……！」

「紛れもなく自業自得だ」

「前田のご飯が美味しいのは……」

「俺の腕前」

勝手に責任転嫁するな。

オマエに金が無いのは使い方の荒さである。

俺の飯の味まで呪い扱いするな。

「美味しいなら何よりだっつーの」

「誰か泊めた時も作った？」

「え、ああ、そりゃ普段よりも力入れて作った。美味しいって笑う顔が見たかったからな」

「……………そうなんだ」

何だ、今の間は？

反応に違和感を覚えつつカルボナーラを完食した。

対する山田は美味しいという割に手は遅い。

味わっているのかもしれない。

「その人、前田にとつてどんな人？」

「え、なに急に」

「……………」

「えー…………と、守るべき存在？家族、みたいな」

「ごちそうさま」

山田がカルボナーラを平らげる。

「何か、怒ってる？」

「別に」

「あ、そう……」

食い気味に否定された。

やはり怒ってるな。

コーヒーを啜る山田から空になった皿を取り上げて流し場へ持っていく。

少しだけ空気が悪い。

普段ならそんな事も無いのに緊張する。

「今日は泊まる気なのか？」

「うん」

「その割には荷物少ない……あれ、ベースギターはどうしたんだよ」

「……………今は要らない」

「えっ」

要らない、って。

いつも肌見離さず持っていたのに？

俺の家でもよく暇になるとすぐ弾き始めていた彼女にしては珍しい。いや、違う。

これは明らかな異変だ。

大切なベースギターを要らない、というのは意外とかではなく異常と称すべき事態だ。

でも、そうか……今日は無いのか。

「ちよつと残念だな」

「何で」

山田がこちらを向かずに尋ねてくる。

やはり怒っている。

そんな状態で言っても火に油を注ぐだけかもしれないが――。

「オマエの弾くベースの音、好きだし」

正直な感想を伝えた。

どうにでもなれ。

むしろ、逆上して家に帰っても嬉しい、かもしれない。

実のところ、コイツの音は聞いていて心地良かった。

最初は近所迷惑になるかもしれないからやめて欲しいとか思っていたが、惹きつけられる音にだんだんと耳を澄ましていた。

素人なので上手いとか下手の程度は分からない。

ただ、何となく気に入っていた。

「……………」

「……………」

お互いの間に長い沈黙が流れた。

気まずいけど、どうにか手元で皿を洗う事で気を紛らわせている。

ここまで無反応なのは初めてだ。

大抵は山田も言葉でなくても顔や態度で示す。

俺は固唾を呑んで、彼女の様子を見続けた。

「帰るね」

山田が立ち上がった。

あ、やっぱり怒りを助長しただけだったか。

彼女はそそくさと家を出ていった。

……荷物も持たずに。

俺はその後、鍵を閉めて一人になった居間で寛ぐ。

あー、居心地悪いな。

これはきつと、しばらく家に来ないタイプだ。

本来なら嬉しいんだが、こんな風に別れると後味が悪いというか……いや覚悟の上でやった事なんだからウジウジと言つてはいられない。

アイツが再生したままの映画もエンドロールに入っていた。

それを聞きながら、一眠りする事にした。

「ただいま」

「早っ!?!」

家の扉が開け放たれる。

そこには——ギターケースを背負った山田がいた。

え、要らないのではなかったのですか？

再び戻ってきた彼女は、手を洗うとすぐにベースギターを取り出して俺の隣に腰掛けた。

そして、心做しか目が輝いているように思える。

「聴かせよう、前田の好きな音を」

あ、はい。

夜になって、ふと気付いた。

今日は焼き鯖の大根おろし添え、千切り大根の煮物、味噌汁と炊いた白米を提供した。あれから、山田は上機嫌だ。

「〜♪」

さつきから何かを口ずさんでいる。

音楽はあまり聴かないけど、最近のヒット曲くらいなら知っている。その俺が分から

ないという事は、アイツのバンドの曲なのだろう。

また不機嫌になられても面倒なので何も言わない。

「前田」

「何だ」

「私は気分が良いので、今日はベッドを譲る」

「最初から俺のだけだな」

俺のベッドなのに。

俺のベッドなのに。

俺のベッドなのに！

「良いよ、別に」

「何で」

「今日は色々あったんだろ。遠慮してないでいつも通りにしてろ、調子狂わされても余計に困るし」

「分かった」

これ以上、家の中を居心地悪くされても嫌だ。

背に腹は代えられない。

ならば、いつも通り過ごしてもらおう方が被害——主にストレスも最小限で済む。優れ

た順応性は人間が絶滅を免れた一因と言っても過言ではない。

「前田」

「ん？」

「今週末に夏祭りがあるらしい」

「ああ。そうらしいな」

「前田は行かないの？」

……またその質問か。

山田は知らないけど、それで昼に気分を悪くさせられたんだ。

山田に罪は無い、落ち着け。

それにしても、この流れは誘われるやつだ。

意外だな、山田がそんな事をするなんて。

でも、誰だろうと嫌だ。

「行かない。興味無いしな」

「良かった」

「……………ん？」

予想を裏切る答えに思わず山田を二度見する。

「山田は、行かないのか？」

「うん」

「え、でも買い食いとかオマエしたいんじや……」

「それまでお金あるか分からないし」

「自制しろよ」

行かない理由が低次元すぎる。

生活費諸々に取られる社会人などならば納得するが、山田の場合は単なる興味への過度な追求であるため純然たる自業自得なのだ。

……てつきり誘われるかと。

「それに、祭りより前田の方が面白い」

少しだけ微笑んで山田がそう言った。

そう、なんだ？

喜んで良いのだろうか、捉え方によっては失礼な事を言われた気がしないでもない。

でも、まあ……誘われたワケじゃないなら良いか。

「俺が行くって言ったら？」

「前田の家で一人過ごしてた」

「そこは自分の家にしろよ」

コイツもああいうイベントは苦手なのか？

曲作りのインスピレーションがどうか言って行きそうなのに。

「それに前田は虹夏に誘われないうちに行かないと思うし」

「伊地知さんに誘われる……？」

「うん」

「……浴衣で来るかな？」

「多分」

「………い、行きた……ないっ……!!」

危ない、意思がブレるところだった。

「結局また二人か」

「週末はバンドマンのお手本こと私が前田が楽しめるように工夫する」

「もう胡散臭い」

「私の持ち前の曲を披露する。……バンドが好きだった時の」

今、何か引つかかる言い方だった気がした。

だが、山田が気分良いみたいなので流しておこう。

俺はまだ彼女のそういう部分について何も知らないし、踏み込むほど深い関係じゃな

い。

これぐらいで、丁度いい。

「だから週末は豪勢なご飯をよろしく」

出てけ。

虹の日・前編

思い返すと、一目惚れだったかも。

廊下で一度だけすれ違っただけだった。

私と彼は、ただの同級生でしかない。

でも、出会った瞬間だけははつきりと憶えてる。凄く悲しい目をした人だな、って強く印象に残った。

誰よりも影が濃かった。

本人は意図していないだろうけど、私はその微かに悲しげな眼差しに目を引かれた。

それから、私は意識するようになった。

朝礼などで集合したり、同学年の教室の前を通過する時に姿を探した。

そして、彼を見つけると足が止まる。

今日も、あの目だ。

見る度に、胸の中で何かが膨らむ。

そして自覚できるくらい大きくなった時、その正体が無責任にも『彼を助けたい』という想いだど知った。

理屈ではない。

妙に強い使命感にも似た衝動だった。

でも、触れた瞬間に壊れるような危うさも感じて踏み出せなかった頃――。

「前田？」

「他クラスの男子で、ご飯食べによく家行く」

親友のリョウが男の子の家に通うようになった。

最初は、生活力ゼロでどこか抜けているリョウの事だから騙されてるんじゃないや……とも思つて忠告混じりに問い詰めたら、その相手が洗濯物を取り込む姿を撮った写真を見せてもらつて気付いた。

あ、彼だ。

「こ、この人が前田くん？」

「そう、前田一郎」

「……………」

「虹夏？」

言葉が出なかった。

名前……前田一郎くん、って言うんだ。

「……リヨウ、甘えすぎると迷惑だよ。前田くんの家族だっているんだし」

「前田はいつも一人」

「えっ？」

「親が一年中海外出張でいないって」

それを聞いて納得した。

あの顔は、あの目は、そういう事なんだ。

さらに、彼には友だちもいないという。その独特の雰囲気で、話しかけて良いか、バイト尽くしらしく忙しくて遊びに誘っても良いのか分からない……そうやって、周囲も干渉しにくいんだという。

ずきり、とまた胸が痛んだ。

それから、リヨウを介して会えないかと思ひ、会ったらどうしようかなんて脳内でシミュレーションしたりとかなり浮足立っていた。

そんな風に妄想を膨らせていたら、帰り道の途中で一緒に帰るリヨウと彼——前田く

んをみつけた。

「今日、家に寄るね」

「……飯食つたら本当に帰ってくれよ」

「ご飯前にシャワー浴びたいから途中で私用のシャンプー買っていく。あと、着替えに前田の服貸して」

「ごめん、全部聞こえなかった事にする」

リヨウと前田くんが談笑……談笑？している。

前田くんはかなり困り気味だ。

ここは助けなきやいけない。

リヨウは私の親友だし、それが他人を困らせてるならいつも面倒を見てる私が何とかしないと……！

そう決心し、二人へと駆け寄ろうとして——固まってしまった。

隣にいるリヨウへ振り向く前田くんの横顔が見える。

そこに、あの時みたいない悲しげな陰りは無かった。

笑顔ではないけど、いつもに比べたらかなり明るい印象を受ける。

リヨウも、そんな彼に分かりにくいぐらいの微笑を返していた。

何だろう。

あの二人に流れる空気って、少しだけ……。

「……………」

私が、助けたかったのに。

♪

♪

♪

♪

家に帰ると、山田がいるらしい。

ロインで伝達された内容に俺はため息が出た。

雨が降るバイトからの帰り道を歩いている。夏休みももうすぐ終わるし、午前で切り上げるシフトも今週で終わるだろう。

それにしても、最近は疲れが溜まる。家に帰ってもかなり憂鬱だ。

夏休みがそろそろ終わるからなのか、俺の家で課題をやる山田の相手をしなくてはならない。以前に成績が良いとそれとなく自慢した結果、頼られるようになってしまった。

自分でも足取りが重いと分かった。

意識してないとまたため息をついている。

「あ、前田くん」

「ん」

聞き覚えのある声でした。

行く手の路肩にある蕎麦屋の庇で雨を凌いでいる少女がいた。

長いサイドポニーから水が滴っている。

服も水分を多く含んで肌に貼り付いており、やや透けていた。

……………えっ。

「伊地知さん？」

「あはは、久しぶり」

俺も庇の下に入って、今着ている上着を伊地知さんの肩にかけた。

それからカバンから出したタオルを手早く渡す。

「え、いいの?」

「使わないと風邪引くでしょ。ずぶ濡れだし」

「前田くん、用意が良いね」

「小さい頃から親が共働きだからさ。何か自分の事は自分でできるようにって、変に準備だけは良いんだよ」

「……そっか」

伊地知さんがタオルで体を拭いていく。

よくやった。

今日はまだ未使用だったのが幸い。偶然とはいえ、この時に使えて良かった……過去
の俺ナイス。

それにしても、何故ずぶ濡れなのだろう。

朝から雨は降っていたのに。

「伊地知さん、傘は?」

「途中で壊れちゃったんだよ……」

「それは、気の毒に」

「へっくち」

う、やはり寒いのかな。

「家まで送る」

「でも前田くんも何か用事で外出してるんでしょ」

「バイト終わりなんだ、今」

「そっか。……じゃあ、お願いしよ——」

会話の途中でロインの通知が鳴る。

俺がスマホを確認すると、山田からだった。

内容は。

『冷蔵庫のカスタードプリン、貰うね』

……それ、バイト帰りの楽しみなのに。

また何度目かのため息が出た。

遠慮の無さには慣れたつもりだったが、ストレスなのは変わりない。いつその事、冷蔵庫の中に最低限の物以外は置かず、山田除けの対策を布くべきだろうか。

夏祭り当日も、アイツの為に手料理を振る舞ったのだが、「ここまで豪華なのは予想し
てなかった、前田頑張りすぎ」とか引かれて最高にイラッとした。

オマエがやれって言ったんだろうが。

でも、何だかあの日は特別だったな。

映画観たり、山田の曲を聴いたりするだけの時間だが、それでも俺は充分に楽しんでいたと思う。

夏祭りの鬱屈とした気分を忘れるほどに。

かなり山田を調子付かせてしまったけど。

「どうしたの？」

「山田が俺のプリンを食べるんだとき」

「……リヨウって今日も前田くんの家にいるの？」

「こここのところ、週五です」

プリン食べたかったな。

高校になってから忙しさが増している。

最たる例は山田とバイトだ。

山田にプライベートゾーンを侵害されて以降は、どうにも人の面倒を見るのが不本意にも上手くなってしまうた。

バイトは単純に休めない。

周囲はお盆で帰省する人もいたが、俺の両親ってどちらも親と絶縁しているらしいから、実家に帰る事も無いし、友だちもいないので誰よりも働いてる。

夏休みって……何だ？

「この前は山田の親まで来てさ」

「え？」

「娘とはどういう関係？とか尋ねられて、何を答えても誤解を招きそうで大変だった」

「……前田くん、もしかして」

伊地知さんの目がきらりと光った気がした。

え、どうした。

「リヨウにかなり困ってる？」

「はい、とても」

そう答えると、伊地知さんがよし！と可愛い声を上げる。

胸前で両拳を作り、表情を引き締めた。

何をしても可愛いな、この人。

「前田くん、私も家に行つて良い？」

何処かで雷が落ちた。

いや、俺の中だった。

「え、何で？」

「良かったら、私が帰る時にリョウごと引き取れると思う。……それに一度は前田くんの家遊びに行きたかったし」
なるほど。

たしかに、伊地知さんなら山田を連れ出せるかもしれない。

夏休み前にはお釈迦になった伊地知さん訪問も叶うとなれば、俺としては一石二鳥ではないだろうか。

考えれば考えるほど幸せになっていく。

「じゃあ、お願いしようかな」

「それじゃあ、服が乾くまでお邪魔しますー!」

俺は伊地知さんを傘の下に入れて一緒に歩く。

希望が見えてきた。

家に帰ると、山田が俺たちを迎えた。

俺のシャツ一枚の姿で。

「ん、おかえり」

隣でバッグを落とす音がした。

伊地知さんが瞠目し、山田を凝視している。

何か変な事でもあったのだろうか。

そういえば、山田は着替えているようだ。俺がバイト中に家に入ったようだが、その途中で雨に濡れたのかもしれない。

「前田、シャワー借りたよ」

「オマエも濡れたの？」

「うん。服は洗濯機に入れたから」

「はいはい」

俺は靴を脱いで上がる。

伊地知さんは靴の中まで濡れているようなので、新しいタオルを持ってきて玄関前の床に敷いた。

「これで足を拭けるだろう。」

「伊地知さん」

「伊地知さん？」

「え、あつ、うん！お、お邪魔します」

「シャワー浴びる？」

「そ、そこまで厄介には……！」

「いいよ。一回温まって来なつて」

一拍遅れて伊地知さんが反応してくれた。

彼女が脱衣所へと向かっていく。

俺はその間に着替え……というか、いつしか服を借りまくる山田に嫌気が差して自ら

購入し用意した山田用。パジャマを用意した。

山田がそれを見て小首を傾げる。

「レディース？……何で前田が」

訝しむ山田の視線がやや鋭い。

やめろ、邪推するな。

「本来オマエのだったんだよ」

「……………」

「なに？」

「私用の物なんてあったんだ」

「オマエが遠慮せず俺の物を使うからな。何なら今からこれに着替えるか？」

「今は前田のシャツがあるから」

「俺のシャツなのに」

シャワー室の前に着替えを設置し、俺は素早く退散した。

心臓が悪い。

山田は慣れたが、成り行きとはいえ女子を家に招くなんて今日は異常事態だ。

二人の服を乾燥機にかけて、俺は居間のソファアに腰を下ろす。

隣では山田が胡座を搔いてベースを弾いていた。

「何で虹夏がいるの？」

「ずぶ濡れになつてるところを見つけて」

本当はオマエを連れ出して貰う為に、なんて事は口が裂けても言えない。

事態が余計に拗れそうだしな。

もう俺の独力でコイツを追い出す事は諦めている。

本気で怒れば可能なのだろうが、そこまでの熱量に感情を保てない性分なのだ。何を

言つても駄目な相手にはアプローチを変えて順応してしまう。

バイト先の厄介な先輩に、自分が何を言つても駄目な時は店長やより上の先輩に密告

するし、店のルールを納得せず文句を垂れたいだけの客は呆れて帰るまでひたすら同じ説明文を機械的に繰り返す。

そうやって生きてきた。

だが、今回はまだ解決の糸口がある。

伊地知さんがいれば、山田を――。

「前田は優しいね」

「そ、そうか」

う、何かぐさりと心に突き立つ。

山田が悪いのに罪悪感が湧いてくる。

ごめん、俺はそんな男じゃないんだ。

「虹夏も泊まるの?」

「服が乾くまでの間だつてさ。オマエも服乾いたら帰れよ」

とりあえず、帰れと言ってみる。

伊地知さんに全任せでは駄目だ。

ある程度は俺も努力しなくてはならない。

「前田のご飯食べて寝たら帰る」

やっぱり駄目だった。

というか、弾いてないで課題やれ。

伊地知さんが出てくるまで、短編映画『ANI-OA』を観ている。

約二十分と短い内容だが面白い。

これなら、暇潰しにもなる。

課題をやっていた山田も手を止めて見入っていた。

「短い映画ってあつたんだ」

「探せばあるぞ」

「前田は色々知ってて面白い」

「でも映画館とか、あまり行かないんだよなあ」

だって、怖いし。

家という落ち着いた雰囲気的空間ならいけるが、正直に言っただけのレイトショー並みに人
のいない状態じゃないと鑑賞できないのだ。

映画を観てる時の人間って無防備だし。

だから、ヒットした映画も公開終了直前の予約席も少ない時間帯を選んで行く事も多々ある。

映画を真剣に観てる時は無警戒になってしまうから、余韻に浸っていて車に轆かれそうになった事もあつたな。

うん、あれは危ない。

でも不思議だ。

映画に集中している時の人間って、普段とは違う素顔を他人にすら晒してしまう時がある。

日頃から元気快活でうるさい人も、静かな時に見せる顔は普段と違う感じの印象があつたり。

「……………」

山田は映画を観ている。

その横顔は――。

「お風呂ありがとう！」

シャワーから出た伊地知さんの声にはつとずる。

彼女へと振り返ると、山田を見ていた。

どうしたのだろうか。

「リヨウ、いつもこんな感じ？」

「そうだな」

「週五の内、どれくらい泊まってる？」

「夏休みだからなのかもしれないけど、三回」

「……親には何て言ってるのかな」

「分からない」

服が乾くまで、残り十分。

寛ぐ山田をそれまでに家を出るよう説得したい。

勿論、俺にできる事は少ない。

伊地知さんの隣で、ただ嫌そうな顔を作って待機するだけだ。全力で嫌々アピールだけしておけば、さしもの山田も氣遣って出ていくかもしれない。

「ねえ、リヨウ」

「ん？」

伊地知さんが口を開く。

頼んだぞ、伊地知さん……！

「私も今日泊まるって言ったら、嫌かな？」

頼んだのに、伊地知さん……？

虹の日・後編

——私も今日泊まるって言ったら、嫌かな？

伊地知さんが山田に対してそう尋ねた。

可怪しい、彼女は俺と同意して山田を家から撤去する為に共同作戦を行ったつもりだったのだが、彼女の口から出たのは真反対の内容だった。

伊地知さん、話が違う。

「前田に訊いて」

山田が一瞬の間を置いて返した。

どの口が言ってるんだか。

普段から俺に許可を求めて断られても平然と居座るヤツが他人に許可申請を促すな

ど明らかに俺をバカにしているとしか思えない話だ。

ほら、見ろ。

その返答に、ぴくりと伊地知さんが眉を動かす。

きつと、オマエには言われたくないという顔だ。

いや、それよりもこの事態が理解不能だ。

何が起きているか分からない。取り敢えず、伊地知さんに裏切られたのは確かだ。

なぜ山田撤去を頼んだのに宿泊者が増えるんだろうか。

もしかして、悠悠自適に過ごしている山田の姿を羨ましがった伊地知さんに悪影響が及んだのかもしれない。

こうなったら、もう俺の手には負えない。

伊地知さんがこちらを見た。

と、泊まるって言ったって……女子二人も？

流石にそれはどうかと思う。

山田はもはや寄生虫だとしても、伊地知さんはどう見たって可愛い女子で好きな人で天使なのだ。

「伊地知さん、話が違うんだが」

「お願いっ！」

「……………」

真剣な面持ちの伊地知。

ちらりと視線を少し外す……後ろでは、山田が首を横に振っている。

諦めろ、と……そう言いたいのか。

山田に諭されるのは癪だが、そうかもしれない。

「……分かったよ」

「やったー！」

「……前田」

俺が認めると、伊地知さんが可愛く叫ぶ。

駄目だ、この笑顔には勝てない。

山田が何か言いたげな顔でこちらを見ていた。オマエが諦めろって言ってきたんだろう。

……はあ。

今日はいつも以上に忙しくなるのか。

「前田くん」

「ん？」

「お世話になるんだし、私が料理するよ！」

「……………え」

お世話になるんだし、私が料理するよ……？

家に泊まるヤツって、図々しく飯を食って寛いで帰るのが普通なのではないのだろうか。

俺は宿泊者のあるべき姿について熟考した。

結論、そんなもの考えても分からなかった。

よく分からないが、伊地知さんの手作りが食べられる。

不幸中の幸いなだろう、きつと。

俺が納得していると、山田に袖を引かれた。

振り返ると、何だか切なげな目をしている。

「なんだよ」

「……………前田の手料理が食べたい」

「いや、でも伊地知さんが厚意で——」

「食べないと死ぬ」

「……………も……………」

「虹夏のは弁当で食べられるけど、前田のご飯はここだけ」

「毎回クソ低次元な理由」

俺はここでしか食えないんだよ。

伊地知さんの手料理は今しかないんだ。

懇願するような山田は、俺が厳しく睨みつけても尚姿勢を崩さない。

駄目か。

俺はキッチンへ向かう天使に視線を移す。

たしかに、お礼とはいえ他人に冷蔵庫の中身を任せるのもどうだろうか。

俺が日頃から一人生活を想定して管理しているので、ここで伊地知さんに使用させたら、そのプランも崩れてしまう。

山田の為ではない。

あくまで俺の為だ。

「伊地知さん、俺が作るよ」

「え、でも」

「伊地知さんはシャワー浴びたばかりだし、ゆつくり寛いでなよ。日頃から山田に高評価……？して貰ってるから大丈夫だ」

「うーん……分かった」

伊地知さんが納得して居間の山田と何やら話し始める。

二人とも仲が良さそうだ。

日頃から、ああなのだろう。

……待てよ？

山田には友だちがいて、俺にはいないのか。しかも相手は伊地知さんという……友人の数で優劣を決めるなんて愚の骨頂だが、どうしてだか胸を貫くような衝撃を覚えた。

俺は、山田より友だちがいない？

アイツの飯、一服盛った方が良いのかな。

「いい加減に鍵返しなよ」

「これは信頼の証」

「ええ……ホントに……？」

「最初は色々言われたけど、最近は何も無い。これは私が頑張った証拠」

「絶対ソレ呆れて言わなくなったやつ!？」

良いな。

俺も伊地知さんとあんな会話がしたい。

でも、あの話題って俺という犠牲で成立している。

今日はほうれん草のお浸しと、豚バラ肉とニラ玉炒め、味噌汁と白飯にしておこう。

今日は三人、気持ち少し量を多めに設定して作る。

内心ではドギマギしている。

率先して料理すると進言した口振りから察するに、伊地知さんも日頃から料理をしているのだ。

ここでも出した飯に——「あ、私の方が上手いかも」とか言われたら死にたくなる。別に良いけど、何かダメージ。

料理中、スマホが鳴る。

取り出して画面を確認すると、ひとりからだ。どうした。

「もしもし」

『あ、あの、いっくん……今大丈夫？』

「大丈夫。オマエからならいつだって出る」

『ふへ、あり、ありがとう』

嬉しそうなひとりの声でした。

うん、今日も健康状態は良さそうだ。

もうここ二、三年の俺は声を聴いただけで相手の健康状態がどうなのかを把握できる……ひとり限定で。

この感じ、まだ晩飯前だな。

肩と頭でスマホを挟みながら、料理作業は継続する。

伊地知さんたちを待たせてはならない。

でも、片手間でひとり进行处理するみたいで何だか罪悪感があるな。

「今日はどうしたんだ？」

『あの、受験……でね』

「うん」

『お父さんとお母さんに、本当にここで良いのかって聞かれて……』

「うん、うん」

ひとり相手の会話の時は、こまめに相槌を打つ。

この子は絶望的なコミュニケーション能力の低さから、相手に上手く伝わるか不安に苛まれ、いつも焦って急いでは変に思い留まってよく言葉を切つてしまいがちである。

だから、ちゃんと聞き取れている、と示す為に途中でも相槌だけ打つと落ち着き始めるのだ。

『そ、それで、いっくんに説明したけど……ふ、二人にはちゃんと理由話せてないから、「いっくんに激推しされた」って嘘ついちゃって……ど、どうすれば……!』

「分かった、口裏を合わせればいいんだな」

『へっ……いい、いいの?』

「俺はいつだってオマエの味方だから」

『あ、あう』

ひとりの悶える声でした。

電話中に飼っている犬のジミヘンに舐められているのだろうか。

『いっくん、わ、私に甘すぎるよ』

『そうか？』

『私、ホントにダメ人間になる……』

「安心しろ。そうなったら将来、死が俺たちを分かつまで一緒にいてやるから」

『はひゅっ!?!』

電話の向こう側でぼたりと騒音が立つ。

どうした、何があつた!?

「大丈夫か？」

『いや、なんでもにやい……じじじゃあ、ま、またね!』

「ああ、また」

通話が切れる。

最後はかなり慌てていたようだが心配だ。

取り敢えず、頼まれた口裏合わせの為に後で秀華高校について調査し、校風や通学路の安全などについても後藤家の二人にしっかりプレゼンできる程度に情報収集をクリ

アしておこう。

また仕事が増えたな。

いや、違うな。

ひとり案件は仕事ではない——使命だ。

ふと、居間が静かな事に気付いた。

手元から視線を上げると、二人がこちらを見ている。

見た事が無いほど真顔な伊地知さん。

相変わらず無表情の山田。

どうやら、声が入らないようにと通話中に気を遣わせたようだ。

二人に対して軽く頭を下げる。

詫びとしてより一層、飯は美味しく仕上げよう。

そう思っていると、隣で床を擦る足音がした。振り返ると山田が至近距離に立っている。

邪魔だ。

「大人しく待ってろ」

「……」で見てる」

是が非でも退かないらしい。

あまり火に近寄ってほしくないんだが。

呆れて山田から視線を外すと、逆方向の隣に伊地知さんが音もなく立っていた。え、可愛い。

「今の電話って誰？すごく仲良さそうだったね」

「え、ああ、うん」

「もしかして……彼女？」

「いや、親戚の女の子」

「そーなんだー……も、もしかして結構小さい子かな！結婚の約束なんかしちゃって、前田くんは罪深いなー」

節操の無い人間と誤解されている。

伊地知さんにはそんな風に思われたくない。

しつかりと弁明しておこう。

「いや、一歳下の女の子。罪深くて、しつかりと然るべき時は責任を取るつもりだから」

精一杯、誠実な男だとアピールしておく。

親戚の女の子だからといって蔑ろにはしない。

皆は知らないと思うが、ひとりはとても可愛いし根は良い子なのだ。間違っただって後悔したり、見捨てるなんて選択肢は最初から存在しない。

この固い意志、伊地知さんに伝われ。

ひゅ、と息を呑む声。

伊地知さんが顔を蒼白くさせていた。

え、引かれた。

親戚の女の子に対して真剣すぎ、とか実は伊地知さんのポイントが低かったのだらうか。

どうしようか、助けを求めて反射的に山田の方へ向くと袖を強く掴まれた。

……ますます邪魔だ。

「山田、危ないから放してくれ」

「……………」

「山田、ほんとに」

「大丈夫。前田が私に怪我をさせるわけがないから、事故なんて起きない」

「さては無茶って言葉を知らないな」

信頼のある言葉をここまで重圧として押し掛からせる言い方がこの世に存在しただ

ろうか。

俺のせいで火傷しても知らないぞ、本当に。

その後、お通夜みたいに二人とも終始無言のまま夜まで過ごした。



翌朝、雨が上がった。

俺は玄関まで伊地知さんを見送る。

「ごめん、予定と違って」

「あー、うん、まあ」

「あれ、リヨウは？」

「まだ俺のベッド」

「……………そっか」

何度か起こしたが、山田は寢言で起きるとしか言わない。

仕方ないので放置した。

今回の事で分かったが、伊地知さんでもアイツは歪まない。

希望は断られた。

「ごめんね、力になれなくて」

「いや、伊地知さんがいて楽しかった」

「……………」

伊地知さんが少し黙って、一步俺に距離を詰めた。

近い。

「ねえ、前田くん」

「ん？」

「私たちって仲良くなれたかな？」

「え、それは……」

自信持って誰かと仲良くなれたなどと言えない。

だって、一人も友だちがいなかったから。

山田は、ほら、寄生虫だし。

伊地知さんに親密度を問われても、果たして冗談でも仲良くなったなどと軽く口にして良い物か考えあぐねる。

「私は、仲良くなれた気がする」

「そう、なんだ？」

「だから……一郎くん、って呼んでもいい？」

………下の名前か。

好きに呼べば良いのではないだろうか。

逆に伊地知さんはよく山田の事も自然に下の名前で呼んでいるので、今さら俺の許可など必要ない。

頷くと、伊地知さんが嬉しそうに笑った。

「じゃあ、私も虹夏でいいから」

「え、虹夏さん？」

「さんも要らないって！ 私たちもう友だちだし！」

「虹夏さん」

「うん。まあ、そう簡単にはね」

伊地知さ——こほん、虹夏さんは満足げだ。

この晴れていく空のような笑顔で、俺に手を振る。

「今日はそれだけでも良いや。——またね、一郎くんっ」

虹夏さんが去っていく。

その後ろの空に、虹がかかっていた。

神か……………?」

山田は午前十時頃になって起きてきた。

俺はバイトも休みなので、映画を観ながら寝ぼけ眼の彼女を迎える。

「おはよう」

「虹夏さん、もう行ったぞ」

「……あれ、前田って虹夏のことそう呼んでたっけ」

「いや、本人にそう呼べって」

沈黙が流れた。

後ろで『スパイダー○ン2』のアクションシーンが開始されている。

山田はそっか、と小さく呟いて俺の隣に座った。

俺はキッチンへと向かい、焼く前の状態でラップして保存していたホットドッグをオーブントースターに入れる。

「牛乳？」

「うん」

「食後とかにコーヒーは要るか？」

「うん」

「……なあ、山田」

「ん？」

山田が俺の方に振り向いた。

眠たげな目は、本当に俺が見えているのか不安なくらい潰れている。

「俺たちって友だち、なのか？」

「うん」

「なら、オマエもリヨウって呼ぶべきかな」

「じゃあ、私は前田一郎って呼ぶ」

「えっ」

「えっ」

やはり、分からない。

ベーシスト・山田リヨウ

俺は山田が嫌いだった。

「うちの子がお世話になってます」

山田のご両親が挨拶に来た。

俺はそれを見て——驚かされたのだった。

へえ、実の親つてこうして子の為にも誰かに頭を下げる事があるんだ、と。

山田つてこんなに愛されてんだ、つて。

山田の両親を見て——思わず吐きそうになった。

実の親つてこうなんだ。

じゃあ、やっぱり俺の家つてどこまでも家族ごっこなんだな。

『どうして、オマエは生まれてきたの？』

『生きてる価値無いよ』

『迷惑なんだ、死んだ方がいい』

『頭を使つても猿以下かよ』

あの大人たちの声が耳に響く。

俺の周囲を固める人たちが、頭上から幼い俺に対して投げかけるのは同情ではなく、生きている事への否定と拒絶と侮蔑ばかりだった。

父は蒸発し、愛されていた母は事故で死んだそうだ。

母は皆に愛されていたという。

赤子だった俺と共に車に轢かれ、俺だけ生き残った。

それが良くなかったらしい。

父方の親戚である前田家に身請けされる前まで、母方の親戚をたらい回しにされていた俺が、大人はこういう物だと思ふ偏見を決定的にしたのもあの環境だ。

『今日から、君が息子だ』

『これから、いっぱい思い出作りましょう。——一郎』

前田家は、今の父さんと母さんは俺を温かく迎えてくれた……んだと思う。

でも、その頃にはもう俺は——。

『ああ、うん。よろしくね、父さんと母さん』

もう冷めきっていた。

家族なんて物に。

二人から注がれるのは、愛情というより気遣い。

願っても子どもができず苦しんだ二人は俺を引き取りたいと自ら進言したそうだが、その所為で絶縁されたらしい。

それもあつて、俺に何も心配ないと取り繕うので必死だ。

生きていて良い事は色々あつた。

でも、愛情というものを信じられない。

愛があるなら、愛を知ってるなら大人たちは俺にあんな言葉を投げかけて傷つけたりしない。

友情だつてそうだ。

い。小学校から中学校に上がつて、連絡を取り合つたり会つたりする友だちは減るらしい。

それつてつまり、『友だち』つて名前に当てはめてるだけで所詮は好奇心や興味つてだけで冷めやすい物だ。

実際、積み重ねた信頼がたった一度の失敗で消えるのも、相手を都合のいい物としてしか見ていない証拠だ。

そんな捻くれた俺が愛情を信じられたのは、後藤家のお蔭だ。

『いっくん』

『……なに？』

『と、とと、トランプ……したい』

『俺じゃなくて親に頼めよ。俺なんかより楽しいだろうし、代わりは幾らでもいる。俺なんていなくてもやりようはあるだろ、一々声かけんなよ』

我ながら容赦なかったと思う。

実際、ひとりは部屋の隅で泣き出してしまった。

俺にはそれも眼中になく、ずっと放置して後藤家の家事を手伝いながらも苛立つて時折だけどカッターナイフでの自傷行為だっしてした。

痛みは誰にだって平等だから、俺もみんなと同じだと自覚できる。

そんな中、不意に服の裾を掴まれる。

振り返ると、ひとりが泣き腫らした顔で。

『あ………や、やめよっ…』

『はっ…』

『お父さんとお母さんがいても、いっくんが居なかったら、さ、さび、寂しい………いっくんが痛そうなの、い、嫌だよお………』

後藤家がいたから、人の愛情を信じられた。

だから、友情も信じてみよう——そうして友だちも欲しくなった。

でも、他人の輪に入ろうと思うと胸の内で感情が冷める。

ああ、俺って本当……。

「本当にありがとう」

「いえ、大丈夫ですから」

俺に頭を下げる山田の両親は良い人だ。

そうか、山田は愛されてるんだな。

でも、山田は過剰？なほど愛を注ぐ二人に対して少しだけ嫌気が差しており、反抗期みたいな感じらしい。

愛してくれる親が、嫌？

あんなにも言ってくれるのに贅沢なヤツだ。

山田に関する事はストレスが多い。

けど、この時が一番つらくて。

「前田？」

山田を、殺してやりたいときえ思ってしまった。

♪ ♪ ♪ ♪

……嫌な夢を見た。

がしやりと、騒音がして俺は起き上がる。

ベッドのサイドテーブルにあった目覚まし時計が壁際に落ちていた。

また、やってしまった。

ここ最近は無かったのに、またかよ。

こうして、週に何回か昔の事を夢に見て寝ている間に物に当たる事があった。

山田が泊まるようになってからは、彼女のいない日に起きる。

案外、アイツが精神安定剤になってたのか。
うん、癩に障る。

「また買い替えないと」

今日から学校だしな。

俺は自室を出て、洗面台でまず顔を洗う。

それから居間に足を運んだが、ふと異変に気付いた。
リビングテーブルの上にノートが一冊置いてある。

表紙に『山田リヨウ』と書かれていた。

中身を検めれば、夏休みの数学Ⅰの課題だった。

まったく、アイツは……。

スマホでアイツの番号に連絡を入れる。

五コール目で、アイツが応答した。

『もし、もし』

「もしもし。寝てたか」

『ん。……やばい、十分寝過ぎしてた』

「初日からそれかよ」

『前田はもしかして、私の朝コールまでしてくれるようになったのか』

「思い上がるな」

すぐ調子に乗りやがって。

俺は嘆息しながら、いつものアイツだと変に安心する。

ここ最近は妙だしな。

バンド関連なのは間違いないが聞き出せない。

いいや、聞きたくないのが正確なところか。

俺のように踏み込まれたくない部分があるのだろう。

「オマエ、数学のノートがこっちにあるぞ」

『そんなバカな……!!』

「つたく、きつちり全部やったのに俺の家に忘れるなよ」

『うん。頑張つて虹夏のノートを写した努力が水の泡になるところだった』

「何を頑張つたって?」

電話の向こう側でバタバタと聞こえる。

慌てて準備しているようだ。

そろそろ通話も邪魔になるだろう。

「集合してノートを何処かで渡すか?」

『教室に来て』

「オマエ……俺は召使いじゃないぞ」

『朝コールしてくれたから、てつきり……』

残念そうな声を上げるな。

俺は絶対に嫌だぞ。

「じゃあ、朝教室の前で待ってるよ」

『うん、前田も早く来るんだよ。そうすれば私の待機時間が短くなる』

「ノート、家に置いていくぞ」

『そしたら前田の家に行く口実ができる』

「何で俺の方が追い詰められてるんだよ」

通話を切って、ノートを見る。

俺って山田に甘いのだろうか。

あの事件の日から、虹夏さんとよく連絡を取り合うようになった。俺としては主に山田の事で相談があつてして、その度に「リョウに甘すぎるよ！」って可愛い苦言を呈されるのだ。

いつその事、一度は痛い目に遭わせるべきか。

でも、皆……俺より生きる価値がある人間だしな。

山田だつてそうだ。

アイツはアイツで、誰かに求められる存在なんだ。

その損失を悲しむ人もいる。

「持ってってやるか」

どの道、持っていかずとも山田は家に来るし、その時にずっと恨み言を吐かれても憂鬱だ。

俺は自分のバッグにノートを突っ込み、朝食やその他諸々を済ませる事にした。

その後、無事に渡せはしたが野草をまた食っていたアイツに昼飯用を取っておいたパンを盗られたのは屈辱でしかない。

放課後、俺は何故か音楽準備室にいた。

今日はバイトが無いから帰って映画でも見ようかと思つたが、外は雨が強くて帰るのも億劫な感じになっている。

少し雨宿りして帰ろう、と思つていた矢先だった。

「前田、この後は時間ある?」

「まあ、あるけど」

「暇なら来て欲しい」

山田に引つ張られる形で音楽準備室へ導かれた。

普段は、放課後に軽音部が使っているらしい。

それにしても、その部員の姿が見当たらないな。

俺が室内を見回す中も、山田は何事か準備を進めていた。

アンプ? だか何だかにコードを挿している。

何をする気だろうか。

「前田」

「ん?」

「今日のお礼」

ベースギターを構える山田が眼の前にいる。

お礼、とはノートかパンの件だろう。

まさかとは思うが、ここで一曲披露する為に連れてきたのかもしれない。

山田にしては意外な贈り物だが、普段もこれぐらいはやっているのに今日はお返しがあ
るのも意味不明だ。

それなら日頃から色々と返して欲しい。

食費……は絶望的に無理だし、別に返して貰う程ではないので、せめて家事を手伝うとか何か出来る事はあつた筈だ。

俺は近くにあつたパイプ椅子に腰掛ける。

部屋には、俺と山田だけ。

外からは虚空に斜線を強かに引く雨の音だけで、あとは互いの呼吸と衣擦れだけがしていた。

「お礼って」

「前田はアンプ無しの音しか聴いたこと無いだろうし」

「……何か違うのか?」

「うん、カッコいい」

それは個人的な感情というか。

つくづく態度も言葉も飾らないな。

でも、たしかに聴いた事は無い。

如何に山田とはいえ、俺の家に機材を持ち込むなんて事はしなかった。それでもベースの音は好きだったし、特に不満を持った覚えはない。

もしかして、まだ俺の知らない音があるのだろうか。

かすかな期待が胸裏で膨らんでいく。

「でも急に何で？」

「今日、元気無さそうだったし」

「えっ」

「顔色が悪かったから野草渡しても、食べなかつたからかなりヤバいのかと」

「そんな人間に野草なんて渡すな」

「駄目だったか」

「トドメ刺そうとしたのかと思つたわ」

心配の仕方が違うだろうに。

ノートを渡そうとしたら、俺の顔を見るなり野草の束を俺に押し付けようとしたのは、どうやら俺の顔色が悪かつたからのようだ。

いや、尚更やめろよ。

絶対に不健康な人間にする処置ではない。

「……そんな分かりやすかつたか」

「なので、私なりに元気付けてやろうと」

「……」

山田の瞳に射竦められる。

……雰囲気が変わった。

「——では、弾きます」

やや堅苦しい文句で山田が弦を弾く。

「——♪」

そこから、三曲ほど続いた。

黙って聴いていた俺は、熱い汗を滲ませてベースを弾いている山田の姿に瞬きも忘れて見入った。

まるで映画でも眺めているような気分だった。

演奏技術の高さだとか、曲の良さだとかは分からない。でも山田の音が、山田の伝えたいであろう音が一切の雑音無く流れ込んでくる。

山田の顔は、見たことがないくらい真剣だった。

これが、俺の知らないコイツなんだ。

カッコいいな、と素直に思った。

「——♪」

スポーツマンのように、自分の中に何か武器を見つけ、コレだと主張していく愚直な勇ましさと芸術的に組み立てられた音色が重なって、観て聴いている俺の心臓がいつもと違う跳ね方をする。

これが山田の価値なんだろう。

山田が、自分自身に見出した意味なのか。

凄く羨ましくて、眩しくて、憧れる。

演奏が止まった。

山田が肩で息をしながら、袖で汗を拭う。

俺が未使用のタオルを差し出すと、遠慮なくそれに顔を埋めた。

悔しいが、今日のコイツは一味違っていた。

寄生虫ではない。

ベーシスト山田だった。

「どうだった？」

「不覚にも胸が踊ったよ」

「病院行ったら？」

「素直に受け取れよ、良かったって意味だろ」

やっぱり演奏が終われば寄生虫山田かよ。

呆れながらも、まだ余韻は消えていない。

そうか——山田って、バンドではこんな感じで演奏してたのかな。

夏祭りの日に聴かせて貰ってたのもまだ序の口なのかもしれない。

いや、ライブってのはまた違うのか。

「映画観てる気分だった」

「……」

「俺一人で観てるのが勿体ないって思ったよ。あまり人の多い映画館とか行かないけど、初めてもっと色んな人に観て欲しい……いや聴いて欲しいと思ったな」

「ふふん」

「——不覚にも」

「素直じゃない」

うるさい。

「でも、バンドはもういい」

「……」

「だから、これが最後のライブにする。観客は前田一人で充分」

「………そうか」

一息ついた山田が顔を伏せる。

そこには若干の陰りがある。

だが、俺にはそれを取り払うほど踏み込む勇氣もかける言葉も見つからない。
でも。

「じゃあ、また演る時は言えよ」

「え？」

「観に行くから」

「……………そうする」

演奏後で上気した頬を赤らめながら山田が微笑んだ。

この時、思った。

今もまだ嫌いかもしれない。

どうしようもないダメ人間だが、コイツは——俺にとって尊敬できるヤツだ。

近い内、ここで交わした約束が意外な形で果たされ、そのチケットが俺の手に渡ること、この時はまだお互いに知らない。

壊れてしまった

十月中旬になって外も涼しくなった。

中間調査も終わって皆が一息ついている。

その間も社会人は忙しいし、彼らに比べれば豆程度の辛酸しか味わっていないが、俺もバイトが再開になって疲れが溜まる時期だ。

テスト期間中は一応勉強に専念した。

バイト先に塾講師経験のある大人がいて、休憩時間にも教えてくれたのが成績的にも効果が大きい。

それにしても、だ。

テスト期間中は山田も家に来なかった。

アイツが元から勉強に力を入れていないのは知っていたが、果たして今回は大丈夫だったのか。

別に心配する仲でもないんだが。

夜道を歩きながら、山田のことを考える。

テスト勉強は虹夏さんが面倒見てるから、一緒に飯でも食えているんだろうし、健康面はおそらく大丈夫だ。

しかし、連絡も特に無い。

もしかして、死ん——？

「あ、見つけたっ！」

聞き慣れない調子の聞き覚えのある声でした。

んっ？

俺は自分の目を疑った。

こちらに向けて駆けてくる影がある。

見たことが無いくらいに輝く笑みで手を振る——山田の姿だった。

きやはは、と柄にもなく笑っている。

ぞわりと体が総毛立つ。

俺は今、この世で生きている限り見てはならない物の一端を目にしているのではないだろうか。

山田……と思しき少女が傍まで来るなり、俺の片腕を抱いた。

「前田見ーつけ！」

「誰だよ」

「山田！山田リヨウだよっ？」

「ホントに誰だよ」

嘘だ。

こんなのが山田の筈が無い。

妙に動作もきやびきやびしてて怖い。

俺が思わず戦慄に身を固めていると、山田らしき少女の後を追ってきたであろうもう

一つの人影が現れる。

顔を見ると、すぐ虹夏さんだと分かった。

「ちよ、リヨウ！やめなつて!？」

「久々の前田だー」

虹夏さんが山田を引き剥がそうとする。

だが、山田は抵抗を強めるように俺の腕を抱く力をより強めた。

本当に何事なんだ。

俺には一片も理解ができない。

山田の頭を掴んで引き剥がそうと試み……あ、コイツ華奢で意外と力無い、コレ本気で突き放したら危な、怖いしやめよう。

「あの、虹夏さん。これは？」

「ごめん、コレ私のせい」

「何したんだよ」

「いやー……リヨウも私のところでバイト始めたんだけどね、勉強との両立が難しかったみたいで、私が必死に詰め込もうとしたら壊れた……」

「壊れてるのか、コレ」

眩しい笑顔だ。

普段の山田とは違って表情筋が活きている。

ただ通常時を知る者からすれば恐怖でしかない。

触れられている部分に鳥肌が立ち、先刻から右半身だけ震えが止まらない。明らかに今の山田に対して体が拒絶反応を催していた。

何でも良いから離れて欲しい。

原因は一体何だ？

「それで、今は何してんの？」

「リヨウを元に戻す為に色々……」

「とうとうと？」

「奢りで一緒にご飯食べたたり、楽器屋巡ってベースに触らせて……コレでもかなり落ちていたんだよ!」

「あはは!前田も一緒に遊ぼう!」

「虹夏さんの努力の形跡が見受けられない」

どう見ても落ち着いていない。

頑張つてコレなのか。

以前の山田に戻す……か。

正直、俺の与り知らぬところで起きた事なら無視したいが、ここまで絡まれては逃げる気力も失せる。

それに、さつきから虹夏さんの眼差しが明らかに助勢を乞うている。

この山田を俺が正常に戻せるのか?

もう、このままでも良い気がする。

明るくて可愛い女の子、正直問題無さそうだぞ。

しかし、道理で俺の家に来なかつたワケだ。ここまで変異していたなら、寄生虫山田も人の家には寄生しなくなっても可怪しくはない。

待てよ。

これは俺にとって良いのでは。

「いっそ、このまま放置してみたら？」

「何で!？」

「こっちの方が可愛いと思うし」

「たしかにバイトでは助かるけど!!」

「あと、俺の家にも来なくなるし」

「絶対に二個目が目的でしょ!？」

嫌だな。

折角バイト終わって休めると思ったのに。

すり寄ってくる山田に嫌気が差してきた。離れるつもりが無いようで、いよいよ俺にとつてもかなり邪魔な存在になりつつある。

このままでも問題アリなのか。

諦めの境地に達した俺が嘆息すると、空いている片手を虹夏さんが握ってきた。

「お願い！助けて……私だけじゃ無理なの！」

真っ直ぐ俺を見上げる綺麗な瞳。

やるしかない。

唐突にやる気が出てきた。

「俺にできる事があるなら」

「ありがとう、一郎くん！」

虹夏さんの為にも頑張ろう。

俺は隣の山田を一瞥し、覚悟を決めた。

では、考えよう。

山田が異常状態になった原因は二つだ。

まず普段からやらない勉強に注力した事、そして他人にそれを強制された環境下で過ごした事だ。

これが山田の精神を破壊してしまった。

普段から勉強しろって話だけだな。

「そういえば、テストの結果は？」

「あ、赤点ギリギリ」

「なら、もう勉強はいいののか」

もう勉強する必要は……無い、かも。

少なくとも期末までまだ時間はある。

今は勉強から山田を遠ざける事が最も重要だ。これですでに一つ目の要因によるストレスは解決されたと言える。

次は、『他人に強制された環境』。

山田の精神はこれに順応しようとして壊れた。

正確には一つ目も重なった過負荷なのだが、一つが解消された今はこちらの解決が急務である。

「俺に策があるよ」

「ホントに!？」

「ああ。まず俺の家に向かい、着いたと同時に——呪文を唱える」

「呪文……?？」

「それで決着はつくはずだ」

虹夏さんに言うと、彼女が希望に満ちた眼差しで見上げてくる。

ここまで親友に心配させるなんて。

正気に戻ったら、山田に説教をくれてやろう。

「前田、何して遊ぼっか?」

だから、それまで黙ってて。

♪ ♪ ♪ ♪

俺は山田を引き連れて家に戻った。

一緒に来た虹夏さんは始終不安げである。

「本当に治る？」

「俺の見立てが正しければ」

俺だって不安だ。

正直、確実性は無い。

こんな山田を見るのは初めてだし、途中で投げ出したいくらいに面倒くさいというの

が素直な感想だ。

家に着いた山田が不思議そうに周囲を眺める。

なぜ招かれたか、分からないようだ。

よし、準備は整った。

過度なストレスで壊れた山田。

そんな彼女に必要なのは、休息である。

勉強をしない。

楽器に触れる。

でも、それだけではダメだ。

俺は山田の両肩に手を乗せ、彼女の耳元に顔を寄せる。

山田が怪訝な顔で俺を見た。

コイツの意識が俺に集中した——ここだ。

「ここは親もいないし、気軽に寛げる。しかも今晚はハンバーグが出て、且つ俺のベッドまで使えて朝まで眠れる。——オマエは自由なんだ、山田」

用意していた言葉を、ゆっくりと丁寧に伝わるよう話す。

すると、山田の顔から——笑顔が消えていく。いつもの無表情に戻っていく。

その変化を隣で具に見つめていた虹夏さんの表情に驚愕の色が滲んだ。

山田がその場に膝を突いて床に倒れ伏す。

表情どころか力まで抜けたようだ。

顔色を悪くして、小刻みに震えながら救いを求めるように俺たちへと手を伸ばしてくる。

「な、何か、体中が痛い……」

呆気に取りられる虹夏さんが、錆びついた人形の如くにギギギと首から変な駆動音を立てて俺に振り返る。

「どうやら成功したようだ。」

俺は今の内に料理を進めようと、キッチンへと向かった。——が、肩を掴んで止められる。

虹夏さんが俺と山田を交互に振り返った。

「いやいや、説明して！」

「ん？」

「どうしてリョウが戻ったの!?じ、呪文ってそもそも何!？」

「そんな特別な事はしてないぞ」

説明しよう。

山田を苛んでいたのは、山田自身だ。

勉強しなくてはならない、その為に趣味を封じてひたすら勉強に打ち込む。それも自主的ではなく他人から強要された環境で、山田は壊れたのだ。

ストレスで精神が崩れた。

その時、山田は失ってしまったのだ——『自由』を。

だから、いくらご飯を食べさせようが楽器に触れさせようが正常な状態に回帰しない。

それもまた、虹夏さん……他人に連れられてやってきた事だ。

そこに山田の意思が介在していない。

ならば、一度手放すのだ。

山田の悠々自適に過ごせる環境に放り出す。

そこで山田自身が改めて『自由』を見つけ出せれば、直る。

以前に言っていた。

『——実質、ここは私の家では？』

アイツにとって、ここは自由な環境らしい。

そこに投下し、あとは放置するだけ。

飯を出して、悔しいがベッドさえ譲ればヤツは元通りになる——というのが俺の推測だった。

結果を見れば、見事に的中している。

「な、なるほど」

「ああ」

「これって、つまりリヨウは戻ったって事だよね！」

「うん、俺という名の犠牲で」

我ながら捨て身の作戦だった。

「え、じゃあ何でリヨウは瀕死なの？」

「我を忘れて動いた結果だ」

「テンションだけでこんな風になるのって!？」

「よほど追い詰められてたんだな」

「ごめんリヨウ!!」

山田から視線を切って、改めてキッチンに向かう。

ハンバーグって意外と時間かかるし。

出来上がったとして、おそらく十時以降になってしまいうだろう。かなり遅い晩飯にな

るがバイト後な上に山田はこの時間帯の食事は慣れてる……俺の家で。

でも、問題は。

「虹夏さんはどうする？家まで送ろうか」

「あ、私も作るの手伝うよ」

「でも」

「リョウのアレは私の責任だしね」

責任をしつかり取る。

山田の口からは一度も聞いた覚えもない。

頼もしくて胸に響く言葉が胸にじん、と沁みる。

実際、虹夏さんは良い事をしたただけだ。諸悪の根源は、日頃から勉強を疎かにし、勉強するだけで壊れた脆弱なアイツが全面的に悪いまである。

期末前にまたこうならないと良いけど、きつと無理だな。

「じゃあ、ついでに虹夏さんも食べてく？」

「えっ？」

「もう家で晩飯用意してた？」

「あ、いや全然！いま家に連絡するね！」

虹夏さんがスマホに高速で何かを入力している。

よほど家族に心配をかけたくないのだろう。

俺はキツチンに立って、早速ハンバーグ作りに取り掛かった。

これで面倒事から解放……：されはしないが、虹夏さんも落ち着けるようなので良しとしよう。

二人で談笑しながら料理を進めていると、復活したであろう山田が床を這って現れる。

その顔は、やはりいつも通りの無表情で。

「前田、ハンバーグまだ？」

——いつも通り凶々しい寄生虫山田だった。

満腹になって、山田は機能を停止した。

今はパジャマ姿の虹夏さんの膝枕で熟睡している。

人騒がせな上に羨ましいことこの上ないヤロウだが、本人としては相当のエネルギーを消費していたようで、ベッドに行き着く間も無く倒れた程だ。

実際、人の膝って寝にくいよな。

男性だろうと女性だろうと硬いし、あと何気に位置が高くて首がツライ。

一回、美智代さんやひとりがやってくれたけど寝るのは無理だった。……うん、ふたりくらいの高さが丁度いい。

「あははははっ！無理、お腹が……！」

「面白い？」

「うん、最高っ！あれ、これ何て映画だっけ」

「『ピン〇パンサー』」

抱腹絶倒の虹夏さんは疲れなんて感じない。

今観ている映画『ピン〇パンサー』だ。

最初見た時から衝撃は凄まじく、シリーズ物だが一向に勢いが衰えたことはない。最初から最後まで笑わせてくれる。

今日は色々疲れたので、何も考えずに観られる作品を選んだが、どうやら好評のようだ。

「あー、面白い。くふふ」

「お気に召したようで何より」

「……良いなあ」

「ん？」

虹夏さんが目尻の涙を拭って眩く。

「普段、こんな風にリヨウと過ごしてるんでしょ」

「まあ、たしかに」

良いかどうかはさておいて、大体こんな感じだ。

風呂に入って飯を食って、映画を観る。

山田が泊まる時は、お互い好きな時間に床に就くが、大体はしっかりと最後まで鑑賞したりするので解散が遅い時間になる。

……何気にシャワーを借りて、パジャマに着替えた虹夏さんも今日は泊まる予定らしい。許可してないんだけどな。

「一郎くん、甘すぎるよ」

「え？」

「リヨウとは、どこで知り合ったの？」

「……元々同じ中学だったけど名前を耳にする程度でさ、顔を合わせたのは春休みが初

めて」

「へー」

「それから……」

「それから？」

「……色々あつて」

「その色々を知りたいよー！」

虹夏さんが俺の袖を掴んでぐいぐいと引つ張る。

別に話すことでもないしな。

その割には話すと長くなるので『色々』に凝縮する……使い勝手のいい言葉だ。

「でも、ホントに甘やかしすぎー！」

「……そう？」

「私も何となく泊めちゃうの許してるし、普段のリョウだつてそう。バイト尽くしなの
にこうやって人の面倒まで見て、いつか体壊すよ？」

「まあ別に、いつ死んでも良いように生きてるし」

「……………」

素直な気持ちを言葉にすると、虹夏さんが嬉しそうに目を細めた。

ん、今喜べるポイントあつたかな。

「でも、私は一郎くんが心配だな」

「……………」

「もっと楽しく生きて欲しい」

「生きて、欲しい？」

そう思わせる価値が俺にあるのか？

適当を言ってるんじゃないかと、若干疑心暗鬼になって虹夏さんを思わず睨んでしま
う。

すると、袖を引く手がそつと離れた。

「だから、本当に大変な時は私を頼ってね」

「……………」

「いつでも助けるから、絶対に」

虹夏さんが真つ直ぐ俺を見て告げる。

……………よく、分からない。

ただ、虹夏さんの瞳は今まで見てきた人たちとは違う感情、いや予感を覚えた。

この人に頼つたら、その時は終わり。

別に虹夏さんが破滅に俺を導くんじゃなくて、一度彼女に寄りかかったらそのまま依
存してしまう危険な香りがした。

だから、堪える。

胸の奥から出そうだった何かを押し殺す。

「まあ、もしもの時は」

「うん。絶対によよ」

「た、多分」

「絶対によよ」

「き、きつと」

「絶対」

「ぜ、絶対」

虹夏さんが満面の笑みになった。

天使っていうより、この人は麻薬な感じがするな。

極力、虹夏さんには頼らず生きていこう。むしろ、彼女に頼られるくらいの人間になろう。

「でも、本当に心配だなー」

「ん？」

「だって、この調子だと一郎くんってば絶対にリョウ以外にも気を許して変な人を家に入れそう……」

「まさか」

そんな事は絶対がない。

山田は例外だ。

コイツみたいにな、出会うて直ぐの他人を家に入れたりなんて――。

「少く年々！おねーさんはお腹が空いたよー！」

ク
ソ
○
ル
中
が
。

噛み跡と爪痕

バイト帰りに夜のスーパーに寄る。

今日の飯は何にしようか。

ようやく山田から解放された日だから、少しだけ自分へのご褒美に凝った物を作ろうか。そんな風に考えるが、休息を求める体の悲鳴にその欲求も埋もれていく。

本当に面倒だった。

山田が正常な状態に復帰はした。

その反動か、しばらく俺の家から学校に通うという暴挙に出て心底うんざりさせられたのだった。

もう二度と厄介事など抱えるものか。

俺は必要な物を買ってスーパーを出す。

もう、今日は適当に簡単なものを作って寝よう。

明日は学校もバイトも休みだし、朝に起きて洗濯を済ませたら二度寝を決め込んでや

る。

そう決心した帰途で――。

「んえへへへひ……」

道端に寝ている女性を発見した。

髪をサイドテールにした女性が、諸肌脱ぎにしたスカジャンの隙間からキャミソールワンピースの肩紐もズレて露わになった白い肌を大胆に晒している。

新車のバケモノだろうか。

それに、妙な既視感があった。

ああ、『あのとき』によく似ている。

それに、ギターケースを大事そうに抱えていた。

見捨てようかとも考えたが、女性が夜道に一人で寝ているのも危険だ。

何より、アイツによく似た雰囲気がある。

このまま素通りすると、三日ぐらい引つ張る後味の悪さを予感した。

「あの、大丈夫ですか？」

「ん……はれ〜？ナンパ？」

「お疲れ様でした」

もういいや。

俺はその場から去ろうと前に踏み出し——た右足が動かなくなり転倒する。

何事かと足元を見れば、足首を掴まれていた。

ずりずりと、這いずりながら女性が肉薄してくる。

その様はまるで最近見た海外ドラマ『スー○ーナチュラル』の天使戦にも似た不気味さがあって、思わず情けない悲鳴が口から漏れた。

どうしよう。

そのまま倒れた俺の胴に女性が馬乗りになった。

「少年、おねーさんに手を出すのはまだ早いぞお！」

「はい」

「反省したかア〜？」

「はい」

俺は頭を抱えて防御する。

何からつて、この現実から自分をだ。

「よーし、おねーさんは優しいから許そう！」

「はい」

女性が胴体の上から退く。

俺は極力、身なりを素早く整えて彼女に背を向けた。

もう起きたようだし、後は大丈夫だろう。

早足でその場を離脱し、家まで向かう。

今日は災難だな。

何で人を助けようとしたら酷い目に遭うんだろうか。手を出した責任というのは仕方ないだろうが、毎回想定を上回ってくるのは神経が保たないので勘弁して欲しい。

もういい。

飯とか明日にしよう。

今日はゆっくり休んで……？

「……」

……後ろからずっと足音がする。

俺が振り返ると、さっきの女性がいた。

赤ら顔でにんまりと笑っている。

「何ですか」

「ゴメン、財布失くして家に帰れない！電車賃貸して！」

「知らない人にお金は貸したくないです」

「絶対返すから！」

「嫌です」

「もー、じゃあコレあげるから頂戴！」

女性がスカジャンの中に手をつ突つ込む。

もう少しだけ自分の格好に気をつけて欲しい。

さつきから目に毒な光景が繰り広げられており、俺は直視できず夜空を見上げる事にした。……あ、秋空って澄んでて綺麗。

びらり、と面前に何か差し出される。

これは——ライブチケットというやつか。

受け取れば終わりだが、少し湧いた好奇心に背中を押されてしまった。初めて手にするチケットを矯めつ眇めつし、女性へと向き直る。

今度は掌が差し出された。

てへ、みたいな笑い方をしている腹立つ。

ライブ……か。

山田の事で少し興味はあった。

ライブチケットを見れば、開催日はちょうどバイトも空いている日だ。

……まあ、これも何かの縁か。

俺はチケットに表記されていた代金と一緒に電車賃を渡す。
すると、女性が目を輝かせた。

「これでまた飲めるぞー！」

「帰れ」

こんな大人になりたくはない。

♪

♪

♪

♪

その一ヶ月後。

泥酔お姉さんこと——廣井きくりは俺の家に行った。

用件は俺に金を返しに来たらしいが、何故か俺の家に酒臭い匂いが充満している。酒気にてられた赤ら顔で、きくりさんが新たな酒パックを呷る。

「ふへーっ！ライブ後の酒サイコー」

「はい」

「盛り上がってるか少く年々」

「はい」

「いへへ、壊れた人形みたい」

「はい」

俺は卓上に料理を運ぶ。

酒の肴になるように、きゆうりの塩昆布おかか和えを提供した。

なぜ俺が酔いどれの介抱をしているか。

それは、今日あったライブに起因している。

俺はきくりさんに渡されたチケットを手に、新宿のライブハウスを訪ねた。

初めての経験で少しドキドキもした。

だが結論から言うと、感想は最高の一言に尽きる。

きくりさんの『S I C K H A C K』という、四苦八苦に因んだであろう如何にも苦勞

が絶えなさそうな名のバンドは、かなり人気らしい。

実際にライブハウスには大勢の人がいた。

ドラムもギターも、音楽をあまり嗜まない俺にとっては衝撃的なもので、最後はリズムに乗り客の一人として歓声を上げていた。

何より、凄いののはきくりさんだ。

酔い潰れた時とは全く違う。

きくりさんはボーカルも務めている。

バンドのリーダーだから目立つのは当然だが、それにしたって異様な輝きっぷりだった。

聴いた者の意識を掴んで放さない歌声とドラムやギターの音を支える巧緻なベース捌きで高い空間演出能力を発揮しており、観客一同をあつという間に虜にする。

一緒にいて気分が高揚し、その場に留まりたいと思わせる力。

あれを一種のカリスマ性と言うのだろう。

初めてライブを目にした者としては最高としか言いようのない内容だった。

本当にカッコ良かった。

まあ、ライブは良かった。

だから、眼の前で飲み腐るこの女性をあの天才ベーシストと同一人物と見做しているのか疑問を呈するのだ。

俺の冷めた視線にも気付かない。

きくりさんはきゆうりを齧って身を震わせる。

「んまー！キミ料理うまいね！」

「はい」

「いや、ごめんね？わざわざお金返すだけじゃなくてシャワーまで貸して貰ってエ。私のアパート風呂無しだからさ、あはははははは！」

「はい」

認めたくない。

ベーシストってクズばかりなのだろうか。

俺も晩飯を食べつつ物思いに耽る。

そうか、彼らはステージ上だから輝けるのか……外に出れば生身の人間、ライブ中の姿だけで色々と幻視してしまう俺たちにその姿は理想を裏切る物であるのも必然か。

過去は戻らない。

俺は選択をミスしたのだ。

「ねー、少年」

「はい」

「私のライブどうだった〜？」

「控えめに言って最高でした、ライブは」

「だろ〜？」

きくりさんは誇らしげに胸を張る。

この人、自分が薄着なの理解しているのだろうか。

酒を飲んでないのに顔が熱くなる。

「あれ、少年。名前は何だっけ？」

「前田一郎です」

「へー、ポジティブで男らしい名前ー」

「どうも」

「今日はライブ観に来てくれてありがとうがとねえ。どう、ファンになった??」

「ライブだけ観てれば」

「いえーい、ファンゲット〜！」

話を通じない。

現在進行形で幻滅していることを知らないようだ。

ベースストって、みんなこうなのか？

俺の知るヤツも、校内で見せる姿や演奏する時の雰囲気は人を魅せる物があるのだが、いざ会話を始めると予想を下回ること頻り。

意外性の塊なのは間違いないが、これが良い方向に展開した事は稀だ。

お陰で今のところ迷惑しか被っていない。

「あ、少年もお酒飲む?」

「少年に酒飲ます気ですか」

「だって、もう飲めそうな感じ醸し出してるもん」

「大人びて見えると」

「大人には見えないけど飲めそう!」

「ダメ人間かよ」

ぐびぐびと酒を通す喉の音がする。

消臭頑張らないと。

「うーん、居心地いいなあ」

「居着いたら警察に引き取って貰いますね」

「もうここに住みたいーい」

「二匹もいません」

「既にもういるんかい!」

あははと笑いながら俺の頭に手刀をかます。

分かった、居酒屋のバイトだけは将来絶対にしないと誓おう。

全員がこんな人とは思えないが、飲酒した後になる絡みされるリスクがあるのなら、是が非でも回避したい。

この経験は次に活かせ。

「少年も寂しそーな顔しちゃって」

「はい」

「お酒飲めば全部忘れられるぜー？」

「はい」

「ライブ、楽しかった？」

「……はい」

「お、ホントっぽい反応。私は少年みたいな子に夢を見せる瞬間が二番目に好きだからねー」

「一番は？」

「迎え酒ー!!」

「あ、はい」

一瞬でもカッコイイと思った自分を埋めたい。

「自棄になるなよ、少年」

「……………」

「キミみたいなタイプって、世渡り上手な感じがするけど自分に一番厳しいからさ。寂しい時は寂しいって口にしなよ」

「……………」

「ポンと勝手に人を家に入れたって紛れるもんじゃないし。おねーさんでも良いけど、もっと身近な人に甘えられるようになったら良いね」

俺が寂しがっている？

何をどう観察したらそんな考察結果に辿り着くのか意味不明だ。

むしろ、独りに慣れているし、最近は一になれない事が苦痛ですらあった。山田がよく家に来るのを嫌に思うのもそこに端を発している。

でも、俺が俺自身をすべて理解してるワケじゃない。

この人には、俺には見えない俺が捉えられているのか。

……………この人、やはりただ者ではないのかな。

まあ、酔っ払いのセリフなので今一説得力が無い。

「第一、知らない人を家に上げて一晩泊めてあげるなんて無用心だぞ？私が悪い大人だったかどうか？」

「悪い大人というかダメな大人なので」

「焼酎も飲んでやるー!!」

やめてくれ。

また新たな酒が解き放たれ、きくりさんの喉を通る。

俺もいい加減に相手をするのがつらい。

もう頼むから寝てくれ。

俺の背後に移動し、俺の頭を抱き込むように腕を回したきくりさんに揺すられる。

「またおねーさんのライブに来な」

「え?」

「解決にはなんないけど、また夢見せてあげるよ」

……………

こういう事をサラツと言える辺り、バンドマンって何かカッコいいよな。俺だったら理性が飛んでる状態ではないと、絶対に面と向かって言えない……あれ、この人いま理性あるのかな?

何か、彼女の態度も酒の力な気がしてきた。

でも、ライブ自体はまた観に行きたい。

「じゃあ、また観に行きます」

「よし、少年のために金欠だろうが次のライブまで生き延びてやる〜！」
「節約しましょう」

「そんなんロックじゃなーい！」

「どうしようもねえな」

やっぱり駄目だ、この人。

「むおー、私に優しくしろ社会ー！」

「はい」

「少年も私を労れー！——ガブツ！」

「ぎゃあっ!!」

首筋に噛みつかれた！

酒飲んで騒ぐだけじゃなく、暴力まで！

いい加減に叱ろうかと振り返った時、後ろの床でばたりと盛大に倒れる音がした。

きくりさんが床に大の字で倒れ伏している。

……………取り敢えず、ベッドに運ぶか。

そして、これから二度と会いませんように。

翌日、きくりさんから連絡が入った。

ライブの日を教えてくれるのは有り難いが、その後に来るのは大概は酔ってて何を伝えたいのか分からないメールばかり。

山田が寄生虫なら、あれは毒虫だな。

また巻き込まれないと良いけど。

「……前田」

ソファアーに腰掛けていた俺の背後に山田が立つ。

「今日、何か部屋臭い」

「そうか？」

「これは、お酒……………？」

「え、あーそれか」

「前田。この歳で飲酒……………ロックじゃん」

ロックって時折だが型破りという意味で引用されるイメージがある。

型破りは型破りでも、未成年飲酒はただの犯罪なのでバッドイメージしかない。

山田がキラキラした目で両手を差し出してくる。

この家にお酒はありません。

第一、オマエに飲酒なんてさせたら碌な事にならない。成人して、且つ俺がいない場所ですんでくれ。

「違う。昨日、酔っ払った女の人を介抱したんだ」

「え……………」

「道端で寝てるし、流石に倫理的にも危ないと思って家で一泊させたんだよ」

「……………」

山田の手が首筋を撫でる。

くすぐったいのでやめて欲しい。

だが、その指先が上に向かっていく途中で痛みを訴える箇所が一点だけあった。

「いてっ」

「この噛み跡」

山田の指摘であつとす。

そういえば、昨日きくりさんに噛まれたんだ。

すっかり忘れていたが、あの後ベッドに運ぶまでの間にも腕をがしがじ齧られた。

理性を失うとカニバリズムに目覚めるらしい。

そういうえば、題名は忘れたけど目を失った地底人に襲われる映画があつたよな……また観てみるか？

たしか、『ディ〇ント』って題名だったような。

俺は立ち上がって、棚を漁る。

あつた。

シリーズ物だが、俺はたしか一本しか観ていない。久しぶりに最初から観てみよう。

「何これ」

映画の題名を思い出そうとしていると、山田の冷たい声が降ってくる。

その間も、彼女の指が執拗に傷跡を撫でていた。

地味に痛いのでやめて欲しい。

まだ噛み跡が気になるのか。

いや、人間普通に過ごしてたら首筋に噛み跡なんて付かないから気になりはするだろうけど、正直あまり言及したくない。

「酔っ払いに付けられたんだよ」

「……ベッドからも酒の臭いがしたって事は、そういう事か」

「どっとういこと？」

「前田のロック、私は嫌いだな」

「急にどうした」

何でもかんでもロックで片付けないで説明して欲しい。

顔を擧めた山田が噛み跡がある部分に爪を立てた。

痛い。

身をよじって躲すと、不満げな顔をされた。何故？

「前田、変な人をすぐ家に上げたら駄目だよ」

分かった、ベアシストはもう上げない。

おまけ

去年の冬。

私——後藤ひとりは居間にいた。

隣では、恒例の如く我が家に遊びに来た親戚のいつくんがいる。

彼は両腕を広げて構え、こちらに向かつてよたよた歩いてくるふたりを迎える。

「おいで、ふたり！」

「きやはは！」

必死に歩いて彼の体に飛びついたふたりの矮軀を、いつくんが逞しい腕で抱き上げる。

なんて尊い光景、これが命か。

耳元で弾ける無邪気で幼い声は、これから失われていくであろう、子供だから満ちている物に漲っていた。

ああ……私もお腹に戻りたい。

後ろで見守っている両親の視線が生温かい。

「面倒見てくれてありがとう、一郎くん」

「一郎くんのお陰で、ひとりも大分マシになったわ。……もつとしつかりして欲しいんだけどもね」

「はは……」

両親の評価に思わず顔が引き攣る。

だ、だよね。

私なんてまだマシってだけで、ゼロにも立ててないマイナス人間です。その内、物質としても形を保てなくなるんですよね。

「いや、ひとりは生きてるだけで偉いですから。これ以上を求めるのは傲慢ですよ」

血を吐きそうになった。

面食らって両親も固まっている。

それにしても、いっくんと戯れているふたりは楽しそうだな。……もう一時間以上は一緒に遊んでいると思う。それくらいやると、普段なら疲れて眠ってしまうのに。

そういうえば、私まだいっくんとそんなに話せてないな……歳が近くて私が話せる数少ない人間なので彼との会話は貴重なのだ、私のメンタルケアに。

じつと見ていたら、何かを感じ取ったいっくんがふたりを床に下ろした。

……何だろう？

私が首を傾げていると、唐突にいっくんが私を抱きしめ………づえっ!!!?

あわ、あわわわ!!

な、何なになになになになにに!!?

ぐ、と体を抱く腕に力が入る。

あ、コレ、まずい、アレが来ちやう……。

「ひとり、心配するな」

「あ、あが、あががががが」

「ひとりが生きてるだけで救われる人間もいる、主に俺とか。つまり、ひとりは生きてるだけで偉いんだぞ。無理するな、ゆっくり自分のペースで生きるんだ」

「ひううううううッ………!!」

全力で私を甘やかすいっくんの声がする。

それをされると、ポワポワする。

しかも何か、お腹の奥が熱くなってどうにかなってしまいそうだ。

嫌だ、この感覚怖い!!

で、でも突き放したらいっくん凄い落ち込むから出来ないし、た、た、助けて……！
もう何か、よく分からなくなってきた……………

「む……」

足下でふたりが不満げにいっくんのズボンの裾を引っ張っている。

それに気付いた彼が、ようやく私を解放した。

ふたりに構い始めた彼から、へ口へ口になって私は椅子に座るお母さんの膝の上に顔を伏せた。

「い、いっくん無しじゃ生きられない体になるところだった……」

「もう甘えていいんじゃない？お母さん大歓迎よ」

「そうだな！父さんも晴れて一郎くんが我が子になるならウエルカムだぞ」

だ、駄目だ……環境が逃してくれない。

私が顔を上げて、改めていっくんの方に向き直る。

すると。

「いや、俺より良い人間はいるので、ひとりはその人と結婚すべきですよ。……まあ、俺よりひとりの良い所を多く認識しているか、或いは俺も知らない部分を知っていないければ絶対に許しませんがね。仮に失格した場合はひとりと過ごした時間の秒単位×津軽海峡三周させます」

あ、もう駄目な気がする。

俺はロードハウナナフシ

「ねえ、一緒に食べない？」

昼休憩の時間だった。

教室を訪ねた虹夏さんから食事に誘われた。

その隣、ぼーっと草を食べようとする山田……の手を掴んで止めて、野草を無理やり取り上げてから俺のカバンに入っていたサンドイッチを代わりに口へ突っ込んでおく。

また余計な物を口にしようとしやがって。

十二月初旬だが、もう金欠なのか。

コイツ、いつも月末に小遣いが出ると言っていたのにそこから数日間何に費やしたらそうなるのだ。

「節約しろって言ったろ」

「食費を節約してる」

「努力のベクトル間違えてるから。困ってても、もう飯出さねえぞ」

「その時は死因が前田になる」

「不吉なこと言うな」

本当に度し難いやつだ。

この世にこんな斬新な脅し方があるだろうか。

山田の相手はしてられん。

そういえば、昼食に誘われたんだった。

改めて虹夏さんに向き直ると、見開いた目で俺を見つめていた。

え、山田は虫だから草を食わせておけと？

意外と鬼畜だな。

「虹夏さん？」

「……ううん、仲良いんだなって」

「前田と私は以心伝心だから」

「俺の意思が伝わった記憶ないんだけど」

泊まるな、って言っても泊まるし。

今まで山田がド天然で鈍感だから俺がどれだけ嫌がっても伝わってないのかと思っただが、仮に本人の言葉通りに以心伝心ならガン無視を決めてたって話になる。

なるほど、処刑しかないな。

「俺も一緒に昼飯つてこと？」

「そう！一郎くんと仲良くなりたいたいし」

「……」

眼の前で虹夏さんの笑顔が弾ける。

それに見惚れていると袖を引かれた。山田が俺をジト目で睨め上げている。

気を悪くしたようだが、原因に皆目見当もつかない。

「何だよ」

「次のサンドイッチまだ？」

「もうあげません」

「ごちそうさまでした。……今日の私の食事、終わり」

「ツ黙って食え」

合掌して食後の礼をする山田の口に新たなサンドイッチ一切れを渡す。

嬉しそうに食べ始めた彼女にため息が出た。

今日の昼食はコイツに全て吸収されそうだ。

あれ？

そういえば、山田はいつも虹夏さんの手料理弁当を食べていると聞いたことがある。

彼女と一緒になら、その弁当を貰っているのではないだろうか。

「虹夏さん、コイツって弁当は……?」

「今日、私が寝坊しちゃって」

「ああ、それで」

「私は購買でご飯買えたんだけど、リヨウはお金が無いから……うう、ごめんねリヨウ」
「いや、虹夏さんは悪くないでしょ」

「だから、前田のを貰いに来た」

ピースサインをしている山田の頭を掴んで揺らす。

飯を奪われた俺の気持ちを全く考えてないコイツ。

何で悪びれもなく俺の飯を集りに来たんだ。

「わ、私は違うよ！普通に一郎くんにご飯したかっただけだからー！」

「虹夏は前田目当てなの?」

「い、言い方!」

よく分からないが、囁しいことこの上ない。

俺はカバンからサンドイッチを入れたパックを取り出して山田に渡す。

仕方ない、俺も購買で買って食べよう。

財布をポケットに入れつつ、何をかうか考えた。

「一郎くん?」

「俺、自分の分を買ってくるから。悪いけど、二人ともここで先に食べててくれ」

「買わなくていいよ、前田のサンドイッチあげるから」

「夜道に気をつけるよオマエ」

山田の性格は凶々しいで形容できるレベルを超えた。

どうやつても俺の中の殺意を増幅させる。

最近はまだ追っ払う事よりも、どうやつたら社会の目を掻い潜って山田を始末できるかを思考している自分がいる。人には限度というものがある、そろそろ堪忍袋の緒が切れそうだ。

く、自分を抑えられない。

頼むから俺を犯罪者にしないでくれよ。

俺は二人に断って購買部へ向かった。

昼はあまり重たい物を食べたくないので、常にサンドイッチかパンにしている。

当初は弁当はコスト的にも優しいが、それをやると調子に乗って山田が自分の分も要求してきそうだからやめた。

でも、購買部より作る方が安い。

そこで結局サンドイッチやパンに妥協した。

妥協しても奪われる事はあるけど。

そんなわけで、いつもパンばかりを食べているから米付き生姜焼き弁当を購入した。習慣を破るこの瞬間に異様な背徳感を覚える。

味をしめてまた買ってしまいそうだ。

教室へ戻れば、山田が話しかける虹夏さんの声にうんともすんとも言わずサンドイッチを食べるのに夢中になっている。

コイツ、少しは反応してやれよ……。

注意しようとして後ろから声をかけようとして。

「ん、おかえり」

それより先に山田が振り返る。

「うわ、急に動いた」

「前田の気配はなんとなく分かる」

「どんな気配だよ」

「あつたかくて大きい感じ……ロードハウナナフシみたいな」

「ロードハ……何て？」

「カツコいいナナフシ、昨日テレビで観た」

「またテキトー言いやがって」

どうせ、いつかのサウジアラビアの格闘技みたいになりもしないヤツなんだろ。

そう思つてスマホで検索してみた。

ほら、やっぱりいな………いたア!!!?

え、凄………何これ。

黒光りするフォルムに、枝や葉に擬態する一般的なナナフシを想像していた俺からすれば、その色から鎧を連想してしまう肉厚な胴体もさることながら韌やかな足付きに思わず絶句する。

か、カツコいい……。

不思議な虫っているんだな、と素直に感心する。

いや、待てよ。

これのどこが俺なんだろうか。

大きいのは確かだが温かみを感じるかと言われると十中八九首をひねりたくなる。

ていうか、まず虫つてどういう事だよ。

こつちだつてオマエの事を寄生虫扱いなんだが心外にも程がある。

「俺つてこんな風に見えてんのか」

「あまり気を落とさなくていいよ」

「……?」

「いま特に何も考えずに言ったから」

「この教室オマエの血で染めるぞ」

いかん、思わず物騒な発言をしてしまった。

虹夏さんに引かれてないかな……？

そう思い、ちらりと会話に入って来ない虹夏さんの方を盗み見ると、何だか寂しげな目で俺たちを見ていた。

いけない、ずっと放置されて困ってるんだ。

山田ごときに拘うとロクな事が無い。

「じゃあ、逆に虹夏さんはどんな気配だよ」

「虹夏……？」

「そう」

「いや、前田の気配しか分かんない」

俺限定で気配が捕捉できるのか。

なら、背後から奇襲を仕掛けるのは難しいな。山田を始末する時は、より慎重に手段を選ばないといけなくなる。

いや、違う。

今は虹夏さんに話を振らないと。

話題を探そうと彼女を見て……手元の弁当に視線を留める。

「あれ、虹夏さんも生姜焼き弁当？」

「……………えつ、あ、うん！」

「俺も食べたくて買ったよ、それ」

「ほんと？もしかして、意外と好きな物とか同じだったりしてね」

「それだったら光荣だな」

「そう？えへへ」

虹夏さんが幸せそうに笑った。

俺なんかと同じと言われてこんな反応されたら好きになってしまう。

いや、もう好きだった。

「でも虹夏」

「ん？」

「前田は巨〇好きだから」

虹夏さんが固まった。

俺も固まった。

な、なな何を言ってるんだ。

第一、俺がいつそんな事を言っ——その瞬間、思い当たる節があった。それは何ヶ

月か前、映画ディスクを収納する棚から山田が俺の父の秘蔵物を発見した時のことだ。

あれの題名はたしか……。

「おい、山田それ違うから」

「でもDVDあつたじゃん」

「あれは父親のだから。決して俺の趣味じゃないから」

虹夏さんがいるのに爆弾落としやがって。

そして、問題の虹夏さんは山田のトンデモ発言を耳にしてから真っ白になってしまった。

手を振っても名前を呼んでも反応は無い。

まるで、本当に死んでしまったかのようだ。

「ぶ。ぶ。ぶ。真っ白な虹夏とか傑作」

よし、山田——表出ろ。

今日は色々と散々だった。

なのに、山田は随分と涼しい顔をしている。

今もソファアーに寛いで、俺の料理が完成するのを悠然と待機していた。少しは手伝って欲しいものだが、言っても無駄だろう。

今日はハム多めのデミグラスソースグラタンだ。

後は焼くだけである。

具材を詰め込んだ器をオーブントースターに入れて扉を閉める。後はアラームさえ鳴れば、美味しいグラタンの完成だ……山田の分の。どうやら本人曰くかなり空腹らしいので俺のは後回しだ。

俺の分を作っていると、山田が何か映画を再生し始めた。

内容は……映画『ヴィ〇ット』だ。

「それ、かなり怖いぞ」

「そうなの？」

「オムツのシーンとか強烈だぞ」

「オムツ……………?」

アラームが鳴る。

俺は手袋を装着して熱々のグラタンを取り出し、下に布を敷いて山田の目の前の卓上に供した。

映画の雰囲気壊さないよう静かに行動する。

間もなく俺のグラタンも完成し、山田の隣に座を占めて食事を始める。

静かで、少し暗くした居間。

画面の光が室内を仄かに照らすと、映画館に似た緊張感と迫力が少しだけ再現できる。

映画は中盤へと差し掛かっていく。

こういう映画『エーター』といい、正体を偽って侵入する存在の素性が判った瞬間の恐怖は凄まじい。

きゅ、と袖を引かれる。

見れば、山田の手だった。

びつくりした、こういう映画を見ている時に意識の外から接触されると思わず身構えそうになる。

食事の手も止めて、山田は見入っているようだ。

「前田、これはハッピーエンドで終わる？」

「観てれば分かる」

「バッドエンドなの？」

「不安なのは分かるけど静かに観てろって」

山田がネタバレを催促するので口を閉じる。

そんなハラハラドキドキを乗り越え、映画が終わると山田がぐったりとソファアームに伸びていた。

うん、分かるよ。

こういうのを見ると身近な人間疑いたくなるよな。

「オムツのシーン凄かった」

「だろ？」

山田も共感してくれたようだ。

俺は空になった器を下げる。

もう洗うのが面倒なので食洗機に突っ込んだ。自分で洗った方が速いのだが、もう今日は疲れたので機械に任せよう。

改めて山田の隣に戻ると、彼女は自分のお腹を擦っている。

「グラタン美味しかった」

「あっそ」

「次はシチューがいい」

「オマエのいない日にでも作るよ」

「じゃあ毎日来れば大丈夫なハズ」

「もう自分で作れ」

「前田のご飯が好きだから、自分のは別に」

そんな理由で執着されても困る。

俺がディスクなどを片付けていると、山田がソファーに寝そべる。

お腹いっぱいになって眠くなったのだろうか。

「前田」

「ん？」

「お昼ご飯の時、虹夏もいて楽しかった？」

「え、ああ、うん。そりゃ勿論」

「そっか」

山田が眠そうに目を細める。

「でも、私は前田と二人で食べるご飯が好き」

その言葉の後、寝息が聞こえ始める。

どうやらかなり限界だったようだ。

寝心地が良いのは分かるが、寝るならソファアールではなくベッドか布団にして欲しい。
……ああ、どうせベッドの方が良いんだろうな。

俺は山田を横抱きにして持ち上げ、自室のベッドに寝かせた。今夜は寒いらしいのでヒーターを付けておく。

「おやすみ」



羨ましいって思わされた。

リヨウと一郎くんが話しているのを見て、胸の内が嫌にジリジリとしているのが分かる。

一郎くんは気づいていない。

リヨウを呼ぶ時の声の柔らかさが、クラスメイトや私の時とは少し違うことを。

リヨウも気づいていない。

呼ばれた時に、応える声が微かに弾んでいることも。

私は、それを至近距離で見せつけられた。

別に二人は意図してやってるワケじゃない、普段通りに過ごしている。

だから——なおさら寂しくなった。

しかも、昼休憩が終わって二人で教室に戻る時だってそうだ。

「リヨウって一郎くんのこと好き？」

思い切って訊いてみた。

リヨウはそういうの素直に答えるか分からなかったけど、言わないなりに反応を示してくれると思った。

「前田は友だち」

「えー、ホントに？ すつごく仲良いじゃん」

「うん。仲は良いと思う」

「それだけ〜？」

リヨウの目が私を見た。

「前田を好きなのは虹夏でしょ」

その一言に体が凍りついた。

リヨウは特に何とも思っただけな顔だ。

やっぱり、一郎くんにそういう感情は持ってないんだろうな……って、そこじゃなくて！

ば、バレてたんだ……。

少し恥ずかしくていや、とかあの、とかつい口から変な動揺が漏れてしまう。

すると、リヨウが私の肩にポンと手を置く。

「大丈夫。虹夏は可愛いから」

「えっ、あ、うん」

「前田も虹夏みたいな子好きだと思っ」

「そ、そーかなー?……こ、告白したら付き合えるかな……?」

リヨウが認めるなら、もしかしたらもしかして?

そんな風に胸の内期待が膨らむ。

少しだけ踏み込んだ質問をした、もう好きだと告白しているようなものだけ。

その間に、リヨウは少しだけ黙った。

それから。

「私は応援しないけど、頑張ればイケると思う」

ぴしり、と何処かで音がした。

それと同時に少しだけ可笑しくて笑ってしまっ。

その言葉………何だ、リヨウだって白状してるも同然じゃん。

でも、そうだな、

私も……頑張ってみようかな。

何が悪い・前編

冬休みまで残り僅か。

クリスマススイブを超えれば本格的に始まる。

バイト先の人にはゴールデンウィーク、夏休みやお盆、シルバーウィーク、助っ人出勤に至るまで働いていた分だけ融通を利かせて貰ったので、年始年末は問題なく後藤家で過ごせるだろう。無理だったらバイト辞めてた。

でも、今年はひとりが受験だ。

邪魔しないように後藤家に行くのはやめるべきか。

しかし、生き甲斐である彼らに会えないのは中々に堪えるものがある。

夏にひとりとは会ったけど、冬は冬だ。

どうしたものか。

「前田」

「ん？」

「クリスマスって予定あるの?」

「バイトだな」

「人と会う約束は?」

「何も無いというか何かする気もない」

「そっか」

教室に来た山田に即答する。

当たり前だろ、クリスマスが一番忙しいんだよ。

年末年始の休みを勝ち取るためにも、ここは店長や同僚に媚を売っておくのが最適解だ。現に働き過ぎて店長には最近引かれてる。

働いて何が悪い。

互いに利があるなら構わないだろう。

だが、即答した後になぜか空気がつめたくなった。

特に山田の変化は無いが、周囲からの視線が鋭い。窓際に固まつてる男子数人と教壇を専有する陽キャ女子の眼差しがギラギラしていた。

アレは、敵意だ。

イラツとする。

今のでどうして俺が不興を買わなきゃいけないんだよ。

内心の苛立ちが顔に出ていたのか、さつと集まっていた視線が俺から逃げた。あ、心証悪くした……もう友だち諦めよう。

「クリスマスに何かあるのか？」

「何も無い」

「え？じゃあ、何で俺の予定なんか訊くんだ」

てつきり、クリスマスに俺を使って何かしたいから尋ねたのかと思った。

山田の事だから……駄目だ、想像が付かない。

「前田が独りって知りたかっただけ」

は？と思わずドスの利いた声が出そうだった。

俺が誰かといると何か悪いのかよ。

手に持っているスマホを投げたい衝動をなけなしの理性で必死に抑え込む。危うく教室で怪我人を出すところだった。

クリスマスに一人なのはリア充に非ず、と。

でも言われてみればクリスマスとはそういう日だ。

俺はいつも独りだったし。

バイト先に入店するカップルを羨んだ事は無いし、況してや誰かとそういう関係になりたいなんて虹夏さんが初めてだったからな。

「山田は予定あるのか」

「……私がリア充か気になるのか」

「単純にクリスマスって何してんだろうって疑問だよ」

「私はクリスマスライブ観に行く」

聞くまでもない。

山田は基本的に一人が好きなのヤツだ。

他人の予定に合わせるのも正直苦手という自分本意な人間だから、誰かと過ごすのかという問いこそ愚問である。

「へー、ちよつと羨ましいな」

「まあね」

「ドヤるな。……誰のライブ？」

『『S I C K H A C K』って言う——』

「アー。ウン、ウラヤマシー」

そのライブは予定が空いていても行きたくない。

クリスマス後なんて、特にきくりさんが荒んで暴飲していそうだから、そこで俺が絡

まれようものなら死に至るだろう。

それより、この前のライブで酒掛けられたのは最悪だったな。まあ、それを見越して、雨合羽を着ていたから特に被害は無かったけど。

「俺もそのバンドのライブ観に行つたよ」

「そうなんだ」

「あの人たち凄く良いよな。ちなみに俺はきくりさんのベースが好き、飲酒パフォーマンスは最悪だけど」

「……………ベース」

「山田? ……何で怒ってるんだよ」

「別に」

若千だが眉間にシワがある。

なるほど、怒ってるな。

もしかして、俺にマウントを取りたかったのか。

自分の推しのバンドを布教したかったのに、相手が既にそれを知った上で良さまで理解しているとなれば面白いと思つたのだろう。

浅はかなヤツだ。

いや、もう山田はどうでもいい。

今は年末、ひとりの迷惑になることを勘案して後藤家に行くか否かを考えるべきだ。後藤家には、気遣い0で毎年誘われている。

『一郎くんと遊びたいゲームあるからおいで！』

『一郎くんのお布団新調したの、寝においで？』

『い、いつくんと年越ししたいなって……へへ、何言っただろ私消えたくなくてきたそれでは新曲聞いて下さい』誘い方が気持ち悪くて自分が気分悪くなる私の——』

『いつくんと遊びたい！』

『ワンツ！』

俺に価値を見出してくれる後藤家。

行きたい……が、ひとりの迷惑になってまで自分のつまらない欲求を満たすのは違う。

だが、一年の終わりと始まりにひとりの顔を見ないと俺は生きていけない気がする。俺の中では、ひとりに会う事が初詣も同然なのだ。

駄目だ、幻聴が聞こえてきた。

耳元でいつくん、つて呼ぶ声がする。

行きたいが、迷惑になるなら……。

頭を抱えて苦悩していると、山田が俺の肩を叩く。

まだいたのか。

「なんだよ」

「私のベースとあのベース、どっちがいい？」

何か推しと競い始めた。

まあ、ここは忌憚ない個人的な意見を述べよう。

「え、うーん……山田」

「じゃあね」

「今の質問は何？」

俺が返答するや山田が教室を出ていく。

よく分からないが、なにかに満足したのだろう。

やはり、山田リヨウという生き物は理解できない。



クリスマス当日のバイト終わり。

俺は店のロッカールームで着替えを終えて帰り支度をしていた。

その途中でスマホが鳴る。

……『両親』からだった。

内容は、クリスマスに独りにする俺への申し訳無さと来年の四月には帰れそうなので一緒に過ごしたいという報告だ。

これを見ても、胸が踊らないところが末期だな。

俺は『楽しみにしておくよ』の一文と、それだけだと味気無く嘘っぽいようになりそうなのである程度は言葉を添えておいた。

送信、と。

申し訳ないが、やはり俺は二人の息子にはなれない。

「おーい、一郎」

「はい？」

男子大学生の先輩から呼ばれる。

うわ、陽キャの塊みたいな人だから苦手なんだよな。

俺は舌打ちしそうになるのを堪える。

手を止めて先輩を見ると、ニヤニヤと笑っていた。

「……俺の顔、面白いですか？」

「そんな失礼なこと考えてないって！」

「じゃあ、何でしょう」

先輩はニヤけ面をやめない。

嘲笑ではないとしても見ているといい気分がしないんだよな。

クイクイ、と何やら先輩がホールの方を指差す。

「早く支度済ませろよ——恋人が待つてるぜ」

やや決め声で先輩が妄言を吐いた。

何かのドッキリだろうか。

俺に恋人は過去から現在に至るまで一瞬たりとも存在しな……いや、後藤宅に行った

時ふたりのままごとで恋人役はやったことがある。あの時、何故かひとりが押入から出てこなくなってしまうたが。

ともあれ、先輩は錯乱しているようだ。

「先輩、俺は恋人いませんけど」

「えっ、前田くん本当!?!」

何故か俺が非リアだと言うと、一つ歳上の女子高生の先輩が嬉しそうに訊いてくる。

最近、俺が独りと知ると喜ぶ人間多くないか。

根拠もない嘘で周囲まで巻き込むのは迷惑だから本当にやめてくれ。

俺の言葉に、いやでも!と先輩が狼狽する。

あの慌てぶりは何だろうか。

まさか、本当に俺の恋人を自称する怪しい人間が待っている……?!

もしかして、またアレかな。

最近は減ったんだけどな、宗教勧誘。

俺が長く独りで過ごしているのを近所から聞きつけたのか、週二の頻度で宗教に訪問勧誘してくる人たちがいた。

何で減ったんだっけ。

……ああ、山田がいたからだ。

たしか、昼時に宗教勧誘に来た人に山田が間違つて対応して――。

『どちら様ですか』

『私たち、こういう者でして』

『……宗教？何だ、頼んだピザかと思つたのに』

『え、あ、ちよ!?!』

彼らが訪問する以前にたまには食べたいから注文したピザと期待していたようで、山田は違つと分かるなり即座に扉を閉めてしまったのだ。

その後もインターホンは鳴っていたが、ガン無視してペースを弾いていた。

あれには俺も絶句したな。

……いや、話が逸れた。

まさか、バイト先にまで宗教勧誘に来たのか？

「先輩、それってどんな人でした？」

「可愛い子だぞ。一郎と同じ年っぽかった」

「じゃあ、宗教勧誘ではない……？」

「何を想像してたんだよ!?!」

「違うんですか」

「店外の入口の横でずっと立ってるから、店長が尋ねたら「人を待っているから」って

言つて、可哀想だし中で待つてもらつてる」
同い年の女の子。

まさか、歳の近い信者で攻め落とそうという魂胆なのだろうか。
どちらにしろ、店に迷惑をかけるワケにはいくまい。

疑念が募る一方だが、俺が応対しなくては。

俺は眈を決して、荷物を携えてホールの方へと出ていった。

「あはは……ごめんね、バイト先まで」

苦笑しながら虹夏さんが手を振る。

なぜバイト先に彼女が……？

連絡先は交換しているし、何か用があるなら連絡してくれたら良かったのに。

「虹夏さん、何でここに？」

「リョウウからここがバイト先だつて聞いてて。今日、実は一郎くんと話したい事があつたから……ち、ちよつとサプライズみたいにしたくて」

え、怖い。

何で山田のヤツは俺のバイト先を把握してるんだ。

一回も言った覚えは無いし、アイツが来店した記憶も皆無だ。家にいる時に何か知ったとか……？

それにしても、虹夏さんの話したい事というのが気になる。サプライズという事は、重大発表なのかもしれない。

「サプライズ？」

「……今日、この後って何かあつたりする？」

「バイト後は流石に何も無い」

「じゃ、じゃあさー！」

伊地知さんがぱつと伏せていた顔を上げる。

キラキラとした目と視線が合った。

顔が真っ赤だ。

「良かったら、一緒にご飯食べない？——私の家で！」

この前のお礼もしたいしさ！と虹夏さんが言う。

別に恩に感じる必要は無いが、それは野暮な話だ。

山田もこんな風にお返ししようと互酬性のような物を身に付けてくれたら有り難いが、期待するだけ無駄だな。

しかし、どうしようか。

……。

さっきのメールが頭にチラつく。

「虹夏さんのご家族は？」

「あつ、お姉ちゃんの家にいるかな。それだと、一郎くんは気まずい？クリスマスケーキを三人で食べてみたいな、って思って……一郎くんクリスマスも一人だって聞くし」

「……………お姉さんいるんだ、仲良いの？」

「うんー」

何だ。

この人には一緒に過ごさせる家族がいるじゃないか。

俺なんかより、そっちと過ごす方が価値があるだろう。いつか突然、失ってからでは遅いんだ。

俺の母親や父親みたいに、急に消えたりするかもしれないんだから。

「それで、どうかなっ？」

「いや、遠慮するよ」

「えっ…………」

「折角だから家族と過ごしなよ。それにバイトで疲れてるし、また別の機会が良いかな？」

「あ、と……ゴメンね、わざわざ店まで来て」

「ん？」

俺のスマホがまた鳴る。

ロインだな。

確認すると。

『前田、クリぼっち楽しめよ』

「うるせつ！こっちは誰ともいたくない気分なだけだっつの、望んでクリぼっちなんだよ！」

いけないいけない、山田のメッセージなんかに取り乱してしまった。

取り敢えず、穩便に断って帰ろう。

……………ん？

「あ……………ごめん、なさい……………」

虹夏さんは固まっていた。

顔から血の気が引いていく。

あ、しまった!!

「いや、違う！誘ってくれたのは嬉し——」

「……ううん、私が勝手にやった事だから……気にしないで……うう」

「あ」

虹夏さんの目から涙が溢れた。

え、あ、え……え!?

「ご、ごめんねバイト先まで来て。気にしないで良いから！じ、じゃあ私帰るね！」

「あ、ちよ——」

店の外へと虹夏さんが走っていく。

俺は店側に一礼してから、慌てて追いかけた。

彼女の姿はまだある——遠ざかりそうな背中を必死に追いかけた。幸い、足は長距離も短距離もクラスで上位のタイムなので、彼女を捕まえるのは容易い。

でも……足が思ったより重い。

バイトの疲労、は言い訳だ。

彼女を止めたとして、何を話せばいいか分からない。

また傷つけるだけかもしれない。

でも、ここで逃しても良い事が無いのは確かだ。

「虹夏さん！」

「ツ……あ、あはは！ゴメン、困らせちゃって……でも大丈夫、もう大丈夫だから」

「……………」

「うん」

「……あの、虹夏さん」

「な、何？」

全くこつちを向いてくれない。

女の子を泣かした事なんて昔のひとり以来だ。

どう接していいか、が全く皆目検討も付かない。

でも、虹夏さんをこのまま放置したら関係を悪化させるだけだし……………。

「やっぱり虹夏さんの家でご馳走になってもいい？」

「き、気遣わなくて大丈夫だって」

「いや。よくよく考えたら、帰って飯作るのも面倒だし……だ、誰かとクリスマス過ぎるなんて久々だから緊張して変な空気にすると思ったから断った、んだけど良かったら……気遣いとかはマジで無いから」

それらしい理由を並べる。

その間もズキズキと胸が痛んだ。

しばらく沈黙が続く。

やべえ、空気が重たい……………虹夏さんの顔を直視できなくて思わず視線を逸らしてしまう。

光の緒を引いて車が横を何台か通化していく。

それを見送った後、虹夏さんの手が俺のコートの裾を摘んだ。

「——虹夏、目腫れてるけど……………ソイツ？」

三十分後、虹夏さんの家で彼女の姉を名乗る人物のガンギマリした目で睨まれている。

はい、泣かしたのは俺です……………どうぞ好きにしてください。

俺が悪いから。

何が悪い・後編

「へー、近くでバイトしてんだ？」

「はい」

ケーキを切り分ける虹夏さんの隣で、俺と彼女の姉——星歌さんは机を挟んで正面に座り、ずつとはなしていた。

玄関先よりは幾ばくか対応が優しい。

何もかも虹夏さんのお蔭だ。

彼女が必死に弁解してくれなければ、恐らく門前払いどころかその場で処刑されていた。

「はい、お姉ちゃんのおねえ！」

「はいはい」

「ちゃんと食べてよ」

「コレ酒に合わないじゃん」

「お酒飲まなきや良いじゃん」

「明日何も無いから良いだろ、飲んでも」

二人での会話が始まった。

俺はそつと、空気との同化に努めて気配を殺す。

他所の家にお邪魔するのは後藤家で慣れたつもりだったが、勘違いだと痛感させられる。彼らは親戚、身内という認識だからだけど、ここは俺にとって未知——『友だち』という関係性で招かれた空間だ。

まずクリスマススを誰かと過ごすのが初めてだし。

親戚の家を盥回しにされていた昔は、クリスマスと聞いたら極力はその家の雰囲気壊さないように息を殺し、すぐ自分に宛てがわれた部屋に逃げていた。

実際、嫌な顔とかされたし。

ヤバい、緊張感が凄い。

自分の心臓の音にイライラする。

音立てるな、二人に察知されたらどうする！

「さつきから呼吸止めてるけど大丈夫？」

「大丈夫です、いま再開しました」

「……まあ、同い年の女の子に家に誘われて浮足立つのも分かるけど、そんなガチガチにならなくて良いから」

いや、そういう心配ではないです。

単純に他所の家でご相伴に与る現状に慄いているだけです。

「ほら、ケーキ食べなよ」

「あ、いただきます」

「一郎くん、チョコケーキだけど甘いのが平気だよね？いつもチョコクッキー買ってるって聞いたし」

「それは山田が食べるヤツ」

俺は食べた事なんて無い。

何ならお菓子類も特に食べないのだ。

ただ、菓子を渡すと家に帰ってくれる可能性が微々たる物ではあるが高まるので、山田の為に購入している。

でも、それも最近は効果が薄い。

そもそも山田の目的はあくまで俺の手料理だ。

アイスや菓子などは所詮余興、夜まで凶々しく鎮座している。本当に気分屋なので、いくら媚を売ったって出ていきやしない。

「一郎はいつもクリスマス何してんの？」

「課題やって、映画観て……寝ます。今日はバイトでしたけど」

「サンタは信じてる系？」

「……いえ、流石に」

「だよな。てか、私もサンタ待つくらいなら自分で手に入れて行くタイプだったし」

「お姉ちゃん夢無いよね」

「夢は叶える物だから。叶えて貰う物じゃないんだよ」

「……何かカッコいい。」

俺はキーキから顔を上げて星歌さんを見た。

よくよく見れば、何だかその若干ツンツンしてる斜に構えた態度、クールで可愛いというより渋いと言われる男性に近い大人のシツクな雰囲気がある。

俺の周囲には見なかった大人だ。

少しだけ憧れる。

最近出会った印象的な大人は……。

『迎え酒ー!!』

忘れよう。

見なかった事にすれば良い。

ライブしている時はカッコいいので、そこだけ切り取って記憶を美化しよう。意識的に行うのは少々辛いけど、俺やきくりさんの為になる。

そういえば、伊地知家の大人は星歌さん以外に見当たらない。

二人暮らしなのだろうか。

ここについては踏み込むのは控えた方が良い事情がありそうな予感がする。

更に空気を悪くするようになったら、今度こそ虹夏さんとの関係も終わるし、星歌さんに今度こそ殺られかねない。

「星歌さんって何してる人なの？」

「ふふ。ウチは最近ライブハウス始めたから」

「ライブハウス」

「うん。リヨウもバイトしてるよ」

ああ、なるほど。

前に昼食と一緒に撮った時に、そんな事を言っていた。

山田がバイト……ライブハウスって、接客業だけど愛想よく出来ているのだろうか。笑う事は笑うけど、アイツが業務という枠組みの中で素直に笑顔の人に向けている姿が想像できない。

その点、虹夏さんは大丈夫だろうな。

……あれ、虹夏さんに接客して貰えるのか？

少しだけ通いたくなつた。

「ライブハウスつてどちらに」

「このマンションの下にある。名前は『STARRY』つて言うんだよ、まあ暇な時に覗きに来なよ」

「へえ……」

身近な所にライブハウスがあつたのか。

でも、きくりさん新宿拠点にしているからな。そもそも、そのライブハウスで普段どんなバンドが活動していたりとか分からない。

いや、いつそ好きなバンドを開拓するか。

最近山田やきくりさんの影響で、少しだけバンドという物に興味を抱き始めている。

「最近始めたつて」

「でも、正直もつと人手欲しいんだよな」

「はあ……大変ですね」

「てつきり、今日は虹夏を泣かせた男が来たと思つたけど違うらしいし、じゃあもしかして新しいバイトを引っこ抜いて来たのかと期待したんだけどな……」

「私悪くないよ」

星歌さんが流し目で虹夏さんを見る。

頬をふくらませる妹の様子が面白かったのか、彼女はかすかに微笑んだ。

ツンツンしてるが、やはり仲は良いみたいだ。

姉の開店したライブハウスで働く妹、か。絵に描いたような良い家族だ。

「一郎くん、ライブハウスって通った事ある？」

「実は最近少しライブハウスに通うようになって」

「え、一郎くんバンドに興味あるの!？」

「まあ、山田がよく家で弾いたりするから」

「一郎くんは楽器とかやったりは？」

「……………」

「一郎くん？」

「その……………リコーダーしかない」

それを聞いた瞬間、虹夏さんが察して苦笑する。

元々音楽関係に興味が無かったからな。

山田の影響で少しだけ日本のヒップホップとか聴くようにはなったけど、正直未だに世間の流行には遅れている感じが否めない。

だから人の輪に入れなんでしょうな。

少し教室内でも聞き耳を立てているが、自分だったらついて行けない話題で人が盛り上がる瞬間を何度も見て勝手に落ち込んだりする。

ひとりを引っ込み思案がどうか、山田は協調性皆無だとか言うが、俺も大概だよな。
「そっか、そっか。懐かしいよねりコーダー」

「虹夏さんは？」

「私はドラムやってるよ！」

「へー、カッコいい。じゃあ、もしかしてバンドとかも」

「うん。まーでも、最近解散しちゃって」

「そうなのか」

それは少し残念だな。

「一郎は特技とかないわけ？」

「特技……ですか」

誇れるほどの物が無い。

自信があることなんて………あ。

「人を介抱するのは上手い自負があります」

「何ソレ」

「あー、一郎くんいつもリョウが家に来て面倒見てあげてるの。私もこの前お世話になっただよ」

「ああ、あの時の。一郎の家だったのか」

「そう！一郎くんの料理って美味しいんだよ！味付けとか私好みで」

「へー」

たしかに虹夏さんには好評だったな。

味付けが好み、か。

「いつも独りだから味付けも自分好みにしてるんだけど……生姜焼き弁当の時といい、虹夏さんって案外俺と味覚近いのかもな」

「たしかにー！」

嬉しい発見である。

家庭の味レベルで近いという事実には幸福感が湧く。

山田にしか振る舞っていないけどさ。

「ところで、何で二人は気まずくなくなってたわけ？」

「えっ」

「えっ」

せ、星歌さんが空気プチ壊しに来た。

「いや、その、私が店先にまで連絡もせずって言ったじゃん」

「一郎の方は聞いてないよ」

「……………」

「言いたくないならそれまでだけど、二人つてたしか学校も同じなんだろ。仲良いからわざわざ家に招いたんだし、これから先気ままずくなるの嫌だろ」

「う……………」

「虹夏も無理して笑顔作ってるの見てて気持ち悪いし」

「お姉ちゃん、ッ……………」

「気ままずくて気配殺そうと必死な一郎とか、ちよつとアレだし」

「ヴッ!!」

濁される方がダメージある。

……………話しても良い事は無い。

星歌さん達にとつては他人事だし、それで気分悪くて俺が八つ当たりしてしまったなんて事実を知ったら、さらに嫌だろう。

ちら、と虹夏さんの方を見る。

でも話さないでこのまま放置したら、何かの拍子でまた同じ事が起きなくもない……………

主に俺が原因で。

今回、完全に俺しか悪くないしな。

たまたま虹夏さんがその時に居合わせて、触れてしまっただけの話だ。そこで堪える事が出来なかったのは……まあ山田のメールがあつたとはいえ。

「その、少し家庭内の事情でして」

「……もしかして、ずっと海外出張の親御さん？」

「……俺、元々は前田家の子じゃないんです。実の親二人がいなくなって、方方に預けられたりしたけど何処も歓迎どころか嫌がる人が多くて」

「……………」

「今の前田家が自ら俺を引き取るって言ったなら、絶縁食らってしまつて。二人には感謝してるんですけど、会った時から気遣いばかりでそれがツラかつたし、彼らを家族だと思えない自分が心底嫌でした。……今日なんかはクリスマスと一緒にいられない詫びとかが入ったんですが、それにも良い感情を抱けない自分にイライラしてる時に……」

「なるほどね」

星歌さんが酒を飲みながら耳を傾けてくれる。

何だろう、ペロペロに酔ってる人しか見ていなかった所為なのか、星歌さんの飲酒が凄くカッコよく見える。

これが、真の大人の酒の嗜む姿なのか……？

「要はタイムミング悪かったわけだ」

「いえ、俺が堪え足りないのがいけないし」

「子どもだから人に当たったって仕方ないだろ。まだ高校一年だし」

「でも、人を泣かせました」

「お互いを知らなかったから起きた悲劇だろ。よくあるよくある」

「……本当ですか？」

「ああ」

「目を合わせてもう一度」

「お姉ちゃん、途中で面倒臭くなったでしょ」

何で顔を背けるんだ。

ここまで頼もしかったのに。

「まあ、ともかく今回の事で分かっただろ。後は付き合い方を変えれば良い話だよ。仲良くしたいなら続ける、距離置きたいならそうするだけ」

か、簡単な事のように言うな……。

でも、実際はその通りだ。

「あの子、一郎くん」

「はい」

「今日は本当にごめんね」

「こちらこそごめんなさい。というか、完全に虹夏さんはとぼつちりだから謝らなくて良いよ」

「でも気分悪くさせちゃったでしょ」

虹夏さんの懐が深すぎる。

イライラして人に当たった俺の矮小な器が殊更に自覚させられて心が痛い。

山田にも謝っておこう……心の中で。

「私はこれからも一郎くんと仲良くしたいよ」

「それは……俺も勿論。でも、俺といたらまた——」

「しつこい」

「あてっ」

星歌さんにデコピンで言葉を遮られる。

い、痛い……人にデコピンされたの生まれて初めてだ。

「ううん……一郎くんがそんなに責任感じてるなら、一っだけ私の願い叶えてよ」

「何でもします」

「じゃあね」

虹夏さんがにやりと笑う。

彼女にしては珍しく、悪い感じの笑みだった。

「今度こそ、さん付け無しで名前呼んで！」

言われて、俺は呆然とする。

虹夏さんが名前で呼ぶよう求めて来たが、友だちがいなかったので距離感というのが掴めずさん付けが抜けなかったのだ。……山田は例外、最初からアイツはよく分からないらしい。

う……何か恥ずかしい。

でも、虹夏さんの願いだ。

叶えなければ、むしろ彼女との間にまた蟠りを生む。

「に」

「に?」

「に……虹夏。こ、これで良い?」

「うんっ」

虹夏さ……虹夏が俺の手を握る。

「じゃあ、これで仲直りねー！」

花のような笑みを咲かせて虹夏さんがそう言った。

手を放すと、ケーキを平らげた三人分の皿を片付け始める。鼻唄を歌いながら台所へ向かう彼女の後ろ姿を見て、俺も胸をなで下ろした。

これで、良いんだよな……？

それにしても、虹夏さ……虹夏がずっと無理して笑顔を作っていたなんて気付かなかった。

やはり、姉妹というのは相手をよく見ているのか。

俺にも兄弟がいたらそんな感じになるのかな。俺もよく人を見て、もつと感情を察せる男になろう。

そんな考えで、ちらと星歌さんを見て……視線が合う。

「次泣かせたらギターで一発な」

許されてなかった。

やっぱりまだ無理そうだ。

♪

♪

♪

♪

初冬とはいえ朝も寒い。

「い、生きて帰れた」

伊地知家から帰宅した俺は、玄関を這って移動する。

始終お姉さんの視線が怖かった。

虹夏によく似た……目付きを除いて……姉である星歌さん。

星歌さん怖かったな。

いや、当然の事だ。

自分の妹が泣き腫らした目で帰って来て、隣に知らない男がいたら俺だって訝しむすみません。

全面的に俺が悪いんです。

仲直りはしたけど、無かったことにはならない。ちゃんと自分を改善していかないと。
な。

バイトの疲労とあのメールがあつたとはいえ、山田のメッセージというわずかな刺激で吐き出してしまったのは俺の忍耐力の無さだ。

どんな事があるうと、まず絶対に虹夏の前で吐露していい感情ではなかった。

励め、俺。

取り敢えずシャワーを浴びよう。

それから簡単に朝食を摂ってから、朝の洗濯を終わらせて昼まで寝る。

今日から冬休みに入り、明日さえ働けばもう今年のバイトは終了だ。

そして二十八日から後藤家に行く。

頑張れ、あと少しだけ頑張れ俺……。

「ん、何これ」

居間についた俺は、テーブルに置かれたおにぎりを発見する。

随分と形も不揃いだ……。

おにぎりに乗せた皿の横に置き手紙らしき物もあった。

拾い上げて内容を見る。

『この前のサンドイッチのお礼』

……サンドイッチって、まさか。

俺は思い当たる節があつた。

それは先日の弁当を忘れて俺の昼飯を略奪していった山田である。

おにぎりでお返して。

数は……十六……十六？多いな、オイ。

でも、米は炊いていなかったから山田は自分でやったってことなのだろう。

キツチンの方を見ると……まるで空き巣にでも遭つたかのような荒れ果て様だつた。

おにぎり作つただけなの？

「でも、妙だな」

これは、いつ作られたのだろう。

山田は昨日クリスマススライプに行つた筈だ。

時間的に考えると、俺がいない夜に来ていたのかもしれない。

……まさか！

俺は自室へと向かい、扉を静かに開ける。

ベッドの上では、布団を被った山田が安らかな寝息を立てていた。

なるほど、ライブから直行して泊まりに来たようだ。

俺は扉を閉めて、再び居間へと戻る。

おにぎり、食べるか。

俺は卓に着いて、おにぎりを一つ取る。

塩辛いし、放置してかなり時間が経過したせいか中々に米の弾力がほとんど失われて
いる。

でも、あの生活力0の山田が頑張って作った物だ。

珍しい事に悪い気がしない。

「ん？」

ふと、裏返しになった手紙の紙面に書かれた文を見つけた。

裏にも書いていたのか。

手に取って確認すると。

『嘘つき』

たったそれだけが記されている。

何が嘘つきなんだろう。

取り敢えず、五個食べたところで満腹になった。

オマエは助けず、君は救ける

二十七日。

俺は後藤家に行く準備をしている。

情けない話だが、行くべきか否かを自分では判断できず直樹さんに電話で相談した。世話になる身なので、あちらの家の状況次第だ。

結論から言えば、行く事にはなった。

直樹さん曰く。

『年末年始は一郎くんに会えるのが楽しみなのに！』

どうやら、俺の存在が重大なイベント扱いだ。

楽しみにしてくれているようなので、行くしかあるまい。

ただ、今年は若干楽しめるか微妙だ。

ひとりの受験勉強がかなり困窮しているらしい。

後藤夫妻両名から勉強の面倒を見てくれないかと懇願されてしまったので、身命を賭

して救けに行かなくてはならない。

だから、今日は準備を進めていた。

服や生活用品、それと世話になる食費や水道代を自分で予測し計算した分のお金、あとは土産だ。

お金は、こういう時に普段一切触れずにいる前田家からの小遣いから支出する。土産の経費もここから出してもかなり余裕がある。

……貯めすぎて若干だが通帳を見るのが怖いし。

「前田、何してるの」

「んー、明日から親戚の家に行くんだよ」

「親戚？」

「毎年、年末年始は俺によくしてくれる後藤家って所に世話になってるんだ」

「前田に後藤って……ふふ、死角無し」

「ツボが浅い」

スーツケースに服を詰め、後の物はボストンバッグに分ける。

俺のその作業を山田が後ろでじつと見ていた。

面白いものでもないだろうに。

そうこうしている内に仕分けが終わり、後は明日の出発前に入れていく物を除けば準

備は完了した。毎年の事だが、こうしてまとまった荷物を見るとちよつとした旅行みたいで胸が弾む。

明日が楽しみだ。

作業も終えて、隣の山田を見る。

顔色が真っ青だった。

荷物の中に危険物でも見たかのような表情であり、かなり切迫した雰囲気を感じて俺も思わず緊張してしまう。

「ど、どうした」

「前田、これ」

山田の唇が震えている。

オマエをそこまで戦慄させる物とは、一体……。

「前田がいない間、私は何処でご飯を食べれば」

割とどうでもよかった。

俺は立ち上がって、昼飯の準備を始める。

ここに居ない間まで山田の面倒を見るなんて御免被りたい。悪いが、優しい虹夏にで

も頼ってくれとしか言い様が無い。

まあ、でも何食分かパツク詰めしておくか。

山田の性格で計画的に消費できるか疑問だが、流石に一日二日で全てを無駄にする事は無いだろうし、でも調子に乗るといけないから明日の朝に置き手紙かメールで伝えるまで伏せておこう。

さて、昼飯は何にしようか。

昨日作った牛蒡や鶏肉などの炊き込みご飯と味噌汁、あとは冷凍食品のコロッケとコンビニで買ったサラダで山田には満足して貰うとする。

キッチンに立ち、作業を開始——……したかったが隣に黙って立っている山田が邪魔だ。

何もしていないのに俺の手元を凝視している。

何かあったっけ。

そうして見ていると……。

「あ、忘れてた」

「……………」

俺は右手首に巻いていた赤いスカーフを解く。

何処に付けようか悩んで……鉢巻みたいに頭にぐるりと一周させ、後ろで堅く縛って

おいた。

山田の視線が頭に移動する。

やっぱり、このスカーフか。

「どうした」

「何この赤いの」

「クリスマスプレゼントだよ、虹夏から」

「——『虹夏』?」

虹夏は、いつも赤いスカーフを身に着けている。

サイドポニー並みに彼女のシンボルのな装身具だ。

クリスマスの翌朝、帰る前に渡されたので俺も極力装備するようにしている。これでまた付けなかったら雰囲気悪くしたりしそうだし……あと好きな子とお揃いとか人生で一度はやってみたかった。

赤と赤。

色まで一緒なのがまた良い。

でもお洒落な付け方とか知らないから手首に巻く以外は正直扱いがよく分からない。

「これ、似合う?」

「プレゼント……」

「たしかに自分でも似合っていないとは思うけどさ」

「似合っていないね」

ズバツと言われた。

かなり心にクる物がある。

忌憚のない意見というのは有り難いのだろうが、そもそも気遣ってくれる友だち自体がない俺からすれば、ただの強力な攻撃でしかない。

これが山田である。

やはり、どうすれば良いのか。

「付け方の問題かもしれないな」

「それもあるけど」

「けど?」

「前田がスカーフに合わない」

「存在から相性悪いのかよ」

そこまで不評なのか。

俺はスマホを出して付け方を検索する。

ああ、そういうえば首に巻くのもアリなのか。というかこちらがスタンダードなのだろう。

でも首周りが苦しいのはなあ。

後で試してみよう。

「取り敢えず、飯作るからあっち行つてろ」

「私は大丈夫」

「じゃあ手伝つてくれるのか」

「え」

え、じゃない。

何の為にここにいるんだよ。

目的も分からないが、退く気は毛頭ないみたいなので味噌汁を温め直す。その間に、

山田にはコロツケをチンさせておく。

これくらいは流石に出来るだろう。

おにぎり作るだけでキッチンを相当荒らしたヤツだが、俺の目の届く範囲内にそんな事はさせない。

……あ、そうだ。

「山田」

「ん？」

「おにぎり、塩辛かったけど美味かった」

「――」
「ありがとう」

そう言うと、山田がふと微笑んで親指を上にした。

夕方になって、俺はソファで寛ぐ。

今日観る映画を選出すべく、目の前の卓上のタブレット端末に入れたアプリの映画見放題の物で鑑賞できる一覧から吟味していた。

どれも初見の物である。

何から手をつけるべきか。

『カシャッ』

思考がシャッター音で遮られる。

隣で山田が自撮りをしていた。

何度かシャツターを押し、画像を確認しては再び撮影を再開し、その後を確認作業と同じことを繰り返す。映画選びに集中したいが、隣で唐突に始まった山田の謎行動も気になる。

「どうした」

「自撮り」

「何で急に？」

「街で仲良く自撮りしてる人見たんだけど、自撮りの何が楽しいのか全然分からなくて」

「……………」

つくづく興味のベクトルが変わってるな、と思う。

「それで何度も撮ってるの？」

「やってみると、全然上手く撮れない。顔がブレるし何故か前田が映る」

「俺をバックにして撮ってるからね」

もしかして心霊写真の幽霊扱いされてるのか。

スカーフの件といい、俺に容赦ないのもしかして単に俺のことが嫌いだからではないだろうか。

ベッドを占拠したり、帰れと言っても帰らないのは嫌がらせ……と考えれば、納得するようないいな。

いや、深読みするのはやめよう。

山田はその場のノリで話すこと95%だからな。

「自撮りが苦手ってあんの?」

「前田もやればわかる、奥深い」

「……どれどれ」

俺も自分のスマホで自撮りを試みる。

はい、チー……意外と腕がづらい。

画像を確認すると、SNS等に投稿された楽しい自撮り写真を見た事はあったが、それらに比べるとお世辞にも良い出来とは言えない。難しい。

ブレてるし、顔が暗いな。

もう一度。

もう一度。

もう、一度。

……………。

ううむ、難しい……案外自撮りって難しいのか。

「まず、手元が震えるよな」

「うん。片手でピース作らないといけないし」

「誰かに撮って貰えば……って自撮りじゃないか。どうすれば良いんだ？」

「……………閃いた」

「ん、なに？」

山田がずい、と俺の方へ身を寄せて来る。

互いの頬が触れるくらいの距離になって止まり、彼女はスマホを掲げた。

これが解決策……？

それにしても、手元は震えたままだ。

一体、何が改善したのかさっぱり分からない。

俺が困惑していると、目配せで山田がスマホを示す。

「前田もスマホを支えればいける」

「え」

「二人でやれば何とかなる」

「な、なるほど」

合点がいった。

俺は山田のスマホに手を添えて支える。

すると、驚くほど安定性が増した。多少の力加減が必要だが、スマホを持つ手が一つ増えるだけでこんなにも違うなんて。

その証拠に、空いた片手でピースを作っても余裕だ。

「山田、今だシャッター！」

「ラジャー！」

パシヤリ、と小気味いい音。

二人で写真を確認すると……今までの失敗が嘘だったかのように綺麗な映り方だった。

ブレていないし、スマホを支えようという集中力も不必要になった事で顔の強張りも無い。

おお、と二人で変な感嘆の声を漏らす。

「これ、これだよ山田」

「うむ」

「やってみた感想は？」

「特に楽しくない」

台無しだよ。

「でも良い写真だと思う」

「そうだな」

「モデルがいいから」

「え？ありがとうございます？」

「え、ああ……うん」

「まさか被写体云々のやつ俺の事は省いて言ってた？」

山田は写真を眺めている。

かなり自分の映り方が気に入っているようだ。

自撮りなんて初経験だったけど、確かに楽しくはなかった。ああいうのは、きつと思
い出を共有する相手がいって初めて成立する物なんだ。

自撮り行為そのものには特に意味が無い。

浅はかだった。

やはり俺は陰キャのようだ。

「虹夏に自慢しよう」

「自慢にならないだろ、それ」

「初めての自撮り記念」

「新手の自虐ネタにしか聞こえない」

「送信、と」

躊躇わず山田が写真を虹夏に送信する。

きつと、向こう側は苦笑いされるに決まっている。

可哀想に山田………待て、それに巻き込まれた俺も憐れまれるんじゃないか？
謂れのない憐憫なんて受けたくない。

いや、俺も自撮りなんて初めてだけどき！

暫くすると、俺のスマホにロインの通知が入る。

虹夏さんからだった。

内容を開けば。

『すつごく楽しそう、仲良いんだね』

ああ、勘違いされている。

いや、それより何で山田ではなく俺に写真の返信をするんだろうか。

山田の方を見れば、そちらにもメッセージが入っていた。

それは。

『あ、私があげたスカーフ使ってくれてる！』

(T T) \ (^ _ ^) ヨシヨシ』

誤送信かな。

そっちの方が俺に送られるべき内容なのに。

ブツリと山田がスマホの電源を切る。

「スカーフとおにぎり、どっちが良かった？」

「え、スカーフ」

「……塩加減が足りなかったか」

「過剰だったよ」

まさか、おにぎりがクリスマスプレゼントのつもりか。

スカーフと競うのも意味不明だが、あの塩加減で更に増量するとか俺に対して殺意があるのかと疑いたくなる。

嬉しかったのは嬉しかったけど。

さて、自撮り案件は片付いたので改めて何の映画を観るか考えよう……とも思ったが、もうどれも初見とあつてまた悩むとなると疲れる。

……は——。

「山田、この一覧の中でどれが観たい？」

「映画の気分じゃない」

「俺が観るだけだから」

「じゃあ、これ」

山田が一つを指し示す。——『ザ・フ○イ』。

名前だけは聞いたことがある。

たしか、ハエになっていく人間……みたいな話の気がする。

取り敢えず、山田がコレだと言ったので視聴しよう。

俺は映画を再生しようとするが、その前に山田に肩を叩かれる。

「食べてて良い？」

「うわ、いつの間にか」

山田は丼に大量の炊き込みご飯を盛っていた。

ちやつかり味噌汁も添えている。

後藤家に行く前に完食しておきたいので、山田でも消費してくれるのは非常に助かる。……が、やや面食らう量だった。

本当に食べ切れるのだろうか。

心配になりつつも、俺が許可すると山田は颯爽と食事を開始する。俺も同時に映画を再生し、鑑賞態勢に入った。

画面の物語が進むに連れて着実に人間を逸脱していく登場人物に山田が顔を顰めている。

食事中は駄目だったか。

「前田は虫って平気？」

「まあな。カブトムシとか好き……ああ、食べる方も少し興味ある」

「……私の時はパスで」

「なるほど。食卓に虫を出して追い払う手があったか」

「食べてたら前田もああなるんじゃ……」

「何だとコラ」

山田がテレビ画面を指差す。

虫を食べて虫になる事はありません。

「……前田。その親戚の家って何処」

「金沢八景、横浜にある」

「じゃあ、その距離なら……」

「呼ばれても絶対に行かないからな。オマエが飢えようとも知らない」

「そんな殺生な」

震えながら必死に自らの命の危機を救いたまえと説く山田を無視して、俺は映画に集中した。

その内、諦めて食事を再開する山田の悲しそうな箸の音がし始める。

俺は決して寄生先にはなり得ない——というのをここで全力アピールし、この家から退散して貰う悪印象を作れる。

来年はきつと、元通りになつてる筈だ。

「前田。せめて年越し蕎麦だけ作りに来て」

きつと。

♪

♪

♪

♪

翌朝。

金沢八景駅に到着していた。

海辺ともあつて、叩きつける寒風は潮の匂いがする。

八景島行の自動運転電車が通る線路が頭上を通る交差点を抜けて、住宅街を目指して

いく。通い慣れたつもりだったが、やはり一年ごとともあって少しだけ不安になってしまふ。

後藤家までの道のりは地図を見るまでもない。

海を左手に眺めながら歩道を進んでいく。

途中では、歩道沿いにある公園で朝から元気よく子供が走っている。……元気が吸い取られそうなほど眩しい笑顔だ。

住宅街へと入ると、心做しか歩調が速くなる。

気持ち足運びに出ているようだ。

そして――。

「おかえり、いっくん!!」

とある一軒家の前で、四歳の女の子――ふたりが俺の足に抱き着いた。

また大きくなったなー。

太ももにすり寄る小さな頭を撫でながら、もう片方の足に飛びつく犬のジミヘンの鼻を撫でる。

二人とも元気だな。

まさか、家の前で待っていてくれるとは思いもしなかった。随分と慕われたものだと感慨深くなり、思わずジンと胸が疼く。

ふたりとジミヘンを見守るように少し離れた位置で後藤夫妻も俺を笑顔で迎えてくれた。

「またお世話になります」

「ようこそー！いやー、毎年ごめんね……僕らの方から下北沢に遊びに行きたいけど、この人数は流石に迷惑だしね」

「いえいえ。その時は歓迎しますよ」

二人が俺の頭をよしよしと抱き込むように撫でる。

この家族、本当に対応が……。

あれ。

「ひとりはまだ寝てるんですか？」

俺が尋ねると、美智代さんが含みのある笑みを浮かべた。ちらりと彼女が玄関へと視線を投げる。

それを俺も目で追って――。

「タスケテ……」

勉強できません、の立て札を手に白目を？いて立っているパジャマ姿のひとり
がいた。
任せろ。

おまけ

写真が届いた時――。

「あ、はは……リヨウも意地悪だなあ……」

虹夏はバイト中にそれを見て落ち込んでいた。

至福のひととき

現在、俺は後藤家で猛勉強中——のひとりに付き合っていた。隣で指導し、彼女の疑問を解消していく。

後藤家に来てから一日が経過した二十九日。

ようやく中学一年生までの範囲は知識が定着したようである。

「よし、中学一年生には追いついた」

「まだ中学一年……どうして私はこんなにも出来損ないなんだろ……やっぱりギターしか能のない、ギターしか誇れない……」

ひとりの顔色は真っ青だった。

金沢八景の海よりも冴え冴えとした青さである。

こんなになるまで勉強を頑張るなんて、嫌だと言っても良いのにその口は自嘲的な言葉は出ても一度たりとて勉強への苦言を呈する事なく、その手は止めなかった。

知っているぞ。

極限まで追い詰められたひとりの集中力。

昔から頑張ろうと決めたら挫けやすいが努力家な部分があるから、隣で誰かが優しく支えてあげるだけで驚異的な成長スピードを発揮する。

それなのに、この子は……。

思わず胸が痛くなる。

ここまで頑張っても、まだ足りないかと自嘲する。

たった一日で四年分の学習を振り返り、脳に叩き込むなんて荒業は推奨されない。

普通なら有り得ない事を成し遂げたのだ。

「何言ってるんだ」

「あう」

「小学四年生の範囲からやり直して、たった一日で四年分を学べただぞ。あとの二年なんて、どうせ今までの事を少し複雑にしただけ……ひとりは出来損ないじゃなくて、出来た子なんだよ」

「あ、ふへっ……で、できた子？ち、ちよつと本気出したらエリート……？」

しかも、褒めてあげると可愛らしく相好を崩す。

相変わらず顔色は優れないが、頑張り屋な彼女はたったこれだけで立ち直る。

なんて強靱な精神力と回復力。

ひとりは自分が言うほど頭の悪い子ではない。

ひとりは出来る子だ。

出来なくても全然存在するだけで大丈夫。

頑張ったひとりの頭を胸に抱いて、あやすように撫でた。

腕の中で変な鳴き声がある。

うん、これだよ。

俺が後藤家に帰る五割の理由はひとりだ。

この子に触れている瞬間が生きている中で唯一何のストレスも感じない。

年末年始にこうしなくては、生きていけないのだ。

「ひとり、少し疲れたし休憩するか?」

「あう……い、いっくん……離してください……!」

「ん、顔が熱いぞ。休憩した方がいいな」

「ひゅうううう……」

蒸気を立てるひとりの頭を新たに敷いた座布団に乗せて体を横にさせる。

彼女を休憩させている間に、俺は次なる範囲の学習プログラムを組み立て始めた。無謀に勉強したって、受験勉強はそう甘くない。

中学校の勉強は義務教育——最低限の知識を修得させるのが目的だが、それはついでであり、あくまで『物の考え方』を育むのが最優先目的である。

ただ知識を押し込むだけでは駄目だ。

何故その知識が必要かの意味まで本人が解釈できるようにするのが最後に望ましい形となる。

しかし、これは……。

俺は勉強を教える前の、ひとりの成績を見る。

頑張つて解こうとしているが届いていない。

俺が今試行している勉強法は、誰か隣で指導しなくてはならない——つまり、独力での勉強ではないのだ。

一人でも行える勉強を知らなくては、きつとこの先は難しくなってくるだろう。

俺がいない間の受験勉強だって、きつと辛く……待てよ。

「ひとり」

「あつはい！」

「仮に高校に行つて、勉強したくなくなつたり卒業せず辞めようとしたら」

「ひつ、ま、ままままかさか吊るし上げるとか……!?!」

ひとりが震えながら物騒な事を言う。

何を言ってるんだ。

「直樹さんと美智代さんを説得して、俺が稼げるようになるまで待つて貰おう。そうすれば万事解決だ」

「へ？」

「俺が養えば問題ないな」

「あ、あばばばば……！」

ぶんぶんと忙しく腕を振ってひとりが何かを伝えようとしている。

俺は真剣にそれを読み取ろうと、じっと見詰めた。

視線を正面から受けたひとりは、ぴたりと動きを止めるや今度は目を泳がせ、赤熱化させた顔で俯く。

「い、いっくん」

「どうした」

「そ、そういうのは……私みたいな芋娘に言わないで、もっと可愛い子に——」
「ひとり以外にここまで覚悟は持てないぞ？」

「あうっ!!」

「第一、芋娘って……ひとりは誰よりも可愛いだろうに」

「うぎゆうう!!？」

床に伏せて、ピンク色の液体が畳の上に広がった。

ひとりが溶けてしまった。

し、知らない間にこんな芸当まで……やはり、この子の潜在能力は計り知れない。そうだ。

この子だけでも幸せになるべきだ。

そうでないなら、この世で俺が生きる価値なんて無い。

「ひとりには幸せになるんだぞ」

「え……？」

「ひとりの幸せが俺の幸せなんだから」

そう言うと、ひとりが跳ね起きた。

液化して崩れていた輪郭が原形を取り戻す。

白い手が躊躇いがちに俺の左手首——今は刃の傷痕が消えたそこに添えられる。

ぎゅ、と弱々しく握られた。

「が、頑張る」

「ん……？」

「わ、私……いつくんも幸せになる……なれるように、頑張るね」

えへへ、と力無く笑う。

きっと俺を心配させまいと気丈に振る舞っているのだ。

触れている部分が燃えるように熱い。

俺が傷付くと本当に泣いてくれる子。

俺の幸せを本心から望んでくれる子。

俺を憎む連中を忘れさせてくれる子。

本当に、この子は。

「ありがとう、ひとり」

「う、うん（心配かけないくらいの大スターに……）」

俺は彼女の言葉と、手首に触れる体温を噛み締めて至福に浸った。

ひとりと勉強していると、背中に押し掛かる衝撃を受けた。

俺の肩に、ふたりの膨れっ面が乗せられた。

恨めしそうに俺を見つめている。

「どうした、ふたり」

「お勉強ばっかですまんない！」

「でもなあ」

「ふたりもいっくんとお絵描きしたいの！」

ふたりが駄々を捏ね始めた。

たしかに、随分と放置してしまったな。

姉のひとりに付きつきりで、まだ四歳という好奇心の塊のような生物であるふたりからすれば、一年ぶりに家を訪れた俺が自分に付き合ってくれないのが面白くないのは当然だ。

仕方ない。

俺は背中に乗る小さな体を持ち上げて隣に座らせた。

後ろに振り返ると、彼女が持つてきたであろうクレヨンセットとスケッチブックがある。

お絵描きか、美術以外ではやってないな。

やや自身の画力に不安を感じながら、ふたりの前の机にスケッチブックを広げる。

「じゃあ、ここにネコさん書いてみて」

「分かった！」

「俺も隣に超上手いネコさん書くから」

「ふたりの方が上手いもん」

さあ、全神経使え。

俺は右手でひとりの解いた問題の添削をしつつ、左手でスケッチブックの紙に想像するネコさんを描いていく。

十秒間ひとりを褒めたり、教えたりする。

次の十秒でふたりと最近あつた楽しい事について話す。

そうやって二人の相手をしていると、後ろから美智代さんがお盆に菓子と飲み物を持って現れた。

「こーら、ふたりちゃん。勉強の邪魔しちゃ駄目よ」

「いっくんとお絵描きしてるの」

「もう。一郎くん、大変じゃない?」

「楽しいですよ、人生で一番」

「うう……それで良いのかしら……!」

なぜ悲しまれた……?」

むしろ、これで幸せを謳歌している。

美智代さんはおよよと口を手で覆っている。涙を誘うほど惨めな事はしていないんだけどな。

そう思っている内に、両者同時にネコさんが書き終わったのでふたりの物を拝見する。

四歳児の画力に多くは求めない。

でも、特徴をしつかりと捉えていて本人の遊び心が知れる素敵なアレンジの施されたネコさんだ。

「可愛いネコさんだな」

「いっくん、これネコさんじゃないよ」

ふたりに指摘されて自分の絵を確認する。
ネコじゃなくてチュパカブラだった。

やっぱり、二人同時は無茶だった。



後藤家でシャワーを浴びた後だった。

俺は二階にあるふたりの部屋に入る。

実は、ふたりに乞われて同じ部屋で寝る事になっているのだ。普段はジミヘンと一緒にいたり、たまに両親と寝たりするが、去年から俺が帰る年末年始は決まって俺と寝たがる。

ふ……控えめに言って死ぬほど嬉しい。

人に慕われるなんて下北沢じゃ絶対に無い。

虹夏という初めての友だちもできたけど、友情という物に今一まだ自信が持てない。

山田は、もう宿主と寄生虫って関係なので論外。

「ん？」

充電中のスマホが震えていた。

着信……バイトのヘルプかな？

絶対に何があっても行かないぞ、俺は。

スマホを手にとって確認すると、忌々しい『山田リョウ』の番号が表示されていた。

何なんだ全く、今は忙しくないけど。

「はい、もしもし」

『大変だ、前田!』

「何かあったのか?」

『前田の家に、私用の食事が用意してある……!そ、それと出前用と手紙と一緒に一万円が封入された茶封筒まで』

「それがどうした?」

『前田を騙った誰かの罠かもしれない』

「はいはい。じゃあな、切るよ」

ぷつり。

俺は通話を切ってスマホを元の場所に戻す。

さて、夕飯は久しぶりに美智代さんの唐揚げが食べられるそうなので楽し………また着信か。

確認すれば忌々しき『山田リョウ』の以下略。

「はい、もしもし」

『前田。家のご飯、前田の仕業で良いんだよね』

「言い方が引つかかるけどそうだよ。てか、薄々予感してたから用意したけど、俺が帰らなくても家に躊躇なく入るんだなオマエ」

『鍵がある』

「返せよ」

『いつか』

信用ならない返答にため息しか出ない。

「そこにある飯だけだぞ」

『うん』

「食べる順は冷蔵庫に貼った紙に書かれた物に従え。おかわりは出来ないからな。そこにある量以上は面倒見ない」

『うむ、心得た』

「それと、食べた分をきっちり虹夏に報告すること」

『なぜ虹夏』

「俺のいない家にオマエ一人とか不安だからに決まってるだろ」

この前だって、おにぎり作るだけでキッチンを荒らしまくった人間を信用できるワケがない。

非常時にすぐ駆けつけて対応できる人間が必要だ。

虹夏には予て協力を要請しており、俺が不在の間は彼女に管理して貰う事にしていく。

「分かったな？」

『うぐっ』

「何でダメージ負ってんだよ」

『私への信用が無い対応に胸が痛む……』

「その痛みをしかと噛みしめてくれ」

「どうか、常日頃から俺にかけている心労の分だけでもダメージを受けてくれたら助かる。」

山田の事は人に対して無遠慮すぎるところから、もはや心臓に毛が生えているのではなく、そういうのが煩わしくて心臓を捨ててしまったバケモノだと思ってるからな。

俺のいない家でも優雅に過ごすのだろう。

その姿を想像しただけでも腹立たしい。

「頼むから事故とかはやめろよ」

『うん』

「泊まっても洗濯とか出来ないからな」

『それは虹夏がやってくれる』

「……寒い時は暖房とかちゃんと付けろよ。あと家を出る時は電気も消して、戸締りもしっかりと確認」

『私、もう十六だけど』

「そういう冗談は置いといてだな」

『え、っ』

山田が十六歳……鯖読んでないか？

面白くもない冗談だ。

ほぼ説教に近い注意事項を、通話相手の山田に懇懇と述べていると、背後からふたり
が抱き着いてくる。

「いっくんー！ご飯だつてー」

「知り合いだよ」

しー、と口の前に人差し指を立てる。

すると、はつとふたりが慌てて口を両手で覆った。

はい、可愛い。

『今の声』

「親戚のところの女の子」

『……この前言ってた？』

「え？……ああ、その妹」

そういえば、山田には言ったんだっけ。

前に虹夏と山田がいる時にひとりが高校受験に関する電話を寄越してきた時に、それを聞かれていたんだ。

「じゃあ、俺はこれから飯だから」

『前田』

「なに？」

『また夜にかけるね』

「嫌だ」

ぶつつつ、と電話を切る。

やった、美智代さんのご飯が俺を待っている！

大晦日は寂しい？

大晦日は忙しい。

炬燵で溶けているひとりを尻目に、俺は家事を手伝っていた。

お世話になっていている身なので言えば美智代さんに何故かまた泣かれたが、悲泣の涙ではないようなのでよしとしておこう。

今日は大一番を務めなくてはならない。

それが年越し蕎麦の仕込みだ。

去年から後藤家の年越し蕎麦は俺が作らせて貰っていた。

彼らの一年を締め括る一味。

これこそ、まさに大役である。

「ん？」

ポケットでスマホが震える。

また着信か。

先日の山田の連絡もあって、この時期に入るスマホの着信に良い思いが無い。ストレスが最小限で済むのは虹夏ぐらいだ。

頼む、虹夏であってくれ。

頼む、山田はやめてくれ。

強く念じて確認すると——山田だチクシヨウ。

大晦日という日に連絡が来た。

もう薄々予感していることがある。

彼女には幾度も『年越し蕎麦だけ作りに帰って来い』という如何にも何様要求を受けており、全部断っているがかなり諦め悪く執拗だ。

また今日も同じ内容が繰り返されるのか。

十コール以上も無視したが止まらない。

根気強く応答を待つ山田の姿を想像し、いよいよ年越し蕎麦への執念が本物なのだと感じさせられる。

「は、こ、も、も、も」

『前田』

「年越し蕎麦は作らないぞ」

『もう年越し蕎麦は諦めた』

「ほう……？」

山田にしては諦めが早いな。

その呆気なさに違和感すら抱いてしまう。

じゃあ、今回は一体何の用で――。

『年明け蕎麦、茹でにきて』

そこまで蕎麦食いたいなら自分で茹でてくれ。

何故俺が万事をこなさなくちゃいけないんだよ。

年越しとか年明け以前に、もう蕎麦が食べたいだけなのかもしれない。

それにしても、そうか。

山田と会ったこの濃い一年がもうすぐ終わる。

もし『あのとき』に彼女を家の中に招いていなければ、こんな金銭のやり取りも無く飯を食わせたたり泊めたりする宿主と寄生虫の関係にはならなかっただろう。

判断を間違えた……かもしれない。

うん、というか間違えたな。

でも悲しい事に過去は戻らないのだ。

これからも俺は山田と向き合い続けざるを得ない——年が明けても。

「行かない」

でも、年末年始は絶対に行かない。

後藤家にいる至福の時間は一秒たりとて浪費したくないのだ。

たとえ、天地がひっくり返るレベルで有り得ないが虹夏からデートに誘われたとしても、俺が動く事は無いと断言する。

それが山田なら尚更だ。

『……じゃあ、蕎麦は別にいい』

「うどんもパスタも茹でないぞ」

『いや、もうご飯は別にいい』

「……じゃあ、何？」

おや、山田が食事を諦めたのだと。

意外な反応に俺は思わず数瞬間まってしまふ。

ならば、彼女の要件とは何だろうか。

家を散らかしたから、掃除して欲しいとかかな？

『何もしなくて良いから帰ってきて』

……………。

……………？

山田の言葉の意味を考える。

ご飯も作らないし、何もしない俺がいても山田が特に得をする事は無い。

そんな価値のない物を呼び寄せてどうする気だ。

真意が分からず、沈黙の時間だけが長引く。

山田も山田で、その言葉以降何かを発さず俺の返答をただ待っていた。……………もしかし

て寝てたり？

「え、帰って何かある？」

『私がいるだけ』

「あー、うん。……………で？」

『……………いつも増して鈍いね』

「もしかして下北沢まで喧嘩しに来たって誘ってる？」

そうなら最初から言え。

全力で応じてやる。

また同じような沈黙が続き、いよいよ山田の言う通り本当に俺が頭の悪いヤツで察してやれてないだけなのかと疑心暗鬼に陥りかけていた。

必死に思考を巡らせて山田との会話を振り返って真意を探っていると、スマホの向こう側で小さなため息が聞こえた。

う、呆れられた……。

『冗談だよ』

「えっ」

くすり、と笑う声がある。

まさか、単に誂っていただけなのか？

『親戚の家にいるのに、流石に戻って来てって言うほど私は非常識じゃない』

「日頃から非常識なヤツの言う台詞じゃないな」

『ふふ』

「どうして悦ぶ?」

相変わらず変人扱いには幸福感を得る謎感性らしく、山田の嬉しそうな反応が耳で感じる。

……冗談だと言った時、少しだけ落ち込んだように感じたが気の所為だな。

もう十時間後には新年だ。

『じゃあね』

「あ、ああ」

プツリ、と通話が切られる。

結局、何の為に連絡して来たのか分からない通話だったな。

もし、本当にただ俺に帰って来てくれと言っていたのなら、まるであの山田が寂しがっているかのような事になる。

その場のノリで99%話している山田の事だ、深く考えるほど答えから遠くなっている可能性だってある。

そういえば、山田は家族と過ごさないのだろうか。

近いのなら虹夏とも遊べば良い……いや、アイツはかなりのインドア派だし、大抵は一人好きだもんな。

「でも、本当に何の用だったんだ……？」

考えていると、スマホにロインの通知。

アプリを開いて確認してみれば、山田からだった。

通話の次はメッセージか。

暇なヤツめ。

内容は、たったの一文だった。

『やっぱり、鈍いね』

……取り敢えず既読無視しておこうか。



夕飯まで時間ができたので、再びひとりに勉強を教えていた。

ひとりも俺の献身を無駄にはしまいと必死に頑張っている。

何て元気な子なんだろう。

こういう子には教えていて楽しい。

何処かの誰かみたいに。

『前田、課題写させて』

『私には前田がいるからテストは大丈夫』

『前田の家は勉強に向かない』

などと失礼をかましたりはしない。

この子の受験合格の一助となるように、俺は精一杯身を尽くす。

そして、ゆくゆくはひとりの入学式を見届け、俺の家で後藤家を歓迎する計画も立てている。

彼らは滅多に下北沢へ来れない。

まだふたりが小さいのもあるし、俺の家に一気に何人も来たら迷惑だと彼らが遠慮しているのが大きい。

だが、入学式という祝い事がある日ならば別だ。

家に近くて足を運びやすいし、その日程だと俺の学校もまだ始業していないので準備もしやすい

その為にも、まずひとりの合格だ。

「い、いつくん」

「ん？」

「私ばかり相手に疲れない……？」

ひとりが俺を気遣うように尋ねる。

そんな疲れた顔をしていただろうか。

俺としては、この時間を途轍もなく一日の楽しみに感じている瞬間すらある。褒めるという口実でひとりに触れられるし……何か変態みたいだな。

しかも、一時間後にはふたりとのままごともある。

今年の大晦日も退屈しなさそうだ。

「俺はひとりといわれたら何でも良いぞ」

「あ、はい（いつくんって変わってる……？）」

「ひとりほ……」

「お、落ち着く……」

ひとりが少しだけ笑った。

それにしても、あのひとりが高校生になるのか。

まだ合格したワケではないし、油断ならないけどつい想像してしまう。

初めて会ったのは、彼女が六歳の時だ。

あんなに小さかったのに、今では背丈もこんなに伸びている。

「……いつくん？」

「あ、ごめん」

気付いたら頭を撫でていた。

「ひとりも、もう高校生なのかあ」

「うう、合格できるかも分かんないのに」

「まあ、去年まで俺も中学生だったんだけどさ。……気付いたら、お互い大人になって」

「ぴいぎやあああああああ——！！」

「あ」

いけない。

ひとりがまた『発作』を起こしてしまった。

彼女は想像力が豊かすぎて、普段なら大成功した世界線の自分を考えがちだが、今のように受験だったりプレッシャーを受けている状況下で想像を働かせると、自分に容赦

のない悪い方向へと展開させる。

ここで凄いのは、ひとりは自分に甘い時は甘く、酷い時はとんでもなく酷いきつと、かなり落ちぶれた自分を想像してしまったのだ。そういう時、ひとりは発狂して倒れてしまう。

「重症だな……」

「あ、あうあ……ぶぐ……」

「ひとり、そうなくても俺が一緒にいるから大丈夫だぞ」

「あえ……はっ!？」

ひとりが意識を取り戻す。

記憶も飛んでいたのか、周囲を確認して「そうか、私はまだ中学生だった」などと呟く。一体、何年先まで彼女の意識はタイムスリップしていたのだろうか。

ひとりは頭を振って、ノートに向き直る。

俺も指導を再開した。

三十分経って、ふとひとりの手が止まる。

彼女があ、と声を上げた。

「どうした?」

「あのね……まだ合格したワケじゃないけど……いや、そもそも合格できるか分からな

いから考えるのも分からないのに考えるのも鳥澁がましい事だよ。受験コワイ、そもそも中学三年間孤独な私が高校で成功するかもわかんないのにそんな」

「ひとり。合格したら何かしたいのか？」

「はっ！……あ、あのね」

暴走しそうなひとりの意識を引き戻して先を促す。

何かを言いたげだったが、入学した後に叶えたい願望があるようなので聞いておかなくては。……俺が叶えたいから。

顔を真っ赤にして、もじもじと指を絡ませているひとりに耳を傾ける。

「わ、私が下北沢の高校に入学したらだけどね？」

「うん」

こちらを見たひとりが、にへらと笑う。

「も、もっと……いっくんと会いやすくなるかな……なんて（高校でも友だち出来なかったら、いっくんに慰めて貰わないと死にそう……）」

至近距離で光が弾ける。

それは錯覚な筈なのに、視界が白く染まる程の衝撃を受けて俺は思わず床に倒れた。

ひとりの悲鳴が聞こえる。

もつと、俺と会いやすくなる……？

た、確かにそうだ。

放課後に二人で会って、ひとりを我が家で饗す事だつて可能だ。年末年始などと言わず、高頻度でひとりという幸福に触れる事が出来る……だと……？

し、しかもだ。

考えてみれば、志望校である秀華高校とここでは片道二時間を要する。

それを毎日続けるとなると、ひとりは毎朝早く起きて登校しなくてはならないのだ。

だが……それは、この家ならの話。

俺の家からなら近い！

つまり、俺の家に泊めて通わせるといふ事も可能だ。

「ひとり」

「あつ、い、いつくん大丈夫……？」

「絶対に合格しような」

「ひつ、おとおお手を煩わせるようでも申し訳——」

「俺もひとりともつと会いたい」

「うぼあつっ!!!?」

今度はひとりが変な声を上げて倒れた。

俺は決めたぞ……絶対にひとりを合格に導いてみせる。

二年生は、更にストレスの無い生活になること間違い無し。

ひとりだけの戦いではない。

目指せ、来年の平和の為の合格——！

年越しを二時間後に控えた頃。

ふたりがその時間まで起きられないというのもあり、早めに皆で年越し蕎麦を食べた。

流石は小さい子だ。

満腹になるや眠くなってしまったらしい。

急いで歯磨きさせ、今は布団の中でぐっすりである。

「そういえば」

後藤家に来てから、映画を観ていないな。

今回はコレクションを何も持ち込んでいないし、後藤家で過ごす事自体が楽しいともあつて、映画鑑賞をしようという気すら起きなかつた。

まあ、帰つてまた観れば良いか。

その時山田がいてかなり大変そうだけどな。

——何もしなくていいから帰ってきて。

何もしなくていいから帰ってきて、か。

額面通りに受け取ると、山田にとって俺は何か一定以上の価値でも見出しているのだからか。

俺自身にそんな感じは無いが。

まあ、そんなワケもないか。

どうせ、家と呼んだ流れでいつものように飯でも作らせようという魂胆だろう。深く考えれば読みを外し、簡単に考えると予想を下回って更にシンプルなのが山田リョウの思考だ。

でも、新年の挨拶くらいリアルタイムですか。にべもなく断つたのは、少しだけ罪悪感がある。

俺の家にいるとは考えられないけど、連絡してみようかな。

『いま何してる？』

一言だけメッセージを打……早い、もう既読がついた。

『前田の家で映画観てる』

『家族と過ごさないのか？』

『ご飯は一緒に食べた。今は前田の家に遊びに行ってるって連絡したら許可出た』

俺への謎の信頼感が山田夫妻に生まれている。

もっと娘さん心配してくれ……と言いたいが、あの溺愛っぷりから最初は俺をかなり敵視していたので、不用心というワケではない。

不名誉な事に、娘を任せるに足る人間だと認識されたようだ。

『それで、映画って何て題名のやつ？』

『『街〇灯』ってやつ』

『えっ、それまだ俺が観てないやつ』

『解説しようか？』

『俺が観る前はやめろよ絶対に』

う、何だか観たくなってきたな。

『前田は何してる?』

『炬燵で除夜の鐘を待つてる』

『前田の家には炬燵が無い……』

『今年は出してない。オマエが入り浸ると思つてな』

『無いわけじゃないんだね』

げっ、バレた。

帰ったら炬燵を要求されそうで恐ろしい。

そんな事をしたら、本気で俺の家から一步も出ようとしなんて最悪の未来が訪れそうだ。

『前田。何でロインしてきたの?』

『何となく』

『前田も寂しかった?』

『アーウン、ソデスネー』

『私は思ったより寂しかった』

……え、もしかして山田じゃなくて別人が打つてる?

こんな事を言うヤツではない。

俺が混乱していると、メッセージが消去された。

『びつくりした？』

ぐ、不覚にも動揺してしまった……。

そうだな、山田らしくない発言に少し驚いたがそれだけだ。

『別に。あと三日は帰らないけど家荒らすなよ』

『任せろ』

『不安すぎる』

『良いお年を』

『はいはい。良いお年を』

俺はアプリを閉じて、テレビに向き直る。

もうすぐ、新しい年だ。

幸先は悪くない

年が明けて、早三日が経つ。

舌打ちでもしたい気分まで電車に乗っていた。

後藤家での幸せな時間は終わった。

最後にひとりと交わした抱擁の余韻は、金沢八景を經つて一分で消えてしまった。後
は途轍もない喪失感でしばらく足が震えたのは自分でも驚いたな。

幸いにもバイトは明日からだ。

今日でメンタルを持ち直さないといけない。

「もうすぐ下北沢か」

見慣れた景色が車窓に流れ始める。

いよいよ戻つて来たのだと体が理解した。

充分後藤家で癒やされはしたが、帰つてもやる事が沢山あるので憂鬱だった。

それが家の掃除。

俺が不在の間、山田が自主的に掃除をしているとは到底思えない。約一週間だけとはいえ放置した家、加えて持ち帰る荷物の洗濯や諸々の片付け。

疲れはするだろうが、まあ良いか。

ひとりにも会えた事だし。

最寄り駅に到着し、俺は颯爽とホームを降りて改札を出ていく。

家に着いて、何から片付けるか。

帰り道で今日一日のプランを組み立てる。

金沢八景の後藤家までの道は少しだけ迷っていたのに、自分の家はやはり目を瞑っても行けるくらいには体が覚えている。

そして、考えが纏った時には玄関扉前だった。

ここから、また一年かぁ。

いや、ひとりが合格すれば四ヶ月で済む。

「ただいま」

鍵を開けて、中に入る。

いつも通りだ。

誰もいない家に帰宅の挨拶をする。

「おかえりなさいっ」

有り得ない筈の返答の声があった。

俺は玄関扉を閉める。

部屋番号を確認するが、やはり俺の家に間違いは無かった。今日は山田も所用で来ない。と先んじて連絡を受けている。

だから、俺しかない筈なのだ。

いつものように静寂が待っているだけ。

ならば、今の声は一体……？

もしかして、後藤家でまだ過ごしたい俺の耳が誤作動を起こして有りもしない同居人を仕立て上げて幻聴を作り出しているのか。

そんなに心身追い詰められていたなんて……。

我ながら無自覚なのだ。

俺は深呼吸し、心を落ち着かせる。

確かに、これから四ヶ月も苦痛の日々は続くだろう。

だが、耐え抜かなければ望んだ未来はやって来ない。

幻覚なんかで現実を誤魔化している場合じゃないんだ。

意を決して、俺は再び扉を開ける。

「おかえりなさい。……何で閉めたの」

「うああああ！まだ聞こえるッ!？」

「え、びつくりした」

家からする声に俺は耳を塞ぐ。

助けて、助けてひとり。

この際もう山田でも良いから助けて。

未知の恐怖から身を固めて防御姿勢に入っている俺の肩を、小さな手がとんとんと叩く。

顔を上げると、心配そうに覗き込む虹夏がいた。

「どしたの、一郎くん」

「……おかえりなさいって」

「私が言ったんだよ？」

「……………心臓止まるかと思った…………」

「普段リョウがいるのに私がいると何でそんなリアクションなのかな」

ジト目で見てくる虹夏に苦笑を返す。

当たり前だろう。

何があつたらエプロン姿の虹夏が「おかえりなさい」なんて迎えてくれるなんて奇跡が起こるんだ。絶対に幻覚だと思ふのが当たり前だし。

やれやれ、新年早々から心臓に悪い人だ。

あ、そういえば……。

俺は虹夏さんへと軽くお辞儀する。

何事かと彼女が目を見開いた。

「なに？」

「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します」

「あ、うん！ 明けましておめでとう！」

「うわ、初めて同い年の子とこんな挨拶したわ」

「え、っ……そ、そっか」

何だか憐憫の眼差しを向けられている気がする。

クラスメイトとも滅多に挨拶しないんだぞ。

やろうと思つてはいるが、何故か避けられてしまう。

「ところで、虹夏は何を？」

「お掃除」

「お、掃除……？」

「リヨウはしないから荒れてると思ったし、今日帰るって聞いてたから」

「……………」

天使だ。

目の前に天使がいる。

掃除を手伝いもせず出ていった山田については日頃から色々あるから何も言わないが、宿として利用すらしていない虹夏さんがボランティアで掃除までしてくれているという事実に言葉が出なかった。

俺は最近、彼女に失礼な事しかしていない。

クリスマスに泣かせ、挙げ句の果てに山田の管理まで言い付ける始末だ。

頼ってばかりで恩返しは一つもしていなかった。

「掃除って」

「もう終わったよ」

「……………」

「一郎くん？」

「虹夏には体売つてもいいレベルで恩がある」

「えっ?!?!」

「え、そんなに驚く?」

何故か虹夏が顔を真っ赤にした。

予想していたリアクションと違いすぎる。

彼女の為なら臓器を売り払ったり腹切りシヨをやってても良い覚悟が出来ると言つたのに、何故まるで破廉恥な物でも見たように赤面されたのだろうか。

意外と虹夏も……変人なのか？

「何か失礼な事言つた？」

「べ、別に言つてないよ！」

「あ、そう……？」

「でも、そういう事をホイホイ他の人に言つたら駄目だからね！」

そんなホイホイ臓器売りたい気分にはならない。

「掃除してくれてありがとう」

「この前の事もあるし、これくらいいしないと」

「俺が詫げる方なのには？」

「だって、一郎くんは謝つた上でさん付け無しの名前呼びに変えてくれたけど……私は何もお返ししてないし」

「クリスマスケーキ」

「あれは私のワガママだから」

まるで天文学の話でもされている気持ちだ。

さつきから虹夏が何を言っているか分からない。

俺が全面的に悪いのに、彼女が負い目を感じてしまっているのが少しだけ不満だ。

「一郎くんはこれから何するの?」

「取り敢えず、荷物を片す」

「手伝おうか?」

「いや。もう充分お世話になったし虹夏は寛いでいてくれ」

これ以上何かされたら体じゃ足りなくなる。

「何か映画でも観ててくれ」

「うーん、私あんまり普段から映画観ないからなあ」

「じゃあ、コレは?」

俺が取り出したのはアニメ映画『もの○け姫』。

この作品は色々と学ばされるのだ。

特に主人公の『良い村は女が元氣だ』という台詞は、小中高の授業で社会について学び、バイトで働き始めたりして大変さの一端を体験した後に改めて鑑賞したら大きな驚愕を覚えた。

俺はコレで情操教育をされたと言っても過言ではない。

「ちよつと時間は長いけど」

「聞いた事あるけど私観たこと無い」

「面白いよ。観終わつた頃には、掃除のお札に昼飯をご馳走するから」

「ほんと!?じゃあ、お言葉に甘えちゃおうっ」

嬉々として虹夏がテレビの前へ移動する。

さて、荷物を早めに片付けて食事を作らねば……今はまだ午前九時半、充分に時間はあるな。

山田なら絶対にこういう気は起きない。

アイツも少しくらい、何か恩返しとかしようつて気にならないのか……ん。

キッチンで、洗い終わったタツパーを発見した。

冷蔵庫を開ければ、山田が全て完食した事が分かる。

味の感想は無かったが、どれも残さず食べたようなら別に良いか。

その事実には妙な達成感を覚えていると視線を感じて振り返る。——虹夏がこちらをじつと見ていた。

「どうかした?」

「……ううん、別に」

「え、本当に何?」

「一郎くんの考えてる事って分かりやすいなーって」

え、そんなに？

俺は自分の顔に触れてみた。

表情はたしかに無愛想だが、山田ほど表情筋が死んでいるワケではない。もしかすると、読まれやすいくらい無自覚に顔で表れるタイプだろうか。

いや、誂いたくて嘘ついたのかも。

「本当に？」

「うん」

「じゃあ、何考えてたと思う？」

「リヨウのことでしょ」

バレてた。

「……顔で分かったもん」

虹夏が寂しげに笑う。

もしかして、親友を取られて悔しいのかもしれない。

山田を取られて寂しい……？意味が分からない。

でも、顔でバレてしまうのか。

コレは山田にも普段見られているときに考えてる事が見透かされていたりして。

そう思っていると、山田からロインがきた。

『いま私のこと考えてた？』

何で見てないのに分かるんだよ。



映画が終わった頃にオムライスを提供した。

嬉しそうに頬張る虹夏の横で俺も食事を取る。今日はこの後に出来上がる洗濯物を

干して十六時まで乾かすとまた暇になると気付いた。

掃除は虹夏がやってくれたしなあ。

他に何かする事あったっけ。

ぼーっと考えていると、また虹夏に見られていたようだ。

「……何考えてるか分かった？」

「うん。暇だなあ、でしょ」

「虹夏ってエスパーなの？」

「ううん。でも、注意して見ると何となく人の考えてる事が分かるかも！」

「素直に恐い」

「凄いつて言つてよ」

本当にエスパーなのかもしれない。

そういえば、『キ○リー』って映画もそんな感じ……いや、あれくらいになったら虹夏と一緒にいるのは難しいよな、うん。

それにしても、何て安らぐ空間だろう。

穏やかな時間が流れている。

窓から差す光に虹夏が照らされて、何だかほっこりする。

「虹夏はこれからどうするんだ？」

「んー……戻ってバイトかな」

「偉いな」

「えへへ。でも一郎くんもかなり働いてるじゃん」

「そうかな。でも確かに、ヘルプとかお盆とか働き過ぎたせいで、店長から『ゆつくりお休み、友達と遊んでおいで』とか言われて冬休みの殆どは休める事になった」

「あ、あはは……」

完食した虹夏が合掌する。

礼儀正しい子だ。

何より、笑顔で美味しそうに食べてくれるところが作り甲斐も感じられて俺としても大満足だ。

やれやれ、つくづく何処かの誰かさんと違う。

……スマホが鳴ったが見ない。

アイツも今エスパ―なのか、俺が自分の事を考えた瞬間を百発百中のレベルの精度で勘付いては俺にロインを入れてくる。

もう山田がホラーだよ。

俺も完食し、二人分の皿を下げる。

「虹夏のバイト先はライブハウスだっけ」

「そうー！」

「どんな仕事内容？」

「基本は飲食店扱いだからさ。ドリンク渡したりとか、受付とか掃除……特に一郎くんと変わらないと思うよ」

「へー。給料とかは？」

「……もしかしてウチでバイトしたい？」

「いや、単純な興味」

ライブハウスのバイトってどんなだろう。

そういえば、バイト先を探す時にアプリやチラシを使って探したけど、ライブハウス関連の物って無かったんだよな。

やっぱり、応募はしてなくて直談判なのかな。

単に自分が探し足りてなかったり見落とししたりしているのもあるだろうけど。

「ぶー、ウチでもバイトしようよ」

「今の職場に不満は無いし」

「でも、一郎くんとバイトって楽しそうだなー」

「俺も虹夏と働いたら良いなって思うけど……山田もいるんだろ？」

「そこがネックなんだ……」

たはは、と虹夏が笑う。
当たり前だ。

バイト中は山田も真面目に働いている……という想像がつかない。同じ空間にいたら、すぐ何かしてきそうな気がするし、アイツの後輩という立場が何故か小さな自尊心みたいなのを刺激してくる。

やれやれ、気難しい人間だな俺って。

「バイトじゃなくても来てみてよ」

「今度、お邪魔しようかな」

「次は人気のバンドもやるみたいだし」

「へー」

「あ、そうそう！実はね、私とリョウでバンド組んだんだ！」

「……………え？」

初耳だ。

アイツからは何も聞いていない。

いや、別に俺に対して報告する義務も何も無いけど、バンドが嫌になったと言っていた山田にしては意外だと思った。

という事は……山田のベースがライブで聴ける？

そう思うと、少しだけ行きたくもなるな。

「もしかして、ライブする？」

「今は他のメンバーも募集してて」

「へー。後は誰が足りてないの？」

「ギターとか、ボーカルかな」

「そりや重要なポジションだな……ああ、虹夏はドラムだもんな」

確かに、残る席は一つだ。

でも、たしかバンドってリードギターなるポジションもあつて四人組だったりする時もあるよな。

きくりさんの所は三人だった気がするけど。

そう言えば、また一月の定期ライブでチケット貰える話だったけど、そもそもあの人は今生きてるのかな。

「じゃあ、ライブの時は呼んでくれ」

「やった！もう早速チケットノルマ一枚分クリア！」

「その言い方は何か複雑だな」

金ヅルみたいな。

チケットノルマって、確か店側から課せられる集客ノルマみたいな物だよな。バンド

という物は案外世知辛いのだと山田が暗い目で語っていた。

ただでさえ金のないアイツがそんな物にのめり込んで大丈夫だろうか。

でも、女子からも人気だと聞くし……山田はチケツトノルマも楽勝なのだろう。

俺は虹夏から買えば良いかな。

「楽しみにしてるよ」

「あはは、私もまだまだだから温かく見守ってね」

「それにしても、ボーカルか……」

「一郎くん、歌声の凄い子とか知らない？」

「虹夏以外に友だちいないしな……」

「……………えへへ」

「え、俺の不幸で喜んだ」

虹夏つて、もしかして悪い子だったり……？

でも、取り敢えずまた少しだけ楽しみが増えたな。

今年が悪い事ばかりではなさそうだ。

良い変化、なのだろうか

一月中旬のバイト帰りだった。

マンションの入口前に嫌な物を発見する。

「うわ……」

酒瓶を片手に項垂れる女性が一人。

残念な事に知り合いである。

ここで放置しても、同じマンションに住む人たちにも迷惑をかけて、その末に俺の知

り合いだなんて噂が立てば甚大な風評被害だ。

見捨てようにも厄介なリスクが付いて回る。

俺は長嘆を禁じ得なかった。

「ぎくりさん」

「ん、あー……おはえり〜」

「う、臭……」

半睡状態で女性——きくりさんが返事をする。

この人、また何日も風呂に入っていないな。

しかも、かなり飲んでいるのか臭いがキツイ。家に上げるのを躊躇われるが、きつとここで俺を待っていたのだろう。

そうでなければ、このマンションに来ない。

あ、下駄の鼻緒が切れてる。

今日はスカジャンも無く、ワンピースのみ……この一月で？

このままでは風邪も引くだろう。

ええい、仕方ない。

「運びます。ほら、捕まって」

「んふふ、少年の背中おつきー」

きくりさんを背負い、一息で立ち上がる。

至近距離だと尚更悪臭がする。

吐き出したい色々な感情と言葉をぐつと押し殺し、彼女を背負ったまま四階まで上がるが、その間もあぐあぐと首筋を噛まれた。

以前もそうだが、きくりさんは噛み癖が凄いので懐を許すとすぐ歯型を体に付けられ

る。

やめて欲しい。

でも、泥酔した人間に注意しても効き目は皆無だ。

玄関扉を開けて、部屋に入る。

玄関の框の上にきくりさんを下ろし、履いている下駄を脱がせてリビングまで運んだ。

全部人任せで、本人は全身の力を抜いている。

ソファーに寝せてから、コップ一杯の水を用意した。

「きくりさん、水飲んで」

「お酒じゃないの〜?」

「風呂沸かすんで、これ飲んだら入って下さい。着替えなら俺の貸すんで」

「えー!お風呂ー!」

きくりさんがぐいっと水一杯を飲み干す。

俺は風呂を早速沸かす。

十五分で溜まるので、それまでの辛抱だぞきくりさん。——と思つてたら、後ろから抱き着かれた。

「うへへ」

「うわ、何？」

ずっと背中にくりぐりと顔を擦りつけてくるので、再びソファアに戻しておいた。

風呂が沸くまでの間もやる事はある。

コートを脱いで、俺は早速キツチンに移動した。

どうせ、居酒屋のつまみしか食べていないのだから腹も空いているに違いない。

とりあえず、飯を作ろう。

ソファアで眠らないよう定期的に声をかけながら料理をしていると、風呂が沸いた。

「きくりさん、お風呂」

「お姉さんが臭いって言いたいのかー！」

「臭いから入ってきて」

「うへえ……しくしく」

キツク言い過ぎたか。

めそめそ泣きながら千鳥足で風呂場へと向かっていった。

大丈夫かな……足を滑らせたりして死なないか不安だが、さつきよりはきちんと返答が出来ていたし、たぶん呂律も戻ってる気がするので体を洗ってる間にも正氣に戻るだろう。

ベースストって一癖も二癖もあるヤツらだ。

俺の知り合いが運悪くそういう傾向なだけかもしれないけど。

いや、放つて置けない俺も悪い。

だから、こうやって都合の良い飯処にされる。

その証拠に、俺の部屋にちらほら山田の私物が増えていた。

早く撤去して欲しい。

四十分して、きくりさんが風呂から出た。

俺の黒いトレーナーを着ており、暖かそうだった。

彼女が椅子に座ったのを見計らって、丁度良く出来た炊いた白飯、鯖の味噌煮、野菜スープを卓上に並べる。

うはー！ときくりさんが歓喜の声を上げた。

「少年のご飯だー！」

「それ食ったら歯磨きして下さいね」

「鯖が柔らかく、ホカホカする……いやあ、寒くて参ってたんだよね。あれ、お酒は？」

「没収です」

「いやーだー！おねーさんのなけなしの金で買ったヤツなんだぞー！」

不満を垂れながらも食事の手は止めない。

「こういうところが山田に似ている。」

「今日は何の用でここに？」

「あつ、ライブチケット渡しに来たよ」

「……チケットは何処に？」

「……あ、ポケットの中だ」

「洗濯する前に気付いて良かった……」

「ご飯食べさせてくれてるお礼だからお金は要らないよ」

チケット代と飯は釣り合っていない気がする。

若干の不満を覚えつつ、俺は脱衣所に捨てられたきくりさんのワンピースのポケットを探る。

あつた……くしゃくしゃのチケット。

ワンピースは洗濯機に叩き込み、後で俺の服と一緒に洗濯しておこう。

再びリビングへ戻ると——あ、酒飲んでる。

傾けられて逆転した酒瓶の底に、こぼりと空気が溜まる。

凄く飲みっぷりだな……。

「泥酔してないライブ観たいです」

「うはは！いつかあるって！」

「……」

「ねーねー、野菜スープおかわりー」

「はあ」

よく飲んでよく食べる人だな、ホント。

俺も彼女の隣で飯を食う。

風呂はこの人が寝付いてからでいいな。……酒臭いつてまた山田に言われるのも癪

だし、今日は客用の布団で寝て貰う事にする。

箸を置く音がして横を見る。

完食したきくりさんが空の酒瓶を寂しそうに見ていた。

悪いが、酒のおかわりは無い。

我が家にもそんな物は置いてないからな。

「うー」

「歯磨いたら寝てくださいね」

「布団……?」

「布団です」

「そっかー。むふふふ」

「うわ、ちよっ」

横から首筋に抱き着かれた。

何で一々この人はくつついてくるんだよ。

「離れてくれませんか？」

「ええー？少年がいい匂いしてるのが悪いんだぞう」

「匂い？」

「んー、何かね……ダメ人間を寄せ集めそうなタイプの匂い！」

「そうですか……（洗剤変えよう）」

ダメ人間を集める匂いって何だ。

俺の周囲はダメ人間しかいないって言いたいのか？

……あながち間違いではないけど。

この後、纏わりつくきくりさんを振り払って食器を食洗機にかけ、風呂に入った。

風呂を出た後、俺は玄関で下駄の鼻緒を修理していた。

後ろでその作業をきくりさんが見ている。

動画でやり方を見ただけが、意外と簡単だ。

「少年、いつそんなスキルを」

「動画で見たんで」

「直してくれるとかやっさしー！ますます好きになっちゃうぞー！」

上機嫌に俺の頭を撫で始めた。

別にきくりさんの為じゃない。

下駄がダメになったからと俺の靴を貸したとしよう。いつ返って来るかも分からないどころかボロボロにされてそうだし、後は返す為にという口実でまた家に来られても困る。

下駄よ、俺の為に蘇れ。

「できた」

「……ねーねー、少年」

「何です？」

「前より顔が明るいけど、何か良いことでもあった？」

……また顔か。

虹夏といい山田といい、俺の表情で全てを悟り過ぎである。

今度から仮面でもしようか。

「実は知り合いにベーシストがいて」

「ふんふん」

「バンド辞めたソイツが、また別の人と組んだらしいので近々ライブが聴けるかもしれないんです」

「えへへ、そつかそつか」

うりうり、と俺の頬を指で詰ってくる。

痛い。

「楽しいなら何よりだよ」

「はあ」

「でも、妬けちやうなく。私もベーシストなんだよ？」

「今のところ、『SICK HACK』のライブが日常生活で一番声出すくらい盛り上がりますけどね」

「好きな物増やしてくんだぞ。多けりや良いって話じゃないけどさ、そんだけ自分が何かに熱くなれるって証拠になんだからさ」

「……………」

「前よりいい顔してるぜ」

前回もそうだが、この人には何が見えているんだろうか。

それが知りたいと思う反面で、やはり深く考えたと迷走しそうな予感がある。

「ところで、きくりさん」

「んー？」

「今日も居酒屋にベース忘れました？」

「……………んあ」

「何処の居酒屋か憶えてますか？」

「えーと……………なははは……………」

「手伝いしませんからね」

「ありがとうー！」

「手伝いしませんからね!!」

無事にベースは見つかった。

♪

♪

♪

♪

今日は山田が不機嫌だ。

勘弁して欲しい。

昨晩はきくりさんの世話までして大変だったんだ。

次は山田の不機嫌取りなんて、連日で請け負うには苦勞が許容量を超える。彼女にしては、珍しくベースも弾かず、映画も観ず、ただソファアに寝そべって天井を睨んでいる。

お腹が空いている……なら言葉で要求するだろうし。

何が嫌なんだろうか。

「人の家で不機嫌になるのやめてくれ」

「前田の所為だから仕方がない」

「えー……」

今日一日の行動を振り返る。

俺は何かしたつけ。

そもそも、学校でも虹夏たちとはあまり交流しない。廊下ですれ違ったら挨拶するくらいだし、昼食を共にしたのもまだ数える程度だ。

山田の気を損ねる言動自体に思い当たる節もないので完全にお手上げだ。

「全然分らない」

「本当に？」

「え、そんな気付きやすい事か……？」

「……………やっぱり鈍いね」

山田が黙って首の辺りを指し示す。

首……………に何？

「かなり歯型が付いてる」

「……………ああ、これか」

俺は首の辺りに触れた。

きくりさん、かなり酔ってたからな。

結局歯磨きをさせるのは成功したが、寝るまでずっとガジガジと噛まれたり、頬を抓られたりして鬱陶しかった。

これは、その爪跡である……………いや噛み跡か。

そういうえば、前もこんな事があったな。

きくりさんの噛み跡を見た山田が、しばらくマジで噛み跡のある部分に爪を突き立ててきて痛かった思い出がある。

……………あつ。

悪い予感がして、俺は腕で首を防御する。

山田がソファーから立ち上がった。

「べ、別に悪い事はしてないぞ」

「うん」

「だから、オマエに責められる謂れは……その、本当にやる気？」

「うん」

ソファーの上で縮こまる俺の隣に山田が座る。

「前田……何してるの？」

「え、引っ掻かかれるんじゃ……？」

「私ネコじゃないけど」

「……」

「……」

山田の事が全く分からない。

「じゃあ、何するつもりなんだよ」

「……？何もしないけど」

「……？……??」

「隣に来ただけ」

山田にあっけらかんと口にされた言葉を聞いて、無駄に警戒していた自分が恥ずかしく思えた。

く、くそう！

羞恥で熱くなった顔を手で覆っていたら、手首からするりと赤いスカーフを解いて取り上げられた。山田がそれを自分のポケットに入れる。

……何で？

「あのさ」

「ん？」

「噛み跡があると何で怒るんだ？」

「噛み跡だけじゃないよ」

「えっ」

「今日は前田の家から前田の匂いがしないから」

俺の家から俺の匂い……。

なるほど、確かにきくりさんが撒いた臭跡が未だしぶとく残ってはいる。いくら消臭しようとしても、一日では簡単に取れない。

コイツも匂いとか言うのか……。

「ベースストって匂いに敏感なのか？」

「私は鼻が利く。美味しいものセンサーも抜群」

「おお、全然すごくない」

急に変な自慢をされても羨ましく思えない。

それより、スカーフを返して欲しい。

山田に掌を差し出して返却を要求するが、山田は見向きもしなかった。

「私がいる時はスカーフ禁止で」

「何でだよ」

「似合ってなくて違和感が凄いから、一々気を取られる」

「おう……………」

悲しくて変な声が出た。

そんなに似合っていないのかよ、俺。

折角初めての友だちから初めてのプレゼントだっていうのに、あんまりな言い方じゃないか。

内心で泣き叫びながら、俺はスカーフ奪還を諦める。

今度から目立たない所に付けよう。

「そんな似合っていない？」

「うん」

「逆に、俺は何が似合うと思う?」

「……ピアスとか」

山田が自分の耳を少し引つ張って見せる。

「ピアスか……ちよつと怖いな。」

「耳に穴空けたりするんだろ?」

「……アクセサリー……これとかは?」

山田が銀色の腕輪を出す。

「うーん、こういうヤツかあ……。」

確かに、これならヘタレな俺でも簡単にできるお洒落な装身具なのかもしれない。

スカーフで似合わないと言われた以上、何が自分に適しているのか逆に気になるので、こういうのにトライしてみるのも悪くないな。

「あれ、でも小さい」

「……」

「今度、そういう店とか行ってみるか」

「学校帰り、一緒に行く?」

「んー……まあ、確かに俺一人だと何から手を付けて良いか分からないし」

「私、審美眼には自信ある」

「じゃあ、頼むか……でも一応言っとくと、奢ったりとかしないからな」
「う」

「オマエも大概分かりやすいよな」

見え透いた物欲に釘を差しておく、案の定山田が固まった。

どうやら本当に奢って貰うつもりだったようだ。

つくづく強かというか、その割に杜撰なので不器用なんだか器用なんだか分からない生き物だ。

まあ、アクセサリー分があるので何か一つだけなら吝かでもない。

「あ、そうだ」

「……………」

「虹夏とバンド組んだんだって？」

「うん」

「いつか聴けるのか、オマエのライブ」

「……………」

俺が尋ねると、山田は少しだけ顔を逸らして小さく頷いた。

少し恥ずかしいのか、薄く頬が赤くなった。

本人が確約してくれたので、いつも家で聴いていた山田リョウの本気の音色がライブ

にていよいよ体感できるようだ。

それなら、まあ……奢ってやろう。

チヨコに詫びろ・前編

二月中旬——今日は休校日だ。

下北沢高校の受験会場となっており、俺が普段過ごす教室も志願者たちの静かな闘志の熱に満ちた戦場と化す。

そんな彼らに失礼なほど、我が家では山田が炬燵で緩み切っていた。

足元は炬燵に入れて暖め、ゆったりとした半纏で上下をカバーしている。

しかも、手元は蜜柑というかなりの満喫ぶり。

羨ましいくらいに炬燵で憩っていた。

こんな日まで俺の家で寛がなくても。

呆れながらも、彼女の前に湯呑みを出す。

「すっかりここに慣れたな」

「私は炬燵の精……」

「だから出したくなかったのに」

炬燵を出せと聞かなかった。

朝からそんなダル絡みをされてしまっただけは、寝起きの懈い感覚も相まって根負けしてしまう。

出したが最後、山田は住み着く。

きつと今彼女を引っ張り出そうとしても、絶対に出てくる事は無いだろう。

それにしても、受験かあ。

一年前までは俺たちも入試を受けていた。

あの時は前田家に余計な心配をかけないよう進学校に行く事で頭の中は必死だったのを憶えている。でも、来年頃にはそろそろ大学をーとかそんな話でまた死物狂いになるんだろうな。

「山田は大学とか行くのか？」

「考えてない」

「就職か、意外だな」

「いや、就職するかも分からない」

「え」

「特に何も考えてない」

「考えてないって空っぽの意味だったのかよ」

聞いた事を後悔する内容だった。

俺は将来どうしようかな。

一応、地方の大学に行つて前田家から離れる生活を目指している。看護系の大学に進めば、奨学金を受けても卒業後に大学が指定した施設で何年か働けば返済を免除される制度もあるらしい。

出来るだけ、頼らない生活がしたい。

その為にも推薦枠を勝ち取るべく成績はキープしたい。

「前田は決まつてるの？」

「地方の大学に行きたいかな、遠いところ」

「私に通える距離にしてね」

受験条件に変な物が追加された。

絶対に無視するけどさ。

流石に山田と卒業後も関係が続くかは今のところ分からないにしても、将来設計に山田を入れると何もかもが狂う。

でも恋人とか出来たらどうしよう。

遠距離で相手に想い続けられるような人間とは思えないし……というか恋人出来るのかよ、教室ですら誰にも話しかけられないようなヤツが。

ひとりの将来を心配する前に、どうにかしないとな。

「卒業後もオマエの面倒見たくない」

「……」

「人のベッド取るし、飯はよく食うし、俺の話聞かないし」

「たしかに」

「言っておくけど、一人暮らしになったらここより狭いし、今より寝心地悪いベッドになるぞ」

「別にいいよ」

いや、俺が良くない。

「前田のベッドだから寝たいだけ」

「えっ」

「あとは前田のご飯が食べたいし、狭くても別に良いよ」

「え、あ、うん……?」

ちよつと理解できない。

俺のベッドだから寝る、とはどういう事だ。

どんな物でも俺が使用している事が条件であるかのような口振りに脳の情報処理が追いつかない。

飯は、まあ何となく分かる。

金欠だし都合の良い飯処が欲しいのだろう。

うん……………うん？

「いま難しい話してる？」

「してないよ」

山田に否定されて、頭が痛くなる。

これは、例の『鈍い』とかいうヤツか。

俺が察知できていない情報があの言葉には含まれている。相談するか正直に意味を教えてくださいと乞うのが正解への近道なのだろうが、山田相手にそれをやるといいう事が悔しい。

難しい話では、ない。

単純だからこそ見落としているとか？

「つまり」

「……………」

「俺から搾取するのが愉しいから、別にベッドや住まいを変えようが問題ないって事か」

「私はそんな性格悪くない」

「それは絶対に違う」

性格は悪い方だと思うぞ。

しかし、ここまで来ると益々意味不明だ。

こうなれば、虹夏に聞くのも……将来も堂々と寄生すると宣言している狂気の女に対し、きつと彼女も苦言を呈してくれる。——いや、早まるな！

この程度で助力を乞うのか……と山田に内心で嘲笑われるかもしれない。

現に、俺を見る目は何かを探るようだ。

いつものようにポーっとした感じとは違う。

落ち着け。

冷静に考えるんだ。

俺も蜜柑を一つ手にして皮を剥く。

その途中、炬燵の中で山田の足が俺の足をつついた。

痒いし擦りたい。

手元から顔を上げると、腕枕に顎を埋める山田と目が合った。

「前田無しだと生きていけないって言ってる」

その一言に、俺は言葉を返せなかった。

いや、頑張つて生きて下さい。

そうやって軽く返そうとしたが、喉も舌もまるで思考と切り離されたように動かない。

山田にそう感じさせる『価値』が俺に？

いや、いつものようにその場のノリで話しているに違いない……が、リアクションがいつもと異なる印象を受ける。

え、本当に？

そう思うと……頭の中で組み立てた将来設計が霞がかつたように朧気になる。

まるで、呪いのようなだ。

「……」

「前田」

「……何だよ」

「その蜜柑、要らないなら頂戴」

白い手が伸ばされる。

俺はその掌に切り分けた実を一つだけ乗せた。

ぱくり、と山田が躊躇いなく口に放る。

「引越しても、私も寛げる物件で」

俺はその言葉に、どう返したか分からない。

ただ——山田がそれに対してふ、と微笑んだ。

♪

♪

♪

♪

休校明けの学校に登校する。

校内はいつもと少し違う賑わいを見せており、そこかしこで何やら告白イベントのよ
うな物が催されていた。

高校って、こんなピカピカしてるのか。

バレンタインだからと浮かれているけど、陰キヤの俺にはかなり関係無い。小中学校ではチョコを一つも貰った事が無いからな。

憂鬱だな。

友だちも出来ないのに周囲ではカップルが誕生する。

彼らの青春の中、俺の影だけがあまりの光量で輝いていく彼らの光に押し潰されて消滅するのだ。

南無三。

俺は教室に入り、自分の席に着——……？

机の上に何やら大量の何かが積まれていた。

俺はその内の一つを手にとって確認する。……市販のチョコだ、積まれた物を改めて見るといずれもチョコチョコチョコチョコチョコ……!?

な、何が起きているんだ。

困惑してチョコを凝視していると、教室中で話していたクラスメイトたちが俺の机を中心にぞろぞろと集合する。

クラス一同の視線が、俺に束ねられた。

……何これ、儀式でも始まるのか？

「あの、前田くん」

「あ、はい」

クラスメイトの男子一人が話しかけてきた。

名前はたしか……覚えていないごめんなさい。

ただ、クラスを中心人物という陽キャの権化だった気がする。

「いつも、ごめんな」

「はっ?」

「君は特に悪いことをしていないのに、何か……僕らが気に障るような事をしてるから、機嫌が悪いのになって。これは、皆からせめてもの詫びの気持ちで」

「Oh……」

ぐざり、と胸を謎の衝撃が貫通する。

いつも機嫌の悪いヤツだと思われていたのか。

いや、確かにそうかもしれない。

「い、いや……別に機嫌悪いワケじゃないよ。逆に気を使わせたり空気悪くしたらゴメン」

「……」

「……キミは、優しいね」

「へっ?」

評価が180。逆転した。

今の一言で？ チョロ——ではなく、少しは疑った方が良いのではないのか。

「みんな、実は見ていたんだ」

「……………」

「キミが他クラスのあの山田さんに、自分の昼食を分けてあげて、自分の分を買いに行くところ。バイトでは笑顔で優しく接客してるところ。夜に変な酔っ払いの介抱をしてあげたりしているところ。本屋で小さな子どもが取りたがっている高い位置の本を取ってあげているところ」

「あ、はい」

俺の善行？らしき物を挙げている。

見ていたって……見過ぎでは？

普段から俺つてもしかしてクラス総員に監視されているのか。

それに、善行と呼ばれる程の事ではない。

山田はどうしようもないし、バイトはむしろ笑顔でやらないと客や先輩に感じが悪いとキレられたりするし、きくりさんは風評被害の可能性があるので介抱せざるを得ないし、その本屋での一件は子どもから直々に傲然と「あれ取れよ」と指図されて従った末の行動だ。

良いように……誤解されている？

いや、これはチャンスか。

虹夏以外にも友だちを作る好機なのか。

この機を逃したら、来年度のクラス替えにてきつと誰一人も友人のいないさらなる孤独が始まる。

ここで一人でも交流があれば、数は減るとはいえ再びゼロから始まる事も無い！

チャンスに違いない！……のだが。

このチョコ、受け取るには量も気持ちも重い。

クラス一同で俺の為を想ってくれたとしても、かなり一人で処理できる物量を超えている。

「こ、このチョコは……？」

「キミの優しい心根を疑った僕らからの謝罪の気持ちも含めている」

「意味が分からないくらい優しい」

「逆にこの教室が怖くなってきた。」

「あ、ありがとう……大事に食べるよ」

「もうすぐ進級してしまうから、せめてクラスが分かれても皆がいい気分で別れられるようにって、僕らで企画したんだ」

「ア、ソウ……ヘエー」

「まだお互いぎこちなくて難しいかもしれないけど、これから仲良くしたいな」

「も、モチロン」

差し出された手に、震える手で応える。

固い握手が交わされた。

もう何がなんだか分からない。

その後、クラスメイトが俺の机に殺到して色々質問されたりしたが、ほとんど記憶は無かった。

そんな風に、ほとんど上の空だった意識はある人に呼ばれるまで戻らなかった。

「一郎くん！」

はっ！

だ、誰かに呼ばれた。

振り返ると、虹夏が後ろに立っていた。

ひらひらの笑顔で手を振る。

周囲にはまだ話しかけたいというような姿勢で止まっているクラスメイトもいるが、

彼らの輪に入ってからまで伝えたい急用があるのだろうか。

「ど、どうかした？」

「うん。一郎くんに渡したい物があつて」

「渡したい……?」

「はい、これっ」

背中に回していた手が俺の前に差し出される。

虹夏の手の中には、ラッピングされたチョコがあつた。

美味しそうだな。……ん？

「これは？」

「バレンタインチョコだよ」

「……マジで?」

「一郎くんには、これまで家に泊めて貰ったりとか色々とお世話になつたしきー」

虹夏が輝くような笑顔で渡して来る。

できれば、もう少しだけ声を抑えて欲しい。

そこかしこで「え、泊めた?」とか「下の名前で」とかよからぬ噂の種が芽吹こうと

している。

俺を見る視線の色の変わったのを肌で感じ取り、チョコを受け取る手が思わず止まっ

た。

すると――。

「ほら、受け取って」

虹夏が俺の手を取って、チョコを握らせる。

うわ、手やわらか……てか小っさい。

「大事に食べるよ」

「……絶対にリヨウにあげちゃ駄目だよ」

「あ」

俺ははっとして教室の入口を見た。

山田は……いない。

今の内にチョコを隠しておこう。……山田が見つけたなら、容赦なく無許可で食べ始める。家に持ち帰って冷蔵庫に容れても危険な気がするな……え、食べるしかない？

山田に手伝ってもらおう……というのは、俺を想ってこんなにも用意した彼らに失礼かもしれない……。

バイト前に一度家に帰る。

チョコが溶けてしまうから一旦冷蔵庫に入れなくてはならないのだ。
ただ、大きな懸念がある。

「前田」

「駄目だ」

「前田」

「ダメだ」

「前田……………」

「…………だ、駄目な物はダメだ」

希う山田の視線から逃げるように歩く。

最近、自覚したことがある。

山田が追いつめられたような状況下にあると、つい手助けしてしまう。虹夏にも相談したら、彼女も同様のことが幾度もあったそうだ。

山田にはどうやら才能があるらしい。

……ヒモになる、才能が。

このチョコは絶対にやらない。

特に——虹夏から貰った手作りのチョコはね。

これが最大の楽しみでもある。

……でも、クラスメイトから貰った大量のチョコに関しては一人で処理しきれないのもまた事実だ。

ま、まあ……手伝って貰うだけだし？

あげても、良いのか……。

「コレ以外は少しだけ食べて良いぞ」

俺は虹夏のチョコだけ避ける。

「前田、モテモテ」

「い、いやあ……これは好意っていうか何ていうか」

見るたびに胸が痛むチョコだ。

あんな風に気遣われているとは思いましなかった。

あの後、クラスの陽キャ男子やクラスメイトたちとロインの連絡先を交換できたが、慣れない大量のロインに目が回ったりもしたな。

でも、大半が虹夏とどんな関係かとか青少年らしく噂や色恋が好きなようで、俺と彼

女について邪推が止まらないらしい。

マジで今日は疲れた。

でも、彼らの気持ちではある。

山田に全て食われては駄目だ。

そこで、予防策。

「山田、俺はこれからバイトだけどき」

「うん」

「チョコ食う時は、コレを見ながら食え」

俺はそう言つて、映画一本を取り出す。

題名は『チャーオーとチョコレート工場の秘密』。少し狂氣的なチョコ尽くしの映画で、これを見ていれば視覚的にお腹いっぱいになって歯止めが利く筈だ。

山田が頷いたのを見て、俺はバイトへ向かう。

これで、きつと少しは残っているはずだ――。

「全部、食べたっていうのか……?」

山田が爪楊枝で歯を掃除しながら頷く。

バイト帰りの悲報に、俺はその場でくずおれた。

「あの映画を見てたら止まらなくなった」

「逆効果だったのかよ」

「大丈夫。前田に言われたチョコは食べてない」

「えっ」

俺は冷蔵庫に駆け寄って、中を検める。

すると——虹夏のチョコは無事だった。

おお、おお……!!

山田も自制心が働いたようだ。

何という奇跡……と思っていたら、ラッピングの封が若干開けられた痕跡がある。

……中身はそのままだったので、恐らく手を出す一歩手前だったのだろう。

「でも手え出してるじゃんかよ!?!」

「いや、チョコ入ってる」

「虹夏の手作りなんだからやめろよな」

「やっぱり虹夏のチョコだったんだ」

すると、山田が納得という風にならずく。

「一番美味しそうだった」

よし、しばらく出禁な。
コイツは危ない。

チョコに詫びろ・後編

バレンタイン以降、クラスメイトにはよく話しかけられるようになった。

バイトとは違う環境で構築される人間関係。

不思議と新鮮な気分だった。

特に最近、ストレスの無い日を送っている影響もある。

理由としては、まず山田を出禁にした事だ。

あまり叱らなかつたが、鍵を没収して二週間を言い渡した。渋々と出ていくアイツを見送つてから急いでチョコを食べて虹夏に感想を送ると、今度一緒に出かけようと誘われたので了承のメールを返しておいてある。

それにしても……不思議だ。

特に、山田に憤らなかつた自分に驚いている。

好きな子のチョコを食べられかけたし、言い付けを破つた山田へかつてない程の怒りが湧くんじやないかと、一瞬悪怖れもなくクラスメイトのチョコを完食したアイツを前

にした時に思っただけはいたが一切そんな気配は無かった。

何でだろうか。

一目惚れの女の子、なんだけどなあ。

「んー」

「どうしたの前田くん、考え事かい？」

「え？」

「凄い顔してたよ」

陽キヤ男子の一人が話しかけてきた。

そんなに物憂げな感じが伝わっていたのか。

陽キヤ、か。

恋愛については、俺よりも一日の長があるのだろう。

先達として教えを乞いたい、初っ端から恋バナなんて俺が叩き込んできたなら引かれるかもしれない。

今更の話だけれども。

「少し、教えて欲しいんだけど」

「うん」

「実は去年の春に一目惚れした子がいてさ」

「凄いパワーのある話題だな」

予感していた通りの反応だ。

だが、陽キャ男子は席の横に立っていたのに俺の前の席に座って聞く姿勢を作つてくれている。

優しさが眩しい。

そうか、陽キャつて太陽なんだな。

「実はその子にチョコ貰つて」

「おお！凄いいじゃん！」

「初めて好きになつた人でさ。でも、そのチョコを他の子に食われかけたんだよ。しかも、本人はチョコをくれた子とも交流があるんだけど反省感ゼロで」

「あ、あちやー」

「でも、俺あんまり怒れなかつたんだよな。思えば貰つた時も内心で叫ぶほど喜んだりもしてなかつたし」

その話を聞いて、陽キャがピンときた顔をする。

もう察している雰囲気だ。

俺自身が分からないというのに、この人は何処から答えを導き出せたのだろう。陽キャだからこそ理解できる分野の問題だともいうのか。

「どう思う?」

「いや、それは最初から答えが出てるよ」

「それって」

さ、最初からって。

そんなに初歩的な事なのかよ。

これでは山田にも言われたが、やはり俺は自分の感情に対しても鈍いという事になる。

いやいや、彼がまだ正解というワケでもない。

まずは、彼の回答を聞いてからだ。

「前田くん、春の時ほどその子を好きじゃないんだよ」

陽キャ男子が確信を宿した声色で断言する。

俺は……唾然とするしかなかった。

春の時ほど好きではない、そんな単純な答えなのだとしたら拍子抜けにも程がある。

でも——好きでは無いと断言されても、否定されたと怒る気にすらならない。寧ろ、腑に落ちたというように静かな納得が胸の内に生じる。

俺が虹夏を好きではない、か。

思えば、彼女に手を握られた時もそうだ。

以前ならば、浮足立つほど喜んだ。

ただ、クリスマスに招かれたり少し話すようになったりして、少しずつ距離が縮まっていた。

慣れなのか、彼女とも落ち着いて話せるようになったと自覚している。

チヨコを渡す時に手を握られたけど、手の小ささや感触にはドギマギしたが、虹夏さんに握られた事実自体に興奮していたか微妙だ。

「好きじゃない、か」

「うん、よくあるよ」

「あるの?」

「手が届かないから良いっていう人もいるし。君の感情って、どっちかという恋愛の好意じゃなくてアイドルとかに対する憧憬だったりするんじゃない?」

「憧憬……」

俺は机に視線を落とした。

この違和感是好意の種類による問題だ。

虹夏に対して憧れを抱いていた——と考えると、今自分が彼女と話すようになった頃

より変化した自分の感情にも説明が付く。

……薄情な人間だな。

チョコの件で焦りもしないとは。

心の底では、クラスメイト達に貰ったチョコと虹夏のチョコを同価値で見ている、食べられても不安はないと判断していたから、封が開けられかけた痕跡を見ても怒気が湧かなかったのだろう。

山田も山田だが、俺も大概だ。

彼女の自制心の無さを知っている者としては配慮が足りなかった。

次の一緒に出掛ける時にでも虹夏に一回謝ろう。

「どうかな」

「いや、納得した」

「助けになれたなら何よりだよ。……でも、前田くんつてば知らない内に恋とかしてたのかあ。もっと早く話しかけてればよかったな」

「それは……近寄るなみたいなおーラが出てたから？」

「かもね」

「ぐ」

「この陽キャ、凄い。」

今まで言葉すら交わさない仲だったのに。

バレンタインで少し気を許した途端、もう内懐へと大胆に踏み込んでくるのではないか。

遠慮のないリアクションに少しだけ傷つく。

でも、これが当たり前なんだよな。

今まで俺がやって来なかっただけで。

「助かったよ」

「あ、そうそう」

「ん？」

「さっきのヤツに補足だけど……実は他にしっかりと好きな子がいるから、憧れの子をそんなに注視しなくなっただんだと思うよ」

ウインクまでして陽キャが告げる。

他に好きな子、か。

虹夏への感情が恋愛ではなかったと理解した今、俺はまた振り出しに戻ったのだ。

恋愛については、ほとんど知識ゼロ。

果たして、俺の好きな子って誰だろう。

♪

♪

♪

♪

放課後になって、俺は教室を出た。

バイトも無いし、今日はゆっくり映画三昧かな。

……あ。

「一郎くん、いま帰り?」

「前田だ」

昇降口で虹夏と一緒にいる山田と遭遇する。

出禁にされたのに、元気そうだ。

しかし、いつもと違うのは……『食いしん坊』と書かれた札を首から下げている。これは一体、どういう処刑法なんだろう。

俺の視線で気付いた虹夏が苦笑する。

「あ、これチョコの罰ね」

「罰？」

「一郎くんへのクラスメイトのチョコ目一杯食べた罰！」

「な、なるほど」

ぷんすかと虹夏が腰に手を当てる激怒アピール。

山田は相変わらず反省感ゼロどころか、チョコの味を思い出しているかのよう。「美味しかった」と呟いている。本当に懲りないな、コイツ。

「私のも食べようとしたしね」

「あんまり怒ってないんだ？」

「まーね。リヨウならやると思ったし」

「信用無いな」

「だって！一郎くんと食べたクリスマスケーキ、残ったから私用につて残してたのにリヨウが冷蔵庫にあるからつて食べちゃったんだよ？寧ろ私のチョコが残ってたのは奇跡だつて」

「ああ……」

どうやら本当に予見していた事態のようだ。

逆にそう思われる山田つて……。

「でも、俺がすっかり管理してないから」

「いやいや、一郎くんは悪くないでしょ」

「そう。美味しそうなチョコが悪い」

「貴様は反省しろ」

「ハイ」

虹夏に冷たい声で言われて山田が萎縮する。

自業自得、ここに窮まったな。

しかし、話してみた様子では大して俺の杜撰な管理による虹夏と山田の不和などは無さそう。普段から二人は本当に友だちなのかという信用の無さが垣間見えるが、今まで友だちすらいなかった俺には分かり得ない何かがあるのだ。

うん、そうに違いない。

「二人も今帰り？」

「うん、そうだよ。あつ、一郎くんはこの後バイトか」

「今日はフリー。虹夏は？」

「フリー！じゃあ、遊ぼうよ」

目を輝かせて虹夏が詰め寄って来る。

映画三昧を企画していたので、若干遠慮したい気が……あ。

遠慮したい、か。

やっぱり、春頃とは違うんだな。

「ん？どうしたの？」

「いや、何でもない。……何かする予定？」

「ふっふっふっ……良かったら、『STARRY』でスタ練する私たちを見ていく？」

「スタ連……あの迷惑な？」

「スタジオ練習——！」

ぼこ、と背中を小さな拳で殴られた。

痛くないのが幸いだ。

しかし、『STARRY』は虹夏のお姉さん——星歌さんが運営しているライブハウスだ。必然的に、あのカッコいい歳上のお姉さんに会える。

それに、スタジオ練習となれば……。

ちらりと山田を盗み見る。

俺の視線に気付いた彼女が、含み笑いをこぼした。

「私の音が聴きたい？」

「虹夏のドラムが気になるな」

「なぬっ？」

山田は反省しておけ。

でも、内心楽しみにしているのは否めない。

ライブハウスで聴ける音がまた普段の物とは違うのは、きくりさんのライブ演奏を見ていて実感している。

スタジオ練習に部外者が立ち入っても良いかと躊躇われるが、虹夏たちが対して問題視していないから誘ってくれているのだ。

ここは貴重な体験になるし、行くべきか。

俺が頷くと、早速とばかりに虹夏が先導する。

俺はその後を追って歩き、隣に山田が並ぶ。

「反省してないから、一週間プラスな」

「……実は最近、虹夏もご飯くれない」

「自業自得だな」

がくりと山田が肩を落とす。

懲りてくれ。

「そういえば、前に言ってたボーカルの人とか見つかった？」

「それが募集中なんだけどねー」

「二人は歌えないの？」

「私は下手だし……」

意外だな。

虹夏つてドラムをやっているからリズム感は備わっているんだろうに、歌うのは苦手なのか。

なら、山田は？

ベースでもボーカルは張れる。

何せ、きくりさんがそうだった。

それに、山田が準備室だったり俺の家で歌っている時は上手な印象を受けた。

「山田は……」

「私がやると、ワンマンライブになってしまう」

「そうなのか……」

「コラコラ、一郎くんも真に受けちゃ駄目だよ」

虹夏に即否定されるが、当の本人である山田は未だ自信有りげな表情を崩さない。度し難いやつだな。

しかし、二人が辞退しているならボーカル担当になる子に求められる歌唱力もまた期待が高くなる。俺がライブハウスでいつか彼女らのバンドが演奏する時、どんな仕上がりになるのかな。

「前田は私の歌が上手いのを知ってる」

「そうなの？」

「何度か聴く機会があったから。綺麗な声だなとは思ってる」

「ふふん」

「でも、山田のワンマンっていうのは疑問だな」

「……」

疑わしいからな。

そんな会話を繰り返している内に、件のライブハウスへ着い……………て……………。

地下へと伸びていく階段の先、薄暗い影の中に沈んだ黒い扉を見て俺は思わず足を止める。

ま、魔境……………？

じ、実は処刑場だったり……………もしかして、笑顔ではあるが実はチョコの事をまだ許してないのでは？

「二郎くんっ」

虹夏が笑顔で手招きしてくる。

「さ、行こうー！」

ごめんなさい、謝るから殺さないで。

人知れず幸せに

二月下旬。

俺は玄関にて硬直していた。

そこには、金沢八景にいる筈の親戚——後藤ひとりがぎこちない笑みで合格通知の紙を手を立てていたからだ。

見納めになるだろう中学の制服に身を包み、その体には重そうなギターケースを背負いながらもすつくと直立する姿は何とも頼もしい。

ひとりは震える唇で。

「いっくん。私……合格したよ」

俺はその一言を受け——彼女を抱き寄せた。

み、えツツ!? みたいな悲鳴が聞こえたが、俺は構わず胸の内に湧き上がった歓喜に身

を委ね、腕の中のひとりごと回って踊る。

ギターケースの重量など気にもならない。

ここは天国だ。

ここは楽園だ。

ひとりがいて、合格通知がある。

玄関先でくるくると回る俺たちを見る視線は無い。

回転力が増して、危うく遠心力に引つ張られて体勢を崩しそうになり、俺は扉の横の壁に背中を打ち付けながらもひとりをより一層強く抱き締めた。

腕の中で謎の蒸気が立っている。

そんな物は気にしない！

「ひとり、頑張ったな」

「あ……!?!」

「オマエはそうやって、いつも俺を幸せにしてくれる。今この瞬間、何もかもがどうでも良くなるくらいに」

「ひう……!」

ひとりが俺の腕を叩く。

どうやら力が強すぎたらしい。

慌てて放すと、ひとりは顔を真っ赤にしながらお腹の辺りを押えて何かに堪えている。

体が冷えたのかもしれない。

呼吸が荒いのは、きつと俺が抱き締めすぎて息が出来なかった所為だ。危うく歓喜のままにひとりを苦しめ続けるところだった。

自制しろ、前田一郎。

俺は彼女を家の中へと招き、玄関扉を閉める。

まだ出している炬燵もあるし、そこで暖まって貰おう。

手を洗った後、炬燵に入ったひとりに丁度良く先程淹れたばかりのコーヒーを渡す。

今はこれしか温かい飲み物が無い。

ただ、ひとりは口をつけてちびちびと飲んでる。

良かった、どうやら苦くても飲めるようだ。

カップを卓上に置き、ひとりがチラチラと俺を見る。

どうした、そんな事しても可愛いだけだぞ。

「い、いっくん」

「ん？」

「い、合格したよ」

「うん、偉いぞ」

「ここ最近で一番の嬉しい報せだ。」

「あの……私が幸せだといつくくんも幸せって言ってた……よね？あつ、違う……？」
「言ったよ」

「そ、そっか……」

何の質問だろうか。

この前の年末に帰った時の言葉の再確認。

ひとりの幸福が俺の幸であると言った事だが、あれが今の受験合格に関係していることなのか。

俺が疑問に思っていると、ひとりが安心したように笑う。

「が、頑張つて良かった……いつくくんが喜んでくれた」

心臓が大きく跳ねる。

全身を突き動かそうとする衝動をぐつと堪えた。

ひとりを全力で抱き締めたい感情に抗う。抗う意味が自分でも分かっているが、今ようやく家に来て落ち着いたばかりの彼女に迷惑だと自身に言い聞かせる。

落ち着け、呼吸を整えろ。

今日のひとりは刺激が強すぎる。

わざわざ感謝する為に、慣れない下北沢を孤独に歩いて俺の家を目指した。

しかも、メールではない——自分の口で。

連絡すれば一通で済む内容を、ここに来てまで伝えに来てくれたんだ。

健気すぎる……。

「……」

「……いっくん？」

「ひとり。これから学校に通う時、朝起きるのが辛かったらいつでもここを使え」

「……そ、それはちよつと」

「えっ」

何故か遠慮された。

俺が施せる最大の支援が拒否された。

「な、何で」

「い、一回甘えたら……二度とここから離れられないと思うし……」

「それは寧ろ——」

「……?」

「いや、何でもない」

変な事を口走りそうになった。

理性がまるで働いていない。

一度頼ったら、惰性でそのまま居着いてしまいそうという彼女の危惧だが、寧ろ俺からすれば好都合である。

実質的にひとりとずっと一緒に居られる。

これ以上の至福があるだろうか。

ノンストレスどころではなく、幸福だけが蓄積していく。

拒否されては、逆に困る。

遠慮はしているが、嫌というワケではなさそうだ。

ひとりもここを利用する好条件を心得ている。

それなら話は早い。

「ひとり。……頼ってくれよ」

「あっ」

「ひとりの力になりたい」

「う……うう………つ、ツライ時は……お世話に、なります……！」

「うん（………ッしゃあ!!）」

苦渋の決断を下したひとりに対して失礼だが、心の中ではガッツポーズを決めたい程に浮かれている。

今すぐ彼女に何かしてあげたい。

「こんな朝から来てくれるとはな」

「さ、さつき合格発表で……高校に」

「ああ。だから制服なのか」

「い、一番にいつくんに伝えたくて……あつ、お母さんとお父さんにもメールしなきゃ」

慌ててひとりが両親へ連絡を入れる。

俺はそれを傍らで見守りながら、今この空間全体を満たす幸福感に浸る。

今日って俺の命日だったか。

幸せの供給量が許容範囲を超えて、途轍もない災厄の予兆としか思えないくらいだ。

「ひとり、入学式は俺も行くよ」

「えっ、でも学校が」

「多分だけど、その日は俺の学校もまだ始業していないし、余裕で出席できる」

「……………えへへ」

部外者の俺がいても迷惑かもしれない。

そんな考えが過ぎつたと同時に、ひとりが嬉しそうに笑ったのを見て何でも良くなっ

た。

今日は祝日だ。

この後、ひとりは金沢八景へと帰る——それに俺も同行して、何か祝いたい。

ひとりはコーヒーを飲み切って一息つく。

体が温まったのか、さっきより寛いでいた。

ひとりの手に触れると、まだ少し冷たい。

二月の下旬ともなれば、冬の寒さのピーク。あと一週間か少し経てば、緩やかな春の訪れによって着る服も軽くなる。

その時には、この子も高校生だ。

「しかし、ひとり」

「あっはい」

「合格通知を貰いに行く時、そのギターケースで良かったのか？」

「……………」

え、あっ…………ひとり目から光が…………。

「注目されました」

「あ、ああ…………」

皆まで言うまい。

ひとりは会場で衆目を集めたのだろう。

慣れない場所で注目されるなんて、きつと途轍もないストレスだったに違いない。そうして甚大なダメージを負いながらも俺の家を目指した。

ならば、これ以上は負担をかけるまい。

少しでも、ここで憩いを得て欲しい。

「ひとりも遂に高校生……」

「い、いつくんに心配かけないくらい友だち作って……バンド組んで……いひつ、うへへへへ……」

「うん、楽しみにしてる」

「あうー！」

壊れたように笑っていたが、頭を撫でるとすぐ俯いて大人しくなる。

「何かあったら、すぐ相談するんだぞ」

「う、うん」

「特に勉強は、俺を一番に頼ってくれ。そこだけは未来のひとりの友だちであろうと譲らない」

「お願いします……」

「でも、恋の相談とかは無理だからな。……俺も未経験に等しいし」

「そうなんだ……へへ」

ひとりはまた喜んだ。

ひとりが笑うなら、俺が不幸でも別に良い……報われるから。

こうして一緒にいる時間だけで満足だ。

そこにひとりの笑顔があれば、何にも替えられない価値が生まれる。

俺にとって至上の価値。

「いっくん」

「ん？」

ひとりの白い手が俺の頭に触れた。

慣れない手付きで、髪の上に掌を滑らせ始める。

どうやら、撫でているつもりらしい。

意図が分からず、でも心地よい感触に俺も黙って身を委ねる。心做しかひとりも楽し

そうなので、しばらく黙って受け身になった。

いつもは、俺が撫でているのに。

「いっくんも、が、頑張ってる」

「え？」

ひとりの声が、頭の中で反響する。

「わ、私には絶対に無理だけど……バイトもやって、勉強もして、私なんかの面倒も見てくれて……いっくんも偉い、偉いよ」

もう堪えられなかった。

そこから先、俺に意識は無かった。

次に目を覚ましたのは、一時間後の事だ。

床でぐったりと倒れ、赤い顔のまま白目を剥いて失神しているひとりと、それを見下ろしている俺——という状況だった。

これは、つまり……。

「俺が、殺ったのか………？」

その後、二人でお茶をした。

ひとりに迷惑をかけ過ぎた。

俺は駅前まで彼女を見送り、改札を抜けていく後ろ姿に手を振る。

これで春から俺の生活は華やくだろう。

しかし、いつでもひとりを迎えられるようにするには——山田を追い出すしかない。

来週で出禁期間が終わるが、いつそのこと無期限にしてやろうか。

そんな事したら悲しむのは目に見えているし、最近また野草に手を出して腹を壊しているのを目撃してしまった。

……泊めなくても、飯くらいは出そう。

勿論、ひとりがいない時に。

春になれば、ひとりと会いやすくなる。

その事実に浮かれて——。

「……あ」

春といえば、もうすぐだ。

海外に出張に出ている両親が帰って来る。

まだ帰国に関する連絡は無いが、いずれにしても来月の何処かに予定される。

正直に言うのと憂鬱ではある。

また彼らに気を遣わせないように『息子』を演じなくてはならないのだ。……未だに演技抜きで接することが出来ないのは俺の努力不足だ。

また、嫌な事が始まる。

「はあ……おっ？」

背中に何か引つ付いた。

俺が肩越しに後ろを確認すると、同じように背後からこちらを見上げる山田と目が合った。

随分と顔色が悪い。

あと……迷惑な程に腹の虫が大絶叫していた。

「ここで何してるの、ご飯」

「もう飯処の認識が強過ぎて名前じゃない」

「いや、名前は憶えてる。……ごめん、頭回らないから何かご飯を」

「……やれやれ」

俺はポケットから鍵を出して山田に見せる。

「昨日の晩飯の残りで良いなら」

山田は、目を輝かせてぶんぶんと縦に首を振った。



いっくんへ合格報告をしに来た私——後藤ひとりは、親戚の家の中で違和感を覚え

る。

普段は独りで生活しているという。

でも、キッチンに行けば洗ったばかりのカップが二つあったり、いつくんの趣味では無さそうな物がそこかしこに見受けられる。

何より、居間の隅に重ねて置かれる畳まれた洗濯物を見ると——明らかにいつくんの体格に合わない服がある。

こ、これって……か、かの、カノジボエツッ!!!

ぐ、下北沢で唯一の憩いになると思っていた場所でコンプレックスを強烈に刺激する物を目の当たりにしてしまった……。

でも、いつくんに……恋人、か。

良かった。

私が勝手に心配してただけ……いつくんは、ちゃんと自分の人生を生きられているんだ。

私だって偉そうな事は言えないけど、いつくんが自分の生活に少しでも楽しみを見出して、楽しく生きているなら何でも良いや。

「ひとり、どうした?」

「えへへ……あ、すみません気味悪い笑い方して」

「可愛いから問題無いぞ」

「あ、づ……！」

歯の浮くような台詞なのに、その真剣な眼差しと声色から一切真意を疑う余地無く心で受け止められてしまう。

し、心臓が跳ねてる……何か運動したみたいで疲れる……。

「それで、どうかした？」

「いっくんが再度尋ねる。」

これは、言わない方が良いよね。

いっくんは直ぐに自分の事を卑下したりしてしまふから、きつとここで教えても卑屈に否定されてしまう。そうやって、いっくんはいつか裏切られたりするのが怖いから傷付かないように否定して、逆に自分を傷つける。

今は、何も言わない。

「いっくんが幸せならいいや……」

綺麗だった

アラームも無く目が覚めた。

憂鬱だな。

三月中旬——春休みに突入したこの日、我が家に両親が海外から帰って来る。午前中に着くとの事なので、早めに起きて出迎えをしなくてはならない。

彼らの滞在は、五月まで。

彼らが海外出張の話を受けた理由の一つは、薄々と勘付いている。

俺が一人でも大丈夫と言ったからなのもある。

だがそれ以上に——俺との関わり方がまだ分からないのだ。家族という形になって数年も経つが、形は備わっても中身は伴わない。

気遣って、でも一緒に居づらい。

彼らはこれから『親』を演じる。

これからまた俺も『息子』を始める。

「逃げられないしな……」

俺はベッドから起き上がる。

ん、何か頭に違和感が……。

触つてみると、どうやらヘッドフォンを装着しているようだった。

いや、ヘッドフォンって？

「……俺のじゃない」

なぜ、ヘッドフォン？

いや、まあ……それはさておいて。

アラーム前の起床ということは七時半前。

彼らの到着予定時刻はその二時間後なので、それまでに彼ら用の朝食を用意したり、

洗濯を終わらせ——……？

見間違えだろうか。

ベッドのサイドテーブルに乗せられた時計を見る。

短針は10、長針は6を指していた。

つまり……じ、十時半……!?

さつと自分の体から血の気が引くのが分かる。

嘘だろう。

アラームが起動しなかったのか。

たしか、置き時計とスマホでアラームをかけていた。

時計の方は……止められている。

もしかして、寝惚けて俺が押したのだろうか。

まずいな、完全に寝坊……既に彼らも帰って来ている筈だ。

しかし、彼らは家の鍵を持っていないので中に入るには必ず俺に連絡を入れなければ、ずっとマンション入口のオートロック前で立ち往生する事になる。

慌てて俺はスマホを確認した。

着信は……メールは……無い。

連絡も無い、となるとどういう事だ。

今日じゃ、無い……？

でも、スマホで見た日付は紛れもなく彼らの帰国当日を表示している。

因みに、スマホのアラームも止められている。

どういふことだ。

「ん？」

ふと、家の中で誰かの話し声がする。

随分と会話が弾んでいるようだ。

時折笑い声が混じるところから、楽しげなのが察せられる。
二人は家に入れたのか。

……俺がいないと、遠慮なく笑えるよな。

いや、それよりどうやって家に入ったんだ。

俺は部屋を出て、居間へと向かう。

話し声のする方へ、足音を忍ばせて物陰から様子を窺った。
すると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「ん、おはよう。——前田」

居間には、久しぶりに見る両親がいる。

既に部屋着へと着替えて、机に料理を並べていた。床には大量のお土産らしき物品と
スーツケース等が置かれている。

そこは、別にいい。

予想していたことだから驚きもしない。

だが、たった唯一この状況であり得ない筈の物があつた。

それは、ソファアで呑気に寛ぐ——山田である。

「ああ、一郎くん。おはよう」

「よく眠れた？」

「あ、うん……………」

両親が嬉しそうに話しかけてきた。

思わず居間に踏み出そうとした足が後ろに下がる。

今まで虚飾の無い笑顔なんて見た事が無かった……………いつもこちらを窺うような、少し怯えたような目をするのが彼らだ。

なぜ、そんなにも和んでいる？

「こんな美人なカノジヨさんがいたなんて」

「私たちもビックリ！」

は、彼女？

俺が山田に視線を送ると、彼女は黙って頷いた。

いや、全然分からないから。

説明してくれと再び視線で促すが、今度は拳の親指を上立てるサインを送ってくる

……………いやグッド！じゃなくて説明しろって。

俺は山田を手招きする。

すると、首を横に振られた——何でだよ。

「いまコーヒー飲んでるから後にして」

「すまん、こっちは急用なんだ」

「仕方ない」

山田がやれやれと立ち上がる。

近付いて来た彼女を引つ張って自室へと退散した。

中に二人で入るや扉を閉めた。

「山田。なぜ家にいる？」

「ご飯を食べるに」

「……昨日、家には来るなって連絡したよな」

「そうだったんだ」

そうだったんだ、って。

実は知らなかったような口振りじゃないか。

その言い方に疑問を覚える。

本当に俺の連絡が届いていないのか。

「でも、俺は確かに……」

「昨日、私のスマホが駄目になった」

「駄目に？」

「うん。これ——」

山田がポケットから何かを取り出す。

その手の中には、液晶画面に蜘蛛の巣状の亀裂が走った痛々しい姿のスマホがあった。スマホカバーもかなりの摩擦に晒されたのか、角の部分は剥げかかっている。

どんな扱いをしたらこうなるんだよ。

「実は昨日、出かけてる時に地面に落として」

「はあ……なるほど……？」

「落としたところに丁度自転車が来てタイヤに吹っ飛ばされてこうなった」

「なるほど……!?!」

「どんだけ不運なんだよ。」

俺が呆れた目で見ていると山田が目元を袖で拭い悲哀を誘うような素振りをする

……三文芝居だ。

しかし、家に来た理由は納得した。

昨日の連絡が届いていないなら仕方ない。

こればかりは、山田にも非はないからだ。

「家にはいつ来たんだ」

「七時に。徹夜明けで美味しい朝ごはん食べたくて」

「あ。朝に来たなら、俺の部屋でアラームとか鳴らなかつたか？」

「鳴ったよ」

「マジか……」

「部屋にいますと思つて行つたら、前田寝てたけどその時にアラーム鳴り始めて、うるさいからすぐ消した。その後も前田ぐつすり寝てたから、いつもお世話になつてるし起こすのも気が引けたから、私が何してもうるさくないようにヘッドフォンもしたよ」

「何してんだよマジで」

感情のままに山田の肩を掴んで激しく揺する。

謎のドヤ顔が気に食わない。

こんな時に恩返しとかしなくて良い。というか、その恩返しのせいで迷惑にも心地よく寝過ごしてしまつたではないか！

本当にどうしてくれるんだよ。

お蔭で完全に寝坊して、起きたら意味の分からない展開が目の前に繰り広げられてい
るではないか。

山田と両親が楽しみに会話をしていた。

料理は、母が作ったんだろう……それを意気揚々と食っているオマエが一番意味不明だ。

しかも——そうだ！

「俺のカノジョってどういう事だ」

俺は一番の疑問について尋ねる。

両親は山田を俺の恋人だと認識している。

あの反応は、ただ勝手に勘違いをしているというワケではない。明らかに山田が認めたとでの誤解でなければ醸し出せない空気感があつた。

「これには深い訳がある」

「本当だな……？嘘だったらまた出禁にしてやる」

俺が凄んでみると、山田が視線を逸らす。

経緯について、ぼつぼつと語り始めた。

事の顛末は、九時半過ぎ。

山田はいつもと同様に居間で寛いでいたそうだ。

朝ごはんが食べたいので、そろそろ俺を起こそうかと考えていた頃にインターホンが鳴った。

応対すると、前田家の両親。

山田はオートロックを解錠し、彼らをマンション内に招き入れて部屋の中まで導いた。

関係を尋ねられた時に。

『キミ、息子とはどういう……?』

『友だちです。よく家に泊めて貰ったりご飯作って貰ってます』

『友だちにそこまで……?』

『はい』

『いや、でも女の子よ?……もしかして、恋人!絶対そうよ、普通は女の子をそう簡単に何度も泊めたりとかしないわ』

『そ、そうか……恋人、なんだね?』

二人にそう尋ねられた。

山田はこの時、一度は否定を繰り返したという。

けれど、やはり異性を家に宿泊させるといふ事が彼らの中では友人関係の範疇では信じられなかったようで、また勝手にまだ関係を明かすか躊躇っているのだと誤解を深めて逆効果となった。

そこで、山田は思った。

——否定しても絶対にそうだと勘違いして何度も訊いてきそうだし、面倒臭いから何

でもいいや。

結果、三度目の質問ですんなり肯定した。

すると、もう誤解は止まらず息子の恋人という事で歓迎されて飯までご馳走になり——
—今に至る。

なるほど。

なるほど。

なる、ほど。

「イヤ面倒臭いとか諦めるなよ!？」

「でも、もう認めちゃった」

「……山田、泣いてもいいか？」

「良いよ。私はご飯食べに戻るけど」

俺は観念するしかなかった。

山田から両親の様子を聞くなり、俺が後から否定しても覆らないだろう。

それどころか、両親はこれを好機と見ている。

関わりにくかった養子が、遂に恋人を作った——この取っ掛かりやすく話題になる物
で、俺との関係を詰められると考えている。

そこまでして俺と関わりたいという気持ちは有り難い……有り難い、気がするが

……。

山田がカノジヨ、かあ……。

絶対にボロが出そうな設定に頭が痛くなる。

俺はちらりと山田を見た。

すると、彼女がうんと頷いた。

「心配ない」

「どこが？不安しくないよ」

「普段の私と前田を見て、恋人だろうって学校で女子が噂してたの聞いたことある」

「この状況で更に新情報ぶっ込んでくるな」

山田が任せろ、と胸を張る。

何も考えずマイペースに生きているオマエと普段から調子が合った事など無いのだから、恋人として振る舞うというのがまた無理難題すぎる。

しかも、普段の様子周囲には誤解されているとか本当に遺憾だ。

駄目だ……ますます頭が混乱してきた。

でも、やるしかないよな。

本気で否定したら、誤解していたのかと両親はまたぎこちなくなつて空気を悪くするだけだ。

山田が恋人という設定だけでも苦しいのに、それを認めなくては先に進めない。はあ……これ、ストレスで死ぬかも。

天井を振り仰ぎ、深いため息を吐いていると山田に肩を叩かれた。

「大丈夫。私はかなり演技派だから」

どの口が言ってんだ。



「学校も同じなんだね」

今、家族プラス部外者で卓を囲んでいた。

さつきからトマトサラダに味がしない。

ストレス過多で完全に味覚が機能不全に陥っている。味噌汁を啜っても、熱は伝わってくるが味噌の風味まで感じられなかった。

ここは、地獄か？

それにしても賑やかだし明るい。

笑顔で話しかけてくれる両親に対して、俺は笑顔を作ることでもできず、山田は元から無表情だし……愛想というものも完全に死んでいる。

それにしても、こんなに楽しそうな両親を見るのは初めてだ。

喜ばしい事なんだろう。

これを機に俺も彼らと距離を詰めるべき。

だが、体どころか精神からも活力が失われている。まずいな、どうにも卑屈に物事を見てしまう。

俺に恋人がいると分かるや積極的に話しかける父も母もだが——リヨウや誰かを介さないと俺とこうして話せないという事の証明でもある。

目の前にいる俺……というより、俺とリヨウの一組だから話せているんだ。

俺だけなら、きつと。

「どうした、一郎くん？」

「……ううん、別に」

きつと、山田には不思議に見えているだろう。

家族でありながら、一郎『くん』と少し距離を感じる呼び方。格式ある家風でもないし、若干声の上擦るところなどから違和感が生じる。

しかも、最初は一郎と呼んでいたのにわざわざ再変更しているのだから。

本当に……嫌になる。

「一郎くんとは普段どうなんだい？」

「……前田と一緒にいるのは、落ち着きます。あとご飯が美味しいです」

「名字……名前では呼ばないの？」

「……」

父——勇がニヤニヤしながら山田を見る。

山田は優雅に味噌汁を啜っていた……が、彼からの質問に碗から顔を上げる。名前呼び、か。

たしかに恋人っぽいことではある。

「お互いまだ付き合い始めたばかりだから、こっちの方が慣れてるんだ」

「そ、そつか。……でも、前田だと僕らも混同しちゃうよ？」

「それは……」

そう言われて、ちらりと山田を見た。

彼女はふむ、と少し考える素振りをしてから。

「一郎。……駄目だ、ピンとこない」

「名前なのにな??」

「変えようか。——へい、マイダーリン」

「何だよ、マイハニー」

お互いにぞわぞわつと体が震えた。

俺は腕に鳥肌が立ち、山田は……口元を手で押えて笑いを堪えている。いや、オマエが仕掛けてきた事なんだけど。

山田はこの状況下でも山田らしい。

演技で不自然さが出るより、普段通りなのが一番疑われにくいというワケか。

いやいや、バレて誤解が晴れる方が嬉しい……けど気まずくない誤解の解き方が分からない。

『前田』の方がしつくりくる」

「うーん、そうなのねえ……一郎くんは？カノジヨさんのこと、名前で呼んだ事ある？」

「いや」

「じゃあ、呼んでみましょう」

母——小夜子が提案した内容に俺は固まる。

何で俺まで……とは思ったけど、やらなかつたら空気が悪くなる。

仕方ない。

「リヨウ。……これで良いか？」

俺は山田の方を見た。

すると。

「——」

山田が目を大きくさせる。

え、そんなに意外だっただろうか。

その反応が意外で、俺も彼女をじっと見詰めていると——少しして山田が逆方向に顔を背けてしまった。

これは笑いを堪えているな。

耳を赤くするほどに。

「リョウ、どうした」

「ごめん。その呼び方、ちよつと……」

「笑うことないだろ。ていうか、こつち向け」

「今は……無理、かも」

どうしたんだ、一体。

頑なにこつちを見ないが、呼んでも振り返らないから仕方ないので食事の手を進める。

両親をちらつと見れば、何故か目が輝いていた。

……もう俺には分からないが、満足したなら何よりだよ。

この茶番、早く終わらないかな。

「そつか、二人は本当に仲が良いんだね」

「二郎くんもリョウちゃんが凄く好きなのね」

「あ、はは」

そんな風に見えたのか……。

はあ、ていうかこのトマトの酸味強くないか？

「リヨウちゃんも、名前で呼ばれて顔が赤くなるくらいには一郎くんを好いてくれて何よりだわ」

「……………」

それは、単に呼ばれ慣れていないのでは。

虹夏にはよく呼ばれているが、異性からの経験が無いという部分が大きいのだろう。

はあ、味噌汁……お、丁度いい味の濃さ。

「私は前田、結構好きなので」

ぶつつつつ。

思わず噎せてしまった。

不意打ちにも程がある……演技とはいえ、やはり慣れないな。

それから少しして、父の頭が舟を漕ぐ。

山田がそれを指摘すると、父ははつと目を覚ますや苦笑する。

「ごめんよ、二人とも。帰国してすぐだから、少し疲れが出て」

「なら、寝た方がよいよ」

「そうだね。……じゃあ、僕らは少し夕方まで寝させて貰うよ」

そう言つて、両親が立ち上がる。

そして、自室へと退散していこうとして途中でこちらに振り返つた。

「リヨウさん。これからも息子をお願いします」

「はい」

父が深々と頭を下げた。

そんなに重く受け取られそうな言い方はやめて欲しいのだが……。

ソレに対して、山田は小さく頷いた。

彼らの姿が無くなり、ようやく肩の力が抜ける。

完食した皿を下げて、俺はソファに戻った。ベランダには洗濯物が干してあるの
で、どうやらこれから洗濯をする必要は無くなったようだ。

「疲れた」

「疲れた」

二人で呟いた言葉は同じだった。

そうだよな。

ストレスの所為でもう食べ物の味すら無かったし。親のあのニヤけた顔がまた嫌な

気分になせ……………あれ？

俺はふと、両親とのやり取りを思い返す。

そういえば、途中からあまり不快ではなかったな。

思えば、最後の方は飯の味も知覚できていた。

いつものように、卑屈に考えて両親から距離を取りたいとか直ぐに逃げたいという気分にもならなかったな。

何でいつもと違うんだ？

いつもと……………あ。

そこまで思い至って、俺は山田を見る。

「前田、これ観よう」

「徹夜明けで眠くないのかよ」

「逆にテンション高まってきた」

「うわ、迷惑」

テレビの横の棚から映画を漁っていた。

その手に取られたのは、『ゴースト○イター』だ。

確か要人から自伝小説の執筆を依頼された人物が依頼者から課せられた奇妙な三つの条件に従って執筆作業に取り組むが、その要人がまた曰く付きの人間で色々巻き込まれる……みたいな話じゃなかっただろうか。

俺もまだあらずじしか知らず、面白そうだから取り寄せはしたが手を出していないものだ。

山田はそれを無言で再生し始める。

いや、まだ俺は観ると言っていないんだけど。

お構いなしに映画は始まり、二人で黙って鑑賞する。

この空間は……やはり不快ではない。

そうか。

「山田」

「ん？」

「今日は来るなって連絡したけど……今日だけはオマエがいて良かったと思った」

「なんで？」

山田はテレビから視線を外さずに会話している。

俺はその横顔を盗み見た。

「親とはいっても気まずい状態なんだよ、詳しく話したくないけど」

「そっか」

「でも、オマエが色々と混乱させたのもあって嫌な気分に戻る暇もなかったな」

「私は何もしていないけど」

山田の顔がこちらへと向けられる。

目が合う。

「——良かったね、一郎」

山田が微笑んでそう言った。

少しだけ、綺麗だと思った。

この正体は、私の■■■■だ

家が嫌で、俺は外出していた。

山田は親が出かける時に訪ねて来るので、基本的に一人の時間が無い。最近では苦痛に思える時間が増えたな。

「……酷い顔だな」

店のショーウィンドウのガラスに映った自分の顔に失笑する。

険しくなった顔は、少しだけ血の気が無い。

軽く二、三人は殺つていそうな人相だ。

我ながら、よくこの顔で外を歩こうなどと思つたものだ。こんな顔で出歩いていたら、いずれ職質でも受けそうである……健全な高校生です。

何処かで休もうか。

ただ、一人になれる空間なんてない。

できれば、俺が卑屈な気持ちにならないようなジメジメしていたり薄暗い空間とか無

いだろうか。あるワケ無いよな、こんな真つ昼間に。

世の無情さに悲嘆しつつ、歩いていると。

「二郎くん、大丈夫？」

行く手に虹夏が立っていた。

俺が片手を挙げて挨拶すると、彼女は軽い足取りで俺の傍に来る。

俺の両頬を手で挟んで、自分の方へと引き寄せた。

じつ、と至近距离で視線が変わる。

一体、俺の何を見ているんだろう。こんな不健康そうで人に見せられたものではない顔をしている俺なんて見ても不快だろうに。

でも——何処か彼女は嬉しそうに口角を上げる。

「辛そうだね」

え、じゃあ何で笑ったの……？

俺はそれを口に出さず、取り敢えず頷いた。

すると、虹夏に手を握られて何処かへと引つ張られていく。

ど、何処ですか……。

虹夏に連れて来られたのは、彼女の姉が経営するライブハウス——その奥にある練習によく使われているというスタジオ部屋。

俺はそこでパイプ椅子に腰を落ち着けた。

少しだけ、呼吸が楽になった気がする。

「落ち着いた？」

「あ、うん。超助かった」

「良かった……助けることができて」

虹夏が俺の隣に椅子を用意して座る。

「今日は何してたの？」

「……家が嫌で出かけてたんだ」

「家が嫌って……またリヨウが何かした？」

「いやいや、最近は寧ろ不本意ながらアイツに助けられて——」

「え？」

おっと、変な事を口走りそうになった。

虹夏も眉間にシワを寄せて険しい面持ちだ。

親友に何させてんだ、みたいな感じだろう……危ない、折角できた友だちを失くすと

ころだった。

「家に出張から帰った親がいて」

「あ、例の……」

「それで居辛くてさ」

山田がいなければ、基本的にまた昔に逆戻りだ。

あの息苦しい空間になる。

彼らも折角帰って来たのに嫌だろうから家を出てきたけど、つくづく家族として駄目だなどと思う。もう少し俺から歩み寄るべきだと理解しているのに……気持ちも体も付いてこない。

その所為でバイトのシフトも増やしてしまった……。

クリスマススの一件で話したのもあり、虹夏も納得しているようだった。

「じゃあ、辛かったら私の家においでよ」

「ええ……?」

「迷惑じゃないよ。むしろ、一郎くんと一緒にいられる時間が増えて私は嬉しいし!」
素面でこんな恥ずかしい事を言えるのか。

すごいな、虹夏は。

俺は感服して暫く言葉が出なかったが、彼女の提案に首を縦に振る。

「じゃあ、ギリギリの時にお世話になる」

「そんな我慢しなくていいのに」

「体に悪いって？」

「そう。お揃いするくらい私の私と一郎くんの仲の良さを頼るべし！」

虹夏さんが笑顔でスカーフを指差す。

二人で並ぶと、腕章みたいに左腕につけたスカーフと、首に巻いた虹夏のそれが近づく。

今さらながら、女子とお揃いって何か恥ずかしいな。

そんな風に一人で謎の羞恥心に堪えていると、虹夏が俺の左手首に視線を落とす。

え、何？

「一郎くん、こんなの付けてたっけ」

彼女が指摘したのは、銀の腕輪。

ああ、これは。

「山田と出かけた時に選んで貰ったやつ」

「……………へえ」

「実は俺、スカーフが全然似合っていないらしくてさ。じゃあ何が良かったって相談した時にピアスとか腕輪で、よく分からないから一緒に吟味してさ」

「……………うん」

「それで、気に入ったのがこれ」

俺が左手を持ち上げて見せる。

俺が見ているファッションセンスが良い山田からも評価が良かったので自慢の一品だ。

それを見て、虹夏が笑う……………けど目が笑ってない。

え、まさか似合っていないのかな。

これから気遣いの言葉とか出てくる感じ？

「良いと思うよ」

「あ、そ、そう？」

「……………リヨウも最近同じの付けて……………」

「ん？何て？」

「ううん、何でもないっ」

何か小声で虹夏が言うので尋ねたが、聞かせては貰えないようだ。

怖いな……………その小声の部分が本音の可能性がある。

もしかすると、似合っていないのかもしれない。

思えば、山田の感性って独特な部分もあるし。

何だか少しだけ不安になってきたので、取り敢えず帰ったら確認し直そうと心に決めた。

「一郎くん」

「ん？」

「来年もリヨウ共々、仲良くしてね！」

「……助かる、けど山田と仲良くって……」

「仲良いと思うよ」

「そうかな……アイツが何を考えてるか、よく分からない事が多いし」

そう言うと、虹夏もんーと唸って虚空を睨む。

「たしかに、たまに分かんないね」

「だろ」

「リヨウって、何考えてるんだろ」

二人で揃って、んーと唸った。



今日は、前田の両親が出かけているようだった。
彼らが不在の今、二人で居間に寛いでいる。

「そういえば、一年も経ったな」

私——山田リヨウの隣で彼が呟く。

昼のロードショーを見ている最中だった。

一体何を指して、そこから一年と言ったのか私には分からなかった。壁に立てかけられた犬カレンダーを見れば、三月は特に記念日らしき物はない。

私が黙って考えていると、その思考を見透かした彼が呆れたように嘆息した。

「オマエが来るようになってからだよ」

「……そうだった」

「そうだぞ。一年も、だ」

忌々しげに一年を強調する。

私に来るようになって困っていたのか。

普段からよくネチネチと私に言ってくるけど、内容はほとんど頭から抜け落ちていく。
る。

何て言ってたっけ？

まあ、どうでもいいか。

それと同じで、別に一年が経過しても大した事ではないと思う。

私の中では当たり前になっっている。

前田と二人で、この家にいる事が当たり前。

すっかり私の日常の一部だ。

「出来れば自分の家で寛いで欲しいんだが」

「それが出来れば苦労しない」

「苦労してるの俺だけだぞ」

前田は苦言が絶えない。

私が居る事がマイナスのように言う。

………最近、私がいる方が少しだけ楽しそうなくせに。

私は知っている。

前田が実は、自覚している以上に私のベースが好きなんだって事。私があると、最初は嫌だとか言いながらも家にすんなり上げてくれる。

所謂ツンデレだ。

ん………?

私はふと前田の手元を見た。

前田が小説を読んでいる。丁度良く、ラストページを読み終わったようだ。

「……前田が小説を読んでも、珍しい」

「コレ？クラスの陽キャ男子に、映画も観るけどたまにはこういうのも開拓しようかなって思ってるって言ったら勧められた」

「面白い？」

「最高に面白い！……けど」

「けど？」

「内容が凄まじくダークなんだよな。一人の女の壮絶な復讐劇……絶望して自殺するか自殺に偽装した殺人とかは見慣れたけど、自殺を復讐の『手段の一つ』にするっていう新鮮なインパクトが」

「……陽キヤが勧めて来たんじゃないの？」

「そうだよ。逆に怖い、あんな笑顔でコレ勧めてくるとか……」

前田が読んでいるのは、『その女アレ〇クス』。

後で私も興味本位に書店で購入して読んだけど、内容は凄まじいの一言に尽きる。

冒頭からリアル過ぎるエグい描写と急展開に混乱するし、始終暗く駆け抜けていく。もはや希望なんて言葉とは無縁で気分が落ち込むのに読了後は奇妙な高揚感があつて、ひたすら面白い、圧巻、この女やりきった……という感想が湧く。

コレ、本当に陽キヤが勧めてきたのか……。

「駄目だ、暫く何も読んだり観たくない」

「へえ、そんな面白いんだ」

「いや、何か脳も腹もいっぱいだし心がズッシリするっていうか」

ぐったりと前田がソファに崩れた。

しっかりと自分の感情も相手が分かるように理路整然と言葉で伝えようと努める彼にしては、妙に感覚的でそれだけに疲弊していると分かる。

読んで暗い気分になったのか、前田が愚痴り始める。

「何でオマエと恋人なんて誤解される羽目に……」

「もう解くのも面倒臭いね」

「そこがもう救いようも無い……!」

そう悲観する事でもない。

私は意外とこれを楽しんでいる。

いずれ、前田も何だかんだで順応して自分から山田リヨウの恋人だとか言いそうだ。

誰かに合わせるのが彼だし。

本当にツンデレだ。

思えば、最初からそうだったかもしれない。

一年前まで、実際に私は前田と一切の接点も無かった。

同じ中学で、同学年の男の子だけどこれまでの交流も皆無。

何が私たちを引き合わせたか。

それは、たぶん高校入学までの春休みだ。

中学卒業後すぐだった。

受験勉強から脱却した解放感も相俟った感覚に身を委ねて街を練り歩いた……が。その所為か、終わった後はかなり疲れていた。

我ながら体力の無さを実感した日でもある。

寝惚けた状態で歩き、気付いたら知らない路地で立ったまま寝ていた。

そんな私に声をかけたのが――。

『うわ、何かいる……』

まるで物の怪でも見たような声と顔だった。

私は半分目が覚めて、彼を見た。

スーパリーの帰りで、手に携えたバッグからネギが飛び出している。

誰だ、この人。

私の視線で困惑を察したのか、気まずげに彼が口を開いた。

『俺、前田一郎。……同じ中学で、同級生』

『……』

『スーパリーの帰りに寝てる君を発見したんだけど……何で寝てんの？しかも立ったまま

ま
』

その時、質問に答える力すら無かった。

ただ臆気ながら、この場で眠り続けるのは駄目だという常識だけが働いていて、自分の中の危険意識を細やかに喚起していた。

私は手だけ伸ばして、彼の袖を掴む。

えっ、と声が上がった。

もうそこから先は覚えていない。

気付いたら、彼の家に居た。

『そんな眠いなら、ここで休んでくれ。近所で遭遇した同級生が後で事故ったなんて聞いたら寝覚めも悪いし』

『……寝ていいの?』

『ちよつとだけ。後で親御さんに連絡して来てもらう』

『……ありがとう』

結局、そこから先の記憶は無い。

朝起きたら自分の家だったっけ。

どうやら、私を起こそうと努力したが彼の万策を跳ね除ける程に私の眠りは深く、防御は固く、仕方無しと放置するしか無かったそうだ。

親に連絡しようと、私の荷物を探って連絡先を調べて電話し、迎えに来て貰ったという。

私は一応、感謝しようと親に頼んで彼の住所を聞いて再度訪ねた——が。

『外で寝るとか無用心すぎるぞ』

『うん、ドンマイ』

『いや、俺の話じゃないから』

くどくどと外で寝るのは危ないみたいなの説教が始まったけど、その途中で私のお腹が盛大に鳴った。

そういえば、朝食を抜いてたんだった。

音を聞いた彼が、またあの呆れた目で私を見る。

『……さっき昼飯出来たから、食っていく?』

その後食べた前田の料理は美味しかった。

絶品——という程では無いけど好きな味だ。

食事が終わると、好きな時に出て行って良いとだけ言って彼は映画を観ながら求人チラシなどを机に広げて眺め始める。

特にする事も無く、私は隣に座って映画を観た。

私は独りが好きだし、他人に合わせるのが面倒な部分がある。バンドはともかく、私

生活は特にそうだった。

だから、友だちも幼馴染の虹夏だけ。

でも、この感覚は初めてだった。

近くに誰かがいる安心感と、まるで独りであるような開放感。

この独特な味わいのある空間が、私には心地よく思えた。

前田本人も過干渉して来ないし。

それが良くて、その日から私は前田宅をよく訪ねた。

訪問の度に「また来たよコイツ」みたいな顔をされるけど、別に何でもいい。

そういう事が日常化し、気付いたら高校に行つても週四で家に足を運ぶようになっていた。

そうしていく内に前田本人にも詳しくなる。

前田は友達がいらない。

海外出張に親が出ていて、年中一人……この部屋に招くのは、私が初めて。

『前田、次からは早く帰って来て』

『バイト帰りの人間に開口一番ソレか。少しは労ってくれよ』

『もうお腹が』

『ホントに自由だな、オイ』

前田の家にはよく来るけど、彼がバイトでいないときにふと思った。

何か、味気ない。

あの独特の空気がここに無かった。

そして彼が帰ってきて分かったのは、この部屋に彼がいるから味わえる唯一の物、前田が必要十分条件なのだ。

私もバンド関係で最近嫌な事が多くて、だからここそこへ逃げ込む事も多くなって、その分だけ癒された。

この特別な空間を、私だけが味わえている——そこに優越感があった。

でも、最近は違った。

前田の家に虹夏が遊びに来たんだ。

雨で濡れた彼女を甲斐甲斐しく世話するのは、いつも通りの前田だった。
なのに。

——なんで上げたの？

虹夏を見て、唯一の友だちに対して初めて嫌な気持ちになった。

言葉にしたくないけど、あれは憎しみだったと思う。

私と前田だけの、私だけの場所だった。

その日は仕方無いと思った、これつきりだと自分に言い聞かせて、湧き出た変な感情も蓋をして。

でも、次は部屋を満たす酒の臭いがした。

前田がバンドマン——しかもベースリストを家に入れたという。

その人の残り香だそうだ。

しかも、ベッドまで譲って一泊を許した。

——それは、私だけのじゃないの？

嫌な事は畳み掛けるようにある。

前田の首筋についた噛み跡を見て、無意識に伸びた手が上塗りしようとするみたいに爪を突き立てて、傷を別の形にしようとした。

でも、それを自制する意思も無かった。

形が変わって、痛がってる前田を見て——少しだけ胸が温かくなった。

ここにいるのは、私と前田だけでいい。

それが私の日常で、常識になった。

なのに。

なのに。

なのに。

前田はまた、虹夏や別の人を上げる事が増えた。

その度に、私は筆舌に尽くし難い感情を抱かせられる。

虹夏と同じスカーフ、噛み跡、別の人の臭い……それが前田にあるのが嫌になる。

ようやく自覚したが、私は前田がいれば何でも良い事に気付いた。

前田のいる空間、それこそ重要だと。

場所が変わろうが、彼がいるだけで唯一性のある居心地の良さが手に入る。

だから、将来は家を出ていきたくないと語る彼の言葉にもさして驚かなかった。

ただ、私の遠くに行かなければ良い……って。

それがあるから、縛り付けた。

『前田無しだと生きていけないって言ってる』

『……………あ……………』

前からそうだが、前田は頼られると弱い。

何故かは分からないけど、自分を随分と過小評価しているようで、特に『価値』という単語を耳にすると少しだけ表情の色が変わる。

だから、私はそこにつけ込んだ。

彼に、知らしめた。

——私には前田しかないと思わせる『価値』があるよ。

それを直截的に伝えれば、彼は呆けたようになって、私が通える距離にと言えば頷いていた。

そこまでやって、少しだけ自嘲的な気持ちになる。

我ながら、前田に執着心が過ぎると思った。

これは恋愛感情なのかな。

でも、前田とキスがしたいとか、デートに行きたいとか、そういう風に思った事は無い。

そこはハッキリしないので、別に考えなくていい。

恋人も欲しいとは思わないし。

前田とは、どんな関係性になったってきつと変わらないだろうから。感情に名前を与える必要も無いし、深く考えて余計な乱れや隙を作って、誰かに踏み込まれても困る。

「山田？」

「……あのさ、『一郎』」

「げっ」

私は、ここを譲らない。

虹夏にも、そのベースリストにも、彼が甘い態度を取る親戚にも。

「ここは私の、私だけの場所。」

「家に居る時は、名前でしょ」

「えー……別に良くないか？」

「今日は前田の父も母も出かけてるけど、こういうのは日常の積み重ねだから」

「……………分かったよ、リョウ」

感情は分からない。

でもハッキリしているのは、一つだけ。

私には前田が必要で、他の人には共有できない。

彼がいるから成り立つ物が、もうどうしようもなく私の中で強い快樂になっている。

だから、譲らない。

ああ、これが――。

「ん、よくできました」

—
独占欲だ。

真の陽キヤは光る

四月の初旬である。

遂に——待ちに待ったこの日がやってきた。

俺は学校へと向かっている。

ただ、それはいつも登校に使うルートではない。秀華高校という、今年になってから縁の出来た学校への道だ。

しかも、その学校で今日は入学式が開かれる。

無論、俺の入学式ではない。

我らが至宝——後藤ひとりの入学式だ。

待ち焦がれた幸福が手の届く処にある。

俺は歌でも歌いだしたいくらいに浮かれた気分で、これからひとりが使用するであろう秀華高校への道を辿っていく。

今日は入学祝いの撮影もあるらしい。

そんなワケで、俺も正装——下北沢高校の制服だ。

ひとりの隣に立つても遜色ない装いでなくては。

幸いにも入学式の会場に入れるのは『保護者関係者』とあるので、俺も入れる。

ああ、ひとりの新制服姿が……。

俺は意気込み十分の心構えで会場を目指す。

しかし、途中で何かが爪先に当たった。

その拍子で数歩先へと転がっていく。

蹴つてしまった物を確認すると、ストラップの付いた鍵だった。

俺はそれを拾い上げて苦笑する。

一見して鍵一つに付属するストラップの数が尋常ではなかった。

これ絶対に陽キヤの鍵だ。

俺の鍵なんて、虹夏との外出で買ったパンダのキーホルダーだけだ。

数えるだけで六つもある。

その数だけ友だちがいるのを感じた。

さては、相当青春を謳歌しているな……羨ましい限りだが、厄介な事に本人からすれ

ばこの鍵は紛失物である。

きつと、今頃かなり困っているに違いない。

いや、そもそも気付いているかすら不明だ。

探しに来ているなら、下手にここから動かさないのがベストだが、気付いていないなら交番にでも届けるべきなんだけど……。

どうすべきか。

見なかつた事にしても罪悪感が半端ない。

でもっ……ひとりの入学式が……。

「あのっ…その鍵！」

背後からの声に思わず身構える。

肩越しに振り返ると、一人の少女がいた。

ワンサイドアップにした赤い髪と、自分という物に自信を持つ者が見せる輝きを眼差しに宿している。

身を包むのは、秀華高校の制服だ。ひとりが写真で見せてくれたので知っている。

胸にはリボンが飾られている。

もしかして、新入生の子だろうか。

「何か？」

「それ、探してた鍵なんです！」

「今ここで拾ったんだけど、どうしようか悩んでたところだからこっちも助かつ——」
振り返った直後、少女が俺の手に飛びついた。
そして。

「^キありがとうございます!!」

「うあゝ ツツ……!!?」

目の前の景色の明度が急速に増した。

俺の手元にある鍵を見て、目を輝かせている。——その女子を目視した瞬間、俺は網膜が焼けるような溶けるような痛みを覚えた。

少女から謎の擬音と共に光が溢れる。

太陽光とは明らかに質が違う。

彼女そのものが第二の恒星となっており、至近距離で直視してしまった俺の網膜は死んだ。

握られた手はそのままに、半歩だけ後退する。

こ、これは何なんだ一体？

脳内に『キターン』という知らない音が響いた。

俺は痛む目を手で覆う。

ま、間違いない……見た事の無い陽キャだ。

俺のクラスにだって、こんなに光り輝く子はいなかった。

「あの、どうかしました？」

「いや……別に」

「それにしても、良かったあ」

俺から鍵を受け取った少女が胸を撫で下ろす。

確かにそうだよな。

家の鍵を失くしたら誰だって不安になる。

家に帰るのが難しくなる事は勿論だが、最近では拾われた鍵から犯罪の手段として利用される場合も屢々あるので鍵の紛失というのは身の危険にも繋がるのだ。

最初は面倒だと思っただが、こうして本人に返してまると良かったと俺自身も思っ
|。

「これ、友だちの鍵なんです。——本当に見つけて良かった！」

うぐうあツツツ!!?

再び炸裂したキターン光線に再び激痛が走る。

安易なネーミングでも、そうとしか言い様が無い。

しかも、この光が焼くのは網膜も勿論の事だがメンタル面にまで影響を及ぼす。

この少女は、我が身の危険を案じていたのではない。

友人の安全の為に、わざわざ探していたのだ。

その献身と、探し出した事への安堵は他人事でありながら他人事ではないと真に迫る少女の感情が光として現象に現れていた。

面倒臭いとか思ってた俺には痛撃である。

短時間で、理解した。

この子は——俺の『天敵』だ。

基本的に自分のリスク計算は私欲のみしか頭にない俺には無い、他人への思い遣りを優先する人柄の持ち主。

話しているだけで良心の呵責に苛まれる。

「み、見つかって良かったな……!」

「何で苦しそうなんですか!？」

「氣の所為ってどうか、君の所為ってどうか……」

「ど、どうしよう！」

「いや、気にしないでくれ……」

これ以上の氣遣いを受けたら消滅する。

「君は、これから入学式？」

「そうなんですっ！今年から秀華高校に通うことになりました」

「そっか。頑張れ」

「はいっ！貴方は……？」

少女が俺の姿に視線を上下させる。

ああ、成る程。

下北沢高校の制服を着ている男が、どうして入学式を開く予定の秀華高校の近くにいるのか疑問に思うのは当然だ。

確かに、早く来すぎたな。

式が始まる予定三十分前。

しかし、まだ入学生関係者の入場は受付も始まっていない。

「親戚の子が入学するから」

「もしかして、お祝いに？」

「今日は記念写真も撮るから、俺も制服にしようかなと」

「わあ、仲が良いですねっ」

うわ、眩しい。

一々光らないで欲しい。

「という事は、先輩……ですよね？」

「下北沢高校の二年」

「私、喜多郁代って言います！鍵の恩、いつかきつとお返ししますねっ！」

「ああ、うん」

それでは、と少女——喜多郁代が駆けていく。

澆刺とした空気を纏った彼女が遠ざかっていくに連れて、周囲の景色がようやく通常
の明るさを取り戻す。

太陽の光を感じる。

やれやれ、近くで見すぎたな。

あれが陽キヤ……なのか。

真の陽キヤって物理的にも眩しいんだな。

しかも眩しいだけでなく、俺の醜い部分まで照らし出してしまうなんて恐ろしい子
だ。陰キヤならばある者は憧れ、ある者はきつと光に当てられて消滅する。

ひとりの場合は……即死だな。

出来れば優しく扱って欲しい。

さて、浮かれ過ぎて受付開始時刻までどうしようか。

入学生は早いのが、俺は関係者だしな。

この辺りにいるのも不自然かもしれない。

そこかしこに保護者と共に登校する少年少女が見受けられる。初々しい姿だが、一年前の我が身もそうだった。

みんなの青春はこれから始まるのか。

「さ、さっさと」

愛しい声が耳朶を打つ。

くいくいと服の裾を引く方に顔を向けた。

後ろには——真新しい制服の袖に腕を通し、不安そうな面持ちで俺を見上げているひとりがいる。

うわ、可愛っ。

風で乱れたであろう部分の髪の毛の撫でて直す。

ひとりが大人しくしているので、ついでに少し燃れている制服のリボンを直し、スカートに付いた木の葉を払い落とす。

「よし、可愛い」

「あう」

「ひとり。とうとう入学か……俺も居るからな」

「ほ、ほんとに来てくれたんだ」

「ああ。もし学校があっても必ず来たよ」

そう言うと、ひとりの表情が柔らかくなる。

「どうやら、かなり不安だったらしい。」

二人で会話をしていると、彼女の後ろから後藤夫妻が現れる。その傍から駆け出し、俺の足に抱き着く小さな影はふたりだ。

「やあ、一郎くん！」

「今日は、ひとりちゃんの入学式に来てくれてありがとうね」

「いっくんが居る！」

「いえ。寧ろ俺も勝手に来ちゃってすみません」

「良いさ！僕ら家族で祝おうとも！」

直樹さんが俺の肩をバシバシと叩く。

嬉しい事だ。

「この後、一郎くんの家に寄るけど良いかな？」

「えっ？」

「いつも一郎くんにお世話になってますって、前田家にも挨拶しないとさ。既に連絡は入れてあるんだよね」

「そ、そうだったんですか」

俺は知らなかったな……。

「いや、お世話になってるの俺の方ですが」

「そうだったかしら……？」

首を傾げて本当に悩んでいる後藤夫妻に思わず笑ってしまう。

彼らには本当に敵わない。

俺はふたりを片腕に座らせるよう抱き上げた。

それから、空いた片手でひとりの手を握る。

「それじゃ、入り口まで行くか」

「う、うん（いっくんの手、安心する……）」

手の中の温もりを噛み締めて。
俺は後藤家と共に、秀華高校に向って歩き出した。

♪

♪

♪

♪

ひとりの入学式から数日後だった。

両親は久しい日本を満喫中、今は東北の中尊寺金色堂を始めとする観光地を一泊二日
で巡る旅行に出ている。

俺は学校やバイトがあるので固辞した。

そういつた事情もあり今日は一人で家で寛げる。

学校からの帰り道、これから何の映画でも観ようかと考えていた俺だったが、不吉な

事にポケットの中のスマホが鳴る。

画面を見ると、ロインの通知が一件。

送り主は——山田だった。

『前田、お金払えなくて店出れない』

メッセージの下に、店の位置情報がURLで送られていた。

ここまで来い、と。

俺じゃなくて親に頼めよ。

でも、体はもうそちらへ向かい始めていた。

もはや、山田リヨウという寄生虫によつて中身が変えられてしまったのか、すんなり

とアイツの我儘に従うようになっていた。

度し難い習性だな。

しかし、今日もまた山田には呆れさせられる。

飲食店に入るなら、まず自分の財布の中身を把握しておけと言いたい。メニュー表に
だつて値段を書いていないなんて店は無いぞ。

しかし、初めてだな。

山田は俺の家でタダ飯を食らい、無許可で宿泊する。

それでも借金は無かった。

………とうとう、俺の財布にまで手を出し始めるのか。

家に居座るだけでは飽き足らず、金銭面でも侵食しようとしているのなら危険だ。

今こうして山田の下に向かう体も含めて、将来的に財布としてこき使われる未来が思
い描ける。

今日だけにしよう。

今後は絶対に貸さない。

店まで行くと、店の前に山田が立っていた。

あれ、店内で待っている筈では……？

「あ、やつと来た」

「……………何してんの？」

「前田を待ってた」

「金が払えなくて店の中で雁字搦めにされてるんじゃないのか」

「それ嘘」

……………嘘？

困惑する俺の前で、山田が店を指差す。

「ここ美味しい店なんだ」

「へえ。……………で？」

「でも最近、また美味しそうな新メニュー出たんだけどカップル限定で一人じゃ食べられない」

「……………」

「私と前田は今からカップル。……オーケー？」

何もオーケーではない。

要するにカップルと偽装して店に入りたいようだ。

山田が所望する新メニューがカップルに限定された特別物であり、条件を満たす為に俺を使いたくて呼んだと今理解した。

正直、付き合う道理は無い。

しかし、店前に飾られた看板にあるメニュー紹介で山田のお目当てのカップル限定のスイーツパフェは確かに美味しそうだった。

「……食いたいのか」

「うん。前田と食べたい」

「……………今日だけで」

結局、好奇心に負けて俺は入店を決めた。

山田に手を引かれて店の中へ。

シックな装いの喫茶店内を、店員に案内されて窓際の席に着く。

二人でむかい合うように座っている俺たちは、メニュー表を手にとって一覽を眺める。

「オマエが食べたいのは……コレ？」

「うん、それ」

「よし、頼むか」

俺が片手を挙げると、店員がすぐ注文を取りに来た。

「ご注文をお伺いします！」

「この——を下さい」

「はいっ！こちらカップル限定のメニューですのでご確認させて頂きますが、お二人はカップルですね？」

「はい」

山田が腕輪を見せるので、同じ物を付けた左手を俺も掲げる。

それを見た店員が注文を了解し、下がっていった。

「……………ん？同じ物？」

「あれ、山田も腕輪してたのか」

「うん。気に入ったから」

気に入ったのなら仕方ないが、山田とお揃いみたいで何か嫌だな。

咄嗟の事で、カップルの証明として腕輪を見せたが同じ物だと知って今内心では驚いている。

何だか堂々と付けているのが恥ずかしいな。

でも、虹夏とお揃いのスカーフまで付けているのだから今更な話でもある。

「前田、これから何するつもりだった？」

「家に帰って、映画かな」

「私はこれからバイトだというのに、怠惰だね」

「普段のオマエに比べたらマシだろ」

「前田らしくない」

「なぜ俺の休息だけ許さない……?」

並々ならぬ執念を感じる。

本当の意味で俺の財布を狙っているのか。

より労働量を増やし、多少金を増やした分を遂に我が物としようと画策しているのならば絶対に阻止する。

これ以上、オマエに何も施してやつたりしない。

……早くパフェ来ないかな。

「前田、映画と小説は開拓するらしいけど……漫画とか音楽は？」

「漫画、音楽ねえ……お勧めある？」

「んー……サウジアラビアのヒット曲からだけど——」

「またサウジアラビア……嘘も大概にしろ」

「嘘じゃないもん」

「前にオマエの言ってた、エポン？だっけ。あの格闘技、調べたら全ツ然無いんだけど」

「それイングランドの伝統的な祭典でやる舞踊」

「まだ言うか」

すらすら嘘つきやがる。

じゃあ、あの奇妙な構えと体捌きは何だったんだ。

「それに、音楽は別にいい」

「そうなの？」

「近々、山田がライブで聴かせてくれるだろ？」

「………うん。まだ募集中だけど」

山田が力強く頷く。

メンバー募集中らしいが、一体どんな方法で呼びかけているのだろうか。

虹夏も高校生だし、発揮しうる広告力は低い。

精々ライブハウスや学校に許可を取ってチラシを貼るか、友だち伝てに音楽に興味の

ある者に声を届けて貰う他にない。

ライブとはいえ、いつになるのやら。

「漫画は？」

「私、あんまり読まない」

「そっか……」

「前田は読んだ事無いの？」

「……昔、世話になってた家の『MONSTOR』って漫画をこっそり読んでたな。ほら、

浦〇直樹って知ってる？」

「知らない」

「あれしか読んだ事ないな」

漫画の開拓か。

長編物は難しいし、出来ればすらすら読める短編物から入り始めると良いかもしれない。

「私が読んだの、『ゆるキオン』とか」

「何それ」

「女の子が平和にキャンプしてる」

「へえ……そうか、キャンプ。漫画とか音楽以前に、アウトドア方面も考慮してみるべき

か」

「私が家に行く時はやめてね」

「何でだよ」

俺の趣味まで縛るつもりか。

でも、アウトドア——キャンプも悪くない。

一人でも出来るし、前に夢見ていた旅行のように保護者の同意書等の面倒な手続きをあまり必要としない。キャンプ道具で金が入用だというのは、前にテレビ番組で観た気がするな。

少しだけ興味が湧いてきた。

「それにしても、新学期始まったな」

「新学期は憂鬱」

「俺もだよ。……しかもオマエと同じクラスとか勘弁して欲しい」

「これで課題は楽になる」

「……はあ、救いは虹夏も同じってだけだな。悲しい事に、去年の俺のクラスメイト一人もいないし」

折角交流ができ始めていたのに、奇跡的に今回のクラスは俺だけで、それ以外の全員が他クラスにバラけた。

これは教師陣に作為的な何かがあると疑わざるを得ない。

「前田、教室でボツチだね」

「昼は虹夏が誘ってくれるからボツチじゃない」

「私もいる」

「山田がいてプラス方面には感じない」

「なぬ……」

山田と談笑が続く。

その間に、パフェが届いた。

一つを二人でシェアする方式らしく、俺と山田はやや長い匙を手にとって繊細に盛り付けられた甘味の山を切り崩して食す。

あ、凄いいいな。

カップルではなく、一人でも食べたい。

………ん？

ふと近くの席で同じ物を注文したカップルを発見する。お互いにパフェを匙で取り、食べさせ合っている。

ば、パフェ以上に空気が甘い……。

ソレを見ている山田の顰めっ面がまた凄まじい……。

「前田」

「ん？」

「私たちはやらないよ」

「当たり前だろ」

店側に要求されたって出来やしない。

俺たちはあの二人組から顔を背けて食べ始めた。

「リヨウ……先輩……？」

ぞっとするほど凍えた声に俺と山田はびくりとした。

今度は何だ。

隣の席から聞こえた気がする。

山田を呼んだという事は、彼女の知り合いだ。

俺は隣の席へとそっと視線を移すと、その先に顔面蒼白となった女子高生がいた。

……女子高生が……あれ、何処かで見た顔だな。

よく観察すると……数日前の入学式で出会った少女——喜多郁代だと分かった。

また会えるとは奇妙な縁だ。

しかし、山田とも知り合いなのか。

「山田、知り合いか？」

「うん。私と虹夏のバンドにボーカルで入った子」

「おお、そうなのか」

「あれ、貴方は入学式の時の……」

喜多さんも俺の正体に気付いたらしい。

俺と山田を交互に見て、何か得心したかと思えば今度は暗い顔で俯いて席を立つ。

「す、素敵なカップルですね……あはは……」

「え、あ、あの？喜多さん？」

「お、お幸せに……！！」

目元をハンカチで拭いながら、逃げるように喜多さんは店を出ていった。

今回は光らなかつたな……。

彼女を見送った山田が、俺に視線を戻す。

「あの子も家に入れたの？」

意味の分からない嫌疑が掛けられた。

知り合って早々、異性を家に入れたりはしない。

山田という例外を除けば、ある程度信用のある人間ではないと一歩も入れるものか。俺が首を横に振って否定すると、山田が目を細める。

「入れたら駄目だよ」

オマエも例外じゃないぞ。

原作開始

残っていたらしいチケツト

新学期が始まって早一月。

それでも季節の巡りもまた去年と同じで、日常にも特に変わりはない。細やかなのは、受験に対して一層の関心などが強くなるだけ。

それでも、この時期になるといつも今年こそは新しい何かを探したり、身につけたいと思うのは何故だろうか。

毎回、そんな願望が叶った事は殆ど無い。

思い返しても妥協したり、多少は背丈が伸びただけ。何も変わらない。

その証拠に。

「それじゃあ、いつてくる」

五月、両親は変わらず海外出張に出た。

俺は彼らの見送りに玄関まで来ている。

もう慣れた事だし、悲しいことにまだ寂しいと言えるほどの親密度も育まれていない。この瞬間はいつも、自分が薄情者であると実感する。

でも、今年は違う。

何故か、俺以外にもう一人——彼らを見送る人がいる。

「それじゃ、一郎くんを頼むよ。——リヨウさん」

父の言葉に、隣で山田リヨウが頷く。

リヨウに頼む、というのは業腹だ。

むしろ、普段から彼女の面倒を見ているのは俺の方だというのに。そんな不満を今は面に出さず、スーツケースを持って出ていく二人を見送った。

静かになった家に俺たちは立ち尽くす。

また今年中は帰って来ないだろう。或いは息子の恋人というツールを利用すれば居心地よくなると帰る頻度が上がるかもしれない。

俺としては、どちらもキツイ。

さて、今日も学校なので悠長にしていられない。

そう思いながら。

「——何で家に居るんだよ」

しれつと親の見送りまでしている隣のリヨウに質問する。

昨日は来るなど連絡を入れておいた。

つい先日、スマホを破損した彼女は親に新規端末を購入して貰ったので連絡手段が再生されたのは知っている。

俺のメールも届いた筈だ。

内容も、今思い返せば絶対に誤解されるような文でもないでこの家に来ようなんて沙汰には及ばないと断言できる。

ならば——何でここにいます？

「私は一郎を任された」

「初めて聞くタイプの侮辱だな」

「一郎は私を軽視してるね。私にはそれくらいの度量がある」

「割とガチで日頃の行いを省みてくれ」

彼女は欠伸だけすると、時計を見た。

そろそろ学校に向けて出発する時間である。

俺は居間へと戻って、既に用意していた鞆を手にした。リヨウもギターケースを背負って、俺へと目配せしてくる。

本当に一緒に登校するつもりか……。

正直、気が進まない。

山田リヨウ。

昨年の三月に出没し、一度の油断で家に招いてからというもの、ここを巣の一つと定めて凶々しく親の不在を良い事に何度も泊まり込んだりして我が物顔で過ごす輩だ。

家事はしないし、飯は強請るし、ベッドは取る。

来ても良い事は一つとて無い。

紛れもない——寄生虫だ。

俺の中では、そんな風に認識している。

お陰で人の面倒を見る事だけは達者になった。

去年を振り返ると、思い出す情景の殆どにリヨウが紛れ込んでいる。

そんな彼女と、進級してもまた同じクラスとは厄介な縁が出来てしまったものだ。

プライベートでも密接に関わるようになると、俺たちの間柄もまた一言では説明しにくい。

「一郎。私の弁当は？」

「オマエは虹夏のやつがあるでしょ」

「……足りない」

「……俺のを分けてやるから、もう口を閉じろ。虹夏にも失礼だから」

親友に弁当を作らせておきながら、量に対して不満を言う。

果てしなく傲慢なヤツだ。

少なくとも、俺はリヨウに弁当は作りたくない。

家でも晩飯、休日ならばもう遠慮なく朝昼晩とご相伴に与っていく面の皮の厚い彼女に極力、作る必要が無いなら是非とも作りたくない所存だ。

いずれは家に入らないようにもしたい……が。

「一郎は今日、バイトだっけ」

「ああ、二十一時くらいになると思う」

「カップ麺食べて待つか……」

「待っても飯は出さないぞ。というか帰れ……こちとら山田夫妻から娘の様子をメールで聞かれる度に泣きそうになるんだぞ」

リヨウの父母も心配している。

娘を溺愛する二人からすれば、俺は不逞の輩だ。

最初はかなり警戒されたが、今ではある程度信頼されているらしく、メールで釘を刺すような感じで娘の様子を尋ねる。

俺がリヨウに手を出すワケがない。

少なくとも、それは初めて会った瞬間にフラグが折られてしまった。

「一郎が帰るまで映画でも観とく」

「だから、帰れって」

「何かお勧めは？」

「……最近観た『ダンサー・オン・ザ・ダーク』ってヤツは面白かったかな」

切ない気持ちになる作品だった。

久しぶりに観終わってみれば、良い意味で悶々とさせられた。遣る瀬ないという感情が強いが、あれもまた人生かもしれないと一つの納得の形を心に届けてくれる。

リヨウがそこを共感してくれるかは分からないけど。

題名を復唱した彼女は、本当に記憶したのかしてないのか「んー、わかった」と変な調子の声を返してくる。

ホントか？

「つと、そろそろ出ないとな」

「まずい、一郎の所為で遅刻する」

「そこで俺の責任を強調するのやめろよな」

「大丈夫。私が一緒に罪を背負うよ」

「良い事風に言うな、恩着せがましい……」

俺とリョウは揃って、家を出る。

玄関扉に鍵をかけ、マンションを出ていく。

「行くよ。——前田」

俺は山田の隣に並び、学校へ向けて歩き出した。



午前最後の授業の途中、心地良くて眠ってしまった。

ただ真つ暗闇だった。

一体何なのかと困惑していると、遠くから音が近付いてくる。

ドンドンドンドン。

最近、似た音を聞いた気がする。

よく耳を澄ますと、それがドラムの音だと理解した。

音は着実に近付いて来るが、一体闇の中で叩いているのが誰か未だに正体は不明だ。

ただ、耳に全神経を集中させる。

不意に、頭に触れる掌の感触がした。

俺の跳ねた髪を撫で付けるように頭の上を滑る。

誰だ、何だ？

疑問が尽きず混乱していると、ドラム以外にも声が聞こえた。

——……一郎くん、見つけた。

「ひっ!？」

ぞつと背筋が凍る。

目を開けて机の上から跳ね起きた。

机から顔をあげると、目の前の席に腰を下ろしたクラスメイト——伊地知虹夏が驚いた顔で俺を見ている。

……何だか気まずい。

寝起きに情けない悲鳴を上げていた気がする。

夢の中で俺に接近していたのは誰だったのかはどうでもいいとして、虹夏さんは何をしていたんだ？

「一郎くん、大丈夫？」

「あ、ああ。……ちよつと良くない夢を」

「授業中に居眠りなんて珍しいね。いつもちゃんと集中してるのに」

「いつも?」

「あ、いや別に」

いつも俺より前の席に腰掛けている虹夏が、なぜ後ろにいる俺の様子を知っているのだろうか。

プリント配布の時……に見るのかな。

何故か狼狽えている虹夏に疑問を抱きながら、固まった体を伸びほぐそうとする。背骨がパキパキ鳴った……痛エ。

片腕が机から持ち上がらない。

見てみると、俺の腕を枕にして山田が同じように寝ていた。

「今は……」

「お昼の時間だよ」

「そっか。じゃあ、弁当食べよう」

「あれ！一郎くんも今日弁当箱があるんだ？」

「俺も少し変えてみようかなって」

どれくらい寝ていたんだろう。

俺は瞼を擦りながら、眠る山田を見る。

「山田、起きろよ」

「ん、おはよう」

俺の腕から顔も上げずに山田が答えた。

虹夏が肩を揺するが、一向に起きる気配は無い。

「昼飯だぞ」

「はい」

「うわ、起きた」

山田は期待の目で虹夏に手を差し出している。

溜め息をつきながら彼女が渡す弁当箱を即座に開けて、中身を貪り始めた。

その姿に俺も虹夏も苦笑いである。

作った者としては味わって食べて欲しい、その一念が湧いてしまう程の速度で弁当箱に空白が生まれていく。豪快というよりは、もはや掃除としか言いようのない食べっぷり。

おかしいな、俺の家でも朝飯をしつかり食べてた筈なのに。

「ちゃんと味わって食べるよ」

「やっぱり虹夏の弁当は美味しい」

「一郎くんの晩ごはんもこんな感じで食べてるの？」

「んー……？」

虹夏に訊かれて俺はこれまでを思い返す。

そう、でもないな。

あれ、どうだったっけ。

弁当よりは量が多いとしても、もつとゆっくり噛んで食べていた気がする。いつも話

しながら食べているからかもしれない……。そうだったっけ。もうよく分からないな。

あれは、味わって食べてた……？

「そう……かも」

曖昧に答える。

すると、そっかあと虹夏も苦笑した。

山田の視線がこちらへ向く。

ま、さか。

「俺のも食べる気かよ」

「分けてくれるって言った」

「言ってな……。言っただけ」

伸びて来る山田の箸を拒まず、俺は弁当箱を差し出す。山田の咀嚼速度は、やはり速い。

やっぱり気の所為か。

「あ、そうだ！」

虹夏がぱんと掌を打ち合わせると、ポケットから何かを取り出した。——チケットだ。

俺には見覚えのある物だ。

「それ、ライブチケット？」

「そう！今度演るやつ……良かったら来てよ！」

「……虹夏が演るって事は、山田も？」

「え……あ、うん」

虹夏が困惑気味に頷いた、何故だ。

いや、それより重要な話を聞いたぞ。

山田のベースが遂にライブで聴けるといふ。聞けば、日付も丁度フリーな日ではないか。

なら、行かない理由はない。

前から山田のベースがライブハウスで火を吹く様をいつかと望んでいたぐらいだし、俺は財布を取り出して購入しようとする……が。

「……ん？」

その直前、膝の上に何かが置かれた。

俺は机の下に視線を落とす。

すると、虹夏が差し出しているチケットと同じ物が置かれている。少しだけくしゃつとなつているのは、渡してきた本人の管理の悪さが窺い知れる。

顔を上げると、山田と視線が合った。

……………。

きくりさんのライブに通う過程で、幾つか知識が身に付いている。

ライブには集客ノルマが存在するらしい。

ライブハウス側から課せられた規定のチケット枚数を自分で売っておくのだが、これが充分に売れないとペナルティめいた物が働いて売れなかつた分を自分で支払う……とか何とか。

要するに、一人がチケット二枚を買い占めるのは不適切なのだ。

どちらかしか選べない。

俺が止まっているのを見て、虹夏が小首を傾げる。

まずい、判断を急がないと。

俺は直感で動く事にして——。

「あ、そ、そうだった。実は山田のヤツから既に買い取ってたんだつた！」

机の下のチケットを手に取り、虹夏に見せてみる。
すると、虹夏は一瞬だけ固まる。

え、何で？

「そ、そっかー……はは」

「どうした、虹夏」

「い、いや!? 一郎くんが来てくれるなら、尚更張り切らないとね! じゃあ、このチケットは他の友だちにでも売ってみるよ」

「そっか」

「………残してたんだけどな……」

「ん?」

「あつ、気にしないで。あはは」

虹夏が手を振る。

さ、最近暗い顔のまま小声で呟く事が多いけど……そういう時の不穩さが半端ではない。
い。

腕輪の時といい、虹夏は実は小声で凄まじい愚痴を言ってるのではないかと疑い、虹夏そのものを疑う自分を嫌になり、他の可能性を探ってはやはり虹夏への疑念が消えず………という『疑念スパイラル』が起きる。

何か、きくりさんの言ってるヤツに似てるな……。

「あ、私飲み物買つてくるね!」

虹夏が席を立って教室を出ていく。

その慌てた後ろ姿を見送った後、俺は財布を取り出してチケット代をそつと山田の前に置いた。

山田の所為で、俺は気分の悪い選択をさせられてしまった。

直感とはいえ、罪悪感がある。

第一、ライブがあるなら言えよな。前から俺も行きたいと言っていたのに。

このタイムミングというのも質が悪い。

「心臓に悪いことするなよ」

「驚いた?」

「当たり前だろ。ていうか、まだ売れ残ってたんだな」

忘れてたところの話ではない。

ペナルティになるというのに、金欠のオマエがそんな事したら更に危険な事になる。その分だけ、俺が面倒を見なければならぬ状況に陥るのは目に見えた未来だ。

意図的なら悪質窮まりない。

俺の悶々とした胸の内を知ってか知らずか、山田はチケットを手を取つて笑う。

「残してて良かった」

嬉しそうにしている意味が分からない。

俺も虹夏も良い迷惑だぞ。

「ライブって事は、喜多さんが歌うのか」

「うん……その予定なんだけど」

「ん？」

「合わせの練習、悉く出来てないんだよね」

「合わせ……って、みんなで合わせて演奏ってこと？」

「うん」

「………え、っ、ライブあるのに？」

「うん」

色々と不安になってくる。

これから観に行くライブへの期待図が、段々と霞んでいくようだった。

た、確かにまだ三人だけらしいし結成して間もない。

大きな期待を寄せるには荷が重すぎるだろうが、山田の演奏を楽しみにしていた身と

しては正直に言っただけでかなり残念だ。

喜多さん、どうしたのだろうか……。

先月のカフェで会った時は様子がおかしかった。

もしかして、あのときの事が原因になっているのではないだろうか。

「ライブ、雲行きが怪しいな」

「でも、やるだけやるしかない」

山田が弁当箱の中のトマトを箸で取り——呆けていた俺の口へと突っ込んだ。

「だから、ライブは楽しみにしといてよ」

それはしてる。

日頃から全力運動はしておこう

山田たちのライブ当日となった。

俺は張り切りすぎて色々と急いでいた。

どうせライブ後には山田が家に来るので、折角ならと虹夏も誘って記念パーティーにしてやろうと、料理の下準備などを済ませておく。

どんな仕上がりかは分からない。

パーティーなんて用意されても迷惑かもしれないが、もしそんな気分でないのなら、彼らには記念ではなく打ち上げ会と変更して伝えよう。

今日は豪勢にしゃぶしゃぶだ。

青梗菜やキャベツ、もやしと豚バラ肉というスタンダードなしゃぶしゃぶだが、かなりの物量を揃えた。

山田の胃袋などを考えれば妥当だろう。

後は米をひたすら炊いた。

後は、来客用のジュースなども準備が完了している。他にも色々々と仕込んでおかなくては。

いそいそと家の中を忙しく動く俺だったが、居間のテーブル上で震動し始めたスマホの前で止まる。

着信だった。——山田である。

「もしもし。こちら前田」

『前田……』

「どうした？」

『……………その……………』

「んっ」

山田にしては珍しく弱々しい声だ。

伝える事を躊躇うのか、肝心な内容が出て来ない。

根気強く待とうとも考えたが、ライブ前にこの様子を見ると悠長に構えているのも危うい気がする。

少し酷かもしれないが、先を促してみるか。

「ライブ、何かあるのか？」

『……………ポーカー』

「うん？」

ボーカル——喜多さんか。

彼女の事で何か問題でもあったんだな。

元から合わせの練習が出来ていないという不安な事前情報もあったのだが、このライブ当日という土壇場でどんな爆弾を炸裂させたのだろう。

少し聞くのが怖くなってきたが、俺は山田の先の言葉を待つ。

一呼吸分の間を矯めて。

『ボーカルが、ライブ直前で逃げた……から、前田は来なくて良い』

山田は信じ難い事を告げた。

俺はその場で固まって、何も返せなかった。

ボーカルが怪我をした。

ボーカルが体調不良で来れない。

そういつた内容を予想してただけに、その上をいく事態を耳にして思考が停止させられる。

逃げたって……そんな事が。

「あ、あれ……でも」

『今回は申し訳ない』

「い、いやいや……一応金は払ってるし、お、オマエのベースが聴けるなら別にボーカル無しでも」

『チケット代なら後で私が出す。……だから来ないで』

「な、何で」

自分でも、どうしてここまで動揺しているのか分からない。

どうしてもライブに行こうと縋り付く。

普段の冷静さがあるなら、山田の意思なんぞ関係なくライブハウスに足を運ぶ事が出来た。

こんな風に声を震わせることも無かった。

どうして、こんなに焦っている？

「い、行くのは俺の自由だろ」

『……お願ひ』

「……………」

そこから先は声が出なかった。

口を止めて、思考が止まれば必死になって縋り付いた理由がストーンと頭の中に落ちて

理解が完了する。

俺はただ、否定しなかったのだ。

ボーカルの不在だとか、緊急事態だとかそんな事はどうでもいい。

そんな事実よりも——あの自信家の山田が、『来るな』と言っている事だ。

去年、ずっと見てきた。

俺の家で凶々しく寛ぐ山田は腹立たしい。

イライラさせられなかった日など決して無い。

ただ、アイツがこの場所で弾く時の姿をずっと見ていた。

弦の上を奔る指先と、ベースに注がれる山田の眼差しの色の深さ。

凄く自信に満ちた演奏だった。

家で見てもそうだったが、ある日の視聴覚準備室にて俺一人の為に開催した単独ライ

ブの音の鮮烈さは、忘れていない。

きくりさん達の凄いライブを観た後だって、山田のベースが一番だと言えたのは、そ

れがあつたからだ。

だから……聞きたくなかった。

山田の弱つた声も、その口からライブに来るななんて言葉も。

俺は頭痛がして眉間を揉む。

お願いなんて。

「……俺は行くよ」

『……でも、私と虹夏しかいない』

「それでも行く」

『……………』

「……本来に来て欲しくないのか？」

『……………うん』

「……一応、理由を訊きたい」

俺は呼吸を整えながら尋ねる。

山田の返答次第でどうなるか分からない。

もし、あの山田から自信のない弱い感想なんて聞いたたら。

『一郎には、ちゃんとした私の音楽を聴かせたい』

その一言で、俺は脱力して座り込んだ。

……そこまで言うなら仕方無い。

何て答えたかは覚えておらず、ただ通話はそこで終了された。どっちが切ったかも定

かではない。

スマホを隣の床に置く。

準備していた何もかもへの失望感は無いらしい。

それ以上に押し寄せる怒涛の感情の整理で俺の体はそれ以外の全てを放棄する。

だから俺は暫く、ぼーっと天井を見上げながら放心していた。この日を楽しみにしていただけに、予想外の頓挫の仕方に心構えも何もかもが無為に陥り、感情が追いつかない。

空虚だった。

それだけに最後の方は山田の声がリフレインしている。

どんな顔をして、次は山田に会えば良い？

やっと動き出した脳みそが最初に提起した問題はそれだった。

別に、当初の予定が少しズレただけだ。

本人たちさえ良ければ、打上げはここですれば良い。

ただ、今の山田に俺はどんな風に接すれば……。

この絶望感、前にも覚えがある。

たしか、五歳の頃に少しだけ自分を変えようとして当時世話になっていた親戚の人の誕生日に子供なりのプレゼントを贈呈したのだ。

残念な事に、それは目の前で床に叩きつけられて踵で踏みじられ、罵詈雑言を浴びせられ、翌日のゴミ袋の中に残骸を発見する羽目になった。

その時に似ている。

あれが嫌だったから、人にプレゼントなんてしなくなつたし、自分の誕生日も言わなくなつたな。

誰かに気遣われるのも嫌で、誕生日はできる限り独りになれるように立ち回る。

当日両親から届くプレゼントにも胸が躍らない。

後藤家に言祝がれてもさほど喜べない。

「……重く、考えすぎか」

俺はようやく力の入った足で立ち上がる。

取り敢えず、ライブが終わった後は我が家で打ち上げ会を皆でしようと山田……………

いや、虹夏に連絡する。

さて、打ち上げ会だけでもどうにかしよう。

山田の件は後回しでいい。

今回駄目だっただけだ。

またいつか聴ける、今はそう思う事にしてこの混乱と無理やり折り合いをつけた。



夜になり、俺は机に突っ伏していた。

あー……何もやる気が出ない。

虹夏からは打ち上げ会の件について『了解』という返事を頂いている。後は、彼女らのライブが終わって笑顔で迎えるだけ……なんだけどな。

俺は壁の時計を見る。

もう、ライブは終わった頃だろうか。

「ん……ロインか。虹夏かな？」

俺は机の上のスマホを掴む。

画面を見れば、虹夏ではなくひとりからだった。

『助けて』

突然の救難信号だった。

何やら位置情報が送られてきている。

助けて……………か……………。

「任せろオツツツツ」

!!!!

草臥れている場合では無くなった。

全身に力が漲る。

気力が金色の光として可視化できる程に自分の体から充溢しているのが分かった。

ライブが観れなかったなど些末な事!!

俺は上着を掴み、家から飛び出した。

エレベーターでは遅い。階段を四段飛ばしで駆け下り、マンション出口を滑り出て、位置情報で示された地点へと力走する。

入学から一ヶ月以上経ち、ひとりには未だに俺を頼った事は無かった。

きつと、俺を不安にさせまいと努力していたのだろう。

今回は何があつたか知らない。

だが!

きつと、もう自分だけでは立ち直れない壁にぶつかったのだ!!

ひとりの苦難は俺の敵イ!!

手段を選ばず木っ端微塵にしてくれる。

ただの事態ならともかく、人が原因ならば全力で排除して二度と害意なんて抱かないよう徹底的に心底まで恐怖を刻みつけてやる。

疾風のごとく駆けた俺は、いつも以上の速度が發揮できていた所為なのか感覚的に導き出していた到着予想時間を遥かに凌ぐタイムで現着した。

位置情報の地点で、急ブレーキをかける。

すると、ギターケースを背負ったままフラフラしているひとりを発見した。

「うへあつっ!?!いいいいっくん早い!!!」

俺はひとりの傍へと止まるや、拳を構えて全方位に威嚇する。

「敵は何処だ、ひとり!」

「敵!?!」

「安心しろ、オマエに害を為したヤツなんぞ血祭りにしてやる」

「ひ、ひえ」

随分と頭に血が昇っていた。

ひとりが俺に怯えて悲鳴を上げる。

おっと、いけない。

優先すべき第一目的は、ひとりの心の安寧を取り戻す事である。俺が彼女を混乱させ

ては本末転倒だ。

まずはひとりを抱き締めて頭を撫でる。

「ごめんな、怯えさせて」

「うおえ……（切り替え凄すぎて目が回る……）」

「一旦落ち着こう。大丈夫、大丈夫……」

ひとりと温もりを分かち合っていると、少し下から扉を開く音がした。

地下へと続く階段の先で、こちらを怪訝に見詰める視線が二つあった。

「えっ……い、一郎くん？」

「……………」

俺もひとりから少し体を離し、視線に応える。

よく見れば虹夏……げ、山田。

どうして二人がここに？

そんな疑問は、周囲を見てここがライブハウス『STARRY』だと理解した瞬間に

解消された。

「……ライブお疲れ」

「み、店の外が騒がしかったから見に来たけど……何してるの」

「ひとりからロインを受けて、ここまで迎えに来たんだよ」

「ぼっちの?」

山田が眉を顰める。

それよりも、『ぼっち』って何だ。

不吉な含意のありそうな単語に違和感を覚えつつ、腕の中で蒸発しそうになっているひとりの体が形を失わないよう強く抱きしめ直す。

階下からの視線が鋭くなった気がした。

どうでもいい。

今はひとりが最優先だ。

「あれ、ひとり……何でこのライブハウスに?」

「あう……ぐあ……」

「この様子だと再生まで三十分弱か」

立ち直るまで介抱しよう。

俺の家で一旦休ませてから、後藤家に連絡だ。

俺は下から見ている二人に視線を投げた。

「これから、ひとりと家に帰るけど……二人は俺の家に来る?」

「……………うん、行くよ」

「目が覚めたから」

二人が頷き、一旦帰り支度を済ませるとライブハウス内に戻った。

俺も訊きたい事が山程あるので、今回は打ち上げ会と言うよりは尋問になりそうだ。

……………む。

俺はふと、自分の足が震えているのが分かった。

じわじわと、脹脛や臀部の筋肉がぎこちなく淡い痛みを伴って張っていくのが伝わる。

……………近年稀に見ない全力の解放に、どうやら体が追いつかなかっただらしい。……

筋肉痛だ。

俺は階段横の欄干に縋り付いて立つ。

駄目だ、これ以上は。

「お待たせー！……………ってどうした!？」

「ごめん、家まで送ってくれ。もう動けない……………!」

「何しに来たの!？」

いつの間にか慣れてしまった

俺が行けなかった初ライブ当日、事件は起きた。

「完熟マンゴー、ね」

俺は家に招いた二人から経緯を聞き及んだ。

事前に山田からの連絡で、ボーカル担当だった喜多郁代さんが直前になって行方を晦ませてしまい、インスタ——楽器だけで演奏された曲の披露という形式になったが、ギターも不在となって虹夏が代行役を求めて周囲を奔走したという。

その過程で発見したのが、帰宅途中だったひとり。

彼女を半ば強引に参加させ、ライブは何とか乗り切った……らしい。

ちらり、と対面に座る少女を見る。

幸せそうに俺の作った唐揚げをひとりが食べていた。

相当の消耗だったのか、さっきまで昏倒していたのに好物を前にして箸が止まらない。
い。

まあ、ひとりが笑顔なら何でも良いか。

しかし、ライブの内容は散々だったらしい。

虹夏もミスが多く、山田も本領は発揮できず、ひとりは人前に出れずダンボールに梱包された状態で演奏？した。

逆に気になって見てみたかった。

山田からくるなどは言われていたんだけどさ。

「取り敢えず、みんなお疲れ様」

「あはは、ありがとう」

「ごめん、俺も急な用事が入って行けなかった」

「いいよ全然！今回はダメダメだったし」

虹夏のコップに来客用のオレンジジュースを注ぐ。

コップを構えて待つ山田——の前にボトルだけ置いた、自分でやれ。

ひとりとは黙々と食事を続ける。

箸の手が止まらな……いや止めようとしな。

恐らく、口に常に含んでいれば会話を振られないだろうという謎の陰キャ術理を發揮している。

「それにしても」

「ん？」

「ぼっちちゃんと一郎くんが親戚だったなんてビックリだよ」

「ああ、うん。まあね」

ぼっちちゃん、つて何。

訊きたいけど、その名を口にする度に虹夏の隣で笑顔が弾けているので追及しづらい。

ひとりが嬉しいなら何でも良いか。

「父方の親戚繋がりなんだよ」

「じゃあ、年末年始に行く家って」

「ひとりの家。毎年世話になってるから、後藤家もひとりも俺にとっては大恩人なんだ」
「大恩人？」

山田がこてり、と小首を傾げる。

しまった、余計な事を言った。

家庭事情の一端を話した虹夏ですらも、尋ねたそうにしている。両親との仲がぎこち

ない事は知っているが、それが後藤家とどのように繋がっているのか、彼女からすれば逆に気になるのかもしれない。

どう答えたものか。

自分で墓穴を掘った気分で説明の仕方を考える。

すると、ひとりが箸を置く音で視線が彼女へと集まった。

「あ、えと……」

「どうしたの、ぼっちちゃん」

「あの……いっくん、急に呼んでごめんなさい。ライブ終わって色々混乱してて」

「大丈夫だよ。……唐揚げ、美味いか？」

「……うん」

ひとりがえへへ、と笑う。

碗が空なので、俺は新しい白米を盛る。

「あ、私も食べちゃおうと」

「いただきます」

「あ、美味しい！流石は一郎くんだね」

虹夏たちも食事を始める。

ひとりのお陰でどうにか誤魔化せたか。

虹夏と山田、それと喜多さんに用意していた慰労パーティーの料理なので、お気に召したなら何より。

しかし、世間は狭いものだな。

まさか、土壇場でひとりがスカウトされるとは。

数あるギターリストでも、虹夏が連れて行ったのが俺の親戚だとなると、もはや運命力か何かが働いていたとしか思えない。

この三名によるバンド——『結束バンド』。

ネーミングはアレだが、良い面子だ。

天使のように優しい虹夏。

自由だが音楽に直向きな山田。

そして、我らがひとり。

こうして見ると、個性としてはそれぞれが際立つ。

ひとりについては、以前から直樹さんにも教えて貰って彼女が『guitar hero』として動画サイトにギター動画を視聴している。

素人でも上手いと分かるので、きつとライブでもダンボール内とはいえど、かなり良い演奏になったのではないだろうか。

喜多さんの一件があつたが、次のライブがあるのなら益々楽しみになってきた。

「でも、そっかあ」

沁沁という風に、虹夏が呟く。

「結婚しようって言ってた相手、ぼっちちゃんなんだ」

瞬間、部屋から音が消えた。

どうしたんだ、急に。

ひとりが、真っ赤になった顔のまま俺と虹夏たちを交互に見る。

確かに日頃から言っているが、虹夏たちが知っているのはどうしてだろう。

記憶を遡って、該当する物を探す。

……ああ。

以前、二人の前でひとりと通話した時のことか。

その時も、ひとりの将来を案じて仮に追い詰められた時は俺が養うと言っていたな。

「い、いつくん……!?!」

「ひとりと通話してた時に二人もいたんだよ」

「あばばばば……!」

俺は手を横に振って虹夏の方を見る。

「それは、ひとりが将来追い詰められた時の話」

「追い詰められた時？」

「そう。ひとりにだって選ぶ権利がある、どうしようも無い時は俺と一緒に居るって話」
「そ、そうなんだ」

虹夏が胸を撫で下ろした。

成る程な。

学生の内から結婚を考えている人間、それも身近な友人がいるのは少しだけ心配になるのかもしれない。友だち想いの虹夏らしいな。

「わ、私なんかにいっくんは勿体無いので」

「えっ」

「あ、嫌なワケじゃないです!? その、いっくんは……自分を甘やかしてくれる人と結婚した方が良いから」

甘やかしてくれる人間、とは。

それは嬉しいかもしれないが、どうだろう。

俺は基本的に結婚自体を考えていない。自分を素直に愛せない人間が他人を愛するなんてどの口が言ってるんだ、と思う人間だから。

それでも、ひとりの場合は例外だ。

ひとりの窮状には必ず助太刀する。

将来が不安なら、将来のひとりの受け皿にだってなる覚悟で結婚を視野に入れてい
る。実際にひとりと一緒に居る時間の自分は好きなので、結婚したとしても一切の苦痛
がないと断言できる。

「甘やかすって」

俺が苦笑すると、ひとりは頷いた。

「いっくんは頑張ってるから……一緒にいるなら支えられる人が良いと思う」

支えてくれる人、か。

………ひとりか？

生きてるだけで俺の精神的支柱になっていいるのだから、実質的にひとりなのではな
いだろうか。

辛い時に声を聞くと癒やされるし、立ち直れる。

さては………世界が俺にはひとりしかいないと実感させようとしているのか。

いやいや、だとしてもだ。

ひとりの幸せもある。

俺と結婚しても将来の道を塞いでしまうだけだ。

そうなる……他に俺を甘やかしてくれそんな人間とは誰だろうか。

知り合いの女性で考えよう。

バイト先……はいないな。

きくりさん……は絶対に無理。

山田は言わずもがな、論外だな。

「……虹夏か？」

「えっ!!？」

しまった、思わず声に出していた。

今のは完全にドン引き発言である。

既に家事のできない星歌さんの分まで面倒を見ているような生活をしている虹夏ならば、俺でも甘やかして貰えるのではという浅はかな考えからつい浮かんでしまった。友だちからそう思われるとか最悪の印象だ。

恐るおそる、虹夏の反応を盗み見る。

あれ、いない。

対面に座っていた彼女の姿が無かった。

一体何処に――。

「そっかー、私なら良いのかー」

……隣に移動していた。

ニコニコと居た堪れなくらい優しい笑顔だ。

正視に耐え難く、俺は思わず顔を背ける。

すみません、ひと思いに殺してくれ。

「すみません、気色の悪い事を言って」

「いやいや、大丈夫だよ!？」

「正直、ひとり以外で考えたらまともな知り合いが虹夏ぐらいしかなくて……」

「し、消去法なんだ……」

く、話を逸らさなくては。

いや、そもそもライブの話をしたいのには俺が話題になっているのは可怪しいだろう。

でも、俺は観に行かなかったからな。

どこに手を付けて良いかもわからないので、話の切り口が作れない。

ふと、茶番のような会話を続けているが、山田は一切入ってこない事に気付いた。

山田は——？

「……ホントに自由だな」

背もたれに全身を預けて、天井を仰ぎながら寝ていた。

♪

♪

♪

♪

ライブから数日後。

放課後、シャー芯が切れたので校内の購買部に足を運んでいた。

バイト先近くの書店で売られている物が売り切れているという奇跡的な最悪に遭遇

してしまったが為に、ここに購入しに行く羽目になっている。運が悪いにも程がある。

「このヤツ、地味に書店より高いんだよな……。」

「購買部なら学生に優しくしてくれよ。」

「俺がいつも使っている物を商品棚から発見して手に取る。」

「今年は消費量が半端ではない。」

「成績の向上を目指していて、いつも以上に勉強している。」

「さて、今年こそ成績上位二十名入りしないと。」

「あれ、一郎くん？」

「あ、虹夏」

「奇遇だね。もしかして、一郎くんも切らした？」

「そんな感じ」

「虹夏が俺の隣に立って、同じ商品を手に取る。」

「……今日は山田と一緒にじゃないのか。」

「あれ、山田は？」

「え？……そんなはずと一緒じゃないって」

「アイツ、一年の時は一人だと何してた？」

「校内散歩してたり、机で寝てたり」

「らしいな」

あの性格が学校でも変わる事は無いか。

ライブハウスだったり、興味のある場所ならば普段の様子が嘘だという程に饒舌にはなるけどさ。

この前も、少しだけ興味本位で音楽に関する質問を投げかけたところ、小一時間に及ぶ長大な説明を展開し、俺の脳みそに大量の情報を垂れ流してきた。

不用意に触れるべきではないな。

充分な覚悟で臨まないと、本気の知識に尻込みしてしまう。

「まあ、常に山田と一緒だと虹夏も大変だろ」

「人の面倒見るのは慣れてるけどね」

「羨ましいよ。俺はまだ人に振り回されるし」

「どうかな。私もリョウも、ぼっちちゃんだつて一郎くんに翻弄されてる感じするけど」

「翻弄つて、そんな迷惑かけてたか」

「このこの、と虹夏が肘で脇腹を突いてくる。

それを手で受け流しながら、俺は会計へと向か——途中で、背後から悲鳴が上がっ

た。

何事かと振り返ると、購買の天井付近をハチが飛んでいる。

「……虹夏つて虫が苦手？」

「う、大体は大丈夫だけど……ハチとか危ない系は」

「へえ」

「一郎くんは？」

「カッコいいし面白いと思ってる」

「た、例えば？」

「ハリガネムシとか」

「は、ハリ……？？どんなの？」

「カマキリに寄生する虫だよ。小さい頃は川辺とかでお腹の膨らんだカマキリとか探してさ、中に入っていないか調べたんだよな」

何故か虹夏の顔色が悪くなる。

この趣味、山田にはウケるのにな。

どうやら危ない系の虫以外にも寄生虫なども苦手分野のようだ。

でも、俺も苦手な虫はいる。

ハチなどは別に構わないが、アブは無理だ。

小さい頃は、一時的に宮崎県の親戚に預けられた時に遊んだ川の上を群れで飛び回る巨大なアブに追いかけて回されて苦手になった。

だって、スズメバチより大きいんだぞ。

その上で血は吸うし、刺されると凄く腫れる。

まあ、ハチは危険だけど対処法があるしなあ。

そう考えていたら、虹夏の頭めがけてハチが滑空していた。

頭を抱える虹夏だが、あれでは避けられない。

「危ないって」

「えっ」

俺は虹夏を片腕で抱き寄せる。

彼女を後ろへと移動させながら、もう片手に握るレジ袋で飛んできたハチを包んで捕まえた。

袋の口を縛って、捕縛完了……後で窓から解放してやるから顎をカチカチ鳴らすんじゃないよ。

群で来られるとハチも怖い。

だが、攻撃したり殺したりしなければ報復されない。

昔、ポストの下にアシナガバチが小さな巣を作っていた事があって、開閉の時の衝撃で驚いた彼らに追いかけられた時があったのを思い出す。

いやあ、思えばあれも怖かったな。

いや、懐かしむのは後だ。

まずは虹夏の安全を確認するのが優先。

俺は片腕の中に収まっている虹夏を見た。

「大丈夫？」

「あ、うん」

さっきの慌てぶりが嘘のように固まっている。

混乱窮まって、むしろ放心状態なのだろうか。

「ハチはほら、この通り」

「す、凄いな………スパツと袋に入った」

「昔は友だちとか居なくて独りで虫捕まえてばかりだったから得意なんだよ」

レジ袋を掲げてハチを観察する。

……と。

「いめん」

「あ」

俺は虹夏を解放する。

いつまでも密着してゐるのマズいよな。

友だちも多い虹夏に変な噂が立つても困るし。

「じゃあ、俺はコイツを外に放してくるから」

「う、うん。……あ、私は一郎くん分までシャー芯買っておくよ！」

「え、いやでも」

「守ってくれたお礼！」

虹夏が商品を二つ手に持って会計へと足を進める。

俺はそれを見送ってから、取り敢えず近くの窓で袋の口を開けてハチを放つてすぐに窓を閉める。

何だか得した気分だな。

ハチを捕まえただけでシャー芯代が浮く……。

あれ、山田に思考が似てきたのかもしれない。中々に下卑た自分の所感に、思わず自己嫌悪が湧く。

一人で悶々としていて、購入し終えた虹夏が戻つて来た。

「はい、コレ」

「ああ、ありがとう」

「あのさ、一緒に帰らない?」

虹夏に誘われて一緒に廊下を歩く。

今日はオフだし、たしかに虹夏と帰れる。

何なら、遊びに誘ってみるのも友だちっぽくて有りかもしれない。

あれ、でも。

——今日は私もバイトだから、晚ごはん宜しく。

……山田がそんな注文してた気がするな。

家事もやったり、映画を観たい気もするし……後で良いか。先日注文した映画『レプ

○カ』も夕方に届くんだった。

流石に今日は断念しておこう。

「い、いよ」

「ホントに?」

「え、うん」

そう言うと、虹夏が嬉しそうに笑う。

一緒に帰るだけで大袈裟な……とも思ったが、そこでふと自分自身に違和感が生じる。

あれ、俺だって友だち居ないから人と帰ること自体が特別な事なのに。
でも、思い返すと……よく山田と一緒に帰ってたっけ。

「どうしたの?」

虹夏が不安そうな顔で振り返ってくる。

別に何でもない、とだけ答えて俺は彼女の隣を並んで歩いた。

明るいあの子の暗い話

「最近、バンドはどうだ？」

食器を片付けながら尋ねた。

映画『ミツ〇サマー』を鑑賞中のリヨウは、内容に釘付けで俺の声は耳に届いていなさそうだった。枕を抱いて、時折だが顔を顰めている。

無理もない。

俺も初見では同じ反応だったと思う。

物語が進む程に不安感が煽られるのはサスペンスの醍醐味だが、この映画は民俗学的な側面が強くて正直に言うところ解決だとか救いという物が無い。

映画の舞台において、山奥や地獄にも載っていない村などの因習などが関わるサスペンスだと、大概は村を脱出するしか助かる道は無く、証拠を持ち帰って正体を暴露するなんて稀だ。

特に生贄というのが多い。

無事に帰れた例は少ないな、確かに。

結末としては、訪ねた登場人物もその風土に染まってしまったり、無念にも途中で死んでしまったりする結末の方がスタンダードだ。

そういう映画を観た後の後味は、独特だ。

俺はリヨウの前にコーヒーを置く。

声は聞こえていなかった程に集中しているのに、コーヒーだけには反応して一口啜る。

現金なヤツだな。

俺も隣に腰を下ろして、課題をやり始めた。

黙々と手を進める――が、要所要所の衝撃的なシーンでだけつい顔を上げて見してしまう。俺の方はリヨウほど一つの事に集中できていない。

やがて映画が終わり、リヨウが深く息を吐く。

鑑賞後、その胸中にあるのは俺と同じような感想なのだろうか。

「一郎」

「ん？」

「そういえば、途中で私の調子がどうだって訊いてなかった？」

「バンドの調子はどうか？」

オマエの調子はどうでもいい。

家に来る度に大体分かるからな。

それよりも気になるのは、ひとりが加入して新たな一步を刻んだ虹夏率いる『結束バンド』の様子である。俺は『STARRY』にも行かないし、ひとりともメールはするけどあの子は不安にさせまいと見栄を張ることが屢々あるから実態が分からないままだ。

現状を知りたいのなら、当事者のリヨウに直接聞くのが一番早い。

「依然ボーカル探し」

「喜多さんの代わりか」

「最近ほぼっちもバイト頑張ろうとしてくれてるし、虹夏も張り切ってる」

ひとりのバイト。

最初は不安が大きかったな。

極度の人見知りでコミュニケーションが苦手な彼女がライブハウスで働くというのは、かなりの過負荷になると俺は予想していた。

どんな仕事だって他人との対話を要する。

ひとりには辛く厳しい事には違いない。

初日のストレスが凄まじかったのか風邪を引きはしたものの、復帰後は欠勤も無く働

き続けているとか。

………涙が出そうだ。

あの子は苦手な事でも逃げずに頑張るんだな。

しかし、虹夏も張り切っているのか。

もしかして、ひとりの努力する姿に触発されたのかもしれないな。

あの明るく常に前を向く虹夏らしい。

……その割には、リヨウは変わらないな。

「オマエも何かやってるの？」

「うん。お気に入りの楽曲が見つかった」

「良かったな、暇そうで」

オマエも少しは影響されろ。

常にマイペースなところは羨ましく思う日もあるが、今だけはもう少し頑張れよ。

俺の皮肉も通じず、リヨウはコーヒーを堪能している。

結束バンドなのに結束力低いな………。

そこで、ふと思った。

ボーカル探し。

部外者ではあるが、俺でも貢献できそうだな。

俺自身は技術的に無理でも、探すだけなら俺にも可能ではないだろうか。

知人に当たって………友だち少ないんだった。

「俺も探してみるか」

「一郎は何もしなくていいよ」

「え、でも」

「大丈夫。最悪は私が一夜漬けすればメンバーの一人や二人……」

「そんな爆弾能力に委ねるな」

決してロクな結果にならない。

一夜漬けしたら代償で何かを失うのがリョウだ。

メンバーが勧誘できてもコイツが面倒臭い状態に陥っていたら意味が無い。また虹夏と俺が苦勞させられるだけなのが目に見えている。

「でも、勧誘は難しいかもな」

「何で？」

「だって、結束バンドで頼れる人脈の広さとか行動力があるの虹夏だけだろ」

「たしかに。私には虹夏と一郎しかいない」

ひとりも友だちが少ないらしい。

本人は強がっているが、言わずとも分かる。

何でだろうな……あの子の魅力を知れば、学校どころか世界が注目するというのにな。かなり残念だ。

それはともかく、こういった事情から現状では結束バンド内で虹夏しか頑張っていない。

「そもそも、どんなボーカルが欲しいんだ？」

「歌える人」

「ざっくりだな」

「別に。普通に歌える人が来ればいい……音楽性なんかは、みんなで作れば良いし」
ほう。

リヨウにしては珍しくまともな意見だ。

歌い手に高い技量なんかは別に求めていない。皆で結束バンドの音楽を作れたら良いというのは、また素敵な方針だと思った。

……ならば尚更頑張れよ。

虹夏任せにはせず、リヨウも積極的に行動すべきだ。

「リヨウの作りたいバンドってさ」

「なに？」

「実は将来的なヒットバンド狙ってたりするの？」

「バンド作る人は大抵そうだと思う。でも私と言うより虹夏が作りたいたバンドだから」
「そっか」

リヨウは虹夏の意味を尊重している。

一時期はあれだけバンドに辟易していたからな。

そんなコイツを勧誘し、再びバンドマンとして立ち直らせる事をしたというだけあり、虹夏に感謝しているのかもしれない。

結束バンドのリーダー、か。

結構大変だよな。

今のところ、全然悪い子では無いがひとりもまた個性的と言えば個性的だし、それに加えてリヨウもいるとなればまとめ上げるのにかなり苦労しそうだ。

手伝えることは手伝いたいけど、部外者だしな。

リヨウが俺の協力を拒むのも、バンドの力で成り立たせたいというプライドが底にあるからなのだろう。

ここは見守る事を徹底するべきだな。

「ボーカル、見つかるの良いな」

「いつか来る……きつと」

「探せ」

そこは受動的になるなよ。

虹夏一人に全任せするな。

「それにしても、喜多さん何してるんだ」

「さあ」

「さあつて」

「連絡も無いし、もう死んでるかもしれない。私は最近お線香あげてる」

「想定してる最悪がレベチだな」

姿を消しただけで生存を疑うな。

単純にライブの緊張感や、ボーカルとしての重圧があつたのかもしれない。はつきりとした理由は不明だが、他にもライブ直前で逃げ出した事への罪悪感もきつとあつて戻りづらいというものもあるだろう。

メンバーに謝罪の一つも無いのは、きつとそういう事だ。

あまり交流は無かったが、入学式の日友人の家の鍵を探していた喜多さんなら、他人に迷惑をかけて何も思わない筈は無いのだから。

「ま、早く見つかると良いな」

「気長に待とう」

「少しは頑張れよ」

「えー……」

リヨウが面倒臭そうに顔を歪める。

どっちにしろ、オマエも少しは頑張れよ。

メンバーが揃わなければ何も始まらないだろうに。

「俺は早くオマエの音楽が聴きたいんだけど」

そう言うと、リヨウは一瞬だけ固まった。

俺が楽しみにしている事が意外だったのだろうか。

それならば心外だ。

ライブに来るなど言われた時の心の傷は、地味にまだ癒えていないんだからな。

我ながら女々しいかもしれない。

でも正直に告白すれば、若干今でも引き摺ってる。

あの時よりも、次の結束バンドのライブへの期待度は跳ね上がっていると言っても過言ではない。是非ともこの鬱屈とした気分を払拭してくれるような衝撃がある事を臨んでいる。

いや、結局は勝手に俺が期待して失望してるだけの話なんだけども。

少しだけ自己嫌悪に苦悶していると、肩にリヨウの頭が乗った。見れば、少しだけ嬉しそうだった。

「やる気出たかも」

え、逆に怖い。



その翌日のバイトだった。

俺は店内に入ってきた客を思わず凝視する。

その視線に気付いた相手も、俺を見るや固まってしまった。

一体どれだけそうしていただろう。

店長の思案顔が視界の隅に入って、ようやく俺の体は再始動する。

「いらっしやいませ」

「り、リヨウ先輩のカレシさん……」

「何処でそんな悪口覚えたんだ」

俺は内心憤りつつも、入店した客——逃げたボーカルギターこと喜多郁代を席へと案内する。

ギターケースを背負った制服姿。

学校帰りだろうか……ギターを持つてるのは部活かな。

いつも友だちに囲まれてそうな彼女だが、今日は何故かお一人様だ。

明るい彼女を知る俺からすれば、表情も暗く見える。

今は店内もかなり空いている時間帯だ。

静かな分だけあって、新たな客の喜多さんの影が濃い。

かなり落ち込んでいるが、もしかして。

「ご注文お決まりでしたら、ベルでお知らせ下さい」

「あの」

「はい?」

「り、リヨウ先輩のカレシ……なんですか?」

「違います」

「でも」

「照れ隠しとかではなく、本気で交際関係じゃありません。アイツに割と良いようにこき使われているだけの人間です」

「こき使う……?」

「頼まれて飯を作ったりとか」

「……………良いなあ」

「へ？」

い、今なんて言ったんだこの子……？

誰もがきつと憐れむか顔を顰めるかしかない状況を説明して、よもや良いなんて羨むような言葉を口にしたのか。

予想していた反応と明らかに違う。

「取り敢えず、恋人ではありません」

「そうなんですネ……そうなんですネ！」

「うお、びっくりした」

「何だか心の暗闇が晴れた気がします！」

席から立ち上がって喜多さんが笑顔を咲かせる。

え、まさか暗い顔の原因ってコレだったのか。

しょうもな……とは言うてはならない。彼女にとっては切実な問題だったのだ。

この反応から推察するに、喜多さんは山田に対して強い憧れを抱いている。

恋愛的な好意、なのか？

それは微妙だな。

学校でも推しのアイドルに恋愛疑惑が浮上した時は血の涙を流すほど悲憤している人間がいたから、その感覚にも近いのかもしれない。

山田が一定の層から支持されているのは知っている。

男子よりも、女子の方がファンも多いとか。

本人が語っていたのは胡散臭かったが、実際にアイツの名前を挙げて黄色い声を上げている人もいた。

喜多さんもその類だったのか。

懐かしいな。

一年前、山田との交流で勘違いした女子に殴られそうになったっけ。偶然にも現場に居合わせた山田が同棲疑惑だけ新たに芽生えさせて去ったので拗れてしまったけど。

「何だかやる気が漲ってきたわ!」

「はあ……おめでどう?」

「ようし、早速……はあ」

やる気が出たと言うや急に萎んで机に突っ伏す。

感情の起伏が烈しいな。

「どうした?」

「私……実はリョウ先輩目的でバンド入って……でも、でも、ギター弾けないんです」

「練習すれば良いじゃん」

「弾けるって嘘ついて入って、練習して誤魔化そうとしたけど全然上達しないんです!」

「……今日ギター持ってるのは部活？」

「練習、してるんです……部活はしてないです」

山田目的で入る、なんて話あるんだな。

俺には信じ難いが、まあ目の前に実例があるので驚く事しかできない。

それにしても、嘘を言ってるバンドに入ったのか。

嘘を付く事が良いワケじゃないが、その後も努力して嘘を本当にしようとするくらいには結束バンドに貢献しようという姿勢を感じられる。

やはり、悪い子ではない。

「じゃあ、何で」

「……知ってるんですね、逃げた事」

「山田から聞いたよ」

「リヨウ先輩、怒ってました？」

「いや、心配してた。音沙汰無いから、もう死んだと思って線香あげてたとか何とか」

「そ、そんなに私の事を想ってくれて……!？」

「喜ぶな」

「ア、ハイ」

真面目な話してるんです。

悪い子ではないが反省はしなさい。部外者の俺に言う権利は無いけどさ。

真面目な話なので変なテンションはやめてくれ。

いや、山田に関しては真面目ではないと思うが。

「虹夏も別に怒ってなかったよ」

「知り合い、なんですか？」

「学校もクラスも同じだから近況はよく聞くんだよ」

「そう、なんですね……みんな優しいです。だからこそ、胸が痛い」

「え、あー……」

「早く諦めろって話ですよね！私ってホント……」

喜多さんが卓上で項垂れる。

う、暗い……！

参ったな、また落ち込んでしまった。

落ち込んだ調子のこの子を、結束バンドにもう一度誘おうなんて考えが一瞬浮かんだが、それは能天気かもしれない。

喜多さんは謝りに向かう勇氣も無く、でも考えないようにしようと思える事も出
来ず悶々としている。

中途半端で、分岐点だ。

部外者の俺が背中を押せる話でもない。

「ん、とー」

「……あの?」

「あー」

かける言葉が見つからない。

第一、俺は人を励ますのは苦手だ。

ひとりの時は心の底にあるモノが自然と褒め言葉となつて口に出るのだが、励ました事はほとんど無い。

むしろ、励まされてばかりだ。

虹夏や星歌さん、それに………。

『今日、元氣無さそうだったし』

あの雨の日に、わざわざ暗い顔をしていたらしい俺を励ます為に一人ライブまでした山田。

でも、俺は山田みたいに音楽という手段では人に訴えかけられない。

どうしよう。

このまま喜多さんを返してもロクな事が無い。

どうしよう……どうしよう………!

『——また夢見せてやるよ』

脳裏に、あの人の声が響いた。

そうだ。

あの人は、俺を言葉で励まそうとしていた。

あんな感じで、あんな感じを倣って、喜多さんを励ませるのではないだろうか。

真似でも良い。

絞り出せ、言葉を。

「喜多さん」

「……………」

「喜多さんは凄いで。俺ならとつくに忘れようって努めてるのに、未だにギリギリの所で踏ん張って練習続けてるんだろ」

「……………そんなの、言い訳ですよ」

「……………」

「自分は大丈夫、悪くないって言い聞かせる為にやっているとしか思えないんです。こんな中途半端なら、早く諦めた方がいっそ——」

「中途半端で良いでしょ」

「え？」

「喜多さんがすっぱり諦めつくまで練習や上手くなる方法模索して、練習もギターも嫌になったら諦めよう。逆に上手くなったらみんなに謝りに行ったら良い」

きくりさんみたいに、肯定と……先を示す言葉を絞り出す！

「もう少し頑張っても良いと思うぞ。諦めるなんていつでも出来るけど、悩めるのは今だけしか出来ないし」

「……………」

「……………」

「……ゴメン、何が言いたかったか途中で分からなくなった」

「……………」

「つ、つまり、中途半端な所かもしれないけど喜多さんは止まっているワケじゃない！人より進む速度が少し遅くなっているだけだって話かな!？」

自棄になって変な言葉を口走る。

シン、と静まり返る。

あ、夢中になってたけど……客とずっと話してる店員の俺って凄く迷惑なのでは？
ちらり、と店長を見ると渋い顔をしていた。

すみません、今すぐ退避します!!

俺は堪えられなくなつてその場から踵を返そうとしたが、エプロンの裾を掴む手に止められた。

熱の溜まつていく顔で振り返ると、喜多さんが微笑んでいた。

「ありがとうございます。——じゃあ、もう少しだけ悩みますね」

そう言つて、少しだけ彼女からキターン光線が放たれる。

入学式の際に比較したら微々たる光量だが、少なくともさっきの暗い雰囲気よりは断然こちらが良い。

俺の下手くそな激励で何かが伝わったなら、それでも構わないや。

俺は一礼して、厨房へと下がる。

その途中で。

「お客様を口説いちゃ駄目だよ」

誤解した店長の一言を受けてメンタルは撃沈した。

喜多さんは料理を少しだけ注文し、平らげるとそそくさレジへと足を運ぶ。

レジを担当していた俺は、彼女と代金のやり取りを済ませる。

「あの、お名前訊いても良いですか？」

「あれ、知らなかったっけ」

「私、一方的に感謝だけして別れたので」

そう言えば、そうだったな。

「前田一郎」

「前田さん………うん」

「ん？」

「あの、また来ても良いですか？」

「え、それは勿論……（出禁にする権限とか俺には無いし）」

「これ、受け取って下さい」

メモ帳の切れ端を渡される。

紙面には、連絡先と愛らしい文字で『喜多郁代』と記されていた。

「それじゃあ、また来ますね。——前田さん！」

頬を少しだけ赤く染めて、喜多さんが店を出ていく。

うん……この連絡先は、どうしろと？

俺が手元の紙切れを見て悩んでいると、ポンと肩に誰かの手が乗る。振り返れば、店長が洗い顔で立っていた。

「……はそういう店じゃないから」

だから何の話？

乗り切れ、今日という日を！

休日のバイトは昼過ぎに上がった。

今日は朝から最悪の気分だった。

何故なら昨晩エイリアンの奇襲があつたからだ。

地球外生命体扱いは酷いと思われるが、そう呼びたくないだけの厄介を被つた事だけは弁明しておきたい。彼女と一緒にいた所為でバイト先にも俺が酒臭いと言われたのは悲しかった。

『少年、飯食いに来たよ！』

パック酒片手に俺を呼ぶ姿がマンシヨン前にいた。

その時の俺の心情は言い表し難い。

泥酔状態の成人女性を介抱する奇異な状況ながら、俺自体が吐きたい気持ちを抑えて最後までやり遂げた。……今日は帰っても夜には山田が来る、慣れた事とはいえ面倒に他ならない。

また山田が不機嫌になる。

酒臭いとアイツは嫌がるのだ。

しかも、毎度のようにきくりさんは俺の体に噛み跡を付けて行くので、それを山田に見咎められたら爪でさらに抉られるという酷い扱いまで受ける。

俺が何をしたって言うんだよ。

何も悪くないじゃん……。

クソみたいなスタートだ。

家に帰るのも憂鬱である。

寄り道したいが、その体力も惜しい気がする。

良い暇潰しは無いものだろうか。

「おーい、もしもし」

「……………?」

前方からの声にはっとする。

いつからそこにいたのか、陽気に手を振る虹夏を見つけた。

小さな体で元気に身振り手振りする様は、見ていてどこか微笑ましい。

暇潰し……………あ。

俺は虹夏の下まで足を進める。

少しだけ体が軽くなった気がした。

「こんにちは」

「一郎くん、何してたの？」

「バイト帰り」

「そっか。お疲れ様だね」

「虹夏は何してた？」

俺が尋ねると、虹夏が笑みを深める。

企み顔にも見える表情に俺が訝しんでいると、彼女はポケットからスマホを取り出した。

液晶画面が反射した光が目突き刺さる。

「アー写撮影に勤しんでましたっ」

「アー写？」

「アーティスト写真の事だよ。結束バンドの広告に必須だから、今日はみんなで集合して撮ったんだ〜♪」

「へえ。どんなのを見ていい？」

俺が頼むと、快諾した虹夏がファイルを開く。

再び見せられた画面には、一枚の写真があった。

何処かの壁を背にし、一斉にジャンプした四人の空中での瞬間を捉えた物。何だか青春の一幕を見ているような瑞々しきを感じる。

ひとりは顔色が悪いな。

写真に苦手意識があるので無理も無いか。

………ん?

「あっ」

「ん? どうしたの?」

「喜多さん、結束バンドに戻って来たんだなって」

「え………」

手を繋いで跳ぶ四人。

右端から虹夏、ひとり、山田……と視線でなぞり、最後の左端には嬉々として山田と腕を組む眩しい笑顔の喜多郁代がいる。

この前と違って吹っ切れた表情だ。

あれから自分なりの方法で悩みを解消したんだな。

「へ、へえー……」

「ん、なに?」

「一郎くん、喜多ちゃんとも知り合いなんだ」

「ひとりの入学式とか、それから何回か会う事があつて。一回だけ相談に乗つてからは、三日に一回は何故か夜に電話してくる」

バイト中の悩み相談が悪影響なのは間違いない。

一応、渡された連絡先は登録しておいた。

すると、三日に一回は必ず夜に電話が入つてきて三十分か一時間ほど通話する事になる。

内容は特に他愛も無い世間話だ。

初めは、また悩み相談かと身構えていたので思わず肩の力が脱けたのを覚えている。

それにしても、長時間の通話って体力を使うんだな。

毎回、終わった後はため息しか出ない。

喜多さんが楽しそうだから別に良いけど……。

あれは、マジで何なんだろう？

あと、山田には誰との通話かバレている。

電話の最中にロインのスタンピング連打してくるのはマジでやめて欲しい。

負の連鎖……としか言い様が無い。

「良いなー、私も話したい」

「え……」

「あからさまにメンドクせーって顔!」

「ロインのメッセージで勘弁して。これでも通話ってかなり体力使うんだよ」
「……………」

虹夏が頬を膨らませる。

そんな可愛い拗ね方されても困るんだよな。

でも、言われてみれば虹夏とはそんなに連絡を取り合っていない気がする。

虹夏からはよくロインは来るのだ。

でも、山田の世話と喜多さんの通話、それらで削られた時間内で何とか行う自分の趣味で夜はあまり対応できない。

しかも、かなり簡素な返事しかできない。

飲食店バイトで接客もしてはいるが、コミュニケーション能力の不足を毎回痛感させられる。

本当に友だちなのかと疑心暗鬼になる少なさ。

「ごめんって」

「リヨウとか、喜多ちゃんとか、ぼっちちゃんとか……………私は全然……………」

「ええ……………」

いよいよ拗ね方が本格的だ。

放置すると駄目なタイプである。

待つてよ、きくりさんとバイトという連戦で結構消耗しているのに……。

いや、虹夏に罪は無いしな。

悪いのはベースストだ、うん。

「虹夏、これから暇？」

「え、うん……まあ」

じとーつと俺を睨む目。

仕方無い。

「良かったら、一緒に何処か行かない？ワケあつて家の外で暇潰しがしたいんだ」

「……………」

「嫌なら断つてくれても良いけど」

「……………うん、うんっ！勿論！」

ぱつと虹夏の笑顔が咲く。

ぷー……………気張れ、俺。

疲労を顔に出さず、虹夏に献身するんだ。

誘われた事がよほど嬉しかったのか、俺の周りを「何する？何する？」と子犬のよう

に回って訊いてくる。

いや、うん。

大変申し上げ難いのだが……………。

「ノープランです。許して下さい」

人を誘うの、実は初めてなんです。

俺と虹夏はCDショップへ来ていた。

結局、ノープランな俺に代わって虹夏がエスコートしてくれるという情けない事態。

今日ほどに経験の無さで忸怩たる思いをさせられた事はない。

これは、リベンジが必要だな。

嬉しそうに店内を巡る彼女の後ろを付いて行く。

最近は大ダウンロードコンテンツが豊富な時勢もあり、山田の影響で少しだ音楽を聴くようになった俺でも、CDショップなんて足を運ぶのは映画のDVDを借りる時ぐらいだろうか。

視聴用のイヤホンの前で虹夏が止まる。

手招きする彼女の隣に立つと、左右でそれぞれ分けて同じように装着する。

あ、最近街中で聴くヤツだ。

「このバンド、私好きなんだ」

「……サビの部分のノリが良いな」

「でしょっ！あ、ここのドラムの迫力ライブ映像で観ると凄いよ」

「何て曲名？」

「これはね——」

虹夏と次へ次へと色々と聴いていく。

それだけで気になる曲と幾つも出会えた。

俺は頭の中でバンド名と曲名を記憶していきつつ、虹夏の好物についても知っていき。

これが……友だちと遊ぶ、つてヤツか。

映画鑑賞は一緒にしたけど、外で何かするのは初めてだ。

うわー……これがトモダチ。

何か感動を覚えて変なテンションになってくる。

まるで自分が陽キャにでもなったように錯覚する。

そうだ。

「虹夏、それ買うの?」

「うん。これ先月発売したアルバムなんだけどノルマ分で吸い取られて買えなくてさー」

「ふむ……」

俺は彼女の手から商品を取り上げる。

値段を見れば……よし。

「じゃあ、これ俺が買うよ」

「えっ!?!」

「そういえば、虹夏の誕生日ってこの前だったろ。俺何もしてやれてないし、遅いけどプレゼントって事で」

「っ……」

虹夏が固まっているので、今の内にレジへ向かった。

やってみたかった……友だちへの誕生日プレゼント。

もう既に遅れてはいるが、彼女の買いたい物が分かった今はむしろ好機として捉えるべき。

これで、少しは普段のロインの会話の分も報われてくれ。

虹夏へのプレゼント……というより俺の心の安寧の為に思えてきて、また自己嫌悪に陥りそうだが。

会計から持って帰って来た物を虹夏に渡す。

「遅れたけど誕生日おめでとう」

「嬉しい。ホントに嬉しい……」

虹夏がぎゅっと商品を胸に抱く。

何だろう、心が痛い。

「いっぱい聴くねー」

「喜んでくれたなら何より」

「ホントに嬉しかったから。一郎くんの誕生日も、お祝いさせてね」

「え……」

びしり、と自分の顔が引き攣るのが分かった。

俺は咄嗟に顔を背ける。

CDジャケットを眺める虹夏にはバレていない。

あ、危なかった……。

それにしても、折角祝ってくれるという虹夏の言葉にここまで拒絶反応が出るなんて、トラウマになった出来事もそうだが、あれから何年も経つのに克服できない自分に

も嫌気が差す。

本当にごめん、虹夏。

誕生日を訊かれる会話の流れになる前に、俺は窓の外を見て切り上げる事を考えた。

結構長い間、この店にいたようだ。

「取り敢えず、店出るか」

「あ、そうだね。気づいたら、もう外暗いや」

「そうだな、体感だとあつという間だったかも」

「……そんなに楽しんでくれたんだ」

「ん? ああ、CDシヨップって面白いな」

虹夏がおもむろにスマホを取り出し、隣へ移動する。

何事かと訊く間も無く、するりと俺の腕に自分のそれを絡めた。

それから、カメラモードにしたスマホを掲げて二人をレンズ内に収めるとシャッターを切る。

………何だ?

「今日、楽しかったから記念にね」

虹夏は写真を眺めていた。

申し訳無さすぎる。

もうクリスマスのような愚を犯すつもりは毛頭ないが、未熟な精神がまた余計な事をしないか不安になる。

やめよう、考えるな。

今は楽しいんだからそれで良いだろ。

「ライブハウスまで送るよ」

「え？」

「外暗いしさ」

そう言うと、虹夏はまた笑ってくれた。

「そうだね。もう少し一緒にいたいし」

本当に心が痛かった。

♪

♪

♪

♪

夜、俺は左肩を手で押さえて苦悶していた。

い、イテ………!!

結局、きくりさんの歯型は恒例の如くりヨウの爪痕へと上書きされた。帰って来るなり、その仕打ちである。

その途中でナチャラルにスカーフまで取り上げられたのは、最早何か恨みでもあるのかと疑いたくなる物だった。

「一郎、痛い?」

「当たり前だろ」

「なら良いや」

「ベーストって攻撃性高い生き物なんだな」

「ロックだね」

「滅ベロック」

俺が恨み言を吐いてもリヨウには通じない。

一緒に観ている映画『シザーハズ』の内容も全く頭に入って来なかった。一度観たことがあるのが幸いだが、涼しい顔で観ているコイツの横顔に腹が立つ。

よく苦しんでいる人間を尻目にして優雅に鑑賞できるよな。

エンドロールに入り、リヨウが時計を見る。

もう遅い時間だった。

「もう寝よう」

「……」

「一郎？」

「いや、今更ながら当然のように泊まるんだな」

「親には連絡したから」

「……………はあ」

もう何も言えない。

これが常態化している日常に抗う気さえ起きない。

当初のように、どうすれば追い出せるかという思考もリヨウがいる環境下において発
生する自分のストレスを如何に軽減するかという方向へ推移している。

これが慣れ、もしくは調教というヤツなのだろうか。

俺が溜め息をついていると、後ろで衣擦れの音が聞こえる。

……………ん?つて。

「おい、それ布団だけど」

「うん」

リヨウは俺が敷いた布団に、既に半身を埋めていた。

「ベッドで寝ないのか?」

「いま酒臭い」

「くっ…………」

だからと言って、布団取るなよ。

客用のヤツ、それしか無いんだぞ。

両親のベッドもあるのだが、一度寝た時は起きたら血が出るほど寝ている間に腕を掻
きむしっていたらしく、赤く汚れたシーツを捨てる羽目になった。彼ら自体にはそうい
う事は無いが…………あれ以来、彼らのベッドは利用したくなくなつた。

仕方無い、俺がベッドで寝よう。

「一郎」

「あ？」

「ほら、こっち」

リヨウが自分の隣を叩く。……………まさか。

「そこで寝ると？」

「酒臭いの、一郎も嫌でしょ」

「……………」

「なら、二人で寝れば良い」

そう、なのか？

確かに酒臭いのは嫌だが、布団を二人で分けるのも。

俺が逡巡している間も、リヨウは隣を叩いて誘う。

いや、そもそも狭いだろ。

あと。

「オマエ、恥ずかしいとか感じないのか？」

「何が？」

「……………愚問だったな。オマエを常識で量ること自体が間違いだよな」

「なぜ急に称賛?」

「幸せなヤツだ」

俺はベッドで寝る、とだけ言って居間を出る。

取り敢えず、出来る限りの消臭を施して後は目を瞑れば良い。存外、如何に悪臭がしようとも有毒ガスでなければ人間疲れていれば眠れるものだ。

そう、最悪ではあるが最悪の最悪ではない。

そうだよ。

雨風を凌げる屋根の下で寝れるだけマシじゃないか。

……………映画に影響され過ぎたか。

空虚な気分浸っていた俺の意識を、ロインの通知音が呼び覚ます。

『今日はありがとうー!また二人だけで遊ぼうねー!』

なぜ二人限定なんだ。

でも、確かにストレスが無くて良いかもしれない。

今日みたいに虹夏の気遣いで要らぬ俺の地雷が踏まれなければ、彼女との時間は安らいでいるし、何より貴重な友だちとあつて一緒にいて楽しい。

俺は『勿論。また今度』と返しておいた。

今日は色々と思いが作れたな。

明日から頑張れそ……………ち、着信音。

恐る恐る画面を確認すると、喜多さんだった。

「もしもし」

『こんばんは！今日もお話したいんですけど、良いですか…………？』

「うん」

うん、堪えろ。

今日はもうすぐ終わるんだ。

明日になれば、きっと何か変わっている…………と信じて空元気で喜多さんに応対した。
それから一時間ほど通話して、やっと就寝。

……………酒臭エ。

「ん…………おはよう」

起きたら山田がベッドにいた。
何でだよ。

イケナイ未来でした

朝のHRが終わった教室で俺は一枚の紙を睨んでいた。

模試の結果が返ってきた。

内容を検めれば、成績はかなり上々である。

第一希望は、少し危うい。第二以降は安全圏なので学力を落とさなければ無問題だな。

一応、書いておいた看護系も評価は良い。

将来的な自立のためにも、努力は続けよう。

「……ふーん」

肩越しに声がする。

見なくても分かるが、一応確認した。

「人の物を盗み見するな。——山田」

「前田は頭良いね」

「日頃から努力しているからな」

それだけに、憎い。

山田が本気を出せば校内トップも容易だ。

特殊な脳の構造でもしているのか、一夜漬けで山田はどんな分野でもかなりの好成績を叩き出す。両親が病院務めなので、受け継いだ物もあるのかもしれないが、それにし
たって奇矯だ。

でも、今回の山田は恐るるに足らず。

ノー勉で挑んだ彼女の成績は惨たらしい結果になっていた。

「人の見てる余裕なんてあるのか？」

「痒いところをつく」

「痛くないのかよ」

「大学とかそんな真剣に考えてないから」

「もう少し深刻に捉えろよ……。この前のテストだって赤点揃えてたんだから、そもそも進級も危ういんだぞ」

山田が額に滲んだ冷や汗を袖で拭う。

自覚があるなら何故改善しないんだか。

「下手したら将来もアウトだな」

「たしかに」

「まあ、俺には関係無いけど」

将来的には決別するつもりだからな。

いつまでも寄生されていては人生が危険だと感じたので、高校を卒業したら一切何も告げずに目の前から消える所存だ。

いずれ、この忌まわしき現状を脱却してやる。

脱炭素ならぬ脱山田の未来設計図に想いを馳せていると、するりと山田の手が俺の肩を這う。

その感触が妙に擦ったくて、振り払うように体ごと彼女に振り返ってしまった。

「関係ある」

そして、山田の微笑を目にする。

「私は、前田がいないと生きていけないから」

……………。

そ、それは……無関係、では、ないのか……？

ぼーっと白んだように思考が鈍くなる。

その一言について考えている内に、何も分からなくなつた。
そう言えば……あれ。

この第一から第三希望の大学、下北沢から通える距離になつてないか？
何ヶ月か前までは、全然違つたような……。

「前田」

「え、あつ、何？」

「ぼーつとしてるけど」

「……いや、別に」

何考えてたんだっけ。

まあ、良いか。

俺は模試の結果を鞆にしまう。

早速、最初の授業の準備を始めた。……が、それを見ても何もせず後ろにいる山田は何なのだろう。

暫く無視していると、耳に何かが付けられた。

……イヤフォン？

勝手に装着したのは、勿論山田だ。

それでも意地で無反応を示していると、やがてイヤフォンから音楽が流れ始めた。

……楽器の音だけで、歌はない。

何だろう、俺の知ってるバンドの物じゃない。

いや、このベースの感じはどこかで……。

「どっつー？」

「……………」

「いま作曲してるやつ」

「……………へ!？」

あ、リアクションしてしまった。

してやったりと含み顔の山田に悔しくて拳を握る。

「これ結束バンドの」

「オリジナル」

「…………俺が聴いて良かったのか？」

「前田は聴きたいと思って」

私の音だから、と山田が言葉を紡ぐ。

ぐうの音も出ない。

これに無反応でいるのは流石に無理だった。新曲……………作成段階と本人が言っているが、今の物だけでも胸が踊ってしまった。

俺はイヤフォンを外して頷く。

「楽しみだと思った、不覚にも」

「——何の話してるの？」

虹夏が手を挙げて近づいてきた。

「ああ。結そ——」

「模試結果の話」

山田が俺の声を遮って答えた。

いや、山田の成績で俺と話すような事は無いと思うんだけど。若干イラツとしながらも、取り敢えず黙っておいた。

新曲はバンドメンバーにはまだ秘密なのだろう。

部外者の俺がそもそも作成段階から聴いているのは不平等な気もするが。

「一郎くん、勉強頑張ってるもんね」

「第一以外はかなり余裕」

「羨ましい」

「そつちは？」

「私はちよつと頑張らないとなー……」

「虹夏なら大丈夫だろ。むしろ、俺も余裕とはいえ気を抜いたらダメだし」

何かの不幸で試験すら受けられない、とかもあるかもしれないな。そんな不幸を想定していると、虹夏が深刻な面持ちで頷く。

え、なに？

「有り得そう……」

「え、ッ」

「一郎くん、何か大事な事の前で躓きそうって私の直感が言ってる！」

「不吉な事言うなよ」

「あはは……うーん、でももしそうなくても大丈夫！」

「え？」

虹夏がぼんと自身の胸を叩く。

「もしもの時は、私が養ってあげるからね！」

虹夏の宣言に、教室から音が消えた。

思ったより声が大きかったな。

そこかしこで落ち込む男子の声と、女子の好奇の眼差しが生じる。

ようやく自身の行いを客観的に見た虹夏が肩を縮こまらせる。

虹夏が、養う……？

俺はその将来を想像する。

何もかも失敗してド到底に陥った俺を、優しく包容力のある虹夏が甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

何故かもはや確定した未来とでも言うかのように鮮明な映像が浮かんできた。

「……じゃあ、頑張らなくて良いか……」

体から力が抜けて、そんな言葉が出る。

すると、虹夏がぱっと輝く笑顔になった。何で？

でも、将来は虹夏に面倒を見て貰うなら下手な人生よりも幸せな気がする。

ストレスが無くて、きつと………？

ふと、思い描いていた映像が急に暗くなった。

全て失敗してダメ人間になった俺。

そんな俺は、きつと……。

『おい、酒はどうした』

『あ、ごめんね。今買ってくるから』

『遅い』

『ホントにごめんね……』

暗く、酷く、醜い未来だった。

背筋が凍りつく。

だ、駄目だ！

この未来、絶対にイケナイやつだ——！

「絶対に虹夏の世話になっちゃ駄目だ！」

「ええっ!? な、何で？」

「ごめんな、虹夏……酒は程々にするから。俺もちゃんと働くから……！」

「ええ? いや、良いよ。健康でさえいれば……」

頭を抱えて床に突っ伏す俺の背中を、優しい虹夏の手が撫でる。

コレ絶対に虹夏に養われるのは駄目だ。

沼のように、一回体験したら二度と戻れない。

絶ツツツ対に虹夏に養われてはならない!

俺どころか、彼女まで不幸にしてしまう。

その前に星歌さんが止めてくれるかもしれないが、大事な妹を毒牙にかける悪役なんて俺の心が持たない。想像しただけで罪悪感が無限のように湧いてくる!

星歌さんに殺される前に自分の手で始末をつけなくては。

でも、きっと虹夏に甘やかされてそれすら躊躇うのだろう。

ああ、何て酷い。

鮮やかに想像できてしまう今の自分すら気色が悪い。

頭の中で虹夏をこれでもかと汚してしまった。

「俺は……罪深い……」

「お、おい。一郎くんまでぼっちタイム始めないで〜?」

「あ、やるなら星の見える所にしよう……」

「戻ってきてよ——!」

虹夏の悲鳴が聞こえる。

ああ、本当にごめんなさい。

俺一人がどうしようもない人間になって死ぬなら兎も角、虹夏まで巻き浴いにするなんて耐えられない。

ああ、俺の『価値』って本当に……。

「おい。そこ、いつまで話してるんだ?」

教室に入ってきた教師の言葉ではっとする。

しまった、もう授業開始の時間か。

危うくこのまま想像の世界から戻れず、延々と暗い未来の映像に溺れてしまうところだった。

俺たちは解散し、山田と虹夏も席に着く。

訝しむ教師の視線から顔を隠すように手元に視線を落とし、開いたノートの上で溜め息をついた。

虹夏と暮らすなら、共働きだな。

それか、彼女を養う方面だ。

甘えたら終わる。

山田はそうだな、養うしか未来が見えない。

……あれ。

何で山田も鮮明に想像できてしまうんだ……？

「俺って本当に気持ち悪い……」

取り敢えず、俺は考えることをやめた。



「荒れた一郎くん……ちよつとイイ、かも……」

バイトから帰った夜も休まらない。

何故なら寄生虫がいるから。

今日も今日とてリヨウは飯を食る。

千切りにしたネギを撒いた薯蕷汁を白米にかけ、一気に口へと掻き込む。

豪快な食べっぷりに思わず俺の手が止まった。

コイツ、また金欠で食べてないな。

「……誰も盗らないから、ゆっくり食え」

呆れつつも、リヨウの口端に付いた汁をティッシュで拭う。

落ち着いて食えよ。

何に追われてたらそんな急ぐんだ。

サバイバル中の人間じゃあるまいし。

注意したがリヨウの箸は止まらず、豚の角煮と山菜盛り合わせに伸びて、素早く口へ運ぶ。驚く事に、これだけハイペースなのに咽る事が無い。

速いだけで意外と本人には適した速度なのか……？

「何か急いでる？」

「うん。作曲が捗ってるから」

「へえ。今回は何にインスピレーションを受けたんだ？」

「ぼっちの描いた歌詞」

ぼっち……………？

ああ、ひとりの事か。

結束バンドでは、まさかひとりが作詞を担当しているのだろうか。ギターの腕が上手いのは知っているが、そちらの方面にも芸があるとは。

さぞや素晴らしい歌詞なのだろう。

無表情ではあるが、リョウが活き活きしている。

「オリジナル曲、か」

「出来たら聴かせる」

「それは良いんだが……………」

俺はちらりと居間の床に視線を落とす。

足場に困るほどスコアが散らばっているのだが、流石に片付けてと言うべきかな。

できる限り本人の創作意欲を削ぎたくはないが。

注意するか否かを悩んでいると、完食したりリョウが合掌して「ごちそうさま」を済ませていた。

ホントに早エな……………。

床に腰を下ろすやベースを弾きながら山田はスコアとにらめっこ。

時折、同時に開いたPCにも何やら打ち込んでいる。

駄目だ、素人の俺には何をしているか分からない。

せめて創作の一助になればとコーヒーをそつと傍に置いておく。

「根を詰め過ぎるなよ」

「うん」

一応、無理はしないよう言っておく。

遅れて完食した俺は食器を片付けた後、映画でも観ようかとテレビの前に移動する。

今晚は何を観て寝ようかと、棚の中に並んだ物を眺める。スプラッター系はリヨウも

嫌がるだろうし邪魔になるから却下、サスペンス……は最近かなり観てるし、ヒューマ

ンドラマ系にしようかな。

俺は棚から一作手に取る。

ソファーに腰を下ろして、それを再生した。

映画『MOTHS』。

この作品は、両親が買ってはいるが全く観ていない物らしく、気になっていた。

「……………あ、そうだ。リヨウ」

「ん？」

「デザートに、バイト先からケーキ貰ってるけど食べるか？」

「頂こう」

さっと俊敏な動きでリヨウが冷蔵庫へ向かう。

欲求に忠実なヤツだな。……少し羨ましい。

そのままケーキを持って、リヨウが俺の隣へと腰を下ろす。

この映画の内容は、かなり考えさせられる物だ。

なるほど、両親が手を付けなかったワケが分かる。

見ていく内に、こちらでも登場人物の感情に引つ張られて思わず前傾姿勢になってしま
う。

映画が終わる頃には、リヨウは再び床で作業に取り組んでいた。

……面白かったな。

観終わった後の余韻に浸りながら、ソファで横になる。

「よし」

「完成したのか？」

「概ね整った。後は家に帰って、仕上げるだけ」

「じゃあ、帰れ」

「うん」

えっ。

リヨウがスマホを取り出して、両親と連絡する。

それが終わると、早々に荷物をまとめ始めた。

あ、え、本当に帰るのか？

呆気ないほど帰宅準備を始める彼女に驚いて、思わず見詰めてしまった。視線に気付いたリヨウがこちらへと振り向いて小首を傾げる。

まあ、帰ってくれるなら万々歳だ。

「一郎。もしかして寂しいの？」

「鳥肌立たせる天才か」

「心配しなくても、また明日来る」

いや、明日も来なくていいから。

暫くすると、マンシヨンの前に山田夫妻が車で迎えに来たと連絡が来たので、俺はリヨウと一緒に下へ下りていく。

本当にマンシヨンの前に車を停めて待っていた彼らは少し会話をし、颯爽と車に乗り込んだ彼女と一緒に帰って行った。

今日は随分と潔い。

それだけ作曲に打ち込んでいるからだろう。

俺は部屋へと戻り、色々と片付けて自室に入る。

うん………何か静かだな。

どうしようか悩んでいると、リヨウからロインでメッセージが届く。

何だろうか。

薯蕷汁が美味しかったとか、有り得ないがお世話になりましたとか？

『明日は冷しゃぶが良い』

リクエストかい。

予想を斜め下で裏切ってきたリヨウのロインに、取り敢えず『知らん』とだけ返しておく。

明日の俺はきつと冷しゃぶを作っているかもしれないけどな。

生活リズムがリヨウと一緒にいて当たり前だという風に回り始めているのは、俺にも自覚がある。一年前よりも確実に、アイツからの悪影響が強くなっている気がしていた。

このままズルズルと、将来もリヨウに侵食されていくのだろうか。

出来れば、そうならないで欲しい。

今朝想像させられた虹夏との未来を一瞬だけ思い出して身震いする。
あ、あそこまで退廃的になりはしない。

俺が想像したりリョウとの未来は、今とそう変わらなかつた。
ただ一点、違うところがあるとすれば。

『一郎、幸せでしょ?』

魔性と思わせるほど、山田リョウが可愛かつた事だけ。

君の相談ってホントに当たるね

「はい、これ。——『雪の鉄〇』」

教室前で陽キャ男子から小説を渡される。

去年クラスが一緒だった男だ。

バレンタインでは、彼のお陰で変な誤解が消えて最後に何人か話せる相手が出た。
加えて、初恋の相談でも随分と世話になった恩がある。

それに加えて、だ。

こうして本の貸し借りをする仲。

広義的に言えば友だち？の部類なのだろう。

ただ、この陽キャ男子……。

俺はブックカバーを軽く外し、小説の表紙を見る。

これだけでは判断が付かない。

付かない……が、これまで勧めて貰った作品たちからこの人が好んで読む物のジャンルや傾向から概ね見当が付いている。

「また重い話？」

「そうかな、面白いよ」

「ええ……」

以前に借りた『その女アレックス』といい、彼から借りた数々の作品は中々にずつしりと胸に重たい物を残していく。

面白いから別に良いけどさ。

彼の人柄からは明らかに予想が付かない内容ばかり。

この爽やかな笑顔すら真意を疑ってしまう。

「俺からは……そうだな」

「ん？」

「『1080間』って映画。良かったら借りてみてくれ」

「どんな話かな」

「それは観てからの楽しみ。まあ、君好みの話って感じだと思う」

きつとそうだ。

もし、これで返ってきた感想が『好きなヤツだ』とかだったら確定である。

陽キャ男子は俺の勧めた映画をスマホで検索している。

「うん。帰りにでも借りてみよう」

「俺も読んだら返す」

「了解。じゃ、また」

「あ、ちよつと待って」

帰ろうとする陽キャ男子の肩を掴んで止めた。

彼が振り返って首を傾げる。

「実は相談があるんだけど」

「また恋？」

「そうじゃないけど、女の子の話」

「何だか前田君からそういう話が出ると楽しいよね」

「ちよつと意味分からん」

割と深刻な悩みなんだよ。

前回の虹夏の件だってそうだ。

相談に乗ってくれるのは有り難いが、別にエンターテイメントを提供しているワケではない。以前の相談に親身に乘ってくれて、且つしつくりくる答えを気付かせてくれたから頼りにしているんだけど。

二人で廊下の端に寄って話す。

後ろの窓から差す光を背に受けた陽キャ男子が少しだけ物々しげな空気を演出しているかのようだった。本人にそんな意図は無いが、少しだけ面白い。

「それで、女の子って？」

「本人の名誉の為に実名は伏せるけど」

「ふむ」

「ソイツ、よく俺の家に入り浸るんだ。飯も食ってくし、何なら風呂も入って勝手に泊まる」

「泊まる？服とか自分で準備してるのかな」

「俺の服」

「あはは。飽きさせないな君は」

「そんな面白いか、俺の不幸」

やっぱり性格悪いよな、この人。

若干人柄への疑念が深まるが、話を続ける。

「それだけなら別に良いんだよ」

「……………」

「や、良くは無いけど。でもソイツ、他にも家上げると異様に機嫌が悪くなるんだよ。

例えば友だちとお揃いとか取り上げるし。こう……言い難いけど家に来る知り合いが俺に嘯み跡付ける人もいてさ、それ見たら爪立てて形まで変えようとしてくるんだよ」

「おはあ……」

「これ、俺ってその子にとって何なのかな……？」

名前は伏せたが、要は山田だ。

虹夏とのお揃いを取り上げられるのは割と辛い。

きくりさんの嘯み跡に爪立てるのはかなり痛い。

顔も知らないきくりさんや、親友の虹夏に対して恨みは無いだろうから、恐らく俺本人に起因した悪感情からそんな事をするのかと自分なりに推理した。

でも、分からない。

山田がそんな事をする理由って。

「どう思う？」

「一周回って、よく気づかないね」

「馬鹿にしてるなあ」

「……前田君ってさ、前の相談の時も思ったけど実は自分の事殺したいほど嫌いだよ」

その一言に、思わず顔が引き攣る。

爽やか陽キャ男子から出るとは思えない発言であるのも勿論だが、俺が普段から抱えている暗い感情の芯を言い当てられた事への動揺が大きい。

何を見てそう思ったのだろう。

第一、虹夏の件でそんな風に思うのか？

「な、んで？」

「君と話していると、『自分なんて絶対に好かれるワケがない』って強迫観念じみた物を感じる。伊地知さんに憧れてたのも、届かない人……言うなれば自分に対して何も思わない距離にいたりするからでしょ。距離が縮まる程に憧れが薄くなったのも、手の届く他人になつたから」

「……………マジ、かよ」

「うん」

ズバツと言うが、成る程しっくりくる。
でも。

「それが、今話した女の子と何の関係が？」

「んー、僕が言っても良いのかなあ」

陽キャ男子がここにきて渋り始める。

結論は自分で出すべきなのだろうが、『自分の事が殺したいほど嫌い』というだけで山

田の感情を推し量ることはできない。

暫し陽キャ男子は黙り込んでいたが、俺の方を見て諦めたように溜め息をつく。

「その子は前田くんを誰にも譲りたくないんだよ」

「……………は？」

「だから他人とのお揃いなんて見たくないから取り上げるし……………痕を上書きするのは中々魂消たけどね。でも、それくらい執着してるんだよ」

「執着……………」

「でも、君は自分のことが殺したいほど嫌い……………そう思うくらいだから、『自分が他人に好かれるワケがない』って根底で思ってるんだ。だから他人からの好意にも、反射的……………無意識っていうより生理的に目を背けてるから分からない」

「……………」

「逆に、一度認めるとその人にはとことん甘くなる」

陽キャ男子の言葉を脳内で反芻する。

自分が嫌いだから、こんなヤツを好きになる人なんていないと思ひ込む。だから他人から好意なんて抱かれる筈がない、か。

たしかに、人の好意はかなり疑うタイプだ。

基本的に損得勘定で考え、相手にとっての利益を推測して合点がいくと好意を受け取

れる。

素直に受け止められたのは……ひとり、の時だな。

一度認めると、どこまでも甘い。

凶星過ぎて少し目眩がする。

「それじゃ、何か？」

「ん？」

「その子は俺が好きって事？」

「話を聞く限りでは……途轍もない独占欲の持ち主だ」

「ど、独占ン……？」

山田が？

あの山田が？

ソレだけは全くしつくり来ない。

山田が執着する物なんて、飯と自由と音楽だけだ。

一人の人間にその矛先が向いた姿というのが微塵たりとて想像がつかない。

陽キャ男子のこの推理も、対象が山田リョウだと知ったら覆るだろうか。

でも無闇に名前は上げられない。

今更だけど、女の子を家に上げて、しかもその子がそんな行為に及んでいるだなんて

知れている今、実名を明かせば他校なら兎も角この学校に通っている以上は何かしらの過ちが起きる。

陽キャ男子もきつと山田を知ってると思うし。

「ここまでが僕の考えだけど」

「ふ、ふむ」

「参考になつたかな？」

「ああ。貴重な意見だつたと思う」

「……確かめたいなら、その子にこう言うの良いよ。『去年同じクラスだつた○○さん関連で彼の妹と付き合い始めたけど、流星に恋人いるからもう家には来ないでくれ』つてさ」

「うえ……○○さんに迷惑だろ」

「大丈夫。それ僕だから」

「ごめんなさい」

名前だけとはいえ妹をそんな安く扱うなよ。

いや、それよりも名前憶えてないのバレた。

俺は腰を直角に折って謝る。

別にいいって、と柔らかい声と笑顔が頭上にあるけど……その笑顔はホンモノでしょ

うか？

それにしても……その作戦、大丈夫か？

まず俺が人と交際関係にあるなんて一発で露見しそうな嘘をついたら、一瞬で看破されて笑われるに決まっている。

仮にもし、冗談が通じてても後日何かの拍子で山田が○○さんなど存在しないと知られたら、架空の恋人に熱を入れる哀れな男だと見下すというクソみたいな展開になる。

「それ言つて、本当に通じる？」

「通じるよ」

「……通じたら、爪立てたりするのやめてくれるのか？」

「いや。やめないね……でも気持ちを確認できる」

「気持ち？」

「うん。きつとその子は——」

陽キャ男子は、至極楽しそうに口元に歪んだ笑みを作る。

うわ、本当にコイツ猫被ってるんだな。

まあ、予想はしてたけど。

そんな普段からは想像もつかないような笑顔で彼が言ったのは。

「——すつごく、怒ると思うからさ」

不吉な未来の予言だった。



私——山田リヨウは、前田家に来て早速微かな異臭を嗅ぎ取る。

少しだけ鼻をつんと突く酒の臭い。

これでも必死に消臭したのだろう。

「またベースの人？」

私が尋ねると、前田が首筋を手で覆う。

そっか……今日はそこなんだ。

私は首筋を覆う彼の手に自分の手を重ねる。それから一本ずつ丁寧に解くように、指

を絡めて握り、持ち上げた。

既に運命を悟った前田が顔を強張らせる。

目を瞑って、歯を食いしばっていた……耐える表情が何だか面白い。

私はそれを横から覗きつつ――。

「痛ッ……！」

手の下にあつた噛み跡に爪を立てる。

容赦はしない。

ゆつくりと、傷として刻む。

爪先の白い部分が薄く赤色に染まった。

自分の爪を眺めていると、「俺が何をしたっていうんだ」と苦しそうに呻きながらぼやいている前田の声が聞こえる。

噛まれなければいいのに。

私は血を拭いてから、苦しむ彼から視線を外して隣に座る。

最近、前田の家は別の臭いがする。

別に頻度は高くないけど、去年に比べたら多い。

最近はそれがストレス。

部屋に誰かが来た痕跡が色濃いのは兎も角、前田そのものに残っている。

私には堪らなく苦痛だった。

唯一の時間なのに、誰かの存在感がある。

この空間の象徴である前田自身に余分な物が付いている。

だから、虹夏のリボンも外した。

ベースストの噛み跡も歪めた。

それでも、見る度にどうしようもなく胸の内がヤスリで削られたように痛みを似た不快感が湧き上がる。

どうすれば——独占できる？

私も噛む……いや、美味しくなさそう。

リボン？……腕輪があるから別にいい。

服お揃い……人に合わせるのは面倒だ。

より強烈な、私の証を前田に付加しなくてはならない。

他の物が、私と前田だけの空間に踏み込まない絶対的な象徴である。

何か……疲れるな。

そこまでしなければならぬ現状が面倒くさい。

でも、ここで折れて何もしなければ、この先もずっと不快感に苛まれる。

「もう爪立てるのやめろよ」

「一郎も嘯まねなければいい」

「安心しろ。もう嘯まれる事はないし、させない」

「……………?」

そう言うのと、前田の目が泳ぐ。

何だろう、今の宣誓めいた言葉は？

「実は、その、彼女できた」

え。

何その分かりやすい嘘。

私は思わず彼を見て固まった。

その反応を見た彼の目も少し見開かれて、同時に瞳の内側が「これはイケる!」といった謎の期待と手応えの色を含み始める。

そんな法螺話まで持ち込んで、何を期待してるの？

「おめでとう、前田に出来るとは思わなかった」

「あ、そつちか…………」

「そつち?」

「あいや別に」

前田の反応も気になるけど、そんな面白い嘘をついた意図が知りたい。

「だから、他の女の子に無闇に接触を許さない事にした」

「そうなんだ」

「だからな、その……今さらなんだが、もう家に来るのをやめてくれないか？」

前田が恐る恐るといった風に頼んでくる。

ああ、なるほど。

本当に今さらな話だった。

むしろ、少し彼の勢いが足りないときえ思う。去年の春くらいなら、もう眉を引くつかせて必死に怒りを抑えながら低い声で言っていた。

それが、今はどうだろう。

私の意思を窺うくらいに弱くなっている。

絶対に許さないという気迫が損なわれていた。

変わったんだな、前田。

そう思うと、少しだけ失望する。

だけど、何だろう。

何だか、少しだけ嬉しい。

恐らくだけど、彼が私にチューニングされている……という手応えが感じられたからだ。

でも、そうだな。

この二つの感情を圧倒的に上回るくらいには、怒っていた。

最近の前田を見ていて思う。

着実に、確実に、私無しでは駄目になっている。

私がいるのが日常の当たり前になって、私が未来に干渉すると言っても強い抵抗力が彼の中で喚起されていない。

それらの反応からすべてを察した。

大分、前田も私を欲している。

本当に『今さら』だと思う。

なら、何で私を引き剥がそうとするのか。

私抜きでは駄目になるっていうのに。

「嫌だ」

私は前田を真っ直ぐ見て答える。

それから、前田の首筋を搔いた爪を彼の目の前で撫でる。

う、と変な声を漏らして前田が首筋を押さえて少し身を引いた。

やっぱり、必要な。

爪痕以外にも、証が要るかもしれない。

ゆつくりと立ち上がって、前田の正面に移動する。

私から逃げるように、でも逃げ場が無くて前田はソファーに深く腰掛けるようになっていた。腕は背もたれに掴まるように広げている。

なんかカエルみたいだな。

そんな風に思いつつ、私は膝立ちでそんな彼を跨ぐ。

左右の耳を両手で包むようにして頭を捕まえた。

目に見える跡でなくてもいい。

前田が常に意識すれば、それで問題ない。

「前田。——目、閉じててよ」

私が相当怖いらしい。

身を強張らせて、前田は堅く目を瞑った。

面白い顔。

彼が自ら視界を塞いだのを確認してから、私も動いた――。

翌日。

私はスタジオを借りて結束バンドのみんなと練習に励んでいた。

みんな今日は調子が良い。

私もそれを支えるようにベースを爪弾く。

一頻り新曲の合わせが終了して、一息ついている時だった。

「リョウ、何か調子いいね」

「いつも絶好調だよ」

「そうかな？今日は何ていうか……開放的！って感じがするけど。もしかして、また大きな買い物でもしたんでしょ」

「どうやら、長年連れ添った幼馴染には分かるらしい。」

「うん、調子は良いよ。」

「何ていったって——。」

虹夏の指摘に、私はピースサインを手で作る。

「欲しかったのが、やっと手に入ったから」

離れていくのは嫌だ

「バンドとしての成長、かあ」

私——後藤ひとりは寄り道の最中であつた。

下北沢をそぞろ歩いていくワケではなく、ちゃんと目的地は定めている。ていうか、目的もなく歩けるほどまだこの街に慣れていない。

目指すは下北沢に住む親戚の男の子の家。

気になつていゝ事があつて、彼を訪ねたい。

でも、その行き道の途中でも頭の中は、さつき上がったバイトでの出来事を思い返している。

結束バンドの新曲が完成した。

私の作詞とリョウさんの作曲の完成品。

聴いた時はとても達成感があつて高揚した。

でも、曲を披露するにも肝心のライブを演るためにはオーディションを受ける必要があると店長に言われ、その必要条件として『バンドの成長』が命題に掲げられている。バンドとしての成長？

成長って、目に見える形で表現するには……。

中々の難題に思わず知恵熱が出て頭がぐらぐらする。

そもそも、私そんな頭良くないから考えたところでロクな事に……最近虹夏ちゃんや喜多さんに奇行って容赦なく言われるから。

はあ、いっくんが甘かっただけで私やつぱりヤバイヤツなんだなって自覚させられた。

そうだ。

そのいっくんも最近は妙だ。

いつもバイト終わりの時間に、『家に来るか?』とか『ちゃんと足元見て、明るい道通って帰ってくれよ』とか毎回送ってくれる。

過保護だな、と心配に思う。

同時にすごく嬉しくもなる。

でも、二週間前からそれがぼったり止んだ。

私から送るのは怖くて何も出来なかったけど……陰キヤはメッセージ一通送るだけ

でも体力消費が……！

……どうしたんだろ、いっくん。

二週間前といえば、リヨウさん。

普段から上手だけど、何か音の調子が良い。

喜多さんがいつにも増して自信に満ちてる〜とか言って鼻血を流す程度には変化しているみたいだ。

良い事、だとは思う。

でも、リヨウさんに置いてきぼりにされないか不安だ。

まだ人に合わせるのとか苦手だし。

上手くなったって虹夏ちゃんはフォローしてくれたけど、割合的には半分以上がフォローでダメダメなんだろうな。

と、取り敢えず！

身近な不安から解消していこう。

い、いっくんの顔見て、ちよつと話したら大丈夫分かる。

幼い頃から見てるから、彼の変化は読み取りやすい。

いっくんは昔から色々と隠す癖がある。

私たちを不安にさせない為だ。

とても優しい気遣いだし、でも逆に吐き出させてあげないといけない。そういう時は積み重なりやすい物ばかりだから。

でも、一番危険なのは――。

『いっくん。その手、どしたの?』

『ん、どした?』

昔、私は見てしまった。

無意識に左手首を折る勢いで掴むいっくんの姿。痛みにも、自分の体に力を込めている事にも鈍感になっていて、でもその時の顔はいやにすつきりしている。

あの時の状態が一番ダメだ。

でも、当時の私はどうしたら良いか分からなくて泣くしかなくて、それを心配した彼とお父さんたちが来てくれて、ようやく話し合いになった。

そこで彼のストレスの原因を少しずつ解明して、解消させられた。

今回、そんな事は無いよね……?』

そうだと信じたい。

歩いていく内に、私は見覚えのある人影を見つけた。

あ、リョウさん。

歩く姿も何かサマになってる……良いなあ、私なんて外が怖くてオドオドしながら歩

いてしまうのに。その自信、少しでいいから分けて欲しい。

……あれ？

リヨウさん、家がこつちの道なのかな。

疑問に思っていると、リヨウさんが足を止める——いつくんのマンションだ。

躊躇いなく中へ入っていく。

たしかリヨウさん、度々いつくんの家でご飯食べたり泊まつたりしてると聞いてたけど……ま、まさか!!

以前、いつくんの家を見たレディース物ってリヨウさんの!?

二人とも付き合ってる!?

どどどどうしよう、き、今日はやめようかな。

邪魔したら悪いし……。

「あれ、ひとり?」

「ひよわつつ!!?!」

き、奇襲!?

後ろからの声に全身が跳ね上がる。

買い物袋を手を提げたいつくくんが心配そうにこちらを見ていた。

早鐘を打つ心臓を落ち着かせようと黙っていた私を観察し、やがて何か答えを見出し

たのか輝くような笑顔になる。

「もしかして、遊びに来たのか？」

「あ、いや違います」

「あ……………そう……………」

目に見えて、いつくんのテンションが落ちる。

そ、そんなに楽しみにしていたなんて…………。

「あ、あの、いつくん」

「ん？」

「さっき、り、リヨウさんがマンションに入っていったけど」

「ああ、リヨウ？もう来たのか」

「えっ？」

あれ？

いつくん、リヨウさんの事は山田って呼んでた気がするけど……………気の所為、かな。

いや、そこは別にいい。

彼の手元に視線を落とすと、左手首に腕輪があった。

幼い頃に自ら傷をつけていた箇所で、そこには滅多に物を付けようとしなのに。

……………あれ、リヨウさんも同じの付けてた気がする。

だ、駄目だ……違和感が凄い。

目の前にいる彼が、いっくんであっていっくんではないように思える。

その微妙なズレで頭が混乱しそうだ。

「ひとりは何してるんだ？」

「あ、いっくんの顔を見に……」

「俺の？」

「うん。……あ、見に来ただけだから。も、もう大丈夫——」

いっくんと視線が合う。

うん、特に異常は無さそうだ、でも不安が消えない。

心臓が嫌な早さで脈打つ。

脳裏で何かが激しく警鐘を打ち鳴らしていた。帰すな、このままだと壊れる、と一体

何なのか正体は告げず、漠然と大きな危険だけを報せる。

「そっか。じゃあ、俺は帰るよ」

「あ……」

「ひとりも、帰り道は気をつけるんだぞ」

いっくんがマンションに向けて歩く。

どうしたら良いか分からない。

違和感の原因はきつと、リョウさんと何か関係がある。

あの腕輪と今のいっくんは——何かダメだ。

私の手が伸びて、彼の裾を掴もうとする。

でも、一瞬だけ遅かった。

指先が虚空を滑り、いっくんの体は止まらない。

どうしよう、どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう……！！

「い、いっくん!!」

私の声に、いっくんが立ち止まる。

振り返って、彼は首を傾げた。

「今日、家に来ませんか……?」

何言ってるんだろ、私。



俺は何故か、金沢八景に来ていた。

荷物は、財布と今晚の飯の材料が入った買い物袋。

何か理解は追いついていない。

年末年始にしか見ない景色が目の前に広がっていると、何故か下北沢の日常から抜け出せたような開放感を得られる。

下北沢が苦痛というわけではない。

ただ、ここは特別なのだ。

後藤家がいるからというだけではなく、行こうと思えば容易に辿り着ける距離で、別に何も海外みたいに遠い地ではない。でも決まった時期にしか来ない、来れないとなると何故か特別感が生じる。

そして、この景色を見ると肩が軽くなるのだ。

何も頑張らなくて良いと思える。

ただ妙に強い潮風と、海に列ぶ船、遠くに見える橋……落ち着く。

「いっくん？」

「ん？」

「……良かった」

ひとりが胸を撫で下ろす。

どうして、ほっとしているんだろうか。

また知らぬ間に彼女へ心労をかけさせていたのならば申し訳無い。

……そろそろ、ここへ連れてきた理由について訊ねたいが、その前にひとりが歩き出す。

かれこれ、約二時間は放置されている。

唐突な提案だった。

俺の住むマンション——その前で、ひとりから家に来ないかと誘われた。

当然、急な話だし今から行っても迷惑かもしれない上にリヨウを待たせているので断ろうとしたが、普段のひとりらしからぬ強引さで駅まで連行された。

混乱していたから道中の記憶も朧気だ。

ただ、何か焦った様子のひとりに手を引かれて電車に乗ったのを覚えている。

止められるほど手を引く力も握る力も弱々しいのに、不思議と従ってしまう。

れ、連絡も無しに来てしまったけど大丈夫だろうか。

そもそも、家で待つてるリヨウに何も言わないとなると腹を空かせた状態で延々と待つ事に……。

取り敢えず、アイツに連絡しようとスマホを取り出すが、振り返ったひとりが首を横に振る。

「き、今日はゆつくりしよ!」

「え、いや、でも」

「お、お願いします!」

ひとりの目もグルグルと回っている。

見ているこつちも目が回りそうだ。

そんな風に思いながら、いつの間にか手はスマホをポケットに戻していた。

一体どうしたんだらうか。

でも、ひとりの言う事に従って酷い目に遭った事は一度もないから、別にいいか。導かれるまま、後藤家まで辿り着く。

家鍵で玄関扉を開けて入った俺たちを迎えたのはジミへ——んんおツツツ!!!?

『キャイン!!』

「ほっ!？」

「いっくん——!？」

顔面に飛びかかってきたジミヘンと激突した。

後ろに倒れそうなのを踏ん張り、頭部に貼り付いたジミヘンを抱えながら傾いていた姿勢をゆっくりと前に戻していく。

あ、危ない。

これでもし少しだけ運動不足な体だったなら、今頃は腰が逝っていただろう。

俺はジミヘンを床に下ろして家に上がる。

迎えてくれた美智代さんがあらあらと頬に手を当てて笑う。

「もしかして結婚報告?」

「お、お母さん違うから!!!」

やはり家族の前では大きな声が出せる。

ひとりの声がよく聞こえて素晴らしい。

「き、今日はいっくん泊まるから!」

「あら、そうなの?」

「えっ?」

「そ、そういうことだから!!」

ひとりりは美智代さんにそれだけ伝えると、颯爽と俺を引っ張って部屋へと直行した。途中で遊びたがるふたりとジミヘンの猛攻を受けたが、これを辛くも掻い潜ってひとりりは部屋の戸を閉ざしてあの子達を遮る。

漸く落ち着いた彼女は、荷物を床に置いた。

俺は………え、買い物袋どうしよう。大根入ってるんだけど……。

所在なさげにしている俺を、ひとりがじっと見詰めてくる。

あれは、こちらに来て欲しい時の反応だ。

俺は部屋の隅に袋を置き、何故か堅苦しく正座で待機しているひとりの前に腰を下ろした。彼女の緊張した空気に当てられて、俺も座り方は正座になっている。

揃えた膝同士は拳三分の近い距離だ。

それにしても……急展開だな。

未だにひとりりから家に招かれた理由が読み取れない。

リヨウへの連絡を止められたのも意味が不明だし。

「ひとり、どうしたんだ？」

「あの……えつと……」

「……？」

「い、いっくん。何か、辛い事……じゃない、変わった事とか無い？最近、自分が何か変わったって思うところ……」

突然過ぎて暫く固まった。

じ、自分が変だと思うところは？

普段からリヨウという変人に日常を侵されているので、何から挙げて良いものかわからない程度には異常事態に恵まれている。

ただ、ひとりが求める答えはそういう物ではないのは直感的に分かった。

主に直近の事だ。

本当に最近の出来事である。

最近、変わった事……か。

ひとりには悪いが、正直に言つて特にない。

この手の質問は、過去に幾度かある。

俺の中で、何か無意識に溜め込んだ鬱憤などを勘付いたひとりが吐き出させようとす

る時の切り出し方だ。

無意識……何だろうな……。

「例えば……その、二週間前とか」

二週間前。

俺はその言葉に、何故か唇が疼いた。

あ。

一つの変化に気付いた途端から、背筋がぶるりと震える。

二週間前って、あの時の事だ。

「……な、何もないぞ?」

ひとりの弱々しくも、疑念を持った眼差しから俺は目を逸らす。

どうしよう。

これを、ひとりに話すのが気まずい。

この手の話題は、どちらかといえばひとりにとっては苦手分野な筈だ。以前にその手の映画と一緒に見た時なんて肌も目も髪も髪も灰色になって、何処の地域で使われているかも分からない言語で一時間ずつと独り言を呟いていた。

俺の悩み相談で、ひとりにダメージを与えるのは……。

話し倦ねる内容に俺が唸っていると、ひとりが俯く。

「わ、私じゃ頼りないと思うけど……」

「あ、いやそういうワケでは」

「あ、あのね」

ひとりが膝の上で組んだ手をもじもじさせる。

握ると硬い指先だが、こうして見るとしつかりと女の子らしく媚やかで柔らかそうな細い指をしている。

「いっくん、常日頃から自分の幸せが私の幸せって言ってくれるけど……」

「あ、うん」

俺は彼女の指先から視線を外して耳を傾ける。

ひよりは俯いたままだ。

恐る恐るという感じで、声も震えている。

「ぎ、逆もあって……い、いっくんが幸せだと私も幸せになるし、いっくんが困っていると……私も不安になるよ」

前髪の奥から、窺うような視線。

目が合って、俺の体がびたりと一切の動きを止める。

呼吸を忘れている事も忘れるほどに、落ち着く。

釘付けになって、俺の意識がひとりにすべて集束された。

「今のいつくん、何か不安そうだから。は、話したら楽になるかもだし」

「……………」

「と、兎に角洗いざらい全部吐き出しちゃって下さい!!!」

最後は自棄っぱちになっていた。

ただ、その姿が可笑しくて失礼だが笑ってしまう。

日頃から他人に壁を作ってしまうひとりが、彼女が最も忌避する『拒絶される恐怖』にも抗い、自ら胸襟を開いて相談に乗ろうとしている。

ひとりの感じる恐怖に比べたら、俺の躊躇いがバカバカしくなる。

……………毎回、こうだよな。

「不安、かは分からないけど」

「うん」

「最近さ、リョウウ……………がよくキスしてくるんだよな」

「……………え」

ひとりが顔面蒼白になる。

あの、何か俺よりひとりの方が不安そうでは……………？

と、取り敢えず話を進めよう。

そう、二週間前のあの日だ。

俺はソファアールで追い詰められ、てつきり爪痕を刻まれるよりも痛い仕打ちを受けるかと思つた。

だが、実はそれとは真逆。

啄むような感触を唇に覚えて目を開けたら、至近距離にリヨウの顔があつた。

え、これ……キスじゃん。

理解はしたが、まず現実かを疑つた。

それからというもの、特にリヨウが態度を変化させる事は無かつたが、学校でもどこでもアイツを見る度に思い出させられて困惑する。

あれは、どういう意味だったのか。

気付けば、アイツの事ばかりを考える。

別に恋をした男のような熱情は無いし、何なら他の事にだつて集中できる。

ただ、ほんの少し肩の力を抜いた時に……リヨウの顔が浮かぶだけ。

「何でキスしてくるのか分かんないし、一回訊いたら『恋人でも何でも一郎の好きなのでいいよ』って言うから……」

話すほどにひとりの顔色が悪くなる。

や、やはり青春コンプレックス？とやらを刺激してしまう話題かもしれない。

話している俺からすれば、そんな青春を感じるような甘酸っぱさや苦さも無いのだが。

「俺、今まで通りにアイツと接してるけど……これって何だろう……って、え？」

突然、目の前からひとりが走り出す。

部屋の戸を開け放つや、こちらを振り返る事もなく廊下へと消えていった。

聞き耳でも立てていたのか、戸の前にいたふたりとジミヘンが目を瞬かせる。

「おねーちゃん、凄い顔してたね」

ごめん、俺は見えてなかった。

♪

♪

♪

♪

私は近くの公園に逃げ込んでいた。

ベンチに座って、呆然と自分の掌を見つめる。
違った。

私は傲慢だった。

変なのは、いつくんじゃなかった。

私だったのだ。

あの時、漠然とした恐怖を感じた。

いつくんのリョウさんとお揃いの腕輪といい、リョウさんの呼び方に変化があったのを知った瞬間に感じた時点で気付くべきだった。

違和感は、変わりつつあるいつくんへの不安だ。

ただ、それはいつものように溜め込んでいる危うさではない。

私から……いつくんが遠くなる、危険。

だから咄嗟に止めてしまった。

頭の中で、都合のいいようにいつくんの異常だとすり替えてしまったんだ。

いつからだろう。

いや、きつとずっと昔からだ。

私を大切にしてくれるし、将来も傍にいてなんて言うてくれるから……安心しきって
いたんだ。

「いつくん……」

いっくんが離れていくのが、嫌だ。

壊れていく、何もかも

俺は帰り道、今日の献立を考えていた。

手間を惜しまず、美味しい物を作らねばならない。

折角バイトが休みなのに。

無断で後藤家に泊まり、独りカツプ麺で夜を過ごしたらしいりヨウから響蹙を買ってしまった。それくらい自分で用意しろと言いたいところだけどき。

それが出来たら、俺の家に来ないし。

まるで生活力が無い。

あれ以来、ひとりも少し変わった。

普段は感極まつて俺から抱きしめてしまうのだが、最近はどういう理由か積極的に俺の腕や胴に抱き着いてきてくれる……本人の顔色は悪いけど。

幸せが向こう側からやってくる。

だからなのかな。

最近は体の調子が良い。流石ひとりだ。ただ、意図が読めないのが残念である。

「せんぱーい！」

そうそう。

お隣さんから沢山の春菊を頂いた。

何やら親戚が農家らしく、よく都合して貰えるらしい。収穫時期もかなり過ぎているし旬でもないが、有る分だけ食費が浮くので有り難い。

ナムルにするのも良し。

春菊天もやってみたいな。

雑草なんて口にするリョウには、二度と道端の物に見向きしないよう美味い草とやらを味わわせてやる。

あとは、きくりさんが来た時にも丁度良い。

あの人、酒の肴で肉ばっかり食べてる。

「せんぱーい？」

そろそろ、S I C K H A C Kのライブがある。

またチケツト売りに来るかもしれない。

きくりさんが来るとリョウが怒るんだけどなあ。別に来ても良いけど齒型だけは勘

弁願いたい。

アレがあるとリヨウに上書きされる。

それも、かなり痛い。

だから、避けようとはしているんだが……何故か毎回付けられる。妙に俺の懐に入るのが巧みというか、気付いたら背後に回られてカプリ、だもんな。

人が後ろに立つと落ち着けない性分なのだが、何故かきくりさんには初対面の時から許してしまっている。

「せんばーいっ」

それはそうと、虹夏からも最近はおインが凄い。

具体的に言うとか家に誘われている。

時期としては、あの後だ。

以前に、リヨウが俺の親と面識があつて恋人だと誤解されたままなのだーとか適当な報告を世間話ついでに学校でしたのだ。

それから、よく頻繁に虹夏から連絡が来る。

一度、家族での夕飯時にお世話になった。

俺と星歌さんを仲良くしようという行動するのだが、きつとリヨウに謎の対抗心を燃やしている。これもまた意図は不明だが、俺は何かイケナイ道に進んでいるのではない

だろうか。

「せーんぱいつ！」

とにかく、最近は周囲が騒がしい。

というか――。

「前田先輩！」

「分かった。無視して悪かった」

隣がとても眩しかった。

至近距離で懐中電灯を発動された気分である。

俺を謎に甘い声で呼ぶのは、よく夜に電話するけど仲が良いのかは分からない後輩――

――喜多郁代だ。

この子は悪い子ではない。

でも、物理的に眩しい子。

喜多郁代と話す時は、遮光カーテン越しの方が良いかもしれない。

「喜多さん、何か用？」

「いえ、お見かけしたのでご一緒したいなって思つて」

「……顔色いいね」

「え、はい」

「もう悩みなんて無さそうだけど。最近、夜の電話はもう相談というより世間話になつてない？」

「……迷惑、でしたか？」

「いや、そんな事は」

無いように、実はある。

別に喜多さんは一切合切悪くない。

ただ、通話中にリヨウが耳に洗濯バサミを付けてきたり、額同士を付け合つてひたすらじつと見てくるという拷問を受けるのだ。

陽キャ君の『独占欲』……間違いではないのかもしれない。

そうだとしても、身が保たない。

「こ、この前、隣の家から夜の電話がうるさいって言われて。申し訳無いけど、メッセー
ジで会話——」

「そんなんっ」

「え、」

喜多さんの顔色が蒼白くなる。

「私、先輩にそんなご迷惑を……」

「ああ、お、俺の声が大きいだけで——」

「でも、ごめんなさい。何だか、最近は寝る前に先輩の声を聞かないとあの日の不安が蘇ってきて眠れないんです……!」

「……………」

「結束バンドを裏切った恐怖が拭えないんです!」

「あ、はい」

「ボーカル頑張る程に、罪の意識が……夢で見るんです! みんなに糾弾される夢を……」

お、重い。

いつかの後悔が、まだこの子の身を蝕んでいたのか。

え……その解消に必要な相談相手が俺?

俺はいつの間、そんな重大な役割を……?

や、安請け合いですすぎただろうか。

お、落ち着け!

こういう時、どうすれば良い!?

いや、答えは分かりきってる。

喜多さんを一度は前向きにさせた俺の言葉は、きくりさんをトレースしたが故に発揮

できた産物だ。

今回も力を借ります……………!

「喜多さん」

「せ、先輩……………」

俺は喜多さんの両肩に手を置く。

少しだけ腰を折り、彼女と目線の高さを合わせた。

「何の解決にもなっていないけど、電話じゃなくて直接話そう」

「……………え？」

「頻度は落ちるけど——」

喜多さんの目をしっかりと見る。

「その日は良い夢見せてやるよ」

……………。

沈黙が二人の間に下りる。

あれ、思い返すと俺……………解決する気が無いって発言した？

寧ろ、喜多さんに悪夢見てろって言っているような。

ま、マズい……今回は呆れられた。

頼りにしていた先輩が、何とも的外れな事を言っていると思われた。

果たして、喜多さんの反応は………。

「……先輩………」

ん？

喜多さんからキターン光線が放たれる。

だが、直視しても眩しくはない。

表現が難しいが、見る者に不安と焦燥を抱かせる……近い物ならホラーゲームで暗室に点く弱々しいオレンジ灯のような輝き。よくよく確認すると、こんなにも輝いているのに目には仄暗い光が宿っている。

少し待て。

今の俺の発言で、俺の語彙力の手に負える範疇を逸したりアクションをしないで欲しい。

良かったのか悪かったのか全然分らない！

喜多さんがするりと俺の腕に絡みつく。

甘い仕草なのに、先程から背筋が冷たくなる。

あの、え？

「自分で頑張れって事ですな」

「え、あの、え？」

「悪夢にも堪えられるようになれば、って……それは然るべき罰だから。でも、私が壊れないように間隔を空けて相談に乗ってくれる……」

「……………??」

「先輩、まるで麻薬みたいな人ですね」

「ま、まや……………」

喜多さんは笑顔だった。

せ、成功したという事で良いのだろうか。

含まれた意味を全く読み取れない言い回しをする喜多さんの反応には、若干の不安が残るが救えたのならよしとしよう。

ところで、腕を放して欲しい。

俺は愛想笑いを浮かべつつ、そつと喜多さんから腕を抜き取る。

あ、と悲しげな声でした。

「優しく突き放すんですね……」

「……………？」

「クセになつちやいます、まるでリヨウ先輩みたい」

「面と向かつて悪口言う度胸は認めよう」

喜多さんが頬を赤く染めて笑う。

その顔は何かに酔っているようだった。

こういう時の人間は、手を尽くしても無駄だという事を泥酔している知り合いから痛いくらいに学ばされた。現在の喜多さんは、俺の手には余る状態にある。

ここは、適当な事を言つて撤退しよう。

回り道をして家を――。

「え……………」郎くん……………？」

背後で缶の落ちる音がした。

路地に軽く響く音の大きさに驚いて俺が振り返ると、自動販売機の前で俺と喜多さんを凝視している虹夏が立っていた。

足下にはオレンジジュースの缶が転がる。溢れた物が彼女の靴の爪先に広がっていた。

よ、良かった！

俺は虹夏の方へと駆ける。

「虹夏か」

「良い夢見せて、やる、つて……何それ……」

「に、虹夏……？」

虹夏が俯いた先の虚空に何事かを呟いている。

心配になって肩を揺ると、彼女が顔を上げた。

「あ、ゴメン。ぼーっとしてた」

「そ、そうか」

「それで、何かな？」

「助けてくれ。実は喜多さん、まだ結束バンドを裏切った罪悪感の傷が癒えてなくて。いつも俺が相談に乗ってたんだけど、そろそろ手に負えなくなってきた……」

虹夏が目を見開いた。

「助けて……欲しい……？」

「ああ。情けない事この上ない話だけど……」

「……うん、任せて！」

虹夏が親指を立てる。

流石は結束バンドのリーダー、頼もしい。

手を振って、虹夏は喜多さんの方へと駆けていった。

このまま任せても良いのか……虹夏の厚意に感謝しながら、俺はそつと気配を消して家への道を急いだ。



「かんぱーいっ！」

SICKHACKのライブ後だった。

俺はきくりさん達と打ち上げに参加している。居酒屋ではあるが、俺はちびちびとお茶を飲んでいた。

未成年だから仕方がない。

いや、そもそも酒にあまり興味が無い。

その原因は。

「どーした少年！楽しもーぜ！」

「はい」

「声が小さいぞー！」

「はい」

「よし、まあまあだ！」

「はっ」

さつきから俺に絡むダメ人間——廣井きくり。

ライブ中は凄くカッコいいのに、いざ酒が関わると理性を無くしてしまい、尊敬という単語と言動の一切が無縁となるような危うい人間だ。

紆余曲折を経て、俺はこの人によく絡まれる。

ぐびぐびと耳元でジョッキの酒を呷る喉の音がする。

「廣井。前田くん絡むな」

「え〜？少年は私のファンだもーん」

「前田くん。いざとなれば廣井を外に捨てる用意はあるから、限界が来る前に合図を送るんだよ」

「恩に着ます」

俺に救いの手を差し伸べてくれたのは、岩下志麻さん。

SICKHACKではドラムを担当している。

精悍な顔立ちやきくりさんに強く物申せる人物とあって、俺としてはとても頼りになる人物だ。中性的な容姿と時折垣間見せる男前な言動からも、ファンからかなり慕われていてライブ中に『志麻様』なんて声が聴こえた事もある……というか俺も叫んだ。

会ったのは、初めてSICKHACKのライブを観た後の事だ。

きくりさんに絡まれていたところを助けられた。

その時から俺の中では好印象である。

「高校生に飯をたかり、あまつさえ家で寝泊りまでするとか……」

「少年が許したんだから良いじゃん？」

「大人として恥じろ」

「うえーん、少年助けてー」

きくりさんが首筋に抱き着いてくる。

臭い、酒臭い。

飲んでいるお茶を飲む感覚と一緒に鼻腔を駆け抜ける酒の臭いがリンクして、自分も

飲酒しているんじゃないかと錯覚してしまう。

そうなると吐き気がしないでもない。

志麻さんが深いため息をついた。

きつと、きくりさんと密接な関係にある志麻さんは、彼女に関する案件で俺よりも迷

惑を被っている……同情を禁じ得ない。

「大丈夫だつてー。少年の後学の為に、私が大人の手本を見せてるんだからさ」

反面教師だよな。

俺にこんな大人になるなという啓示だよな。

仮にもし、俺にもロックに生きると示しているのなら有り難く真反対の生き方をしよう。

味気ないと言われようが安定の方が嬉しい。

常識を外れてでしか得られない刺激があるというのなら、それこそバンドマンのライブなどで得られる。

「イチロー！この前教えたアニメ見ター？」

「はい、観ましたよ」

「次のヤツは今度貸すヨ！またロインで感想会しよネー！」

時折だが独特の発音が混じるのはS I C K H A C Kのギター担当の清水イライザさん。

イギリス出身で、日本の誇れるコンテンツ——アニメを目当てにこの国へ来たという。キャミソールの上から抜き襟に近い着方で着物を着ている。

この人も若干露出が凄いし、……何がとは言わないが立派だ。

目のやり場に困る。

「えー！そんなにイライザと仲良いの？」

「そうだよ」

「私のロインには「はい」以外で返さないじゃん！」

当たり前だ。

きくりさんのロインは内容も一方的だ。

事後報告ばかりだし、反抗しても通じない事がこれまでの交流で知れている。ならば流れに身を委ね、被害を最小限に抑えるのだ。

「私とも会話してよ！」

「はい」

「じゃあ、今から「はい」は無しね。はいスタート!!」

「うん」

「あ、今度は「うん」で片付ける気だろー！」

ぐんぐんと肩を揺すられる。

はいを潰した程度で代用など幾らでも利く。日本語とは斯くも便利な物なのだ。

俺も成長したな。

去年までならば、きくりさん相手でも疲れ切っていた。

だから、今こうして至近距離できくりさんに睨まれても動揺の波すら起きない。

「少年、ライブ前はまた疲れた顔してたよね」

「……………そうですかね」

「でへへ。まだお気に入りのベースのライブが聴けてない感じ？」

「それは近々聴けるので、別に」

「でも、今は少し顔色がいい」

「え？」

ぼんぼん、と頭の上に手を置かれる。

「それなら、今日お姉さんはライブした甲斐があったよ」

……………。

この人は本当に、定期的に俺の何かを救ってくれる。
だから家に来る事も、背後も許してしまおうのだろう。
やっぱり、不思議だな……バンドマン。

少しだけ——憧れる。

翌日。

俺は新宿のライブハウスにまた足を運んでいた。

「きくりさんが消えた？」

「前田くんの家に来てないのか」

志麻さんが天井を仰いで疲れた顔をする。

話によると、きくりさんは昨日の打ち上げから居酒屋をハシゴしたらしく、志麻さん達と解散した後の行方が分からないそうだ。

そこで、俺の家に居るのではないかと思っただけだが、昨日は志麻さん達が親切にしてくれたお陰で補導される前に早く帰れて、風呂入ってすぐ就寝した。

きくりさんからは……一度も連絡は受けていない。

「何かあったら教えてくれ」

「了解です」

「はあ。こういう事でも前田くんには迷惑をかけたくなかったんだけど——あ？」

机の上にあつた志麻さんのスマホが揺れる。

着信……誰からだろうか。

志麻さんがスマホを手に取り、画面で表示された物を見るや顔を顰めた。指先で叩くように画面をタップし、耳元に当てて通話を始める。

「もしもし」

『もしもし？あ、私。えへへ、生きてまーす』

「何処ほつつき歩いて——」

『今から路上ライブするんだけど、機材持ってきてくれない？あ、機材だけで良いからっ！』

「路上ライブ？……はあ、またよく分からない事を」

『金沢八景にるので、よろしくっ』

ぷつり、と通話が切れる。

志麻さんはため息をつく、機材運搬用のスーツケースにミニアンプなどを手早く入れる。

路上ライブと聞こえたが、まさか酔った勢いで単独ライブでもするのだろうか。街中で、しかも路上ライブって確か地区に許可書を貰わないと駄目だった気がするのだが……？

「金沢八景って何処だっけ」

「え、金沢八景？」

「うん。……前田くん、知ってる？」

「はい。親戚がそこにいるので、何度か足を運んで……良ければ俺が持っていきましようか」

「えっ、いや悪いよ。ただでさえ、前田くん新宿に呼び寄せたりしてるのに」

「構いませんよ。機材だけ渡したら親戚の家にも遊びに行きますから」

「そうか。……じゃあ、お言葉に甘えて」

「はい」

俺はスーツケースを受け取る。

すると、何度目かのため息が志麻さんから漏れた。

「廣井に言った手前なのに、大人として情けない」

「志麻さんのは別に構いませんですよ」

「そう言つて貰えると助かる」

苦笑する志麻さんに一礼して、俺はライブハウスを出た。

目指せ、金沢八景——！

もう私は諦めたい

金沢八景に到着し、俺は海沿いに南へ。

頭上を通るシーサイドラインの線路を仰ぎ見ながら歩いていく。

今日は特に利用者が多い筈だ。

この近くで花火が上がるらしい。

花火を見る為に足を運んだ者たちで駅周辺が賑わっている。個人的に祭りの雰囲気
が苦手なのだが、皆はとても楽しそうだ。

早く機材を渡して離脱しよう。

途中で後藤家に連絡したら、『どうせなら泊まっていかないかい？』と誘われたので有
り難くお世話になろうと思っている。

しかし、奇遇にも程がある。

きくりさんは何故ここに来たのだろうか。

ここへ来るとなると京急線かシーサイドラインでも使わないと来れないのだが……。
酔っているのに路線乗り換え出来たのか。

きつと風呂も入ってないし、駅で酔い潰れて寝ていたに違いない。

後藤家に連絡はしたが、やはり断つてきくりさんを連れ帰るべきか。……いやいや、
まず自分の家に帰って貰うのが普通か。

会うときはシラフで頼みたい。

考えながら歩く内に、手を大きく振っているきくりさんを発見した。

「うおおい、少年ー！」

やめてくれ。

往來のある場にて大声で呼ばないで欲しい。

注目を集める彼女の下に行く足が重くなる。

億劫な気持ちに抗って、俺はきくりさんの傍にスーツケースを置いた。

やれやれ、一仕事完了かな。

「ご所望の路上ライブ用の機材です」

「えへへ。もしかして、聴きたくて来たの〜？」

「……別に」

「もう、ツンツンしたってお姉さんには分かるぞ」

きくりさんが肩に腕を回してくる。

普段着にしているスカジャンを脱いでいる所為で、彼女は薄手のワンピース一枚だった。

密着した時に体に伝わる情報量が多すぎる。

「こ、この人……下着は……!？」

「い、いや、乱されるな。この人相手にムキになるのは却って調子に乗らせてしまう。

「お、落ち着け。」

「ほ、ほら。路上ライブするんでしょ」

「そっだよ」

「志麻さんとか呼ばなくて良かったんですか？」

「ん？あー、コレ私のライブじゃないから」

「……はい？」

きくりさんが後ろを親指で指し示す。

そちらを見ると——ピンクジャージのひとりが固まっていた。

何故ここに。

全身が薄い灰色に染まっております、触ると表面は滑らかで硬く、まるで地蔵にでもなったような感触だ。

相変わらず再現度の高い変化の術。

もしかしくなくても後藤家は迦れば忍者の家系で、ひとりは隔世遺伝か先祖返りでもしているのではないだろうか。

「もしかして、ひとりの？」

「はれ？ひとりちゃんと同じかい？」

「はい。親戚関係です」

「え、凄い運命じゃーん！」

確かに運命的だ。

だが、同時に悲しくもある。

つまり、この場に俺が来るまでひとりはこの酔っ払いのきくりさんの相手をさせられていたのだ。消極的で自己主張の苦手なひとりだから、きつと離れ際を見出だせずズルと巻き込まれていたに違いない。

何と哀れな。

さぞ俺よりも辛かっただろうに。

「きくりさん。ひとりには——ミ、アアアツツ!!」

首筋に鋭い痛みが走る。

どうやら、きくりさんに噛まれたようだ。

しまった、また油断してしまった。

これでは山田が再び上書きと称した謎の暴力行為に走る事になる。

涙目で振り返ると、きくりさんはべろりと唇を舐めている。

美味しかったですか？

いい加減にしてくださいよ、この吸血鬼。

「何で毎回噛むんですか」

「あれ？耳のつもりだったんだけどな」

「え……この指、何本に見えます？」

「五千!」

「俺は千手観音じゃないです」

だいぶ酔っているな。

もしかしたら別の物もキメているかもしれない。

果たして、こんな状態でライブなど出来るのだろうか。

そもそもの話——。

「何で路上ライブを？」

根本的に理由が不明だ。

路上ライブをどうしてひとりとやろうと思ったのか。

バンドマンではない俺がどう考えても、その発想には行き届かない。

訊かなければ理解が及ばないだろう。

俺の質問に対し、背後でようやく活動を再開したひとりが答える。

「わ、私のチケットを売る為に……その……」

「チケット？」

「の、ノルマがあつて……」

「……ああ、チケットノルマか」

たしか結束バンドもライブをする予定だったな。

十日後にあるとリヨウが教えてくれた。

ようやく、ライブにて彼女の音楽が聴けるのだと楽しみにしている。ひとりもメン

バーだから、成る程チケットノルマが課せられていて当然だ。

それにしても、大胆な作戦である。

自らの腕前で集客し、その中にこの金沢八景にいる彼らへと下北沢のライブのチケッ

トを売る。……路上ライブの成功、それに加えて距離もある場所でのライブのチケット、さらにライブ当日がオフかという購入条件のシビアさが重なる。

……敢えてそこまで自分を追い込むなんて、己の成長の為の試練における難易度設定に容赦が無い。

「あ、あのね……いっくん」

ひとりがポケットからチケットを取り出し、俺の前に差し出した。

「い、いっくんにも……渡そうと、思ってた……」

「……えっと……」

「…………？」

も、もしかして、試練とかではなく純粹に売れなくて困っているのか。

ならば、大変申し訳ない……。

「実は、もうリョウウから買ってるんだ……」

「あ…………」

ひとりの目尻に小さな涙が滲む。

な、何て事だ……。

俺は過去の自分を殴りたくなってきた。

リヨウが遂にライブを演ると聞いて、意気揚々とチケットを彼女から購入したが、正しく浅慮である。

ひとりの為に、俺のような存在でもキープとして残しておく事を考えていなかった。ひとりに救われていながら、肝心な時に恩返しができない……。

チケットは残り三枚らしい。

二枚はきつと、後藤夫妻だろう。

く、尚更こんな時に何も出来ない俺って……！

「ごめんな、ゴミクズで」

「そ、そっか……買ってたんだけ……私じゃないんだ……」

「おーい！暗いぞー！」

きくりさんの声ではっとする。

今は落ち込んでいる場合ではない。

ひとりのライブの為に、少しでも協力できる事をしなければ。

そう思って、何かないかと周囲に視線を巡らせた時にひとりの足元に紙束を発見する。

手に取ると、拙い画力だが四人の少女の絵が描かれ、その下にライブ告知を記した文

書が並んでいる。

これは……宣伝フライヤー！

な、何て事だ。

人見知りなのに、これを地元で配ってチケットを売ろうとしていたのか！

な、何という子だ……ひとりは、やはり凄い子だ！

ひとりは自身を卑下するが、彼女なりに行動力がある。

実行前で躊躇つてはいるが、その準備にかけた手間は称賛に価する。

俺が彼女だったなら挫けていたかもしれない。

更に酔いどれきくりさんという凶悪なコンボを決められて折れない精神力には舌を

巻く。

ひとりの努力は決して無駄にはできない。

いや……したくない。

「分かったぞ、ひとり」

「え？」

「オマエの為に、全力で協力する。この宣伝フライヤー、任せてくれ」

「あ、あの……？」

ひとりの後ろで、きくりさんが着々と準備を進めていた。

俺もフライヤーを手にして、少し駅の方へと移動する。

よし、ここで――！

「あちらで路上ライブ開催します！無料ですので、花火までの暇潰しに良ければどうぞー！」

声を張り上げ、バイトの接客業で培ったスマイルと共にフライヤーを配る。

全力でひとりのサポート。

こういう事は正直に言つて苦手だが、ひとりがこれから背負う苦勞に比べたら些事である。

俺は必死で声をかける。

振り返ると、少し遠いがきくりさん達の下に足を止める人がいた。

成功するかどうかはひとり次第だが、少し離れた場所からも彼女らを見ている視線はチラホラあつた。

頑張れ――ひとり！



ち、チケットが売れた……！

私は達成感に打ち震える。

一時はどうなるかと思ったけど……お姉さんの助言があつて、人目に対する認識が改められた。

わ、私ってやれば出来るじゃん！

えへへ。

あ、でも……いっくんの協力の影響なのかな、フライヤーを手にした人たちが大勢いて、軽くライブハウス以上に人が集まった。

道の邪魔になったので、一曲演奏が終わるなり警察が来てしまったけど。

注意されたので、お姉さんの判断もあつて撤退。
で、でも……あと一枚……。

「最後の一枚、私が買うよ」

「えっ？」

片付け中のお姉さんの言葉に変な声が出てしまった。

「チケット……それでノルマ達成でしょ？」

「い、良いんですかっ？」

「うん。私、普段は新宿拠点にしているから近いし……あとそのライブハウス知ってるし」
街灯に照らされるお姉さんの微笑みが一層眩しく見える。

こ、こんな奇跡があつて良いのかな……!?

私が差し出したチケットに対し、お姉さんはしっかりと代金分を手渡してくれた。

「おにころ五本分以上のライブ——期待してるよ」

チケットと代金の交換。

私は思わず涙が出そうになる。

やった、売れた、売れたよ……!!

この成果を一番に報告したい相手を——いっくんを探して視線を巡らせる。日が暮れそうで暗くなった海辺の中に、彼は見つからない。

あ、あれ？

「あれー？少年は何処行つた？」

「え、えと……」

「こ、ここです……」

「ひよわあつっ!!？」

予想外からの声に全身が跳ねる。

近くの電柱の影から、いっくんが現れた。

かなり疲弊しているようで、精一杯挙げたつもりであろう手は頭の高さにも届いていない。

「少年も頑張ったね！」

「ふ、ふふ……頑張りすぎて、ひとりのライブ聴けなかったクソ過ぎる」

本当に悔しそうだ。

血が出るほど唇を噛んで後悔に堪える表情のいっくんに、お姉さんが苦笑している。

私は駆け寄つた方がいいが、何をしてあげたら良いか分からない。

え、えと、こ、こういう時は……。

「わ、私、いっくんがいたから頑張れたよ。ライブ、た、楽しみにしててね」

正直、今よりも不安だけど。

精一杯励ますと、いっくんの顔から表情が消えた。

ど、どうしたんだろ……？

また予測不能の反応に私が困惑していたら、ゆつくりと動き出したいっくんに抱き締められた。

じつくりと味わうような、そんな印象を受けるように段々と私を包む彼の腕の力が強くなる。

「ひとりが愛おしい……！」

「あう………」

あ、コレ……駄目……。

視界の隅で、お姉さんが小首を傾げている。

「ベースの子って聞いてた気がするんだけどな……」

何のことだろう。

「それじゃあね、ひとりちゃん！」

「は、はい」

「お金返して下さいね。あと、酒は程々にしておかないとライブ当日来れなくなります

よ」

「その時は、少年が私のこと迎えに来てね」

結局、その後は解散となった。

いっくんに電車賃を借りて去っていったお姉さんを駅で見送る。

今日は真面目に家に帰るらしい。

変な人だけど、何かカッコよかったな……。

ちよつとした尊敬の念を抱き、あの人の後ろ姿を見詰めていると隣のいっくんを肩を

叩かれた。

「あんな大人になっちゃ駄目だぞ」

「お、お酒はやめておきます……」

「そうだな。飲むなら俺がいる時だけにしてくれ」

「え……（そ、そそそそれぶつぶぷプロポ……!?）」

「うん（ひとり）が路上で寝てたなんて聞いたら死ぬ）」

私は深呼吸し、加速していく鼓動を落ち着かせる事に努める。

そういえば、駅周辺の人が少なくなった。

きつと、花火会場かそれが見えるポイントに移動したんだろう。

花火……陽キヤのイベントだな。

私には一切無縁である。

「ひとり、よく頑張ったな」

「え、えへへ」

「実はさ、今日は後藤家にお世話になる予定なんだよ。だから、このまま二人で帰るか」

「あ、うん。そうだね——」

あ、そういえば。

今、久し振りにいっくんと二人きりだ。

この心地いい時間も、あと少し……家に帰ったら皆がいるし、それもいいけど……。

.....

.....

.....

「あの、いっくん」

「ん？」

「い、いいい、一緒、一緒に……は、花火……」

「え、花火？……」

もう少しだけ延長したくて、いっくんを花火に誘う。

いっくんは夜空を見上げて、思案顔になる。

あ、そうだよね……我儘だったよね……。

それに、いっくんは祭りが苦手だった。家族や友だちで足を運び、仲睦まじい様子を

見せる人々と自分を無意識に比べてしまうからだ。

ああ……駄目、だよね。

それに、いっくんにはリョウさんが——えっ？

「よし、行くか」

いっくんに手を握られる。

そのまま、何処かへと歩き出した。

私は行き先も分からないので、大人しく付いていく。

駅を通過して、海沿いに西へと歩む。途中にあつたショッピングモール付近で足を止めて、彼は空を見上げた。

丁度良く、花火が上がっている。

夜空で炸裂した光の粒の彩りに、思わず声漏れる。

隣では、いっくんが黙って同じように花火を見詰めていた。

打ち上がる光が尾を引きながら夜闇に消えて、次の一瞬には花となって散る。形や色も様々に、その光景がひたすら続いた。

「個人的に祭りは嫌いだったんだけど」

「……」

「ひとりとなら、また来ても良いかもな」

「……………本当に嬉しい。」

でも、止めてほしい。

そんな事を言われるから、期待しちゃうんだ。安心しちゃうんだ……ずっと一緒だっ
て思ってしまう。

「……ま、また来たいな」

「じゃあ、そうするか」

繋いだ手を固く握り直す。

いつまでこうしていられるだろうか。

いつくんの事だから、本人の自己評価とは裏腹に周囲から求められている。私一人で独占できるなんて、烏滸がましい事は出来ない。

沢山、魅力的な人はいる。

その中から、私を選んで一緒にいてくれる可能性は微塵もない。

私はただ、彼が辛いときに一緒にいただけ。

寄り添った人間だから、相手にしてくれているだけ。

諦めよう。

「どうせ、俺は一緒に見たいと思える相手は他にいないし。俺と見たいなんて言うてるのも、ひとりだけだ」

「……」

「ひとりが望むなら、いつだって構わないから」

「……うん」

諦め、たい。

「だって、ひとりに貰った命だしさ」

諦めたいのに。

特級フラグ建築士

夏も本格的になって本当に暑い。

窓を全て開け放って風通しを良くしても、茹だるような暑気は中々抜けてはくれず、通っていく風すら生温い。

その中でも台所は地獄だ。

火を使えば、誰よりも汗をかく羽目になる。

俺はフライパンで卵焼きを作りながら、手元から上がる熱気に顔を顰めた。さつきまで麵も茹でていたので台所は地獄と貸していた。

あー、クーラー付けたい。

でも、我慢だ。

使うのは暑さがいいよ厳しくなる八月後半。それまでは、扇風機で凌ぐ。

俺は堪えられる……………けど。

「リョウ。昼飯、もうすぐだぞ」

「やっとか」

「扇風機前を陣取るな」

居間では、リョウが扇風機前を占拠している。

扇風機の首は駆動させず、自身の方向へ固定していた。

俺が卓に着く時は、せめて俺にも回して欲しい。

ライブも近いのに懈け切っている。

普通は合わせの練習も詰める時期ではないのか。

「今日は暇そうだけど、結束バンドは？」

「練習無し」

「そうなのか」

「でも、バンドTシャツ作るらしい。今日はその相談する為にみんな集まってる」

「オマエは？」

「そういうの面倒くさい」

「結束力……」

「……ぞとばかりにバンド名が意味を成さない。」

今頃は三人とも集合している。

この怠惰なりヨウとは違って、必死に自らのシンボルとなるTシャツデザインについて見解を交わしているのだろう。

扇風機の前でも良いからりヨウも考えろよ。

バンドメンバーで集合する用事なのに。

「よし、できた」

「何にしたの？」

「索麺。具は千切りにしたキュウリと卵焼きとハム、後は海苔とネギがある。……卵は要るか？」

「ぜんぶ頂戴」

「俺の分もあるから程々にな」

りヨウの麺汁の碗に卵を割って入れる。

汁と掻き混ぜてから、その中に一掴み分の具全種類を入れて渡した。

受け取るや否や、りヨウは大きな器に入った索麺を碗の中に入れ、充分に絡ませてから啜る。

冷えた麺が暑い中では丁度いいのだろう。

……コイツは扇風機で涼んでいたけど。

俺は卵無しで、りヨウ同様に全種類の具を入れてから麺を取る。麺が残ったら、今晚

作る予定の味噌汁にも入れて完食しよう。

パシヤリ、と不意にシャッター音がした。

リヨウが食事の中の俺をスマホで撮影している。

食事中に別の事をするとは行儀が悪い。

注意しようかと思っただが、今度は自分も入れてツーショット写真を撮った。

「行儀悪いぞ」

「虹夏たちに送信した」

「そんな自慢にもならない物なんかやってどうするんだよ」

「一郎のご飯でマウント取れる」

「迷惑な……デザイン案を送れ」

こんなに自由で良いのだろうか。

もしかして、役割分担をしているとか。

作曲に関しては一手に担っているそうなので、それくらいの我儘が通るのかもしれない。虹夏が寛容だから成り立っている気もする。

作詞は、あのひとりが行っているそう。

一体どんな内容なんだろう。

やはり、ひとりくらい最先端な人間だと広くは無いが刺さる人には深く刺さる意味の

深い詞かもしれない。

早く聴きたい。

「二郎」

「ん？」

「さつきからスマホうるさいけど」

「……………」

リョウの指摘通り、ロインの通知が騒々しい。

かなりの量が送信されているのか、間断なく音が鳴っている。

通知音からしてバイト先ではない。

一体誰からだろうか。

喫緊の連絡ならば無視するワケにもいかないので、リョウに言った手前で非常にやり

にくいがスマホを確認した。

通知は——虹夏と喜多さん。

誰から確認しよう……。

先ずは送信数の少ない喜多さんからだ。

『先輩、意地悪が過ぎますっ！』

『そんなに私に妬いて欲しいんですか?!』

『そんな事されたらもつと』

取り敢えず、トーク欄を閉じた。

何の話だかまるで見えない。

ずらりと三十件近く溜まっているが、いずれも意図の分からない言葉ばかりだった。仕方ないので一旦保留し、次は虹夏を確認する。

『リヨウを甘やかしちゃ駄目だよ』

『私も一緒に食べたかったなー』

『今度二人で食べようよ。私も手伝うからさ』

特に緊急性は無さそうだ。

それなのに四十件とは……。

そこままでして一緒に食事がしたいと思われるほどの人間では無いのだが、そう思ってくれる事自体は有り難い。

取り敢えず『そうですね』と返信しておいた。

……喜多さんから『私には返信しないんですね』とまるで虹夏とトーク内容のデータを共有しているかと錯覚する速度で新たなメッセージが入った。

本当にTシャツデザインを考えているのか？

案外、行き詰まって他に目移りするほど暇なのではないのだろうか。

「Tシャツデザイン、難航してるのかもな」

「これからもっと遅くなる」

「何で？」

「さあ」

リヨウが索麺を啜る。

それから黙って碗を差し出されたので中を確認すると具が無くなっていたので新たに入れておいた。それくらいは自分でやって欲しい。

しかし、結束バンドのTシャツか。

物販とかで、いずれは売られたりするのだろうか。

虹夏が言うには、各々に因んだ色の結束バンドを販売する予定らしいので、俺はピンク色を購入するつもりだ………ったのだが。

「リヨウ」

「ん？」

「俺の結束バンド、ピンクが——」

「え、青でしょ？」

「……………じゃあ、黄——」

「青」

「……赤とか——」

「え？」

「……………青、だよな」

リヨウによって何故か限定される。

例の意味不明な独占欲とやらだ。

青以外を買ったら、再び爪で攻撃されかねない。

それより、キスしたりもするけど本当に俺たちの関係は何と呼ぶべきなのだろうか。恋人というほど甘くないし、友人というには乾いているし、ただの知り合いにしては交流が多い。

未だにリヨウ本人からの明言も無い。

曖昧な分だけ怖くて警戒心も湧くのだが、逆に決定付けられるのもまた恐い。

やはり、宿主と寄生虫……か？

「一郎、今日は映画観ないの？」

「観るけど、食事中に観る内容でもないしな」

「何てやつ？」

「『メモ〇ト』っていう映画」

映画『メモ〇ト』。

それは、既に二度は鑑賞した物だ。

ただし、ネットの考察や解説などを閲覧しても未だに理解できない部分があるほど難しい。

時系列トリックにより、途中でいつ、どの出来事なのか混乱させられる事がある。これを理解したいが為に、もう一度観る予定だ。

映画の難しさを上澄みだけ解説すると、リョウが意味有りげに頷く。

「食後もやめた方がいい」

「え、何で？」

「お腹いっぱいでも頭が回らないから」

「……あ、そう」

元から回していないような気がしないでもないが、そこをツツコむと余計な事をまた言っつきそうなので口を噤む。

リョウが箸を置き、自身の腹部を撫でる。

どうやら満腹のようだ。

目論見通りの量で余ったので、味噌汁に使おう。

「食器下げるぞ」

「うむ」

「コップも洗うけど」

「苦しゅうない」

「一々引つ掛かるんだよなあ」

自分がリヨウの奉公人のように感じさせられる。

ここは俺の家の筈なのだが、妙な話だ。

食器などを片付けていく途中で、リヨウが俺の観たかった映画を再生しており、つくづく自分勝手だと呆れつつも作業しながら俺も鑑賞した。

ううむ、作業と並行すると余計に分からない。

全部終わらせて、すぐリヨウの隣に腰を下ろす。

リヨウは序盤で混乱し、やがて俺もその後を追うように展開の理解が遅れ始める。

集中して見ていたが、しばらくしてリヨウが俺の肩に寄りかかる。

ちらりと横を盗み見れば眠っていた。

満腹状態などころへ、更に難しい映画というコンボにどうやらリヨウは降参する他無かったようだ。

「やれやれ」

俺はリヨウを離し、ソファーに横にする。

近くにあったタオルケットを腹部にかけて、風力設定を弱風にした扇風機をリヨウの

すぐ傍にセツトした。
おやすみ。

「……………一郎……………渡さ……………」

夢の中まで俺がいるのか。
ちよつと可笑しくて笑ってしまった。

♪

♪

♪

♪

ライブを明日に控えた日。

午前のバイトから帰った時だった。

ポストに入った手紙を見て、思わず顔を顰める。

この住所は……親戚。

しかも、俺の母方の祖父母だ。

絶縁したというのに、何故かこちらの住所は露見している。一年か二年に一通、こうして手紙を寄越してくるのだが内容は決まって誹謗中傷だ。

目も通さず捨てたいが、親戚関係というのは簡単に無視出来る問題ではない。

「おかえり」

「……オマエ、今週ずっと家にいない？」

「たしかに」

「両親の為にも帰ってやれ」

玄関を開ければリョウが俺を迎えた。

相変わらず寄生しているコイツの在り方には脱力させられる。

挨拶も軽くし、俺は自室へと入る。

憂鬱だが、机の上で仕方なく手紙を開封した。

内容は、一口でこう言っている。——『娘に産んで貰ってにおいて何も返せないなんて恥を知れ』だ。

読んだ後、俺は失笑した。

何が産んで貰ってにおいて、だよ。

この方、顔も憶えていない親二人の所為でどれだけ惨めな目に遭ったと思っ
ているんだ。

祖父母のみならず親戚全員に言いたい。

親が子を選べないように、子は親を選べない。

子は別に、生まれたくて生まれてきたワケじゃない。偶然その男女の間に発生し、自我を得ただけだ。

生まれたい生まれたくないの選択肢など最初から存在しないし、選ぶ余地も無い。

それなのに、産んで貰った恩？

笑わせるな。

第一、親が子を産む理由は何だよ。

この『何かして欲しい』とか、『何かしてあげたい』とかだ。

どちらも自分勝手、子供が望んだワケじゃない。

しかも、都合によっては負担だからと産んだ子を産後すぐ遺棄する人間だっている世の中だ。子供は愛なんぞで生まれるわけじゃないんだよ。

何で生んだだけの親に感謝しなければならぬ？

何で生んだ親でもない祖父母に返さなければいけない？

生まれてきて良かったなんて思えるのは、俺がどう生きたかだ。決して、親やアンタらのお陰なんぞではない——。

………いけない。

また悪い感情が迸ってしまった。

気づいたら、机の上で手紙は悲惨な状態になっていた。

部屋中に散り散りになっている。

俺は膝を抱えて蹲る。

毎回、嫌な気持ちにさせてくれやがって。

「一郎」

「………何だよ」

「部屋、汚いけど掃除機いる？」

「……それで掃除するの俺だろ？」

「うん」

コイツ……………。

人が部屋にいてもノック無しで入室してきた。

しかも、状況から見て明らかに触れてほしくないというのは一目瞭然である筈だ。

それなのに、このスタイル。

リヨウの無遠慮さに呆れてしまい、一周回って怒りすら鎮まっていくな。

……これくらい、自由に生きれたらな。

「この紙、何？」

「……何でも良いだろ」

「まさか、これ23点だったテストの……」

「オマエの数学の答案じゃねえよ」

今は放置して欲しい。

「後でやるから。今は放っておいてくれ」

「……………」

「……リヨウ？」

俯いていた俺の顔をリヨウの手が挟む。

優しく持ち上げられ、見上げた先——至近距離で彼女と視線が交わった。深い水底のように、引き込まれる瞳である。

「明日のライブでは、そんな顔させないから」

微笑んでそう告げたリョウが眩しく見える。

ああ、そうだった。

明日はコイツの音楽が聴けるのだ。

掃除は……明日にして、手紙の事は考えないようにしよう。内容は前田家に対してではなく、俺個人への嫌がらせだったので無視しても無問題だ。

「凄いの頼むぞ」

「それは、みんな次第。私だけに言われても」

「急に頼もしくない」

それが却ってリョウらしいが。

俺は立ち上がって肩を回す。

バイトから帰ったばかりだが、リョウがこの部屋に来たのは心配ではなく昼食の催促だ。

「そういえば」

「ん？」

「結束バンドのTシャツ、見る？」

リヨウが思い出したようにTシャツについて言う。

「それなら喜多さんが見せてくれたよ」

俺はロインの喜多さんとのトーク履歴を開き、画像を見せる。

カメラに向かって可愛くピースサインをしつつ器用にウインクまでこなした喜多さんの自撮り。彼女の顔に目が行きがちだが、よく見れば結束バンドのロゴが入った虹夏デザインのTシャツを着ている。

「……へえ」

リヨウが目を細めて俺を見つめる。

画像見ろよ。

俺の顔に結束バンドのロゴは入ってないぞ。

「Tシャツって、いずれ物販とかで出る？」

「何で？」

「俺も買いたいし」

「一郎は私にどんどん貢ぐといい」

「購買意欲の下げ方が上手いな」

絶対に青の結束バンドは買わない。

因みに山田リョウが推しだなんて絶対に口にしない。

もしかしたら、ライブを見た衝撃で推し変なる方向転換も有り得る。山田リョウ脱却には非常に良い刺激となる。

無論、そんな事は口にしない。

口は災いの元、リョウにまた爪を立てられるのだけは回避したい。

居間へと移動すると、昼のニュース番組で天気予報が放送されていた。

少し前に南で発生した台風が接近しているらしく、しかしその時は日本に直撃しない予報だった。

だが、今は……。

「何か微妙に変わってるな」

「ホントだ」

「明日のライブ、大丈夫か……?」

「念には念を入れて、昨日『STARRY』で私たちはてるてる坊主を一人十個は作った。

この魔力があれば台風も流石に来ない」

「成る程ね、これは明日が不安だ」

すぐフラグ立ちそうな台詞を言うな。
オマエの魔力など最も信用ならない。

別に雨風が強いただけなら、それでも俺はライブに行く。実際にライブハウスは近いので徒歩でも届きそうだ。

ただ他の客もそうとは限らないし、逆に雨に打たれてまでライブを観に来たいという熱量を持って足を運んでくれるかは不明だ。

最悪、一桁代の客数でライブ……。

我ながら悲観的だが、どうも優先してその未来が頭に浮かんでくる。

「一郎は心配しなくていい」

「ん？」

「客は必ず沢山くる。そう私の勘が言ってる」

「分かった。その為にもオマエはもう喋るな」

何本フラグ立てる気だろう。

いよいよ危険に思えてきたので口を塞いでおく。

でも、楽しみだ。

やっとライブで聴けるのだから。

「台風なぞ恐るるに足らず」

もう黙れ。

ヒーローは遅れてやってくる

下北沢駅の東口は水が張っている。

薄膜というほど浅いが、排水溝で水が捌けても尚この状態が維持される雨量が空から注がれている。

正直、立っているだけで靴は駄目になる。

例に漏れず、俺の足も濡れていた。

「本当に台風来やがったよ……山田ア」

雨合羽のフードを払い、俺は袖を捲くつて腕時計を確認する。——そろそろか。

「うへへ、少年を見つけた！」

改札を出てきた人影の一つが俺に駆け寄る。

カラカラと駅構内に軽快な響かせる下駄で、俺もまたそれが誰かを一瞬で理解する。

今日、俺をここに呼びつけた人物——廣井きくり。

既に酒水を充填済みの赤ら顔だった。

今日もまた迷惑無双きくりモードである。酔いが醒めた時は割と会話が通じるのに。

きくりさんに手を挙げて迎えようとした時、接近する姿を目にしてはつとした。

もう手遅れというレベルで濡鼠になっていた。

水を多分に含んで重そうなスカジャンは裾から水滴を落とし、薄手のワンピースは彼女の体に貼り付いて目に毒な風体と化している。

まあ、予見はしていた。

俺は用意していた雨合羽もう一着とタオルを取り出す。

「きくりさん。スカジャン貸して」

「了解」

「あと、この雨合羽で体隠して、もう一枚で拭いて」

「お、おお……」

「一応、着替えあるから雨合羽の中でコレに着替えて」

「怖……用意が良すぎて怖い」

失礼な。

指示に従うきくりさんが着替え終わるまで待つ。

人目を避けた位置にはいるが、雨で立ち往生している者も幸いな事に他人に構っている余裕は無いようで俺たちを見ている目はいない。

きくりさんがシャツとズボンに着替え終わる。

俺はタオルを受け取ってカバンにしまう。

「この服って今日買った？」

「いえ。家にあるヤツです」

「あー……」

「去年から来客が多いので、有事の為にと用意したヤツです。知り合いの体格に合わせてるんで、若干不満があるかもしれませんが」

「いやいや、丁度いいし大丈夫」

きくりさんがズボン好きじゃないんだけどなー、なんて呟く。

それを無視し、ワンピースの裾を絞った。

「これ、ライブに客入らないかもね」

「結構酷いですからね、雨」

きくりさんが残念そうにため息をこぼす。

今日は結東バンドのライブ。

しかし、懸念していた通り本来は日本にすら上陸しない予定だった台風が直撃し、下

北沢は強風と豪雨に見舞われている。

今朝、その天気でもライブハウスへと向かおうとしたきくりさんから救助要請を受け、下北沢駅まで迎えに来たのが現在の状況だ。

俺も『STARRY』に用があるから良いけど。

「てか、少年つてば完全武装じゃん」

「足はびしょ濡れですよ。家にある長靴のサイズが合つてれば履いて来たんですけど……」

「男の子の成長は凄いもんねー」

考えが足らなかった。

リヨウがフラグを立てた時点で雨を想定すべきだった。

去年よりも足が大きくなったのは成長として本来喜ぶべきなのだろうが、ここでは素直に喜べない。

「それじゃ、行きますか」

「待つて、行く前のワンパック！」

「おにころは没収します。吹き飛んでも知りませんよ」

「そんなぁ……！」

俺はおにころを取り上げ、替わりに雨合羽を渡す。

「渋々ときくりさんが雨合羽を着てから、二人で雨中へと進み出た。打ち付ける雨で体が押される。」

隣できくりさんを支えながら、『STARRY』への道を辿った。行き道では人ともあまりすれ違わず、客数へのさらなる不安感を煽られる。

俺よりも結東バンドの方がプレッシャーだろうな。

「お、着いた」

俺たちは地下へと続く階段を降りる。

濡れた足では滑りやすいので慎重に段差を踏みつつ、扉を開けて中へ入った。

「うはーっ！凄いい雨だったー！」

「えっ」

「暑苦しいとばかりに雨合羽を即座に脱ぎ捨てて入店したきくりさんに、中にいた人から戸惑いの声上がる。」

宙に放り出された彼女の雨合羽をキャッチしてから俺も脱いだ。

「えへへ、ぼっちちゃん。来たよー？」

「え。おまえ、ぼっちちゃん目当てで来たの？」

「そうだよ？ いえーい！」

店に入つてすぐの場所に結束バンドの面子が揃つていた。

ひとりと視線が合つて、手を振る。

リヨウがこちらを見ていたが無視した。

こいつは俺の昼飯を食べて出ていった大罪があるので一時だつて構つてやるものか。

モツプを持つて拭き掃除をしていた星歌さんにも会釈する。

それにしても、きくりさんは星歌さんと知り合いだったのか、やけにお互いを知つた気安さを言動から感じる。

「おまえ、一郎くんに迷惑かけてないよな」

「無いですよ。ね、少年」

「ゲロの処理と風呂と飯、電車賃、毎回噛まれる」

「え、っ。そ、それは……」

きくりさんが目を泳がせる。

星歌さんのこめかみに青筋が浮かんだ。

血祭りの予感がして、俺はそつときくりさんから距離を置こうと移動するが、一步横に動いた時に誰かと肩がぶつかる。

振り返ると、リヨウだった。

いつの間にもここまで接近していたのか。

だが、今日はライブまで無視すると決めたのだ。昼飯の恨みは、そう簡単に揺らがない。
い。

無視し——っ!?

「あぐっ」

「いたツツ!?!」

リヨウに襟を掴んで引き寄せられた。

驚く間も無く、首筋に激痛が走って悲鳴が出る。

何故きくりさんじゃなくてオマエが噛む!? 折角きくりさんの攻撃は受けられないよう駅から細心の注意を払って動いていたというのに、これでは台無しだ。

リヨウを睨むが、彼女はこちらを見ていなかった。

視線の先は、きくりさんである。

何か通じ合ったのか、きくりさんもまた含み笑いをこぼした。

……なに? 説明して?

噛まれた首筋をさすりつつ、二人を交互に見る。

噛んだ理由も二人が見つめ合う理由も皆目見当が付かない。

いや、どんな理由があるにしろ人を噛む事が良いワケがないだろう。

「何故噛んだ？」

「やつと、こつち見た」

「は？……あ」

リヨウがドヤ顔をする。

しまった。

無視しようと決めたのに、自分から話しかけてしまった。噛むという攻撃行為は卑怯だ、反応せざるを得ない。

俺が拳を握って悔しさに堪えていると、今度はリヨウと逆側から飛び込んできた。脇腹に突き刺さる衝撃に危うく倒れそうになったが、どうにか踏ん張って耐えた。

今度は何事だよ。

胴体に抱き着く何かを見て……うわ。

「先輩！ 応援に来てくれたんですねっ」

「え？……あー、結束バンドの演奏が楽しみで」

「私のボーカルを聴きに来てくれたんですね！」

「まあ、そうとも言える、けどね……？」

脇腹でキターン光線が炸裂する。

至近距離の喜多さんに思わず目を瞑ってしまった。

たしかに、応援ではある。

敵密には喜多さん個人ではなく結束バンド全体のパフォーマン스에期待していた。

あながち間違いではないのだが、何故か素直に肯定すると危険であると本能が告げていた。どうした、本能？

「嬉しいです、今日のライブ頑張りますね！」

曖昧な返事に、喜多さんが好きなように解釈して喜んだ。

うん、それで良いよ。

俺はそつと喜多さんの肩を掴んで離す。

あ、と寂しげな声が聞こえたが気の所為だ。そんな声色とは裏腹に恍惚とした表情をしているように見えたのは、きっと何かの見間違いだ。

俺はそそくさとひとりの方へ移動——しようとする行く手に虹夏が立ち塞がる。

「二人とも！一郎くん困ってるから」

「あ、ありがとう。虹夏」

「ううん！いつでも頼ってね！」

笑顔が眩しいが、なぜ行く手を阻むのだろう。

絶妙に俺が彼女とぶつからずに左右へ避けられる距離を潰して立っている。絶賛あなたに困っています。

一向にひとりに辿り着けない。

俺がオロオロとしていると、後ろでまた『STARRY』の扉が開く音がした。階段を下りて、二人の女性が現れる。

「あ、ひとりちゃん！」

「……と、ビラ配ってた男の子とベースのお姉さんもいる！」

「き、来てくれたんですか!？」

二人に対し、ひとりが驚いていた。

俺を指してビラ配りと言ったが、そんなバイトはしていない。

「……いや、待てよ。」

最近そんなことをした覚えがある。

ひとりの路上ライブでの時だ。

まさか、俺が誠心誠意ひとりの為にフライヤーを配布し回っていた時に会った人なのだろうか。

が、頑張った甲斐があった……少し涙が出なかった。

「だって私たち、ひとりちゃんのファンだし」

「台風吹き飛ばすくらいライブ、期待してますね！」

ひとりのファン、だと？

その言葉に衝撃を受けたのは俺だけではなく、ひとり本人もだった。

突如として彼女を中心に天高く衝き上がる光の柱が立ち昇った。

どう、なってるんだ……コレは？

全員で思わず引き気味に見詰める中、ひとり嬉しみに打ち震えて笑っていた。

す、末恐ろしい子だ。

所詮フィクションだと思いついていたが、この現象を見るに魔法や魔力なる概念も実在するのかもしれないと思わせる。

なんてポテンシャル……流星はひとり！

「また私を見ない」

台風を呼んだヤツは黙ってて下さい。

ライブまで残り一時間となった。

控室に向かう結束バンド、漸く隙ができたと思つてひとりに声をかける。

「ひとり」

「え、あ、はい!？」

「俺もひとりのファンだから、楽しみにしてる。頑張つて」

「……うん」

ひとりがスタスタと、一人だけ戻つて来る。

俺の目の前で足を止めて、何か言いたげに視線を彷徨わせていた。

「どうした？」

「あ、あの……」

「……………」

ひとりが控え気味に両腕を広げる。

その動作で何を求めていたかを瞬時に察して、俺は正面から包み込むようにひとりを抱き締めた。

温かい。

ひとりが俺の体に腕を回す。

頭を撫でれば、胸に顔を擦り付けてきた。

よしよし。

「頑張れそうか？」

「な、なんとか……」

ひとりがゆっくりと体を離れた。

時間にして三十秒もあつたかどうか。でも、前よりも表情が引き締まっている。

「い、いってきます」

頑張れ。



ライブまでの時間、ライブフロアは薄暗かった。

俺はきくりさんに引っ張られ、隅の方で見ていた星歌さんに並ぶ位置で待機している。

隣が酒臭い。

今着ているのは俺が貸した物なので、せめて酒や涎を落とすのは控えて欲しい。……あ、もうシミが。

きくりさんの自堕落さは暗くてもよく見える。

それに引き換え、星歌さんの佇まいは凜としていて頼り甲斐のありそうな大人像そのものを体現していた。

並んで立つと殊更に差異が際立つ。

……ん？

「星歌さん？」

「どうした、一郎」

「目付きが凄いですけど大丈夫ですか？」

「……ちよつと目が疲れてるだけだ」

嘘だ。

明らかに緊張している。

まるでライブを控えた新人バンド——それこそ結束バンドの面々が感じているのと同じくらいの緊張感で顔が険しい。

星歌さんは結束バンドの努力を間近で見守っていた。

だからこそ、彼女らの成功を願うばかりに自分もまた同等のプレッシャーを受けているのだろう。

俺はというと……比較的に落ち着いている。

昨日もリョウは自由気ままだったからな。

こちらが心配する方がバカバカしいと思われ、程よい感覚で待つていられる。フロア内にいる客数は、やはり少ない。

台風という弊害で、恐らくここから増えていく事も絶望的だろう。

問題は、この客入りの少なさを見て結束バンドのモチベーションにさらなる悪影響が無いかだ。

順番としては最初に演奏するスケジュール。

最前線を陣取るひとりのファン二名は早くも浮足立っているが、その他の観客は落ち着いていてステージにすら視線が向いていない。

……待ち時間、きくりさんをステージ上にぶち込んで演奏させるか。

「ねえ、一番最初の『結束バンド』ってバンド知ってる?」

「知らない。——興味無い」

「見とくのダルいねー」

その会話だけが、異様に大きく聞こえた。

俺は拳を握る。

会話の元は俺たちと少し離れた位置に立つ二人組。

別に彼女らは決して悪くない。お目当てのバンドがいるのだからそちらに関心を寄せていて、それまでの時間が退屈だし興味を引かれないのは可笑しい事ではない。

ただ……悔しい。

「空気悪いねー」

「ウチのライブハウスが悪口か？」

「違いますよー。ね、少年？」

「怖いからって俺に同意求めないで下さい。単に酒臭いって話です、星歌さん」

きくりさんは特に何も無さそうだ。

星歌さんの顔が益々険しくなる中でも、何故か最も穏やかに過ごしている。

俺もなんだか心臓がうるさい。

緊張感に喘いでいると、ステージ横の扉が開く。

続々と結束バンドの面々がステージ入りした。

早速、それぞれが機材などの調整に取り掛かる。

「お、来たねー」

「何かもつと呼吸が苦しくなったような……」

「少年も飲む？ なーんて、冗だ——」

「頂いても良いですか？」

「二郎。ウチが潰れるからやめろ」
心臓が苦しい。

しかし、ステージ上のリヨウがらしくない程に緊張している。表面上はいつも通りで、無表情かつ手先や足運びからは感情が読み取れない。

ただ、どこか普段と比べて空気が強張っている。

いつも自由に弾き、自由に過ごすアイツを見ているからこそ些細な異変でも色濃く見える。

実を言うと、そんな気はしていた。

大胆でマイペースな割に、リヨウは一番の勝負所で煙に巻いたり怖気づくところがあ

る。
……仕方無い。

俺はカバンから団扇を取り出した。

それをリヨウに向かって振る。

ふと、こちらを見たリヨウが——ふ、と笑う。

彼女が見たのは、ふざけた俺の応援姿勢ではない。

俺が持つ『昼メシ返せ!!』という絵文字を描いた団扇（制作時間およそ一時間半）が

原因だ。

「……………」

「……………」

「よし、これで少しは緊張が解れたか」

「……………」

「……………」

「……………何です?」

「何その励まし方〜!ちよつとお姉さんキュンとしちゃった」

「虹夏にも何か頼む」

「は?」

きくりさんが俺の肩を叩く。

この団扇、女性をときめかせる効果があるのか。

まじまじと確認してみるが、どう見たって俺の怒りしか伝わって来ない。わざわざ般若面の絵を書いて、横にゴシック体の文字を貼り付けている。

まあ、どうでもいいか。

今はリヨウの緊張さえ解ればいい。——と思っていたら、視線を感じでセンターを見る。

喜多さんがこちらを凝視していた。

何だか目が怖いので一礼しておく、笑顔になる。

調節が終わり、四人を照らすようにライトが点灯する。

……何だか、一気にライブ感が増すな。

「……は、初めまして！ 結束バンドです！ 本日はお足元の悪い中お越しいただき、誠にありがとうございます！」

「あ、あつははー！ 喜多ちゃんロックバンドなのに礼儀正しすぎー……………」

……………。

……………。

最前列のひとりファン二名だけが反応する。

それ以外は全くの無反応で、手元のスマホに視線を落としている者と退屈そうな者に分かれていた。

し、心臓の音がうるさい。

演奏聴こえなくて邪魔だから止まって欲しい。

冷めた反応に、喜多さんの顔が強張る。

「さ、早速一曲目いきます！ 私たちのオリジナル曲で——『ギターと孤独と蒼い惑星』！」

お、おお、来た……！

俺はリヨウが聴かせてくれたデモの音源の記憶がある。

だが、喜多さんの歌声までは入っていない。

果たして、俺にとつて未知の可能性の種となる彼女の存在がああ音源と合わさり、どんな相乗効果を齎すかまでは把握していなかった。

遂に、『結束バンド』がここで明かされるのか。

虹夏のドラムを合図に演奏が始まる。

最初から感動していた俺は音にノツて体が動くが、そこでふと妙な違和感を覚える。

……リズムが、何だか合っていない。

明らかに音源と違う。

これは、単なる不調なのか。

素人では、その程度にしか変化が読めない。

ただし、いつも聴いていたリヨウのベースの異変はよく分かる。素人の浅知恵でも、ベースがバンド全体の音を裏から支えるような役割を担っていると聞いていたし、デモでもそんな風に立ち回る音の運びたと聴いていて判った。

リョウのベースによって、曲に安定感が増す。
でも、今日はリョウの音が乱れている。

どうした、リョウ？

変化を感じ取っているのか、俯き気味のひとりの顔も曇っていた。
やはり、可怪しいのか。

俺も混乱して、素直に曲に集中できず客に目が行く。

駄目だ、誰も見ていなかったり……今トイレに向かう者もいた。

「っ……」

「しーっ」

不安になって隣のきくりさんに尋ねようとしたら、手で口を塞がれた。
きくりさんが唇の前に人差し指を立てる。

この結束バンドの異常を耳と目で体感して、しかし笑顔でいる。
ど、どうして……。

い、いや、確かにそうかも。

ステージ上からは客が見えている。

俺が動揺していたら、特に喜多さんには敏感に感じ取れてしまう。

俺一人分という些細なモノでも影響させてはならない。

未だ気分は落ち着かないが、演奏にできる限り集中する。

そして——一曲目が終わった。

「いい、一曲目『ギターと孤独と蒼い惑星』、でしたー」

喜多さんの震えた声が響く。

「やっぱり、パツとしないわ」

「早く来るんじゃないわかったー」

……あの二人、いい加減処理して良いか？

不穏な決意が胸中で固まりそうになったが堪える。決してあの二人は悪くない。

ああいう面は、俺にだって存在する。

リヨウの影響で楽曲を聴くようにはなったが、興味のないバンドの曲にも興味を惹かれない、というのはある。

彼女らにとって、それが『結束バンド』だっただけ。

このバンドの努力を傍で常に見守っていたならば、俺は否定するだけの自信を言葉に乗せて話したり何なりしていただろう。

でも——俺は知らない。

リヨウ個人が頑張っている所を何度か見たり、ひとりが頑張ったギターの成果が現れる動画を観たりしたが……『結束バンド』そのものの努力を見てきたワケじゃない。

俺には、何の資格もない。

ステージを見上げる。

喜多さんも動揺していた。

リヨウは……何事も無いように見えるが、やはり落ち込んでいる。

視線が合う——さっと避けられた。

俺には、何もできない。

きっと、結束バンドの本来の実力はこんなものでは……いや、違うよな。きっと、バンドとしてはこういう場でも発揮できなければ、それは実力と言わないのかもしれない。

彼らは頑張っている。

頑張っているのに、客に届かない。

……資格もないのに、俺はそれが悔しい。

彷徨わせた視線が、ひとりに留まる。

彼女は最前列を陣取るファン二人を見て、次に俺を見て——その目に力強い光を宿す。

ひとりの指が、弦を弾いた。

その音色に、ぶるりと背筋が震え上がった。

聞き覚えがある、この音から伝わる自信と引き込まれる音色……。

「……………ギター、ヒーロー？」



一曲目から、躓いた。

普段の練習で出来ていることが活かせていない。

みんなが不安になって、それがお客さんに伝わっているのがステージ上だと凄く分かる。

最前列の二人を見る。

路上ライブの時は、終わったたらあんなに笑顔だったのに……今では『どうしたの、どうしよう』って表情をしている。

あんな顔させちや駄目なのに。

私たち、演奏も曲もまだまだだ……。

視界の隅で、何かが動く。

いつくんの持っている団扇だった。……あんなの、持ってたっけ。

表面には、何かが描かれている。

暑いからとかじゃやないだろうし……きつと、彼の事だから私たちの為に何か作ってき
てくれたんだ。

『俺もひとりのファンだから、楽しみにしてる。頑張つて』

……あ。

いつくんの、切なげな表情を見てしまった。

……あんな顔、させちや駄目だ!!!

私が幸せだと、いつくんが幸せ。

いつくんが幸せだと、私が幸せ。

私がこんなんじゃない、いつくんが幸せになれない。

一番幸せになって欲しい人にも、あんな顔させたらおしまいだ！

待ってて、いっくん。

私が。

私が。

私が。

私が、幸せにするから。

超刺激的な治し方だった

結束バンドのライブは終わった。

俺は夜中、その余韻に独りで浸っている。

今夜限りはリヨウも来ないだろうと思って、味噌汁とひじきの五目煮、旨塩焼きの豚肉と千切りキャベツを白飯の上に敷いて輪切りの葱を撒いた肉丼による一人の夜飯だ。

本来なら、違う献立だった。

前回のリベンジでしゃぶしゃぶを作りたかった。

だが、彼らはバンドマンである。

ライブ後に打ち上げがある事を失念していた。

今頃、リヨウたちは何処かの居酒屋で星歌さん達によって初ライブの慰労が施されている事だろう。

「まあ、うん……仕方ない」

メンバーで打ち上げが催され、虹夏に誘われはしたが完全な部外者なので丁重にお断りした。

俺も行きたかった。

でも、どんな顔で参加すれば良いか分からない。

途中で情けなく取り乱した姿を晒したし、メンバーに申し訳なくて気まずい。

だから、虹夏から執念深いくらい幾度も尋ね直されたが、同じ返答を繰り返した。

……何故そこまで来て欲しい？

いや、理由はそれだけではない。

これ以上なく私的な事情があった。

喜多さんである。

最近の彼女の情緒の不安定さが恐い。

根はいい子なのだが、出会った時に比べると何かのリミットが解除されたような対応

に、いつも惑わされている。俺が失礼なことをした所為で、変に氣遣わせているんだ。

打ち上げでは伸び伸びと過ごして欲しい。

それにしても、すごかった。

ひとりのギターが鳴り始めた瞬間からだ。

急に世界が変わった。

そう錯覚してしまうくらいに、ライブフロアの空気をギターの鋭い音色が劈く——ひとりの独奏が始まった。

動画で発揮されていた聞き覚えのあるキレのあるストローク、意識が音に惹き込まれる感覚。

あれこそギターヒーローの本領だ。

凍りついていたステージ上に不思議な熱が集まる。

最初は、計画された結束バンドの演出だと思った。

だが、ステージではリヨウも驚いていた。客のみならず、メンバーまでもがひとりの演奏に目を見開いている。

アレは……アドリブだった。

まさか、引っ込み思案なひとりがあんな大胆な演出をするなんて誰に想像できたか。

その後からのライブは格段に違った。

喜多さんの声が入り、虹夏さんのテンポが戻り、リヨウがバンド全体の音を掴んでサポートし始める。

あれこそ、結束バンドなのだろう。

続く二曲目と三曲目で、最初の蹉跌を忘れさせる程に客からの評価は好印象に覆った。

「次のチケットも買おう、絶対」

SICKHACK以外にも推しバンドが現れた。

元からその積もりだったけど、素人な上にバンド内に身内がいるが、鼻根目無しでリピートしたいバンドになっている。

心做しか、自分ひとりなのに調子に乗ってコップに注いだオレンジジュースが美酒のように思えてきた。

これが、上手い酒の味か（※違う）。

そういえば、ひとりの様子も変だったな。

ライブ後、打ち上げに行く前に呼び出されたのだ。

『あつ、あのね……いっくん』

『どうした?』

『あつ、き、今日分かったんだ。いっくんが不安そうな顔してるの見て、わ、私のギターで凄く目キラキラさせたりしてるの見て……』

『ん?』

『い、いっくんを自分で幸せにする時すごく気持ちよくて……だ、だから私が幸せにするね?それ以外、ど、どうでも良くなって、私だけで、良いようになるように頑張るね?』

『あー、うん?よろしく?』

普段のひとりと比べると口数が多かった。やはり、ライブ成功の手応えなのだろう。

頬を染めて凄く高揚した感じで語っていたのは、今日で自信が少しだけ身についた証
拠。

このまま良い方向へとすべてが運ばれ、ひとりが成長してくれたなら嬉しい。言っている事は、要約すると次のライブも自分のギターを聴きに來てくれ、だ。勿論だとも。

「……………ん、ロインか」

スマホから通知の音が鳴る。

ロインだ、相手は……………リヨウだ。

『一郎、鍵失くしたかも』
は？

俺の持つスマホからメキリと変な音がした。

人様の家鍵を勝手に奪って利用した挙げ句、よもや紛失するというのは俺と全力で戦いたいという宣言だろうか。

是非もない、受けて立つよ。

変人ベースシストの血肉を明日にでも路上にブチ撒けてやる。

「絶対許さ………はい？」

玄関の方から鍵の音が鳴った。

誰だ………リヨウか？

合鍵を持っているのは、彼女しかない。

でも、打ち上げが終わったらそのまま帰宅する筈だ。

……まさか、金欠で打ち上げは何も注文できなかつたので俺の家で晩飯を食べに来たのかもしれない。

別に、まだ肉もキャベツも白飯も有り余っている。

だが、鍵を失くしたという文句で喧嘩を売ってきているので飯よりも先にまず熱いお仕置きでも施してやろう。

首筋に爪を立てたり、今日噛んだ分も含めてな！

………いや、待てよ。

鍵を失くしたのに、どうして入れるんだ。

まさか、リヨウが落とした鍵を誰かが拾い、それを悪用して俺の家に侵入してきたのではないか。

今、鍵を開けたのは……ヤバイヤツなのでは？

居間の扉が開かれる。

俺は箸と美酒（※違う）を構え――。

「先輩、こんばんは！」

……なんだ、喜多さんか。

凶悪犯かと身構えた己の必死さが恥ずかしくなる。

俺は美酒（※違う）と箸を卓上に戻した。

胸を撫で下ろし、安堵で力が脱け――待てよ。

何で俺の家の鍵を喜多さんが開けられるんだよ。

「喜多さん。打ち上げは？」

「もう解散しました。とつても楽しかったです！」

「そ、そう。……どうやって鍵開けたの？」

「あ、それなんですけどね？」

喜多さんが右の掌を差し出してきた。

そこには、リョウが持っている筈の鍵がある。

………なんで？

「リョウ先輩が居酒屋に落とした鍵なんですけど、先輩が帰った後に気付いたんです。

どうしようか伊地知先輩に訊いたら、コレって前田先輩のだって言ってたので返しに来たんです！」

「あー、成る程ね。わざわざありがとう」

「いえいえ」

俺は詫びながら鍵を取った。

そして、その手を引こうとしたのだが食虫植物のように喜多さんの手が閉じて捕まえられる。

心臓に悪いからやめて欲しい。

「喜多さん？」

「実は、ご相談があつて」

「な、何だ？」

「鍵を届けるので必死になってたら、もう補導される時間になって……」
俺は壁の掛け時計を見た。

たしかに、もう高校生も補導される時間帯だ。

「ここは、ご両親に頼んで——。」

「でも、用があつて両親が家を空けてて迎えに来れる人もいなくて」

「あ……………そうなの、か」

「そこで、前田先輩にお願いしたいんですけど」
嫌な予感がする。

「今日、先輩の家に泊まっても良いですか……？」

えー……………。

的中しちゃったよ、嫌な予感。

でも、他人の家の鍵をわざわざ届ける為に来て結果的に自分の家に帰れなくなってしまった事は、俺にも責任がある気がする。

元凶は落としたヤツなんだけどさ。

喜多さんは、あの日の入学式の朝と同じように誰かの為に行動しただけだ。そんな彼女が、俺の所為で窮地に陥っている。

……断った方が、むしろ血も涙もない野郎な気がする。

本当は一人でライブの余韻に浸りたかったけど。

ちらり、と喜多さんを見る。

最近の彼女は、接しづらいの다가……今日は比較的穏やかな気がする。

あの危うげなキターン光線も放たないし、変な風に詰問して来ないし、純粹に困った

善良な女の子だ。

リヨウの影響で大分慣れたとはいえ、女の子を男一人の家に泊めるといふのは俺が親だったら止めたい。

いや、別に喜多さんに変な事はしないけどさ。

でも今回は俺にも責任あるし。

「良いよ」

「ホントですかっ!？」

その瞬間、あの危機感を煽られる妖しいキターン光線が放出された。

あ、駄目な気がする。

この子を家に置いたら危ない、精神がキャパオーバーで死ぬかもしれない。だが、既に了承してしまった……。

「今晚、よろしくお願ひします——先輩♡」

明日の俺、生きてると良いな。

「やあ、
リョウウっ」



「誰」

喜多さんが帰った日の夜、リヨウが家を訪ねて来た。

元気に挨拶したら、なぜか前田一郎であることを疑われたが、僕は純度百パーセントで前田一郎だ。

本当に失礼である。

でも、今日の僕は一味違うのでそんな事も許そう。

昨晚、喜多さんとずっと話している内に僕も楽しい気分になってきて、気付いたら世界が明るく見えてきた。

バイト先でもいつもより接客に対して積極的に取り組めた。

何故かバイト先の女子に『困ってるなら相談して』と言われたけど、特に悩みは無い。むしろ清々しい気分。

これなら、夏休み明けには陽キャとしてクラスに馴染めているかもしれない！

昨日までの僕はなんて損をしていたんだ。

ありがとう、喜多さん。

「鍵失くしてごめん」

「良いさ。昨日、喜多さんが鍵を拾って来てくれたから、ねっっ」

「誰」

「モチロン前田一郎、さつつつ!」

「一郎はそんな生理的に無理な性格してない」

「ははっ、新しい僕を否定しないでく、れつつつ」

笑顔で告げると、顔を顰められた。

いつもリヨウと調子が合った事など無いが、今日は特に酷いな。

こんなにも明るい世界を見ている所為か、一段とリヨウが暗く見える。真の闇の中でしか光が見つけられないように、光の中で真の闇が見えてしまっているかも——
ねつつつ!

「今日はどんな要件か、なつつ」

「その喋り方やめて、鳥肌立つ。……何かあった?」

「夜も遅くて、喜多さんが家に泊まつ——」

「なるほど」

ガッツ、と顎を掴まれる。

そのままリヨウと鼻先が触れ合いそうな距離まで引き寄せられた。

今日もオマエは強引だ、ねつつつ!

「郁代と一晩過ごして、自分が陽キヤになったと錯覚してるんでしょ」

「そんなワケ無い、さつつつ」

「よく喋る」

ははっ、オマエも今日は一段と自由な口だ、ねっつっつっ!!!

一体何をしようというのか、なっつ!

出方を窺っていたら、リヨウが嘆息する。

呆れられているようだ。

陽キャへと刷新された僕の姿を悪化だと捉えているようだが、リヨウこそ何も見えていない。成長して置き去りにした僕を無意識に僻んでいるのだ。

「一郎」

「何か、なっつ?」

「どうしたら戻る?」

「戻る必要性を感じない、ねっつ!」

「……一回壊すしかないかも」

壊すだっつて?

君程度に新生前田一郎を破壊なんて出来はしない。新しい自分という事で謎の全能感すら芽生えている。今の僕からもキターン光線が放射できそうだ。

陰キャの山田リヨウには堪えられまい。

降伏するなら今の内だぞ?

数秒か、数分か定かではないが長く感じる時間リヨウが俺の中で暴れていた。明るかった世界が白んで、何だか目がチカチカしている。

リヨウは一体、何をしてるんだ？

暫くして、リヨウが顎を放した事で俺は後ろへと尻もちを突く。

え、何が起こつ、あ？

混乱していると、屈んだリヨウと視線が合う。

じつとこちらを見つめていた。

「戻ったね」

「え、戻った、とは？」

「じゃあ、お風呂入ってくる」

リヨウが俺を置き去りに、そそくさと風呂場へと向かう。

その後も茫然自失として、玄関に座り込んだ。

何が起きたのか、まるで分からない。

いや、キスされたな。

でも、あんな感覚は初めてだった。

今までだって何度もされたけど、アレは一体何だったのだろう。

「怖……………」

今日のアイツも一味違う。

俺は震える足で立ち上がって、玄関扉を閉める。

リヨウの寝間着を浴室の前にセツトしてから、居間のソファーに腰を下ろした。

……………あれ、何か体がダルい。

足が重くて、肩が少し動かすだけで酷い筋肉痛に見舞われた。

き、今日はそんな激しく動いていない筈……………!?

ただ陽キヤになっただけで……………あれ、何で俺は陽キヤになっただんだ？

「これ、は……………まさか、反動……………!?!」

俺は思い出した。

かつてリヨウが試験勉強の過負荷で壊れて明るい性格になった時、正常な状態に戻した結果そこから動く事も難しいような疲弊状態に陥った事がある。

現在の状況は、その現象に酷似していた。

俺も陽キヤになると……………ダメなのか？

いや、そもそも何で俺は喜多さんと話しただけで陽キヤに……………。

そもそも、昨日の記憶が曖昧だ。

寝る前に椅子に座って映画を観ていたら、後ろから喜多さんに抱き締められて耳元で

何かを囁かれてから記憶が……………。

え、催眠なのか。

いや、催眠なんて喜多さんとは縁も無いような事あるわけがない。勝手に俺が暴走してただけで、この反動がその証。

一人で物思いに耽っていると、風呂を出たりヨウがシャツ一枚で現れる。

寝間着は用意したよな。

なぜ数ある内でそれを選んで着てくるんだ。嫌がらせなのだろうか。

「お風呂出たよ」

「あ、ああ……………」

「……………どうしたの?」

「か、体が何か……………重くて……………!」

ソファアーの上で鈍い動作を繰り返す俺に、リヨウは鼻で笑うだけだった。

「私以外と遊んでるからそうなるんだよ」

「適当な嘘つくな」

「信じられない内は、ずっと前田一郎のままだよ」

「前田一郎には次なる進化形態があると?」

いや、前田一郎状態を未熟みたいな言い方するな。

リヨウの言葉を信じたら変化するの
か。きつと、確な成長ではない。

リヨウが卓について晩飯を所望するので、俺は動きづらい体に鞭を打ってキッチンに向かう。

全く災難な日だ。

喜多さんの訪問とリヨウの襲来。

どちらも強烈なインパクトを俺に残していくものだ。

たつぷり、一時間半を使って鰯の竜田揚げと昨日の味噌汁、白飯を揃えた。

我ながら、十時過ぎに揚げ物を女子に提供するなんて途轍もない暴挙だと思ったが、体がスタミナの付く物を欲していた。

キッチンから居間の卓上へと運ぶ。

すると、リヨウは映画を観ていた。

「何を観てるんだ？」

『『テイキング・オブ・デ○ラ・ローガン』』

「あー、顎が凄い事になるヤツな」

「顎？」

「ラストまで観てれば分かるよ」

この映画は伏線が回収された時には、コレ救いようあるのか?と思わせるほど恐い。竜田揚げを食べながら、リヨウは鑑賞を続ける。

やがて、俺の言葉の意味を示すシーンが来た瞬間に顔を引き曇らせた。そうなるよな。

ラストも不穏な印象を残して終わるし、こういうジャンルの醍醐味のような締め括り方である。

非科学的な物は基本的に信じない派なのだが、こういった作品を見ると信じていない者にすら迫る恐怖があるのは流石制作陣と言わざるを得ない。

一時的にでも信じ込ませる、その上で最大限の効果を発揮する演出。

これを小さい頃に観ていたら、ホラー系は苦手になっただかもしれない。

「さっきの 一郎もこんな感じだった」

「()まで酷いか?」

これを対比に出されるのは心外だ。

俺の陽キヤモードが異常状態として捉えられるのは兎も角、周囲を恐怖させる程になる筈が無い。

家に来た時からそうだが、失礼非礼のオンパレードだなコイツ。

普段から憚る事のない口だが、今日は攻撃力が高い。

「でも、治し方は分かっている」

「治し方って——！」

治し方を知れば、独りでも解決できるかもしれない。

今思い返せば、かなり恥ずかしい言動だったと省みている。

再発するとは到底思えないが、少なくとも人に頼るよりはマシだ。

俺は聞き出そうとして……ちろりと唇を舐めたりヨウの口元に視線が吸い寄せられる。

「治す以外でも、して良いけど」

嫌で………偶にでお願いします。

頼る相手を間違えたの巻

午前のバイトから上がって帰途につく。

今日は山田も『STARRY』でバイトらしいので、恐らく家には居ないだろう。

真面目に働くのは良い事だ。

遅刻は如何な物かと思うが、それでも無断欠勤をしないリョウのその部分だけは数少ない美点と言える。

残る美点は三つ。

容姿が整っている。

スタイルが良い。

ベースが様になる。

……ん、内面が無い……？

幾らなんでも、外見だけで判断するなんて最低な事があるか。そんな筈は無いと再思考するが、やはり挙げられる美点はその三つに限る。

俺が最低人間なのではなく、ヤツが外見のみという最悪評価を叩き出す存在というだけなのでは？

逆に、嫌な所はすぐに思い浮かぶ。

無断で家に踏み入る。

勝手に風呂を借りる。

飯を旨そうに食わない。

服を借りて礼の一つも無し。

俺の意思を問わない。

財布の管理が甘い。

責任感が低い。……………etc。

駄目だ、際限なく湧くように挙げられる。

これは俺の所為ではないんじゃないだろうか。

霧が晴れるような爽やかな気分になって、俺は呼吸がしやすくなる。

ああ、俺は悪くないんだ……………！

今は欠点ばかり目につくが、もしかすると俺が知る山田リヨウは彼女における一側面の僅かな部分で、これから美点をもっと発見される可能性もある。

うん、人間は希望を捨てちゃ駄目だよな。

……山田リヨウの分からない点、か。

最近、寝る前にキスしてくるのは何だろうか。

しかも、唇が触れ合う以上の……アレ。

過激な接吻と称する他ない行為の意味が未だに分からない。恋人でもなければ、あのリヨウが俺を愛しているワケでもない。

実際、言葉にされた事は無いし。

リヨウ自身も、学校では俺を友だちと言うし。

だが、友だちでそうなるだろうか。

あのキス、時折だが変な風に盛り上がってしまう時があつて、その場合は俺が逃げているが、あのまま行ったらどうなるのだろうか。

そ、想像したくない。

何を考えてアイツは俺にあんな事を……。

くそ、何で俺だけこんなに深刻に考えているのに。

これでリヨウだけが気楽に日常を送っていたら、俺はどうにかなくなってしまいうさうだ。

「……リヨウからのログイン？」

ポケットのスマホが震動する。

取り出して見ると、リヨウからのログインだった。

開いて見れば。

『みんなで江ノ島観光、海老煎餅うま』

ミキリ、とスマホが軋む。

気楽そうだな、こいつ。

真面目に働いているのではなかったのか。今日の晩飯は絶対に出してはやらないし、キスだってしない。

しかし……それにしてもだ。

写真を見ると、画像の端に揺れる金髪がある。

これは、虹夏のトレードマークでもあるサイドポニーに違いない。しつかり者の虹夏も一緒という事は、バイトを抜け出したりしたワケではないのか。

取り敢えず、『もつと美味そうに食え』と返信。

ん……喜多さんからも、ロインだ。

『先輩っ……これから神社で先輩のコトお願いしちゃいますねーっ！（階段の画像）』

……俺の事って、何だ？

無病息災か？

勉強についてか？

よく分からないが、いずれにせよ背景にある長く続く階段は厳しそうで、そこまで苦労して自分ではなく俺の事を願ってくれるとは良い後輩だ。

……………ん？

階段でくたばってるピンクジャージがいる。

これまさか、ひとりか!?

明らかに疲弊している、救援に向かうべきだろうか。

でも、コレって江ノ島だよな。

もしかして、結束バンドで観光しているのか。ならば虹夏や喜多さんが介抱するか
ら、俺の助けなんて不要かもしれない。

うん、仲が良いんだな。

えーと、『ありがとう』と返信。

お、虹夏からもロインか。

『エスカー楽ちん』

『でも、少し運動しなきゃなー』

『今度さ、ちよつと二人だけで運動しない？強化トレーニング週間、みたいな！』

コメントも明るい。

見ている和むが、なぜ俺まで運動させようとする？

最低限の体力は学校の体育とバイトで養われているので、さして問題は無いんだ。
でも、普段からお世話になつてるしな……。

もし虹夏がトレーニングを始めたら、少しだけサポートしてみよう。

うん、まあ無難に『頑張ろう』と返信。

みんな夏休みの終わりを、楽しんでる。

俺はライブを見た以外、特にイベントで外に出たりはしていないな。

うん、というか……誰にも誘われてねえ!!?

と、友だち居ない。

俺も何処かへ行くべきだろうか。

でも、一緒に行く人間がいらないから寂しくなるだけではないだろうか。

どうせなら遠出……キャンプするか。

夏休み前に取った原付免許があるし、店長にシフトの都合とかで伝えたら「使わなく

なったヤツあるから、良ければあげるよ」とか言ってくれたから手段としては可能だ。

いつか出来ればと、キャンペーン用具は三月に揃えてある。

貯金がゴツソリ削れたのは、通帳見て背筋凍ったけど。

……行っちゃおう？

一人でキャンペーンとか普通らしいし。

今月は映画も取り寄せてないから、バイト代や貯金も含めて余りあるから交通費は問題ない。

……

夏休みは終わるけど、エンジヨイしてやる。

幸い、来月の初旬は店長にメチャクチャ懇願されて三日くらいの連休がある。

……やってやるか！



夏休み明け初日。

俺は学校の机の上にて、以前意気込んで買ったキャンプの心得を説く本を再読していた。

アウトドアへの挑戦。

出来れば万全の姿勢で挑みたい。

道具が揃っているとしても、道具は使い手がしっかりしていなければ機能を発揮してくれない。俺自身の心構えを作る必要がある。

本来なら、家でじっくり読みたかったが……我が校は初日からしっかりと授業をするので、予習などもしなければならなかった。

バイトと勉強で時間を取られる以上、授業の合間の休憩時間にて確保する他ない。

「あれ、前田くんキャンプ興味あるの?」

昼休憩の時間だった。

虹夏達に誘われた昼食を断り、手早く食事を済ませて再び読んでいたところに、クラスメイトの女子から声をかけられる。

俺の前の席に座る子だ。

名前は、前園さん。

「前園さんもキャンプするの？」

「うん、するよ」

「実は俺、この週末にしようと思ってて。でも初心者だから最終確認みたいな」

「えーっ、本当に？身近な人でキャンプに興味ある人いなかったから嬉しい！分からない所とかあったら聞いてね。先輩として教えちゃうから！」

「頼もしいな」

何てことだ。

まさか、先達がいたとは。

アウトドア系は、雑誌などで初心者にも易しく丁寧に教えるよう書いていて助かるが、しかしどうしても実際に赴かないと分からない苦労という物があるという。

それを楽しむのもまたキャンプの醍醐味だが、やはり知っていて損は無いだろう。

先達の知識は、そういう面で貴重だ。

「何処のキャンプ場にした？」

「えっ、三日前までに決めれば良いかなって……」

「駄目だよ！せめて一週間くらい余裕持った方が良いよ？まあ、割と前日にパツと決めるタイプもあるけど、初心者ならそれくらいしなないと」

「そ、そっか」

「良かったら、お勧め教えようか？」

「助かる。移動手段は原付バイクあるんだけどさ」

「ホント？なら、この——」

前園さんが張り切っている。

肩を寄せて、彼女がスマホで検索したマップデータを俺にも見えるようにしてくれた。た。

よほど同好の士を得た事が嬉しいのだろう。

俺は彼女の話に耳を傾けた。

話を聞いていく内に、心底自分が準備不足である事を痛感した。彼女は夏のキャンプにも精通しているらしく、俺が失念していた部分の問題を指摘したり、その解決策を教えてください。

こ、これが……頼もしさ……！

「そう。ここに常連のおじさんがいるんだけど、たまにご飯くれて優しいんだよね」
「へー、親切なんだな」

しかも、話が面白い。

キャンプ場を見て行く過程で、自分が行った時に体験した話も織り交ぜてくれる所為か、すらすらと内容が入ってくる。

素晴らしい体験ができるのか、キャンプって。

「——つと。ざつとこんな感じだけど」

「いや、凄い為になったわ」

「先輩として、今後もキャンプに興味を持ってくれるようにサポートしないとね」

「素晴らしい先輩に出会えた」

「そっかー。とうとう仲間が出来たか」

前園さんが喜びを嘯みしめるように頷く。

俺も内心では感動していた。

この会話、なんか友だちっぽい！

凄いで、趣味を通じて繋がる友達って俺にはあまり居なかった。小説を貸してくれる陽キャ君や初めての友達虹夏も同じ趣ではないからな。

なんて貴重な人材だ。

趣味友だち第一号・前園さん!

「今まで一人だったからなー」

「一人キャンプも楽しいんでしょ?」

「他の人たち見ると、やっぱり誰かと一緒にやってみたってのもあるんだよね」
「ほう」

「あ、そうだ!」

ぱん、と前園さんが手を叩く。

何か名案でも思いついた風だ。

「もし予定が合ったら、今度は一緒——」

「へー!一郎くん、キャンプに行くんだ!良いなー、ちょっと私も興味あるかも!」

「私が家に居る時はやめてね」

前園さんの名案発表を遮って、虹夏とリョウが出現した。

ちよつ、邪魔ですつて。

前園さんの声が聞こえなかつたんだけど。

虹夏は前園さんと俺の間から速やかに退いてくれ。後ろから首に腕を回して耳元で

囁くりヨウについては、吐息で耳朶が痒いのでやめて欲しい。

急な登場に、前園さんも驚いているようだ。

顔が引き攣っている。

「あの、前園さん。何て言ったかもう一回——」

「一郎くん、何処に行く予定なの？」

「美味しい土産を期待してる」

「えと……前園——」

「免許取ってただね！ちよつと憧れちゃうな——」

「なら今度から私の送迎も出来るな」

「前園さん、後の話はロインでやろうか。連絡先交換しようぜ」

俺は立ち上がって前園さんと連絡先交換を始める。

ここでの会話は、もう諦めた。

謎に俺のキャンプ話へ凄まじい勢いで興味を抱き始めた二人がいると、全く話が進まない。こうなったら、会話の場を別で設けよう。

れ、連絡先交換……友だち……！

ロインに登録された連絡先の数が48人……す、すごいぞ……！

スマホを眺めて歓喜に震える。

「ま、前田くん」

「ん？」

「が、頑張つてね……色々」

「ああ。アドバイスして貰ったから、頑張れそうだ」

「……うん、頑張つてね！」

前園さんが笑顔で去っていく。

……前の席なのに、何で教室を出ていくんだろうか。他クラスの友だちにでも会いに行くのかな。

「一郎くん。話を遮っちゃってゴメンね？」

虹夏が微笑んでいる。

謝罪は別にいいのだが……。

話を遮ってしまった事に対する罪悪感などを全く感じない愛らしい笑顔だ。

彼女の内心が全く分からない。

「でも私、寂しいよ」

……。

……。

……。

………何が？

たつぷり思考したが、全く分からない。

一緒にいた彼女を置き去りにして話題を膨らませていたとかではなく、そもそも会話すらしていないのに寂しいとはどういう事だろうか。

リヨウがいるから、そんな気分になる筈は無いだろうか。

てか、そろそろ背中から退け山田。

「ご、ごめん？」

「本当に思ってる……？」

「え、え？ いや、も、勿論。不快にさせたなら謝る……そんな積もり？ は無かった」

「……………」

「ごめん。何で俺が批難されてるかマジで心当たりが無いです」

正直に白状した。

いや、突然こんな事言われて分かる人いる？

俺がただ愚鈍ならそう言ってくれ。

俺の謝罪に、虹夏が黙り込む。

一体、何を思っているのだろう。

互いに言葉が出ずにいる中、沈黙を破ってリヨウが口を開く。

「私は虹夏と同じ気持ち」

「リヨウ……?」

「虹夏は自分がインドア派だから一郎がアウトドアにハマるのが寂しいんだよ」

「成る程、リヨウにも分からないんだな」

「的外れもいいところだ、黙っててくれ。」

「虹夏……」

「ごめん。最近、一郎くんが喜多ちゃんとかぼつちちゃんと仲良いの見てて焦ってて

……」

「は、はあ」

「ほんと、ゴメンね……?」

「う、うん?」

え、俺が悪いのに謝罪された?

もう何が何だか分からない。

最近、俺の周囲の女子について不思議が多すぎやしないか。喜多さんの独特な言い回しといい、リヨウのキスといい、虹夏のこの言動………これって、何かの災厄の予兆だったりするのだろうか。

俺が喜多さんやひとりとは仲良しだと虹夏が焦る?

それは嫉妬してて、もしかして俺に恋してる?……は、ふざけてるよな。真面目に考えないと失礼だ。

もしかして、俺に自分の事をベストフレンドだと思っていて欲しい……とか?……これもう違うか。

……はっ!?

まさか、自分の方が喜多さん達と仲が良いって言いたい……ワケじゃないよな。それだと、前園さんとの間に入ってきた行動が意味不明だ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……マジで、どういう事?

この膠着状態をどうにかして欲しい。

まだ昼休憩の時間は残っていて、この自分たちでは破り難い雰囲気縛られ続けている。

こうなったら——頼りたくないが、オマエしかない。

……山田ア!!

振り返ると、リヨウがふと笑う。

「お腹いっぱいになってきた」

一生寝てろ。

ライブは後より前が疲れる

日直の仕事で私——伊地知虹夏は残っていた。

リヨウも待たせている……：というか、勝手に待っているんだけど、退屈な時間を過ごさせるのは可哀想なので急いで終わらせた。

それにしても、疲れたな。

夢に近づく道のり、その進捗は捗々しくはない。

流石に喜多ちゃん揃った辺りに思い描いていたくらい上手く事が運んだ事は無い。実際に、まだ次のライブも未定だ。

でも、不思議と焦りは無い。

初ライブも失敗に終わるかと思ったら、ぼっちちゃんが窮地の最中にある私たちをヒーローそのもののように音で救ってくれた。

たった十人くらいの客員数でも笑顔にできた。

だから、次のバンド活動にも前向きに取り組める。

ぼつちちゃんとりョウも、あれから止まる事なく新曲の作成を続けているし、喜多ちゃんも練習を怠らない。

うん、順調って言えば順調！

なら……この胸のモヤモヤは、やっぱり……。

私は胸に手を当てて考える。

脳裏に浮かんだのは一人の少年だ。

今は同じクラスで、去年から目で追ってしまい、関わるようになってからはつい気分が浮足立つ。

些細な会話だって嬉しい。

今日は特に。

『あの、虹夏……』

『どうしたの？』

『き、今日さ……古文の課題を家に忘れちゃって。お願いだけど、ノート写させてくれな
いか……？』

『た、大変だね』

『頼む。——助けてくれ』

助けてくれ。

彼からその言葉を聞くと、背筋がゾクゾクする。

堪らなく嬉しくなって、私は何でも叶えてしまう。

私がノートを差し出せば、凄く嬉しそうにしてくれる顔を見た時なんか、そのまま抱き締めたくなった。

……余談だけど、忘れたと思いきノートは誤ってリヨウが自分のバッグに入れていただけだったので事なきを得た。

彼に頼られる、それが凄く嬉しい。

私にあの目が向けられている時がドキドキする。

でも、何でだろう。

最近、喜多ちゃんやぼっちちゃん……特にリヨウばかりで、私を見る瞬間が少ない。距離感が無いけど、それが不自然には見えない。

それを見るとチリチリと胸が焼かれるように痛くなる。

できる限り、アプローチを仕掛けていた。

リヨウみたいに家に入り浸ったり、抱き着いたりとか大胆にやらないと駄目なのか。

い、いやでも一郎くんが嫌がるのはいけない。

ちゃんと誠実に、手段を選んでいかないと。

でも、それじゃ遅いのかな。

二人の親密さは去年の比じゃない。

それが顕著に見られるのは、今日のノートの一件でのやり取り。

『っ、おい！ノートに涎垂らした？』

『あ、本当だ』

『何してんだよ……』

『多分、した時のやつだと思う』

『う、わ……マジかよ……恥ず』

そんな一連の会話が あった。

ノートを閉じるや顔を赤くして悶える一郎くんの反応も怪しい。

リヨウは嬉しそうにした。

ノートの涎、って何？

寝ている一郎くんかリヨウが垂らしたなら分かるけど、『した』ってどういう意味なのかな。

思考するほど解らなくなる。

うんうんと頭を悩ませながら歩いて教室に辿り着く。

考えても仕方ない。

一郎くんは恥ずかしかがってたからどうかと思うけど、リヨウなら正直に答えてくれそうだし、直接尋ねてみるのが近道だ。

教室で待っているだろうし、早速訊こう。

私は扉の取手に手をかけて――。

「一郎。いっよ」

リヨウの声がした。

扉の小窓から、室内の様子が見える。

窓枠に腰掛けたリヨウの前に、一郎くんが立っている。

……何で、そんな、顔、近……？

混乱する私に気付かず、二人は会話をしている。

リヨウの角度からは私が視界の隅にでも見えて可怪しくないので、慌てて一度小窓から身を退く。

ど、どうして。

気になってしまつて、再びこっそり覗く。

「ほ、本当にやるのか……？」

「うん」

「と、トランプゲームで負けた罰ゲームにしては重すぎないか？てか、家でもよくない？」

「敗者に口無し」

「調子乗ってるなあ」

イライラしている一郎くんの声だ。

け、喧嘩……なのかな。

いや、罰ゲームっていうから、これから何かするんだろう。

「てか、本当にコレ罰ゲームで良いのかよ」

「え。いつも私からだし、こういうのもアリかと」

「いや、でも恋人でも無いのに——」

「あと、罰ゲームにしないと小心者の一郎には多分出来ないだろうから、丁度いい。他にもやりたい事は、またゲームで勝てばよし」

「突き落とすよ？」

なぜかリヨウは挑発的な態度を取る。

一郎くんも煽り耐性が低いのか、喧嘩を買って出た感じで動き出した。

彼の片手が、リヨウの右頬に添えられる。

その瞬間から、甘い緊張感が教室の外にいる私にまで伝わってきた。リョウが目を閉じる。

一郎くんはそれを見てプルプルと震えていたが、やがて彼女に向かって自分の顔を近づけていった。

「ほ、本当に良いんだな？」

「二郎にして欲しい。……それくらい、私には『価値』がある」

「そ、そう、か」

え、待って、え？

な、何これ。

二人は何をしてるの？

私は唾然として、二人がゼロ距離になったのを見詰めるしか出来なかった。

リョウの手が、一郎くんの服を掴む。

びくりと彼の体が跳ねて、慌てて離れようとするのを止めている。

数秒か、数分か。

そのままだった二人が、やっと離れた。

一郎くんは力が抜けたように、直近の机に崩れ落ちるように突っ伏す。

「ど、どうだ……罰ゲームは完遂したぞ」

「……思いの外、下手……」

「俺、何やってんだろう。何か泣きたくなってきた」

「そろそろ虹夏も戻ってくるから、元気だしなよ」

「窓から飛ぶ覚悟は出来たか？」

項垂れている一郎くんを見下ろしながら、リョウは微笑んでいる。

それを見て、私は踵を返した。

頭が真っ白になって、校内をそぞろ歩く。

教室から遠退いて、でも嬉しさとか悲しさとかは無い。

ただただ無感情だった。

何で歩いているかは、分からない。

ただ、何かがぶつぷりと切れて——そこで足は止まった。

「手段なんて選んでたら、遅いよね」



私が、
変わった気がする。

今日はSICKHACKのライブ当日。

この日は必ず空けておくのが去年から習慣化した俺——前田一郎は、早くもライブハウスに到着していた。

その名も、『FOOLT』。

SICKHACKの活動拠点になっている場所だ。

まだ開店前なのだが、俺は迷わず中へと進んでいく。

本来なら、この時間は関係者以外立ち入り禁止だが、不思議にも俺は入れる。幸か不幸か、きくりさん関連で迷惑を被っているし、彼女をライブハウスに届ける時もあったのでスタッフ側にも顔が通じていて立ち入れるようになった。

みんな優しくして気のいい人たちだ。

どうせ、きくりさんがまた二日酔いとかになっただけで、それを予見した『専用きくり装備（水、家で作った蜷の味噌汁を入れた水筒、酔い止め……etc）』をバッグの中に備えてある。

志麻さんの血管がブチ切れそうだから俺が頑張らないと。

「失礼しまーす……」

「あら、一郎ちゃん」

「あ、銀さん。こんばんは」

「こんばんは。今日もライブ観に来てくれたのね」

俺の目の前に一人の男性が立つ。

外見は三十代で、パンクロックを意識したその長身を包むファッションとピアス、初見なら絶対に近付くのを避ける厳つい印象を受ける外見の割には女性的な柔らかい対応をしてくれる不思議な雰囲気を持ち主。

この『FOLT』の店長こと吉田銀次郎さんだ。

愛称は銀ちゃん、だが……俺はそこまで距離を詰められないので銀さんと呼ばせて頂いている。

「ライブ前に、きくりさんのコンディションを整えようかと」

「あら。毎回ごめんなさいねえ……」

「いえ。それで、肝心の本人は……?」

「まだ来てないのよ」

「え、リハは」

「もう終わってるのよ」

「えーっ」

まだ、来ていない……だと？

バンドマンにとつて、どれだけリハが重要かを志麻さんが懇切丁寧に説いてくれた。

それを欠かす事は、かなり危ういとまで言っていた。

リハ無し……正気か、きくりさん。

しかし、何処に行つたのだろうか。

折角用意した味噌汁などが無為になつてしまう。

どうしたものか。

彼女がまた酔い潰れていたのなら、ライブが出来ない。しかし、骨の髄までバンドマンなのかあれだけ呑んだくれでもライブに来ないなんて事は志麻さんに聞く限りでは無かつたそう。

仕方ない、待つか。

「出たわね、廣井姐さんの腰巾着！」

アあ？

不名誉な呼称に、俺の怒りが沸点間際まで上昇する。

明らかに俺を指した蔑称だった。

呼ばれ始めたのは、俺が『FOLT』に通うようになってからで、そんな呼び方をする人間は一人しか思い当たらない。

声は背後からした。

だから、俺は後ろに——振り返らない。

断固として、そちらを向かない事にした。

こういった相手の気持ちを損なうような輩に対しては、取り合わない事が重要だ。

バイト時の客ならば仕方ないが、今回の俺は客だ。

反応する必要性は皆無。

「な、何よ！無視するなんて良い度胸ね」

振り向くものか。

このままSICKHACKの二人へ挨拶に行こう。

そうすると、何故か疲れた顔の銀さんに肩を叩かれた。彼がちよいちよいと後ろを指

差すので、仕方なく避けていた方向に視線を運ぶ。

「ゆ、許さない……！」

「はいはい。悪かったよ」

「ち、ちゃんと頭を垂れなさいよ！」

「そういうの、パワハ——」

「ちっちゃい違いわよ！私がそんな事するワケないでしょ。私は節度あるバンドマンなんだから」

泣きそうになっていた少女が、漸く俺が反応したとあつて毅然に振る舞おうとし始める。

やれやれ、本当に厄介なヤツだ。

切れ長の瞳とツインテール、本人の気質を表すようなタイトでスタイリッシュな服装をしている。気難しそうな険のある表情を常にしていて、俺にもやや攻撃的だ。

去年から『FOLTY』に通うようになって、同い年とあつて初対面から礼儀のない態度を取るのど苦手というか若干警戒している。

「相変わらず元気が良いな、ヨヨコ」

「ふん。生意気ね、イチロー」

腕を組んだ尊大な態度で俺を見る少女——大概ヨヨコに対し、俺も負けじと睨み返す。

「わざわざ推しじゃないバンドのライブに来たワケ？」

「いや、SICKHACK推しだけど」

「え?!い、一ヶ月前は私たちのライブを主目的にして観に来るって言ってたじゃない!?」
言ったつけ、そんな事。

ヨヨコのパンド——『SIDEROS』のライブは、結束バンドと同年代でありながらも完成度が高い。

正直、このライブハウスではSICK HACKの次に注目していると言っても過言ではない。

ただ、やはりきくりさんの演奏が聴きたくてここに来ているんだ。

本当にそんな事を言った覚えが無い。

いや、待てよ……たしか、先月……。

『いい加減にしてくれ、きくりさん』

『えー。いいじゃーん、私のライブ楽しめたでしょ？だからシャワーとご飯ー！』

『……分かりました。来月からはSIDEROS推します』

あ、あー、アレか。

あまりにもだらしなくて、それでも世話になろうとするきくりさんに呆れて、俺はそんな冗談を言った気がする。

それをいい感じに捉えてしまったようだ。

お気の毒に。

ヨヨコ自体は悪い人間ではないし、SIDEROSだって好きだ。……でも嘘はつけない。

「あれは冗談だ」

「あ……………そ、そう……………ふーん……………べべ、別に？アンタなんていなくても、私にはファンが沢山いるし……………」

ガタガタと青褪めて震えるヨヨコ。

少し言い過ぎただろうか。

しかし……………このヨヨコの態度に普段から苦しめられているから、お互い様という事で。

しかし、フォローもしておくべきか。

一見、気の強そうなヨヨコだが承認欲求が強くファンの数や盛り上がり方は勿論だが、ちょっとした否定の言葉にも過敏に反応してしまうほど弱い。

よほど期待されていると思っていたんだろう。

そうでないと知ってこの有様なら、このままライブで挫けてしまうかも。

それは、可哀想だ。

「でも、同年代として誇らしく思うくらいには『SIDEROS』も注目してるから。――頑張れよ」

少し気恥ずかしくてぶつきらぼうに言ってしまった。

ヨヨコは……静かだ。

し、失敗したか？

恐る恐る見ると。

「ふ、ふふん！アンタにそんな事を言われなくなつて、私は頑張ってるし!？」

ご覧の通り。

繊細だが、多少の褒め言葉で沈んだ心が急上昇もする。

扱いやすいのか扱い難いのやら……。

調子を取り戻すヨヨコが再び攻撃してくる前に離脱すべく、足音を消してその場を離れた。

、やれやれ、気が休まらない。

ライブ後はリヨウも家に来るって言っていたから、飯の用意もしなくてはいけないし……。

「始まつてもないのに疲れた……」

「あつれー？少年じゃーん！」

「ぐえ」

疲弊していたところに、胴体を横合いから突く衝撃を受けた。

そのまま体に巻き付いたのは、きくりさん。

やはり、見立て通りライブの日は必ず来る。

俺はきくりさんの肩を掴んで引き剥がそうとし——その背後にいる人物たちに気づいた。

こちらを蕩けた顔で見詰める喜多さん。

半泣きで俯いているひとり。

面白くなさそうな顔のリヨウ。

そして——無表情な虹夏。

「いんげんは、一郎くん」

もう、
疲れた。

一郎の味とは

SICKHACKのライブが始まった。

相変わらず演奏中のきくりさんはカッコいい。

諸手を挙げて歓ぶ観衆たちと同様に、素の彼女を知らなければ崇拜すらしていただろう。

いや、違うか。

俺は心の何処かで彼女を信奉している。

だから、擦り寄られても無碍に出来ない。

明確化できない俺の部分の鬱積を取り払い、たった一言で救ってくれる。

ホント……カッコいいなあ。

あの人のゲロ処理したの夢って話にならないだろうか。

それなら何も問題が無いんだよな。

きくりさんの所為でリョウに引っ掻かれる羽目になったし、思えば救われる分よりも

被る損害分の方が若干多い気がする。

どうしてだろう。

今のところ、碌なベージストと会っていない。

出会ったのが偶然そうなのか、それともベージストになる人間がそういう類なのか。最近では、もう分からなくなっている。

「いつもと違って、カッコいいねっ」

隣から虹夏の称賛する声がある。

可怪しいな、四人とは離れて観ていた筈だ。

振り返ると、傍にるのは虹夏だけだった。結束バンドの他三名は、周囲にも見当たらない。

わざわざ俺を探して近くに来たのか。

一人は寂しいと氣遣つての事だろう。

でも、実はライブを一人で楽しみたい派なので氣遣われても申し訳ないと思うほどには特に何も感じていない。

俺は黙って肯いて、きくりさんに視線を戻す。

すると、虹夏に服の裾を引かれた。

あの、ライブに集中させて？

これでも一ヶ月に一回ある特大の楽しみなのだ。

ただ無視するワケにもいかないので虹夏へと顔を向けると、ライブなんかそつちのけの俺を見上げていた。

たしか、結束バンドは俺同様きくりさん直々にチケツトを手渡されて誘いを受けたと経緯を聞き及んでいる。これ、観てないと失礼なのは？

「どうかした？」

「実は気になってた事があって」

「ん？」

この会話、続く感じか。

し、SICK HACKのライブが………。

内心では泣きそうになりつつも、涙を吞んで虹夏に応じる構えを取る。

「普段からリョウと仲良いよね」

「え、急に辛辣」

「あれ、悪口って認識なの？」

「だって………あれ？」

そう言えば、何でだっけ。

リヨウとの交流関係が良好と他人に思われると無性にイラツとするのは初めから変わらない。

でも、その理由が曖昧だ。

最初は即答できるほど気持ちは明確だった。

今は、霞がかつたように答えようにも言葉に出来なくて変な空気だけ醸し出してしま
う。

「でも、仲良いよね」

「良い……?」

「うん。だって」

虹夏が妖しく微笑む。

その表情に、ぞわりと全身の肌が粟立つ。

「——この前の放課後リヨウとキスしてたよね」

その瞬間、ライブハウスから音が消えた気がした。

きつと、俺一人の錯覚だろう。

まさか、この前のアレを目撃されていたとは。

罰ゲームなので、出来れば誰の目にも留まって欲しくはなかったんだけどな。

学校でやろうなんてリヨウの意地悪さえ無ければ、虹夏にも晒す事は無かった。

「お、お見苦しいものを」

「二人つて、ずっとあんな感じだったの?」

「あんな感じ?」

「隠れて二人でキスするやつ」

「え。まあ、家で何度か」

虹夏はずっと笑顔だ。

なのに、声色は妙に俺を緊張させるようで詰問されている気分だ。

なんだろうか。

まるで、悪い事でもしている気分にはさせられる。

「……やっぱり、付き合ってるよね」

「付き合ってるない」

「付き合ってるないのに、キスはおかしくない?」

「俺も最初はそう思ったけど、まあ、リヨウだからって理由で取り敢えず納得してる」

「納得って」

「そもそもアイツが何を考えてるか分からないし」

山田リヨウがそういう人間だと片付ける。

これが余計なストレスも無く過ごせる秘訣だ。

無駄に思考する分だけ疲れるだけだし、リヨウの言動が実はその場のノリである事が九割で真面目に付き合うだけ徒労になると身を以て知っている。

キスをするのは、リヨウだから。

恋人だから、ではない。

そういう事になっている。

虹夏は眉根を寄せて首を傾げている。

予想していた反応だ。

虹夏ならば理解してくれるという期待もあったが、寧ろこれが普通だろう。

俺は苦笑しつつ、ステージを見る。

あれだけカッコいい人も、私生活はボロボロだ。

それを知っているのは身近な人間だけだし、リヨウにだってそういう一面だってある。

幼馴染の虹夏が知らず、俺が知る一面。

「一郎くんは、リヨウが好き？」

「普通……かな。音楽を演つてゐる時は良い、私生活は本気で不快にはさせないけどイラツとはさせるからどちらとも言えない」

「……そっか」

本当に際どい。

実際、アイツにドキドキしたのは最初だけだ。

女子なのに距離感が近い事などに思わず動揺してはいたが、慣れてしまえば別に無問題である。キスをする際にも羞恥心は覚えるが、それはあくまで行為に対してであり相手に向けた感情ではない。

あれ……山田リヨウのファンに殺されそうな事してないか、俺？

虹夏の表情は、まだ納得していない風だ。

理解には苦しむだろう。

俺も赤の他人だったら間違ひなくそちら側だ。

しかし、そうか。

「虹夏には悪かったと思う」

「え？」

「え。幼馴染が男とコソコソ何かをやつてるように見えたら不安に思うのは当然だよな。余計な事したと思う」

「……………そうじゃ、ないよ」

そうではない？

思いの外ドライなのか、虹夏は。

そうでないとするならば、俺という男自体を懐疑的に思っているので、幼馴染に何か良からぬことをしていると勘ぐっている…………とか。

成る程、濡れ衣も甚だしい。

俺が静かな怒りに燃えていると、虹夏が肩を寄せて来る。

「私ね、一郎くんが好きだよ」

……………え？

一瞬だけ頭が真っ白になった。

好き、って…………あれ、だよな。

いや、でも勘違いという線もある。最近虹夏だって何を考えているか読めない。

「好きって」

「男の子として、好きだよ」

「……………」

「どう？びつくりした？」

にしし、と虹夏が笑う。

これで驚かない男がいたとすれば、そんなヤツは男をやめた方が良いと思う。

計画的に虹夏を墮としに行くような人間だから、彼女の面倒見の良さを利用し、将来的にヒモになろうと画策しているクズに違いない。

いや、そんな事は今どうでもいい。

虹夏が…………俺を好き？

いつからだろうか。

去年とは立場が逆転している、という事か。

もし、去年まで片想いをしていた俺が聞いたら飛び上がって喜んでいた。

でも、マジで…………何で俺？

「いつ、から？」

「…………実は、去年廊下ですれ違った時から」

「…………ん？擦れ違っただけ？」

「一目惚れ。私も驚いたな」

……ちよつつつ、と、待て。

似たような話を聞いた、というか体験したような……。

あ、俺だ。

俺も虹夏に一目惚れしたんだよな。

もしかして、運命だったのでは？それを俺は取り逃したという事か？

いや、どちらにしても今の俺の気持ちは……陽キャ男子に指摘された通りだ。

恋と錯覚した憧れ。

いま彼女に应えるモノが、無い。

「気づかなかった？」

「いや、うん。そもそも本格的に他人と関わり始めたのってバイトとか始めた去年だから、マジで人が分からないというか……」

「そうだよね。そういうところも好き」

「大丈夫?？」

割と心配になる趣向だった。

俺とは違い、彼女の気持ちは本物なのだ。

何だか、本気で申し訳なくなる。

ならば、誠心誠意——今ある気持ちで応えなくては。

「あの、虹夏。俺は——」

「だからね、これからも頑張るんだ」

「……へ？」

「バンドも頑張るけど、一郎くんへのアピールは今以上にやっていくね」

「あ、えと」

「それに」

虹夏がくすりと笑う。

そして、こちらを見た瞳に。

「恋人じゃなくてもキスできるならさ、私もやりようがあるよね。——何でも」



俺の全身が、
恐怖に震えた。

……結局、ライブには集中できなかつた。

虹夏の告白で思考が全て持っていけなかつた。

果たして、俺なんかの何処に一目惚れする価値があつたのだろう。

……もしかして。

もしかして。

もしかして、俺は誰かにそう思われるだけの価値が元々備わっていたのか。

いや、でも父親には棄てられた。

親戚にも悪霊みたいに扱われた。

でも、本当に……？

俺は、もしかして価値ある人間なのかな。

「ん、まさか」

玄関の方から鍵の音がした。

間もなくして、居間へとリョウが現れる。

「ただいま」

「オマエの家じゃないよ」

「ご飯食べたい」

「ライブ後に結束バンドで夕飯、っていう流れにはならなかったのか？」

「お金が無かったから虹夏のくれたポテトだけ」

「素敵な晩ご飯だったんだな、可哀想に」

俺は立ち上がって台所へ向かう。

要は、今すぐ飯を作れという催促だ。

羨ましい。

今のコイツは悩みが無さそうだ。

豚モモ肉に火を通しながら、俺はちらりとソファアに座って映画を観始める彼女の姿を盗み見る。S I C K H A C Kのライブが良い刺激となったのか、随分と楽しげだった。

流星はきくりさん。

バンドマンとしての仕事の腕前は凄い。

今度来た時は、しっかりと饗してやろう。

ひとりもライブ後に合流した時は、凄く高揚した顔色だった。でも、その後になんか暗くなっていたのは少し気がかりではある。

それに比べて、喜多さんは周囲の盛り上がりと同調してかなりハイになっていたな。みんなと楽しめる、というの俺には無い羨ましい部分だ。

炊いた白米を椀に盛り、豚モモ肉でえのき茸やオクラを巻いた物をリヨウの前に置く。

後は大量に余っていたひじきの煮物、味噌汁を出す。

早速手をつける彼女の横で、俺も同じ物を食べた。

虹夏の事で頭を悩ませていたら、すっかり夕飯を食べ損なっていたのである。リヨウと同時にするのは奇妙だが、何だかいつもと同じような感じがして落ち着く。

映画は『天使の○れた時間』。

相変わらず、リヨウはチョイスが良い。

勿論、面白いからと思った物を置いているのだから当然なのだろうけど。

この映画のように、俺も去年から虹夏と想いが通じ合っていた別の未来とかを歩んでいたら……。

「一郎」

「ん？」

「何か悩んでる？」

「……別に何も」

「普段お世話になってるかもしれないから相談には乗るよ」

「お世話になってる自覚が薄い」

駄目だ。

コイツがいるとどんな悩みも矮小な問題に思える。

まあ、これで良いか。

こういう時間があるから、別に今は恋愛とかどうでも……………。

「そういえば」

「ん？」

「虹夏に一郎が好きかって訊かれた」

「どう答えたんだ？」

「ご飯が美味しいって答えたよ」

「そのオクラで喉詰まらせちまえ」

俺の印象は飯だけか。

若干イラツとしながらも、納得してしまふ。

あるはずも無いが、逆に山田リヨウもそういう感情があつたと知つたら、俺はいよいよ

よ穏やかな日常を過ごせなくなる。

どうすれば良いんだか。

「好きかどうかは分からない」

「……………」

「恋愛とか、そういうのは今どうでもいいし。……一郎とは、落ち着くから一緒に居る」
「ふーん」

「一郎との関係に名前とか付くの、不自由な感じがして嫌だし。だから適当で良い」
「適当って？」

聞こうと思って振り返ると、リヨウもこちらを見ていた。

「知り合いでも、友だちでも、恋人でも、家族でも……一緒にいられるなら、一郎が好きなので良いよ」

……。

周囲からしたら、曖昧なままで通すのは中々に迷惑なのではないかという考えが頭を過ぎったが、確かにその方が楽な気もする。

俺が好きな関係性、か。

こうして選択肢を与えているようで、その実あまり自由は無い気がする。俺がどう決めたって、結果的にはリヨウの選択にズルズルと引っ張られるのだ。

優柔不断、と言われれば否めない。

リヨウが望む形とは何だろうか。

一緒にいられるなら、と言う。

知り合いがいつまでも一緒なのは違うし、友だちでも節度がある。恋人も常に一緒なワケでは無いから、家族だろうか。

……どれもじっくりこないな。

箸を置く音ではつとずる。

リョウが完食したようだ。

当然ではあるが、一つも残さないところは素直に偉いと思う。

俺は食器を下げて、台所へ運んだ。

「……どうした？」

「一郎はさ、虹夏が好き？」

「……………」

唐突だな。

「去年まではそうだったけど、今は友だち」

「……………」

答えを聞いた後、リョウが目を細める。

そうやって含みのある反応ではなく、しっかりと言葉にしてくれないと不安になるひとりだって、何処か以前と変わっている。

バンドを始めた事で成長しているのだろう。ただ、単純に成長と形容して良いのか疑念が残る事も屢々あった。

駄目だ、頭が働かない。

「虹夏は、良い子だよ」

「それは知ってる」

「一郎が優しいことも、臆病なところも知ってくれてる」

「臆病って……その通りではあるけど」

「でも、一つだけ知らないんだろうな」

リョウが少しだけ笑った。

まるで、勝ち誇ったような笑み。

「一郎の味、とかさ」

知られちや困ります。

嘘じゃない、誤解だ

「文化祭ライブ？」

朝食のパンを食べながら俺は尋ねる。

俺の私室を使つて着替えを終えたりヨウが首肯した。

これから午前のバイトで起きはしたのだが、何故か休日はいつもなら昼過ぎに起床する彼女も活動を開始している。

その怪奇さの理由を訊けば、秀華高校の文化祭だそうなの。

確かに、そんな日だったか。

ひとりが絶望した声で語っていた気がする。

台風の日 of ライブ以降、頻度は低いがひとりと通話する事が増えたので、リョウ程では無いが近況は把握していた。

くそ、失念していた自分が恨めしい。

こんな日に予定を入れてしまった。

学校で結束バンドのライブだって？

そんなの、是が非でも観に行きたいに決まっている。

まあ、そもそも文化祭は知っていてもライブがあるとはまでは聞いていないので、仕方ないと言えばそれまでではあるのだが。

「朝から憂鬱な情報だな」

「ライブは明日」

「えっ、明日なら空いてる！」

「今日は、ぼっちのメイド服姿を楽しんでくる」

「何て??？」

聞き捨てならない情報に振り返る。

ひとり、の……………メイド服？

牛乳で満たされたコップを、危うく握り潰しそうになった。どうにか踏み留まり、努めて平静を装いながら質問する。

場合に依っては——秀華高校、破壊する。

ひとりを見世物にしゃがって。

ライブはひとりの夢だから良しとしよう、だがあのご尊体で客商売をしようなんて傲慢だ。

いや……………大丈夫か？

段々と心配の方が膨らんでいく。

ひとりはバイトを始めたとはいえ接客業が苦手だ。

そんな中、特に視線を集める衣装での活動なんて平時よりも心身共にダメージが多い。

公衆の面前で瀕死状態になるのでは…………？

「安心してよ、一郎」

「え？」

「そうならない為に私たちという助っ人がいる」

「余計不安にさせるヤツは助っ人と呼ばない」

全く信用ならない。

寧ろ、オマエはそのひとりを見てエキサイトする側の人間だろ。

懐疑的な視線を送る俺に、自信満々の笑みを返すリヨウ。バイトなんてしてる場合じゃない、と思うが外すワケにもいかない。

終了は一時、そこから秀華高校に直行するか…………？

「来るの？」

「当たり前だろ。虹夏や喜多さんならともかく、オマエは不安要素でしかない」

「一郎、明日のライブだけど」

「……何？」

「今回も、この前みたいに変な団扇作ったりしてる？」

変な団扇、とは？

ライブ後、見返したらアレはあれで力作だと実感したのだ。

ライブに意気込む俺の感情と朝食を奪った山田リヨウへの怒りのマリアージュ、そのすべてが見事に具現化されていた。

何なら気に入って部屋に飾っている。

変という一言で片付けられるのは業腹だ。

「ああ。今晚も頑張ろうと思う」

「……」

「何だよ、リクエストでもあるのか？」

「うん。じゃあ、一つだけ」

「……？」

リヨウが自身を指差す。

「私に向けたヤツだけにして」

意外なリクエストに、俺は思わず顔に渋面を作る。

聞きようによつては、随分と傲慢な要求だ。

団扇を作ろうと思つたのは、文化祭ライブの存在を知つた今なのだが、その時点で結束バンドの皆を応援するイメージが浮かんでいた。リヨウのリクエストは、それを封殺する形になる。

たしかに、山田リヨウが推しだけど……。

だが、今回は少し事情が違うんだよな。

だつて――。

『私ね、一郎くんが好きだよ』

告白があり、更には返答を聞かず今後さらにアピールすると息巻いている虹夏の面前でリヨウ個人に限定した応援をするというのは、正直に言つてリアクションが想像したくないほど恐い。

初めて見たんだぞ、虹夏のあんな顔。

刺激したらどんな目に遭うか分からない。

「……か、考えとく」

「嫌だ」

「えっ」

「一郎——」

「ぐう、っ……！」

リヨウの継るような声、希う眼差しが向けられる。

本能が直視してはならない、と反射的に体が両耳を手で塞ぎ、目を瞑って体を背ける。いけない。

ダメ人間に付け入る隙を与えてはならない。

俺は節度のある男だ。

決して、リヨウのみを優遇するなんて出来な……でき……で……い、今更の話か？

ちら、と薄く目を開く。

がっちりと視線がリヨウと合う。

その瞬間、最初から脆くはあったが心に張った防壁がみるみる溶けていくのが分かる。

俺は力なく頷いた。

「ふっ。一郎は本当に手間を掛けさせる」

腹立つ!!!!!!

折れてしまった自分が心底憎い。

勝ち誇ったリヨウの反応が残酷な現実を突き付けてくる。

こうなれば、一か八かだ。

リヨウが恥をかくような内容にしてやろう。……というのは流石に意地が悪いし、他の面々にリヨウ激推しと思われるのも恥ずかしいので別途に結束バンド全員に向けた物も用意しよう。

我ながら意思の弱い人間だと思う。

「それじゃ、私に行くね」

「はいはい。ひとりをあまり困らせるなよ」

「そんな事はいつもしてない」

「……この前、ようやく借金を返済したらしいな?」

「あう、っ」

「知らないとも思ったか」

気まづげなリヨウの背中を玄関まで押す。

しかし、ここで指摘したものの数時間後にはケロッとしているのが山田リヨウだ。

説教したって無駄なので、早く追い出すに限る。

「虹夏たちにも迷惑かけるなよ」

「うん」

「いつつオマエの事で虹夏とは相談し合って——」

「一郎」

玄関で靴を履きながら、リョウが呼ぶ。

まだ何かあるのか。

うんざり思いながらも、彼女の声色がいつになく多少真剣味を感じたので耳を傾ける。

「——私の、だよね？」

何が
???



バイトが終わったので、
急いで秀華高校に向かう。

着替えを終え、店長たちに挨拶をしてから店を出た。

もう既にひとりがりリヨウの魔手に捕まっているのではないかと思うと、普段は発揮されない分どころか自身でも把握していない未知数の脚力が溢れる。

それもこれも、ひとりの為。

脳裏には醜い想像が浮かんでいた。

メイド服姿で涙目のひとり、その傍では何やら唆す悪人面のリヨウ……ああ、何て鮮明に思い浮かべられるんだ！

ひとえに山田リヨウの性格面の悪さに起因する！

走れ、一郎！

ここで終わってもいい、ありったけを！

着いてリヨウの罠を阻止できたら死んでも良いから！

「君、少し待ってくれ」

加速姿勢に入る直前、肩を掴まれた。

悪い想像に沸騰していた頭が一気に冷静になり、慌てて急ブレーキをかける。その拍子に肩の上の手を払う形になってしまった。

俺は振り返って、制止をかけた人物を見る。

革コートを着た、整った目鼻立ちの顔に仏頂面を貼り付けた男性である。

街を歩けば、誰もが振り返るイケメンだった。

ひとりへの心配が無ければ、俺も二度見していただろう。

「何か御用でしょうか？」

「前田一郎くんで合っているかな？」

「……あ、はい」

「いま急いでいるようだけど、優先すべき用事があるなら後にする」

ゆ、優先事項だけど。

でも、こちらも重要案件な気がする。

話す前に確認を行うという事は、俺個人に用があつてわざわざ訪ねに来た人だというのが察せられる。俺自身の記憶に無いので会ったことも無いだろうし、きつとこの男性が突然押し掛けただけだ。

相手にするには怪しい。

でも、親戚の文化祭……という理由で断るのは、この俺を慮って自身の予定をずらす寛容さに失礼な気がする。

く………すまない、ひとり………！

俺は足を止め、渋々と彼と真剣に話を始める。

「いえ、慌てていただけなので」

「遠慮はしなくていい」

「……その、親戚の子の通う学校で開催された文化祭を見に行くつもりで」

「親戚……？」

男性の顔がわずかに曇る。

俺の言葉を聞き、怪訝な眼差しに変わる。

「それは、母方の？」

「いえ、違います。……あの、あなたは？」

「……話しながら歩かないか？ 君もその文化祭に行くつもりだったんだろう。良ければ、その道中に自己紹介と来た経緯について話させてくれ。要件は……また時間を取るようです悪いが、別の時に」

「は、はあ……」

文化祭まで付いてくるのか、この人。

知らない人と並んで歩くなんて特大ストレスを文化祭前に味わう羽目になるとは。

ただ、無表情だが申し訳無きは声から伝わる。

この男性は非常識人では無いが、急いでいたのに行き道でも話をさせてくれとは図々

しいところもあるな。

仕方なく俺が承諾した事で、並んで歩く。

……仏頂面の大人って怖い。

俺も教室では普段から表情が少ないから、少し近寄り難かったと陽キャ男子から聞いてはいるけど。この人と違って、イケメンでは無い上にそんな感じだからただの怖いやつという認識だったらしい。失礼な。

「それで、あなたは？」

ともかく、この男性の素性が分からない。

ストレス緩和の為に、少しずつ敵か味方かも探らなければいけないので自分から質問した。

「私は来栖郁人。君の実母の兄、つまりは叔父だ」

その一言で、思わず足が止まる。

「……………は？」

自分でも間の抜けた声だと思った。

見上げた先で、男は淡々としている。

ただ、こちらを見た瞳は予想通りだというように特段動揺の色が無い。

「知らないのも当然だ」

「え、叔父……」

「昔から留学していた。妹の結婚式にも参列し、彼女が事故に遭って再び帰国した時に一度だけ君に会っている。——が、まだ赤子だったからな」

「……」

頭が追いつかない。

つまり、この男は親戚だ……酷い方の。

母方ならば、昔俺を冷遇したり未だに嫌がらせの手紙を送ったりしている連中である。表向きは絶縁しているのだが、どうしてその親戚が大胆にも会いに来る？

「あの、何で俺に会いに？」

「それは、君が文化祭を楽しんだ後……にしたいが、まず言わせて貰うと謝罪だ」

「へっ、謝罪??」

「私一人が頭を下げたところで済む話ではないが」

それは、本当にそうだ……。

でも、今さら何で？

「今まで、君についての情報が私に伏せられていた」

「え」

「これでも家ではかなり期待されていてね。結果、親戚問題などが私の仕事に迷惑をかけるような処理されていたらしい。妹の葬式時に君を預かろうと申告したが、それも遠慮された」

「……………」

「他に預かり手が見つかったと聞いて安心した……………が、久々に帰国して目の当たりにした家や親戚の態度と、君への風評で大体を察した」

「はあ……………」

「この前も、母が君宛に手紙を書いているのを途中で発見し、その内容を見て確信した。手紙を取り上げたら、見た事もない形相でヒステリックに叫んでいたがね」

「うわ」

聞きたくない情報が次から次へと。

俺が思わず顔を顰めると、男も顔を険しくする。

「すまない、不快にさせた」

「ええ……………まあ」

「妹は愛されていたからな。だからといって、寧ろ忘れ形見にする仕打ちではない」

「……………俺のこと、憎くないんですか？」

「妹が守った命なら有り得ない感情だろう」

それこそ愚かだ、と男が鼻で笑う。

これは、俺に好意的な人間と判断して良いのだろうか。

今まで見てきたタイプとは一線を画している。

俺に配慮し、反応を見て逐一謝罪もしてくれる。

星歌さんや店長以外で稀に見る、出来た大人だ。

「今まで、すまなかつた」

「……あなたに謝られても」

「手遅れであるのは間違いない。むしろ、心配もせず十数年間も君の様子を聞かなかつた私も彼らと同類だ。前田家とも去年から連絡を取っていたが、それでも気付かなかつた辺り私は度し難いほど鈍いらしい……というのも言い訳か」

「……」

「ただ、私はこれから日本で過ごす。償いにもならないことは承知しているが、困った時に頼る一つの手段として認識して欲しい。今後一切の嫌がらせを封じるのはまだ難しいが、ここに来る前に色々とおちらに言っておいた」

「……どうも」

「こんな風に道すがらで話さず、しっかりと頭を下げ謝罪すべきだが……君の時間を

取るのも悪いし、詫びの品と言って荷物を増やすのも迷惑だしな」

男が片手の紙袋を持ち上げる。

……何か包装からして高級感が溢れていた。

手遅れだし、何も報われていないけど……俺を心配する人間がいたんだな。

それが、まさか叔父だとは。

「文化祭でデートの予定なんだろう？」

「えっ」

「前田夫妻に聞いたよ、ガールフレンドがいると」

「あー、はい（それは勘違い……）」

その勘違いが嫌な所まで伝播していたとは。

リヨウの面倒臭がりな結果だが、否定したところで無駄なのはあの二人の反応

で知っているので訂正はやめておこう。

親戚の来訪とあつて鬱屈とした気分だったが、それが案外敵ではないと分かってスト

レスも少ない。

それに、この人は悪くないみたいだし。

むしろ情報封鎖されながら、帰国後に俺を案じて自ら動く辺りは善良的と言える。

「目的地は、あれか？」

「はい。秀華高校です」

「そうか。なら、邪魔するワケにもいかないので私はここで失礼する……と、コレが連絡先だ。連中からまた何か攻撃があつたら知らせてくれ」

「あ、ご丁寧にどうも」

男と……叔父と連絡先を交換した。

あれだけ嫌悪していた親戚の連絡先を登録する自身の現状に呆れつつも、去年までならばこのストレスだけで発狂していたかもしれないと成長を感じて感慨深くなる。

これは、リヨウで鍛えられたな。

自分一人の生活だったら危なかった。

誰かと一緒に居続ける、誰かの世話をする、誰かと関わり続けた結果、ストレスに強くなったのだ。

ありがとう、リヨウ。決してオマエを許さない。

「……賑わっているな」

「ですね」

校門の前に立って、俺たちは思わず感嘆の息を漏らす。

下北沢高校とはまるで活気が違う。

あちらは研究テーマみたいな物が多くて、催し物というよりは発表会なので目の前の

賑いと比較すれば少し味気なく感じる。

ひ、ひとりはこの中で……。

駄目だ、再び心配でどうにかなりそうになってきた。

「じゃあ、私はこれで」

「あ、来栖……じゃなくて郁人さん」

「ん？」

「この後の予定は……？」

「特に無い。一晩中罵られながら頭を下げる覚悟で来ていたがこの状況だ、謝罪は日を改めるとして帰るつもりだ」

「……良ければ、家に泊まりませんか？」

「……それは、良いのか？」

「ここまでご足労頂いたのに今のだけで帰すのも失礼ですし」

恐らく、この様子だとホテルも取っていないだろう。

叔父……郁人さんを一晩泊めるくらいは問題無い。

それに、折角わびの品を持ってきたのにそのまま帰すというのは可哀想ではある。この人に対して自分の中で悪感情が無いのは不思議だけど。

「……なら、お言葉に甘えて。私も君の話が聞きたい」

「文化祭後は多分解散になるので、五時か六時に……住所は後で連絡します」
「ああ。訪ねさせてもらうよ——と?」

郁人さんが突然横に視線を向ける。

「あ、やつぱり一郎くんだ!」

聞き覚えのある声に、思わず体が強張る。

虹夏とリヨウ、そして喜多さんがこちらへと駆けていた。

うわ、みんなお洒落。

すぐ傍まで来た彼女たちが、郁人さんに気付いて小首を傾げる。

「え、と……?」

「あー。こちら、俺の親戚の来栖郁人さん」

「初めまして!」一郎くんの友だちの伊地知虹夏です!」

「山田リヨウです」

「はい、喜多郁代です!」

「山田リヨウ……?」

リヨウの名に、ぴくりと郁人さんが眉を動かす。

それから、彼女に片手を差し出した。

「話は聞いている、一郎くんの恋人だと。——どうか、これからも彼と仲良くして欲しい」

微笑んだ郁人さんの一言に、全員が固まる。

リヨウだけは、特に気にする様子も無く彼と握手を交わした。

あ、ヤバイ……勘違いが変なところまで……。

ちら、と虹夏を見ると胸の辺りを押さえて「大丈夫、大丈夫」と自身に言い聞かせるように小声で呟いている。

喜多さんは……見ちゃ駄目だ。一瞬、顔を真っ赤にして俺に甘い視線を送っているのが見えたけど、きつと幻覚だ。

「あの、郁人さん……」

「ああ、すまない。私は邪魔なのでこれで——つと、そうだ」
踵を返そうとした郁人さんが、再びこちらに振り返る。

まだ何かあるのか？

既に関心がひとりに移りつつある事でうんざりしつつも、俺も足を止めて彼を見た。

「ありがとう。私は君が生まれてきて、生きていてくれて嬉しかった」

それだけ言うと、郁人さんは去っていった。

いや、あの……爆弾だけ置いて行かないで下さい。

校門前の空気が冷たい。

俺はそつと気付かれないように虹夏を見て——がちりと本人と視線が合う。

「——嘘つき」

殺してくれ。

身も心も、もう保たない

文化祭で賑わう秀華高校。

皆が家族や友人と楽しむ空間が学校全体に展開され、どこもかしこも明るい光で満たされたような空気感になっていた。

その最中を、俺は——独りで回っていた。

肩身が狭いが、それ以上に胸が苦しい。

本来ならバイトを昼上がりで出て、まだ昼食も取っていないから道の脇に出た露店などの出し物にある美味しい物に目移りしている筈なのだ。

それでも食指が動かない。

『今は一郎さんと一緒にいたくないかなっ』

素晴らしいほど愛らしい笑顔で言われた。

虹夏の鋭利すぎる言葉の刃が痛い。

先日、告白を受けた時にリヨウとの関係を尋ねられて交際していないと否定していた矢先、今日現れた親戚——来栖郁人さんにまで波及していた誤解が最悪の形で虹夏たちに伝わってしまった。

嘘じゃない。

ただの誤解。

でも、あの様子ではしばらく相手にしてくれない。

三人は現在、忽然と教室から姿を消したひとりを探し回っている途中らしい。

そこで俺も協力しようかと言ったが、すげなく虹夏に断られた。

やっぱり……俺の『価値』なんて……。

リヨウが「虹夏の事は任せろ」とか言っていたが、大本の原因はオマエが俺の親に誤解させた事だからな!?

そんなワケで、悲しく独り。

いつそ飾りでもいいから郁人さんでも呼んで一緒に回れば良かったか……。

とほとほと自分でも分かるほど前進する足は力が無い。

無理にでも、何か食べて力を付けるべきか。

「——あれ、喜多のカレシさん？」

ふと、そんな声が近くで聞こえる。

誰の話だ……？

喜多……という名前は、喜多さんと同じだ。まさか、あの喜多さんに恋人がいたとは。あれくらい素敵な女の子なら当然か。

さぞ恋人も鼻が高いだろう。俺みたいにあの奇妙な眼差しと妖しいキターン光線を放射されていないければ良いんだが。

好奇心で、俺は声の主と喜多さんの恋人を探す。

周囲を見回すが、それらしき人物が——。

探している途中で、肩を叩かれる。

振り返ると、秀華高校の制服を着た少女だった。

「もしもし？」

「は、あの？」

「前田さんでしょ。うちも聞いてるよ、喜多から」

「……………何て？」

「自覚無さすぎ、ウケる。喜多のカレシなんだからしやんとしなって」

……。

何を言ってるんだ、この少女は？

俺を指して喜多さんの恋人だと呼称しているのなら勘違いも甚だしい。前田なんて名前は意外と多……いや、下北沢高校でも同学年で俺しかいなかったな。

いやいや、だとしても……だ。

あの喜多さんが恋人持ちなんて友だちに嘘をつくワケが無い。……いや、ギターが出るってリヨウたちに嘘ついてたっけ。

いやいやいや、だとしても……だ。

流石に嘘だとすぐ分かるよな。

俺の困惑した様子に、少女も小首を傾げた。

「あれ、もしかして人違い？」

「ああ、うん。前田ではあるけど、喜多さんのカレシではないよ」

「あれ？つかしーな……写真と一緒になのに」

「写真？」

俺は益々疑問に思う。

喜多さんと写真なんて撮った覚えが無い。

やはり、人違いという名の前田違いなのではないだろうか。

誤解が解けたようで少しだけ安心した。

これ以上は勘弁して欲しい。

何せ、今は誤解という単語だけで体が過剰反応を示してしまうほどに最悪の状況下にあるのだから。

「まあ、人違いと分かった事で」

「そつか。ごめん、引き止めちゃって」

「いやいや。……とところで、昼を食べてないから何処か美味しい所とか紹介してくれない？」

「ナチュラルにナンパしてる？」

「いや、教えてくれたら一人で行くから」

それを聞いた少女は、暫し考え込むと。

「じゃあ、案内するよ」

「何で？」

「勘違いで引き止めちゃったし。フラフラ歩いてたところを見ると、結構疲れてたんじゃない？自分で探すよりは楽だし」

「そりゃ、有り難いけど……」

「ほら、ぼさつとしてないで歩く歩く」

背中を叩かれ、渋々少女に着いていく。

凄く助かるけど……名前を訊いていないな。

「そういえば君、名前は？」

「ん？佐々木次子」

「そっか。有り難う、佐々木さん。俺は前田一郎ね」

「前田一郎って……うーん……？」

人の名前を聞いてそんな反応しなくても。

道中、佐々木さんと話しながら彼女の目指す美味しい出し物の所へと歩く。

佐々木さんは喜多さんと五年近い交流があるらしく、かなり仲のいい関係のようだ。

最近バンドを始めたことも知っていて、明日のライブが初めて実物を観る瞬間になるらしい。

しい。

なるほど、普通はそうか。

泥酔したお姉さんを介抱したらその感謝料でライブチケットを貰って観に行ったなんて始まり方は流石に珍しいのかな。

話している内に、佐々木さんの足が止まる。

どうやら、到着したらしい。

見上げれば——め、メイド&執事喫茶……だと……？

ここって、たしかひとりのクラスの出し物ではなかっただろうか。
俺がちらりと隣を見ると、佐々木さんが黙って室内を指差しして入室を催促して
いる。

困ったな……後で虹夏たちも来るのに。

一緒に居たくないとか言われたし……。

「なに、恥ずかしいワケ？」

「そんなんじや……いや、確かに一人だったら入らないけどさ」

「仕方無いな。ほら、うちも一緒に行つたげるから」

ぐいぐいと背中を押される。

やだ、凄く強引な子。

でも、ホントにこういう所は少しだけ苦手なんだよな——。

それから数分後。

俺は執事服を着て、室内に立っていた。

意味が分からない。

経緯としては、室内へと来るなり「喜多ちゃんのカレシさんだつ」という誤解から話題になり、現在喜多さんがひとり搜索の為に出張っている事を伝えられ、その捜しているひとりと親戚関係であることを伝えて様子を観に来た旨を伝えれば「後藤さんの穴を埋めて欲しいです！」とかお願いされて現状に至る。

……いや、どういうこと？

俺は客の紙コップに水を注ぎながら考えた。

今日は災難続きすぎる。

結局昼飯も食べられず、バイトを終えたのに働かされ、虹夏たちには嫌われ、未だひとりに会えずじまいだ。

世界が俺を嫌っているのかもしれない。

コップに注がれてるの、水じゃなくて本当は無自覚に俺から迸っている涙ではないか？

「有り難うございます、前田さん！」

「あ、有り難う。俺もそろそろ客として——」

「喜多ちゃんたちが戻るまで宜しくお願いします！」

「ああ、うん、そう、チクシヨウ」

人の話を聞かない子達だ。

これで悪意が無いようだから質が悪い。俺が飯を食いに来たのに働かせるなどかここで言ったら、何故か悪者になりそうな雰囲気になるだろう。

もうヤダ、家に帰りたい。

ごめんよ、ひとり。

俺はもう、駄目みたいだ。

「い、いつくん？」

……まさか。

耳にした途端、清水が体に染み込んだような清涼感を得る声に俺は全身で振り返る。

教室の入口にて、メイド衣装に身を包む愛の形——ひとりが佇んでいた。その目は、信じられない物を見るようだった。

や、やつと会えた！

俺は彼女の方へと歩き、その愛を全身で感じるべく両腕を広げて——直後、腕を畳んで直立姿勢で固まる。

「二郎くん、何してるの？」

ひとりの背後で、虹夏が小首を傾げていた。

あ、危なかった。

衝動的にひとりを抱き締めるところだったが、如何に家族とて抱擁を交わす姿を見た虹夏の現在の状態だと、確実に悪い方向へ誤解が深まるだけだ。

「い、いや。ひとりの穴を埋める為にバイトしてます」

「(ぎ) (ぎ) (ぎ) (ぎ) めんなさい!!!」

事情を話すと、ひとりが平身低頭する。

別にそこまで謝罪する事では無い。

「良いんだよ。俺の人生はひとりの役に立てさえすれば——」

「……へえ」

「あつ、でも仕事は投げ出したら駄目だぞ？」

ひとりのメンタルケアを行おうとしたら、冷たい虹夏の声がして咄嗟に言葉が翻ってしまう。

ごめんな。

オマエを甘やかしたいけど、今は無理だ。

圧倒的強者がこの場に居合わせる以上、俺の意見は有って無いようなものだ。俺の立場は弱く、虹夏が白と言えば白、黒と言えば黒になる。

さて……うん、ひとりは無事に戻ってきたみたいだし、これで俺も執事を辞められる。もうこの店を出て、他の場所で昼食を取ろう。恐らく、ここにいと生きた心地がしなくなる。

虹夏は問題ありのままだし、リヨウは論外として、新たな問題は……。

「あ、喜多ちゃん……ごめんね、カレシさん勝手に働かせちゃつて！」

その一言に、また空気が冷たくなる。

だから、誰が誰のカレシだよ!?

佐々木さんも合流した喜多さんに事情を説明しているが、俺としては聞いている内にしばしば首を捻りたくなる内容だった。

この会話の流れから察するに、喜多さんの交友関係では本当に俺が恋人として流布されているようだ。

その理由は一体何か。

男避け……は喜多さんなら相手にしっかり応えるべくそんな事はやらないだろうし、見栄……を張るについては陽キャならではの何かがあるとも言える。

駄目だ……全く意図が読めない。

「ごめんなさい、先輩♡」

「うん、ホントにな」

「きやつ、辛辣」

「反省しろよ」

割と自分でも冷たい声が出たのだが、何故か悦ばれた。

喜多さんの尋常ならざる反応に慄きつつ、さつきから室内の空気を緊張させている要因に対して、愛想笑いを浮かべておいた。

先ほどから瞬きを忘れた少女——伊地知虹夏。

その片手は、俺の腕の皮膚を抓っているが……指先の圧力が強すぎて痛い。

「虹夏、あの、違うから」

「うん。一郎くんは嘘つきだから、付き合ってるのも嘘だつて分かってるよ。嘘つかないといけないくらい追い詰められてるんだよね、だから私が助けてあげる」

うん、もう、ごめん。

さつきから何を言っているか分からない。

俺を追い詰める要因の一つが虹夏、キミでもある事を忘れて欲しくない。

一体、いつからこうなったんだ。

駄目だ、今日はストレスが凄まじい。

いっそ、このまま家に帰って映画を観て寝たい。あ、郁人さんもいるからそれは明日以降になるかな。あー、でもライブがあるから息抜きは出来ない。

俺は視線を虹夏の隣に運び、一縷の望みをかけてリヨウに救いを求めた。

「この中で私を選ばれるとか照れる」

山田リヨウ、滅すべし。

夜八時。



帰宅した俺は、遠路遙々この下北沢を訪ねた親戚の来栖郁人さん——と、何故か山田リヨウと共に食事を取っていた。

静かで落ち着いた雰囲気居間を流れている。

三人とも、ここに昔から住んでいたかのように異物感が無い。リヨウに限っては慣れている事が俺の油断と妥協の積み重ねであると痛感させられて事実を認めると若干の苛立ちを催す。

そして、俺の日常を知りたい郁人さんには、結果的に今日の事も話題となつて伝わってしまった。

「それは、災難だったな。……本当に」

無表情のまま郁人さんが俺に労りの言葉をかけてくれる。

本当にそう思っているのか疑問だが。

隣にいる元凶の一に関して言及した話し方だったのだが、果たして山田リヨウについて彼が思うところは無いのだろうか。

俺とリヨウは恋人ではない——と一応は伝えた。

その事実、意外とあっさり受け止められたりされて俺も驚いた。まるで、初めから

そうだと気付いていたように郁人さんは冷静だ。

「君の母もそんな感じの人間だったからな」

「……母が？」

「彼女の場合は、猪だったりもしたが。君の実父である男だって、そんな彼女の甘い部分にすり寄ってきた男の一人だ」

「……まさか」

「山田君が君と一緒にいる理由は、家に招いていると聞いた時点で大体そんな関係だと察していたよ」

全て最初から見抜かれていたらしい。

は、ハズカシイ……。

隣では、豚肉とピーマンのオイスターソース炒めを平らげて一息つくリョウが幸せそうな顔をしている。本当にこの状況を理解しているのか是非尋ねたい。

……待て。

じゃあ、何故あんな虹夏たちの眼前で恋人だなんて言ったんだ。

「確認の為だよ。反応で判るからな」

「な、なるほど……」

「ただ、他の少女まで尋常ではないリアクションをするとは思いましなかった」

本当だよ。

何してくれたんだ。

今日は結局食事も出来ず、何故か結束バンドがスタジオ練習中に虹夏の家で彼女が作った昨晚の残り物を食べさせられるという謎の状況だったんだぞ。……美味しかったけど。

端的に今日を一言で表現するならば、明日のライブにガチで行くか迷う地獄だった。

「一郎が料理上手なのもお母さんの遺伝ですか？」

「……料理は本人の練習量と経験からなる。そこは遺伝ではなく一郎くん自身の努力の賜物だ」

「私の一夜漬け能力と一緒だね」

「果てしなく不名誉だな」

俺の料理がオマエの特殊脳と同一視されてたまるか。

どうやったって、リヨウの能力は類を見ない奇天烈さである。天才と言えばそうなのだが、如何せん大き過ぎる代償ではないか。

俺の料理は努力の賜物、才能ではない。

俺の才能は……そう……何だろうか。

「母の遺伝と言える部分は、そう。私から見て目元が似ているところしかない」

「それ以外は父親似だと?」

「私は君を少ししか知らないから、形質的な事しか言えない。ただ、そういった君の人に好かれやすい、人が懐に入りやすいところは君の母と重なる点がある」

「……将来、俺はダメ人間に捕まる……と」

「まあ、君がそういう風に実父を悪し様に揶揄するのも無理は無い。ただ、山田君はそういう風には見えない」

「それほどでも」

リョウがしれつと自分の称賛として郁人さんの言葉を受け取る。

オイ、俺は将来も面倒を見る気は無いんだつて。

未来設計図として、将来も誰かと添い遂げる気は皆無だ。唯一の可能性として、その人生を支えるべく後藤ひとりに捧げるプランも有るには有るが。

郁人さんが椅子の背もたれに身を委ねて、天井に深い息を吐く。

「前田夫妻が家に一人残していると聞いてその部分は気懸かりだったが、友人に恵まれているようで何よりだよ」

「恵まれ……てます?」

「あれは不可抗力だ。あの伊地知という少女は、まだ挽回の余地があるが喜多君はもう無理だ」

こ、酷評だな。

実際、虹夏の機嫌の取り方は辛うじて分かるが、喜多さんについては何処から手を付けていいか皆目見当も付かないのが現実である。

こうして他人に指摘されると、胸にクるな。

「その点……君の話に聞く後藤ひとりは良いかもしれないな」

「そうですね、はい」

ひとりは無害。

ひとり単体からストレスを被った例が無い。

やはり、後藤ひとりは正義なのだ。……が、最近は俺が甘やかしている所為で成長を

妨げるのではないかと考えている。

だって、この前のライブもそうだ。

俺の知らない結束バンドとの活動——そこで、人見知りだったひとりはバイトを始め、さらに人前で演奏をするなど目まぐるしい進化を披露した。

俺は小さい頃からひとりを見てきたが、この数ヶ月だけでも明らかに今までと成長の速度も大きさも違った。

……離れるべき、だろうか。

ひとりは言っていた。

ひとりにとっての幸せも、俺にとっての幸せだと。

郁人さんも、俺が生まれてきて嬉しいと……俺の誕生を喜ぶ身内がいる事を知った。俺も前に、進むべきだろうか。

斜に構えてストレスから逃げ、人に由来する愛情などを軽蔑しなくて済むように。でも……流石に明日のストレスからは逃げたい。

虹夏と喜多さんに、これ以上失礼のないように対応して明日を乗り切ろう……。

「一郎」

「何だよ」

リョウが肩をつついてくる。

何事かと振り返れば、リョウが妖しく微笑んでいた。

「明日は私の応援、よろしく」

明日、
ダメかもしれない。

文化祭ライブ……の直前

本番の秀華高校文化祭二日目を迎えた。

結束バンドの面々にとって勝負の日でもある。本来なら彼女らが最も緊張する筈だが、出ていく時のリョウにそんな素振りは無かった。

逆に、俺は緊張している。

彼らのような感情とは少し違うかもしれない。

何故なら――。

「それは何だ？」

予定が無いので観に来た郁人さんに隣から問われる。

彼はまだ齢五歳となるひとりの妹――後藤ふたりを腕に抱えている。その傍では、既にかメラを構えた直樹さんと自作の団扇を両手に携えた美智代さんがウキウキと会場

の雰囲気を楽しんでいた。

郁人さんに指摘されて、俺は自身の手の中にある物——今回の為に制作した団扇を見る。

まず、一振り——『ケーキ食ったのオマエだろ』。

次に二振り目——『世界一、結束バンド』。

前者は、昨晚の事に由来する内容だ。

俺が大事に取っていたケーキを平らげて、風呂から出でいざ食さんと意気込んだ俺に対し、空の器を差し出して照れ臭そうに頬をかいて言葉無しの事後報告をかましてきた。

無論、簀巻きにして川に流そうかと考えたが明日のライブを見てからでも遅くはないと、決意表明として感情を団扇に込めて作った。

後者は……：結束バンドへ媚を売っている。

いま刺激するのは危うい虹夏や喜多さんへの安全策だ。

「おねーちゃんのライブだって！」

「楽しみだな」

「ふたりね、この為にいっぱい寝てきたんだよ！すごい？」

「うん、凄いぞ。偉いな、ふたりは」

「えへへへ、おねーちゃんが凄いの知ってるから観たかったんだよ！」
「……………」

郁人さんの腕の中でふたりがはにかむ。

その笑顔で俺のストレスが浄化されていく。

そっか、いっぱい寝てきたのか。

どうして皆、ふたりのように何の含みもない笑顔を見せてくれないのだろうか。寝不足なのか知らないけど、最近は周囲の誰も彼もが底意を匂わせるだけ臭わせて答えは教えてくれない不穏な反応ばかりだから人間関係に疲れ果てそうなんだ。

俺はふたりの頭を撫でて、その感触を楽しむ。

触れた部分から軽くなっていく気分だった。

ああ、このライブを楽しめそうだ……。

……いや、楽しめるかな。

最近、ライブと聞くと少し不安と寂しさを覚える。

それは、結束バンドがひとり成長させているからだ。成長は喜ばしいが、何だか救世主がもつと遠い存在になっていくようで苦しい瞬間があった。

前回のライブだって、そう。

ひとりの立ち回りに誰もが感動した。

俺もその一人だったが、心の隅では何処かで焦りにも似た感情が喚起された。

「そうだな……凄くなつていくな、ひとりは」

虹夏も活動に精力的で、喜多さんは元々集団で輝ける才能があるし、リヨウの音楽性は結束バンドの曲を聴いて重宝される力だと理解させられた。

俺には——彼らのようなモノが無い。

置き去りにされるようで、寂しく感じる。

「一郎くん」

「あ、はい」

「その顔は四人の前でやめた方がいい」

「か、顔?」

俺は自分の顔に手を当てる。

感情に引つ張られて、そんな情けない表情でもしていたのだろうか。

「四人のパフォーマンスに関わる。特に、伊地知くんには刺激が強すぎる」

「虹夏……刺激……?」

ふたりに鼻を抓まれて鼻声の郁人さんに注意された。

虹夏にとって刺激が強い、とは何だろうか。

取り敢えず、やめておくべきなのは確かだ。

今は触れ方を誤れば、何か破滅する予感があるのが現状の彼女である。少し顔に力を入れて、引き締める。

「どう、ですか」

「……喜多くんが悦びそうだな」

「今度は喜多さん……!?!」

「団扇は私が持つ。ふたりを抱いているといい、その方が落ち着くだろう」

団扇とふたりが俺と郁人さんと交換される。

すりすり胸に頬を擦り付けるふたりに、一瞬で自分の顔が緩むのが分かった。

そうだな、余計な事も後で考えればいい。

今はただ感覚で楽しめ。

それを、きくりさんが去年から教えてくれたではないか。乱暴ではあるが、それが最も膚で音を感じられる楽しみ方だと学習し、その為の体作りが完了している。

それはそれとして、ふたりが可愛い。

「一郎くん、遂にだね!」

「直樹さん、張り切ってますね」

「何たって、あのひとりの勇姿が見届けられるんだよ。地道に中学時代を練習に費やしたと言っていたあの子の言葉が……」

「ですね」

「ただの虚言では無くなる！」

「ですかね?？」

違う言葉を期待していた——てつきり、現実になる！と予想していた——ので、思わず駆けそうになる直樹さんの言い方に苦笑する。

そうだ、確かにひとりバンドを組むというのが夢だとも語っていた。売りたいというのはさておいて、それを目標の一つに設定していた。

今や叶っている。

では、今は何の為に——？

って、また考えている。ライブが終わるまではもうしないと決めたはずだ。

「楽しみですね」

「うん！来栖さんも、声上げてこう！」

「……おー」

「あらやだ、きつとライブが終わったら来栖さんもひとりのファンになってるわね」
若干テンションに差はあれど、もうライブを楽しむ態勢は整っている。

かつてない客数がある。

前回よりも、多くの人に彼女らの音が届けられる。

きつと上手くいく。

よし——待ってるぞ、リヨウ!

「はれー、アレ少年かな〜?」

それはそれとして、酒臭い。



壇上裏の空間で私——山田リヨウは、力を抜いてただライブの時間を待った。

ここでも、表側の歓声が聴こえる。

私たちのように音楽、他にも演劇が繰り広げられていて既に会場は学生たちの祭典様々の盛り上がりを見せていた。

他校でのライブ。

少し前までは、そんな舞台を考えもしなかった。

体育館の広さは、最大収容人数で『STARRY』を優に超えている。壇上から見る景色と客数は、まだ私たち『結束バンド』の知名度では集められない量だ。

これは良い宣伝になる。

……思えば、始まりは奇妙だった。

最初は、ぼっちの躊躇いである。

文化祭での演奏——学生のバンドマンならば、必ず夢見るやつだ。

ぼっちはそれに手を伸ばしたが、自信を失くして自分に歯止めをかけてしまった。郁代のやや強引ではあるが後押しがあつて出場自体は決定したが、それでも本人の懊悩は終わらない。

そんな折に、『SICK HACK』のベースボーカル——廣井きくりさんに誘われ、彼女のライブを観る事になった。

何かを気付かせたかつた彼女の行動が功を奏し、ぼっちも漸くやる気を出した。

それに触発されて、郁代も自らを本格的に磨き上げる作業に入った。ぼっちには内緒にして私と練習し、自分のギター演奏の力の向上を図り、以前よりも様になったのは確かだ。

そう、ここ最近は二人がめざましい成長を遂げている。

私と虹夏は、それを見守るスタンスにあつた。

変わった事は……特に無い。

上手くなった郁代と、ぼっちが最大限パフォーマンスを發揮できるように支えるだけ。

新曲三連発。

ギャンブルである事は否めない。

流行りの曲でもやって人心を掴み、それから新曲に耳を傾けてくれる空間を作るのも

悪くはない。でも、ここで勝負出来なければ、どんなライブだって無理だと言うようなものだ。

「リヨウ」

「ん？」

「リヨウも何か張り切ってる？」

「別に。でも、きつと最前列で待ち構えてるファンの期待には応えたいと思ってる」

「……そっか」

昨晚も団扇を作っているのを見た。

制作中は、何故か鬼の形相だった。そこまで私の応援に対して全力で臨むというのは、まあ悪い気分ではなかった。

団扇という事は、また表面に何か私に向けて伝えたい言葉があるに違いない。

前は確か……『愛してるリヨウ』だったっけ。

「一郎くん、リヨウのファンだしね」

「うん」

「リヨウは女子のファンもいるし、喜多ちゃんは昨日の学校とかバイト中の対応で人気あるって分かるし、ぼっちちゃんにも路上ライブの時のファンがいて……あれ、私は？」

「……………まあ」

「ドラム、カッコいいのになー」

虹夏が頬を膨らませる。

なるほど、拗ねているのだ。

結束バンドとしての活動歴は、未だ一年にも満たないし、ライブだってまだボーカルを揃えて一度きりだ。ファンの有無を気にするには早い。

でも、だからこそなのか。

この早い段階で、三人にはそれぞれファンがいる。

私としては、むしろ料理もできて気配りもして何事もそつなくこなす虹夏の事は凄いと思っているが。

「もっと頑張れば、私にも振り向いてくれるかな?」

笑顔で虹夏が尋ねてくる。

私は、それに肯いた。

努力が裏切らないのは、ぼっちのギターで分かる。合せの練習はまだただけど、ソ口になると驚かされる。

安易に肯定するのともうかと思うけども、虹夏は友だちだから私はせめてその意気込

みを挫かないよう肯いたのだ。

すると、一転して虹夏が笑みを深めた。

じりじりと、何だか項が焦げるような感覚がした。

コレは……焦り？

何でだろう。

「その内、増えるでしょ」

「んー」

「もつと宣伝すれば良いんじゃない？」

「……それじゃ振り向かないよ」

虹夏の視線が鋭くなる。

これは、ファン……っていうより、一個人に向けてのモノに感じた。

何だか、話が微妙に食い違っているような。

「虹夏……誰を振り向かせたいの？」

「あ、そろそろ時間だ！」

時計を見る、本当だ。

そろそろ舞台袖に移動しなくては。

張り切る虹夏と、準備を終えた郁代に続いて私も動いた時、視界の隅でまた一人の世

界に入り込んでだらしく笑っているぼっちが目に入った。

全員でぼっちの前に集まる。

「ぼっちちゃん、時間だよー」

「後藤さん、こんな時でも平常運転ですね！」

「頼もしい」

何か譫言のように呟いている。

「うへへ……売れて、いっくんとタワマン……」

その一言に、空気がひりついた気がする。

虹夏と郁代が可笑しそうに笑っていた。

「面白い夢を見てるのね、後藤さん」

「その時は私も一緒させて貰おうかな？」

ちよつと何を言っているのか分からない。

でも———そうか、売れたら私と一郎でタワマンっていうのもアリなのか。

二人が体を揺すって、ぼっちを呼び戻す。

正気に戻ったぼっちがはつとした顔で私たちを見ると、再び自分が妄想に耽っていた

事に気付いて猛省し始めた。

埒が明かないと見た二人が、両脇を抱えて舞台袖へと運んでいく。

大丈夫、いつもの調子だ。

みんな、この前のようにはいかない。

舞台袖に移動すると、一つ前の出し物——おそらく、この学校の軽音部らしき男子が流行の曲を精一杯披露しており、その彼らを鼓舞するようにペンライトを揮って客が応援している。

中々の盛り上がりだ。

昨日の状況で痛感していたが、やっぱり私たちの高校と違って自由だな……。

ここにきて緊張がさらに酷くなったぼっちを見かねて、舞台袖で虹夏が全員で手を重ね、気合を入れ合う儀式なんかを始める。

柄では無かったけど、仲間外れは嫌なので渋々と参加した。

いつせーの、で手が上に弾かれる。

気合を装填出来たのか、ぼっちもまだ強張ってはいるが一旦幕が下ろされ、客から隠れた壇上へと上がる。

さっきの軽音部の男子たちに見せつけるように、素早くセットを始めた……これが真のバンドマン。

きっと、幕が上がればすぐそこに一郎がいる。
どんな応援をしてくれるのだろうか。

『——続いてのバンドは、『結束バンド』の皆さんです!』

全員の準備が完了し、紹介の声がかかった。

私は手元から顔を上げ、ゆっくりと上昇し露わになっていく前景に目を細めた。
……いた。

一郎は、すぐそこに構えていた。

何だかぼつちに似た感じの人が傍におり、彼も小さな子どもを腕に抱えている。隣には、一郎の叔父さんが団扇を持ってぎこちなく振っていた。

出た。

さて……今回はどんな……。

『ケーキ食ったの、オマエだろ』

『世界一、結束バンド』

……ふーん。

私の、だけではないんだ？
あの言葉を忘れてるんだ？

「楽しみだ」

後で、色々。

ヒーローになるしかないのに

『——続いているバンドは、『結束バンド』の皆さんです!』

そのアナウンスに背筋が自然と伸びる。

幕が上がリ、少しずつ壇上に隠れていた四人の姿を衆目に明かしていく。

泰然と構える虹夏とリョウ。

中央でにこやかに手を振っている喜多さん。

やや強張ってはいるが、強い眼差しを壇上からこちらへと送っているひとり。

そこに、前回のライブのような気後れは感じない。

既に準備万端で構えていた俺は、まず不安になっているだろう後藤ひとりに向けて声援を送るべく、胸いっぱい空気を吸い込んだ。

安心しろ、ひとり!

この会場にも、オマエのファンはいるぞ!

「ひとり！頑張——」

「喜多ちゃああああああああん!!!」

哀しい事に掻き消された。

喜多さんの人氣が凄まじすぎる。

体育館中から響く声は、校内での喜多さんの人氣の程をこれでもかと証明し、外部の人間にも気付かせる。黄色い声援を受けて堂々と応じる喜多さんの対応もまたそれが慣れた物だと示していて人氣者の風格だ。

いや、舐めてた。

最近はやらしいキターン光線しか受けてなかったし。

恐いイメージしかなかった。

うん、コレが本来の喜多さんだな。

何か……ん……恥ずかしい……。

いつも出さなくらい声を張ったのに、見事に出端を挫かれてしまった。

顔どころか全身熱くなる感覚がして口を閉じていると、心配そうに表情を覗き込もうとするふたりの眼差しを注がれて余計に恥ずかしい。

く、熱い。

ちよ、一旦ハーフタイム挟みませんか？

「おねーちゃん！頑張れー！」

ふたりが俺の遺志を継いだように声を上げる。

うん、嬉しい……嬉しいんだけど気遣われたみたいで脳が沸騰しそうだ。

でも、結束バンドのステージから目を逸らしてはならない。

羞恥心に堪えて顔を上げてみると、ひとりと視線が——……いや、なんか皆と視線が合う。何で全員こっち見ているんだ？

リヨウも、なんか不機嫌な気がする。

はっ……ま、まさか……団扇……!?

ちらりと横を盗み見ると、郁人さんが団扇を掲げている。リヨウ向けの物を高く、申し訳程度に結束バンド向けの方を持っていた。二つの団扇の高低差に、彼からも俺や結束バンドへの謎の配慮を感じる。

恐る恐る、リヨウに視線を戻す。

ちろり、と赤い舌が唇を舐めた。

ア、駄目だ。

帰ったら間違いなく処刑が始まる……。爪、キス、いやもしかしたら未知の……。ライブの楽しみ方、マジでどうしようかな。

「ひとりちゃん！」

ちよ、誰だ!?

ふたり以外にも俺の意志を継ぐ者が現れた。

声のした方には、なんと壇上に向かつて手を振るひとりファンの二名がいる。確か大學生と聞いていたが、わざわざ高校の文化祭ライブにまで足を運ぶとなると、いよいよ本腰のファンである。

俺も負けていけないな。

よし、声を上げ——て……………。

「ひと——り、リョウ。き、今日もオマエの音を聴かせてくれ……………」

リョウの視線に射竦められて声が裏返るだけでなく、内容まで翻ってしまった。

今、心臓を物理的に掴まれたような気がした。

気遣うふたりの視線に、笑顔を作って誤魔化しておく。

すまない、オマエの姉を応援したかったのに。

「うおーい。ぼつちちやあん、頑張れえ〜!……あ、見てみて、今日は特別にカッパ酒っ!へへっ、カッコいい演奏頼むよううええーい!」

酒臭い。

薄々気付いてはいたが、きくりさんが来ている。

一箇所を鼻を押さえたり、不審顔で見る人々の視線の先にきつといるのだろう。秀華高校に強烈な印象を刻むべき結束バンドよりもインパクト有りそうな事はやめて欲しいのだが。

高校でも飲酒をキメてくるとは、やはりロックを素でいく人間だ。型に嵌まらないところは、呆れを通り越してむしろ憧れてすらしまう。

でも、そういうのはライブでお願いします。

さしものひとりすら、他人を装うように視線を逸らして無視している。

正しい判断です。

……いやっ!?

リヨウに臆して素直にひとりを応援できない俺は、むしろきくりさんの大胆さを見習うべきか!

俺も酒を、駄目だ飲酒は……!!

何で未成年なんだ俺は……!!

「あれっ、ぼっちちゃん？何でむしすんの？きくりおねーさんだよ、オラオラー——ぐえッ!」

「てめえは！そろそろ！いい加減に！しとけ！」

「ぜぜ、ゼンパイ……キギブ、ギブギブ……かはっ」

きくりさんの悲鳴と同時に聞き覚えのある叱声。

ああ、店長……星歌さんも来ているのか。

道理で虹夏が凄いやる気になってるよ……ヤベ目が合った。後藤家は悪くないが、最前線で応援すると決めた自身の決断に後悔してしまう。

『あはは……。えー、私たち結束バンドは普段学外で活動しているバンドです。今日は私たちにも、みんなにとってもいい思い出を作れるようなライブにします!』

きくりさん達の行動に苦笑していた喜多さんが気を取り直し、結束バンドとしての進行を始める。

声に震えは無い。

その表情に焦りや不安は無い。

大勢の前でも物怖じせず話せるのは、単に彼女の見知った相手と見知った空間だからこそその安心感が、はたまた短期間ではあるがバンドマンとして培った物があるからか

……。

どちらにせよ、俺の知るいつもの彼女と違う。

妙な迫力のあるキターン光線も無い。

ギター一本、仲間を背に立つ一人として俺の目に映った。

『それで、もし興味があつたら……ライブハウスにも観に来てくださーい!』

「「きゃあああ! 喜多ちゃん!」」

「「喜多ちゃん頑張れー!」」

……いや、うん。やはり反響が凄まじすぎる。

これが、逆にひとりのプレッシャーになっていないか心配だが………つと?

肝心のひとは、少し目を離れた隙に会場の雰囲気の中でられて興奮しているのか頬を紅潮させ、その目がいつになく期待に似た光を宿し、仄かな喜色を窺わせる表情に変わっていた。

あれ……は、俺の見た事の無い表情だ。

……。

そうか。

ひとりは、やはり今までとは違うんだ。

名字に託けて俺に前を歩く事を強要するほど人前で不安と恐怖に震えるだけの彼女ではない。

変わった、んだよな。

……ああ。

『それじゃ、一曲目いきまーす！結束バンドで——』

俺も、変わりたい。

虹夏が頭上にドラムスティックを掲げる。

乾いた音を立てて打ち合わされたそのリズムを合図に、ひとりがまず動き出した。

彼女のギターに合わせて喜多さんが手拍子を行えば、喜多さんを慕う者たちが自然と呼応するように手を叩いて体育館内に一体感を生じさせる。

そして、間もなく喜多さんとリヨウが各々の音を奏で始めて『結束バンド』が始まる。この日の為に磨かれていた音が体育館の人たちの熱気に圧されず、それを呑み込むように響いた。

「凄……。」

喜多さんが笑顔で演奏をしていた。

前回のライブは悪天候などの不運が連続したり、初ライブなのに客の薄い反応という要素が絡んでスタートから顔が強張っていた。

だが、どうだろう。

今の彼女はこの場を楽しんでいる。

結束バンドを裏切ったと罪悪感で独り押し潰されそうになっていた時とは、まるで別人だった。今は純粋に、この音楽を楽しんでいる。

「――」

リヨウの方も、今日は調子が良い。

いつも聴いていた、あの安定感のある音色だ。

「あつ、やっぱりここにいた〜」

「げ」

「うえへへ、観に来てるなら言つてよ少年」

「今日は一段と大人の香りがしてますね、きくりさん」

「あつ、わかる？ 今日のお姉さんは一味違うんだよー？」

「ライブ集中して下さいよ」

「いや、先輩のところ居たら絞め続けられるから……」

絞め……本当に何してるんだ？

俺の訝しむ視線に、青褪めた顔できくりさんが苦笑する。

あ、臭い。

きくりさんは腕の中のふたりごと俺を包むように抱き着こうとしたので、慌ててふたりを郁人さんへと緊急避難させる。彼は器用にも団扇を持ちながら素早くふたりに受け止めてくれた。

これ以上の後藤家に対する被害やライブに集中できない事を考えると途轍もなく迷惑なので、体に巻き付いたきくりさんごと場所を移動する。

……後藤家への被害とか何とか考えながら、実はその足が最前線から離れようと画策していたり。

悪いが、至近距離で目が合う度に心臓が止まりそうだから。

「お、一郎もいたか。——こつち来いよ」

……………。

そそくさと人の間を動いていたら、星歌さんに見咎められてしまった。

善意で傍へと手招きしてくれている。

有り難い気遣いだが救いの御手ではなかった。

俺は涙を吞んで星歌さんの横に立つ。

「また一郎に絡んでるのか」

「えく？少年は私のですよー」

「おま、未成年には手を出すなよ……」

「大丈夫ですよー。少年がもう少し大きくなったら……ねー、少年？」

「後ろ向きに検討させて頂きます」

頼むからベーシストは俺の将来に無関与でいてくれ。

さて、気を取り直して。

改めて壇上を見上げると、移動した星歌さんの隣はひとりの正面になっていた。……きくりさんが飲み散らかした空きカップが壇上に置かれているが、コレはちゃんと処理

してくれるのだろうか。

……うおえ、臭ッ……!

「頑張ってますね」

「アイツらも練習積んできたからな」

星歌さんが我が事のように胸を張った。

相変わらず子煩悩ならぬ妹煩悩だが、その姿勢は微笑ましい。……と思えるくらいに、今日は俺も嫉妬したりしない心的余裕があるようだ。

さて、ホントにライブに集中しないと。

喜多さんは以前ほど手元のギターに意識を割かれず、顔を上げて観客の方を見ながら演奏できている。心做しか、腕を振るように弾いていたほど拙い演奏技術が手首から先だけで行うようになっていて、様になっているのと同時に成長が感じられた。

前回との変化が間近に見られるだけあって、グツとくる。

ひとりだって、まだ十全とはいかないがソロ以外が苦手だった技術が、しっかりとバンドの中に溶け込めるようになっていた。

はたと、一瞬だけひとりと視線が合う。

……あれ、何で不安そうな顔を?

「二郎?」

「……いえ」

ひとりの様子に疑念を抱く俺から何かの違和感を読み取ったのか、星歌さんの案じる声が出た。

取り敢えず何事もないように誤魔化した。

……ひとりにも、何事もないように祈りながら。

『——ありがとうございます！一曲目『忘れてやらない』でした！』

一曲目の演奏が終わる。

掴みは上々で、会場内も拍手喝采だった。

ひとりも乗り切ったかのように、一瞬だけ安堵の表情を浮かべて、すぐに顔を曇らせる。その視線は自身のギターへ、手はペグを弄っている。

やはり、何か不調だろうか。

んー、と至近距離できくりさんも何か唸っている。

耳元で言われると擦りたい。

「どうしました、きくりさん？」

「先輩、気付きました？」

「何となくな」

得心顔で星歌さんときくりさんが壇上を見上げている。この反応からして、違和感の正体は明らかに玄人にしか分からないというのが理解できた。気付いた事実があるのなら、素人にも共有して欲しいのだが……。

不安が募る最中、二曲目の演奏が始まる。

……駄目だ、ひとりの顔色がどんどん悪くなっていく。

明らかに焦っている。

「ちよ、きくりさん」

「ぼっちちゃん、ずっとチューニングが安定してない」

「チューニングって」

「まずまずの演奏が出来てるけど……」

チューニングが安定しないって……。

でも、聴いている限りそんな感じは……いや、俺では分からないくらいなのか。きくりさんもまずまずと称しているくらいには、素人の耳を誤魔化せる程度に何とかついでに行けているのかもしれない。

修整すれば問題無いのだろうが、始終ペグを弄る様子と酷くなるひとりの顔色から察するに、すぐ解決できる範疇のトラブルではないようだ。

ライブ中、というのがまた致命的。

「たしかに不調ではあるけど、このまま終わりまでいけば」
祈るしかない。

現状、気付ける人間にも限りがある。

アクシデントだと大多数に気取られなければ、本人のメンタル面が心配だがライブは成功という形に出来るだろう。

ひとりが不安視するのは、文化祭ライブの失敗。

せっかく覚悟を決めて挑んだ舞台を自らで台無しにする事が心を抉る事になる。今ここがかなりの盛り上がりを見せているからこそ尚更だ。

俺が混乱している間に、二曲目が終わる。

『みなさん、盛り上がってますかー!?!』

ラスト一曲前のMC。

リーダーとして、虹夏が観客に呼びかける。

『ラスト一曲前のMCなんですけど、ウチのベースの山田リョウ曰く、結束バンドのMCはつまらないそうで』

何言ってるんだ、あの寄生虫。

前日も観ていたから知っているが、虹夏のMCだって面白……おもし……おも……おも……お……お……まだまだ発展途上なんだ、これから面白くなるだろうが！

『全くMCに参加しないくせに、どの口がー!? って思うんですけど。面白いトークが出るようになるまで、ライブ告知だけにしときますねー!』

「くすくす」

ほら、ウケたぞ山田。

『つて、まだ次のライブ予定は決まって無いんですけど……もし興味がある、つて人がいたらボーカルの喜多ちゃんやぼっ……後藤ひとりちゃんに声をかけてみて下さい!』

虹夏の紹介に、体育館内が温かい拍手の音で満ちる。

何だろうか、この安心感に包まれる空間は。

皆が結束バンドを歓迎し、その音楽を称賛している。

だから、頼む、どうか。

♪

♪

♪

♪

——い、意外と盛り上がってる。……けど。

高まつていく熱気に、虹夏ちゃんも手応えを感じてかMCの声に一切の暗い色が無い。

今みんなの調子が良いのは確かだ。

でも、私だけ。

私だけ、小さな石に躓いている。

それは、体調的な話ではない。

ましてや、緊張感でライブが楽しめていないワケでもない。勿論、人前でもあるしかつてない程の人数の前で演奏しているのもあつて結構緊張はしているけど。

問題は、そこじゃなくて——楽器。

昨日まで何ともなかった1、2弦のチューニングが異常に合わない。

幾度となく修正を試みたが、二曲目の演奏中でもやはり失敗していた。

どうして？

『それでは聴いて下さい！——ラスト一曲『星座になれたら』！』

曲紹介と共に、正面を向いていたリョウさんと喜多さんが虹夏ちゃんと視線を合わせる。

く……何も解決していないけど、止めるワケにもいかない。

私も虹夏ちゃんの方へ向き、全員の呼吸を呼んで刻まれたドラムスティックのリズムを合図に、再び演奏が始まる。

……駄目だ。

演奏が始まれば、殊更に自分の発する音と感覚の齟齬が増す。

ちらりと視界の隅を、いつくんの顔が掠めた。

あ、不安そうな顔。

だめなのに……あんな顔させたら。

私が凄いつて、いつくんにも誇れるのは……私にはギターしかないのに。

ここで何も出来なかつたら、心配だけさせてしまう。

いつくんを、幸せにできな——!?

「あ」

ぶつり、と悲鳴が上がる。

転がる君に〇〇が降る

「あつ」

切れた弦が目の前で一瞬跳ねる。

う、そ——こんな事って。

普段なら、こういうアクシデントもロツクだと見栄を張って一笑に付したところだけど、状況が状況なので一切そんな余裕は無かった。

昔からの夢ではあつたけど、クラスメイトが「文化祭でライブやってたらカッコいい」なんて何気なくこぼした一言に釣られてまんまと参加したのが始まり。

厳密に言えば、一步手前で踏み留まつてうじうじと悩んだけど喜多さんが背中を押してくれて、店長さんやP Aさんが相談に乗ってくれて、お姐さんのライブで元氣付けて貰って、虹夏ちゃんやリヨウさんがライブでの立ち回りで私達の文化祭だからってソロパートまで作ってくれて……………。

みんなが、私のそんなワガママに付き合ってくれた。
みんなが、応援してくれた。

楽しみにして、お父さんたちやファンの二人、クラスの人たち……それにいつくん
だつて来てくれた！

もう、前のように不安な気持ちになんてさせたくない。

絶対、成功させなきゃいけないのに。

今日に限って、何で!!

「っ——！」

い、いや、まだ諦めるのは早い！

せめて、2弦のチューニングだけでも済ませれば何とか繋げる！

多少の変更は余儀なくされるけど、乗り切るしかない。

私は演奏の手を止め、2弦のペグを回——!?

あ、あれ。

回らない。

もしかして、故障!?

ここにきて、2弦も使い物にならないなんて事態に陥るなんて、運が悪いどころの話じゃない。

何で、どうして、いや、そんなことより、ああ、待つて、違う、取り敢えずまず、いやそれより、うあ、ぐうう………!!

一瞬、俯いた事で下にいるいつくんと視線が合う。

あ——また、不安な顔を、している。

だ、駄目だつて。

私がさせたいのは、そんな表情じゃないのに!

も、もうすぐソロが来る!

リヨウさんが企画してくれた、文化祭で私に華を持たせてくれる貴重な時間が……。せ、折角の文化祭ライブなのに……私の機材トラブルで全部台無しになる……!!

どうしよう……どうしよう……どうしよう……!!

駄目だ、もう終わつた。

ごめんなさい、みんな。

ごめんね、いつくん……私じゃ、やっぱり幸せに出来ないんだ……。

「え……喜多さん……う？」

予定にない、喜多さんの演奏。

う、上手い……私が教えていた頃よりもずっと成長してる。

でも、どうして。

「！」

「――」

刹那、喜多さんと視線が合う。

そっか、私の為に繋いで……諦めるなって励ましてくれてるんだ。

そうだ、喜多さんが諦めてないのに私が先に折れるなんて絶対にあっちゃ駄目なんだ。

探せ、何かないか！

即席でいい、多少の不格好でも今は許容する！

私の文化祭だけで、喜多さんとの文化祭で、結束バンドのライブなんだ！

私は手元に、壇上に視線を奔らせる。

この窮地を切り抜けられる微かな光明でも目に留まらないかと、必死に探って

.....。



ひとりのギターが発する些細な異変。

きくりさんや店長が察知した不安の種に胸が騒ぎつつも、俺はそれを顔に出さないよう努めつつ、壇上できくりさんが飲み散らかしたカップを回収していく。

大丈夫。

ひとりは頑張ってきたんだ。

こんなところで失敗するワケがない。

必ず報われる筈だ。

だって、ひとりが勇気を出して挑めばどんな事だって乗り越えられる。台風の日のラ
イプも然り、必ずひとりは成功に導く。

俺は心の奥底で、そんな言い訳を思いつく。

それが、甘い考えだったのかもしれない。

「あつ」

歓声と『結束バンド』の音に満ちた館内で、ひとりの息を呑む声はつきりと耳に届
いた。

今まで注視していたのもある。

だが、その声に無事を祈り続けていた緊張の糸が最悪の形で断ち切るだけの衝撃があ
り、俺もまた同様に思わず呼吸を止めた。

カップの最後の一つを掴む手が硬直する。

「ひとり——！」

演奏中、ひとりのギターの弦が一本切れた。

力無く垂れた銀の糸の終端で光がひらめく。

最悪——と呼ばざるを得ない。折角の文化祭ライブで前回よりも手痛いアクシデン
トだった。

音の調子が合わない、先んじて感じ取ったこの不調はまだ許容範囲に収まっていた
が、それさえも次なる事態のほんの兆候でしかなかったのだ。

ひとりの双眸が絶望で暗くなっていく。

白い肌に嫌な汗が滲んでいくのが分かった。

ひとりの悲痛な表情に、俺の体が動き出そうと前のめりになった。

演奏中に部外者が立ち入るのはまずい。

行動を阻止したのは、体に巻き付いたきくりさんの重さと、辛うじて息を吹き返した
泣け無しの理性だった。

無闇に手を出してもロクな結果を招かない。

そも、俺では対処できる話じゃない。

現に、体は動いたけど頭は空っぽだ。

何をしていいか、どうしたらいいかなんて考えは一切脳内に浮かんでいなかった。そこが、素人と経験者の違いだろう。

「……………（せめて2弦のチューニングだけでも）！」

ひとりの指先が迅速に動く。

損傷した1弦はどうしようもない。

替えのギターも無いし、張り替える手間暇を演奏中で行ったってかなり時間を要する。ならば、失くした可能性に固執せず残る不穩の種となる2弦だけでも修正しようとする行動に転じる。

でも、それでどうにかなるのか？

見ている俺は勿論、隣で異常を察した喜多さんが視線をひとりへと投げ、すぐに瞠目する。

その間も演奏は続く。

屈み込んで、即座にチューニングを始めようとしたひとり。

その動きが———またも止まった。

何があつた？

「ペグが故障してる」

「ペグ……?」

「弦を張る部分のやつだよ」

え、アレが故障って……え!?

それでは、もう直しようが無いじゃないか!

万策、尽きた。

ひとりが完全停止している。

俯いていても分かるほどに顔は青褪めていた。

「あれじゃ、2弦も使い物にならない。ソロ、無理だぞ」

「え、ソロ……?」

「あつ、いけね。ぼっちちゃんに秘密にしとけて約束してたのに」

きくりさんの顔が引き攣る。

え、ソロって……。

まさか、これからひとりの独奏シーンがあるって事なのか?——この状況で、このア
クシデントで!?

ひとりが……報われない?

楽しみにしていた夢の文化祭ライブをこんな事で失敗させて、一生分のトラウマとし

て刻んでいくのか。

そんな理不尽があつていいのか。

俺は、俺なんかは救われたのに？

「何で」

何で、ひとりにはこんな酷い仕打ちなんか……。

この状況が運の所為だというのなら、俺の物を全てひとりに費やしてこの状況を挽回してくれ。神の仕業だというのなら殴り倒してでも事態を好転させる。悪魔の罠ならば名前が記録から消えるまで滅してひとりを救済させる。

……頼むつて……誰でも良いから……ひとりに、そんな酷い事しないでくれよ……。

頑張ってきただけじゃないか。

誰かに迷惑かけたワケじゃない。

ギターで誰か不幸にしたワケでもないし、何なら人だつて救つてるじゃないか。

何で、こんな。

景色が真つ暗になるような錯覚。

ひとり本人が味わっている物に比べたら他愛ないはずなのに、途方もない絶望感に潰

れそうになる。

ふざけんよ、ホント……何で、ひとりがこんな目に………?」

「……何だ……?」

暗く沈んでいきそうだった意識を、掻き鳴らされたギターの音が叩き起こした。

顔を上げれば、いつになく険しい顔で力強いギター演奏を繰り出す喜多さんが目に入る。——この時は知らなかったが、後にバッキングという奏法の応用らしい。

喜多、さん?

え、凄い。

素人でも分かる技術力。

ギター、始めたばかりじゃなかったのか?

「う、上手……」

「喜多ちゃんのアドリブだね」

「アド……!?!」

きくりさんの冷静な解説に、思わず眼球が飛び出そうになった。

どうしてこのタイミングでアドリ……あ、まさか、ひとりのアクシデントに対応したのか？

唾然とする俺の前で、喜多さんが再びひとりを一瞥する。

信頼に満ちた眼差しだった。

それを受け、予定にない喜多さんの果敢な挑戦に驚いて上げられていたひとりの顔に生気が戻る。

力を取り戻した彼女を見ただけで、止まっていた呼吸を再開したかのような解放感を得る。

そして、ひとり強い眼差しは少しだけ周囲を迷った後。

「いっくん、ソレ！」

「え、あ、え？」

さつと素早く屈み込んだひとりが俺に手を伸ばす。

え、ちよ——!?

こちらが何事かを理解するよりも速く、するりとひとりは俺の手中にあったきくりさんが空にした最後のカップを取り上げる。

手にするや、ぐわつと体を引き戻したひとりは、離れていく途中で俺を見て微笑んだ。

「——見ててね」

囁かれた言葉。

直上から差す照明の光を背に、ひとりが——否、ギターヒーローが立ち上がったのを直感した。

置いてきぼりの俺の眼前で、カップをネックと呼ばれる部分に滑らせると、ギヤアアアンと不思議なサウンドが発せられる。

な、何だ？

ふと、それまで二人の躍動を見守っていたリョウと虹夏が互いに視線を交換し、頷いたのが見えた。

まさか。

まさか。

ひとりのアクシデント、喜多さんのアドリブ、ここまで予定を狂わせる連続の出来事

にも対応し、それすらも乗り越えて直前で復活したひとりに合わせようというのか！
「す、スゲー……」

俺が一人、感動に打ち震える中でひとりのソロが本格的に始まった。

よ、よくわかんないけどすげー演奏しながらすげー音出してる!!

語彙力を喪失した俺が変な笑顔を浮かべていると、傍らで二人が噴き出す声が聞こえた。

「この土壇場でポトルネック奏法とか普通やるか!?!」

「あれならチューニング、ズレても関係無いもんね!」

「えっ、そうなのか……取り敢えずスゲー!」

「い、一郎……」

今はもう何でも良い。

ただただ——『結束バンド』がカッケェ!!

最前線だから具に見えた、四人の連携。

ライブ前までの後悔だとか、先刻までの絶望感などすっかり吹き飛んでしまった。

最高だ、このライブ!!!!

ひとりの機転と、それを紡ぐまでの時間を作る為に頑張る喜多さん、そして二人を裏からひたすら支えるリヨウと虹夏の音の壁。

ここにきて『結束バンド』の面目躍如、凄まじい結束力を見せてくれている。ひとりのソロパートが終わる。

一瞬出来た間隔に、ひとりが深く吸った息を不安や疲れごと天井に向けて吐き出す。汗が顔から頤を伝って、首を滑っていく。

顔を前に戻したひとりと、また目が合った。

その顔は、今まで見た事が無いくらいには堂々としていて、ステージにありながら俺に笑いかける。……い、イケメンだ……！

今回もまた、お待ちしてました——ギターヒーロー！

再び始まる彼女らの演奏がラストスパートを駆け抜けていく。

唐突に投げかけられた喜多さんのウイंक、いつもなら怖かったが今は手を振って返せるほどに昂ぶっている！

俺は歓喜に震えながら、結束バンドの音に両手を上げて最後まで感動していた。

そして、最後の一曲が終わり。

「うおおおおおおお——いでっ!」

観客と一緒にあって歓声を上げた俺だったが、不幸にもそれが星歌さんの耳元だったので、うるさいという意味を込めた彼女の手刀に打たれて遮られる。

り、理不尽すぎる……今だけでも許してよ……。

いや、この感情は収まらない!

これしきの事で……!

「うおお——いたっ?! 星歌さん!」

「気持ちに分かるけど、アイツら喋るから一旦止まれ」

星歌さんが顎で壇上を指す。

『あー……えつと……~~~~~っ! 感動しちゃって、言いたい事吹っ飛んじやつたんですけど……これだけ言わせて下さい!』

今日はホントにありがとう!! この日のライブを皆が自慢できるくらいのバンドになります!!!!

感極まった虹夏の言葉に、会場がさらに熱気を高めた。

「いいぞー！」

「武道館まで行っちゃえー！」

「山田はケーキ返せー！」

「ぐ……なんとかさんも凄かったぞー！」

「弦切れたのに頑張ったねっ!!」

次々と称賛と応援の声が上がる。

その中に、俺のヒーローこと後藤ひとりを褒め称える言葉があつたのを聞き逃さなかつた。

きくりさんを体から引き剥がしつつ、俺は頷く。

うん。

でも、今回はひとりだけではない。

ひとりがしつかりと実力を発揮できるように三人が動いたからこそその結果だ。あのまま混乱していたら、絶対に導き出せなかつた。

凄い、凄いぞ『結束バンド』！

もう語彙力とか要らないから、取り敢えず褒めさせてくれ！

『結束バンド』の努力が結実した現実を目の当たりにしてひたすら感動する俺同様に、喜多さんもまたひとりを称賛する声を耳聴く聞き咎めていたようだ。

「ここぞとマイクを片手に、彼女へと……？」

「ほら、後藤さんっ！何か言わなきゃ！」

「えっ」

「え、」

ちよ、喜多さん。

勘弁してあげてよ……ひとりはこちらまででかなりの精神力を消耗した筈だ。ソロでは神がかった彼女だが、極度の人見知りで他人に合わせるだけでも苦労があり、それを更にライブで失敗させまいと行いつつ、多人数の前で練習通り披露しなくてはならないという普段から三重苦を背負わされている。

そこに加えて予想外のアクシデントもあった。

正直、もういつパンクしても可怪しくない。

嫌な予感がしつつも、ひとりを見ると。

「なに、か面白いこと……面白いこと、面白いこと面白いこと面白いこと……」

ご覧の通り、完全に混乱している。

顔色は青褪めるところか真っ白になっていた。

ヤバイ、これは……また誰にも予想できない何かが起きる。

暫し彷徨ったひとりの視線が、俺たちに注がれる。

ん……何だ？

俺たちを見た途端、光明を見出したかのように目を見開いたひとは、速やかにギターを足下に置くや——床を蹴って飛び出した。

……は!?

頭上に、ひとりの影が躍る。

思考は一瞬遅れる……が、体は反射的に空を飛ぶひとりを追う。

「ツ——!」

次いで、ようやく追いついた思考で落下地点を予測し、下へと転がり込む。

幸い、そこには脈絡も無い彼女の跳躍に怯えて人が捌けたがために充分な空白が生じている。

大丈夫、俺が受け止め——んぐうつ!?

……受け止める事には成功した。

お互いが床に叩きつけられる、なんて事も無かった。

そう、怪我はない。

ただ一点。

無事、ではなかった。

?!!?!?!?!?!?!?!?!?!
「……!?!」

少し仰け反るような俺と正面から抱き合うひとり。

顔は……近すぎて見えない。

唇に何かが密着しているが、想像する必要も無いほどに同じ物が潰れるほど触れている感触がしていると分かる。

周囲も、それを見て固まっていた。

そこかしこで、「きやつ」なんて腹の立つ声も聞こえた。

つまり、えと。

俺はひとりの肩を掴んで、そつと離す。

「え、えと……ひとり……？」

「あ、あ、あ、ああ、あ——こひゅつ」

「ひとり!？」

唇を離して、互いにこの気まずい状況をどうするか相談しようとした矢先、顔を真っ赤にしたひとりが白目を剥いて脱力する。

全身から力を失って床に崩れそうな体を、俺は慌てて抱き締めて止めた。
き、キャパオーバーだったか……。

俺も普段ならあたふたと慌てているところだが、俺以上に相手が混乱していると逆に冷静になる。

う、ううむ……どうしようか。
そう思っていたら。

「「「「きやあああああああああああああああ
!!!!!!
「「「

会場が、何故か湧いた。
いや、心配しろよ。

深く堕ちていく

文化祭ライブから少し時間が経つ頃、保健室のベッドでひとりは眠っていた。

俺はその傍に椅子を用意して座っている。

キスというショッキングな出来事に脳がオーバーヒートしてしまった結果の失神なので、やはり責任の所在は俺にある。

申し訳ない事をした……。

アレがひとりの初キスでなければ良いけど。

それにしても、柔らかかったな。

リヨウとは違う感触だった。

……何か女子の唇を比較している自分が気持ち悪くなってきたな。

取り敢えず、起きたら謝ろう。

俺なんかとのキスなんて、流石に優しいひとりとはいえ許し難い事態だ。

起きた時の罵倒も覚悟しよう。

あ、ひとりに否定されたら生きていけない気がする。

「前田先輩？」

保健室に喜多さんが入ってきた。

メンバーTシャツのまま、ギターケースを背負った姿からどうやらクラス内での片付けや概ねの事が終了したのだと察せられる。

そうだ、この文化祭は喜多さんの文化祭でもある。

彼女もまた労われるべき存在だ。

「お疲れ様、喜多さん」

「ありがとうございます」

「ライブ、かつてないくらいに俺も盛り上がったよ」

「本当ですかっ！」

嬉しそうに頬を染めて喜ぶ喜多さん。

だが、すぐにはつと口を手で覆ってからちらりとひとりを見遣る。

眠る怪我人への配慮か、保健室は静かにというルールの為か、或いはその両方か。ライブ後の興奮も冷めていないだろうに、ここでも周囲への気配りを欠かさないのは彼女らしい。

「ひとりはまだ起きてないよ」

「そうですか」

「喜多さんは何でここに？」

「あ、後藤さんを迎えに。大丈夫そうなら、これから打ち上げにしようって……前田先輩は？」

「俺も？」

「はい。伊地知先輩が」

虹夏からのお誘いか。

物凄く嬉しいのだが……………。

「いや、お断りするよ」

「え……………」

「情けない事にはしやぎ過ぎて疲れた。申し訳ないけど、俺の事は気にせず皆で楽しんでくれ」

やはり、未だに大人数では難しい。

本当に今日は疲れたのだ。

この状態で、皆のテンションに付いていける気がしない。

それに、ライブ中には『結束バンド』のパフォーマンスに色々と迷惑をかけたような気がしたので、取り敢えず団扇を燃やして眠りたい。

ノンストレス。

今日はリヨウの顔を見ただけでも胃に穴が空きそうだ。

叶うなら、一週間は休みたい。

「それは、キターー！残念です」

しょんぼりとした顔で、喜多さんが俺の膝の上に腰を下ろす。

……………。

膝の上に深く腰を下ろしながら、俺の方へと振り向く。

……うあつ、妖しいキターン光線ツ!!

悄然としている言動から放たれているとは思えない輝きだった。

至近距離で受けると動悸がする。

ライブ中はかつこよかったのに。

今では完全に俺を包围する三凶の一角に逆戻りしている。あと、断つたのに膝の上に座る辺り逃すつもりがないと行動で示しているのか。

それを抜きにしてもこの体勢はまずい。

女子を膝上に座らせているなんて目撃されたら物議を醸す事案だ。

秀華高校では一部で俺が喜多さんのカレシだと認定されているので無問題にも思えるが、ライブのひとりとのキスを見た観客の誰かに見つかれば爛れた関係と誤解を招く。……既に誤解盛り沢山な身辺なのだが。

「あの、喜多さん？」

「私、後藤さんを支えられる人になりたいんです」

「うん」

「私は、人を魅せられるような演奏は出来ないのです。でも、人に合わせるのは得意みたいだから」

……………。

俺の膝上で語ることは無い。

だが、彼女を膝上から退かすには内容から察するに深刻な話題のようなのでそうもいかない。

しつかりと耳を傾けつつ、タイミングを待とう。

「良いと思うよ」

「え？」

「喜多さんが出来ると思った事を全力でやれば。バンドなんだから、支え合って、個々で足りない部分を補い合えば良いし」

「……………」

正面から見つめ合っていた喜多さんの瞳が潤む。

それは、感極まって涙を催す前の兆し……とは違う。

「先輩って優しいですね」

「これが優しさにカウントされるなら、喜多さんも自分を大切にされた方が良いでしょう」

「……そういう所ですよ。本当に優しい、無自覚に………そして」

「ん？」

喜多さんの顔が近くなる。

あまりの急接近、俺は反射的に後ろへ背中を反らし、顎を引いて距離を取ろうとした。

こつり、と額同士が軽く触れる。

ち、近い。

「そうやって、無自覚に突き放すんですね♡」

甘ったるい響きで囁かれる。

声が吐息と共に耳に纏わりつくように感じた。

逃げるにしても喜多さんが乗っていて足が動かさないし、座っているのがパイプ椅子

「で背もたれもあるので逃げ場が完全に無かった。」

「どうやら、俺の苦手な喜多さんの状態が始まったようだ。」

「頑張ってる私の前で、後藤さんとキスマスまでして」

「あれは、不可抗力というか」

「はい」

「ひ、ひとりは悪くないぞ？俺の受け止め方が悪かっただけで」

「はい、後藤さんは悪くないです。私、ライブで頑張ったのに先輩があんな仕打ち……私にもご褒美があつても良いですよねっ？」

「にこりと明るい笑顔で褒美とやらを強請る喜多さん。」

「経済的な要求か、肉体労働的な要求か。」

「いずれにしても、傷付けた事には変わらないようなので許して貰うためには傷も覚悟しなくてはならない。」

「俺は死刑宣告を受ける心積もりで、彼女の結論を待つ。」

「腹を括った俺の心中を察してか、喜多さんも肝心の褒美の内容について口にする。」

「前田先輩、目を瞑っててくださいいね？」

死刑執行。

刑罰の内容は、言うまでもない。

俺はよたよたと秀華高校の廊下を歩く。

このまま昇降口に出て、真つ直ぐ帰ってやろう。

虹夏に誘われた打ち上げを断ったが、喜多さん伝で断っただけで本人相手に同じ事を
言える度胸は無い。

虹夏たちに会わないよう帰ろう……。

さつきスマホに入ったメールには、郁人さんから宿泊やライブに誘ってくれた事、それと自分を拒絶しなかった事など諸々の礼と一度実家へ帰る旨の物だった。

彼の存在は、俺にとつても救いの一つだ。

親戚を封じてくれる、親切な大人の一人。

これで嫌がらせの手紙が無くなる事も期待していいのかもしれない。

喜多さんの刑で受けた後の心労も緩和される。

ふと、行く手からこちらへ歩んでくる人影を認める。

俺はそれを見て、思わず足が固まった。

ニコニコと、澆漑とした笑顔でこちらを目指す虹夏の姿だった。

今日は避けようと思っただけに、出会すと動揺を禁じ得ない。

いや、悟らせてはならない。

虹夏は最近の俺に対して疑心暗鬼になっているから、余計な誤解を招かないよう努めて平静を装うべきだ。

怒ってませんように。

怒ってませんように。

怒ってませんように。

「あ、一郎くん」

「ど、どうも」

「喜多ちゃんから聞いた？——打ち上げの件」

もしかして、詰んでるのか。

実は、喜多さん相手に断るのは想定済みで、自分相手ではそうもいかない俺の弱さもまた把握した上で自ら赴いたワケではないよな？

いかん。

俺も疑心暗鬼になっている。

でも、これが偶然だとしたら運命の女神すら俺を逃すつもりは無いのか。

「き、今日は遠慮するよ」

「え……」

「ホラ、郁人さんを泊めた後で色々と片付けたい事もあるし」

「……そっか」

じい、とさつきから瞬きもしない虹夏の瞳が俺を見詰める。

そんな表情も出来たんだね。

新発見。

「だから、俺は気にせず皆で楽しんできてくれ」

「……そっか、残念」

「じ、じゃあ、俺はこれで」

虹夏が本当に残念そうに肩を落とす。

話の区切りも良いので、俺は空かさず暇乞いを告げて去ろうとした。

隣を過ぎて、先に見える昇降口にも早足になりそうな歩調を一定に保つ。

……が、やはり運命の女神は許してくれない。

「じゃあ、もう一つ」

……止まらざるを得なかった。

俺は虹夏の背後で立ち止まり、そつと振り返る。

うわっ。

虹夏は至近距離に立っていた。

後ろを向いた時、危うく肩がぶつかるといふほど間近だ。

「も、もう一つ？」

「うん。首のソレ」

虹夏が俺の首を指差す。

そこには、絆創膏が貼ってある。ついさつき、やむを得ず貼る事になったヤツだ。

「これ？」

「うん。ライブの時はそんなのしてなかったよね」

「保健室で、こ、転んだ時にペンで首搔いちやってさ。その時に出来た傷を」

「そうなの？もう痛くない？」

「大丈夫」

我ながら恐ろしい。

こうもスラスラと嘘が付けるとは。

怪我でもないし、原因はペンでなく喜多さんなのだが。

俺が笑って平気だと示すと、虹夏が胸を撫で下ろした。
う。

嘘で心配させてしまったのが申し訳ない。

「——で、本当は？」

だめだった。

「一郎くん、嘘つきだから。それもきつと、喜多ちゃんでしょ？ぼっちちゃんとのキス、羨ましそうに見てたから」

だめだった。

もう確信を持っているような虹夏の強い語調に、俺は否定すら出来ず固まった。
「でも凄いな、喜多ちゃんは」

「え……？」

「だって、口じゃなくて首にしたんでしょ？私だったら我慢できないもん」

「我慢？」

虹夏の両手が俺の襟を掴む。

絶対に放すまいと、小さな手が力んでいた。

「私もしたいけど、一郎くんキツそうだし。今日はやめておくね」

……………良かった。

今日では無いらしい。

まあ今日でなくとも刑罰は執行されるそうなので何も変わらない。ストレスが凄すぎて脳がぐちゃぐちゃになりそうだ。

俺が頷くと、虹夏が満足げな表情をする。

「でも、楽しみだな」

死にそう。

♪

♪

♪

♪

夜になって、俺はソファアの上に倒れていた。
どうやって帰って来たのかも分からない。

部屋を見渡せば、朧気に自分が無心で家事を行っていた事が分かる。それらが終わって落ち着いて、今こうして休憩した事でようやく意識がハッキリしたようだ。
体は怠く無いけど、やる気も起きない。

これは、重症だな。

俺は壁の時計を見る……七時半、か。

そろそろ飯を作るべきか。

今日はリヨウも来ないだろうし、自分のペースで作るとしよう。

ライブの余韻も消し飛ぶどころか色々と疲れる連続の出来事で何をするにも億劫なのだが、生きたいのならば動くしかない。

そうだ、映画を観よう。

良い気分転換になるじゃないか。

こういう時は、ホラーやパニック系を見てスカツと嫌な事を恐怖で塗り替えてしまえばいい。

落ち込んだ時に自身でストレスを解消できる。

何て素晴らしいツールなんだ。

「ただいま」

居間の扉が開く。

俺は握り締めていたりモコンを床に叩きつけたい衝動を、ぐつと強く飲み込んだ。

取り乱したって嗤われるだけだ。

そう、今しがた我が家に堂々と無連絡無許可で現れた凶々しさの権化こと山田リヨウに。

俺は机の上のリモコンを置いて振り返った。

「打ち上げは、どうした？」

「終わった」

「それにしても早くないか？」

「ぼっちの怪我もあるからって店長が早く切り上げた」

「なるほど。——で、何故ここに？」

俺の間に答えず、リヨウは隣に腰を下ろす。

「飯は食って来たんだろ」

「店長の奢りでたらふく食べてきた」

「なら家に帰れよ」

「虹夏と郁代から一郎について訊かれてたから、何も考えずに帰ってたらここに來てた」
いつも何も考えてない故に影響されやすいんだな。

それにしても、喜多さんと虹夏……。

俺について質問攻めするとは、いよいよ距離を置こうか悩むな。

だが、どちらでも軽率に行動すると危うい。

最悪の場合、被害は俺一人ではなく『結束バンド』に影響するので、ひとりの夢に嫌な影が差すかもしれないし、俺もリヨウの音楽が聴けなくなれば本末転倒だ。

今日のライブを見て、より惜しく思える。

それにしても、どうしてみんなは俺という人間の灰汁みたいなヤツにそこまでするんだ。

「悪いけど、俺はこれから飯だから」

「私も食べる」

「たらふく食ったのでは……?」

「吐かなければ幾ら腹に入れても人間は問題無い」

「そんな気持ちで食われても困る」

苦しそうに食われる身にもなれ。

だが、そこまでして食いたいと言われる価値があるとなれば悪い気はしなくてもない。
い。

俺はソファアールを立って、キッチンに向かう。

その間に、リヨウは恒例のように暇潰しの映画を探り始めた。

俺はその後ろ姿に嘆息した。

リヨウは、主にサスペンス系が好きだ。

つまるところ、心靈現象とは無縁に人間の怖さなどが際立つ傾向のジャンルを好むとなれば、選ぶ作品が偏るので今日の俺のメンタル回復も諦めるしかない。

ああ、嫌な思い出も恐怖で塗り替えたい。

「一郎、コレ観てるね」

「題名は？」

「『ライトハウス』」

「……………さいですか」

リヨウが映画を再生し始める。

うん、ホラーはホラーなのだが随分と複雑な物をチョイスしたようだ。

灯台に派遣された老人と若者の織り成す物語。

黙って見詰める彼女がいつ恐怖するのか観察しつつ、鶏もも肉を揚げる。リヨウは満腹だし、俺も食欲が弱いので少なくとも良いだろう。この前、近所の人くれた宮崎産の醤油と甘酢を用いて作ったタレに揚げた物を浸す。

「一郎」

「ん？」

「今日は何かあった？」

「……別に。ライブ楽しかったくらいしか無いな」

「虹夏と郁代と何かあったでしょ。二人とも凄く満足そうだったから」

「特別な事は何もしてない」

俺は完成したチキン南蛮と味噌汁を卓上に運ぶ。

この一年ですっかり我が家に溶け込んだリヨウ専用の器と箸を用意し、俺も自分用を持つて席に着いた。

リヨウもそれを見て隣に腰を下ろした。

液晶画面には、恍惚とした男の顔が映っている。

「何か一郎、この二人みたいに疲れた顔してるけど」

「そこまでか?」

登場人物の二人と比較されるのは心外だ。

ここまで追い詰められてはいない。

……チキン南蛮の味がしない。味見の時はしっかり味覚も機能してた筈なんだけどな。

「ごちそうさま」

「お粗末様」

リヨウが先に料理を平らげる。

「一郎、今日はスターだったね」

「俺が？」

「飛んだぼつちを受け止めたので盛り上がったから」

「俺としては、結束バンドのライブで余計な事したって思った。まあ、受け止めなきやひとりも怪我してたから仕方ないんだろうが」

今からでもやり直せないだろうか。

でも、やり直したい過去なんて数えきれないほどあるのだから、今さらそんな事を考えても時間が足りない。

「何かごめんな」

率直な感想を述べる。

すると。

「ライブ楽しかった？」

楽しかった。

「うん、なら良い」

「……………」

意外だ。

てつきり団扇の事だったり、ひとりとのキスの件で何か厄介な追及を受けるかと思っ

たが、どうやら杞憂だったらしい。

ライブの完成度——それが気になるところは、バンドマンらしい。

ほんのちよつぴりだけ、尊敬の念を抱く。

本来なら喜多さんも虹夏もそうなんだろうけど、俺の行動が余計だったのが為にあんな歪んだ行動に及ばせてしまった。

やつぱり、少し距離が近すぎたのだろう。

彼女らと、『結束バンド』と距離を置くべきだな。

俺ごときに意識を割いて貰うのは烏滸がましく思えてしまう。俺がいない方が専念できるだろう。

「今後はもっと楽しめるように遠くから応援させて貰うわ」

そう告げると、リヨウがこちらへと手を伸ばす。

「遠くは駄目だよ」

「……？」

俺の顎を、くいと細い指が持ち上げて自分の方へと向けさせる。

リヨウはにやりと笑った。

「言ったでしょ。——私には一郎がいないと生きていけない『価値』があるんだから」

その後の、記憶はない。

レベル3の試練：前編

「一郎くん」

机の上に参考書を広げ、それを茫洋と眺めていると虹夏から声をかけられた。

振り返ると、彼女に怪訝な顔をされる。

俺の様子が何か可怪しいのだろうか。

「何か、いつもより調子良さそうだね」

「そうか？」

「何か、妙にスッキリしてる？」

「……………」

鋭い。

たしかに生まれ変わった気分だった。

久し振りに学校の授業を真面目に受けられた。

普段も授業姿勢が悪いことは無いが、ここ最近で比較すれば欠けていたメンタル面が回復し、平穏な気持ちで授業に臨めた。

理由は単純。

要因の一つとして、ひとりに誘われた文化祭ライブは最高だった。

応援していた『結束バンド』がアクシデントすら乗り越えて、寧ろそれを盛り上がりに変換して力にしていく熱い展開に胸が踊った。

立ち会えた者としての体験が活力の一つになったのは間違いない。

ただ、ライブ後がまた複雑な出来事があつて一時は危険な状態に陥った。余韻までもが虚しく消えるくらいの極大ストレスである。

でも、それすらも解消できた。

具体的には、考え方を変えただけ。

発想の転換とは、まさにこれだ。

今までストレスに耐えていた——自身が正常だと考える状態を維持する為に、たとえば過負荷を受けようと立ち直るべく努めた。

ところが、それでは駄目だと痛感させられた。

俺の所為で歪んでいく人間関係、正常であろうとするが故に拗れていく。

周囲に阿り、深く影響を残すまいと距離を置こうとする程に誤解を招き、優しすぎる

彼女らに痛ましい傷だけを刻んでしまう。

受け身では駄目だ。

彼女らが変わる事を期待するだけでは何も改善しない。

ならば、俺が変わればいい。

環境に適應する、彼女らに対する相應しい姿勢が必要だ。

端的に言えば——俺も壊れてしまえばいい。

「ライブの後、色々あったしな」

「……そうだね」

「心の整理もついて、今ようやく穏やかな感じなんだよ」

「そっか」

虹夏は俺の言葉に相槌を打つと、前の席に座って椅子の背凭れを抱くように座る。

「ねえ、一郎くん。——空いてる日、家に行っていない？」

「別に良いけど、何するんだ？」

「二人きりでしたい事があって」

虹夏と二人きり、か。

この前の発言といい、その状況は危険に思える。

でも断れる資格が俺には無いからな。

「それって何？」

「まだ秘密」

念の為に尋ねたが、教えてはくれない。

こうして変に情報を伏せるから不穏な予想が絶えず、待たされる身はストレスしかないのだ。虹夏がそこまで意図しているワケではないにしても中々に堪える。

仕方無い。

俺は周囲に聞こえないよう小声で。

「悪いけど、この前みたいなのはやめてくれ」

「この前、みたいなの？」

「その、キスとか」

「……何で？」

虹夏から表情が消えた。

もしかして、凶星だったのか。

てつきり諦めてくれたのではないかと小さな希望を抱いてはいたが、やはり夢かった

な。

だが、それでもやめて欲しい。

俺は変わったんだ。

もう、曖昧な態度や受け身で相手に誤解させることはしない。自分の気持ちはハッキリ言い、ハッキリと態度に示す。

ひとりが変わったように、俺も変わるんだ。

「まだ秘密」

簡潔に伝えると、虹夏の目が細められた。

ちよつとした意趣返しである。

「誰も呼んじゃ駄目だよ」

「分かった」

俺の返答に満足して、虹夏が自分の席へと去っていく。

楽しそうな後ろ姿だ。

きつと、かなり期待しているのだろう。

それを見ると、罪悪感がかなり増す。

「一郎」

急に背後から名前を呼ばれて体が跳ねる。

「最近流行ってるのか、音もなく人の後ろに立つの」

「一郎の耳が悪いだけじゃない？」

「そうなのかもな」

「弾き語りしながら来てたのに気付かないのは驚いた」

「俺の耳よりオマエの頭が心配だ」

後ろを見ると、リョウが立っていた。

弾いてないじゃん。

本当に教室内でギターでも弾き語りしながら背後に接近していたら本気で正気を疑ったところだ。俺もそれくらい壊れていた方が日々のストレス的には良いのだろうか。

ため息をつくとき、リョウが俺の頭頂に顎を乗せてくる。

……割と痛い。

「何の用？」

「何だっけ……一郎と話す前までは憶えてたんだけど」

「忘れるくらい緊急性が無いなら別に良いだら」

「最近多いんだよね、こういうの」

「本当に頭大丈夫か??」

特殊な脳をしてるのは前から知ってるけど。

「一郎こそ大丈夫なの？」

「虹夏と二人きりになっても変な事はしないし、ちゃんと言えば大事にならないだろ」

「私とはあんな事したのにな？」

「……………」

山田のくせに痛いところを突く。

たしかに、俺は優柔不断だ。

押し切られたら流されてしまう危機感がある事を否めない。虹夏みたいに意思の強い子には特に、自身の思考を放棄して身を委ねるかもしれない。

しかし、今日の俺は違う。

この前までがレベル1だとするならば、今はレベル2に進歩している。

逆境だろうとギリギリなんとか跳ね返せる。……………と思う。

流されてリヨウとあんな事になってしまった過去の経験を糧に、次こそは自由意志で選び取る。

「良いか、リヨウ」

「ん？」

「俺はこの前とは違う。どんな事だろうと乗り越えてみせる」

「……………」

「何だよ、その疑うような目は？」

「ぶふ、卒業したばかりで気が大きくなってる」

「……ほう」

コイツ、調子に乗っているな。

リヨウが後ろから前に回り込んで、笑いを堪えた顔を向けてくる。

たしかにリヨウのペースに乗せられて俺は籠が外れてしまったが、弄んだ気になっているようなのでしっぺ返しくらいはしてやろう。

たしかに、俺もオマエに恥を晒した。

だが。

「オマエもデカイ態度なのは最初だけだったな」

ぼそつと呟く。

それを聞いた途端、リヨウが完全停止した。

暫く見開いた瞳で俺を見詰めるだけの時間が過ぎ、やがて無言のままぱつと背中を向けて、自分の席へと戻って行った。

その耳が真っ赤になっているのを見て、俺は清々しい気分になる。

よし、山田リヨウに勝った。

やはり、レベル2の俺は一味も二味も違うのだ！

……………恥っつず。

俺も熱くなった顔を机に伏せると、スマホからロインの通知が鳴る。

開いて見れば。

『忘れてたやつ、ジュース代貸してって言うのだった』

貸しません。



バイトが休みとあり、家に直帰していた。

最近はいつもの以上に諸用で外出する事が多く、家の中でまったり映画鑑賞や読書の機会が減りつつある。

今日は趣味に時間を費やせる貴重な一日だ。

正直、もう受験戦争が始まっているので怠惰に過ごす事は危険なのだが、約二時間の休憩くらいは許して欲しい。

まあ、今日も用事があるんだけども。

予定がオフという事で、家に虹夏が来る。

何やらひとりのギター購入に同伴するらしく、その後になるようだ。
文化祭で壊れたから、確かにそうか。

なので、俺は彼女が来るまで陽キャ男子から借りた本を読む。

実は二週間前にお薦めだと渡されたが、一向に手が付けられずにいた物だ。

本人には忙しくて読めていないと謝罪のメッセージを送ると、『女性問題があれば仕

方ないさ、頑張つて』と名誉毀損で訴えたい返信があつた。

しかし、私物をいつまでも借りるのはいけない事だ。

早く読まなければ。

小説名は高田○介先生の『ま○り』。

民俗学的な側面が強い一作である。

理系の進路を選ぼうとしている俺からすれば、忘れかけた日本史の内容を再復習しなければ途中で躓きそうな内容……でもなく、きちんと解説もしてくれるので伏線回収で浮き彫りになる事実から受ける衝撃も決して弱くない。

それにしても、またエグい……。

陽キャ男子、と勝手に心の中で呼称している友人の内面を改めて疑いたくなる。

終盤に差し掛かって佳境に入った瞬間である。

スマホが着信で震えた。

俺は軽く舌打ちでもしたい気分になりつつ、画面に目を遣ると——『ひとり』と表示されていた。

一秒前の俺、天誅。

即座にスマホを手に取って応答する。

「もっもっ」

『あつ、い、いっくん』

『どうした?』

『あつ、あのね、これから家に……行ってもいい?』

最愛の妹も同然のひとりの来訪を知った途端、陽キヤ男子への罪悪感と内容への期待で読み進めんとしていた手がぱんつと本を閉じる。

体は正直である。

趣味は映画と読書だが、ひとりを甘やかす事が俺にとつて最も至福の時間である。

この前のキスの件以来、ひとりと全く会話が出来ていなかったのも、これは僥倖である。

だが――。

「ぐっ……ごめん……今日は用事があつて……!」

『う、ううん! 気にしないで! き、急に言つてごめんなさい!』

「ひとりとは全然悪くないぞ。……それで、ギターは買えた?」

『あつ、うん……虹夏ちゃん達が手伝つてくれて』

「そつか。また今度見せてくれ」

『うん!』

ふんふんと荒い鼻息が聞こえる。

新しいギターの入手で興奮しているのだろう。……見たい。

「あ、家に来て何するつもりだったんだ？」

『……………さ、最近いつくんと会えてないなって……………』

……………。

深呼吸して、天を衝くような感動を飲み込む。

落ち着け、俺が鼻息を荒くしてもひとりに心配されるだけだ。

「たしかに文化祭から会えてないな」

『そそそそその節につきましては大変申し訳——!!』

「あれは事故だから。気にしなくて良いぞ」

『……………』

「ん？どうした？」

『いつくんは……………き、気にしてないの？』

「ん？ああ、気にしてないよ。だからひとりもそんなに気に病まないでくれ」

ひゅっ、と首を絞められたような声が聞こえた。

そのリアクションは、一体……………？

ひとりの感情が読み取れず、俺もまた当惑で言葉が出てこない。

『そ、そう……………ですよね……………』

「あの、ひとり？」

ひとりが深呼吸している。

段々と掃除機レベルの音がしているが、ひとりの有する奇跡の体質ならば不可能ではないので、さして驚く事でも無い。

何か決意しようとしているようだ。

ならば、俺はいくらでも待とう。

スマホの傍で掃除機のノズルが暴れているかのような騒音がすること一分が経過……。

ようやく音が止まり、ひとりのか細い声が聞こえた。

『わ、わわ私は……嬉しかった……』

直後、ぷつりと電話が切れた。

俺はスマホを見詰める。

どうして急に切られたのだろうか。折角ライブ以来の話せた機会だというのに、唐突な終わりに胸中は寂寥感でいっぱいだ。

「まあ、嬉しかったのなら良い……のか？」

気懸かりではあるが、ひとりが購入し終えたとなると、そろそろ虹夏がこちらに来るだろう。

俺は閉じた本を机の上に置いて凝り固まった体を伸ばす。

すると、インターホンが鳴り響いた。

「どうやら、来たらしい。」

リヨウもそうだが、虹夏もいつの間にかマンシヨンのオートロックの暗証番号を知って普通に通過してくるようになった。俺は言った覚えが無いんだけどな……。

玄関まで行って、俺は扉を開く。

「やつほー、一郎くん」

「いらつしやい。お菓子とジュースぐらいしか用意してないけど」

「大丈夫！私の方も色々買って来たよ！」

元気よく虹夏が片手に提げたビニール袋を掲げる。

手渡されたそれにはお菓子やペットボトルなどが見える。袋の底にはまだ色々ありそうなのが膨らみの大ききさで予想できる。

俺に断って虹夏は家へ上がり、颯爽と居間へと向かう。

あの様子は、いつもの明るくて優しい虹夏だ。

俺が危険視していた事態もなさそうだな。

少しだけ安堵し、袋の中身はどうかと更に探るべく視線を中へと移して——絶句した。

「……………これ、え？」

俺は袋から『箱』を取り出す。

ソレが何であるかは知っているし、最近使う機会があつたので用途も理解している。生活用品として普通にコンビニでも販売されているが、慣れていないのもあつてまだ目には刺激の強い物だ。

なぜ、これを虹夏が……………？

俺は、虹夏が待つているであろう居間へと振り返る。

こ、コレ……………まずいのではないだろうか。

わざわざ差し入れとして買ってきた物に紛れている時点で、明らかに作為的な意思を感じる。

普段リョウに鈍いと誇られる俺でも、この状況が察せた。

「ま、まさかな」

「一郎くん？」

「ん？」

虹夏の声に俺はそちらへと振り返りつつ背中に『箱』を隠した。

居間の扉から黄色いサイドポニーを揺らし、眩しい笑顔でこちらを見詰めている。

駄目だ。

これは『箱』の中身を虹夏に使わせてはならない。

このまま隠して、彼女が買い忘れた事にしてしまえば一件落着になるかもしれない。

「どうかした？」

「何でも無いぞ。貰ったお菓子とかを確認してただけだ」

「……そっか。袋の中身、全部机に出しといてね」

まずい。

明らかに『箱』の存在を俺に見せようとしている。買い忘れたのではないか、などという勘違いを誘う作戦は無意味かもしれない。

前までの俺とは違う。

レベル2になった俺は、今までのような逆境なら跳ね返せる。

だが……今回は明らかに困難さの桁が違う！

レベル2の案件ではない。

虹夏が嬉しそうに手招きしている。

「ほら、早くっ」

これは——レベル3の試練だ。

レベル3の試練：後編

「二郎くん、早くおいでよー」

戦慄で固まっていた俺に虹夏が声をかける。

「思わずはーいと応えてしまいそうな明るく柔らかい声だが、聞けば聞くほどに『箱』を持つ手が冷たくなってくる。」

悪い予感が絶えない。

どうしたら逃げられるのか。

俺は渋々と、『箱』を袋に入れる。

逃げられない。

ここで逃げれば、虹夏が次はどんな手段を講じてくるか分かったものではない。今回の『箱』もかなりの奇襲だが、次はこれ以上の強硬策で来る危険性もある。

未然に防がなくてはならない。

それに、今日の為に最強の矛たる『言い訳』も用意しているのだ。

居間に戻ると、虹夏が期待に満ちた眼差しで俺を迎えた。
胃がキリキリする。

「ほら、机の上に全部出して」

囁かれる死刑宣告。

泣きそうになりながら俺は袋から一つずつ取り出した。

ジューズ二本と、スナック菓子の袋……そして、『箱』。——の下からもう一つの『箱』が出てきた。

……え。

何で『箱』が二つもあるんだろうか。

捉え方によっては、虹夏が俺をかなりのバケモノだと思っっているように感じる。

ちらりと虹夏の顔を盗み見る。

ばつちりと目が合った。

どうやら、感想を求めているらしい。

何を言えば良いんだろうか……こ、ここで「これは何？」とか尋ねたら否が応でも虹

夏の不穏なモノに触れてしまいそうだ。

「差入は、こんなのでいいかな」

「じ、充分すぎるよ」

「そっか」

「そ、それで……コレなんだけど」

俺を箱二つを手取る。

すると、につこりと虹夏が笑みを深めた。

駄目だ。

どんな目的であろうと、虹夏に何も言わせてはならない。

「それはね——」

何か考えろ。

こっちは『言い訳』だつて用意したんだ。

レベル3案件なのは間違いないが、乗り越えなければ確実に明日から俺は虹夏とまともに顔を合わせられないような関係に、それこそ『結束バンド』のライブにも行けない絶体絶命の危機に瀕する。

臆してどうするんだ。

今までと違うと証明しなくては。

いちいち常識で物事を測ろうとするな。

虹夏が大胆に出たのなら、それ以上の度胸で俺は跳ね返さなくてはならない。

彼女の目的を頓挫させるような、衝撃的な一言。

俺は考えに考えて、箱を手を立ち上げる。

虹夏がこちらを不思議そうに見上げた。

「あ、ありがとう。——よく分からないけど、リョウと俺の関係を聞いて差し入れてくれたのか？」

声が震えないようにしつつ話した。

果たして——。

「……………え？」

虹夏の顔に貼り付いていた笑顔が消えた。

俺は平静を装ったまま、『箱』と一緒にスナック菓子の袋を持ってキッチンに移動する。袋を開けて、広い器に中身の菓子をすべて解放した。

その間も虹夏は黙っている。

口は閉じていても、目が明らかに泳いでいた。言葉が見つからない様子で、『箱』を話題にした第二第三の矢が放たれる事は無かった。

やはり、効果抜群だったか。

寝耳に水だろうな。

リヨウと俺の曖昧な関係——宿主と寄生虫と称し、友とも恋とも判別の付かない感情で結ばれた紐帯を見て、以前から俺に関心を持ってくれていた虹夏やリヨウを推していた喜多さんにも迷惑をかけた。

だから、ハッキリさせようと考えたのだ。

リヨウからは特に指定が無く、ただ『俺がそうありたいと願う関係で良い』と許可は得ていた。

だから、この前……リヨウと致してしまった時に決意したのだ。

『リヨウ』

『ん？』

『全然そんな雰囲気無いかもしれんが、これから周りには恋人関係……つて事にしないか？』

『いゝよ』

リヨウは即答だった。

むしろ予想していたように驚きは無い。

正直に言つて、男女の浪漫も色恋の華すら無い最悪な告白ではあるが、リヨウ本人が気分を害した様子が無いのでよしとした。

ただ、これはあくまで体裁。

恋人、という事にしておこうという話だ。

対外的に曖昧だった関係を恋人と設定するだけで、俺たち二人の間に通う実情は恋人とはいささか異なる。

好意があるのかも微妙。

ただ友人の枠は超えたので恋人。

だから。

『ただ、互いの都合に支障が出たときは相手に申告して関係を解消するぞ』
『……………』

『この方がお互いストレスが無くて済むだろ。リヨウが他に好きな人とか、添い遂げた
い相手が出来た時に』

『…………一郎は、そういう未来があるの？』

『正直絶望的に無いが、これから変わろうと考えた俺は未知数だ。もしかしたら有り得

る』

『……………』

『ん？どうしたリヨんツ——!?!』

……余計な回想が入った。

ただ、互いが望む限りは続いていくというのは好意の有無についてはともかく、本物の恋人と大差無いので周囲から変な誤解も受けないだろう。

……山田夫妻には途轍もなく罪悪感しか無いが……!

だから、俺は断るつもりでいる。

以前はリヨウと判然としない関係故に、虹夏が手段を選ばなくていいと理性の枷を外させてしまったのだが、この事実がストツパーになる筈だ。

そして、リヨウという恋人がいる以上は……虹夏とは付き合えない、と。

「はい、菓子」

菓子を入れた器を卓上に運ぶ。——と、器を持つ手をいきなり掴まれた。

「嘘、だよね」

「な、何が？」

「リヨウと恋人って。付き合い出したのが最近だとしても、そんな素振り二人に無かったよ」

「嘘じゃない」

虹夏は微笑んでいた。

俺はそれを見てゾツとする。

こちらは本当の事を言っているの、虹夏に罪悪感があつても隠し事などに起因する後ろめたさは無いからはつきり嘘と読み取れるサインを発してはいないだろう。

しかし、虹夏の声は明らかに確信を得た上での強さを帯びていた。

まるで、俺がまた嘘でも言っているかのように。

「それに、リョウから何も言われてない」

「え、うん」

「リョウは私にそういう事を隠さない」

「俺の口から言うまで秘密でって頼んだ……その日の弁当代を貸す交換条件に」

「ツ……………」

苛立っているのか、俺の腕を掴む虹夏の手が握力を強めるあまり爪を食い込ませる。

痛い……………」

「私って、そんな迷惑だった？」

「そんな事は決して」

「私が鬱陶しいから、適当な理由を付けてるんだよね」

「違つ」

「だって、そうだよ。リヨウと付き合うなら、まず付き合う前にさ、先に告白してた私に返事しておくべきだよね？ 一郎くんはちよつと抜けてるところあるけど、他人への配慮は欠かさない人だからそこを忘れるなんて不自然だと思うんだ。だから絶対対ウソ、ウソじゃないと駄目なんだよ。ほら、去年のクリスマススの時に聞いたときもそうだけど必要以上に距離を縮められるのが嫌だって、独りにしてくれて話だったよ。だからいつもグイグイいくリヨウを甘やかして受け止めてはいたけど苦しそうな顔してたのも私見てたんだよ、そう、去年の春からずっとずっと見てたんだよ。私が一番最初に見つけたんだよ、一番最初に気持ちの口にしたんだよ。それを後にしてなんて、一郎くんがそんな事するわけじゃないよ。あ、でも最近の一郎くん少しだけ形振り構わないところがあから、そうなのかな？ リヨウを理由にして私を友だち以上に近い距離の関係に詰めさせないようしてるんでしょ。リヨウも驚いてるだろーな、自分をカノジョって事にして私をフろうとしてるだなんてさ。一郎くん、それだけは絶対にダメだよ？ だからさ、本音で言つてよ。私だけじゃなくても待つよ、一郎くんが誰かを迎え入れられるくらい心に余裕を持てるくらいの準備だなんて幾らでも待てるの。えへへ、私つてそんな

にしつこかったかな。一郎くんのストレスにならないように、必要なら一番最初に助けられるようになって心懸けた距離にいたつもりなんだけど、それも邪魔だったのかな？ じゃあ、直すね。だから、また頼ってよ。私の事、まだそんな風に突き放さないでよ。酷いよ、何でそんな嘘つくのさ。最近の一郎くん、凄いい意地悪だと思う。だから、やつぱり『箱』持つてきてよ。私に悪いと思うなら、キスとか恋人みたいな事がダメだつていうなら、もう夫婦みたいな事しよ？ そうすれば分かるよ、一郎くんの事どれだけ想ってるか。私是一郎くんのこと苦しませないようにちゃんとするから。一郎くんのこと、ホントに大好きだからさ」

「——あ、と」

決河の勢いで雪崩れ込む虹夏の感情に、俺は気圧されて言葉にもならない声が口から出る。

虹夏の手が腕から離れた。

おもむろに立ち上がった彼女が、早足でキツチンへと向かう。そして間もなくして俺が避難させた『箱』を再び手にして戻ると、再び俺の腕を捕まえる。

まずい。

このままでは、虹夏のペースだ。

本当にやられてしまう。

虹夏が腕を引つ張り、俺の自室へと真っ直ぐ向かう。

まずい、本当にまずい！

この雰囲気から分かるが、いくら弁解したって虹夏の中では『俺が嘘をついてること』になっている。

仮にリヨウにでも連絡してコレが真実だと理解させても、『俺だけが悪い』と考えて罪を償うために色々とさせようとするに違いない。

つ、詰んだ……。

レベル2とレベル3には、こんな格差があるのか……。

俺では対処できない、俺個人では。

だが、誰かを呼べば二人きりという約束を自ら破る事になるので、益々虹夏の暴走を助長させてしまう。

終わっ——。

『ポンポーン』

インターホンが鳴る。

その音に、ぴたりと虹夏が動きを止める。

見れば、エントランスに喜多さんが立っていた。それを凝視して、虹夏は俺の事を信じられない物を見るような顔をする。

「喜多ちゃんを、呼んだの……？」

「呼んでない、断じて」

「嘘だよ、だって私と居たくないから」

「そんな事はしない。現に喜多さんとは約束もしてないし、何で訪ねて来たかも分からない」

俺がインターホンの音声会話をエントランスと繋ぐ。

「も、もしもし喜多さん？どうした？」

『あつ、先輩！そちらに伊地知先輩はいらっしゃいますか？』

「え、居るけど何で？」

『実はひとりちゃんが何故かスマホを持ったまま、ライブハウスの近くで即身仏になっているのを見つけてしまつて。店長も手を離せないそうだけど私一人でも大変で……』

店長に訊いたら伊地知先輩がこちらに居るって聞いたんです』

「え、そうなの？」

『何度電話しても応答しないので、何かあったのかとマンションに来たんです！』
そ、即身仏……ひとりか？

もはや変身ではなく、生死すら自由に行き来できるくらいになったのか。生命の法則を超越してしまう親戚に戦々恐々とさせられるばかりだ。

ん？

喜多さんが何度も連絡しても答えなかった？

ちらりと虹夏を見ると、暗い表情で俯いている。

「虹夏に連絡してたらしいけど」

「……うん、気付かなかったみたい」

これは流石に分かる。

この為に通知をオフにしていたのだろう。

虹夏は小さくため息をつく、居間へと戻って自身の荷物を持ち、玄関へと向かう。

「ごめん、一郎くん。今日は帰るね」

「あ、おう」

「でもね」

ぐい、と唐突に襟を掴んで引き寄せられる。

つよ——!?

踏ん張る間もなかったので、されるがまま体勢を崩した俺の顔を、虹夏の両手が挟む。そして……………。

「……………ぶはっ。えへへ、もう一郎くんの言う事なんて信じない。——次は無いから」

たっぷりと『一郎の味』とやらを堪能した虹夏が笑った。

レベルアップは、俺には無理だった。

♪
♪
♪
♪

その日の晩、私は自分の部屋で悶えていた。

覚悟していたけど、実際の感触は違う。

「~~~~~っ!!」

一郎くんとした感触が私の唇からずっと離れてくれない。

やっと、やっとだ。

これまで色んな不幸が重なって何一つ進展が無かったけど、ようやく私から行動できた。

リヨウと付き合ってた、なんてウソで私を撒こうとしたりするのは……本当に迷惑だからなのかな。

どちらにしても、逃してあげない。

一郎くんを救きたいなんて願望より、今はもう一郎くんが欲しい。

私は『箱』を抱き締めて、笑みの溢れた口元を手で覆う。

「次、絶対に」

おまけ

一郎「リヨウ、弁当代五百円返せよ」

リヨウ「はい」

一郎「え、っ……あ、あのリヨウが直ぐに返せる、だと……!?!」

リヨウ「いつもご飯作ってくれてるお礼の五百円」

一郎「ソレは五百円で済まされんぞ」

夜道のダークポイズン

バイトが休みとあり、ソファアーに体を沈み込ませながら映画を観ている。

映画『ジョン・ウイ〇ク』。

普段は他のジャンルに比べたら選択率の低いアクション物だが、偶にこうして爽快感のある物を欲してしまうのは人間の性なのだろうか。

最近は物事を深読みする癖がついてしまった。

アクション物の激しい動作や音の演出だけに集中したいというのは、きつとそうした自分の日常への疲労感を犇犇と感じてしまつて逆に痛い気もするが。

「二郎、見て。——じゃじゃーん」

パーカーを着たりヨウが、俺の目の前で両腕を広げてお披露目する。

夏に着用していたバンドTシャツ同様に胸部で白い『結束バンド』のロゴを掲げた以外は、黒を基調にした至ってシンプルなデザインである。

しかし形は普通のパーカーではなく、オーバーサイズで七分丈の袖というのが何ともまたリヨウに似合っている。口にすると調子に乗るから褒めたりしないけど。

たしかに、季節は変わっている。

活動するなら適応すべく衣装の変更もあるだろう。

あれからライブもまだ何もしていないので、現状でファンとして衣装の変化をいち早く知れるというのは身近な人間冥利に尽きるというご褒美なのかもしれない。

そんな部分を加味して、きつとりヨウは自慢したかったのかもしれない。

ただ……。

「いや、知ってる」

「えっ」

「虹夏がロインで見せてくれたし」

つい昨日だ。

虹夏が完成したパーカーを自ら着用して自撮りした写真を送信してきた。

勿論、俺は驚いたし褒めたりもした。

そしたら『どうせリヨウのにしか興味無いくせに。嘘つき』という辛辣なお言葉を賜

り、数時間くらい心の痛みを味わうツライ体験をした所為か、パーカー関連で今いち感動できない。

俺の崩れない仏頂面に、リョウが眉を顰める。

目論見が外れて気を損ねたか。

悪いとは思うが、許してくれ。

「私とはそんなにロインしないのに」

「そつちかよ」

「虹夏には優しいんだ？」

「命とか色々と懸かっているからな」

「昨日だって私のロインに応えなかった」

「オマエ家にいたからな」

むしろ、昨日オマエからロインなんて来ていない。

ロイン使わなくても大抵は隣にいるし。

家に居すぎてどんな遣り取りも直接で済むので、リョウとのロインのトーク履歴を見ると確かに他に比べて会話量は少ない。

逆に、リョウの滞在時間の長さを痛感するようで悲しい事実の再確認でもある。

拗ねたりリョウがソファアーに寝転ぶ。

俺の膝を頭の下にして、ふうと細く息を吐いた。

「一郎、私のこと好き？」

「急にどうした」

「何となく」

「嫌いではない……けど、好きというには何か足りない」

「ふうん」

らしくないな。

基本的に他人がどうでもいいリョウが俺の気持ちに気にするなんて。

「リョウは？」

「何が」

「俺の事、その、どう思ってる？」

「ムツツリスケベ」

「顎で飯を食う日常に飽きたようだな」

もう二度と喋れないように破壊してやる。

俺の怒気を感じ取ったのか、ぶるりと血の気の引いて顔でしがみついて来る。……いや、逃げないのかよ。

取り敢えず、腹癒せに膝上のリョウの鼻を軽く抓む。

苦しそうな声が聴こえるのを無視し、映画を楽しんだ。

エンドロールに入った時、手を噛まれた痛みで下に視線を落とす。

じつと、リヨウがこちらを見上げていた。

「一郎」

「ん？」

「虹夏の部屋に『箱』があっただけけど……何も無かったんだよね？」

「辛うじてな」

「一郎は押しに弱いから、流されるって心配してた」

「……そんな軽い男に見えるか？」

「モテ始めた陰キャって暴走するし」

「モテる、とは何か違うだろ……」

今のところ、純粋に俺を恋愛的観点で慕ってくれているのは虹夏だけだ。

リヨウは……よく分からない。

居心地が良いから俺と一緒にいるのは確かだ。有り難いようで超迷惑でもあるのだが、果たしてコレが恋なのかと分析するには俺の経験も知識もまるで足りない。

「そういえばだけど」

「なに?」

『『結束バンド』には俺たちの関係って話したのか?』

「……………話した」

「なに?今の間は」

最近は何々が不穏な反応ばかりを見せるものだから、俺は少しだけリョウに詳しく聞いた。

その情報によれば、俺とリョウの交際関係はほんの些細な話題から持ち上がったようだ。

この前の路上にて石化した件で、ひとりが喜多さんと虹夏に篤く礼を言つて、二人に迷惑をかけたと意気消沈し、虹夏は気にしないでとそれを宥めた。

すると、喜多さんがあの時に何故俺のマンションに居たのかと尋ねた。彼女にとっては、電話に応答しなかった部分も含めてかなり気になっていたのだ。

虹夏はそれに対し、ただ俺との遊びに夢中になっただけと答えた。

『わーっ、伊地知先輩って前田先輩と仲が良いですね!』

『うん、そうだねっ』

『へー、実八付き合つてタリするンでスカー?』

そこで。

『ううん。一郎と付き合ってるのは私』

と、リヨウが爆弾を投下した。

ライブハウスが凍りついたらしい。

聞く限りでは、喜多さんが結束バンドで自分の手首を強く絞め始めたり、ひとりが笑顔で泣きながら俺の名前を連呼し、虹夏は蒼い顔で口を押さえてトイレに駆け込んだという。

……情報量が多くて処理できない。

虹夏のは明らかな拒絶反応だと推察できる。

喜多さんはなぜ自傷行為に走ったのか分からないが、ひとりに関してはやはり身内のように思っていた相手がリア充が現れたというので衝撃を受けてバグったのだろう。

何とも恐ろしい状況だ。

そこに居合わせていたら呼吸が出来なかったかもしれない。

『イツカラですか?』

『文化祭の後。一郎が私を好きすぎるあまり食べてしまつて、そこから』

『前田先輩って情熱的なんですね……私も用心しておかないと駄目だわ……』
♡』

ひっ。

喜多さんの事が全く分からない。

『あつ、あのっ』

『ん?』

『あつ、いえ何も……(将来は私と結婚するから、いつか別れちゃうのに大丈夫なのかな?)』

ひとりは何を言いたかったのだろう。

もしかして、健気に言祝ごうとしてくれたのか。

人の事を真剣に想えるひとりならば俺のような人間の些末な出来事でも祝い事として捉える。いつだって俺の心の平穩を乱した事のない天使だからな。

因みに、虹夏はトイレから戻って来たがリヨウが何を言ったのか全く憶えてなかったらしい。

気付いたらトイレに居たとか……。

深掘りはしないでおこう。

今日は何も考えない、よし。

「——って感じだった」

「……そう、か」

「まさか、あんなに祝福されるとは」

「オマエも記憶を失って……?」

特殊な脳を持つリヨウなら有り得なくも無い。

どこに祝福された感があるのだ。

聞かなければよかったと思う程に、皆の反応が恐ろしい。正直、虹夏は俺ではなくリヨウの言葉なら少しは信用すると一縷の希望を懸けていたのだが、やはり無駄だった。

どうすれば認めて貰えるのか。

「そ、それで、バンドの調子は?」

「頗る良いけど」

「あ、そうなの?」

「郁代は歌に感情こもってて迫力凄いし。虹夏のドラムも何か鋭さ増したし、ぼっちも合わせが少しずつ上手くなってる」

「ほ、ほう」

特に問題が無いなら、別に良いか。

これでようやく、ちゃんとしたファンとしてライブに行けそうだ。

「私はこれで一安心した」

「え？」

「これで名実共に家でタダ飯を食らっても周りから怒られないし」

『『人肉 調理 美味しい』で検索、つと……』

どうせ殺るなら、美味しくした方が無駄にならないかもしれない。……おっと、最近そういう映画を観た影響でつい変な方向に考え方が偏ってしまう。

相手は山田リヨウだ、深く考えるな。

……そういえば。

「ご両親は何か言ってたか？」

「……………」

リヨウの顔が急に険しくなる。

思い出したくもない、というような顔だ。

何なんだ、一体。

「どうした」

「今まで何をしてても嫌われなかったから、今回はインパクト重視で『一郎にハジメテを奪われて、成り行きで付き合う事になった』と話した」

「何してんだ何してんだ何してんだ」

リヨウを溺愛する両親からすれば、俺の抹殺を決行させるに至るほどの情報だ。

第一、よく生みの親にそんな生々しい話が出来たな。

生みの親では無いが育て親の前田夫妻にだつて、俺はそんな命知らずなカミングアウトはしない。

だ、駄目だ……予想される反応が怖い……。

「そしたら」

「やめろ、聞きたくない」

「そしたら『まあ、彼が婿なら文句は無いよ。むしろウチのリヨウちゃんを前に、ここまです我慢した時点で僕らは聖人みたいに思つてたし』つて」

「ひいひいひい!!」

思つてたのと違う方向で聞きたくなかつた!

親の公認なんて貰つても何も嬉しくはない。

以前の両親や虹夏たちに伝播したような誤解ではなく事実なのは確かだが、将来を見据えた熱量を有しているかと問われると困る。

……何だろうか。

関係性をハッキリさせた上で周知させる事で未然に面倒事を避ける方策だったのだが、逆にリヨウの手で外堀を埋められている気がしてならない。

人間関係が複雑になるのは、リヨウが最も望まない事だ。

詳しくは訊いていないが、辞めたバンドでも一悶着あったのは大体様子を見ていて想像がつく。

特に今回の『結束バンド』に懸けるリヨウの気持ちは強い。

これまでの言動は、狙っていた？

いや、気の所為だ。

その場の空気、脊髓反射で物事に当たっているような思考をしているリヨウなのだから、そこまで深い意図は無いはず。

「ねえ、一郎」

「あ、え？」

そうだ、きつと。

「そろそろご飯は？」

無い筈だ、絶対に。

♪

♪

♪

♪

バイト帰り、暗澹とした気持ちで帰途につく。

周囲は既に暗闇だが、きつと今の俺の方が濃い闇として景色を歪めている筈だ。

「ライブ、行きたかったな」

今日は『結束バンド』のライブだった。

聞いた時は楽しみにしていたのだが、ライブの日がバイトと重なっている事に絶望感

を覚えた。代わってくれそうな休みの人を探しはしたが、誰も彼もその日は旅行だった。り外せない予定が入っているそうだった。

断念、せざるを得なかった……。

因みに、虹夏や喜多さん、ひとりからもチケットを売られたが、全て断るのは大変だったな。

特に、ひとりの時は胸が張り裂けそうだった。

くふ……帰り道は一人だし泣いても良いよな。

「——痛アツツツ!?!」

「いたつ、何か飛んできた」

沈み込んでいたら、何処からか飛来した物体が俺に衝突して跳ね返る。

目の前で倒れた物体は、人の形をしていた。

外見から察するに、小柄な二十代前半の女性だ。地雷系と呼ばれるであろう目に刺激の強い色と装飾で彩られた服装は、俺の周囲にも中々いない迫力だ。

それにしても、随分と軽いな。

衝突に際して、運動部ほど鍛えてはいない人間の体幹をあまり脅かさず自身が跳ね返

されるといふのは不安になる重量だ。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい！こんなもんへっちゃらですよ！」

「怪我が無いようなら何よりです……ん？」

「尻餅を突いて痛がる女性に手を差し伸べようとして、ふと足元に落ちていている物に視線が吸い寄せられた。」

名刺だ。

郁人さんに貰った物よりも、多色のデコレーションを施されたカラフルなデザインのそれに思わず注目してしまう。相手から渡されたワケでも無いのに確認してしまうのは個人情報的にもアウトかもしれないが——ん??

「……ぼいずん♡やみ、14歳……?」

……。

俺の観察眼が誤っていたのだろうか。

だが、どう見たって14歳には見えないし……名刺を持ち歩く14歳というのが想像付かない。無理のある年齢の詐称、地雷系、夜中の遭遇……。

俺はそつと、名刺を地面に置いた。
そして。

「それじゃ、失礼しました」

「ちよつ、急にドライじゃん!!」

「離して下さい。警察呼びますよ」

「さつきまでの真摯な対応はどうした!」

最悪だ。

相手に怪我をさせたかもしれないと申し訳ない気持ちがあつたから、落ち込んでいても相手へ丁寧な対応を心がける事ができた。

だが、生憎と目の前の人物がメンタルも体力も損なわれた現状で相手取るには不利にも程がある爆弾ならば話は別だ。

「失礼な人ですね、全く!」

「すみません。たしかに、自分を若く見せたいっていうのは普通の心理ですよね」

「フオローに偽装した攻撃やめてくれない?」

会話が続けば余計なストレスが増える。

……それにしても、香水の匂いが凄いな。

「無事なら良いんですよ。俺も前を見ずに歩いていたので謝罪します」

「つもう、何なのよ！こっちはギターヒーロー様を見つけて凄く良い気分だったのに！」

「ギターヒーロー……？？」

「あつ、アンタ知ってる？」

「ええ、まあ。動画観ますし」

何故ここでひとりの事を？

それより、ギターヒーローを見つけて……という事はまさか、この毒♡闇なる女性は『STARRY』で『結束バンド』のライブを観て来たというのか！

う、羨ましい。

俺は観れなかったのに……またストレスが……。

「そう！その人がバンドやってたの！」

「はあ」

「でもね、周りには秘密にしていたみたいで。高校生バンドなんだけど、確かに高校生にしては上手いけどギターヒーロー様を埋もれさせとくには勿体ないレベル」

「……………はあ」

「今まで色んなバンドを観てきたから分かる！絶対にあの人は他のバンドに紹介して、真の実力を発揮して貰わなくちゃ！」

……………。

随分とひとりの技量を買ってくれているようだ。

そこは素直に喜ばしくも思える。

ただ、『結束バンド』がそれを縛り付けているという毒♡闇の反応には、今一賛同しかねる。

ひとりは人見知りだからバンドで実力を発揮できないだけだ。何処に紹介されたつて、恐らくそれは変わらないだろう。

技を見ただけで本人の気質までは見えてないようだ。

「一応、忠告はしたんだけど……あの様子じゃねえ」

「忠告?」

「そつ。バンドメンバーに大人として忠告した。『ガチじゃないなら、ギターヒーロー様の足引つ張るのはやめろ』って感じの」

「……………なるほど」

この人、きつと『結束バンド』にわかだな。

俺が思わず笑みをこぼすと、毒♡闇が不快げに眉根を寄せる。

「何が可笑しいのよ」

「いや、そりゃそうでしょ」

「……………?」

「俺もそのバンドを知ってますし、ギターヒーロー張本人も把握してます。ただ、結成して未だ数ヶ月ですから、人見知りで他人と合わせるのが苦手の彼女では環境をいきなり変えても無駄骨ですよ」

「そんな事無い！ギターヒーロー様のポテンシャルなら……！」

「バンドなんて本人たちが如何に楽しむかでしょ。今はまだワンステップ踏んだだけのヒヨッコ状態の彼女らにそこまで要求するのはキツいと思います」

「そんな甘い事言っちゃって」

「あと」

毒♡闇が何か言いたげだが、構わない。

この後が、俺の一番言いたかった事だ。

「後藤ひとりには、ギターヒーローであるのを事情があつて隠しています。それも精神的な部分が大半を占める理由です。気付いたにしても、それを暴かれた挙げ句に彼女が大切にしていた同じバンドメンバーを貶めるような事を言う人間から受けた紹介に応じますかね?？」

ひとりは、常々不安だと言っていた。

ギターヒーローは上手だと世間に持て囃されている。だが、それはソロに限った話。

孤独な世界で努力し、積み上げてきた力だ。

それが複数人での演奏になり、協調しようとした途端に唯一性が崩れてしまつて、むしろその不安定さが下手だと低評価を受ける原因となつている。

ギターヒーローの名を喧伝しながら、バンドでは人見知りで十全に演奏できないなんてなれば、ファンを失望させる上にバンドメンバーにより酷な思いをさせる未来を危惧していたのだ。

事情を知らなかったとはいえ、幾らギターヒーローを評価する人間とはいえ、忌憚ない感想を述べる貴重な観客だったとはいえ——流石に踏み込み過ぎだ。

「毒♡闇さん」

「え、毒……闇……？ぼ、ぼいずん♡やみなんですけど?」

「貴方が14歳と若く見られたいが為に年齢を隠そうとするように、彼女にもまた秘密にしているなりの事情があるんです」

「……………」

『『結束バンド』のファンの一人として、彼女を知る人間として、どうかそこを配慮した上で彼女らに接してあげて下さい』

毒♡闇は何かを言おうとして、しかし直ぐに口を閉ざして頭を掻いた。

「た、確かに知らなかったとはいえ言い過ぎたかもしれない。悪かったと思う……ケド！」

「ん？」

「あたしは色んなバンド見てきて、アレで本気とは思えない……高校生バンドって状況に甘んじて遊んでるだけに見えた」

「はい。貴女の意見はまた貴重な物に変わりないと思います。だから、次からは言い方を変えて欲しい……それだけです」

「……ふん、アンタはあのバンドの何？」

「ファンですよ。……今日は……今日はバイトで行けなかった……」

「うわ、急にジメジメしないでよ!？」

あー、思い出したら気分がまた落ち込んできた。

取り敢えず、ずっと腕を掴んでギターヒーローの素晴らしさを語り始める毒♡闇の手を優しく振りほどいた。

「では、夜は危険だから気をつけて帰ってくださいね。一応、14歳って体裁なので補導されない内に」

「アンタ本当はあたしの事キライでしょー!?!？」

ギャンギャン吼える自称14歳から逃げるように走り、俺は家まで何も遭遇しないよう祈った。

家に帰って、ご飯を食べて、さっさと寝る。

そして、ストレスをリセットして――。

「――なに、この匂い?」

帰ったら、不機嫌なリョウがいた。

玄関で俺を迎えた彼女の顔はやや暗かったが、その鼻が何かを感じ取った瞬間、一変して険しい眼差しを俺に投げかけてくる。

匂い、とは。

飲食店に務めているが、基本的にバイト中は店の制服だから学生服には付いていない。ともすると、もしかして俺が汗臭かったのだろうか。

自分の袖を嗅いで確認する。

うゝ……キツイ香水の香り、まさかあのぼいずん♡やみなる凶悪な生き物の残り香か。

まづいな。

別にこれくらいは洗濯で落ちるので生活に支障は無いが、問題なのはリョウに嗅がれたことだ。

きくりさんのとき然り、コイツは噛み跡だったり他人の匂いがあると攻撃して来る。ここ最近は無かったから、すっかり忘れていた……。

「……バイトじゃなくて女遊びだったんだ、ロックだね」

毒♡闇、次会ったら覚えてろ。

BADEND 「やさぐれ悪魔と天使様」

とある居酒屋店内の一面を占有し、卓を挟んで向かい合う四人は一斉にお酒の入ったジョッキを掲げた。

「乾杯！」

「かんぱーい」

「ん」

「か、乾杯です」

相変わらず結束感が無い。

こんな簡単な号令すら揃わないのに不快と思わず私達らしいと感じてしまう辺り、やっぱり皆の相性が良いんだなって逆に笑えてしまう。

そんな風に感傷に浸りながら、私——伊地知虹夏もビールを呷る。

この喉越しを楽しめるようになったところも、四人が集まった頃から随分と時間が経った証だ。

「ぶはーっ」

「今日の番組出演、大変でしたねっ」

「ホントね。深夜の音楽番組だけど、それでも着実に進んでるって実感するなあ」

「目指せ、ゴールデン」

「リヨウ。仕事でお金入るからって無駄遣いするなよー」

「うっ」

ちびちび飲んでいたりリヨウが肩を落とす。

お酒が弱いので、いつも彼女の飲むペースは注意して見ている。

この前の酔った時でも大変だった。

頻りに『あの人』の名前を呼び出すから、そうすると一気に私たちの気分も変わってきってしまう。

「に、虹夏ちゃんの夢も叶いつつありますしね」

「……えへへ」

下北沢のライブハウスを起点に始めた、私の夢への第一歩——『結束バンド』は、相応に予想以上のアクセシビリティや挫折を経験しながらも活動し続け、音楽業界に目をつけて貰える程度のパバンドになった。

今回も深夜の音楽番組に出演。

まだ知る人ぞ知るバンドで、そういうバンドに目をつけるディレクターに出演させて頂いた。『STARRY』の宣伝もしていたし、観てくれた人たちが来てくれるかもしれない。

楽しみだなあ。

「店長、喜んでるだろうね」

「あはは、昨日番組録画しようと思ったたら既にされてて……たぶんお姉ちゃんだと思う。本人は気付かれてないって感じだろうけど」

「相変わらず」

談笑する私たちの話題は絶えない。

家族よりも一緒にいるのに、お互いに話したい事が沢山ある。

不思議な絆だ。

ここまで来れたのも、コレがあったからだろう。

ただ、会話が弾みすぎるとつい余計な方向に走る事もある。

「私の友だちも観てくれるそうですっ」

「喜多ちゃん友だち多いからね。拡散力が凄そう」

「はい！沢山の人が見てくれますよ！そしたら——」

例えば。

「——きつと、何処かで前田先輩も観てくれますよね！………あ」

言い終わってすぐ、はっとした喜多ちゃんが自分の口を手で覆う。

彼女の一言を皮切りに、明らかに空気が変わった。

折角リヨウを酔わせないようにして話題にも上がらないよう注意していた『あの人』の名前を、喜多ちゃんに言わせてしまった。

ちら、と隣を盗み見る。

すると、案の定ぼっちちゃんは沈んでいた。

凄まじい罪悪感の所為か、いつものごとくシヨツクで変幻自在に形態を変えるはずのぼっちちゃんが強すぎる衝撃に変形すらしていなかった。

ジヨツキを両手で持って、俯いているだけ。

喜多ちゃんもさつきと一変して暗い顔だ。

リヨウは涼しげな顔………をしているが、その実は凄くイライラしている。

「そ、そうだね………」

「あれから連絡も無し。………私にくらいは相談すべき」

「リヨウとは大学行っても付き合ってたのにね」

前田一郎。

私やリヨウのクラスメイトで、ぼっちちゃんの親戚の男の子だった。

その付き合いは『結束バンド』が結成する以前からで、活動自体には特に関与していなかったけど、熱烈なファンであり、ファン以上に距離が近い関係だった。

そして………リヨウの元恋人。

何ならリヨウを溺愛する彼女の両親から許嫁認定までされて、自堕落なりヨウが苦勞しなくて済むようにと難関とされる某大学の医学部に進学して将来は山田夫妻の病院で働く人生設計まで立てて動いていたくらい。

その献身っぷりは、彼を想っていた女子からすれば嫉妬してしまうほど優しかった。でも、ある日だ。

大学卒業の日、一郎くんの友人や親戚の郁人さんが祝いに会場へと現れた時、彼の母方の親戚の一人が自動車で全員が集めた場所へ突っ込んで来た。

現場は大惨事となり、生存者は一郎くと自動車で突っ込んだ親戚のみ。彼を庇った郁人さんや友人は全員死亡した。

犯人の動機は、やはり一郎くんの母が若くして死んだにも関わらず、彼女の命を犠牲に生きる彼が幸せに生きている上に、郁人さんから邪険に扱われるようになったのも一郎くんの所為で堪えられなくなったそうだ。

殺してしまおう、二度と立ち上がれないようにと。

ただの逆恨み、見苦しいにも程がある憎悪。

しかし、その親戚の目論見は形は違えど完遂された。

自分の所為で犠牲になった人たち、幸せからドン底に突き落とされた一郎くんは、あまりのショックで自暴自棄となり、暫く誰とも会わず引き籠もってしまった。

皆が心配する中、遂には家からも消えた。

あれ以来、彼の消息は知れない。

恋人だった事もあって、リヨウは特に心配している。

「立ち直って……他のところで幸せにしてたら良いですね」

「見つけたら引き摺って連れ帰る」

「……無事なら、良いんです……それだけで……！」

泣き出すぼっちゃんを私は撫でた。

楽しかった宴会が、すっかり哀しいムードに包まれている。

それからの会話は目に見えて減り、今日はぎこちない解散となった。

解散後、私は家に帰らず都内に借りたマンションの一室に入る。

実は家族に、お姉ちゃんに秘密で契約した。

私は早速扉を開けて、中へと入る。

途中で買った惣菜などの入った袋を提げて居間に向かう。

「ただいま——一郎くん」

そう言うと、舌打ちが聞こえる。

居間の中心で、布団に包まっている男の人——一郎くんから発せられた音だ。

周囲には空き瓶ばかり。

室内はお酒の臭いがすごくて顔に出そうなのをぐつと堪える。ライブハウスで廣井さんが飲み散らかすのもあって、片付けるのに慣れてるから別に問題ないけどさ。

「三日に一本って約束したでしょー?」

「……………」

「もしもし」

私が尋ねると、一郎くんはヘッドホンをした。

全く、子供っぽい反抗しなくてもさ……かわいい。

近付いて見ると、ヘッドホンから微かに音漏れしている。無線式で同期させているであろうスマホ画面には、『結束バンド』の曲名が表示されていた。

……えへへ。

何だかんだで、私たちが好きなの知ってるんだよ？

一郎くんは、変わってしまった。

消息を絶った彼を私が見つけたのは、二年ほど前だ。

大学の同期だった友達と飲み会を開いた時に、その店先で知らないお姉さんに奢られて酒を飲むやさぐれた男を発見した。

その顔に既視感があつて、最初はぼーつと見てたけど、お姉さんに呼ばれた名前が『一郎』って事で確信した。

尋ねてみたら、案の定私の知る前田一郎だったし。

そこから『強引に』引き取って、リヨウにも会わせようとしたけど強く拒絶されたから、仕方なく彼が立ち直るまでと諦めた。

それから、根無し草でいつも女の人の家を転々としていたらしい彼に、私は部屋を契約して出歩かなくても良い環境を作った。

外で飲んだくれて倒れられても困るし。

そんなこんなで、気づいたら二年……進展は無し。週に何回か様子を見に来て、ご飯を作ったりしている。

感謝された覚えは無いし、逆に邪険に扱われるけどさ。でも、ご飯を作ってあげた時。

『……………うまい』

基本的に私を無視したりするのに、ご飯を食べたら短い感想を口にしてくれる。

あと、荒んで変わった顔つきが、一瞬だけ柔らかくなるのだ。

それを目にした時、私はすっかり彼に甘くなってしまうんだと思う。

私だけが場所も状態も知る一郎くん。

少しだけ、ほんの少しだけ……優越感があったり。だから誰にも言えていない。

「一郎くん、デートしようよ」

「構うな」

一郎くんが公園を歩いている。

健康の為に、私が背中を押して家から出したのだ。

隣を歩く私には一瞥もくれず、嫌そうな顔だった。

「一郎くんが健康的な生活を送れるようにするのが私の使命だからね」

「……俺が健康的になったって、幸せになろうとした途端に誰か死ぬんだよ」

「そんな事」

「どうせ虹夏も俺という内に死ぬんだから、そうならない内に早く消えてくれ。ウンザリだ」

一郎くんは、誰かが近くにいる事が怖いようだ。

また失うのではないかと怯え、失ったら今度こそ死んでしまうほどに弱っている。

「大丈夫」

「は？何が大丈夫だよ？」

「私は絶対に一郎くんの傍から消えたりしないよ」

私の言葉に、心底から怪訝な顔をする一郎くん。

でも、再会したばかりの頃なら「気持ち悪い」とか「纏わりつくな」とか言いそうなのに、今は言葉の真意を疑う——否定や拒絶から入らない辺り、段々と私を受け容れてくれているのだと手応えがある。

良かった。

この調子で良い。

いずれ、彼がいろんな物を受け止めて再び立ち上がれるようになれば、きつと。

「ただいまー」

三日ぶりに帰ると、やはり一郎くんは布団にいた。

酒瓶は処理した筈なのに、また増えてる。

今日は最初からヘッドホンをして、私の話なんて一切聞かないつもりだ。……も
うっ。

「……………」

ふと、台所を見してみる。

すると、ラップされた食器などに加えて、鍋に入った肉料理と味噌汁が目に入り、横
にはレンジでチンをすれば炊けるご飯が用意されていた。

流し場には、既に食事した形跡のある椀とお皿。

そして…………『もう一人分用意されたお皿』が台所には置いてあった。

……………うそ。

もしかして、私の分も…………？

嬉しくて、思わず寝ている彼に抱き着きたくなる。

それをぐつと堪えて、まずは片付けから始めた。

ゴミを捨てていくけど、途中で飛び跳ねたくなる衝動を抑えるのに必死になり、湧き上がる歓喜で何度も中断させられる。

少しずつ、少しずつ。

私の事を、受け入れようとしてくれているんだ。

「大丈夫、これからだよね」

私が酒瓶を片付け終わって、一郎くんが作ってくれたご飯を食べようとした時に寝息が聞こえ始めた。

振り返ると、音楽を聞いたまま寝落ちしてしまっただらしい。

高校時代から変わらない寝顔。

私はその頬を指でつつく。

「もー、また無駄遣い」

もう少し触っていたいけど、起きたら怒られそうなのでやめておく。

そつと、ヘッドホンを取り上げた。

……………ん？

聴こえてくる音は、『結束バンド』の演奏には間違いないけど、少し違和感がある。

あれ……これ。

「……………リヨウの、ベース」

それは、リヨウのベースのみに絞った音声処理が施された『結束バンド』の音楽だった。

よく見れば、スマホ画面の表示には曲名の横に『(R・Y)』とある……山田リヨウ、つてこと？

私は音楽を止めて、ヘッドホンを床に置く。

へえ。

やっぱり、リヨウの音楽が好きなんだ。

いなくなる前から、ずっとリヨウ推しだつて言つてたのは変わらなかつたよね。本人の人格じゃなくて音楽だとか照れ隠しに言い訳してたけどさ。

未だに彼の中には、強くリヨウが焼き付いているんだ。

「……これだけでも、何でリヨウなの？私だって力になりたくて、これだけやってるのに、まだリヨウなの？」

もう——私の、私だけの一郎くんなのに」

口説いてると気付かずに

毒♡闇の香水でリヨウが野獣と化し、これをどうにか鎮めて遅すぎる晩飯を作っていた。

既に十一時を過ぎている。

体力も削られて、もう風呂に入ったらそのまま寝ようと考えた俺に、愛しくない恋人から飯を作れとの命令を賜った。

クソが。

「ん。もう起きれるのか」

「い、一郎の鬼畜……」

「いや、何か途中から腹が立って」

何にとは言わないが。

ふらふらと居間に来たリヨウが、机の上で何かを始める。

気になったが、料理の手を止めたらまた文句を言われそうなので、早く餡掛け焼きう

どんを仕上げる。この時間帯に食うと女子から途轍も無い響感を買いたいような料理だが、リヨウは気にしないだろう。

……気にしていたなら、むしろザマア見ろ。

『未確認ライオット』？』

配膳の時、リヨウが勝手に俺のPCを使って調べ物をしていたので気になって後ろから覗いたら、検索ページに『未確認ライオット』と出力されている。

概要欄を見れば、出場対象を十代アーティストに限定したロックフェスらしく、優勝まで四つの審査を乗り越えなくてはならない。

毎年の如く出場するアーティストが多いので熾烈な争いになるが、その分でも業界が注目しているフェスでもあるので、ここからメジャーデビューを果たした例があると思われる。

こんな催しがあるとは。

リヨウや虹夏、身近に音楽をしている人からよく話は聞いているが、やはり自分がまだこの業界への知識も認識もかなり浅いのだと思いきらされる。

「これに出るのか？」

「……色々あって」

「色々、って今日のライブで何かあったのか？」

「別に」

「……………ぽいずん♡やみ」

ぴくり、とリヨウの柳眉が動く。

やはりか。

どうやら、『結束バンド』に忠告なる厳しい言葉を投げつけたというのは本当だったらしい。顔と外見に似合わず……………いや外見通りのキツい人のようだ。

あれを受け止めて、リヨウは『未確認ライオット』を調べた……………何故？

「どうして、これを？」

「……………今日、私たちの音楽がお遊びだって言われた」

「……………」

「別に遊んでたつもりじゃないけど、確かに本気でやつてるバンドからすれば悠長なのかもって思ってる」

「だから、ソレに出場して自信を付けようって？」

「……………うん」

お遊び、か。

最初から明確な目標を持って行動する連中と比較すれば遅いというリヨウの意見も、あながち間違いではないのかもしれない。

ただ、やはりバンドとはグループ活動である。

足並みが揃わなければ必ず何処かで破綻してしまう。

果たして、『未確認ライオット』の出場というリヨウの提案と全員の意見が合致するか否か。

「良いと思うぞ」

「本当に？」

「嘘言つてどうするんだよ。……ほいずん♡やみさんの意見も広く見れば確実にある物だし、そういうのを弾き返したいならうつつつけのイベントだ」

「……………」

「不安か？」

「いや。……これで失敗したら、みんな挫けそうって思った」

リヨウが検索ページを削除し、ぱたりとPC画面を閉じた。

「お腹空いた」

「……………まあ、食っててくれ」

リヨウが餡を絡めたうどんを啜り始めた。

空腹の状態で待ちに待った食事だといえのに、その横顔はやや翳りがある。

……………うーむ。

俺はPCを自室へと運び、さっきの『未確認ライオット』について再検索した。

大きなイベントだからこそ失敗の体験が強烈になる、か。

リヨウの危惧は尤もだ。

これで、むしろ自身らの実力の無さを痛感して断念するなんてアーティストの話は、きつと俺が知らないだけで有り得るのかもしれない。

では、『結束バンド』は？

俺の知る彼女たちは——。

「ん？」

悩んでいると、スマホが着信で震える。

喜多さんからだ。

「もしもし」

『もしもし、先輩。今、少しお時間よろしいですか？』

「何、そんな物凄く畏まって」

『実は、今日のライブで』

「……どんな事があつた？」

先を催促すると、喜多さんが説明し始めた。

概ねほいずん♡やみの自供とリヨウの話と同じだ。

『みんな、今回の事で自信を失っちゃったかもしれないくて』

「……つらいな」

喜多さんの相談事もそこか。

ギターヒーローにしか着眼されないバンド、ぽいずん♡やみが世間の総意ではないけど、虹夏たちにとっては無視できない。

突きつけられた事実には、気にせず次に行こうなんて判断をしたら、それこそバンドメンバーの関係に亀裂が入る。

慎重に考えなくては、薄氷を踏み抜く危険な状態だろう。

俺は部外者だから、一体どうやって彼らを支えられるだろうか。

かける言葉もまた選ばなくてはならない。

どう、すれば……。

『はい。だから、考えたんです！』

一人で悩んでいたら、喜多さんが声を張る。

「え？」

『皆に自信が付くような何かが無いか探したんです！』

「ん？というところ？」

『先輩、『未確認ライオット』って知ってますか？』

.....。

喜多さんの口からその名前を聞いて、俺は思わず。

「は、はははは」

「えっ?」

笑ってしまった。

え、と若干引いたような喜多さんの声がある。

ごめんなさい、真剣に悩んで出した答えに失礼な反応だったよな。

『ど、どうされたんですか?』

「いやいや。思わず感動しちゃって」

『え?』

「いや、こつちの話」

『.....?』

「喜多さんのお陰で、俺も背中を押す覚悟が決まったよ」

俺はカーソルを『印刷』に合わせ——思い切ってクリックした。

居間へと戻ると、既に俺の分の館掛け焼きうどんは冷めていた。

かなり時間が経った証拠である。

どうやら、存外俺もかなり悩んでいたらしい。

リヨウもすっかり食事を終えて、映画鑑賞を始めていた。……もう十二時なんだが？

作品名は『ジエーン・〇ウの解剖』。

ジャンルはホラー、俺も一度は観たやつでラストシーンはいつ思い返しても絶望しかない。……それを十二時に??

「リヨウ」

「……………」

「これ、観た後に寝れないとか言うなよ」

「……………」え、グロいの?」

「いや、そんなに」

「なら大丈夫」

「オマエ、この前もそう言つて俺の布団に潜り込んで来ただろ。マジでやめろよ、突然過

ぎてひつとか変な悲鳴出たし」

思い出したくも無い。

ホラー映画鑑賞の後、一人で寝ていたら「キィイ……」とか不気味な軋みを上げて扉がゆつくり開き始めて、その後に布団の中を何か別の物が這い上がってくる感覚がした。

恐る恐る確認したら、人の目。

これで近所迷惑になる音量を爆裂させなかった俺は称賛に価する。

そして、それが山田リョウだと気付いて蹴り出さなかった部分もまた素晴らしい。

「一郎も怖かったんだ」

「映画じゃなくて、オマエがな」

「布団に女の子が入り込んでくるなんて怖い要素無いでしょ」

「むしろホラーの定番シチュエーションだよ」

女性の霊は、ホラーではよく観る。

布団の中とかテレビとか窓から奇襲を仕掛けてくるのは定石と言っても過言ではない。

「でも今日は大丈夫」

「そうか」

「寝る時は最初から一郎と一緒だから」

「日本人に日本語でも話して通じない時あるよな」

コイツ俺の話を全く聞いてないな。

呆れて会話を続けるのも面倒だったから、俺は自室から携えてきた物を机の上に置く。

リヨウがそれを見て、目を見開いた。

「……………」

「気が向いたら、持っていつてくれ」

「……………うん」

リヨウがソレを手取る。

俺が印刷したばかりの『未確認ライオット』のフライヤー。

印刷で躊躇っていたなら、俺が代わりにやろう。

後はそれをどうするか、リヨウ次第だ。

「……………あのさ」

「ん？」

「どんな結果になっても」

「たしかに『結束バンド』のファンではあるけど、俺は前提としてリヨウの音楽のファン

だから、程々に期待はするけど何をしたらって幻滅したりはしない」
「程々、つて」

ぷ、とリョウウがイラツとくる顔で噴いた。

ほんの少しだが、不安を解消できたらしい。

でも、大丈夫だ。

残りの部分だつて、きつと消えていく。

さっきの喜多さんとの電話を思い出して、笑いそうなのをぐつと堪えた。明日になればきつと、また『結束』して新しい一步を踏み出してくれる筈だ。

「頑張れ、リョウウ」

それが、俺の知る『結束バンド』である。

×

×

×

もうすぐ冬休み。

着々と受験本格化の三年生が迫っている俺からすれば何も安心できない季節の到来だが、それでも時間は巡るので世界は恨まない。

さて、どうしたものか。

「あつ。少年見つけー」

「うわ、きくりさん」

「酷いぞー。私を見てそんな反応しないでよ」

「今日は何用ですか」

土曜の午前バイトを終えた帰り道の途中、きくりさんに遭遇してしまった。

今日もまた臭いが強烈だ。

幸いにもリョウウが家に来ない日なので接触しても構わないが、これがもし彼女の鼻に届いてしまったら危険な事になる。

抱き着くきくりさんを引き剥がそうとしていたら、鼻先にチケットを突き付けられた。

「……これ」

「そう！クリスマスにやるんだよね！」

「へー。絶対行きます」

「だと思ったー。少年は私のファンだしねー」

きくりさんがバシバシと肩を叩く。

割と痛くないのは、鍛え始めたからやっぱり痛い。

「ま、少年は恋人もいないからクリスマスもバイトがノープランって感じだったろうし

！お姉さんが真っ先に持ってきてやってたんだぞ——」

「いえ、恋人いますよ」

「……………へあ？」

心底意外だったのか、きくりさんが硬直している。

幾ら引き剥がそうとしても離れてくれないので、俺はそのままきくりさんを背負って

歩き出した。

背中の上では、まだ停止状態。

うん、静かだし暴れないから運びやすい。

いつもなら一緒にいる時に目立ってしまったって凄く嫌なんだが、今日は穏やか……土曜の昼間から飲んだくれの介抱をしている少年という事で既に注目されていた。周囲からの視線がメチャクチャ刺さってる。

「うっ、う……」

「きくりさん？」

「あの少年が、どうどう恋愛までじでるなんで……私なんで陰キヤだっなのに、少年が陽キヤになっぢやっだあ〜！」

「ちよ、きくりさん。泣かないで下さい、目立つから」

俺の背中の上で大の大人が号泣し始めた。

ますますこちらを気にしだす衆目から逃げるように、俺は家までの道を早足で辿った。

家に着いて、きくりさんを床に下ろす。

まだぐすぐすと涙をすすっている。

俺に恋人が出来た事が、どうやら陰キヤのコンプレックスらしき部分を悪い方面で刺激してしまったようだ。

それにしても、俺が陽キャって。

陽キャに転向していたら、今頃はもっとクラス内で友だち増えてるはずなんだけどな。

「きくりさん、大丈夫？」

「うん、ごべんね。嬉しさ半分憎さ半分で」

「意外と半分が剣呑」

まさか、その内きくりさんに背中を刺されるなんて事があり得るかもしれない。

最近の様子だと、むしろ虹夏に背後からスネア・ドラムで頭をかち割られるかもしれないけど。

しかし、そうだな。

きくりさんは、去年から事情は知らずとも俺の孤独を理解して寄り添ってくれた数少ない大人だ。

だからこそ、変化には鋭い。

成長する我が子を見るような気分……とまではいかずとも、俺が少しずつ変わっていくのに何かを感じ取ってくれる程度には俺を思ってくれているのだ。

「何だか寂しいなあ」

「え？」

「少年には『結束バンド』っていう新しい推しもいるし、もう寂しそうじゃないし、お姉さんはお役御免かー……」

きくりさんがたははと笑う。

……………。

「いや、そんな事無いですよ」

「んえ？」

「普段はアレですけど、割とガチで俺きくりさんのこと尊敬してるし大好きですよ。あなたがいなかったら、去年は『結束バンド』の結成を待たずして折れていたかもしれない」

「え、あ」

「きくりさんが不要か必要かと言われると、まだ断然後者です。『SICK HACK』の音楽も、きくりさんの言葉も俺には絶対欠かせません」

「ま、お、ちょ……?!」

「なのでこれからも宜しくお願いします。俺はバンドマンとしてもプライベートの状態でも、きくりさんのファン辞める気はありませんから」

きくりさんは恩人だ。

そこだけは絶対に曲がらない。

俺が今も二本足で立てているのは、推しではあったがまだ寄生虫としての面が強過ぎてストレスだったリョウとか、親戚関連とバイトの疲労で色々と参っていた俺は『SICK HACK』の定期ライブで救われてきたんだ。

今年の一年を、それこそ『結束バンド』結成を耳にするまで生き残れたのは、きくりさんもいてくれたから。

「あ、あははー……少年、そ、そんな熱烈に口説かれてもお姉さん困っちゃうぞー」

顔を真っ赤にして、きくりさんは戸惑っていた。

いや、赤いのは酒の所為だろう。

取り敢えず、ちよつと嬉しそうなので俺の気持ちは伝わったようだ。

「きくりさん。風呂入りますか？」

「あ、うん。……ちよつと待って、腰抜けて動けない」

「……仕方ないですね」

「ひよわっ!？」

自分で動けないそうなので、横抱きで俺はきくりさんを持ち上げた。

う、薄手のワンピースってやっぱり感触が……。

いつも抱き着かれて犇犇と感じてはいたが、自分から触れるのもまた違う感じがして。

し、心頭滅却。心頭滅却。

リヨウに食われるし、虹夏に殺される。

「は、はれ？ 逞しい……何かドキドキする。ま、まずいつてそれは……」

俺は煩惱を殺し、腕の中で真っ赤に小さく縮こまって何かをブツブツ呟いているきくりさんを運んだ。

登場人物①

・主人公

【前田一郎】

本作のオリア主。

基本的に一人なので家事や大抵の事への対応力が高い。

バイト三昧なので高校生にしては貯金が豊か。

物事を損得勘定、人としての『価値』、ストレスの有無で見て判断する傾向がある。

他人の感情の動きなどがある程度予測する観察眼はあるが、自分の事にはどこまでも鈍い。根底にある圧倒的自己嫌悪から『自分が好かれるワケがない』と無意識に思い込んでおり、その為に自分への好意には特に察しが悪い。

現在は山田リヨウと交際中（仮）。

頑張る親戚ひとりの姿を見て、変わろうと奮闘中。

・結束バンド（四皇）

【山田リョウ】

本作の寄生虫。

基本的に原作と変わらないが、『前田一郎』という空間が自分の中では至福であり、これが他人の手に染まると激しい不快感を抱く。

そのため、精神と肉体の侵食から始めた。

前者は一郎が『価値』に囚われがちなので、自分にとって掛け替えの無い存在だと吹き込み、自分の存在を一郎の中で光る物に変えた。

後者については、正直不可能。手玉に取ろうとしたが、意外な一郎の才能でいつも翻弄されがち。

現在は前田一郎と交際中（仮）。

独占欲の強さアルテミット・ワン。

【伊地知虹夏】

本作の墮天使。

基本的に原作と変わらないが、前田一郎なんて毒素に塗れた為に自分から翼をもちで墮天した。

常に寂しそうな一郎の孤独を埋めたいと考え、苦しそうなら救いたい、そんな感情で注目し、気付いたらそれが恋に昇華していて、最後にはドロツドロの『愛』になった。

リヨウほどの独占欲は無いから交際関係は良しとするが、夫婦となれば話は別で絶対に譲れない。

現在は前田一郎に猛アピール中。

歪んだ庇護欲の強さオールマイト。

【後藤ひとり】

本作の信仰対象。

基本的に原作と変わらないが、小さい頃から前田一郎を知り、触れすぎた事で逆に彼

の中で神格化されてしまった。

一郎の孤独に幼少期から寄り添った事で彼を救えたが、逆に彼が傍に居るのが普通という状態から、傍にいらなくなってしまうようになって離れつつある彼を逆に追いかける立場に。

他と比較して独占欲は低い。

実は最も真つ当に恋をしており、間違はなく「いっくんがいれば幸せ」なんて呟いたら結婚ルートまっしぐらなダークホースだが、ダークホースという事は要するに報われる可能性が低いという事。

普通の恋に生きる純情さサイタマ。

【喜多郁代】

本作の極悪系オタク。

基本的に原作と変わらないが、本当にツライ時に寄り添って優しくしてくれたと思ったら冷たくされる対応で心の中がぐちゃぐちゃであり、いつの間にか前田一郎推しに。

恋に恋する少女だったが、実際に恋が始まってみれば懂れた物とは一線を画す状態。キスやデートなんかよりも、一郎に虐げられる方が興奮する質。

他と比較すると独占欲は普通。

一郎が自分ではなく他の女性を選んだ上に、リョウという推しを奪ったという現状に傷つけられて益々興奮している。ただ一郎に恋人がいようが妻がいようが容赦無く迫る一番厄介なタイプ。

恋愛争奪戦で凶悪さシャーロット・リンリン。

・『STARRY』

【伊地知星歌】

本作の頼れる大人の一。

基本的に原作と変わらず、虹夏や結束バンドの成長を補助し、見守る。そんな彼女らを水面下でギスギスバンドにしている一郎には若干警戒心を抱いているが、虹夏の様子もあるし、女子に慕われる男子ならウハウハでゲスに楽しみそうな状況でリョウと関係を結んだある意味での潔さに感心している。

【PAさん】

本作の出番が最も少ない人。

基本的に原作と変わらず、というか本作に登場が少ない事で特に変化が無い。メチャメチャ出したい。

・『SICK HACK』

【廣井きくり】

本作の麻薬。

基本的に原作と変わらないが、少年の心の痛みを見抜き、助言を与える事で一郎の中では意外に評価が高く、順当にいけば人生の師、一步踏み外せば一郎がヤンデレになる爆弾。

特に一郎は恋愛対象ではないし、少しずつつ立ち直っていくように見守っていた。――はずだった。

― 自他共に認めるダメ人間であり、根は陰キヤなので自己肯定感が低く、いつもライブに集まる客や友人たちでその部分を補っているが、特定の誰かから強い尊敬や好意を持

たれるとソレに弱い。

特に一郎のような悪意無く自分を強く慕う相手に迫られると一瞬で墮ちる。意外とチョロイン度ヴェルダナーヴァ。

【清水イライザ】

本作の純粹な一郎の友人。

基本的に原作と変わらず、むしろ本作で見れば一郎と特に深い闇もなく、目が眩む輝きも無い普通な交友関係を結んでいる。

恋愛関係に発展する可能性は限りなく低いが、仮にそうなたら順風満帆。

【岩下志麻】

本作の頼れるお姉さん。

基本的に原作と変わらず、廣井きくり関連で頭を痛めている。そのため、彼女によく絡まれては介抱している一郎を親近感を抱くと同時に守るべき年下と認識している。

恋愛関係になる事はまず無いが、一郎の交際関係などについては誰よりも心配したり、「ちよつとその人連れてきて話させなさい」と親心が全面に出る。

・その他

【大槻ヨヨコ】

本作のそろそろ出る暗黒。

基本的に原作と変わらないが、同い年であり何処か不思議な雰囲気を持ち主の一郎を一方的にライバル視、自分のファンにして勝とうと考えていた。

ところが、一郎が素直に自分を評価したり、時に差し入れをくれたりしてくれるところから「もしかしてトモダチ？」と胸を踊らせている。

もし恋愛になったら、どうなるんだろ。これから考えるけどロクな事にならない。取り敢えず未知数さ大筒木一族。

【来栖郁人】

本作のオリキャラ。

一郎の叔父。

人との交流以外は何でも出来る上に万事を高いクオリティでこなすパーフェクト人間。対応力や苦勞人としては一郎の上位互換。

一郎の幸せなら何でも良しなので、山田リョウという爆弾との交際も認可している。仮にこれがどうしようもないダメ人間、一郎の父のような人間だったら完全抹殺して警察に出頭する。

【後藤ふたり】

本作のブラックホール。

一郎を兄と慕い、家族として受け容れる。

一郎にとつてもひとり同様に妹という感覚で、互いに兄妹という認識で交わされる感情を心地好く思っている。

今はまだそんな感覚。

しかし、これが数年後になったら「いっくんがお姉ちゃん貰ってあげないと駄目だよ」
↓「いっくんはもう後藤家の一人だもんね!」↓「いっくん、ちよつと悪い事しない?」
↓「いっくん、お姉ちゃんを裏切っちゃったね」なバケモノに変貌する。
成長において恐ろしさ進撃の巨人。

今日は何回死ぬ日

それは唐突だった。

「じゃあ、別れるか」

俺が告げた言葉に、リヨウの顔が真っ青になる。

撤回するつもりが無い俺は、山田夫妻に挨拶した後ここを——山田家宅を出る。

追いかけてくる足音が聞こえたが振り返らなかつた。

別に怒っていたわけではない。

意地悪のつもりも更々無い。

そんな態度を取つたのは、リヨウの為にならないと思つての事だった。

原因は、少しだけ複雑だ。

ここ最近、リヨウが学校にも家にも顔を出さなくなつた。虹夏に聞けば、バイトにすら出勤していない始末である。

如何に日頃から非常識人といえど、ここまで他人に心配させるような事はしない筈だ。

そう考えて、俺は山田家を訪ねた。

すると、特に不健康そうでもないリヨウが出迎えてくれて家の中まで案内してくれたが、その先で異様な数のくしやくしやくにされた譜面が床に転がる光景を目にした。

リヨウ曰く、作曲が上手くいっていないらしい。

皆の為の楽曲が仕上がらず、それでナイーブになつて何もかもやめたらしい。

所謂スランプというヤツだ。

見た事が無いくらいには弱つていた。

本来なら恋人として助けるべきだが、音楽関係で部外者な俺では力になれないし、かといつて虹夏達に相談しようかとも考えたがリヨウに強く止められた。

致し方無しと、せめて何か出来る事が無いかと聞いたら。

『ごめん。一郎といえるのもつらい』

と言つて拒絶された。

一緒にいるのが苦痛——それが恋人か？

俺は冷静に考えた結果、相手にとつて苦痛にしか感じないのならば、その関係は一刻も早く解消すべきだ。

互いが次に繋げる為の時間も浪費してしまふ。

リヨウの可能性を潰してはならない。

何より、俺が好きなりヨウの音楽をこのまま潰えさせる原因になりかねないのなら、潔く身を引くべきだ。

俺はそういった思考の末、『破局』した。

リヨウの為に、と考えて………考えたけど段々と俺もダメージが入りつつある。

潔くとかカッコよくとか、時間の浪費だとか理屈を捏ねてはいたが、結局地味に言われて傷付いたから自棄になっていたのかもしれない。

そんな気分で、今俺は――。

「ちよつと……辛気臭い顔してないで盛り上げてよ！」

何故か知り合いとカラオケにいた。

新宿『FOLT』に通う過程で度々交流することになった大槻ヨヨコに帰り道で捕まり、カラオケに引き摺り込まれた次第である。

人気ガールズバンド『SIDEROS』のリーダーたる彼女は、普段の大きく強気な態度とは裏腹に繊細な心の持ち主で、いつも不安で日頃から練習を欠かさない。

今日もその練習の一つ、独りカラオケに向かう最中で辛気臭い顔の俺を見つけて連行したらしいのだが、今は放っておいてくれる方が有り難い。

今、自分がズダボロなのを漸く自覚したところなんだ。

そんな状態でカラオケはキツイ。

お陰で、今やタンバリンを叩く機械と化している。

「ヨヨコ。俺のこと嫌いなんだな」

「何でそうなる!？」

「いや。落ち込んで一人になりたい人間を無理やりカラオケに引きずり込むって、そういう魂胆なのかと」

「ひひひ一人になりたかったの!?!気付かなくて悪かったわね!」

「まあ、中途半端に止められても困るからやり切ってくれ。その方が楽に死ぬる」

「過去一面倒くさい状態ね……」

被害者は俺なのに面倒臭がられた。

ヨヨコの歌声は素晴らしいが、傷心中なので素直に楽しめない。

こういう時、きくりさんかひとりが居れば……。

いや、都合のいいセラピーみたいに考えるのはいけない。特にひとりは、俺なんかの事で心配させて足を引っ張るなんて言語道断だ。きくりさんは、まあ、普段から迷惑か

けられてるし良いか。

「大体、何で下北沢に居るんだよ」

「知り合い居ない所が良かったのよ！」

「俺、下北沢に住んでるんだけど」

「早く言いなさいよソレ!?! だからこんな面倒な状況になってるんじゃない！」

「いや、友だちでもないのに言う必要が……」

「ど(っ)ふ(っ)つ(っ)!!?」

あ、血を噴いた。

時に過剰なほど繊細な心は、言葉の刃で物理的なダメージに直結してしまうようだ。

案外、ひとりに似ているかもしれない。

「ぞ、ぞもぞも……何でそんな落ち込んでるのよ」

「……カノジョと別れたから」

「つえ、は、はあ!?! 私を差し置いて、リア充だったのアンタ!?!」

「リア充って実感無いな」

「く、この余裕……見てる私が死にそう……!」

胸を抑えて、ヨヨコが椅子の上に崩れ落ちる。

「な、何で別れたのよ」

「一緒にいるのが苦痛と言われたから、俺の方から別れようって」

「そんだけ!？」

「大事な事じゃないか？相手を苦しめてまで一緒に居たいっていうのは、何か、こう、違うだろ」

「出たわね！現実知らないヤツがそう言うのよ！むしろ潔く別れを切り出された方が、そんなに想われてなかったのかってシヨック受けるのよ！」

「こ、恋人もいないのに分かるのか……!？」

「ぐばふつつ!!」

おっと、いけない。

思わぬ痛撃を食らわしてしまった。

ますます瀕死になって椅子の上に草臥れるヨヨコだが、言っている事はたしかに正しいかもしれない。

でも、俺とリヨウはそんな甘酸っぱい関係ではない。

恋人は恋人でも『仮』と付く。

正式な恋人なら、もう少し粘るべきなのだろうがリヨウの場合は特殊で、そこまで深くて濃い関係による束縛を厭うている。

始まりから邪道なのだ。

「ふ、ふん！別れて正解よ、こんな男！」

「……………」

「で、でもアンタなりに相手を思い遣つての判断だから。九十九対一でアンタも悪くないって事にしといてあげる……………」

「一応訊くけど、一が俺？」

「当たり前でしょ！」

「その比率だと完全に俺悪いじゃん」

ヨヨコの数的感覚はバグっているようだ。

でも、そうだな。

「優しいな、ヨヨコは」

「え？」

「落ち込んでる俺の気分転換になればって、カラオケに連れて来てくれたんだろ？」

「まあ、そう、だけど」

本当に良いヤツだ。

元からは悪くないと知っていたが、俺を日頃から廣井きくりの腰巾着呼ばわりして一々突つかかってくる辺りから評価を低く見積もっていたが、見直す必要がありそう
だ。

「有り難う、ヨヨコ。少し好きになった」

「ん? どうした?」

「い、今、何か悪寒が凄くて死にそうだった……」

「そんなに嫌だったのかよ」

「ち、違うわよ。何か蛇にでも睨まれたような……一瞬目の前に虹が架かったように見えた幻覚もしたし、私も調子悪いのかも。帰るわ」

体調不良を訴え始めたので、ヨヨコと共にカラオケを出る。

入る前より少しだけ気分が良い。

拒絶されてあっさりと引き下がったが、少しだけ頑張ってみよう。

リヨウも顔面蒼白になっていたし、俺の拙速な判断で傷付けてしまったかもしれない。よくよく考えなくても、スランプで厳しい状況なのに突き放すような事をして、鬼畜なのは俺の方だしな。

帰ったら、リヨウにメッセージでも送ろう。

「ああ、ヨヨコ。良かったら家まで送るぞ」

「わ、悪いわね。何かきつきから『キターン』って変な音とか、あちこちに虹とか見えて怖いよね」

「病院行こう、マジで」

なぜ喜多さんも居ないのにキターン音が聞こえるのだろうか。

周囲を見渡すが、虹なんて何処にもない。

俺にカノジヨの相談とか持ちかけられ、嫌だけど真摯に向き合って対応した負荷で幻覚を見るほど疲弊させてしまったのかもしれない。

それならば俺の責任だ。

「まあ、こんな俺に恋人できたんだ。ヨヨコなんて直ぐだよ」

「別に羨ましいワケじゃないから。私より人生楽しんでるのがムカついただけ」

「聞かなきゃ良かった理由ナンバーワン」

ヨヨコを支えながら駅へと向かう。

「それに、私は恋してる場合じゃないし」

「え？」

「本気でやってるのよ、ロック」

「……………カツコいいヤツだな、おまえ」

「ふ、ふん！褒めたって何もしないけど……………ふ、ファンサくらいは、別に？いい、良いけど……」

調子に乗り始めたヨヨコだが、その芯の強さは見習うべきだ。

ひとりといい、ヨヨコといい、俺の周囲には眩しい人が多すぎる。特に喜多さんは異様に輝いている。

ただその光に勇気を貰って、俺も頑張ろうと思った。

「ヨヨコのそういう所が好きだな」

「うえっ……何か、キターンって音が脳でもっと響き始めた……」

「ヨヨコ様最高」

「あ、視界が虹色……もう駄目かも……」

いよいよヤバいな、ヨヨコ様。

「……………」、郎…………？」



一郎に当たってしまった。

焦燥に駆られながら、私は着替えていた。

今回、『未確認ライオット』には新曲で挑みたいというバンドの意向に従い、私は作曲に取り掛かっていたのだが、思うように行かず困り果てていた。

原因は自覚している。

この『未確認ライオット』には、全員が本気で挑んでいる。

実力を試したい、バンドとしての本気度を示したいという一心で挑戦を選択した。だから、もし成功した時に得られる自信は何にも代え難い物になるだろう。

逆に、失敗したら……二度と立ち直れない挫折を味わう事になるかもしれない。

この曲には、皆の今後が懸かっている。
駄目な曲は作れない。

これまでに最高の曲を仕上げないと。

自分を納得させられる物を必死に考えたけど、何も出なかった。

焦りばかりが募り、一人キャンプなんかもして気分を紛らわせたが、やはり駄目だった。

そんな何もかも手詰まりな時に、一郎は来た。

そして……感情のまま、当たってしまった。

一郎なら受け止めてくれるなんて甘い考えがあったのかもしれない。

『別れよう』

嫌だ。

曲については、後から来てくれた皆の協力があつて纏まった。

私の心配なんて杞憂で、虹夏達は私に寄り添ってくれた。

柄でもないけど、皆で結束すれば乗り越えられる。

そして、乗り越える勇気を貰えた。

だから、残る問題は自暴自棄な私が作り出してしまった一郎との溝だけだ。

着替え終わり、私はすぐに外出する。

一郎は今日、たしかバイトが無い筈だ。

家に行けば、きっと会える。

だから話し合つて、もう一度関係を結び直すんだ。

手放してはならない……一郎は、私を感じているように誰かも執着している。特に虹夏はそうで、私と一郎の交際関係を頑なに認めないし、最近ほぼつちも郁代も反応が不穏だ。

直ぐに、取り戻さない。

今なら謝つて、それで修復できる筈だ。

一郎だつて、きっと私をそう簡単に振り払えない。未だにきつと、実はあつさりとおつた事を後悔しているかもしれない。

「……………一郎……………」

足が止まる。

探し人の姿を発見した。

あの時からかなり時間が経っている。てつきり、もう家に居るのではと思つていたのに、何故か彼はまだ外にいた。

そして……隣の少女に、気安く肩を貸している。
誰だかは分からない。

でも、少女に一郎が優しく微笑みかけていた。

私と、あんな事があったのに、どうしてそんな表情が出来る？

もしかして、別れるっていうのはあの場で思ってた口にしたんじゃないやなくて、普段から考えて用意されていた言葉だった……のかな。

本当は、あの少女と以前から関係があつて私との関係を解消するタイミングを窺っていたのかもしれない。

私が学校にも家にも顔を出さないし、話題としても切り出すのが気まずい物だし、以前から「本当に好きな人が出来た時は」と言っていた。

嘘だ、でも、本当なら。

「ヨヨコのそういう所が好きだな」

そんな一郎の声が聞こえて、ぷつぷつと何かが自分の中で切れた。

そう……。

一郎は、私から離れて行くんだ。

新しい居場所を見つけて、そこで幸せになるんだ。

本当に好きな人を見つけて、自分だけの『価値』を見出して、前向きに生きていくつもり。

……………。

うん。

一郎にとっては、それが良いと思う。

私もこれで、音楽に専念できる……元々、恋人とかそんな柄ではないし。

あれだけ自分なりに執着していたけれど、一度別の誰かの物になったという現実を目の当たりにしたら、綺麗さっぱり諦めが付いた。

そう、新スタートだ。

私にとっても一郎にとっても、転換点になって良いじゃないか。

私も家に帰ろう。

これ以上、一郎を縛ってはならない。

私も、前を向こう。

むしろ、一郎に縛られて私自身が何も見えなくなっていたかもしれない。

だから、彼とは去年の三月ぐらいの距離感に戻れば良い。

多少は深く繋がり過ぎた影響もあって、最初はギクシヤクするかもしれないけど、

きつと直ぐ程よい関係に落ち着く。

そう考えながら、私は一郎の家の扉を開ける。

まだ帰っていない。

どうやら、私の方が先だったみたいだ。

ソファーに腰を下ろし、クッションを抱いて横になる。

……落ち着く、この匂い。

作曲の問題も解決し、頭の中にある完成品を後は現実で形にするだけ。

あれ、家に帰るつもりだったような……まあ、良いか。

「ただいまー。……って、リヨウもないのに癖で言ってしまった」

帰って来た一郎の声がする。

私は体を起こして、玄関の方を見た。

間もなくして、彼が居間に入って来て……驚いた顔で私を凝視している。

大丈夫。

何で家に来てしまったか自分でも分からないけど、会うなら今からちゃんと話して、私からも新しいスタートについて話をしよう。

お互いの為に、ちゃんと。

「逃さない」

思ってた事と違う言葉が口から出ていた。

暴君、ここに

家に帰った俺は、居間の入口で固まる。

数時間前に交際関係を解消した元恋人が当然のようにソファアに座っていたからだ。相変わらずの無表情で、顔から感情を読み取るのは難しい。それこそ変人と呼ばれて喜ぶ思考に予測なんて無意味だ。

「逃さない」

いつものような「おかえり」ではない。

挨拶ではなく、宣告である。

一言で俺はリヨウがどんな状態かを理解した。

頭の中の詳しい情報までは察せないが、リヨウを動かしている感情の正体は怒りだ。

俺に対し、嘗てないレベルでキレている。

一方的に別れを切り出して、相手の意思も問わず帰った暴拳が最悪の形で作用していた。

当然の感情である。

それを予測していなかった俺が浅はかなだけ。

「……匂いがする」

すつと音もなく立ち上がる。

たったそれだけの動作に、俺の足が一步だけ後退る。

リヨウから感じる迫力は、暴走した虹夏と似ているようで、また別の命の危機を体

中に喚起させた。

逃げたい。

向き合わなければならないのに、逃げたい。

ただ、このまま背を向けて逃走したら余計に拗れる予感があつて、これ以上など想像

も付かないから怖くて動けない。

床を踏むリヨウの軽い足音が脳裏で響く。

緊張のあまり、瞬きを忘れていた。

「り、リヨウ。あの」

「どっちだっけ。……右?」

リヨウが俺の右肩に鼻を埋める。

戸惑う俺などお構い無しに密着した状態で深呼吸を始めた。

服を抜けた吐息の熱が蟠って熱い。

何これ……猫吸いみたいなやつ?

あれは癒やされるから良いが、俺の匂いはどんな効果があるんだろうか。

「うん。臭いね」

「堪能した割に低評価すぎる」

「私が好きなのはこっちだから」

「……左肩?」

リヨウの白い指が左肩をつつく。

左右で違いが出る……フェロモンか何かかな。

そんな物が出ていると考えると、人間としては生理的に当然の事のだろうが、自分の場合を考えると気持ち悪い。

「右と左で何か違いあるのか」

「今日はあるよ」

「今日?」

「うん」

何だか別れた直後とは思えない呑気な会話だ。

怒っていると推測したが、読みを外したのだろうか。

意外と会話に応じてくれる。

「右は、知らない女の人と触れてたから」

知らない女の人……。

俺は言葉の意味を理解しようと頭を働かせ、右肩に因んだ出来事と言えばヨヨコを支える為に密着していた部分だと気付く。

なるほど、それで匂いが違うのか。

ヨヨコの物が移ってしまったのかもしれない。

「なるほど。たしかに——ん？」

納得してすぐ、疑問が湧く。

どうして、俺がヨヨコ——女性と一緒に居た事を知っているんだ？

もしかして、家に来る途中で見かけたのか。

俺はあの後、結局ヨヨコを家まで送り届けたからリョウがそれを目撃し、先に家に着

いているのは当然か。

大方、俺と話がしたくて来たんだな。

「あのさ、一郎」

「ん？」

「今から死ぬほど酷い事するけど良い？」

「それで首を縦に振れる人類を俺は知らない」

斬新な脅迫だな。

……………冗談だよな？

リヨウに手を引かれて、俺はソファアに座らされた。

これから一体、何をされるのだろう。

否、受け身では駄目だ。

また流されてリヨウとなあなあで事を進めてしまっても碌な結果にならない。

まずは話し合いをしなくては。

「リヨウ。別れるって件について——」

「好き」

「……………ん？」

え、今何て？

「ん？聞こえなかった？」

俺の反応が薄かったからか、リヨウが小首を傾げる。

さつきまでの迫力が失せて、いつもの彼女の雰囲気に戻ったから危険を感じないが、これから始まる事についてはやはり予想もできない。

いや、それより何て言った？

「私は一郎が好きだって——事にした」

……………。

耳を疑う情報に俺も首を傾げる。

いつものように俺を誂っている……………のか？

どちらとも判じ難いリヨウに、俺はその言葉を上手く受け止められない。

それにしても、また突拍子も無いな。

好きだ、ならまだ分かる……………いや分からん。告白された経験なんて虹夏しか無いし、恋バナするほど親しい友だちが他にいなかったから、こういう展開に対する見識が浅いので判断が難しい。

好きだ、という事にしておく。

その言い方は、好意だとリヨウも確信が持てない状況……………という事か？

「あの……………どういう意味？」

「別に何でも良かった。一郎が取られなければ、友だちでも恋人でも肉体関係でも」
「最後のエグ味が強過ぎる」

「これは『独占欲』で、別に『恋愛感情』は別なんだって思ってた」
俺の話なんて聞いていない。

正面に立っているリヨウの瞳は俺なんか見ておらず、まるで独り言を呟いているようだった。

な、何なんだよ。

俺はこれ、何に付き合わされているんだ？

コントだというのなら高度過ぎて伝わらない。

「でもさ、好きの形って人によって違うとかテレビでも音楽でも言ってたし」

「は、はあ」

「それで、やっと分かった」

「イダツ!!」

リヨウの手が俺の頬に振れる。

優しく肌の上を滑る手付きに一瞬緊張感が緩んで——がっとう握り潰すように耳を掴まれた。

激痛で声は上がるが、体は固まった。

「——これが『独占欲』って事なんだ」

掴んだ耳に息を吹き込むように囁かれる。

リヨウの手が離れて、俺は解放された耳を擦った。ずくずくと心臓のように鼓動している感覚がして涙が出そうだった。

うずくまる俺に対し、リヨウが顔を近付けて来る。

「今度は聞こえた？」

「……!?!」

「耳、真つ赤で痛そう。……別れようって言われた時、たぶん私もそれくらい痛かった」
「ひっ……………!」

怖くて言葉が出ない。

リヨウから逃げたいが、背もたれで後ろには退けないし、リヨウが背もたれに手を突いて左右に移動するのを阻止されている。

リヨウの言葉と、姿と、吐息で五感が支配されていた。

集中しないと、さらに甚振られるかもしれない。

「二郎のご飯が美味好しい。一郎の声が聞好きたい。一郎の匂好いが癖好になる。一郎の笑好い方が面白好い。一郎の体温が気持好ちいい。一郎の何だかんで許好してくれる優しい所が最高好。一郎の隣好が落ち着好く。」

——一郎の全部好が欲好しい」

怒涛の勢いで紡がれる言葉を、痛みで冴えた頭が一つずつ飲み込んでいく。

本来なら、喜ぶべき言葉なんだろう。

でも………ただただ、怖い。

寄生虫と宿主の関係だと侮好つて、それが深く繋が好って仕方無しと恋人だと名付好けて一段落好させたと思好い込んでいた。

俺とリヨウは同じ。

柵好に囚好われたくないという強い思好いがあ好つて、曖昧な関係好を甘受好していた。

踏み込んだ気持ちは無いと高を括っていた。

……だが、それは俺だけだったらしい。

リヨウは、俺が思う以上に踏み込んでいた。

俺が感じている以上の関心を俺に向けていた。

虹夏とは種類が違うとか御託を並べていたが——虹夏よりも圧倒的に、危険だ。

リヨウは自分の感情に名前を付けたのだ。

手当たり次第に、考えるのが面倒臭いからかもしれないけど全てを『好き』だと断定している。

その結果、目の前の彼女は歯止めが利かなくなっているように見えた。

「聞こえてない?」

リヨウの一言に全身がびくりと跳ねる。

俺は聞こえていると、必死に首を横に振った。

特に感情の滲まないリヨウの瞳が、そんな混乱している俺を鏡のように映している。

あれだけ『好き』を羅列しているのに。

「一郎は?」

「えっ……?」

「一郎は、私をどう思ってる?」

じつと見詰められる。

何て答えたら、無事でいられる？

必死に考えて、考えて考えて考えて……俺は震える喉に力を入れた。

「こ、怖い……」

それを聞いたリヨウが目を細める。

「そう、『怖^{好き}い』なのか。……私たちラブラブだな」

もう、駄目かもしれない。

♪

♪

♪

夜になって、リヨウは映画を観始めた。

俺は服を着て、キツチンへと向かう。

解放されて、俺は家から出て誰かに匿って貰おうかとも考えたが、知り合いが虹夏や喜多さんというある意味ではあまり頼るのも少し危険かと思う人しかおらず、後藤家を宛にしようかとも一瞬悩んだが心配させるのもマズい。

そんな葛藤の末、俺は家に留まった。

リヨウもあれから特に何もしてこない。

「一郎、これ面白いね」

夜になって、映画『ダー〇・アンド・ウイケッド』を鑑賞するリヨウの前に夕飯を置く。

刻んだじゃが芋と玉葱の味噌汁、鶏胸肉を梅バターで味付けした物と白飯。

正直、今の状況の所為で映画の内容が頭に入って来ない。

こんな時に俺も観てない映画を選択しやがって……！

「後で俺も見返すか」

「虹夏と郁代は絶対に夜寝れなくなる。ぼっちは……どうだろう」

「ひとりには幽霊とか怖くないタイプだし」

「……………」

ひとりからすれば生きてる人間の相手で精一杯なので、霊的な存在は特に警戒対象ではないようだ。

昔、一緒に遊園地のお化け屋敷に入った時も特に驚いていなかった。

……あ、前の人の悲鳴に呼応して絶叫していたけど。

「……………一郎」

「何だよ」

「一郎は、ぼっちが好きなの？」

「そりや当然、妹とか家族みたいなものだから。……何だよ、急に？」

質問の意図を尋ねると、リヨウがため息をつく。

「ぼっちの話の時、一郎が幸せそうだから」

「あー、そうなのか——」

「私の話より」

「そそそそんな事は無いと思うぞ？」

怖い。

ふと気を緩めた瞬間にコレだ。

まともな会話が出来ていると思って、いつもの調子で話そうとすると何かがリヨウの

琴線に触れてしまう。

いい加減に泣きたい。

……ひとりの話をしている時が幸せそう、か。

俺にとつて、あの子は幸福そのもの。

生きているだけで偉いし、言動の一つづつが他人への配慮に満ちていて、ここぞという時にしっかりと目を見て普段の人見知りが嘘だと思ってくらいに自分の意思をハッキリと伝えてくる。

その姿が眩しくて、温かい。

自己肯定感が塵芥同然だった昔の俺に、生きていて良いという希望をくれた。

「ひとり妹で、俺の恩人だ」

「恩人」

「ひとりと会ってなかったら、今頃は本当に生きてなかったと思うし」

「……じゃあさ、ぼっちに好きって言われたら？」

「はは、それは有り得ない」

リョウの質問に思わず笑ってしまう。

「ひとりも俺をそういう風に捉えてない」

「仮に付き合いたって言われたら？」

「えー……ひとりがそれで幸せになれるなら、喜んで付き合う」

「私がいても？」

「いや、そんな命知らずじゃないし……」

ひとりか、リョウか。

そもそも俺に選択する権利なんて無いと思うし、そんな状況になったら自分には鳥澁がましき思えて死にそうである。

「もし」

「ん？」

「もし、一郎がぼっちの事を好きでも逃さないから」

「……そういうタイプだったっけ、オマエ？」

「逆に、一郎は私が他の男好きだったらそうしないの？」

「いや、俺が余所見される程度の男だったんだと解釈して、リヨウの為に別れるだろ」

「すぐ別れる……」

リヨウが呆れたように俺を見る。

仕方無いだろ。

俺なんかの事で拘束されているなら、相手にとつては有害でしかない。他に好きな人がいて、その為に時間を費やしたいなら協力する。

好き合ってもいない人間同士で縛り付けても不幸な結果しか生まれないから。

「逆に、俺がそういう事してきたらどうする」

「一郎が束縛？」

「そう」

「………一郎以外に好きな人ができても、多分その相手も一郎な気がするから問題無いんじゃない」

「何で俺が量産されてんだよ」

思考が超次元過ぎて俺が二人いるらしい。

俺Aに愛想を尽かしても、俺Bを好きになる……SF映画の観過ぎだな。
今見てる映画はSFでは無いんだけどさ。

「ご馳走さま」

「今日は家に帰らないのか？」

「そんなに離れたい？」

「ひっ。い、いえ」

つい敬語になってしまった。

もう今のリヨウは何がスイツチなのか分からない。

それは、そうと。

「……リヨウ」

「ん？」

「俺とリヨウって、今どういう関係なんだ？」

ずっと気になっていた事を尋ねた。

リヨウから並外れた独占欲を伝えてられたが、伝えることで満足して俺の意思は特に聞いて来なかった。

今後の関係については全く触れていない。

明言されないと、これからの身の振り方が分からず困る。

そんな俺の間に対し、リヨウが小首を傾げる。

「まだ分からない？」

う、怖い……。

でも、ここで退いてしまったら分からず終いで、リヨウだけが理解した危険な状態が完成してしまう。

俺がゆつくりと首肯すると、リヨウがまたため息をついた。

「全部」

「……は？」

「一郎の友だちで、恋人で、家族で……とにかく全部」

「ゼン、ブ……??」

「そう。全部で私が一番」

全く予想だにしていない回答に俺の思考が完全停止した。

どうやら勘違いしていたらしい。

リヨウが欲しいと言った『全部』とは、俺の事とかそんな生易しい意味を指しての事では無かった。

「分かった？——一郎」

分かるワケないだろ。

遮られた言葉は？

そこかしこで愛が育まれる聖夜。

普段の出勤ぶりから融通してくれた店長の厚意によつて勝ち取った休みを使い、俺は『新宿FOLT』の店に来ていた。

片手には、きくりさんがくれたチケツト。

これを以て、今日はエンジョイする。

リヨウも用事があつて居ないらしく、久々に一人で自由を謳歌できる日となつた。

ライブを観て、優雅に過ごそう。

「こんばん——」

「あつ、先輩♡」

「何を勘違いしてたんだか。そう言えば、クリスマスつて俺には優しくない日だったよな」

扉を開けて最初に赤い髪の少女が目に入った瞬間、悟りを得ると共に扉を閉めてい

た。

体はくるりと踵を返す。

何故、ここに喜多さんがいる？

つい浮かれていた俺を油断するなど戒める本能が見せた幻覚なのかもしれないと思いたいが、あそこまではつきりと像を成し、耳朶を打つあの甘い声と瞬間的に網膜を焼いた喜多さん固有の特殊光線等から幻の可能性は否定された。

あの光線、日に日に威力が増してゐるんだよな。

光で照明されると、思考力が低下したり体調が悪くなつてきている。

もう太陽風か何かだ、アレは。

オゾンがある程度吸収してくれないと人体を一瞬で蒸発させてしまう宇宙の力を秘めている。

喜多郁代はある意味で本物の太陽なのだ。

「いかん。つい悪し様に言つてしまった」

ライブを断念した事への後悔で、つい喜多さんに当たつてしまった。

でも、きくりさんのライブ観たかつたな。

何せ『結束バンド』は、音楽は好きだがプライベートでそれぞれと色んな問題を作つてしまつている。

無心で楽しむという事が出来ない。

それに比べると、『S I C K H A C K』は一度たりとも邪な感情で楽しみを削がれた事は無かった。

それだけに期待も大きい。

観れない事は、かなりのダメージだった。

無念の撤退に俺は唇を噛み、重い足で駅へ向か——おうとしたら、どんと誰かにぶつかる。

いけない。

どうやら周りが見えていなかったらしい。

俺は慌ててぶつかった相手に頭を下げた。

「す、すみません。考え事をしてて」

「それ、私の事だよね」

「えっ？」

「私じゃなかったら駄目だと思う」

この、少し低く背筋を撫で上げるような声は……顔を上げると、そこにリヨウが立っていた。

寒いのか、俺の手を自身の頬へと当てている。

触れている掌から血の気が引いていくのが俺には分かった。

声も出ず、思わず足を一步後ろに退くと後方で扉が開く音がした。

どうして、オマエまで。

今日は会うことも無いと慢心していたが故に眼前の彼女に対して恐怖心しか抱けない。

「私を見るなり帰るなんて……先輩……ヒドい♡」

振り返ると、喜多さんが恍惚とした顔で俺を見ていた。

言葉と表情が全く一致していない。

どうして顔も声も嬉しそうなんだ。

リョウがいて、喜多さんがいる。

これだけでも中々にサンタさんが俺を憎悪しているのが分かるが、俺だって去年の出来事を除けばクリスマスに良い思い出なんて何一つ無いので自分がこれからどんな状況に陥るか薄々見当が付いている。

この二人がいるなら、必然的にあの子も。

「一郎くん、入口で立ち止まってたら迷惑だよ！」

「に、虹夏……」

「だから、早くリヨウから手を離して？」

ドラムスティックを手に持った虹夏が現れる。

叩くドラムは無いのに、どうしてそれを携えて来たのだろう。リハの途中なのだとしてたら練習熱心だと思えて感心するのだろうか、醸し出す雰囲気の険難さが明らかに暴力的な事しか予感させない。

リヨウから手を離せ？

今すぐそうしますとも……ごめん、リヨウが放さないから無理だ。

離れない俺たちを見て虹夏が笑みを深める。

ライブの為の装いと思われるサンタ衣装を着込んでいるが、もしかしてライブ前により鮮やかな赤で染めるつもりだろうか。

「リヨウ。俺、帰るから放して」

「私がいるのに？」

「命には替えられない」

「私の知る一郎はそんな日和つた事を言わない」

「いつもどんな俺と話してるんだオマエ」

いつもパラレルワールドの俺と話してるんだな。

俺が命を懸けてオマエの音楽を聴く度胸を見せた機会なんて一度も無いぞ。それにしても、何てパワーだ。

本気で手を引き抜いたら怪我をさせてしまうからと制限していたが、背後から躡り寄って来る虹夏の気配を犇犇と感じてそももいかなくなってきた。

やむを得まい……リヨウ、すまな——い？

「あ、こつちの方があつたかい」

リヨウの頬から手を引こうとした刹那、逆にリヨウは手から離れて俺の胴体に抱き着いた。

離れろと言われたのに、ますます接触面積が増えている。

怖い、肩越しに後ろを確認した。

「見てないよ。私は何も見てない。絶対違う。似てるだけ、二人に似てるだけ。二人は抱き合ってる。一郎くんはそんな事しない。私を差し置いてそんな事するようない人じゃないよ。だから私が見たのは」

虹夏はその場で頭を抱えて小さく縮こまっていた。

俯いて何事かをブツブツと呟いている。

い、入口で立ち止まるのはいけないのではなかったのか……？

「き、喜多さん。虹夏を取り敢えず中へ」

「そしたら、何か私にもしてくれますか？」

「え？」

「してくれますか？」

「……あ、握手とか？」

「えっ、それだけ？……先輩のイジワル♡」

喜多さんがまた悦んでいる。

悦びのツボが本当に理解不能だ。

喜多さんは虹夏の肩を支えながら、彼女と共にライブハウスの中へと戻って行く。まだライブハウス開店前だったのが幸いで、人もあまり来ていない。

だが、周囲の目もあるのでそろそろ入らなくてはならないのにリヨウは固定されたように動かない。

……この状態で通例のきくりさん介護なんてしたらどうなるんだろう。

……来なきや良かったかな。

「リヨウ。寒いなら中に入れ」

「それもそうだ」

全く名残惜しさも見せず、すつと離れてリヨウはライブハウスへと入った。

コイツ、それくらい俺が注意した時にもしてくれよ。

お蔭で虹夏に変な所を見せただけじゃないか。

ライブ前に既に肩が重いし、正直もう帰りたけれど逃げたら逃げたで今度は問題が深刻化しそうだから俺も中へと入る。

クリスマスとあつて、普段とは違う装飾の施された通路を通り、既に準備で慌ただしライブハウス内へと踏み込む。

「……………はあ」

「知り合いの顔見て落ち着くなよ」

「SIDEROSのファンじゃないって分かったからガツカリしてるんだけど!？」

入るなり椅子に座っていたヨヨコにため息をつかれた。

てつきり、ライブ前の緊張感が知り合いの顔を見て和らいだのかと思ったら落胆したらしい。

何て失礼なヤツだ。

「SIDEROSも応援してるけど」

「でも姐さんの応援が一番でしょ」

「ああ。…………そのきくりさんは何処にいる?」

「裏でライブ前の三杯よ」

「……………やれやれ」

俺はきくりさんの居そうな控室の方へと早足で向かう。

扉を開ければ、パツク酒を取り上げようとする志麻さんと泣き継るきくりさんの鬭争が繰り広げられていた。

「廣井。いい加減にしろ」

「やだー！志麻はあたしから命を奪おうというのかー！」

「またライブ滅茶苦茶にしたらそうする」

「うええん！あたしのおにこーへ？」

控室に哀訴の声を響かせていたきくりさんが俺を見るなり固まった。

……何だ？

今まで見た事の無い反応だ。

もしかして、最低限でも大人としての尊厳を保ちたいからこんな情けない姿を見られて驚いている？

安心して下さい。

既に見損なうほど大きなモノをあなたに見出してはいません。

「……し、少年かー」

「ああ、一郎君。ごめん、毎度こんな情けない所を見せて」

「……………」

「…………？おい、廣井どうし、あ!？」

「うおおおおお！飲んでないとやっつてられない！」

志麻さんが見せた一瞬の油断を見逃さず、バック酒を取り返したきくりさんが酒を吸引する。

飲みつぷりは凄いが、ライブでまた誰かに吹きかけるほど理性を失くしてしまうのはやめて欲しい。

仕方無い。

俺は志麻さんに加勢しようときくりさんに近付いた。

「はい、きくりさん。そこまでです」

「でゆへへへ。恋人いるのに、クリスマスあたしのライブ観に来るなんて随分慕われてしまったなあー」

「まあ、きくりさんの音楽好きですから」

「はー………………………顔あつっ」

俺は強引にバック酒を取り上げた。

それから、うだうだと文句を言い始めるきくりさんに毎度の事ながら水筒に用意した味噌汁とペットボトル水を差し出す。

これで、少しは酔いを醒ましてくれ。

最前列で観るつもりだから、被害を最小限にしたい。

「まずは水飲んで」

「んぐ、んぐ」

「はい、味噌汁は好きなタイミングでどうぞ」

「ずずーっ。……ふへえ」

器を兼ねた蓋に注がれた味噌汁を、きくりさんがちびちびと啜り始めた。

これで少しは酔いを醒ましてくれ。

それを見た志麻さんに嘆息された。

「本当は……ごめんね」

「いえ。嫌ならライブにも来てませんから」

「そういえば、恋人が出来たって廣井が言ってたけど本当に？」

「はい。……色々あって」

「そっか。おめでどう」

志麻さんが笑顔で俺の肩に手を置く。

この人、本当に良い人だよな。

どうしてきくりさんと一緒にいるのか聞きたいくらいには常識人である。

叶う訳が無いが、こういう姉が欲しかった。

ん……何だか肩に置かれた手に強い握力が込められ始めた。

「二郎君を信用していない訳じゃないんだ」

「はい?」

「ただ、君はこうして廣井に引つ掛かってしまうくらいのお人好しだから……万が一も有り得る。その人がどんな人間か、後で教えてね?」

「はひ」

志麻さんが凄いい眼光で言うので、俺も情けない声でしか答えられなかった。

あ、姉っていうのは、やはり違うのかも。

「あー!イチロー、恋人出来たってホントー?」

「はい。何故か」

「じゃあ、今日のライブは張り切るネー!オメデトー、イチロー!!」

「うあ、何か泣きそう」

純粹に祝うつもりでやる気を出してくれるイライザさんに俺の涙腺が緩む。

最近観た『パッチ・アダ〇ス』ぐらいに泣いてしまうかもしれない。

……それはそうと、志麻さん肩がそろそろ痛いです。

「うおおおりア充め!」

「いだっ!」

三人で盛り上がっていたら、きくりさんに背後から首筋に噛みつかれた。蚊帳の外の気分だったのかもしれない。

抱き着くきくりさんをソファーに無理やり座らせ、俺は痛む首筋を擦った。

また奇襲を受けても怖いので、隣に座って視界の中に収めておく。

「く、油断も隙も無いな、酔っ払いめ」

「あたしを見捨てないでえ」

「思いの外いつも以上に見苦しい……」

「ひぐ、あたしらって本気出せばリア充にい」

「……きくりさん綺麗ですし、本気出せば一人や二人出来るでしょ。多分、恐らく、きつ

と、もしかしたら」

断言出来ないのは、酔ってるからだけどね。

落ち込んでいたら慰めてくれる彼女がこんなにも消耗していたら、今も今までも迷惑を被ってきたのについて手を差し伸べてしまう。

リヨウといい……郁人さんの言う通り、俺はダメ人間に縁があるようだ。

涙腺がもつと緩みそう。

「うあああーし、心臓がうるさいいー！」

俺のフォローに対して、何故かきくりさんが叫び出す。

駄目だったか。

やはり、慣れない事はするもんじやないな。

俺は立ち上がって、志麻さん達に一言かけてから控室を出た。

ライブ前なのに、畳みかけるストレス。

それにしても、どうして喜多さんやりヨウ、虹夏がここにいたのだろう。

彼女達もライブに誘われた口か？

一緒に観て……いや、今日くらいは一人にしてくれ。

もう既にメンタルが疲労困憊状態だ。

それも直に『S I C K H A C K』のライブですべてが吹き飛ばされるけど。

「あ。……い、いっくん」

聞き慣れた声と、愛しい笑顔があつた。

ライブ待たずしてストレスは何処かに消えた。



「『結束バンド』がゲストで？」

ライブ開始四十分前のライブフロアで、俺とひとりは話していた。

ひとりによると、きくりさんにより『S I C K H A C K』ライブのゲストとして招かれ、今日は彼女たちと共に演奏をする事になっていたらしい。

リヨウはそんな事を言っていなかった。

或いは、俺が『S I C K H A C K』のライブに行くとは知っていたから敢えて黙秘していた可能性も否めない。意外に俺を誂ったりするのが好きな質なので、サブライズのもりだったとも思える。

まあ、入口の出来事でもう何が来ても驚かないが。
でも、有り難いな。

今日は『SICK HACK』だけでなく、『SIDEROS』に加えて『結束バンド』の音楽まで聴けるのだ。

始まる前は散々だが、これは案外素晴らしいクリスマスプレゼントではないか？

「じゃあ、楽しみだな」

「あつ、あのね、いっくん」

「ん？」

「……………り、リヨウさんと付き合ってるって…………」

「ああ。アイツから聞いたんだっけ……………そうだよ」

「っ……………」

……………さつきからひとりが視線を合わせてくれない。

出会えた事で全てのストレスが解消されたが、こういう対応をされると死にそうだ。

「ひとり？」

「あつ……………ごめん」

「え？」

「い、いっくんは……………今幸せ？」

「いや、どうだろうな? 昔に比べたら幸せ、なのかな? 幸せと一口に言えないくらいに複雑というか」

「り、リヨウさんが好きなんじゃ……」

「酷い話だけど、まだ恋愛って物が全然分からなくて……」

本当に最低な話だ。

正直、ひとりに嫌われるレベルで酷い状況である。

リアクションによつては、この後に昔からいざという時の為にと目星を付けてある郊外の野山で実行するつもりだ。

俺は、恐るおそるひとりの様子を窺う。

すると……何故か、ライブで見せる『ギターヒーロー』の顔をしていた。

「い、いっくんが今一番幸せって思う瞬間って……何?」

「え? 映画観てる時と、リヨウのベース聴いてる時……あととはひとりと一緒にいる時?」
思い浮かんだ物を伝えていく。

ただ……最近は地味にリヨウと触れ合っている時間もまた細やかながら幸福と言える時間になりつつあるのだが、まだ断言できる程では無いから口にはしない。

「……あ、あのね、いっくん」

「うん。どうした?」

「い、いっくんがそれで幸せなら……」

ひとりが俺の手を握った。

「わわわわ私とずっと——」

「ぼっち。そろそろ準備」

ひとりが何かを伝えようとした瞬間、遮るようになりヨウが現れた。

リョウ……ひとりは一言ずつでも他人との会話でかなりの精神力を消耗するから、あまり邪魔をしてやらないで欲しいんだが。

表情からしても、何か真剣な話だったようだし。

「ごめん。ひとり、何だって？」

「あつ………や、やつぱり何でも無いです」

ひとりがそそくさと何処かへ走っていく。

たしかに『結束バンド』もライブ前なのに、俺の相手をするには時間が無かったのかもしれない。

手を振ってひとりを見送っていると、リョウに睨まれた。

「……何だよ」

「首」

「首？……………あつ」

俺はさつと首筋を手で隠す。

だが、時すでに遅し。

リヨウがちろりと舌舐めずりした。

「後でね」

嫌だ。

部外者は呼ぶべきではない

クリスマスライブ後、居酒屋にて催された打ち上げに俺は参加していた。

打ち上げとは言うが、もう一つ目的を兼ねた集まりでもある。

それも星歌さんの誕生日会。

面子としては『FOLT』のスタッフは別の場所でやっているらしく、今日が誕生日だという主役の星歌さんと今日のライブで頑張ったバンドマン達——『結束バンド』や『SIDEROS』だけが揃っている。

大トリの『SICKHACK』は、残念ながら個々人で用事があつて不参加だ。イライザさんは……二次創作の同人誌の投稿があるとか何とか。途中のやつを読ませて貰ったけど面白かったので完成品が気になる。

「一郎くん、美味しい?」

「あ、ああ。美味しいな」

「居酒屋って本当に料理美味しいよねっ。お酒とか関係無しにご飯目的で来たい！」
「そ、そっか」

ライブ後の打ち上げはバンドマンの慰労の場。

本来なら部外者は立ち入っても空気が読めず、始終場違い感に晒されて悶々とする物だとばかり思っていた。

俺もそれを覚悟で参加した。

だが、実際はどうだ？

隣の虹夏がどうしてか隣にぴったりと貼り付いて、笑顔で話題を振りながら楽しく食事をしている。最近は頻発している怖いモードとも違う、普段の明るい彼女の筈なのに触れている部分にじっとり汗が滲む。

さつきから、俺の左腕を抱くのは何故だ。

料理が美味しいという割には、食べている俺の姿を見ているだけだ……。

「あのさ、虹夏」

「ん？なにになに？」

俺から話しかけられた事が嬉しいのか、虹夏は今まで以上に眩しい笑顔を見せる。

「星歌さん、寂しそうだけど」

「」

「今日はあの人主役だし、構ってあげ」

「嘘つき」

「ひゅっ」

「お姉ちゃんを理由にして逃げるんだ？」

「あつ……………いえ」

笑顔の色が変わって、俺はその迫力に口を噤む。

ちらりと星歌さんを見れば、いつ箸を投げ飛ばして来てもおかしくない形相と体勢だった。

打ち上げて魔境だったのか。

帰りたいな……………と思ったのは、単に虹夏が怖いからだとか右隣からニコニコと黙って太腿を撫でてくる喜多さんの手が煩わしいとかの諸々の理由を除いても、人の誕生日会という慣れないパーティーに参加する緊張感があったからだ。

助けを求めてリヨウに視線を投げた。

退屈そうにスマホをいじっていた彼女だが、珍しく俺の危機を察知してくれたのが合った。

「もう恋しいのか、一郎」

「何か調子乗ってない？」

「いや、初めてリア充としてクリスマスを迎えた気分が思いの外心地良い」

「その所為で今俺のリアルが危ないんだぞ」

「茨の道か、一人で辛いだろうけど頑張れ」

「せめて一緒に歩けよ」

他人事みたいに言いやがって。

いつにも増して調子に乗っていやがる。

普段から自分に酔っているヤツだが、今日はまた次元が違う。

リア充として迎えたクリスマス、か。

少し前まで憧れはしても、叶う事は決して無いと考えていた夢物語が現実になっている。

でも……何で微塵も嬉しくないんだろう！

せめてもの救いは、ひとりが居る事だけか。

そつとひとりの方を盗み見る。

すると、何かに気付いたようにはつとした顔でひとりが席を立った。

「あつあの、虹夏ちゃん」

「……ぼつちちゃん？」

「い、いっくんがポテト食べたそうなので」

虹夏に一言断って、俺の手を握ったひとりが自分のいた別のグループ席へと誘導してくれる。

心にじんわりと沁みる気遣いに涙をこぼしそうになりながら、リョウとひとりの間に腰を下ろした。

「だ、大丈夫?」

「助かった……オマエは天使だな、ひとり」

「てっ!?!」

天使と称されたのが嬉しかったのだろう。

顔の形が崩れるほど喜んで、俺の手をにぎにぎとしている。

さて、ひとりの厚意に甘えてポテトでも食べるか。

これで何もせず休んでいたら、虹夏にまた恨まれそうだからな。

俺は皿へと手を伸ばして——ほとんど空の器の光景に唾然とした。

えっ、な、何!?

どんなペースで食べば、こんなにも早く無くなるんだ?

虹夏たちの方は会話も盛り上がっているので未だ卓上は料理の彩りが絶えていない。

「い、意外と食うの早いな」

「失礼ね、食いしん坊って言いたいワケ!」

「うわ、めっちゃ噛みつくじゃん」

吠え始めたヨヨコに思わず耳を塞ぐ。

なるほど、会話量の少なさに反比例して食事の手は進むという事だな。

どうやら、間を持たせる為にヨヨコもよく食べていたらしい。

仕方無く、次のポテトを注文しておいた。

「リヨウも食べてるのか？」

「うん」

「うわ、口汚つ……拭けよ」

「頼んだ」

「自分でやれ。……つと。こつち向いてくれ、ひとり。ほら、拭いてやるから」

「えっ。い、一郎……私は？」

「え、自分で拭けつて」

「え？」

「え？」

ひとりの口周りも汚れていたの、俺はそつと拭き取った。

抵抗せず目を瞑つて身を委ねる姿を微笑ましく思い、終わった後に頭を撫でてやる。

よしよし、いい子だ。

……今日は妙に手の方に強く擦りついてくるな。それだけライブで疲れたから労って欲しいのかもしれない。

ひとりに構っていると、ヨヨコの方から冷たい視線を感じた。

「……恋人出来た、って聞いてたけど後藤ひとりだったのね」

「違うけど」

「はあ!?じゃあ誰よ!?!」

「隣のリヨウ」

「対応逆でしょ。恋人こそ甘やかさないよ」

「……………」

「その何を言ってるんだ、オマエは……?みたいな本気の顔やめて!!正論言ってるのに傷付くんだけど!?!」

リヨウを甘やかす、だと?

日頃から俺に甘えきっている人間を労る必要性は皆無に等しい。

落ち込んでいたら助けたいとは思う。

だが、特に何も無ければただの寄生虫だ。

構うだけ搾取されるだけなので、何をしても骨折り損にしかならない。

「アンタね、相手の気持ちを考えてみなさい」

「リヨウの気持ち？」

「山田リヨウが他の男とイチャついてたらどう思うのよ」

「金を借りる交渉中……?」

「アンタに秘密で他の男と休日歩いてたら?」

「財布にされてるな」

「他の男に貰ったお揃いのアクセ付けてたら?」

「多分少ししたら転売してる」

「他の男の家に一泊してたら!」

「きつとベッドも取られてるから男が可哀想」

「他の男に対してキスしてたら!」

「その時はもう俺たち別れてると思うぞ」

「何なのコイツら!」

ヨヨコが戦々恐々としている。

交際関係に一定の誠実さとか常識だとか共通する物はあるだろうが、それらを物差しにしたって俺とリヨウを計る事は出来まい。

始まり方からして、俺が知る物とは違う。

リヨウが他の男に情熱を注いでいるとしたら、自分のやりたい事に素直だからその前

に別れようとする筈だ。

元々、他に意中の相手でも出来たら別れようなんて言う浅い関係だったし……？

「どうした、リヨウ」

「本当に……ぼっちと仲良いね」

「まあ、ひとりは俺の至福だからな」

「……あつそ」

リヨウはまた退屈そうにスマホに視線を落とす。

「それなら、ぼっちと付き合えば良いんじゃない？」

ぶつきらぼうな言い方だった。

やや苛立たしげなリヨウの様子に、俺は驚きを禁じ得なかった。

これは、拗ねているのか。

自分より、ひとりを優先している状況が気に食わないという反応に見える。

お、可怪しい……。

普段なら、即刻皮膚に爪を立ててきたり噛み付いたりする筈なのに、それもしいな
んてらしくない。

「いや、ひとりは妹みたいなものだし。な、ひとり？」

「……………」

「いや、そんな可愛い顔されても」

俯きがちに、だが期待しているような上目遣いに俺も困惑させられる。

こういう話題は苦手だから、ひとりは即刻同意してくれる物だと思っていたんだが。

……………どうしよう。

拗ねたりヨウの機嫌の直し方なんて分からない。

これまで一方的にキレて、そして一方的に鬱憤を晴らして、勝手に満足して立ち直るのがリヨウだ。

思い返せば、俺の方から能動的に動いた事が無い。

「り、リヨウ。口拭くからこっち向け」

「もう拭いた」

「な、何か奢るぞ」

「別に今じゃなくていい」

奢るのは確定かよクソが。

機嫌を直す、か。

スタンダードな手段なら、何かを献上したり褒めたりと言うのがある。前者に關して

は既に奢らなくてはいけないらしいので却下とし、後者は――。

「今日……リヨウのベース最高だった」

「廣井さんの時の方が嬉しそうだった」

「いつ酒吹きかけられるか分かんなくて身構えてたんだけど？」

「……ホントに？」

「それに演奏中、オマエがこつちにウインクしたファンサの方が嬉しかった」

「……SIDEROSのベースの鎖骨ばっか見てた」

「幽々さんの？中々見た事無かったファツションだから。首のとこのアレ、どうなってるのか気になって」

「……ホントに？」

「初めて見せられた時は色々あつて感動薄れてたけど、ライブで新しいオマエの『結束バンド』パーカー姿を見た時はカッコいいと思つたぞ」

滅茶苦茶恥ずかしいがストレートに褒める。

恥ずか死ぬのは後で良い。

今はリヨウの機嫌を直す事に注力する。この状態で仮に俺の家にまで持ち越したら、またどんな地獄に見舞われるか分かつたものではない。

これでどうだ……!?

リヨウの顔色を窺いながら褒め言葉を畳み掛けていると、やがてスマホの方に固定さ
れていた顔の向きが少しずつこちらに向けられ始めているのを見て手応えを感じた。

よし、このままいけば……！

「い、いつくん……私、も……頑張ったよ……う？」

何、だと？

後ろからひとり自分もとばかりに乞うて来る。

それはいけない。

体が逆らえるワケが無い。

ひとりの要望は全力で叶えたい俺の日頃の習性が働いてしまう……！

俺の体がひとりの方へと正面を向け——。

「あはっ、私も褒めて下さい先輩♡」

「私が落ち込んだ時は何で同じ事してくれないのかな？」

いつの間にか虹夏と喜多さんが立っていた。
南無三。



星歌さんへのプレゼント披露宴も終わり、打ち上げは解散となった。店の外は雪が降っている。

関東での積雪は珍しいから、入店前とは異なる街の雪化粧には思わず見入ってしまう。深くはないが、踏めば音を立てて靴が沈む。

途中で入店して来たきくりさんの頭や肩に積もっていたのを見た時に外が降雪状態なのは知ったが、まさか積もるとまでは思いもしなかった。

「雪、か」

「一郎、雪好きなの？」

「まあ、雨よりは好きだと思う」

寒い日にしか降らないし。

それだけで特別感はある。

ただ、積雪を見ると親戚の家に居た頃に自分をイメージして作った雪だるまを全力で殴ったり蹴ったりして鬱憤を晴らしていた頃を思い出すから好きだとは断言出来ない。

久し振りにまたやろうかな。

リョウと二人で家路を辿りながら、時折爪先で雪を前に蹴り上げる。

『『結束バンド』、大変だな』

「何で？」

「新宿で別れる時、ヨヨコが『SIDEROS』も『未確認ライオット』に参加するって
言ってただろ」

「うん」

「手強いぞ、あのメンバーは」

新宿で解散する際に、ヨヨコが未確認ライオット参加を表明した。メンバーには無断
だったらしく、かなり紛糾する声は聞こえていたが……。

『新宿FOLTY』で『SICK HACK』のライブを観る際、前座として演奏する彼女
たちを何度も観た事がある。

若手ながら勢いがあつて人気も現時点の『結束バンド』に比べてかなりある。ヨヨコ
の歌と演奏技術がまた素晴らしく、正直な感想を述べると今回のライブでも『結束バン
ド』をかなり霞ませてしまっていた。

リーダーにして、ギターボーカルの大槻ヨヨコ。ドラムの長谷川あくび。ギターの本
城楓子。ベースの内田幽々。

四人とも素晴らしく技術力が高い。

そんな俺の『SIDEROS』の評価を聞いて、だがりヨウは不敵に笑う。

「私の新曲が火を噴く」

「ひとり達が協力してくれたヤツか」

「……うん。皆の為にも、未確認ライオットで失敗はできない」

「大切にしてるんだな、『結束バンド』」

「うん。大切……けど」

じろりとリヨウの瞳がこちらへと滑り動く。

「誰にも一郎を譲る気は無い」

どうやら、機嫌は直っていなかったらしい。

たしかに、あの後は虹夏も喜多さんも褒めて、ひとりを目一杯褒めていたら、何故かさらに「私達には何か無いわけ？」と『SIDEROS』からも批判され、彼女らの相手もしたら後で来たきくりさんが「ま、少年の一番はあたしだからねー！」と爆弾を落として地獄が始まった。

だから、部外者を打ち上げに呼ぶべきでは無いと思うのです。

「ぼつちを褒める時は饒舌だった」

「そ、そうか？」

「虹夏にもベタベタしてたし、郁代に脚触られても払わなかった」

「どつちも軽率に振り払ったら後が怖いし……」

『私の一郎』として打ち上げに呼んだのに話が違う」

「オマエは俺を殺したかったのか?」

星歌さんの誕生日会も兼ねているのだから、それだけはやめて欲しい。

最近は本当に虹夏を蔑ろにしているのではないかという疑惑を掛けられているようで、俺を見る目が以前よりも厳しい気がする。今日だって箸を握り込む彼女の姿を何度か目端に捉えて俺は縮こまっていたんだぞ。

「頼むから穏便にしてくれ」

「分かっている」

「それにしても、未確認ライオットか……。たしかライブもやるんだろう?俺も観に行けるのか?」

「大丈夫だと思う」

「大舞台で観れたら凄いだろうな」

今後の楽しみがまた一つ増えた。

これは『結束バンド』にとっては試練そのものなのだろうが、俺やファンにしてみれば途轍も無く喜ばしい事だ。

きつと、彼女達ならやってくれる。

リヨウが懸けている思いの強さや大きさも知っているから、尚更に期待してしまう。

「ところで、一郎」

「ん？」

「年末はどうする？」

「今年も後藤家に行くつもりだ」

「……そう」

「ああ、でも。大晦日は蕎麦でも茹でにこっち戻って来ようと思ってる」

「何で？」

何でって……。

「去年は誰かさんが寂しかったとか言ってたし」

「……」

リヨウの手が俺の袖を摘んだ。

その後は、ただ黙って歩き続けた。

疲労は人を駄目にする

年末のバイトが終わった。

後は、例年通り後藤家（ユートピア）へ向かうだけだ。

ウキウキ気分の軽い足取りで俺は帰途につく。

後藤家への連絡は済ませたから、後は荷造りして、それから万が一に備えてリヨウの飯を何日分か作り置きし、明日の昼には出られるようにしておかなくてはならない。

忙しくはあるが、普段とは質が違う。

幸せな時間の為の労力ならば是非も無し。

「え、ロインの量すぎ」

バイトで全く見ていなかったが、スマホには何件もメッセージが入っていた。

去年のクラスで30日に忘年会を企画しているが良ければ来ないかという陽キャ君の有り難いお誘いと、今日は家に来ないけど他の女を連れ込むなという失礼千万なりヨウのメッセージ。

忘年会……行きたいけど、後藤家がなあ。

でも、後藤家は俺にいつも友達がいるかどうか心配して尋ねてくるので、忘年会を機にその不安を解消する方が彼らの心の安寧には良い事かもしれない。

出席します、と陽キャ君に送信。

すると、すぐに『また伊地知さんや山田さんとどんな風に面白くなつたか聞かせてね』と返信がきた。

……顔に似合わず性根がねじ曲がつて……やめよう、折角誘ってくれた相手を罵倒するなんて。

「リヨウのやつは……」

トーク欄を開くと。

『他の人を家に連れ込むなよ』

『一郎は押しに弱いから不安』

『浮気しても別れないけど酷い事はするから』

『明日は肉料理で』

うん、無視しても良いな。

俺はスマホをポケットにしまう。

「ん、あれは」

俺は前方に見覚えのある後ろ姿を認めた。

普段はサイドポニーに結われている長い金の髪を背中に揺らす小柄な体は、片手にレジ袋を提げている。

バイト後の帰り道って疲労感が凄いから他人と話さずスムーズに帰宅したいのが本音だが、知り合いに挨拶をしないのも失礼だろう。

それが幾ら最近は怖い相手だとしても。

「虹夏」

「あつ、一郎くん」

俺の声に、虹夏が振り返った。

吐いた息が白く、夜闇に霞んでいく。

近付いて分かったが、正面を向いた虹夏の鼻は寒さで赤らんでおり、コート一枚を羽織っただけで寝巻き姿でかなり防寒性が無さそうだった。

靴とズボンの裾から除く白い肌も寒そうだ。

概ね、近所のコンビニに買いたった物にでも出ているのだろう。軽い用事だからと軽装で外出したが、最低限の防寒具で良いという判断が仇となつて寒さに堪えているのが言わずとも察せられる。

防寒以前に、この時間に女の子一人なのが危うい。

知り合いとしては、もう少し用心して欲しいものだ。

俺は自分のマフラーを外し、手の届く距離まで近付いた虹夏の首へと巻いた。

俺の体温で温まっているだろうし、不快でなければ寒さを和らげる一助にはなるだろう。

「えっ」

「寒そうだし、それ家まで着けていきなよ」

「わ、悪いよ。今度は一郎くんが寒いじゃん」

「俺よりも薄着で出歩く誰かよりは大丈夫。家にはマフラー他にもあるし、返すのはいつでも良いから」

「……………」

「あと、家まで送る。この時間に一人はマズいでしょ」

「……………ありがとう」

虹夏がマフラーに顔を埋める。

鼻先を温めているんだろう。

くふくふと布越しに笑っている呼気を漏らす反応に若干の疑問を抱きつつ、俺は隣に並んで歩き始めた。

すっかりクリスマススの雪が溶けてしまった路地は、風が吹かなくても底冷えしていて

立っているだけでも蝕むような寒さに包まれている。

マフラーを外した途端、首元に容赦なく吹き込む風に悲鳴が出そうだった。

に、虹夏にマフラーを貸した手前、堪えなくては。

「一郎くんって」

「ん？」

「遅い時はリヨウも家まで送るの？」

「いや、遅い時は泊まるか両親が迎えに来るから。正直、一度も家まで送るとか無かった

気がする」

「リヨウってば……」

虹夏が呆れていた。

慣れって怖いものだよな。

リヨウが泊まる事や、俺の家に長々と滞在して親に迎えに来させる部分とかに、もう最初の頃ほど苦言を呈する事が無い自分の現状にも呆れる。

誰だよ、あんな厄介者を家に入れたやつ。

「ぼっちちゃんは？」

「そもそも、ひとりは金沢八景だし……距離的に送るといっつか俺が泊まりに行くだけだな」

「喜多ちゃんは？」

「そもそも家を知らない」

「他には？」

「バイト先の後輩の女子とか」

……何なんだ、さつきから。

リヨウの事だけかと思つたら、矢鱈と家まで送つた相手について仔細を尋ねてくる。バイトの後輩の女子と言つた瞬間に、マフラーの匂いを嗅ぎ始めた不審な挙動についてもあまり考えたくない。どうか意味の無い事でありませうように。

そう言えば、虹夏と会うのはクリスマス以来だ。

去年もクリスマスは彼女の家で世話になつた。

中々に失礼な事をして、涙した彼女を家に送つて星歌さんに睨まれた記憶もまだ鮮明に憶えている。朝帰りしたらリヨウがキッチンを地獄へと変貌させながらも、おにぎりを用意してくれていたんだっけ。

後処理、大変だつたなあ。

「……一郎くんさ」

「はい」

「やっぱり、ウチでバイトしない？」

「去年の今頃もそんな誘いを受けた気がする」

「あの時と違って、今はどう？」

「リヨウの後輩になるのは嫌だ」

「変わらないね……」

そこだけは譲れない。

先輩面して俺に物を教えるリヨウなんて想像しただけで尋麻疹が出そうだ。

しかも、俺に仕事を委ねて自分は適度にサボる姿も想像に難くない。

アイツを楽にする為に働く職場なんて断固拒否する。

「経験値的には、一郎くん即戦力なんだけどなあ」

「その評価は有り難いし、色んなバンドのステージをほぼ無料で観られるのは凄く得だけど……それ以上にリヨウの後輩だけは嫌だ」

「あはは」

「顔なら家で嫌になるほど見てるし」

最近は本当に遠慮が無い。

当初から我が家同然で過ごしていたが、俺が注意しなくなった影響もあって、もはや家に居るのが自然であると認識を刷り込まされている気分だ。

むしろ、リヨウが居ない方が異常だと思わされる。

自分の甘さが招いた変化には忸怩たる思い……すら無いので笑うしかない。

「私も、もつと学校以外でも一郎くんと一緒に居たいんだけどなあ」

ぼつりと虹夏が口にこぼす。

何て答えて良いのかも分からず黙った。

「今日もリヨウはいるの？」

「リヨウ？今日は新曲をもう少し詰めたいとか何とか言つて、大人しく家に帰ったよ」

「……………」

びたりと虹夏が足を止める。

そして、勢いよく俺の方へと顔を向けるや口を開けて。

「じゃあ、私——」

「まあ、今日は一人でゆっくりしたかったから助かるわ」

「……………」

「ん？何か言いかけた？」

虹夏は口を閉じて視線で訴えて来る。

ごめん、何が言いたいのか分からない。

しばらく虹夏は笑顔でこめかみに青筋を浮かべながら、幾度か深呼吸をして俺に向き直る。

「一郎くんの家、行っても良いかな？」

「星歌さん心配するし駄目だ。……何か用事？」

「私もお泊りしたいなって……駄目？」

……………

どう考えても駄目だろう。

紆余曲折あつて恋人になったリヨウがいる身で、別の女子を家に——それも、しっかりと好意があると伝えてきた相手を招くのは浮気と判別されると思う。

「うん、駄目」

「うう、寒い……！」

「ほら。体がいよいよ冷えてきたから早く家まで帰るぞ」

「……うん」

虹夏が悲鳴を上げたので、仕方無くマフラーに加えて俺の着ていたコートを着せる。

今度は俺の方が風邪でも引きそうだが、周囲を見れば虹夏の住む家も近いので少しの辛抱だ。

寒そうな虹夏の手が俺の手を捕まえる。

いや、うん……触れた指先が本当に冷たかったので振り払えず、小さなそれを包むようにして俺たちは家路を急いだ。

やや早足で向かえば、本当には直ぐ着いた。

俺は虹夏の手を放して……放し……俺の手を放して!?

「虹夏。着いたぞ」

「うん」

俺を捕まえたまま、もう片手で虹夏は鍵を使って扉を開ける。

中から漏れ出た光に一瞬だけ虹夏は目を細めて、ぐいと俺を引っ張りながら家へと入った。

……んえっ?

「今日は、一郎くんが泊まってよ」

……んえっ?!

俺が玄関で困惑していると、音を聞きつけた星歌さんが現れた。

「おー、一郎。虹夏を送ってくれたのか」

「あ、バイト帰りに成り行きで」

「……コートとマフラー、なるほどな。悪かったな、妹が迷惑かけて」
「ちよつとお姉ちゃん？」

「おまえも寒いだろ。少し暖まっていきな」

泊まるか否かは置いておき、寒いだろうから暖まっていけと星歌さんの厚意でしばらく世話になる事にしよう。

……それはそれで良いとして。

「あれっ、少年」

星歌さんの後ろから風呂上がりのきくりさんに遭遇した。

なぜ伊地知家に風呂上がりのきくりさんがいる？

この人、俺の家だけではなく他所でも同じように寝食も厄介になっていたのか。呆れた目で見ていると、本人は照れ臭そうに笑う。

酒の飲み過ぎでどうやらダメージになっていない。

それにしても。

「……………」

「んおっ？どした？」

「いえ。やつぱり、きくりさんっていつもの性格でそんな風に見えないけど、かなりの美人だよなって」

「少年、最近はずいぶん忙し過ぎるからって軽く女の子を口説いちゃいけないゾ」

ほんとと神妙な顔で肩を叩かれた。

口説いていない、ただの感想だ。

いや……リョウや喜多さん、ひとりに加えて虹夏といい俺の周囲って美しい物で彩られているな。すっかり忘れていたけど、思った以上に恵まれているんじゃないか??

きくりさんも美人と称せるルックスがある。

それに……。

「……………」

「ん?」

きくりさんが小首を傾げる。

俺はそんな彼女を無意識に凝視していた。

フードのついたレディースの寝巻きの姿をした現在のきくりさん。俺の家にあるのとは違い、しっかりと女子——虹夏が選別した可愛い組み合わせの服装だ。

普段は結っている髪を下ろしてかなり無防備に見える。

風呂上がりで上気した肌と、まだ少し濡れた髪。

何だか妙な色香を纏ってすらいた。

俺は自分の眉間を揉んで唸る。

彼女を見た瞬間の感情が、まるで去年まで虹夏を見ていた時の物に似ている気がする。

そう。

「すみません」

「ふえ？」

「今のきくりさん、控え目に言っただけです」

「あれま」

「前田一郎、一生の不覚……………!!」

「複雑になる反応するなあ……………」

悶々とする俺の肩に腕を回そうとするきくりさんだが、最近背丈がまた少し伸び始めたのもあって全然届きそうにない。

歳上のお姉さんぶりなのに爪先立ちになっているのが逆にまたギャップがあつて……やばいな、バイトの疲労でいよいよ感覚も可怪しくなってきたのかかもしれない。

「あたしの姿なんていつとも見てるじゃーん」

「いえ。いつも目のやり場に困る格好してるし、いざ直視したらただの吞兵衛だし」
「え、褒めてる??貶してる?」

無意識に褒めちやうので意識的に貶します。

「私が、家に、入れたのに、私じゃなくて、廣井さん、ばっかり」
後ろから虹夏の低い声も聞こえる。

ああ、分かっている。

この人に今関わるのはやめた方が良い。

悶えていた俺の近くでシャッター音が鳴る。

「私の寝巻き姿に顔真つ赤にしてる少年とツーショット、ぼつちちゃんに見せてあげよーっと」

「やめて下さい」

「あつ、間違えて志麻にも送っちゃった〜!あははは………あれ、『また迷惑かけてるのか。おまえ次に会ったら』って何の事だろ」

きくりさんがひとりに俺の醜態を晒してしまった。

くそ、なんて非道い事をしやがるんだ。

俺はきくりさんから視線を逸らして、虹夏の方へと歩む。

「あの人、毒だから……しばらく俺から隔離して」

「うん。もう二度と近付けないね」

表情の無い虹夏が約束してくれた。

流石に二度と、はやりすぎな気がするけど。

さて、きくりさんも居ると分かれば体が暖まったら早々に家を立ち去るべきだな。

早く帰って準備もしたいし、それにマジで疲れたから……一昨日に作ったカレーの残

りに火を通しておきたい。

「良かったらウチでご飯食べてってよ」

「それは流石に悪いって」

それに、カレーもあるしな。

「今日はね、麻婆豆腐丼と野菜です」

……イタダキマス。



明日には、いつくんが来る。

こ、この前は色々あつて伝えられなかつたけど……1月4日までは滞在するつて言つてたし、一週間近くあるから、そ、それまでに伝えれば良いよね。

え、えへへ。

私——後藤ひとりとは、そう自分に言い聞かせて最近止まない焦燥感をどうにか抑え込む。

「あつ、ろ、ロイン……?」

今年になつてから、家族以外で通知が鳴るようになった私のスマホを手取る。

お、お姉さんからだ。

また、ら、ライブの誘いかな。

この前はクリスマススのライブに誘つて貰えたけど、アウエー感に怯んでパフォーマンスが落ちた感じがするし、あれからまだ経験も積んでいないからちよつと気後れする提

案だけど……い、いやいや、二回も都合よく誘って貰えるとか考えてる視点で烏澁がましいけども！

悶々としながら、私はトーク欄を開いた。

『いえーい。私の風呂上がりで真っ赤な純情少年お届けー！』

……あつ（死）。

侵蝕される将来

伊地知家で温かい飲み物を貰って、暫く休んでから腰を上げた。

きくりさんは再び酒が入ってから通常(?)のモードに入り始めたので、不思議な熱を持って高鳴っていた心臓も今は落ち着いてくれている。

本当に心臓に悪い人だ。

素面のきくりさんには二度と会わないという誓いを自身の中に立てる。

「星歌さん、虹夏。お世話になりました」

「いや、一郎」

「はい」

「やめておけ。外、大雨だぞ」

「……」

俺は玄関扉を開けた途端、もはや水の壁とでも言うべき雨の降り頻る光景に啞然とした。

天気予報を見れば、たしかに夜中は雨。

時間帯的にバイトからも帰着しているので関係ないと、頭の中から不必要な情報として排除していたのですっかり忘れていた。

傘なんて持っていない。

伊地知家に借りれば良いのだろうが、玄関前に置かれた傘立ての中を見れば、俺の体格に見合った物はなく、どうあっても濡れる事を覚悟しなくてはならない。

別に帰って直ぐに風呂に入れば良い話なのだが、冬の雨は梅雨の時期のそれとは別物で、容赦ない冷たさから殺人級の脅威である。

しかも、外気に触れた頬が一瞬ひくついた。

これで雪にならないのが可怪しいレベルの寒気だ。

「……が、頑張れば何とか」

「諦めて今日は泊まりな」

「でも、休憩までさせて貰ったのに、ご迷惑かけっぱなしなのは」

「気にするな。リョウのヤツが休日のバイトも遅刻せず来れるのは一郎のお蔭だろ。一泊くらい安い」

「俺とか関係なく遅刻するのは駄目ですけどね」

「その通り」

星歌さんに肩を引かれて、渋々と玄関扉を閉じた。

この凍てつく猛雨の中を突っ切って家に帰る体力がもう残っていない。温かい飲み物まで貰って寛いだ後ともあり、体は弛緩しきっている。

うん……無理だな……。

結局、俺は伊地知家で過ごす事となった。

俺はシャワーを借りて、伊地知姉妹の父親の服を借りる事になった。

うん、傘立ての中のヤツを見て薄々察してはいたが、やはり小さいな。ズボンの方は、シワになるのが厭わしいが仕方ないのでそのまま着ていた物を履く。

脱衣所から出て居間へ行くと、エプロン姿の虹夏が料理を温め直しているところだった。

「あ、一郎くん」

「シャワーありがとう」

「うん。いま麻婆豆腐に火を通してるから。座って待っててね」

「……………」

「ん？どうしたの？」

不思議そうに虹夏がこちらを見てくる。

来客への対応として、虹夏にとっては当然の事をしているつもりだろう。

だから、愕然と彼女を凝視している俺は酷く不自然に見えた筈だ。

でも許して欲しい。

だって——友だちに料理を振る舞って貰えるなんて、実は初めてかもしれないほど経験が無いのだ!!

むしろ普段は俺が作る側である。

リヨウといい、ひとり、きくりさん……本当に作ってばかりだ。

以前も虹夏が泊まった時、快く台所に立つてくれた彼女に対しても、結局はリヨウに謎の要求をされて俺が料理担当を代わって食えず終い。

今日、遂に俺は——人の飯を食う!

「一郎くん、何か楽しそうだね?」

「虹夏のご飯が楽しみで」

俺の一言に虹夏の表情が消える。

虹夏、もう麻婆豆腐の入った鍋がぐつぐつ煮えた音を立ててる。いい加減に火を止めないと、そろそろ焦げるんじゃないか?

「あ、もう大丈夫だね」

彼女も気付いて火を止める。

俺の為にわざわざ炊き直したであろう米を椀に盛り、粒だった米粒たちを湯気が立つ麻婆豆腐で丁寧に覆っていく。

ほんの些細な手作業、その所作から滲み出す家庭の雰囲気は俺は目眩がする。俺には無い物だ。

誰かの為に作る事が増えたけど、言語化できない差異が見ていると自覚できる。

「はい。お待ちどう」

「……ほんとに美味そう」

「後はサラダあるから。おかわりもあるし、いっぱい食べてね」

俺は震える手で碗を持ち上げる。

レンジで一口分を掬い、少し吐息で冷まして頬張る。間もなくして舌をつつく辛味とそれを撫でて鎮めていく豆腐、そして鶏の旨味が口の中に広がる。

あー、旨い。

鼻に抜けていく香りもあり、脳が次の一口が欲しいと叫んでいる。

これが『友だちの飯』。

「美味しい?」

「ん、超美味しい」

「えへへ、落ち着いて食べなよ」

「最高でいふ」

俺の前に座った虹夏が頬杖を突きながら微笑む。

麻婆豆腐にがつつく俺を見守る姿は、まるで好物で興奮している幼子を見守る母のようだ。

小柄で誰よりもエネルギーシユな普段の虹夏とは異なる雰囲気、俺も思わず手を止めて見入ってしまう。こういう時の彼女は、ぐつと歳上のように感じる。

実際は同じ年だけど、納得してしまう。

家族の為に料理する虹夏。

基本は自分の為に作る俺。

味付けとか味覚的な好みは似ているから料理の味も必然ある程度は似てしまうが、そんな言い訳だけでは絶対に言い表せない。

決定的すぎる違い——それを認めてしまう。

でも、一年前のように嫉妬して不快感を抱いたりはず、素直に羨ましいと思える。

「どうしたの?」

「いや。……星歌さんが羨ましいって」

「え?」

「普段からご飯を作ってくれる人がいるって、凄く助かるし、こういう味って誰かの為に作る物しか出せないって感じるからさ。俺が麻婆豆腐作ってもこうはならないし」

「……」郎くんは、そうかもね」

絶対にそうだ。

これに比べたら、何だか俺の麻婆豆腐は味気なく感じるだろう。

……虹夏の飯を食い続けたら、自分で作った飯を食べたくなくなるかもしれないな。

俺は麻婆豆腐丼を一度卓上に戻し、サラダに手を付ける。シャキシャキとした食感が、少し濃い味で包まれていた口内を洗い流してくれる。

「虹夏の飯は魔的だな」

「何で!?!」

「俺、これ食い続けたら自分の作る飯に飽きそう」

「……ふーん」

虹夏が手を伸ばして、麻婆豆腐丼を取り上げた。

取ろうとした俺の手が空を切る。

「え?」

「食べたい?」

「え……そりゃ食べたいよ」

「じゃあ、お願い聞いて?」

「麻婆豆腐の為に?」

麻婆豆腐丼を食べる為の約束か。

突然取り上げられたから軽く絶望してしまっただが、願いさえ聞けばまた食べさせてくれるらしい。

そんな意地悪な子ではなかったと思うが、俺もここ最近星歌さんに睨まれるぐらいに虹夏の扱い方が酷かった気がするので甘んじて受け容れよう。

「将来は、ずっと私のご飯を食べてね」

虹夏が甘い声で囁いた。

俺はそれを聞いて……………考える。

「いや、将来の進路によつては無理じゃないか?俺が地方とかに行ったら」

「その時は私も一緒だから」

「……………?」

俺が地方に行くと虹夏が追跡してくる。

何か地獄の鬼ごっこっぽい。

まあ、鬼ごっこなんてリョウ以外とした事無いけど。

何だろう、そこまでさせる程に気分を損ねる事をしたのだろうか。

日頃の行い？

それとも、麻婆豆腐丼の褒め方が悪かった？

どちらにせよ、リョウといい虹夏にまで将来を染められるのは些か不安に思われる。

将来の事を安易に判断すべきではない……それも麻婆豆腐丼を理由に。

「将来の事は、まだ分からないし……ほ、保留でお願いします」

「……………」

「なので、食べていいかどうかは麻婆豆腐丼は虹夏の判断に委ねる」

「……………はあ」

俺の返答に虹夏がため息をついた。

本当に心底から呆れたといった様子だ。

虹夏とは思えない冷たい眼差しと共に、麻婆豆腐丼が返される。

「そっか。これがキープってやつだよね」

保留キープ。

謎の式が虹夏の中で確立されたらしい。

何だか麻婆豆腐丼が食べづらいが、返してくれたという事は引き続き食事を取る事を

許可されたに違いない。

残す方が失礼なので、恐る恐る腕に手を付ける。

「絶対に逃さないからね？」

もしかすると、将来待たずして鬼ごっこが始まっているかもしれない。



伊地知家で世話になった二日後。

「いっくん、コレやってー」

にぱっと、ふたりが眩しい笑顔で蜜柑の皮剥きを頼んできた。

小さな足を炬燵の中でぱたぱた動かしている。

俺は笑顔で承諾し、丁寧に剥いていく。

花のように開いた皮の上に実を置いて、ふたりの前へ置けば、きやいきやいと楽しそうな声を上げた。赤子や小さい子の笑い声ってその時にしかない響きがあつて耳が幸せになる。

ひとりはこの風を上げて笑う事もそんなに無かったので、後藤家でこの声が聞けたのはふたりだけ。

「いっくん!」

「んー?」

「あーん」

「っ!?!あーん」

ふたりが切り分けた実の一つを俺に差し出した。

喜んで俺が実を食べれば、もっと嬉しそうにする。

「蜜柑やつてくれたお礼ね」

「んー、美味しい。ありがとう、ふたり……俺幸せだよ」

「えへへ。じゃー、いっくん死ぬまでずーつとふたりと一緒にいなきやだねっ」

「ん？うん、そうだねー」

幼児の口から『死ぬまで』なんてパワーワードで一瞬固まったが、よくよく考えたら死ぬまでふたりと遊べるとか特に弊害はないから気にしなくていいか。

例年通りの後藤家。

直樹さんが去年は娘の受験手伝ってくれてありがとー！とか言つてカメラをプレゼントしてくれた。文化祭の時にひとりのライブを撮影していた物とは違うようだが、あの時の映像とか貰えないだろうか。

まあ、それは後で良い。

今はこのふたりの笑顔をカメラに収める！

「はーい。ふたり、笑つてー」

「ちーず、はいっ！」

「それ逆ねー。はい可愛い」

貰つて三時間にも関わらず、ふたりだけで枚数が途轍もない事になっていた。

恐ろしい事に、どれも見飽きない。

流石はあの隠れイケメンの直樹さんと美女の美智代さんから生まれた存在だ。一挙手一投足が光を宿しているが如く俺の見ている世界を照らしてくれる。

今だって甘えたくてぴったりとくっついてきてくれる辺り、日頃のストレスで長らく忘れていた安寧を体の中で少しずつ思い出させてくれる。

「ねー、いっくん」

「何？」

「おねーちゃん、いっくんの話してくれなくなっただよ。顔もじめっとしてるし」

じめ……？

顔から湿気を感じる、とは……？

暗い顔をしている、という事にしておこう。ふたりはまだ五歳児だから語彙力はまだまだ未熟なのだ。そういう所がまた可愛い。

いや、今はひとりの事だよな。

俺の事を普段から話しているのかも分からないから何とも言えないが、表情についてはふたりに心配されているのだから本人が明かせない深刻な問題なのかもしれない。

「いっくん、何かあったの？」

「え？」

「いっくんも何か違う。匂いとか変」

「匂い……洗剤は変えてないと思うんだが」

「いま誰かと一緒に住んでる？」

ふたりの円な瞳が問うてくる。

妙に鋭いな思ひながら、俺はその言葉に首肯した。

「俺の家によく泊まる子がいるんだよ」

「友だち？」

「ううん、カノジヨ」

「え？いっくんはおねーちゃんと結婚するんでしょ？」

「いや、それはひとりごとがどうしても困ったらって話で——いたっ!？」

後頭部に飛んできたジミヘンが激突した。

突き出された前足に頭を殴られて苦悶する。

「いっくん、ダメだよ」

「う、え？」

「おねーちゃんには、いっくんしかいないんだよ？」

「……そういえば、ひとり部屋から出てこないな」

今日は昼食以来、顔を見ていない。

またギターに集中しているのだろうか。

「ちよつと、ひとりの様子を見てくるよ」

「うんつ。いっくんが見てあげないと、おねーちゃんすぐ粉になっちゃうから」

「??」

どうやら、妹にも常識外の生態である事を把握されているらしい。

まあ、ふたりが天使のような存在ならば、ひとりは女神そのものだから、人の理解できな体の仕組みなワケが無い。

理解しようという方が烏滸がましい。

あるがままを受け止めるのだ。

ひとりの自室前に立ち、俺は襖の端を叩く。

「ひとり。入ってもいいか?」

返事は……無い。

眠っているのだろうか。

俺は心の中で謝罪しつつ、そつと音を立てないように襖を横へと滑らせた。

室内は明るく照明されている。

ひとりが寝ている布団も片付けられているから、昼寝ではないようだ。——と、部屋の隅に座るひとりの姿を発見する。

ヘッドホンをしており、どうやら俺の声が聞こえなかったのはその所為らしい。よく見ると机の前で、何かをしている。

「ひとり、何して——」

俺は歩いて近付いた時、見えていなかったひとりの手元が見えて——凍りついた。彼女が、左手首に向かつて鋏を近付けている。

蒼白い顔で、ふるふるすると震えながら慎重に刃先を近付けていた。

それはまるで、昔の俺が親しんだ行為と似ていて——。

「ひとり!!」

「あえっ!!!?
!!」

俺はひとりに飛びかかり、彼女の左手首と刃先の間に手を滑り込ませる。

驚く彼女からすかさず鋏を取り上げ、遠くへと放った。

「何してる!?!」

「えっ、あつ、え?」

「あの鋏で何をしようとした!?!」

「ひえっ……っけ、結束バンド締め過ぎて取れなくなったから………ひぐ、き、切って取る

うと、思って……」

え……………」

涙目のひとりの言葉を耳にして、そつと手を退けた。

ひとりの左手首には、肌に食い込むようにしてギチギチに締まっているピンク色の結束バンドがあつた。

……………」

……………」

か、勘違い……………」なのか。

自傷行為ではなく、単に結束バンドを……………」

ようやく事実を悟った瞬間、俺はその場に脱力した。

「いいいいいいっくん!?!」

「ごめん……………」早とちりして。てつきり、ふたりから落ち込んでるって聞いてたから、自傷行為に走ったのかと……………」

「あつ、じ、自分のこと傷付けられる度胸も無いので……………」へへ」

「笑い事じゃない。本気で心配したんだぞ」

「ご、ごめんなさひ」

取り乱した俺に対して、まるで悪戯を見咎められて誤魔化そうとしているような笑い

方をするひとりを睨む。

いかん、萎縮させてしまった。

俺の勘違いなのに。

「で、でも、私が落ち込んでるって……」

「ああ、ふたりがね。……何かあった？」

それを言うと、ひとりが少しだけ黙った後にまたへにやりと笑う。

「ううん。だ、大丈夫」

「本当、か？」

「い、今はちよつとだけ辛いけど……うん。今だけ耐えれば、あと少しすれば終わるか

ら」

「え……う？」

耐えれば終わる、って何だろうか。

まさか、『未確認ライオット』に向けて動き出した事でそれまでの緊張感などで辛いという事だろうか。

それとも『結束バンド』が上手くいっていかない……ではないだろうし、学校か？ 普段からいつか絶対に辞めてやるとも言っていたからな……でも冬休みだよな今。

「俺に出来る事はあるか？」

「え？」

「俺も手伝える事なら何でもするぞ」

協力は惜しまない。

ひとりを助けるのに理由なんて存在しない。

俺のその言葉にひとりぎ顔を強張らせる。

「い、いっくん……私が駄目になったら将来貰ってくれるって……」

「え？うん、言ったよ」

「……駄目じゃなくても？」

「駄目じゃなくても??……よく分からないけど、ひとりが望む事は極力叶えるぞ」

そっか、とひとりが少しだけ微笑む。

それを見て、なぜかぞくりと背筋が震えた。

「私、いっくんのこと信じてるね」

見た事のない、ひとりだった。

番外編『ホワイトデー』

新学期を控える三月中旬の休日である。

まだ吹き込む風は冷たいが、洗濯物を干す時の辛さは緩和された。季節的には夏が冬の二択ならば後者だが、基本的に春や秋が好きだと言う身には有り難い。

俺は静かな家を見渡して胸を撫で下ろす。

今日は帰国した両親が朝から出払っている。

久しい日本というのものもあるが、基本的に俺と同じ空間にいるのが堪えられないからなのかもしれない。だから積極的に外出も多い。

「……それで」

「ん？」

「何故オマエは家にいる？」

ちらりと見れば、同級生——山田リョウがいつもの如く寛いでいる。

本当に遠慮を知らないヤツだ。

俺のシャツ一枚で過ごす姿は不幸な事に見慣れてしまったが、さらにその無防備な格好で両親の前でも平然とテレビを観ていた昨晚の過ごし方には呆れを通り越して感嘆してしまつた程だ。

しかも、コイツが両親に余計な事を言つて二人には俺たちが恋人だと誤解されてい

る。
「朝飯を食つたら帰れよ」

「一郎、バイト？」

「今日は休み。……オマエは？」

「無い。じゃあ、二人で映画観る？」

「二人で観るから帰つて」

俺の事が嫌いではないのだろう。

こうして無警戒で接してくれるのは一種の信頼。

しかし、俺が帰れと言つても帰らないどころか、人の服を借りて勝手に泊まり、飯を食い、果てには人の予定すら捻じ曲げる。

人のいい山田夫妻の教育を疑いたくはないが、この山田の態度を見ると一回だけお腹の中から人生やり戻して欲しいとさえ考える時があつた。

俺の場合は生まれたくもなかったけど。

「一郎、朝ごはん何？」

「……今日はカッププラーメンだ」

「え……」

「俺だって偶には食いたい時がある」

普段から自炊していると思うのだ。

スーパーで出来合いの物などを見ると、無性に美味しく見える。主婦にもあるそうだが、店の作ったコロツケの香りが立っているだけで予定していた献立を忘れてしまう。

例に漏れず、俺も度々そんな事があった。

自分が作る飯は、正直に言うとも味見などをしていて分かる通り、自分の予想の域を決して出ない。だから他人の手で作られた物を欲してしまう瞬間があるのだ。

山田は、自炊した事も無いし俺の飯を食うばかりだから論外だ。

「あのさ、一郎」

「何だよ、文句言うなら自分で作れよ」

「……………」

「な、何だよ。そんな目したって作らないぞ」

普段は無表情なくせに、こんな時に限って捨てられた猫のような目をする。無駄に

整った顔立ちが放つ哀訴は、何も悪くないのに俺への自責の念を植え付ける質の悪さがあつた。

俺の袖を摘む手も、簡単に振り払えそうで罪悪感に体が縛られる。

く……コイツ、こんな処でヒモの才能なんか見せるなよ！

俺はキッチン戸棚の中のカップ麺に伸びかけた手をゆつくりと引いた。

我ながら自分の甘さに吐き気がする。

山田なんか朝飯を恵んでやる必要も無いのに。

「はあ……分かったよ、作る」

「ありがとう」

「はいはい」

「じゃあ、その間テレビ観てる」

「ここで手伝うとか言える人間になろうな？」

リヨウは軽快な足取りで居間へ踵を返す。

俺は冷蔵庫から春キャベツや魚肉ソーセージ、キュウリ等を取り出した。白米は昨晩に残った物をラップしているので、後でチンすれば二人分はあるだろう。

簡単な物で良いか。

山田の事だから俺の飯とは言ったが、単にカップ麺が嫌なだけだと思うし。

居間の方から、テレビの音が聞こえる。

音声から、今日はホワイトデーだと分かった。

「ホワイトデー、か」

ずっと縁の無い事だったので忘れていた。

しかし、今年は虹夏やクラスメイトからもチョコを貰ったのだから返礼をしなくてはならない。

憧れは無かったが、少しだけ嬉しい。

ただ、返すとなると既製品で良いのだろうか。

男の手作りが可怪しい、なんて時代では無いだろうか作るにしても材料は無い。やるにしても急がなくては間に合わないだろう。

しかも、夜になれば両親だって家にいるし……。

そもそも、学校はもう春休みだ。

誰にも会わないのだから、作った処で意味が無いが……せめて近くに住んでいる虹夏には何か返すか。山田を介せば渡しやすいだろうし。

「山田が食わなければの話だけど」

その辺りが少し信用できない。

何せバレンタインで人のチョコを食いかけた人間だ。

仲介役には少々危うい。

そう思いながら、焼肉のタレで味付けした焼きキャベツと火を通したソーセージに、輪切りにした魚肉ソーセージとキュウリを添えた物をダイニングテーブルに運ぶ。

食器の音に、ぴくりと反応して山田が振り返った。

「シンプルだね」

「朝から手の込んだ物作りたくない。……虹夏の家は違うのか？」

「朝から沢山作ってくれる」

「良いなあ。俺も虹夏の朝飯食べたい」

羨ましい。

山田ばかり良い思いをしている気がする。

俺が非難の目を向けると、何故かリヨウもこちらを責めるような眼差しをしていた。

「……食べなくていいよ」

「何で？」

「鈍いね」

「またその悪口か」

今の一言で察しろ、という方が無理だ。

俺が虹夏の料理を食べてはならない理由を詳細に語って欲しい。

ただ、朝から山田にこれ以上の体力を消耗するのも無駄に思えたので、それ以上は言及せず黙々と食事の手を動かした。

テレビでは、カップルの幸せそうな顔が映る。

ホワイトデーのお返しは物品……チョコでなくとも良いのか！

啞然とする俺の前で、感触した山田が小首を傾げる。

「もしかして、デザートにチョコが？」

「何言ってるんだオマエ」

「だって今日はホワイトデー」

「山田からチョコを貰った記憶がないんだが？」

貰う物が無いなら返す物も無い。

別に恩返しを求めるつもりは無い……いや求めたい気もするが、日頃から俺が飯を作っている分すら返して貰っていないので山田にホワイトデーで何かを贈るのは違う。

これ以上、山田に何を施せと言うのだ。

「虹夏には何を贈ろうか」

「一郎からなら何でも喜ぶよ」

「幼馴染としては、具体的に何がいかとか無いのか」

「あるにはあるけど」

「例えば？」

「一郎が一日抱き枕になってあげるとか」

「友だち辞めてくれって言われると思う」

良識のある虹夏に狂気の贈り物なんてしたくない。

ホワイトデーで他人と関わった経験なんて無いから、本当にアドバイスが欲しいんだけどな。

テレビで挙げられるホワイトデーのお返しを見習うにしても、基本的にカップルや好きな相手が対象で、友だちの虹夏に渡すには中々に誤解を招いたり、かなりの勇気を要するような物ばかり。

参考にするにはハードルが高い。

「チョコか物か」

「何でも良いよ」

「だから何で貰う気満々なの？俺のホワイトデーに山田は一切関係無いから」

「チョコ作るなら言って欲しい。味見は任せろ」

もはや感動すらしてしまう凶々しさに俺は逆に肩から力が抜ける。

取り敢えず、今日じゃなくても良いなら既製品のチョコでも溶かして、山田に味見でもして貰おう。

「分かった、味見は頼んだ」

「チョコにするんだ？」

「バイト先でチョコケーキとか作った事あるし。その要領で行こうかなって」

「――」

「えっ、何？」

山田の目が光った。

「一郎はケーキも作れる……！」

あつ。

「こ、コイツまさか！」

俺がケーキも作れると知ったから、これから場合によっては飯だけではなくデザートまで要求し始めるかもしれない。

断れば良い話ではある。

でも、ズルズルと宿泊を認めたり、食事を出したりしている自分の現状から鑑みると、いつかケーキを乞われたままに作って提供している姿も想像できてしまった。

「作らないからな！」

「うん、いつか楽しみにしてる」
リヨウは微笑んで、はいはいと頷いた。

意識させたい

高校一年の一月頃。

昼休みに私——山田リヨウは教室の窓辺の席でやる事も無く、イヤホンを耳に突っ込んで音楽を聴きながら腕枕に突っ伏していた。

虹夏も提出物があるらしくて今はいない。

暇過ぎて、このまま眠ってしまいそうだ。

でも、残念な事に昨晩は一郎の家で早寝したのもあって眠気はあまり無い。珍しく居眠りもしていない私に先生がやけに驚いていたのは心外だ。

……そうだ、一郎だ。

私はスマホを取り出す。

ロインの一郎のトーク欄を開き、適当なスタンプを一つ送信する。

きつと、一郎も暇に違いない。

自他共に認める孤独キャラである彼は、友だちがいない事をいつも嘆いていた。今も寂しく机に独りだろう。

私のスタンプにも即座に反応……反応……反………き、きた！

ようやく既読表示が付いて、私は安堵する。

『何か用か？』

『暇だっただけ』

『虹夏はどうしたんだよ』

『いないから一郎にロインしたんだけど』

『今課題やつてる。俺は暇じゃないから他を当たれ』

何だと。

私と課題、どちらが大事なのだろう。

それは家でも出来る事じゃないか。

『課題は家でやれば良い』

『バイトあるから帰宅後の負担を減らしたいんだよ』

『私の相手をする方が優先順位が高いはず』

『オマエの相手もほぼ家でできるよな？』

私の相手も家で出来る……。

そのメッセージに、我知らず口元が緩んだ。

今日は行く予定も無かったけど、課題を優先したいのなら仕方無い。今暇潰し相手にならないなら埋め合せとして、今晚の相手をして貰えばいいか。

私は最後に『じゃあ、また夜に』と返してスマホをしまう。

さて、また暇になってしまった。

どうしようかと考えていると、ひそひそと近くで話す女子の声を耳が拾った。

「今の山田さんの表情」

「噂はホントだったんだ」

「あのクラスの前田君と付き合ってるんだって絶対。あのロインしてる時の顔！」

「多分デートの約束したんだよ」

女子は本当に噂話が好きだな。

一郎と私が交際関係になった瞬間など存在しない。

むしろ、お互いに深い関係になるのが煩わしいとさえ思っている時期だ。デートっていうけど、一緒に外出した事だってあまり――

「デートって言えば」

「前田君の家によく行くらしいよ」

「えっ。家デート!?!」

家デート……。

なるほど、そんな見方もあるのか。

やっている事は、一緒にご飯を食べたり、映画を観たり、私のベースを聴かせてあげたりしているだけ。

これといって特別な事は何一つしていない。

友だちでもする範疇だ。

恋人同士でする家デートと言えば………駄目だ、普通に恋人云々に興味が無くて知識も足りないから私の想像力じゃ限界だ。

恋人って、何するんだろう。

少しスマホで検索してみよう。

キーワードは、『恋人 家デート やる事』だ。

えっと………ああ、少し口にするのに勇気の要るあの行為もあるのか。親しい女子と男子がプライベートな空間で二人きりになれば、自然とそういう雰囲気になる、と。

他には、女子の無防備な姿に男子が興奮し………？

あれ………？

「あつ、見て。山田さんの顔が険しいわ」

「もしかして、デートが白紙になったんじゃない？」

妙だな。

無防備という自覚は無いけど、たしかに一郎には警戒心と呼べる物を抱かず自由に過ごしていた。

検索結果のサイトで見た『無防備』は、やや肌の露出が多かったり、下着がチラ見したり、接触が多かったり……らしい。

それで男子側が意識する、とか。

思い返すと、私は普段からそうしている気がする。

一郎を誘惑したい意図は皆無だが、されている側の一郎は特に狼狽えたりするリアクションはしていない。

私はサイトを下へとスクロールしていく内に、『問題点』なる見出を見つけ。

その記事を見るに、男子側が無反応な場合という部分について言及する文章があった。

なにになに……『魅力を感じられていない』だと？

「か、固まったわ」

「浮気の可能性が浮上したんじゃない？」

「前田君ってそんな二股もできるくらいモテる人だったっけ」

「でも、あの反応は尋常じゃないわ」

「た、たしかに」

……み、魅力か。

別に一郎にそう見られたいワケではない。

普段通りの私なら一郎は、いつもの如く呆れて受け流す態度を取る。苛々しつつも冷静に対処し、私を淡々ともてなす。

そうか、魅力か。

私の中で悪戯心が鎌首を擡げる。

それは、私を見て顔を赤くしながら狼狽える一郎の姿だ。寝泊まりするようになったばかりの時は、私の下着を見て赤くなるんじゃないやなくて顔面蒼白で悲鳴を上げていた事はあつたっけ。

あんな反応じゃない。

「……でも、何すれば良いんだ？」

一郎を赤面させる、とは。

具体的な案が何一つ思い浮かばない。

これが音楽ならば集中して考えられるのだろうが、一郎という慣れ親しんではいるが、あまり深く踏み込んで開拓していない未知の分野については私の想像力も働かなかつた。

仕方無い。

ここもまたネットの力に頼るか。

キーワードは……『彼氏 意識させるテク』で検索だ。

さて、検索結果は……。

「……………これだ」

私の前に、一郎攻略の活路が開かれた。



バイトを終えた夜だった。

俺——前田一郎は、玄関扉を開けて家に入る。

すると、そこでは何故か仁王立ちで山田リヨウが待ち構えていた。

「ん。おかえり」

「やっぱり居るのかよ……」

昼休憩時のロインで悪い予感はしていたが、暇なコイツを放置して課題に取り組んでいたら、今日は来ない筈なのに相手をしろと言われてしまった。

まさかと思っていたら、案の定居る。

ああ、今晚も山田夫妻に連絡しなきゃいけないのか。

「飯は少し待ってくれ」

「……………」

「……………? 何だよ」

「一郎、私を見て何か気付かない?」

「……………?……………??」

山田に言われて、俺は彼女を観察する。

そう言えば、今日は俺のシャツを勝手に借りているワケでもなく、モコモコとした物で身を包んでいる。

可愛らしい物だが、普段の山田からは想像できない装いだ。……普通に新品っぽいし。

「パジャマ？持参したのか」

「うん」

「へー、珍しいな」

「……それだけ？」

「は？何だよ、そのパジャマもしかして裏に暗器でも仕込んであるとか？」

「何かそういう映画観たの？」

「久々に『L・O・N』をレンタルショップで見かけてな。明日バイト休みだし、帰りに寄って借りてこようかなって」

俺の返答に——何故か山田は顔を顰めた。

何が不満なのかさっぱり分からない。

取り敢えず、その表情がイラツとするので無視して靴を脱ぎ、隣を過ぎて自室へと向かう。荷物を手早く下ろし、洗面台で手を洗って洗濯物を処理する。

その作業中も、ずっと山田は傍にいた。

しかも、異様に肩を寄せてくる。

……………?

今日は一体どうしたんだ？

「……………何かあったのか？」

「別に。…………『ギャップ作戦』は失敗か」

「……………??？」

そそくさと山田は離れていく。

よく分からないが、彼女の中で何かの目的が達成されたらしく、それ以降は接近して来る様子がない。

バイト後なのに、コイツの不審な動きで一々気を揉むのも癪なので、俺も無視して風呂へと直行した。

「へい、今日の飯」

「お」

俺は白米と豚バラ大根炒め、青梗菜と油揚げの煮浸しにじゃが芋と玉葱のケチャップ炒

めを食卓に並べる。

待ち侘びていた食事に、山田も目を輝かせていた。

コイツ、虹夏から貰った物を早弁した所為で午後はずっと何も食べておらず、ひたすら腹が減ったというロインをずっと送ってきていた。……ウザくて通知オフにしたけど。

俺も席について、箸を手取る。

まずは豚バラ大根炒めから……。

「うん、美味しい」

「……」

「美味しい。一郎のご飯が一番」

「……」

「これが食べられる私は幸せ」

「……」

「一郎のご飯好き」

「……」

何だ、コイツ。

今日はやけにうるさいな。

いつもは味の感想も言わず、黙って食べているのに。普段から作り甲斐の無いヤツではあるが、逆に口を開くとどれも予想以上に軽く聞こえて有り難みが無い。

これ、味の感想じゃなくて俺を煽って何かを企んでいるのではないだろうか。俺が山田を睨んでいると、山田はふむと頷く。

『褒め殺し作戦』も駄目……か」

「何て？ 殺すって？」

「別に」

「どうした？ 帰って来てからずっと異常だぞ、オマエ」

「ふっ」

「褒めてないから」

山田は箸を椀の上に置く。

ため息をついて、何やら疲れたように肩を落とした。

「一郎」

「どうした」

「一郎ってさ、私にドキッとした事ある？」

「え、無くはないけど」

俺の返答に、ぱっと山田が目を輝かせる。

え、マジで何なんだろう。

不覚にも山田にときめいた事は、この家で彼女の世話をするようになって幾度かあった。見た目だけは美しい少女だし、俺に無抵抗で体を預けて来た時は本気で心配するくらいだった。

まあ、今では慣れてしまつて天文学的な数字の確率でしか、そんな場面は無いワケだが。

でも、何故それが気になるんだ？

「そんな事を聞いてどうする？」

「別に。もう満足した」

「はあ……？」

……………。

もしかして、コイツも意外と女子なのか（失礼）。

一年近く俺とプライベート空間で過ごし、普通にクラスメイトとして過ごしていたら見せないような互いの姿を見せ合っているのに、全く意識されない事で少し自分の魅力について考えだした……とか？

いや、山田はそこまで繊細な人間ではないよな。

ならば逆に、どうなんだろう。

「山田」

「なに？」

「オマエは、俺にドキツとした事ある？」

「無いけど」

「それはそれで腹立つな」

逆に俺には異性として意識する魅力も無いと!?

別に男として意識されたいと思つた事は微塵も無いが、山田のリアクションに無いように実は己の中にあつた男のプライドに傷が付く。

……いや、俺みたいな価値のない人間にそもそも男として意識されるだけの魅力があるのか？

山田だけ満足しているこの状況が腹立たしい。

だが、その怒りはお門違いかもしれない。

俺には、男として意識されるとかそんな資格そのものなんて無くて……。

「ふっ」

いや、駄目だ。

この腹立つ状態の寄生虫を野放しにしては心の健康に悪い。

こうなつたら、今晚山田に少しでも俺が男であると意識させてやる。俺程度の人間を

意識してしまうダメ人間であるとヤツに自覚させて敗北感を与えてやろう。

その後の事なぞ知らん。

相手をドキツとさせる方法か。

何か無いか……。

……よし、こうなったらあの手でいくか………ネット検索!!

そして、検索にヒットしたサイトからめぼしい物をチョイスする。

よし、まず一つ目。

「山田」

「ん？」

俺は山田を見据えて。

「俺の飯を楽しみにしてくれる山田見るの、結構好きなんだよな」

果たして——言った瞬間、山田は箸を机の上に落としたりした。

暫く目を見開いて俺を見ていた後、再び箸を手に取ると黙って食事を再開する。

あ、あれ……手応えが無い？

ならば、次だ。

「山田、言い忘れてたけどその寝間着、可愛いと思う」
「……………」馳走さま」

山田は完食するや机から離れてテレビの前に移動した。
電源を付けて、バラエティー番組を観始める。

んんんん、これも駄目か。

俺も皿の上を全て平らげて、山田の分も片付ける。

食器を洗いながら、山田攻略について考えた。

一つ、『相手の特徴に好き、という言葉を強調して伝える』……失敗。

二つ、『いつもと違う相手の部分を甘い言葉で褒める』……失敗。

ネットで調べた手段はこれだけだ。

他の物は、手を繋ぐだとか抱き締めるだとか、突然されたら俺でも鳥肌立つような物ばかりなので不採用にしている。

だが、躊躇わずそこまでやった方が良いのか？

思えば、いつも過激な事されてるしな……爪立てられたり、急接近されたり。受け身な俺が逆に能動的になる場合も考慮の余地がある、かも。

……………いや、もういいや。

逆に、ここまで山田に必死になっている方がアイツにとっては笑いの種にしかならな

さそうだ。

山田相手に躍起になってはならない。

そうだ、いつもように受け流せば良い。

やれやれ、何を必死になつていたんだか。

冷静になつて思い直すと、もうそんな体力が残っていない事にも気づく。

今日は、残りの課題をやつて……後は明日レンタルショップで借りる物をリストアップしたら、もう寝ることにしようかな。

「山田」

「つ、な、何」

「洗い物終わつて、歯磨いたら俺は課題やるけど。タイミング良いからオマエのやつも見てやろうか?」

「い、いい。自分で、やる」

「はあ……」

絶対に後回しにして虹夏物を見せて貰うつもりだろう。

まあ、本人が気分じゃないなら無理強いしても仕方無い。

第一、体力的に人の面倒見てる場合ではなかった。

ああ、疲れた……ホント、マジで。

「……………顔熱い」

一郎が居間を離れて一人になった後、私は抱いていたクッションに顔を埋めた。

大晦日とは穏やかに過ごす日

年末は二人で過ごす。

クリスマスにそんな約束をしたのもある。

それでも大晦日に後藤家を離れてあの家に戻ろうと思う自分自身を意外だと思った。独りで淡々と過ごし、自己嫌悪に浸るだけの日々を送って、自分に気遣う二人の顔を窺う思い出だけが集積した場所だから。

普通なら、帰るのも嫌になる。

少なくとも去年まではそうだった。

俺は夕方、下北沢に戻って来ていた。

駅からスーパーに直行して、今日の晩飯と年越し蕎麦の材料を買い込んで帰途を辿る。

ふと驚いたのは、大晦日の下北沢の景色だ。

賑わいはいつも通りなのに、今までに感じた事が無い空気感が漂っている。毎年居な

かったから当然の感覚かもしれないけど。

未知の下北沢に少しだけ気分が高揚して、歩く足も無自覚に早くなる。

気付けば少し息を乱して玄関扉の前に立っていた。

ポケットから引つ張り出した鍵を穴に挿し、ゆっくりと捻る。

かちりと解錠の音がして、俺が扉を開けようとしたら先に内側から開けられた。

「おかえり」

山田リヨウが俺を出迎えた。

その表情は、やや不満げだった。

もしかして、帰って来たら駄目だったのか……いやここ俺の家なんだけどな。不満が

あるのならオマエが出ていけ。

「ただいま。蕎麦買ってきた」

「あれ。用意してなかった？」

「いや、よくよく考えたら自分の分とか無意識に考えてなくてさ。だから買い足したん

だよ」

「……………」

「何だ。妙に機嫌が悪いな」

「そういうんじゃない」

リヨウが横にずれてスペースを空ける。
俺は中へと体を滑り込ませて家に入った。

「あつ、おかえり——一郎くんっ」

ぎしり、と中途半端な体勢で固まった。

聞き間違いかと思いたいが、それにしたってよく通る声だ。

声がして間もなく、パタパタと床を叩くスリッパの音がして、居間の方から人影が現れる。

一歩ごとにサイドポニーの髪が元氣よく跳ねていた。

俺は人影の正体に唖然として、手に持っていた買い物袋を落としそうになる。

「お邪魔します」

「え、あ、虹夏……何で？」

「リヨウがまた汚してないか確認しに来たんだ。後は、ついでに今晚の分のご飯も用意してあげようかなって……」

俺が不在の間、リヨウの食事は用意していた。

冷蔵庫内に収納したタッパーには、その日の食事が保存されていて、必要になるだろ

うと日付を記した付箋を貼り付けてある。

でも、虹夏の言う通り、大晦日の分は無い。

何故なら、俺が帰るから不要だと思っていた。

「もしかして、作ってる途中？」

「うん」

「あー、そうだったか」

「あれ、一郎くんは？ぼっちちゃんの家に住るんじゃないの？」

無垢な瞳が俺を真っ直ぐ見据える。

何の意図も無いんだろうが、何故か迫力を感じた。

「えと、大晦日は二人で過ごす予定でさ」

な、と同意を求めてリヨウに視線を投げる。

リヨウは素直に頷いた。

約束というよりは、去年のリヨウが寂しがっていたから今年と一緒にいるかと俺が勝手に決めただけなのだが。

「あ、そ、そうなんだー？」

みしりと虹夏の手元から音が鳴る。

手に持っている菜箸が軋んでいた。

凄いい握力だな、あれだとドラム叩く時の力は相当なのではないだろうか。『結束バンド』で最も力持ちだと自負するだけの事はある。

「……あのさ、一郎くん」

「ん？」

「私も一緒に、なんてどうかかな」

虹夏が躊躇いがちに尋ねてくる。

虹夏と大晦日……この前も世話になったばかりだから、彼女の意思を無碍にするのは気が引ける。

ただ――。

「――」

「……（目が怖い）」

無言でこちらを見詰めるリョウの圧力があつた。

日頃から鈍いと言われる俺でも察せる。

この眼力は、十中八九なにが何でも断れと言っていた。自分では親友である本人に言う勇気が無いからだろう、生贄か俺は!!

頭が痛くなるような状況だった。

なるほど、リョウが不機嫌なものも納得した。

俺が他人を家に上げる事自体が元々嫌なりヨウ……何様だつて話だが、それが大晦日をゆつくり過ぎたのにまた別の人間を呼ぶのが許せないのかもしれない。

俺は良いのか、と言いたいけどリヨウなりの謎理論があつて俺は良いらしい。

「(う)め——」

「リヨウ。良いかな？」

「……………(助けて)」

「……………(オマエも頑張つてよ)」

俺が駄目だと分かるや翻つてリヨウへと虹夏の矛先が向く。

すると、リヨウが早速助けを求めてきた。

無理に決まつてるだろうが。

普段から虹夏に逆らえない俺に意見を跳ね返せるだけの抵抗力があると思うのか。今のだつてかなり勇気を振り絞つて口に出した言葉なんだぞ。遮られたけど。

……でも、ここまで二人に拘るリヨウの意味も尊重しなければ、ストレスが後々俺へのダメージ攻撃へと変換されるだろう。

こうなれば、他力本願なりヨウに代わつて、再度きつぱりと虹夏に断るべきだ。

返答を待つて沈黙する虹夏に、俺は何度か深呼吸を繰り返して口を開——。

「少くく年くくく！年末独りで寂しいから構ってええ」

後ろの扉がぱたりと開け放たれて、玄関が一気に酒臭くなった。

虹夏の表情がすとんと抜け落ちて、俺に助力を乞うて縋るようだったリヨウの眼差しが一瞬で刃物のような鋭さを帯びる。

俺は頭痛がし始めて、思わず顔を顰めながら後ろへと振り返った。

そこには、酒瓶を片手にへらへらと笑っているきくりさんがいるではないか。

「……はれー？もしかして、修羅場？」

「ええ、貴女の登場の所為だね。」



玄関での修羅場から三時間後。

緊張した空気は、今も変わらず続いていた。

「廣井さん。一郎くんに近付かないで」

俺はというと、またも風呂上がりのきくりさんを目の当たりにして平常心を保つのに必死だった。

虹夏もまた、きくりさんを遠ざけようと奮闘している。

だが、風呂上がりでちゃんとした着こなし且つ微酔い状態のきくりさんはまた何故か妖艶で、俺に対して悪戯がしたのか接近の隙を窺っていた。

俺の年末は、こんな筈じゃ無かったのに……。

結局、誰一人も撥ね退けてられなかった。

その結果。

「……………」

食後も、リョウはずっと黙っている。

俺が話しかけてもスマホを弄りながら対応して、一瞥もこちらに向けない。急転直下とはこの事。

帰るといふ連絡を入れた時は、声からも上機嫌だと分かった。やっぱり、後藤家にいるのが一番良かったのではないだろうか。

出る前、ふたりには嘘つきつて啜り泣きされて死にそうになったのを、ひとりが死んだ顔でフオローしに来た事で二連撃になり、直樹さんが「任せろ！」と自信満々に背中を押してくれた事でどうにか出てこれたのに。

これでは、後藤家に顔向けができない。

「ん？」

スマホが震動する。

手に取ると、直樹さんからだった。

何だろう、忘れ物かな。

「もしもし」

『もしもし、いっくん？』

「ふたり？どうした？」

『ふたりね、もう寝るよ。いっくんに挨拶したいから、お父さんに借りたの』

「挨拶？」

『来年もよろしくおねがいます』

心臓を殴られたような衝撃を受けた。

だが、痛くもなければ不快でもない。

幸福の衝撃。

「ン、ッ……………末永く宜しくお願いします」

『えへへ。あ、おねーちゃんに変わる？』

「いや、自分でやるよ」

『一郎くん！来年もよろしくねー！良いお年をー！』

『温かくして寝るのよー』

後ろから聞こえる後藤夫妻の声に涙が出そうになる。

何て温かい家庭なんだ……………この家の現状と真逆にも程があるじゃないか。

通話を切って、改めて周囲を見渡す。

……………やっぱり、帰ろうかな。

「リョウ」

「なに」

「来年は、オマエの家で年越ししない？山田家に許可取れたら話だけど」

「来年もここにいい」

「あ、でも俺受験勉強があるから無理かも」

「……………」

「リヨウ。…………リヨウ。…………駄目か」

また気分を損なつたらしい。

三年生の年末なんて、受験戦争の佳境じゃないか。その時期もリヨウの面倒を見てられる心の余裕があるか否かは、俺の受験勉強次第である。

実質、高校生活で穏やかに過ごせる年末はこれで最後かもしれないな。

「なっ」

「っ」

インターホンが鳴る。

それに過剰反応したのは、虹夏とリヨウだった。

何で俺よりも訪問に対して過敏になるの？

音からして、マンシヨンのエントランスの方からだな。

応対すべく立ち上がるが、シャツの裾をリヨウに掴んで止められた。

「一郎、待って」

「何で」

「もしかしたら、郁代かもしれない」

「ええ……流石にこの時間に押しかけるような非常識人じゃないだろ。仮に喜多さんだとしたら、尚更無視は悪いし」

「い、一郎くん！私が出よつか？」

「何で虹夏が？」

「いつもお世話になってるから！」

「いや別にそんな処でお礼返されても……」

異様に俺を引き留めようとする二人。

そんなに深刻な問題だろうか。

「へあーい、こちら前田でエース」

「げっ!？」

「あゝっ」

「えっ」

俺がもたついている間に、いつの間にかきくりさんが対応していた。

やめろ、アンタが前田家を名乗るのは誤解を生むだろうが！……う、駄目だ直視でき

ない。やはり俺の家に泊まる時に貸し出す服と違って、女子セレクションだと色香が違う。

「そうだ、あの人は美人だった！」

『虹夏、迎えに来たぞー』

『やつぱり、ここに居たか廣井……!!』

聞こえてきた声に俺たち三人は固まる。

「これは、星歌さんと志麻さんだ。」

どうして俺のマンションまで来たのかは分からないが、警戒していた喜多さんではないと知ってかすぐ傍で二人が安堵の息を漏らす。

「どうした、結束バンド……。」

「なんだ、お姉ちゃんかー」

「どうして星歌さんが？」

「……ちよつと前に私が迎えに来てって言ったんだよ。志麻さんも連絡したの」

「え、何で？」

「お姉ちゃんが寂しがると、廣井さん迷惑だし……あと私は歓迎されてないみたいだから」

「ぎよろり、と虹夏の目が俺の方へと向く。」

思わず小さな悲鳴が口から漏れる。

虹夏はゆつくりと立ち上がると、廣井さんの腕を捕まえて玄関まで引きずって行く。どうやら、虹夏は帰って、廣井さんはお引取り頂けるようだ。

俺は二人を見送りに向かう。

マンシヨンのエントランスまで自分で歩けない廣井さんを虹夏と一緒に運び、待つていた星歌さん達の前で解放した。

「じゃあね、一郎くん。来年こそよろしくね」

「少年またな」

「じゃあな、一郎」

「一郎くん。良いお年を……来年は廣井に構わなくていいから」

「ええっ!？」

騒々しく退散していく四人の後ろ姿に手を振る。

……今日だけで昨日一昨日の後藤家で癒やした分が全て吹き飛んだ気がするな。しかも、虹夏の挨拶が若干違う意味を含んでいるような気がしてならない。

頼むから、年明けこそ穏やかでありたい。

でも皆が去った後だから、部屋に戻ったらリヨウの機嫌も直っているかもしれないし。

結論から述べよう——駄目だった。

蕎麦を用意する間も、ひたすら沈黙が続く。

著しく減少した会話量からも、今回のリヨウが一味違つて厳しい状況であると推察できさる。

どうして、リヨウの機嫌取りに必死にならなくてはならないんだ……そつか恋人だから当然か……そうだった……。

年越しまで、残り十分。

不意に、リヨウが視線を机の一箇所固定する。

きくりさんが置き去りにしていったバック酒が二つある。

「リヨウ、飲むなよ」

「……一口だけ」

「絶対に飲むなよ。飲んだら二度と口利かないからな」

「じゃあ、飲むね」

「ホントに口利かないぞ」

「肉体言語がある」

「マジで口利かないからな」

俺がさつとパツク酒を取り上げると、リヨウが不満げにまた顔を背ける。

悪いが、もう虹夏やきくりさんという難所を越えた後なので、リヨウが犯罪者になるなんてセカンドステージまでクリアしてしまうのは断固として拒否したい。

「よし、五分前になったら蕎麦出すからな」

「……うん」

既にテレビ放送は、除夜の鐘を待つ各地の様子がリポートされている。

何処の神社仏閣も人で賑わっていた。

俺も大人になったら、あの中に混ざって共に年越しの熱気を共有しているのだろうか。

それよりは、来年も再来年も……大人になっても、リヨウと二人でゆったりテレビを観ながら元日を迎えている方がしっくりする。

「二郎、もう蕎麦食べたい」

「はいはい」

俺は蕎麦を二人前用意する。

椀二つに入れたそれを、机まで運んだ。

リヨウに強請られて仕方なく出した炬燵で隣に並んで足を突っ込み、蕎麦を手にした

ままたテレビ画面に表示される時刻を注視する。

残り時間、十秒を切った。

「一郎。来年もよろしく」

「リヨウ。来年は穏やかに頼むぞ」

「ロックに生きようぜ」

「この二年でロックって言葉を嫌いになりそうになったんだけど？」

そんな下らない会話をしている内に0時を過ぎた。

互いに示し合わせたように振り返る。

じつ、とリヨウは俺を見た後……そつと頬を赤く染めてそっぽを向いた。何その反

応。

「一郎……姫始めって知ってる？」

「俺の新年さつそく汚す気か?？」

今年のリヨウは、煩惱に塗れていそうだ。

「いっくん……あはは……連絡……来なかった……」
「先輩、放置なんて……最近もつと酷いです……♡」

明けても怖い

元旦。

初日の出を見た後に寝たのもあり、起床は遅過ぎる正午だった。

同じベッドで眠るリヨウはまだ起きる気配がない。

目に毒な白い肩が露わになっていたので、毛布をしっかりと首までかけてから、俺は風呂場に直行した。汗などを流し、一通り身綺麗にしてから昼食作りに取り掛かる。

後藤家に戻るの、いつにしようか。

例年通り、初詣は彼らと行……いや、もう行ってしまったかもしれない。

また、ふたりが泣いていたらどうしよう。

料理が終わったら連絡するか。

「ん……。いちろー……?」

「毎回、声枯れてるな」

「私が可哀想だ」

「はいはい。悪うござんしたね」

音で目が覚めたリヨウが居間に現れる。

俺がいるのを確認したかったのか、台所で料理する俺の顔を見るなり風呂場へとよたよた向かっていく。

相当疲れてるな、アレは。

あの状態のリヨウを一人残して戻るのも忍びない気もするな。

でも、年末の後藤家は俺の癒しだ。

昨晚の事もあって、今すぐにも後藤家特有の幸福空間に浸りたい。

鍋に火を通して暫し、匂いが家中に広がる。

大体は昨晚に用意していたので、正直手間という程の労力は無かった。

今年の一年を縁起良く進める物である。

匂いを嗅ぎ付けたのか、髪も乾かさずにリヨウが戻って来た。

心做しか目が輝いている。

「カレー……!」

「違うぞ」

「えっ。でも匂いが」

「カレーはカレーでも——カツカレーだ」

自信満々で告げると、既にリヨウは脱衣所に戻って髪を乾かすドライヤーの音が聴こえた。

空振った感じがして何だか恥ずかしい。

決め顔までして言ったのもあって顔が熱くなる。

羞恥心に堪えながら器に炊いた白米を盛り、そつとルーをかけた後に先程揚げたカツを乗せた。

さて、リヨウが来るまで後藤家に連絡するか。

『直樹さん。初詣って終わりました?』

『まだだよ。でも、ひとりはもう行っちゃったよ』

『何ですって』

『喜多ちゃんの家に来てね。ひとりを連れて行ってしまったよ』

『そうでしたか』

喜多さん、いつの間に。

……あ、つ、まだひとりにもふたりにも、それぞれどこか喜多さんもそうだがクラスメイトとかにも新年の挨拶をしていなかった!

喜多さんやクラスメイトについては、去年に入ってからからの関係で不慣れなのだとおも、よもや後藤姉妹を忘れるなんて一生の不覚だ……!!

『僕たちは先に初詣に行くよ!』

『俺も合流していいですか?』

『それは大歓迎だけど、友だちも増えたんだらう? 折角なら、今年はそつちとも行つてみたらどうか。きつと楽しいよ』

涙腺の緩みそうな直樹さんのメッセージに俺は唇を噛む。

耐えなければ溢れてしまいそうだ。

でも、そうか。

俺はもうこれまでと違つて、色んな人と行けるのか。

後藤家の貴重さ是不変だが、たしかに色んな人と行ける良い機会なのかもしれない。

しかも、ここでそれらを一顧だにせず合流したら、直樹さんに気を遣わせそうで何か気まずいしな……。

リヨウは……初詣とか行くのかな。

『分かりました』

『それじゃ、初詣に行つてくるよ! あ、一郎くんも忙しいだらうから、ひとりやふたりへの新年の挨拶は後で良いと思うよ。特にひとりは今忙しいだらうし』

『そうですか。了解です』

『ふたりもちよつと拗ねてるから、後で沢山遊んであげてね。それじゃつ!』

俺はメッセージアプリを閉じたため息をつく。

ふたりが拗ねている、か……本当に悪い事をしたな。

行き道で美味しい甘味でも買って献上しよう。

俺がそう決心していると、髪を乾かして戻って来たリヨウが卓上のカツカレーに小さな感嘆の声を漏らす。

「美味しそう」

「取り敢えず、まずは水を飲め」

「ん」

二人で卓につき、カレーにスプーンを入れる。

リヨウの表情は……満足気だ。

お気に召したようである。

「……でも何でカツカレー？」

「ああ、願掛けだよ」

「願掛け」

「カツと『勝つ』を懸けてるんだよ。今年は『未確認ライオット』もあるし、色々と結束バンドとして勝負事が増えていくだろう」

「――」

「あとは受験とか」

「私はしないから別に」

「じゃあ、俺の為の願掛けも込めてのカツカレーだ」

カツを頬張りながら、リョウは深く頷く。

今年はたしかに忙しい。

受験戦争に本腰を入れる三年生としては勿論、リョウは『未確認ライオット』を控えているのだから、是非とも頑張つて欲しい。

俺も一ファンとして、『結束バンド』の躍進に期待しているのだ。

これは、その為のカツカレー。

しっかりとした食感と、カレーの味の深さがやる気をくれる。

さあ、今年もストレスを乗り切ろう。

「い、一郎」

「ん？」

「その……」

リョウはスプーンを置いて、頬を紅潮させながら俺から視線を逸らす。
何だろう、うまく火が通っていないカツがあつたか？

「す、スタミナの付く料理って事は……第二回戦？私はまだもう無理なんだけど……」

尻すぼみしていく声で告げられた内容に、俺は——コイツを無視する事にした。

人がカツカレーを作った意図に歪んだ解釈を持ちやがって。

ダイニングテーブルをひっくり返してやりたい憤りを抑えて、黙々とカツカレーを食べる。

そんな俺に「あれ違うの？」と純粹に小首を傾げるヤツの顔も見えてない、断じて。

「一郎は初詣行くの？」

「ああ」

「一郎、捻くれてるから神とか信じてないし行かぬーって言うと思った」

「逆だよ。神の存在とか信じてる派だから」

後藤ひとりって女神の存在が証明されている。

他にも神がいたって可怪しくない。……助けられた事は無いから半信半疑だけれだな。

初詣で願掛けに加えてブースト効果を与えたい。

今年は実りある一年にしなくては……頓挫しそうな人間の台詞になってきたな、かなりのフラグが立っていきそうだな。

「リヨウは？」

「信じたい時に信じる派」

「そんなもんだらうけど正直過ぎる」

「何事も私は私を信じる一郎を信じて挑戦する」

「失敗したら責任転嫁する気満々だな」

オマエの分まで不幸は背負いたくない。

新年始めから調子の良いリヨウを見ると、自分の方が気負っているように思えて自然と力が抜ける。

今は、とりあえずカツカレーを味わうか。

テレビを点けると、既に初詣で神社に殺到している人々の大行列が映し出された。

うわ………行きたくなってきた。

中には着物を着込んで臨んでいる人も見受けられ、この熱気に気圧されている俺のよ
うな人間もちらほらいた。

「……リヨウは」

「ん？」

「着物とか着た事あるか？」

「七五三とかで」

「やっぱりか」

「一郎も?」

「ああ。ボロボロの着せられて行つたな」

公開処刑みたいで苦しい思い出しかない。

着物に良い思い出とか無いんだよ。

だから、テレビのチャンネルを何回も切り替えるが、どこの局も初詣ラッシュを報道している番組ばかりで避けられなかつたので電源を切る。

これから初詣に行くのに、気分が悪い。

一人で行つたら顔に出そうだけど仕方無い。彼らには罪はない、俺が捻くれているだけだ。

舌打ちでもしたい気分で、カツカレーの最後の一口を平らげた。

じっと、俺を見るリョウの眼差しを感じる。

いかん、顔に出ていたか。

努めていつも通りの顔を保っていたつもりだったが。

目を合わせるのが怖いが、恐る恐る彼女を見た。

「私も初詣に行くよ」

「え? オマエ、ああいうお祭り騒ぎの場所とか苦手じゃないか?」

「別に。カツカレーを消化してから行けば問題ない」

「斬新な強がりだな」

リヨウも完食して、二人で合掌する。

重なつた「ごちそうさま」の声が少し可笑しくて笑いを堪えながら、二人分の食器を流し場へと運んだ。

俺が食器を片付ける間、リヨウはそそくさと歯磨きを済ませて外行きの服に着替え始める。……大胆ですね、俺がいる事に気付いていないのでしょうか。

「本当に行く気か？」

「うん」

「……まあ、オマエが辛くないなら」

「うん」

妙に乗り気だな。

音楽関連でもないのに、リヨウにしては外出に積極的だ。

逆に不気味に思えて、こちらが躊躇う。

もしかして気を遣わせた……いや、リヨウがそんなまさか。とも思ったが、去年も落ち込んだ俺の為に音楽準備室で小さなライブを開いてくれた事もある。

有り得なくもない、か。

俺は食器を洗い終えたので、急いで自分も外出準備を始める。

五分後、コートを着て居間に戻った俺を優雅にリヨウは待っていた。

「すまん。待たせた」

「一郎。君が準備を完了するまで十分かかりました」

「何その嫌な先生みたいな反応」

「冗談。少しだけ待たされた」

「オマエもちよつと嫌なヤツ感出すな」

素直に待たされて退屈だったと言えよ、コイツ。

リヨウはソファァーから腰を上げる。

俺も鍵を持って、リヨウがコートを着るのを待つてから玄関へと向かった。

「リヨウは家族とじゃなくて良いのか？」

「今は一郎と居たいし」

リヨウの声に、思わず足が止まりそうになる。

こういう時、急に素直になるのもどうかと思うぞ……………。

面映い気持ちになって俺が黙ると、リヨウが隣で笑……………鼻で笑いやがったコイツ。

「チョロいね、一郎」

はいはい、そうかもね。

♪

♪

♪

♪

初詣も終えて、俺は後藤家に向かう事にした。
駅の改札口まで見送るといふ不気味な気遣いを見せるリヨウに恐怖しつつ、その前に一旦家に戻って色々片付けるべくゆっくりと帰路を辿っていた。

その途中で、見覚えのある人物を発見した。

あれは——陽キャ君！

「明けておめでとう、前田君」

あちらも俺に気付いて手を振ってきた。

相変わらず眩しきは喜多さんに似ていて、だが彼の好む作品傾向からあまりその笑顔を信用できない。

相談すると頼りになるが、今のところ不穏な予測しか的中していないので、進んで相談したいという気分にも慣れない複雑な関係だ。

「明けておめでとう」

「あれ、山田さんも一緒？」

「ああ。初詣に行ってきた」

「新年早々デートかあ。羨ましいな、僕も女子と遊びたいよ」

「いや、絶対にいるだろ誘える女子」

「いやね。僕を誘ってくれる女子はいるけど、いずれも恋人持ちなのに二人きりでって頼まれるから却下してるんだよ」

ははは、と爽やかに笑っている。

聞いている俺が引き攣る事実を笑って流すな。

隣で聞いているリヨウも、俺に「ロックだ、一郎は見習うなよ」と失礼な事を耳打ちしてくる。オマエは黙ってる、ホントに。

「大変だな」

「あ、さつき伊地知さんと会ったよ」

「そうなんだ？」

「少し話してね。僕が一郎君の色んな相談も受けていたんだって話したら、『余計な事を吹き込んだたのオマエだな』って感じの目で見られたよ。何でだろうね」

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

罪悪感を煽られて、俺は何度も頭を下げた。

陽キャ君は何も悪くない。

俺が虹夏の優しさに甘えて振り回すような事をしたから、勘違いを幾つも重ねて彼女を疑心暗鬼にし、遂には暴走させてしまった。

陽キャ君は悪く……悪く……一割くらいは悪い事にしておこう。本人には言わず心の内だけで……俺の心の健康の為に。

「山田さんもデート楽しかった？」

「はあ」

「何かぼやんぼやんしてるね」

「ああ。会場の空気にてらられてテンション上がったらしくてさ、一通り騒いだ上に俺の金で屋台のじやがバター食ったら満腹感で眠くなってる感じ」

「単純だねえ」

俺を駅まで見送るとか言いながら、俺の片腕に掴まってウトウトしている状態だ。きつと家に着いたら寝てるんだろうな。年が明けても本当に自由なヤツである。

「恋人生活は順調みたいだね」

「本当にそう見える？」

「うん。後は君が余計な事をしなければ山田さんもこれ以上拗れる事はないと思うよ」

「そ、そうかな」

「問題は伊地知さんだねえ。話していて分かったけど、まだ一郎くんには恋人がいないって自分に信じ込ませてる感じだ」

「ひえ……」

「でも、君を見ると伊地知さんだけじゃない気がするけどね！あははは」

本当に人の災難を良い笑顔で言い当ててくれる。

言っている事が正確だから尚更素直にイラッとさせてくれないし、悲しい事に否定もできない。

「あ、友だちが待つてるから僕も行くよ」

「行くって？」

「これからカラオケなんだ」

「そっか。あ、今年もよろしく」

「うん。今年もよろしく」

陽キヤ君は手を振って去っていく。

短い会話なのに、内容が脳裏にこびりついて離れない。

心の健康に悪いな、あの人。

新年初っ端から人伝てに虹夏の闇に触れるとは思わなかった。

後で新年の挨拶メッセージをロインでしょう。

「一郎」

「ん？家まで少しだから寝るなよ」

「ほんとにぼっちの家に戻るの？」

「え、うん」

「……………そう」

リヨウは寝惚け眼をこすりながら、スマホを取り出して何やら操作し始める。

すると、間もなくして俺のスマホが通知で鳴った。

ロインで、リヨウからメッセージが一件。

『寂しい』

……………この距離で？

普通に口で言えないのだろうか。

去年だつて電話で俺に……………あ、冗談つて言つてたか、アレは。

眠いとコイツは幾分か普段に比べて素直になるのか。

まるで赤子のようなのである。

寂しい、か…………。

でもなあ、ふたりが拗ねてるつて聞いたたら無視できない。初詣は終えたとはいえ、例年通り神にも元日中に直接挨拶がしたい。

どうしたものか。

「……………」

「ん？」

「リヨウ。じゃん拳するぞ」

「何で？」

「俺が勝つたら後藤家。オマエが勝つたら、今日も家にいる」

「……………え、面倒くさい」

「そうでしょうけども。」

優柔不断で申し訳ないが、じゃん拳で決定したら後悔しない気がする。

「いくぞ。最初は——」

「二回戦」

「……………二回戦？」

「カツカレーも食べたから。二回戦するから、ぼっちの家帰るの無しで」

何の二回戦？——と一瞬思考を巡らせて、カツカレーの単語からヒットした記憶で俺の体は硬直した。

振り下ろしかけた『チヨキ』の手が途中で静止する。

リヨウの目は、もう眠気も無いのかはつきりと俺を見詰めていた。

……………。

……………。

「いや、でも……………ねえ？」

俺が困惑していると、さつきとは逆でリヨウが俺の腕を引きながら歩き始めた。

「次は一郎の声を枯らす」

「あの……いや、二回戦より先にあれしてくれ」

「……………」

折角新年始めにいるのだから。

「オマエのベース聴かせてくれ」

俺の頼みに、果たしてリョウは「任せろ」と返した。
嬉しそうだった。

おまけ

いつくんが帰って来ない。

わたし——後藤ふたりは、怒っています。

おねーちゃんと仲良しなのに、他の女の人のところに行っちゃういっくんを、ちよつとだけだらしなと思います。

帰つて来たら怒ります。

お説教します。

いっくんがおねーちゃんを好きだと思つてたから、ふたりも我慢しようつて思つてたのに。おねーちゃんとくつついたら、ふたりとも遊んでもらおうつて思つてたのに。

昨日、家を出る時なんて。

『いっくん何処行くの?』

『ああ、一緒に年越ししようつて約束してるから行かなくちゃいけないんだ』

『えー!ふたりと一緒にダメなの?』

『ごめんな……ホントは一緒にいたいけど、今年は約束してて』

『うー!』

絶対許さないので。

ぜったい、ゆるさないのです。

ヒーローの幻・前編

冬休みが終わり、いつも通り学校が始まった。

進学校だけあって、教室内は既に来期から始まる受験についての不安や勉強法について語る声がそこら中で聞こえる。

良いよな、話せる相手がいる。

実は、まだ教室でその話題で話せる相手は俺にはいないのだ。

虹夏やリヨウは……対象にしたくない。

バンドをしている二人、特に虹夏も迫り来る受験戦争を我が事であると感じている。素直に『結束バンド』を応援する身としては、ここで余計なプレッシャーをかけるのはどうかと思うから、この話題は避けたいのだ。

これが身近なファンとして出来る最大のサポート。

鳥瀧がましいにも程があるが、これ以上は『結束バンド』のストレスになりたくない。それなのに。

「一郎くん。何処の大学受けるの？」

「え？○○大……」

「ホントに？」

「えっ、ホント……（嘘つく理由が何処に？）」

「私の事を撒こうとしてないよね？」

虹夏が積極的に進路について尋ねる。

俺の氣遣いって、見当違いなんだな。

彼女の為に話題を避けていたが逆に自分から逃げようとしているのではないかと不要な疑念を生む悪手となっていたらしい。

去年までリヨウや両親から逃げるつもりで進路を考えていたから、虹夏の事はかなり無警戒だった。

あ、そうだ。

そのリヨウは、昨日道端に生えている雑草を煮て食べたらお腹を壊して休んでいるらしい。

俺の家でも飯食つてたのに、ほんとアホだな。

朝に連絡したら「看病に来て欲しい」という要請を受けたので、「元気になってまた会おう」とだけ返して通話を切った。

幸いバイトも休みなので、放課後にも訪ねよう。

山田夫妻への差入れも買って、日頃の娘についての報告も兼ねて。

「何で虹夏から逃げるの？」

「だって……心配だよ」

「俺個人の将来だから。虹夏の事を考えて組んだワケじゃないよ」

「――」

虹夏の瞳から光が消える。

あれ、何か間違えただろうか。

言い方としては誤解が無いようストレートに伝えたつもりだった。

「そっかー。私のこと眼中に無いかー」

明るい笑顔だが、机の上の拳は強く握られている。

うん、誤解している。

眼中に無い……いや念頭に置かず考えたのは間違いないが、え、俺は虹夏に配慮した人生を送らなくてはならないのだろうか。

因みに、山田夫妻に進路について聞かれたから頑張って医学部目指してますって話した時は大歓迎されたな……ウチに来なさい、って縁故採用みたいで凄いい断りしたい。

「に、虹夏は何処？」

「芳文を目指そうと思ってるんだよ」

「やっぱり、一応大学は出るんだ？」

「うん。お姉ちゃんの仕事も手伝えるようになって思ったらね……色々言われたし」

「どうやら親にも姉にも言われた様子だ。」

たしかに、昨今は大学卒業が就職条件の最低ラインと捉える感じなので、大学に行けと言う彼らの気持ちは分からなくもない。

虹夏も特に反対してはいないようだ。

良いよな……俺の親は「一郎くんが行きたい所に」と凄く親切で甘い対応をされてるが、やはり面と向かって相談すべきだろう。高校も自分で決めたいし、それについても反対意見は全く無かったから相談自体が無駄かと思っただけ。

大学は高校と全然違うから、もしかしたら虹夏の周囲と同じように何かあるかもしれない。

「大学は別々かー」

「元から選択授業違ったから分かってはいたけどね」

「一郎くんと大学行き良かったな」

「同じ所に行く友だちはいないの？」

「一郎くんと行き良かったって話してるんだよ？」

「はい、めんなさい」

身を乗り出して顔を近づけてくる虹夏から圧力を感じる。

最近、俺に対して容赦がない気がする。

自然と謝罪の言葉が口から出ていた。

リヨウやきくりさんとは別方面で俺の意思を削ぐタイプに思えてきている。

まさか、将来の警戒対象はリヨウだけではなかったか？

虹夏という伏兵にも気を配らなくていけなかったか。

「でも、大学で虹夏と一緒に……」

「楽しそうですよ」

「……………」

「一郎くん？」

「何か、また悪い未来が見えた」

虹夏と同じ大学で過ごすキャンパスライフ。

拙いながら想像力を働かせて、虹夏と共に大学生活を送る姿を夢想したら、虹夏に甘やかされている自分しか思い浮かばなくなった。

勉強も疎かにし、ノートを借りる日々。

だらしないな、と呆れながら虹夏は甘やかす。

いずれ虹夏が居れば何でも良いかと墮落の一途を辿り、彼女に依存してズルズルと……。

『虹夏あ、もう大学しんどい』

『えー。ちよつとは頑張つてよ』

『はあ、虹夏無しだったら絶対ここまでやれてない。これからもよろしく』

『堂々と寄生発言!!』

『虹夏がいないと生きてけない』

『もー。しょうがないな』

酒を飲むようになって、虹夏に頼るのが当たり前になって、きくりさん顔負けの自墮落さになって、それで……………。

「ぬああああ!!ごめん、虹夏がいなくなつて生きていけるようになるから許してくれ!!」

あまりに悲惨な未来に脳を掻きむしりたくなる。

俺は思わず頭を抱えて机に突つ伏した。

そんな俺の奇行に、虹夏は引いているのか何かをぶつぶつと呟いて触れてくる気配が無い。

今はそれが有り難いよ。

お、俺は想像の中ですらまた虹夏を穢してしまった！

今日で虹夏の友だちも辞めるので許してくれ!!

その日、放課後まで俺はひたすら虹夏への罪悪感で頭がいっぱいだった。

「追い詰めたら……私に頼るしか……なくなる……？」

放課後、俺と虹夏は二人で帰る事となった。

いつもはバイト先が別なのもあって俺一人か、またはリヨウと虹夏に加わらせて貰うのが常だ。

今日は虹夏もバイトが無いから急ぐ必要も無い。

ゆっくりと歩く。

腹を壊したスカポントンが不在なため、今日は珍しく二人きり。

思い返せば、虹夏と二人きりの時っていつも危険な状況ばかりだったので、一体何を話したら良いか分からなくなる。

虹夏が学校の時のように話題を振ってくれる場合は別だけど……。

そつと横目で隣の様子を覗くと、虹夏は考え事をしていいのか少し俯いて黙っている。

落ち込んでいるワケではなさそうだ。

目がギラギラと妖しい光を湛えている。キターン光線程の威力は無いが似た感じがする……あれって伝染するののか。

触れるか否かとても迷う状態だ。

俺と虹夏は、暗い曇天の下を黙々と歩く。

「虹夏。何か考え事？」

「うん。ちよつとね」

「普段迷惑かけてるし、良かったら相談に乗る、けど」

「あははっ。自信無さそう」

「いや、迷惑かけてるヤツが真つ当に人の悩みを聞ける立場も資格もあるのかと思って」

「自虐が酷い」

悩み相談なんて、いつも乗って貰っている立場だ。

いつも、きくりさんや郁人さん、陽キャ君には世話になっている。特にきくりさんだ。

普段から想像できないほど頼もしい。

あの人のお蔭で、幾分か前向きに生きるコツみたいな自分改革の仕方に気づいた。

人から授かってばかりだな、俺。

ああ、でも喜多さんの悩み相談には乗ったか。

きくりさんの言葉を流用しているだけなのが否めない内容なので胸を張っては言えないけど。

「最近、充実してるな——って思ってた」

「充実?」

「うん。ぼっちちゃんが入ったりしてバンドが一気に始まって、バイトも忙しくて、お姉ちゃんが私のことを見て嬉しそうにしてる顔も見れるし」

「……そっか。たしかに良い事だな」

「それに、楽しい事ばかりじゃない」

「え、うん?」

「初ライブなんて台風に見舞われるし、好きな男の子は恋人がいるなんて嘘で避けられ

る苦い恋だし。……楽しいも苦しいも、息継ぎが必死なくらいの日常」

「……………そ、そう」

「だから充実してるなって」

気の所為だろうか。

自分の日常が素晴らしいという自慢かと思つたら、苦味に該当する部分が俺に思い当たる節のある内容で素直に良かったねと褒めてあげられない。

俺の器が小さいからだろうか。

「一郎くんは？」

「え……………」

「どんな感じ？」

苦味とエグみと吐くほど甘い日常だ。

味覚なんて容易く殺せるような強すぎる刺激の数々で、最近は思考を放棄する瞬間が数えられないくらいに訪れている。

そして、今苦しんでいると口にした虹夏に対して面と向かつて言う度胸も無いので顔が引き攣ってしまう。

「お、俺も充実してる」

「……………そうなんだ」

「昔より友だちも増えて、優しい親戚の人もいるって分かって、恋人もでき……ンンっ、バンドの応援って趣味もできたしな——って、え？」

「えっ？」

ぱたりと鼻先に冷たい雫が落ちた。

見上げると、次々に雨滴が顔めがけて殺到して来ていた。

瞬く間にアスファルトを深く染めて、傘も差さずに立っていた俺たちを容赦なく濡らす。

ともあれ、一月の雨だ。

梅雨とは桁違いに冷たくて痛い。

俺は周囲の雨を凌げそうな場所を探した。

しかし、俺たちのように何処も避難した人で既に埋まってしまっている。

マジかよ……。

やむを得ず、俺は素早く厚手のコートを脱いで虹夏の頭に被せる。それから、彼女の手を引いて他に避難先が無いか急いで移動しながら探した。

……結論、どこにも無くて結局近くにあった俺のマンションまで来てしまった。

「虹夏。濡れた？」

「あ、足だけ……一郎くん大丈夫？」

「寒いけど、もう家にいるも同然だし」

「傘代わりにコートなんて私に貸すからだよ」

「いや、リヨウも腹壊して、虹夏もこれで体調崩したら『結束バンド』が」

「……そうだね」

えへへ、と虹夏がはにかむ。

「雨が止むまでここにいます？」

「うん。そうするね」

二人で雨空を眺めて雨をやり過ぎした。

「これでキープなんだ……つらいよ」



一月下旬の土曜日。

早朝、俺はベッドで体温計を片手に倒れていた。

どうやら、あの雨に当たった事が祟ってしまったらしい。

「づあー……頭痛い」

体温計は三十八度を表示している。

バイト先にも連絡を入れて、学校には……義務教育じゃないから良いか。体調不良は偶然だが、これに感謝したくなる。

年明けから、バイト先に喜多さんと彼女の友だちが出没するようになり、注文された料理を運びに行く度に秀華高校の文化祭より以前から続く喜多さんの恋人（誤解）ネタで詠われる始末。

厨房に戻れば、店主たちから「金髪の子じゃなかったのか!？」と詰問されて何処にい

ても気が休まらないのだ。

今日も喜多さんがいるとは限らないが、バイト休める……。

俺は重たい意識で何とかバイト先に欠勤連絡を入れて、再びベッドに沈む。

あー、頭痛い。

体が解い。

薬を飲むのも億劫だが、少しでも回復すべく病身に鞭打ってキッチンへと移動する。

一人で生活していると、こういう事態はかなり辛い。

普段は気にしないのに、妙に孤独に敏感になる。

さつきもベッドに染み付いてるリヨウの匂いなんかを不覚にも嗅ぎ取ってしまった

胸が苦しい。

誰か呼び……呼べないな。

一年の頃に比べたら友だちは増えたが、気軽に呼べるほど自信を持つて頼れる親密さが無い。

あまり遠慮しなくてもいい相手のリヨウ……に看病なんて出来ないし、俺の風邪を伝染したら彼女の生き甲斐であるバンド活動に支障を来す。

推しにそんな真似はできない、いやファンとして既に取り返しの付かない事は何もかもしているけど。

俺は薬を飲んだ後、怠い体を引きずってベッドに帰還した。

朝食……はどうでもいいか。

こういう時、何か食べるべきなのは頭で理解していても食欲も湧かないし、体が動かない。

久々すぎて忘れていたが、風邪ってこんなにも辛かったんだな。

前回は、中学の頃だった。

苦しくてどうしようもなく、不安定になっていたから普段我慢している物を吐き出すように部屋の物に当たり散らかした後、ぶつ倒れてしまった。

その後、意識朦朧としながら後藤家に助けを求めて連絡を入れていたらしい。

気が付いたら、ベッドの傍でひとりが目元を腫らしながら「大丈夫」って言いながら手を握ってくれていたのを憶えている。

後で聞いたら、あんなに寝ながら苦しんでいる俺を見て昔を思い出したから泣いていたらしい。

一緒に来ていた美智代さんとひとりの看病で、メンタル面も回復したのは良い思い出である。

『い、いつくん……辛い時言っつね』

『うん』

『すぐ行くから。私……何も出来てないけど』
『うん。また頼る』

……………。

あの時、ぎゅつと俺の手を包むひとりの手の感触でどれだけ安心できたか。
また、あれがあつたらな……。

高望みも良いところだ。

余計な事は考えず、今は寝てしまおう——俺は瞼を閉じてすぐ、意識を失った。

昼過ぎにインターホンの音で目を覚ます。

音からして、既に玄関前にいるのが分かった。

体が熱い。

朝よりも体が重い、ベッドから離れて玄関へ向かう。

誰だ……配達か？

どちらにしろ、手短に終わらせて欲しい。

俺はやや荒れた気分のまま玄関扉を開けた。

「…………大丈夫？」

ぼんやりした意識でその声を聞く。

こちらの顔を窺いながら気遣うような声色は、まさか。

「ひとり？」

「え…………」

「そつか…………オマエっていつも、俺が弱った時に助けてくれるよな…………」

ひとりが、来てくれた。

俺が不安になったりしたら、必ず助けてくれる。

一年分のストレスで体も心も重い俺を、年末にはいつもその優しきで受け止め、心の底から癒やしてくれる。ライブだって窮地に陥っても、逆境に抗う姿が不安を払拭して見ている俺や観客を救ってくれる。

だから、ひとりは救世主なのだ。

俺は本能的に目の前にいるひとりの体を抱きしめた。力加減が出来ていないからか、戸惑いの声が聞こえる。

「か、看病に来たよ」

「すまん…………助かる…………」

「うん、じゃあ……まず中に入ろっか。」

——
「郎くん」

ヒーローの幻・後編

私——伊地知虹夏は、何度も教室を見回した。

「一郎くん、いない」

それでも探した顔は見当たらない。

先生からも特に連絡は無いから、体調不良でも無いのかな。ホームルームが終わってから、私は早速一郎くんにラインで連絡してみるも返信は無かった。

私を無視している……ワケではないよね。

一応、確認としてリヨウにも訊いてみよう。

「リヨウ。一郎くんがいないんだけど」

「みたいだね」

「リヨウは何か知らない？」

「如何に恋人として一郎のすべてを知ってるワケじゃない」

「今そういう冗談いいから」

「いや冗談では」

「そつか。リヨウも知らないのかあ」

やっぱり、寝坊かな。

一郎くんはよく疲れてるし、その所為かも。

いつも頑張ってるし、リヨウの事なんかで気苦労も多いから、つい今日は起きられなかったのかもしれない。そう思うと、何だか寝坊くらいは許してあげたくなる。

でも、万が一に体調不良だったら……。

そういえば、雨に降られて濡れたから風邪を引いたっていうのも有り得るのかな。

あの時は、凄く嬉しかったなあ。

わざわざ、私の為にコートまで被せてくれて……照れ臭いからって、バンドの為なんて言わず私の為だつて素直に言ってくれたら良いのに。

もし、あれが本音だったら傷付くけど。

こういう事をされるからキープでは我慢が出来なくなる。

風邪……だったら看病が必要だね。

純粹に心配だし、私の所為の場合もある。

この前の感謝もしたいし、後はこういう献身もポイントに繋がるのかな。

何だか自分が狡猾な生き物に思えてきて自責の念が生まれる。

で、でもっ、こういう狡猾さが無いとバンドを有名にするなんて夢のまた夢かもしれないし。私がリーダーなんだから……って、バンド関係無いか。

「よし、様子を見に行こう」

「虹夏？」

「ううん、何でも無い」

私は誤魔化しながら、お姉ちゃんに一郎くんが風邪かもしれないから看病でバイトに遅れる可能性があるかと連絡を入れる。

まあ、後で遅刻として登校して来たら私の杞憂になるんだけどね。

これで放課後まで彼が来なかったら家を訪ねよう。

寝坊では有り得な……まさか、体調不良でも無くて単純にサボタージユな可能性が無きにしても非ず!?

一郎くんがグれるなんて錚々無いとは思うけど。

ま、益々彼の状態を確認しないといけない。

「私がちやんと見てない」と

「さつきから虹夏、独り言多いね」

「そ、そうかな？」

「変な物でも食べた？」

「リヨウじやないんだから、そんな事ないよ」

「この前も草食べてお腹壊してたのに。」

「この前のは舌が肥えないようにしただけ」

「何で？」

「今の私は、ほとんど一郎のご飯で出来ている。美味しい物も常に食べていたら有り難みが分からなくなるから、時に危険を冒してでも味覚を調整すべき」

「意識改革の仕方が間違ってるー」

危機感を持つなら別の方向にして欲しい。

男の子の家に一人で行くとか、他にもお金の使い方、非常時で意外と冷静さを無くす部分とか、割と特殊な方面の女子に人気が高いところとか。

全く、私や一郎くんがいなければ大変だったよ。

特に、去年から思う所はある。

一郎くんの家で、彼のシャツ一枚で過ごしているのを見た時は意識が飛びかけたくらいだ。その格好で胡座だって掻くし、太腿が一郎くんに密着してる時なんてハラハラしたもん。

……相手は慣れた風で無反応なのも可怪しい気がするけどさ。

で、でも一郎くんも男の子だよ？

付き合ってるなんて噂立てて、満更でもない一郎くんもそれに加担してるから、もし少し雰囲気が出来上がったたらアンナコトに……。

「リヨウは危機感持ちなよ」

「説教ならいつか聞くから」

「今聞け」

「……説教臭いところ、一郎と似てるね」

「一郎くんって怒ると何て言うの？」

「オマエのベースで俺が自殺して楽器トラウマにしてやるからな、とか」

「重ツツツ!!?!」

「この前、一郎が映画観てる横で本気の演奏したらやられそうになったけど」

い、陰険にも程がある……！

リヨウも人の事言えない所業してるけど、一郎くんも優しそうな顔して案外そんな発想が生まれる人だったんだね。わ、私の事もキープ扱いするくらいだし、ありうるのか……！

「でも、一郎くんってちゃんと怒るんだね」

「何で？」

「私にはそんな事無かったし」

「虹夏が悪い事してないからでしょ。私はしてないけど怒られる、何故か」
「当然でしょ」

「解せぬ」

「怒つて当然だよ。私だったらもうお仕置きしてるよ」

「虹夏バイオレンス」

「怖い造語作んな!!」

私は暴力的じゃありません!

ちよつとバンド内では随一の筋力があるとはいえ不当である。

全く、こんなだから一郎くんに怒られるんだよ。

でも、この凶々しきがあるから彼の家に入り浸ったり出来るのか。

「一郎もお仕置きとかするよ」

「え、するんだ?」

「うん。この前とかはお風呂上がりにさ、着替えが面倒臭くて私が一郎のシャツ一枚で済ましてただけだよ」

「リヨウ……」

「そしたら、一郎が顔に青筋立てながら『次に薄着で俺の前を歩いたらタダじゃ済まさないよ』って言うんだよ」

いから覚悟しろよ』とか言っ……………」

「リヨウ?」

言っている途中でリヨウが固まった。

不審に思っただけが名前を呼ぶと、びくりと体が跳ねるや急に袖で顔を隠した。何事かと思っただけが色んな方向から覗き込むと、ちらりとだけ頬や耳が真っ赤になっているのが分かった。

真っ赤なリヨウなんて珍しい。

一体、何されたんだろう。

「リヨウ? 何されたの?」

「い、いや、別に」

「……………」

何……………その……………乙女な顔……………は……………?

「あ、あー。他には私が寝てる一郎の布団に入った時は急に……………」

「また固まった!?! 何!?! 何なの!?!」

「ち、違う。えと、そ、そう! 一郎が隣のクラスの女子と話してる写真見せて浮気だつて逃したら、手足縛られてスプラッター映画二本流し見させられた!」

固まったケースと言いつつ切ったケースの違いとか乙女顔する理由が何なのか不明だけ

ど、意外に一郎くんもリヨウに対して何かする事つてあるんだ。

それ以上は何も言わず、リヨウが机に突っ伏した。

精神的に限界だったのかな。

そんなに思い出すとかなり辛い事だったんだ……。

………良いなあ。

私もそんな風に、一郎くんと遊んでみたい。

友達みたいに、ううん、もつと深い関係がやるみたいに。

躊躇わないって誓ったんだから、私も大胆にやらなきゃいけない。

告白してるし、気持ちは伝わってるから臆しても意味がない。変に突き詰めないから

キープ宣言されたり、『箱』も持って行ったのに回避されるんだ。

私も頑張らないと。

「リヨウ、私も頑張るね！」

「ぐう」

寝てただけかい!!

放課後、私は一郎くんのマンションの前にいた。
何度か出入りしてるから、オートロックの暗証番号は把握してるし、部屋まで直行でき
きる。

ここへ足を運ぶのは何度目だろう。

来る度に苦い思い出を刻まれているから、回数なんて分からない。

階段を上がり、目的の扉の前に着いたのでインターホンを押した。

一応、家に来る前もロインで連絡を入れたけど既読は付いていない。

留守という場合もあるから、何度か試して出なかつたら大人しく帰ろう。……こうい

う事ならリヨウに鍵でも借りれば良かったかな。

でも、借りるって言ったら付いてきそうだし……。

「！あ」

扉が開いて、一郎くんが現れた。

真っ先に目に入ったのは、良くない顔色と虚ろな瞳。

かなり疲弊しているのが分かって、やや壁に凭れるような姿勢から立つのも少し辛いのだろう。

……良かった、助けが必要みたい。

一郎くんの苦しんだ様子に、私の中で仄暗い感情が宿って口角が上がってしまう。きつと、この様子だと誰も来ていない。

私が最初に、最初に、最初に助けに来たんだ。心配して来て良かった。

「……大丈夫？」

一言だけ声をかけてみる。

ほら、私だよ。

来たよ。

そんな念を込めた眼差しと、彼の視線が交わる。

「ひとりっ？」

私を見て、口にされた名前。

一瞬、一人だけか——という意味かとも思ったけど、声に含まれた安堵の深さから明らかにそうではないと確信した。

同時に、私の全身から歓喜の熱が引いていく。

「え……」

ウソ、だよ。

私の事、ぼっちちゃんと誤解してる？

なら、すぐに解かないと。

そう思ってるのに、シヨックで口が動かなかった。

胸に言い表せない痛みが走って、涙が出そうになる。怒りたいのか泣きたいのか分からない、感情がぐちゃぐちゃになっている。

そんな私に構わず、一郎くんが抱きついてきた。

「そっか……オマエっていつも、俺が弱った時に助けてくれるよな……」

違う。

違う。

違うよ。

ぼっちちゃんじゃない、私だよ。

私が、助けに来たんだよ。

増していく痛みに反して、彼に触れた部分から少しづつ体温が戻ってくる。すると、固まっていた体も不思議と動くようになっていた。

「か、看病に来たよ」

「すまん……助かる……」

至近距離で声がする。

彼は、まだ私をぼっちちゃんと思っている。

今までだって散々だったけど……これは酷いよ。

何で私ばかり、こんな辛い目に遭わなきゃいけないの？

一郎くんに振り回されてばかりで、嫌だよ。

「うん、じゃあ……まず中に入ろっか。——一郎くん」

許さない。

認めさせてやる。

一郎くんを助けに来たのが——私だけだって。

追い詰めて、追い詰めて……そうすれば、きつと。

ベッドに戻った俺——前田一郎は、看病に来た人物によってトレイに載せられたうど
んを差し出された。

香ばしい匂いに僅かながら食欲が蘇る。

辛い時に誰かが傍にいてくれる有り難みを痛感している現在だが、それ以上の動揺に
も襲われていた。

「自分で食べられる？」

♪

♪

♪

♪

それは看病人こと——伊地知虹夏の存在にである。

あ、あれー？

玄関で迎えた時は、ひとりだった筈だ。

歓喜のあまり抱き着き、彼女の名を口にして感謝していたんだが………ベッドに戻って、ひとりが「食べられる物作るね」と言い始めた辺りから違和感を覚えた。

ん、ひとりっていつの間に料理修得したの？

そんな疑念も風邪の辛さで大きく膨らむ事は無く、大人しくベッドで待機する事何分か……戻って来たら、何とひとりが虹夏になっているではないか。

………や、やらかした？

もしかして、ひとりと虹夏を勘違いした？

いや、もしかしてじやなくて確実に間違えた。

気まずい事この上ない事態である。

虹夏もソレに対してスルー、責めてるところか訂正する素振りすら無く、不気味で穏やかで親切な応対だけが継続している。

これは、俺が虹夏と呼ぶのを待っている………？

何だ、この高度な拷問は………！

自業自得であり、俺自身が作り出した刑罰みたいな物なのだが、さつきから怖くて仕方ない。

な、情けないけど……だ、誰でも良い！この際、憎き山田でも良い！助けてくれ、誰か!!

「た、食べられるよ」

「うん。じゃあ、ゆっくりね」

うどんを震える手で受け取る。

彼女にじいっと見守られながら一口目。

く、美味くて現状を忘れそうだ……このまま口走って「美味しいよ虹夏」って言うのがベストなのか、それとも謝罪を挟んでから感謝をすべきなのか。

出来れば、前者でいきたい。

な、何事も無かったように俺も虹夏同様スルーして……いや極大の失礼だよな、それは。

リヨウと交際しているという事を認めて貰い、きっぱりとあの時の告白にお断りの返事を入れて悶々とした関係に終止符を打ちたいのに……今後さらに彼女に頭が上がりなくなつて拗れてしまう可能性がある。

ここは、素直に謝った方が被害も最小限で済む。

仮にスルーしようとして失敗したら、謝罪よりも確実にダメージは大きくなる。

余計に立場を貶める事になるだろう。

あと、星歌さんに殺される。

「お、美味しいよ」

「良かった」

「ご、ごめん……玄関で会った時は朦朧としてて、ひ、ひとりと間違えたみたいだ」

「……………うん」

「に、虹夏が来てくれて助かったよ。誰にも連絡して無くて、あのまま一人だったらアウトだったかも。本当にありがとう」

素直に謝ってみた……………けど、どうだ？

虹夏の様子を窺うと、彼女は苦笑していた。

「最初、間違えられて凄く辛かったんだよ？」

「は、はい」

「風邪だから仕方ないと思ってたけどね」

「……………」

「私、一郎くんが辛いなら助けに行くから。去年から、家の事とか困つてるところ沢山見てたから助けたくて」

「あ、ありがとう」

「うん。一郎くんが辛かったら一番に駆け付けたいんだよ」

「は、はい」

ゆ、許してくれる……流れに見えない。

何だか空気が重くなっていく。

「だから、遠ざけないでね」

「と、遠ざけたりはしてないぞ」

「だって、嘘ついて」

「だ、だから嘘じゃ」

虹夏が少しずつベッドへと身を乗り出して来る。

俺が怖くて後退する分だけ接近する、何度も体験しているが慣れる事なんて無い。

声が震え始めて、必死に嘘ではないと訴えかけようとした時――。

「え?」

「え?」

インターホンが鳴った。

「……私、出てくるね」

「あ、うん。ありがとう」

「……………」

虹夏が部屋から出たのを見送る。

ど、どうやら救われたようだ……いや先延ばしになっただけで何一つ解決はしていないんだけども。

深呼吸して、体の緊張を解す。

それにしても、一体誰が来たんだろうか。

訪ねて来た経緯は聞いていないが、おそらく虹夏は学校に来ていない事を疑問に思っただろうから、クラスメイトという同じような立場で疑問を持ちそうなりヨウかな。

アイツが……看病……？

す、するだろうか。

少しだけ気になって、俺はベッドを下りて部屋から出た。

廊下に出ると、すぐ玄関扉が見える。

そこには、呆然と立ち尽くしている虹夏と——玄関扉を背にし、レジ袋を胸に抱えて不安そうに視線を右往左往させているひとりがいた。

み、見間違いないじゃなくて本物のひとり、だよな？

どうして、ここに。

「ひ、ひとり？何でここに？」

「えっ、あ、いっくんから辛いってだけ連絡来て……だ、だから、様子を見に……」

「連絡?！」

「あ、朝いっくんがロインで」

「——」
ま、まさか無意識か？

自分でした事を覚えていないんだが、過去の経験から辛い時はひとり进行を思い出すあまり彼女に助けを求めていたというのか。

自分の行動に驚いて言葉が出ない。

いや、それよりも気を遣わせた事が申し訳ない。

ひとりからすれば確実に善意だろうが、他の人間だったら辛いと言われて無視したら後々関係が悪化しそうだから見捨てづらい連絡だ……送った相手がひとりで良かったと心底思う。

胸を撫で下ろす俺だったが、ふとひとりとは別の視線を感じて背筋が凍る。

「嘘つき」

虹夏がこちらを睨んでいた。

「誰にも連絡してないって」

「え？い、いや無意識で俺も覚えてな」

「もう、一郎くんの何を信じれば良いか分からないよ」

虹夏の耳に俺の言葉が届かない。

だ、駄目だ、また変な方向に奔っている。

ひとりは状況が分からなくて困惑しているが、虹夏の危うさだけは感じているらしく声をかけているが、それすらも聞こえていないようだった。

す、すまない。

ひとりをこんな事に巻き込んでしまつて……。

「もう一郎くん信じられないよ」

「え……」

「でもね。挽回の余地はあるよ？」

虹夏がこちらへ歩み寄つて来る。

風邪もあつて頭があまり回っていない自覚はあるが、許される機会があるのなら、これを逃してはいけない。

「な、何？何をすれば……」

『箱』

「っ!？」

「誠意を見せて、今度こそ。……元気になったら、また家でね」

「そ、それは」

「……薬とかは居間に置いてるから。ぼっちちゃんも要るみたいだし、お大事にね」

虹夏は笑顔で俺の横を通り過ぎて、ときぱきと荷物を片付けるとひとりに挨拶しながら家を出ていった。

見送る俺とひとりの気まずい沈黙だけが流れる。

「い、いっくん……私が来た所為でまさか虹夏ちゃんと喧嘩……」

「いや、断じてひとりの所為じゃない。これは百人に聞いても百人がそう答える」

「ほ、ホントに?」

「むしろ、ひとりが悪かったら俺が代わりに罪を被るから」

「だ、駄目だよ。いっくん……今辛いんだから、わ、私が頑張るよ」
うぐっ。

何処までいい子なんだ、この子は……。

「ありがとう、ひとり」

「わ、私も何かするよ」

「……その袋、何か買ってきてくれたのか?」

「う、うん。チョコレートとか、後はお母さんが私から抽出した？栄養ドリンクとか入ってるよ」

「そっか、助かる」

チョコレートと万能薬等……か。

きつと、美智代さんが知恵を貸してくれたんだな。

やはり、俺は彼女らに……ひとりというヒーローに救けられている。

こんなに心配して、看病までしてくれるのだから、しつかり元気にならないとな。

元気になって………元気になったら虹夏……。

「……………ずつと風邪でいいかも」

「ええっ!!？」

もう元気になりたくない。

好きになつてごめんなさい

二月。

春休みは、必ずキャンプに行く。

その決意で、俺は雑誌を読み漁っていた。

クラスメイトの前園さんから勧められた物で、最初からソロはハードルが高いから、二人で行こうと提案されたが、これを固辞した。

曲がりなりに恋人がいる。

それに前園さんとのロインを見たアイツから。

『一郎って、そういう女が何人いるの？』

と、大変不名誉な言葉を頂いだ。

何とも嘆かわしい。

これだけで浮気を疑われるなら何も出来ないぞ。

まあ、気を悪くさせるのもアレなので前園さんの誘いを断つたのはこの為だ。
恋人優先。

しかし、だからといって山田リヨウは誘えない。

二人で行く相手がアイツだと圧倒的に不安がある。

理由としては簡単だ。

アイツは始終何もしない。

俺だけがせっせと準備に追われ、いつも通りになってキャンプならではの醍醐味とやらが果たして真つ当に味わえるか疑わしい。

リヨウの世話で時間が全消費される。

ならば、ヤツは論外だ。

第一、春休みは例年通り両親もいる。

人の相手がキツイから、せめて今年の春休みだけでも一人気ままに自由に過ごしたい。

勿論、勉強は頑張りますから。

浮気及び浮気疑惑に繋がる言動はしませんから。

そ、それに……治った後だから虹夏からいつ連絡が来るかも分からなくて怖いので、逃げる為です。

「ん、ひとり?」

スマホにロインのメッセージが通知される。

アプリを開くと、ひとりのトーク欄が表示された。

今年になって一層会話量が増えてとても嬉しくて、いつも開くとついニヤけてしまうのだが、この前はその場面をリヨウに見咎められて大変な事になった。

同じ轍は踏まない。

今は一人だ……口角よ、おまえは自由だ。

さて、今日は何を話してくれるのか。

『いっくん。今日、泊まってもいい?』

……ひとりの宿泊。

是非もない。

俺は即行で了承の返信を送る——というか、意思よりも速く指は動いていた。

これは浮気ではない。

妹を泊めるも同然のケースだ。……と想っているのに、何故か冷や汗と手の震えが止まらないのは約二年間我が身を襲い続けた理不尽の所為だ。

今や俺にとってのノンストレスは、ひとりのみ。

さあ、今日の飯は奮発しないとな。

献立も変更、ひとりの好物で固めなくては。

「今晚は忙し——あ」

興奮の熱が一気に冷める。

俺は重要な事を失念していた。

今日はリヨウが来るかもしれない。毎日のように来ているアイツだが、偶然にも来ない日というものもあるにはある。

ただ、そんな低確率でラッキーな日など俺が望んだ日に来たりはしない。

何なら毎日願って毎日外れるような始末だ。

今日だってリヨウが来ない保証はない。

どうしようか。

でも、リヨウを理由に断るのも馬鹿馬鹿しい。

ひとりを泊める事にむしろ罪悪感を抱く方こそ疚しいではないか。

堂々としていれば良い。

毎日二人きりな状況なので、今日ぐらい他人がいたって問題無いだろう！……そう思いたい。

「ん？」

点けっぱなしのテレビを視る。

画面に映るバライティ番組では、『年頃の子供』を話題に取り上げていた。

出演する面子の一人には、俺同様に年頃の妹を溺愛する若い俳優の姿がある。

質問する司会者の女性に対しても惚気マシマシの返答で少し相手も気圧されている。

『僕はとても妹を大切にしてるんです』

『は、はあ』

『小さい頃から僕がしっかり守らなければ……と思っていたんですが、最近は抱きしめて撫でたり、褒めちぎったりすると嫌がられます。……それで思い返したんですが、如何に兄とはいえ——』

やや自身と重なる点があつて聞き入つてしまう。

それ故に。

『大人の男にいつまでもバタバタされるのは不快かと、ようやく反省しました。キモいって言われるのも辛いですし』

その一言が己の中で雷鳴の如く轟いた。

手にしていた雑誌もスマホもソファの上に落ちる。

あまりにも衝撃的過ぎて呼吸すら止まった。

き、キモい……。

俺は自身のひとりに対する態度を思い返した。

た、たしかに衝動的に抱き締めたり、叱る事なんて一切せず甘やかし捲くつた。そこ
に後悔は無いし、逆に高尚な使命感すら覚えている。

ただ……客観的に年齢から想像すると、喜多さんにとって他人である俺が顔を合わせ
る度に抱きしめて褒めちぎったりしているのと同義だ。

ぞわぞわ、と鳥肌が立つ。

まさか、そんな。

でも、ひとりは嫌だなんて一言も言って……いや、言えない……!?

そうだ、毎年遊びに来る男に面と向かって拒絶の一言を言える胆力がひとりにあるだ
ろうか。

あの優しいひとりは、俺を傷付けまいと気を遣っているのかもしれない。

そう、言っていないだけ。

俺本人には難しいから、他の人に相談とかはしてるかもしれない。

『あ、あの虹夏ちゃん』

『ん？どしたの、ぼっちちゃん』

『あの……いっくんの距離が近すぎて困ってるんです。ち、ちよつとベタベタされて……うう……でも断れなくて……っ』

あ、有り得る……！

心根の優しいひとりが面と向かって相手を拒絶するなんて至難である。

俺は、いつも広く深い彼女の優しさに甘えていた。

「お、俺は……なんて過ちを」

一人悶々と考えているとインターホンが鳴った。

思うけど……最近、マンションのオートロック暗証番号を『結束バンド』で共有しているのか直接玄関扉まで来る辺り、何だか自分の危機管理能力の低さを自覚させられる。

まあ、ひとりには実害無いから良いか。

俺は重い足取りで玄関へ向かった。

どうしよう、これからどういう態度で接したら良いんだろう。

極力、距離を設けて適切な対応を心がけよう。

適切って何だ？

ひとりに触れられない？死ぬのか？

駄目だ、頭が回らない――。

「お、お邪魔します」

扉を開けると、ギターケースを背負ったひとりがいる。

俺を心配するように見上げて来ている。

……落ち着け……！

俺の身を案じてくれる眼差しに嬉しさが込み上げて体が動きかけたが、強固な意思で制止する。

気付いたばかりで罪を重ねるところだった。

無闇矢鱈に妹とはいえ女子にベタベタ触るのは禁じられた行為だ。

自重しろ、俺。

努めて冷静に、ひとりを家の中へと招き入れる。

「いらっしやい、ひとり」

「う、うん」

「ほら、上がって」

「あえ……？」

しかし、困惑した様子のひとりは入って来ない。

一体、どうし——ツツ!?

瞬間。

俺は下げた視線の先に驚愕の光景を見た。

それは、ひとりが小さく両腕を広げていたのである。

まるで控えめに待ち構えていたかのようだった。

か、香りすら漂っていそうな甘い誘惑に思わず四肢がひとりに向かって動き出しそうになる。

「……いい、いいのか?」

「えっ（いつも問答無用でやってくるのに)?」

「いや、いつも実は不快なんじゃないかと思って自重しよう」と

「ぜぜぜ全然!いい、いっくんが好きそうで……こ、この前の風邪のお見舞いの何も出来てなかったから……」

いや、充分に助かったぞ。

栄養ドリンクなんか、体内にひとりを感じられて孤独を忘れたくらいだ。

あれは看病というより救済である。

それにしても……ハグの理由「いっくんが好きそう」というのは、とんでもなく恥ず

かしい認識である。

そんなハグ魔だと思われていたのか。

うん……まあ……ぶっちゃけると好きだ。

ふたりとか、特にジミヘンを抱き締めるのも好きだ。

「気を遣わせて悪かったな」

「う、ううん」

結局ハグはせず、ひとりが家へ入る。

俺を置き去りに、逃げるように早足で居間へ消えた。

……………。

何が正解なんだ、現実って。

俺も扉の鍵を閉めて、とぼとぼと居間へと戻った。

「そういえば、ひとり」

「な、なに？」

「今日はどうして泊まるって言うてくれたんだ？」

「さ、最近いつくんに会えてないから会いたくなっつぷつ」

「え、っ!？」

話している途中でひとりの口からピンク色の液体が溢れた。

アレは一体何だ。

途中までだったが、とても嬉しい事を言ってくれていた気がするのに。

「ど、どうした？」

「ご、ごめんね。撮影で疲れて体が溶けて」

「撮影……？」

「新曲が完成して、そのMV撮ってたから」

「MV撮ったの？」

初耳だった。

たしかに、新曲の音源は聴かせてもらったけど。

まさかMVを撮るとは、本格的だな。

たしか『未確認ライオット』に向けた新曲であるというのは聞いた。

しかし、撮影とは本格的だな。

「そっか、大変だったな」

「へっ……わ、私なんて公園の隅で土イジリしてただけで……へっ……」

「俺も視てみたい」

「ごぼっ（あんな醜態見られたら死ぬ）!!」

俺は『結束バンド』を知っている。

演奏中の姿なんて誰からだって見物だと思われる。

それに、一体どんな運命の悪戯なのか全員のビジュアルがまた多方面で群を抜いている。ひとりなんてしゃんとすればアイドルすら狙えると言っても過言ではない容姿の持ち主だ。

「未来のいっくん……ごめんなさい」

「何で!？」

「あ、あんな暗くて淀んだ映像、お目汚しでしか無い……」

「ひとりは可愛いんだから、見ていて暗くなる事は絶対に無いだろ」

落ち込んでいるようなので、頭を撫で——る前に手を自身で掴んで引き離す。

あ、危ない……………!

また愚を犯すところだった。

これ以上、ひとりに変態だと嫌われてたまるか。

「……………あの、いっくん」

「ん?」

俺が一人、己の薄汚れた欲望と格闘していたら、ひとりの手が俺の手を優しく包み、自身の方へと引き寄せた。

そのまま何をするのかと思ったら、掌に頬を擦り寄せて目を瞑っている。

あ、凄く滑らかな肌。

何だか触れている部分から神経が生まれた時のように若返っていつている気がする。感觸の快感に、俺はすりすりひとりの頬を撫でる。

「んへへ………すきい」

ひとりがだらしな笑顔をこぼした。

もういいや、変態でも何でも。

後日。

MVを視たけど、件の土イジリのシーンは無かったというか演奏シーン以外はいなかった。

どうやらファン1号さんの編集によって隠蔽されたらしい。

許すまじ、言い値で買おう。

夕頃、俺はひとり用の着替えを確認していた。

突然の発想らしく、ひとりも着替えは無いが、以前に俺がレディース物を備えてある事を知っていたので、それを頼みとしていたようだ。

だが、残念な事が起きてしまった。

「全部、乾いてない……」

思い切って、リヨウ用の寝間着を全て洗濯していた。

今日はよく陽も出ているので、外干しても大丈夫だと慢心していたが、夕刻に取り込んだ時の手触りで未だ乾き切っていない事が判明した。

こんなの着ても肌触りが不快だろうしな。

どうしようか悩んだが、ひとりが来た時に着用していたお馴染みのピンクジャージをそのまま着させて待機させるのは酷だ。

苦肉の策として手早く乾燥機にかけて、その間だけ俺のシャツなり何なりを貸そう。

「悪いな、ひとり」

「だ、だだ、だだだ大丈夫！」

気丈に答えるひとりの健気さに涙が出そうだ。

説明した事情に、一切迷惑に思つた素振りが無い。

涙しながら、彼女を風呂場へと送り出した。

……迷惑に思つてはいないようだが、話した時にかなり動揺していたけど、一体どうしたんだらうか。男物を借りるとするのは、やはり避けたかったのか。

もしや、やっぱり嫌われて……!?

駄目だ、考える程に落ち込んでしまうから料理に専念しよう。

ひとりは子供舌で脂っこい物、味が濃い物が好みなのでデミグラスソースハンバーグを作る。

これで、少しでも機嫌を直してくれ……!

………ん?

ふと、さつきまでひとりが居たテレビの前の床が棚から取り出された映画のパッケージで散らかっていた。

おや、ひとりにしては珍しい。

俺は片づけようと手を伸ばして――。

「こ、これはツツ……………『巨〇天国〰これから始まる□獄にあなたは蕩かされる〰!?!』」

これはたしか、親の秘蔵AV……………!

お、奥底に隠し直した物が何故こんな場所に。

約二年前にリヨウが発見して、付き合い始めた時に興味本位で彼女が再生した時なんかは地獄のような時間だった。

色んな映画を観ていけば、正直に言つてセンチティブなシーンは多々あるし、ある程度は耐性が備わるのだが、そんな細やかな防備さえ退廃的な大人の嗜好を詰め込んだ映像は突破する。

後半なんか観てられなかった。

対して、リヨウはガン見である。

どんな胆力してんだよ、まじで。

しかも。

『一郎はもう巨〇じゃなくて私のサイズが好みだよね』

だから、それ前田父の趣味。

何度も言わせないで欲しい。

一度だって俺が……その、大きい方が良いとか言った事なんて無いから。

因みに調子に乗って「うわ、一郎目が血走って怖い、襲われる」とか下らない戯れ言を口にしていたので、掛け布団で簀巻きにして一晩放置した。

「あれ以来見てなかったのに……!?!」

ここにあるという事は、ひとりに見つかったという事だ。

な、何てことだ。

俺の私物でないどころか趣味ですら無いのに、ひとりに下卑た誤解を与えてしまったかもしれない。

好感度なんて、元々あつたか分からないがマイナス方向へと限りなく転落する爆弾だ。

な、何て事だ……!!

絶望で立ち尽くし、それ以上何も出来ない。

どうして、よりにもよってひとりが来た日にこんな畳み掛けるように嫌われるような事ばかり……ま、まさかあのテレビ番組は天啓だったのか？これ以上幻想が壊れる前に現実に戻れという。

「いっくん?」

「あつ、ひと——げっ!!」

風呂から上がって居間に戻って来たひとりの声に体が思わず跳ねた。

その際、するりと手から落ちた例のアレが床に落下し、彼女の足元へと滑っていった。ひとりのつぶらな瞳が下へと向けられる。

彼女は俺のTシャツを着ているが、やはりサイズが合わなくて襟が肩を滑り落ちていく。袖からも指先しか出ていない。

リヨウで見慣れた筈……なのに、何か違う。

は、肌が白い……。

「あ、い、いっくん。何か落ちたよ」

「あ、おおお俺が拾うからひとりは」

「大丈夫。わ、私だつてこれくら……い……い……」

「いや!大丈夫だつ……て……」

足元の物を拾おうと、上体を折って手を伸ばすひとり。

慌てて取りに行こうと踏み出した俺。

その双方に——衝撃が走った。

まず、ひとりはA Vのパッケージに描かれた女性の艶めかしい写真に硬直している。伸ばした手の指先が、触れる直前で停止していた。

まだ十五の少女に刺激が強すぎる画像である上に、知っていたとはいえ親戚で兄のような人物がこんな物を今まさに手にしていたという衝撃で動けないようだ。

そして、肝心の俺は——。

「え、デ……………」

前屈みになったひとり。

その瞬間、元からサイズが合わなくて大きく肌蹴る用になっていたTシャツの襟元の奥に、鎖骨から下にある深い谷を見てしまった。

俺の認識が、ガラガラと音を立てて崩れ去る。

今まで、そんな風に見てきた事は無かった。

ひとりは愛すべき妹で、いつまでも光のような存在だと信じていた。

だが、俺の視覚が、脳が、心が——今ひとりを『女性』として認識したスイッチが、か

ちりと押された自覚が芽生えた。

「えつと……」

「……………」

「い、いっくん。はい、これ」

「あ、ああ……」

ひとりが蒼白い顔で手渡して来る。

これは、侮蔑などではなく単に人の秘蔵物を勝手に見てしまった事への罪悪感や、それを咎められるかもしれないという怯えから生じた表情な気がする。

混乱して、まだ嫌いという感情が発生する余裕が無いだけかもしれないが。

俺は戸惑いながら受け取り、それを素早く柵に叩き込む。

ひとりが帰ったら砕こう。

持ち主には、謝罪のメールを添えて。

く、くそ……ひとりと目が合わせられない。

そういうえば、俺とひとりって血が繋がってないから客観的に見ても普通はそういう対象になり得るのか。

でも、一人の男としてはどうだろう。

ひとりには可憐だし、優しいし、命の恩人だし、生きているだけで最高を更新する尊い

生命だし……いやいやいやいや、でも、でもね。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あつ……いい、いっくんも、男の子、だもんね」

沈黙の後に、フオローという名の終焉が俺を滅ぼした。

ハンバーグを食べた後、俺とひとは映画を一本観て休憩していた。隣にピッタリとくっついて、俺の片腕を抱き寄せたまま動かない。く、この距離は俺にとって当たり前だった……だったんだ……！

あんな事件さえ無ければ、腕を包む温もりなんて特に意識する事も無かったというのに。

俺は脳内でさつき観た悪魔祓いの映画に登場した聖職者の台詞を復唱し続ける。煩惱を捨てろ。

「い、いっくん。あのね？」

「ど、どうした？」

「……さ、最近ね、いっくんがリヨウさんと付き合い始めて、ちよつと、あ、会うの止めようかと思って思ったんだ。リヨウさんに誤解されるのも駄目だと思って、そ、それがバンドに影響したら……」

「ひとり……」

いや、リヨウはひとりが考えるほど深刻な問題に発展させる爆弾ではない。

その場のノリでしか生きてないような生物だ。

可哀想に、俺たちの交際でそんな気を遣わせていたなんて。

「だ、だから会うのやめようって思ってた」

「……」

「思ってた……でも……」

ぎゅ、と腕を抱く力が強くなる。

「いっくんが、幸せになればって思ってたのに、いっくんがいないと……今度は、わ、私
が寂しいなって」

さ、寂しい。

俺がいないと？あの、ひとりが？

俺は思わずひとりの顔を見ようとするが、それを避けるように彼女は俯いた。

「い、いっくん……取られたくないなって」

……。

……取られる？

それは、家族が見も知らぬ他人に搔つ攫われていくという感覚だろうか。毎年独りで
年末年始は家に遊びに来て過ごし、それが最大の幸福だと断言する兄が急に他所に行つ
てしまう変化への恐れ？

分からない。

分からないが、ひとりの真剣さが声から伝わって変に言及する事もできず、口を噤ん
でしまう。

「ごめんなさい、私なんかが、ホントにごめんなさい」

「えっ、ひ、ひとり?..」

かく、かくとひとりの頭が揺れる。

心配になって段々と下へとずるずるの腕に全体重をかけながら沈んでいく体を支えようともう片腕を伸ばした。

「いっくん、好きになって……ごめんなさい……」

えっ。

小さな声だが、はつきりと聞こえた。

俺はひとりの肩を掴もうとした手を止めてしまう。

すやすやと安らかな寝息が聞こえ始めた。

来なきや良かつた

下北沢の駅前を彩る人の流れを眺める。

退屈な待機時間も勉強しておくべきなんだろうが、やはり中々そんな気にはなれない。

これから来る待ち人の所為だろう。

俺としても、帰れるのなら帰りたい。

仲が良い相手ではないのだが、どうしてか今日は呼び付けられてしまい、無視すると後々が面倒臭いから。

それにしても、あと待ち合わせまで十五分か。

これだけ持て余すと無駄な事を考えてしまう。

そういえば、最近はひとりばかり頭に思い浮かぶ。

今までなぜ意識せずにいられたのか不思議でならないが、元から容姿はもはやアイドルレベルと理解していたけど、女子として見てしまったのは泊まった時の一件が決定的

だった。

そう、ひとりも女の子だ。

俺が見過ごしていただけでしつかり成長している。

そして……痛感してしまった。

どうやら、俺は大きい方が好きだという事に。

あの後、無防備なひとりにドギマギさせられた。

腕を抱きしめてきたり、年始年末ではしなかったのに一緒に寝たいと顔を真つ赤にしながら頼まれた時は、首を吊って死体になってからなら一緒に寝れると考えた程である。

今思うと、ひとりも危機感が足りなさ過ぎる。

……それ、リヨウもか？

アイツもよく見知った相手とはいえ、男の家に堂々と宿泊し、しかも薄着で密着したり、甘い言葉を囁いてくる辺り理性があるのか疑わしい。

待て、女の子ってそうなのか。

否、違うだろ。

俺という人間を試している……？

もしそうなら、リヨウにおいて完全に失格だ。

毎度ながら誘惑に負けてしまい、翌日に響くレベルにまで発展してしまう。我ながら獣というか、逆にリヨウに申し訳ない。

『い、いつくんも男の子だもんね』

ひとりに言わせていい台詞ではない。

自分を何度も殴りたい気分だ。

しかも、一緒に寝た後の朝は同時に目を覚ましたかと思えば、起き抜けに俺にハグしてきた感触も相俟って爆発しそうだった。

よく堪えた、俺。

そしてくたばれ、俺。

それにしても……あの言葉は本当だろうか。

ひとりが俺を『好き』だと言ったのは。

そして、それに続いて『ごめんなさい』と謝罪していたのは何故だ。

俺は気づかない内に、ひとりと何か致命的なすれ違いをってしまったのではないか。

「ふん。ちゃんと待ってたのね」

沈思に耽っていた俺に、そんな声がかかる。

来なきや良かった第一弾。

やれやれ、先に来たのを後悔する態度だ。

俺が人との約束を反故にするような人間に見えるとでもいうのか。自分でも見えて
いるから敢えて反応はしない。

待ち合わせの十分前。

尊大な態度に反して、きつちりした人間だ。

いや、これが普通だよな。

最近バンドマンばかりに囲まれた生活をしているから常識が揺らぎつつある。

俺は待ち人に向かって手を挙げた。

「四分遅刻だぞ」

「う、嘘!? そんな筈ないでしょ!ちゃんと三十分前に駅には着いて、今来たように見せた
のに……」

「そんな事してたのか」

何故そんな謎ムーブを……?」

ともかく、俺は待ち人——大槻ヨヨコを迎えながら、どうしてこうなったのか、その経緯について思い返していた。

新宿FOLTでのライブ後だった。

きくりさんの介抱も終え、ようやく帰ろうとした時である。

同じようにライブをしていた『SIDEROS』に呼び止められた。

『あの〜、一郎さん』

ライブハウス入口で声をかけて来た『SIDEROS』のメンバーである長谷川あくびさん。

俺やヨヨコよりも歳下で、明るい色のショートの髪型と常に着用している黒いマスクが特徴の少女である。

正直、たまに歳上ではないかと疑うミステリアスな空気感の持ち主なので、本人からは「あくび」と呼べと言われるが、ついさん付けしてしまう。

喜多さんは、ほら……本人がグイグイ来る質だからさん付けでせめて最低限の距離を作ろうとしている。

『ん？あくびさん、どうかした？』

『大槻先輩が探してましたよ』

『ヨヨコが？またか』

『また？何かあったんですか』

『きくりさん目当てで来る俺に、自分たちは応援しないのかって遠回しにアピって来るんだよ』

そう言うのと、あくびさんに苦笑された。

たしかに『SI CKHACK』のライブを観に来ているが、同じようにやっている『SIDEROS』のライブだって充分に楽しませて貰っているし、応援もしている。

ただ、そこが伝わらない。

如何せんヨヨコと俺の意思は疎通できていない。

『分かった。すぐ行く』

俺はあくびさんに案内されて歩く。

控え室の方で、ヨヨコは足を組んでソファアの上にふんぞり返っていた。

『どうした、ヨヨコ』

『訊きたい事があるのよ』

『訊きたい事？』

『ええ』

『それで？』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………そんな言い難いのか?』

ヨヨコに尋ねる事があると言われて言葉を待つが、口を開いては閉じ、顔を赤くしては白くし、厳つい表情になったかと思えばおろおろしたり……と百面相の時間が続くだけだった。

沈黙が続いていると、横から肩を叩かれた。

俺の隣にいた本城楓子さんがくすくすと笑っている。

おっとりとした人で、やはり彼女も歳下とは思えない色気があって以下略。

『ヨヨコ先輩、さっきまで無視されたらどうしようとか、帰ってたらどうしようって混乱してたので』

『はあ』

『ちよつ、余計な事言わないでよ!?!』

『要件なら早く済ませてくれ。帰って飯作らなきやいけないから』

『雑う!私の扱い雑!』

理不尽だと叫ぶヨヨコだが、文句ではなく要件を伝えて欲しい。
長居すると、きくりさんにまた捕まる。

折角イライザさんや志麻さんが逃してくれたのに、このままでは家まで着いて来そう
だ。

『あつ、少年〜!』

『うげつ、見つかった』

『あたしを置いてくなんてえ、駄目だぞう?』

きくりさんが来て、ヨヨコがますます口を開き難い雰囲気になってしまった。

首筋に抱き着いた彼女から漂う酒精の香りに、俺は思わず顔を顰めてしまい、それが
自分に向けられた物だと勘違いしたヨヨコの顔色が悪くなる状況。

何だ、この地獄は。

『こ、ここではちよつと』

『なら、後でロインしてくれ』

『ろ、ロインじゃ駄目。……アンタ、□□日に時間ある?』

『ええ……バイト休み……』

『そ、そんなに嫌?……じ、じゃあ、○○日は?』

『その日はバイト!』

『何で嬉しそうなものよ、腹立つ！シンプルに嫌なヤツ！』

『□□日で頼む』

『じ、じゃあその日に下北沢駅集合。時間は後で連絡するわ』

そうして、ヨヨコと本日会う約束を交わした。

因みに余談だが、結局きくりさんは家まで着いて来てしまい、風呂と食事を提供する羽目になった。

その際に、また首筋に噛み跡を残され、疲労とストレスが閾値に到達していた俺が意趣返しにきくりさんをソファァーに押し倒して露出した肩にキスマーク付けたら真っ赤になって黙り込んだ。

その後の記憶が何故か曖昧だが、きくりさんを見るに特に事故は起きなかっただろうし、消臭もきつちりしてリョウに気取られずに済んだ。

あの日は散々な一日だった。

そして、今日はその延長のようにも感じる。

ヨヨコに罪は無い。

有罪なのは、きくりさんだけだ。

「さ、行くわよイチローー！」

「何処にだよ」

「カラオケに決まってるでしょ！」

「またカラオケ？喫茶店とかで良いと思うけど」

「あんな他人が沢山いる所で話せるワケないでしょ」

来なきや良かった第二弾。

なるほど、ヨヨコはそうなのか。

以前にバイト先で悩み相談してきた喜多さんと個性の違いが見えて、少しだけ面白い。

でも、カラオケも騒がしいから内緒話に向いた空間であるか否かは疑問ではある。

それに、相談事って？

音楽関係だと俺は木偶坊である。

喜多さんの相談には乗ったが、彼女の反応からも誤った導き方をしているようにしか見えないので自信が無いのだ。

「何？乗り気じゃないの？」

「乗り気ではないけど、ヨヨコの歌声を聴けるなら別に良いかと思って」

「ふふ。ホントに私の歌声好きよね、イチローは」

「まあ、きくりさんの方が良いけども」

「がふツツツ!!」

道端で血を吐いてはいけませんよ。

来なきや良かった第三弾。

カラオケの個室に入るやヨヨコは料理を注文した。

一緒に行く友だちもいなかったし、リヨウとの別れ話で少し沈んでいたところをヨヨコに引き摺り込まれたのが前回だ。

良い思い出どころか、そもそも思い出すら無い。

運ばれて来る料理を受け取り、受け取り、受け……多くないですかね。

ちらりとヨヨコを見る。

自覚は無いようで、「何か?」みたいな鋭い視線を返されるだけだった。

メタルバンドだから、意外と消費エネルギーが人一倍多いのかもしれないな。

「それで、話って?」

「まずは歌うわ」

「あ、そう。何を歌……!!?」

「ふっ」

ヨヨコが早速カラオケマシンに入れた曲名がテレビ画面に表示される。俺はそれを見て愕然とした。

これは、『SIDEROS』の楽曲ではないか!

「ば、馬鹿な……」

「ふん。見て驚きなさい。聴いて慄きなさい」

「一体どんな魔術を使った!?!」

「人気バンドだから。理由はそれだけよ」

傲慢な顔でヨヨコが告げる。

そんな事が可能なのか。

でも、彼女ほどの人気でこんな事態が起こりうるのならば、もしかして『SICKHACK』の曲も幾つか登録されているのかな。

俺はカラオケマシンと同期したタブレットで検索をかける。

ええと、『SICKHACK』の曲は………無い!?

ヨヨコの曲があつて、何故きくりさんは無い?

何か条件でもあるのだろうか。

俺は店舗情報を検索し、登録楽曲関連についての情報を見た。申告すれば、登録できる……か。

一定数以上の申請が必要となるが、なるほど身内などに頼めばクリアできそうだな。どんな奇跡かと思えば、とんだ奇術である。

ドヤ顔で歌っているヨヨコに、俺は穏やかな笑みで合いの手を入れてやる事にした。

「どう!？」

「ああ、凄かったな」

「……何か腹立つ顔ね。何かあった？」

「別に。ヨヨコは凄いなって」

「凄いつて部分、何で鼻で笑った？」

「気の所為だよ。どうした、何でそんなカッコしてるんだよ」

「アンタの所為だけ!？」

やれやれ、騒がしい子だ。

来なきや良かった第四弾。

俺がヨヨコを温かい目で見てみると、歌い終えた彼女からマイクを手渡された。

………何事だ。

俺が視線で問うと、最近のヒット曲が画面に表示されていた。

え、歌えと？

「カラオケなんだから、ちよつとは歌いなさいよ」

「話しに来ただけでも？」

「まずは一曲歌ってからよ。何？タダで私の歌を拝聴できると思ったの？」

「来なきや良かった第五弾」

「五回も後悔してたの!？」

泣きそうになっているヨヨコを尻目に俺も一曲歌う。

幸いリヨウの影響で少しは音楽を聴くようになったので歌える。

歌いきった後、俺はヨヨコを見た。

「上手でも下手でも無いわね」

「どうも」

「でも、カラオケ来た事無さそうなのに意外と歌えてる方じゃない？」

「ヨヨコは一人カラオケの経験豊富そうだな」

「そ、そんなワケないじゃない!?!いつも大人数よ!」

そんな剥がれやすい鍍金のような嘘を付かなくても。

呆れながら彼女を見てみると、ようやく話せる空気が整ったのか、ヨヨコがソファア

で腕を組みながら俺を睨めつけてくる。

「アンタに訊きたい事があるの」

「はい。どうぞ」

「……最近、『結束バンド』はどうなの？」

「『結束バンド』が気になるのか」

意外な内容に、俺も思わず前に身を乗り出す。

すると、気まづげにヨヨコが視線を逸らした。

「別に。『未確認ライオット』に向けてライバルがどんな風に動いてるか気になっただけ」

「……………」

「何よ」

「いや。相変わらず根は良い子だと思って」

「は？喧嘩売ってる？」

「悪口じゃない。……そうだなあ」

結束バンドか。

今は何をしているか、俺もあまり分からない。

この前のひとりがファンの助力により、新曲のMVを製作したことだけは聞いている。

リヨウも最近は話してくれないから、俺の持つ情報量が乏しい。最近虹夏の様子も危ういし、その事でリヨウに尋ねると。

『私以外の名前を口にする時間じゃないよ』

と、怒られる。

だから、一介のファン程度しか情報は無い。

これは、わざわざカラオケまで使って場を整えて尋ねるヨヨコの勇気と労力を無駄にしてしまった気がする。

直近の新曲完成及びMV製作の話があるのが不幸中の幸いだ。

「未確認ライオットに向けた新曲が完成したって」

「ふうん。調子は？」

「さあ。ヨヨコが思うほど俺は四人とそこまで情報共有してないぞ。部外者だし」

「……あれ、今日の私って骨折り損？」

「そうだな。よく頑張った」

「慰め方が雑!!」

すまない、主に慰められる方だったから。

肩を落とすヨヨコに苦笑しつつ、俺は料理の一つに手を付ける。

……カラオケって、意外と手が込んでるな。

美味しくて、一口また一口と食事が進む。

「ねえ」

食欲に火が点いた俺に、ヨヨコが座る位置をずらして近寄ってくる。

「アンタ、どっち応援するのよ」

「どっち?」

「結束バンドか……私たちが」

その間に、俺は気付かされた。

未確認ライオットにはヨヨコ達も参戦している。

たしか、投票形式の選考があるらしいので、必然的にどちらかを応援しなくてはならない状況が待っているのだ。

考えもしなかった。

単純に『結束バンド』を応援するつもりだったが、よくよく考え直せば『SIDER OS』も捨て難い。

「今、悩み始めた」

「ふーん」

「……何？」

「別に。まあ、悩むのも良いけど」

曖昧な返答は不安にさせるだけの筈なのだが、ヨヨコは何処か自信に満ちた笑顔だった。

勢いよく立ち上がると、俺の傍にあつたマイクを手に取つて構える。

「見てなさい。——後で断然私たちだって言わせるくらいファンにしてやるから」

『SIDEROS』のリーダー・大槻ヨヨコとしての強い声音に胸を打たれる。

固まっている俺に、益々自信が付いたかのようにヨヨコは笑みを深めた。

「これは……本当に悩むな。」

「——先輩♡」

「ひっ!?!」

「うっ……ま、また目眩と幻聴が……！」

背筋を舐められたと錯覚する声に俺は震え上がり、ヨヨコは謎の幻覚症状に見舞われる。

二人で扉の方を見ると、影が二つ扉の前に佇んでいた。

少しだけ不安だが、俺は意を決して立ち上がり、ゆつくりと扉を開ける。

そこには――。

「前田先輩……こんな時も私を虐めるんですね♡」

「あつ、い、いっくん……何で、女の人と……」

来なきや良かった第六弾。

おまけ「酒酔いの過ち」

ライブ後、今日もあたしは少年を誂っていた。

最近はずいぶん遅しくなっちゃったけど、まだまだ可愛いところがある。

大人のあたしに振り回されてくれないとな。

妙に大人びている所があり、それはきつと誰にも頼れないという部分が生活の中に色濃くあつたから備わった性質だと薄々感じ取れる。

だから、こうして混乱して子供らしく取り乱してくれる方が良い。

……と思っていたら、思わぬ反撃を受けた。

「恥つつず……」

あたしは浴室にて顔を両手で覆っていた。

酒の勢いに任せ、また少年に噛み付いたら逆に肩にキスされてしまった。

さつきから、そこがジンジンと疼いている。

この方、好き放題振る舞っていて痛い目を何度も見てきたけど、この類は経験が無い。

しかも、逃げないようがっしりと体を掴まれた時は男らしい力強さを感じてしまつて、怖いと思うと同時に何だか体が火照つた……気がする。

何事も限度が必要、だよな！

今日はもうこれで充分。

後は、少年のベッドでゆっくりと休もう。……つて、そう言えば少年にお水つて嘘ついてパツク酒移した物を渡してから風呂に入ったけど、大丈夫かな。

少し酔いから醒めた脳で危惧したが、しつかり者の少年が酒だと気付かずに飲む筈が無いと思ひ至つた。

さーて、体を拭いて、髪は……メンドイから少年に頼んじやおーつと！

ドライヤー片手に、あたしは居間へと駆け込んだ。

「少年〜！髪乾かしてー！」

「……………」

「……………少年？」

少年は、ダイニングテーブルに突つ伏していた。

傍に寄つたあたしが再度呼びかけると、据わつた目で見つめてくる。

あ、ヤベ。

これ飲んだっばい。

志麻と先輩と妹ちゃんに殺される。

少年が立ち上がり、至近距離で思いの外大きな体躯が立ち上がった様子に驚いて後退するあたしに、のそのそと 距離を詰めて来る。

それが怖くて後ろへと逃げていたが、やがて壁に背中が触れて退路が無い事を悟った。

「し、少年〜？お加減はー……ひっ!？」

どん、と顔の横に手が突き出される。

少年は、依然としてあたしを見ているか見ていないか分からない目だ。

「きくりはん……からかうのもいい加減にしてくらはいよ」

「え、へ？」

「毎回きくりはんの薄着にドギマギさせられて……ほうやって髪乾かさせたり、俺を都合のいい男だと思つてまへんか……？」

「あ、あの、少年〜？」

「我慢にも限度つてもんがあるんれす……」

視線は相変わらず曖昧。

なのに、ぎらりと目が鋭い光を宿した。

「なので、ちよつと痛い目見てくださいね」

え、あの、え……へ？

翌朝、あたしはベッドで目覚めた。

隣では、少年が枕に顔を埋めて深く眠っている。

それを見てから、あたしは自分の腕やら肩やら鎖骨やらについた痕を見返して……顔どころか全身が沸騰しそうな熱を取り敢えず酒で誤魔化す事にした。

「はーっ、男の子って凄い」

未遂だったけど、子供だと侮って痛い目見た。

その後、体を見せるワケにはいかないので少年の前では絶対にジャケットを脱がずに

帰
つ
た。
。

より輝く事を祈つて

ヨヨコの話の聞きに来ただけだ。

簡単な事だと思つた用事だったのに、現状を見ると神に嫌われているのだと沁沁思
う。

どうして、いつも災難に見舞われるんだ。

これに対応すべく必死になるほど空回りし、後で顧みると状況を悪化させた自覚が芽
生えて罪悪感に潰れそうになる。

今日もそうなるのだろうか。

「久し振りの先輩です♥」

「そ、そっか？」

「リヨウ先輩と伊地知先輩からは色んな話を聞けるのに、本人には会えない……いえ、
会つてくれないから」

「いや、別に避けてたつもりは」

「先輩に焦らされてるって思っ、いつも胸が熱くて……はぁ」
「見ない内にまた進化してる……」

もうこの子の思考回路が異次元すぎる。

単純に会う機会が無かっただけだ。

進んで会おうという約束を交わした事も無く、互いに求める気が無いから会わなかっただけの話かと思っ、彼女は違うらしい。

焦らしたとは、どういう概念だ。

意地悪をした瞬間は一度たりとて存在しない。

だから、そんな風を受け止めて恍惚とした顔のまま体を震わせるのをやめて欲しい。個室とはいえ、ひとりやヨヨコにも目の毒、風紀的にはあまりにも宜しくない。

うん、それと隣から太腿を撫でるのをやめてくれ。

俺がそっと手を掴んで太腿から離す。

すると、また喜多さんは甘く息を吐いてうっとり目を細めた。

もう何が正解なのか分からない。

助けを求めて隣のヨヨコを見ると、顔を蒼白くしながら全力で俺から距離を取ろうとするかのように上体を反らしている。

「アンタ……この子に何したの？」

「俺にも分からね」

「前も『F O L T』で観客の女にトイレで詰め寄られてたけど、絶対にアンタが原因でしょ」

「嫌な事を思い出させるな」

それは関係無い話だろ。

ついでに弁明するが、本当に何も無かった。

足を運んだ二度目か三度目のライブで『S I C K H A C K』のファン同士だと知った事で意気投合し、二人で何度か話していた女子大学生の方で、少しお酒の入ったあの人がトイレに引き摺り込まれて襲われそうになった。

だが、大事な事だからもう一度言う。

何も、何もなかったんだ。

事に及びそうになる寸前で、突然現れた志麻さんにその人は首根っこを掴まれて退場した……あれから姿は見えていないけど、きつと厳重注意されて己の行いを省みたんだろう。恥ずかしくて俺に会えない、という感じになっていると予想が付く。

因みに俺は、その後にはライザさんに抱き締められて『オー、よしよし。怖かったナー』と撫でられる謎のご褒美があった。

その後、きくりさんの反吐を処理した事ですべてが台無しだったけど。

「いっくん」

「ん、どうした？」

「あつ、お……大槻さんと仲良いの？」

「いや別に」

「即否定!?!アンタ情の欠片も無いの!?!」

「ひとりに注ぐ分くらいは持ち合わせてる」

「そこはせめてカノジョの名前出しなさいよ!」

リヨウの事か。

言えるワケないだろう、恥ずかしい。

面と向かって本人に言えず、周囲にアピールする度胸も無いから虹夏を未だ納得させられずにいる。この上なく情けない話だ。

「い、いっくん……仲良いんだね」

「いや、別にそういうわけじゃ」

「で、でも、楽しそう……」

「え、そう……? まあ、遠慮しなくていい間柄ではあるのかな」

「……」

「ひとり?」

「あつ、あつ、あつ」

「ひ、ひとり!?!」

ひとりの側頭部から新たに二つ顔が現れた。

左は泣き顔、右は絶望の表情、正面は白目を剥いている。

感情ごとに顔面を生成しただと……!?!

おそらく、顔一つでは抱えきれない熱量を有した複数の感情を発散しようと体が適応したのだ。

人体に為せる範疇を逸している。

その姿、まるで阿修羅。

やはり、ひとりは神域の生命体だったか。

「いっくんにまた女の人」

「いっくんが離れてく」

「あつ(死)、あつ(蘇生)、あつ(死)……」

いや、本物の奇跡に魂消えている場合ではない。

異常状態なのは明らかなので、いつもの方法——抱きしめてひたすら褒めたり慰める事で、通常形態に戻そうと俺は腰を上げる。

いや、待て。

この前のテレビでそれは駄目だって話していた。

撫でるのは本人の許可を得たから良いが、流星にそこまでベツタリするのはどうなんだ？

俺がひとりへの対応に逡巡していると、喜多さんがくすりと笑う。

「先輩って、みんなにイジワルんですね。……私だけじゃないんだ……酷い……♡」

………。

正面には阿修羅と化したひとり。

左には顔を手で覆って絶望するヨヨコ。

右には熱に浮かされたように笑う喜多さん。

ここは人の世界か？ 丑三つ刻に心霊スポットに行つて心霊現象に遭遇していると見紛うレベルの光景が広がっている。

俺がおかしいのかな。

ここはカラオケだった筈なのに……。

「ああ、そうだ」

「はい？」

「何で喜多さんとひとりはカラオケに？」

すっかり忘れていて、気になっていた事でもある。

もしかして、喜多さんとひとりがかなり仲良くなっていたのだろうか。

「あ、それは……」

質問した途端に喜多さんの表情が曇る。

どうやら、俺の予想とは違うみたいだ。

本人たちにとって明るい理由でカラオケに足を運んでいるのではないと瞬時に察せた。ヨヨコもまた気付いたようで、苦い顔をしながらマイクを手取る。

「空気が悪いわね。雰囲気を変えましょ」

ヨヨコが立ち上がり、曲を入れる。

おお……ヨヨコ。

場の雰囲気、人に合わせて動くのが苦手な性格なのに、暗くなつた喜多さんの気分転換になるよう自ら行動するなんて、不覚にもカツコよく見えてしまった。

感動する俺たちの前で、テレビ画面に曲名が映し出される。

それは。

「——私のバンドの曲で！」

ヨヨコの曲だった。

……………感動返せコノヤロウ。

おそらくオマエが必死こいて身内に頼み、純粋な人気とは違う力でゴリ押しに登録させたであろう楽曲は傲慢にしか聴こえない。

喜多さんを激励すると見せかけ、バンドマンとしてマウントを取ろうとするとは。

「え〜っ！カラオケに入ってるんですか!?!」

「す、凄い……………」

「ふふん！まあね……………って何よ、イチロー?」

「見損なつたぞ、ヨヨコ……………」

「何で!?!」

顔を真っ赤にして否定するが誤魔化されないぞ。

その浅ましい自己顕示欲を俺は見てしまった。

今の喜多さんには悪い。

ここは『結束バンド』のファンとして、見過ごせない。

よし——制裁をくれてやる。

俺がそつとタブレットで曲を中断させると、停止した画面を見てヨヨコが「あーっ!?」とマイクで悲痛な叫びを室内に響かせた。

許せ、ヨヨコ。

これが俺に出来る罪人への介錯だ。

代わりに別の曲を入れておいた、多分ヨヨコのバンドと同じジャンルの物だった筈である。

切り替わった画面にヨヨコが気を取り直して歌い始める。

……何だか睨まれているが気の所為だ。

そんな一方で、置き去りにされていた二人は小首を傾げていた。

いけない、彼女らを放置してしまった。

「安心しろ、二人とも」

「え……?」

「二人の心は、俺が必ず守る」

彼女らをファンとして守る意思を示す。

俺の覚悟が伝わったのか、喜多さんは顔を輝かせた。

「やった! 鞭じゃなくて飴のターンだわ!」

「鞭? 飴? 何言ってるの?」

「ホント、前田先輩は私の躰け方が上手なんだから……」

「日本語ってこんな難しかったっけ」

頼むから理解の埒外に行かないでくれ。

暴走気味の喜多さんに俺は頭を抱えたくなる。

ヨココのメタルバンド楽曲も相俟って、状況がカオス的だ。幸いにもひとりが正常な形態に復帰したので、今のところ特に俺が動く必要は無さそうだ。

「——と、まあこんなところね」

「大槻さん、さすがだわ〜！」

「はい、次はアンタね」

ヨココが俺にマイクを差し出す。

ええ……。

進んでマイクを手にしたヨココはともかく、俺はそもそも話があるからと言われたのでヨココに付き合っている。カラオケにいる事自体は成り行きで目的に関係無く、この場で歌う必要は無いのだ。

だが、マイクを持つヨココの手は拒否を許さないとばかりに俺へと突き出される。

画面には既に俺用の曲が登録されていた。……『君が代』だと？明らかに不真面目な選曲じゃないか。

露骨な腹癒せだと分かるが、断ろうにもヨヨコの圧は凄まじい。
俺は渋々とマイクを受け取った。

「何で俺が……」

「決まってるでしょ？腹癒せよ」

「喜多さんたちに嫌われないようフォローしたのに」

「それでも腹は立つのよ」

「だから俺とオマエは友だちになれないんだな……」

「アンタ今日やたら口撃力高いわね!？」

俺はため息を付きながら国家を歌う、全力で。

点数は……八十五点。

少し自信が付いたので、今度学校等で歌う機会があつたら胸を張って熱唱しよう。

国家を歌いきった俺に、喜多さんとひとりが拍手した。

いい子たち過ぎる。

「じゃあ……次は喜多さん」

「あ、は、はい！」

少し驚きながら、喜多さんがマイクを取る。

歌が上手で、バンドではボーカルすら務める彼女ならば、その歌唱力で感動させてく

れるだろう。

そう思っていたが、ふと歌唱中の表情は暗かった。

一体、どうしたのだろう。

心配になって、歌い終わった後にどう声をかけようか、果たして俺が踏み込んでも良い事情なのかと悩んでいると、スマホから通知を知らせる音が鳴る。

……リヨウからのロインだった。

『郁代から写真が来たけど、浮気?』

どうやら、喜多さんが知らぬ間に俺とのツーショット写真を撮影してリヨウへ送信していたそうだ。

心配しなくて良いか?



カラオケで偶然にも会った四人。

いつの間にか合流して一緒に歌っているが、彼女らがそれを特に言及しないので、俺もスルーしてカラオケに興じる。

実際、ヨヨコの用事は終わったので帰っても良いんだが……帰ったらリヨウが怖く、言い訳を考える時間が欲しくて留まっている。

いや、俺は悪くないだろう。

喜多さんが無邪気に送った写真がリヨウに疑念を抱かせただけだ。

不幸な事故である。

誰も悪くない。

「ねえ」

そのまま順番に歌い続け、何周目かの時にヨヨコが踏み込んだ。

「もしかして、今日はただ遊びに来ただけ？」

「……実は練習で」

「練習？」

喜多さんが暗い顔で、マイクをぎゅっと胸に抱く。

『未確認ライオット』の審査の為の新曲を録ったのだけど、聞き返してる内に違和感を覚えて自信失くしちゃって……でも何が悪いのか分からなくて」

喜多さんが告解した悩みの正体。

それは、俺も話に聞いていた新曲の事だった。

つい先日MVを出した事も知っているが、どうやら喜多さん曰く嬉しくて何度も聞き返していると自身の中で曲の完成度に対し自分の歌が追いついていないと感じたそう
だ。

今回の曲でエンジニア協力したのは、STARRYで俺も何度か見かけた妖しい雰囲気
のPAさん。彼女からの評価も芳しくないとの事で自信を喪失し、歌って練習しよう
とひとりを誘い現在に至るといふ。

そんな重大な悩みを抱えていたなんて。

でも、彼女らと会う前に『結束バンド』の調子を知りたがっていたヨヨコにとっては、
欲しかった情報ではないだろうか。

本人たちに聞けないから俺に尋ねたのだが、俺が役立たずだったばかりに……何だか
俺も苦しくなってきた。

「そうだったのか」

「……」

「ヨヨコ、何かアドバイスとか」

「私、一応『未確認ライオット』で競うライバルなんだけど」

「……成長した『結束バンド』と競った上で勝ちたい、とは思わないか？」

少し焚きつけるような言い方で挑発する。

すると、ヨヨコは不敵な俺の発言にふ、と笑い――。

「ら、ライバルなんて増えてどうすんのかなよ」

「あれっ？」

「わ、私にその義務はないでしょ」

「……うん、まあ、責められないけど何か残念極まりないな」

「わ、私がよく分かってるわよそんなの!？」

そうだな、たしかに義務は無い。

競争相手の手助けなんて全力でバンドに打ち込むヨヨコにとっては不要な酔狂だ。

喜多さんも納得しているのか、口を噤んでいる。

「あー……ちよつとだけよ？」

「ヨヨコ……!」

「は、はい!」

その反応に、俺は思わず彼女を二度見する。

み、見直したぞ。

そうだな……実は素直じゃないだけで根がいい子だったよな。

「とりあえず、お腹からもう少し声出したら？」

「な、なるほど」

「カラオケが上手いからってレコーディングもライブも上手いとは限らない。カラオケ感覚でやってたら変なのは当然でしょ」

「……………」

「バンドのボーカルはフロントマンだから、音程が合っていってわけじゃない」
滔々とヨヨコは語っていく。

その内容は割と容赦無く、あと……『ちよつと』という言葉に反した情報量だ。

あ、アドバイスは求めたが、ここまでとは。

聞いている喜多さんが意気消沈している。

流星に……酷ではないだろうか。

バンドマンではない俺が口を挟んでも説得力が無いと思えて口を開く勇気が出ない。

「まあ、今の貴方に『結束バンド』のボーカルである必要性は感じられないわね。少し歌える程度じゃ……」

「お、おい。そろそろその辺で」

流星に言い過ぎかと思つて、俺も止めようと動く。

「あつ、あのっ!!」

そんな俺とヨヨコを、ひとりが珍しく張り上げた声で制止した。

驚いて固まる三人に、ひとり俯いて膝の上に固く拳を握っている。

一気に注目が集まって怖いんだろう。

話の雰囲気も良くないし、こんな中で発言する事自体が一番苦手ですらある性格だ。それでも。

「い、言つてる事は正しいのかもしれないけど、喜多さんじゃなくて良いなんて事は……ないです!」

精一杯振り絞つた声で、ひとりがヨヨコの言葉を否定する。

それを聞いた喜多さんの顔色が戻っていく。

ひとり、またオマエは……。

バンドマンじゃないから、部外者だからと気後れして喜多さんが暗い顔なのに怖くて手を差し伸べられない俺とは違って、やはり人を救う為に率先して動いた。

昔からこの子は、俺を救ってくれたヒーローのままだ。

実際、喜多さんは一転して顔に笑みを咲かせ、ひとりの手を飛びつくように握った。

「ひとりちゃん！」

「あつはい」

「私、頑張るからー！」

喜多さんとひとりが、微笑み合う。

ああ……合流したばかりの頃の地獄絵図は何処へ行つたんだろう。

永遠にこの光景を見ていたい。

そう思っていると、ふと気まずそうにしているヨヨコが視界の隅に入る。

「ちよつ、だから今アドバイスしようと思ってるのに。これじゃ完全に嫌な奴……」

この言動を見るに、今までの酷評は前フリでこれから改善点を上げるつもりだったよ
うだ。

つくづくテンポが合わないとか何とか何と言うか。

俺は励まそうとヨヨコの肩を叩く。

「ヨヨコらしいな」

「フオローしないアンタも嫌な奴じゃない!」

そんな気がしてきた。

結局、カラオケを出て四人で歩く。

先頭に行くヨヨコと喜多さんの会話を、俺とひとりは後ろで見守っていた。

「大槻さん、今日はありがとう」

「別に……私もアイツだけで退屈してたところだし」

「オイ」

「そう言えば、二人はどうしてカラオケに?」

「そつ、それは……」

訊かれると思っていなかったのか、ヨヨコがその質問に狼狽える。

今日は『結束バンド』の現状を知りたくて俺を呼び出した、なんて素直な事をヨヨコが『結束バンド』メンバー本人に言える筈もない。

「ここは俺が代わりに答えるべきか。」

俺もヨヨコに対して満足した情報を差し出せず、わざわざ誘った彼女の勇気を無意味にしてしまったので、その償いに手助けしなくては。

「ヨヨコは、『結束バンド』を心配——」

「違つ、い、イチローに誘われたのよ！二人きりで遊ばないかって!!」

「ちよ、何言つてんだオマ——」

ぱつ、と喜多さんが俺に振り向く。

夕陽の所為だと思いたいくらいに、また頬を赤く染めて妖しい笑みを浮かべている。隣のひとりも、俺の袖を握つて何かを訴えるような眼差しを向けてきている。

何なんだ、この状況は。

また気まずい沈黙が下りて、自分たちの足音が嫌に大きく聞こえるだけの時間になる。

……ヨヨコがあんな事を言うから、もう俺は一言も発せる勇気が無い。

「あ……私、昔から人に合わせるのが苦手で、中学でも浮いてて……曲作りを始めた時は、その時の苛立ちとかを歌詞に込めてたの」

「え？」

「そういう曲って、いつになっても凄く気持ちを乗せて歌えた」

ヨヨコは自身の歌への姿勢について語る。

自分で作った歌詞と、歌っていた自分が重なると気持ちを込めて歌えた……という話のようだ。

たしかに、ライブで聞く『SIDEROS』の歌は、どこか人の怒りや不満を歌詞として発露しているようで歌声を聴く俺たちも同じ気分で叫びたくなる。

「貴方も技術的な事だけじゃなくて、自分たちの曲がどういうものか、もう少し歌の内面的な所も考えてみたら？」

「歌の内面的な所……考えて」

喜多さんが嘯み締めるようにヨヨコの言葉を繰り返す。

……なるほど。

歌詞をなぞるだけの歌い方ではなく、歌詞に秘められた内容を理解し、寄り添う感情で歌えるようになれという事か。

それこそ『SIDEROS』が、ヨヨコが多くの人々の心に歌を届かせる為の心構えなのだ。

全く……見直したぞ、ヨヨコ。

「大槻さんって」

「な、何よ」

「とつても優しい人なのね！」

「違うから！ 貴方たちがあつさり『未確認ライオット』の審査落ちたら、後で貴方たちに目をかけてる姐さんが面倒なの！ 私は依然キライだから！」

「また素直じゃない……」

「……それと」

ちらりとヨヨコが俺を見る。

何だ、睨んでも何も無いぞ。

「今は『結束バンド』を推してるみたいだけど、そのイチローは私に夢中にさせるから」

それだけ告げると、ヨヨコは駅へと早足に去っていく。

遠のく後ろ姿に、俺は思わず顔が引き攣る。

俺を喜多さん達に発破をかける為の材料にしないでくれ。

挑発を受けた喜多さんは、黙り込んでしまっている。

……ただのファンで部外者だからと一步引いて何も言わなかったが、さっきのひとりの勇姿で何もしない事が一番酷いのだと気付かされた。

俺も応援する身として、精一杯何かすべきなんだ。

「き、喜多さん」

「はい？」

「ありきたりな事を言うけど、俺は喜多さんあつてこそその『結束バンド』だと思う。ひとりのギターも凄いいし、経験者として安定したりヨウと虹夏の力も必要不可欠だけど、何より喜多さんの歌があつて俺は今まで『結束バンド』のライブに感動させられた」

「……先輩……」

「喜多さんなら大丈夫。きつと今の悩みも乗り越えられる」

無責任な言葉かもしれないが、これで喜多さんの背中を押そう。

「だから、また喜多さんのすごい歌聴かせてくれ」

「……………はい」

俺の言葉に頷いてくれた喜多さんが歩み寄つて来る。

「大槻さん達よりも、私たち……私に夢中にさせてあげますね。——「一郎先輩？」

蠱惑的に囁いた後、ひとりを連れて喜多さん達も駅へ向かっていく。

俺づこときの言葉なんて微力と呼べる程度の助けにすらなれるか不安だが、どうか喜多

さんの悩みが晴れるように祈ろう。

……ところで、ひとりとはあまり話せなかったな。

始終喜多さんの悩みで話題が固定されていたのもあったが、この前のひとりの言葉について本人に聞いてみないと。

「さて、俺も帰るとするか」

これから『結束バンド』が更なる成長を遂げることを祈りながら、俺は家を目指した。

おまけ「帰宅後」

家に帰った俺を、玄関でリヨウが迎えた。

カラオケと喜多さんの悩みで頭がいっぱいだったが、ツーショット写真という時限爆弾が我が家に設置されていたというのをすっかり忘れていた。

既に風呂には入ったのか、また勝手に借りたであろう俺のシャツ一枚の姿である。

いつもなら艶めかしく露出した肩と鎖骨につい目が吸い寄せられそうになるが、今はリヨウがどう動くかへの警戒心でそれどころではない。

固まっている俺の首筋にリヨウが腕を回す。

「浮気者。一郎の浮気者」

耳元で囁く声は湿っていて、聞いていると体の奥で湧き上がってくる何かに堪えようと無意識に拳を握ってしまう。

風呂上がりの後だから良い匂いがするし、密着している肌の柔らかさと温もりを全身が敏感に感じ取る。

「油断するといつも一郎は女子という」

「いや……それは」

「一郎は不誠実な男。私が人格者だからいいけど、短気だったら刺されてるよ」

いや、引つ掻いたりされてるけど。

あと、そろそろ離れてくれ。

ヨヨコや喜多さん達とのカラオケ後で疲れているのもあって、何だか変な気分になりそうだから。いつもなら堪えられるリヨウの誹りにも、疲労で沸点が低くなっていて既に暴発寸前だ。

人格者？どの口が言ってるんだ。

俺が『価値』の無い人間の挙げ句に最近是人を振り回している迷惑野郎である事を重々承知してる。思えば、恋人に無断で他の女子と休日二人きりで会うなど浮気と言われても仕方がない。

反省すべき……なんだろうが、許可無く他人の家に居座って飯を食らいベッドを奪う寄生虫に言われたくはないという気持ちもある。

コイツ……絞め上げてやろうか。

そんな俺の内心も知らず、リヨウはくすりと小馬鹿にしたように笑う。

「でも、その様子だと何もなかったっぼいね」

「俺を何だと思ってるんだ」

「……たしかに、そもそも一郎はいつも受け身で押し切られるとアレだけど、私以外にそこまで踏み込める度胸も無いからね」

………何だって？

「だって一郎、ヘタレだから」

ブツつ、と俺の中で太く強靱な糸が千切れる音がした。

もう我慢ならん。

俺を責められるとあつていつも以上に調子に乗っているようだから、まずはその生意気な態度を崩してやる。

俺はがしりとリヨウの後頭部を掴む。

突然の事に、至近距離にあつたりヨウの瞳が見開かれた。

「え、一郎？急は何——んんっ！」

俺はリヨウの口を封じた。

驚いて咄嗟に離れようとする頭を後ろから手で引き留め、そのまま空いた腕で細い体を抱き上げて、自室まで運ぶ。

腕の限界が来る前に何とか扉を開け、中へと早足で入ってリヨウをベッドの上に落とす。

俺の奇襲を受けて状況が理解できないのか、目を瞬かせている。

その前で、俺は上着を脱ぐ。

「悪かったな。今から埋め合わせとして俺の可能な限りの誠意を見せよう」

「あ、え？ いち、ろー？」

「たしかに俺はヘタレだ。だからリヨウ以外に手を出さず度胸も無い」

「ごきりと手の骨を鳴らすと、俺を見上げるリヨウの顔色が青褪めた。

「そう……オマエ以外には、な？」

「……さて、冗談はここまでにしてご飯……あつ」

ベッドから起き上がり、何事も無かった事にしようとしたリヨウの肩を押し倒し、俺もベッドの上に身を乗り出す。

挑発したのはそつちだ。

「冗談にするワケないだろ、このアホが……！」

その後、俺はやらかしたと悟って固まるリヨウへ数時間に渡る長いながい説教を行った。

今じゃない

冬の終わり、もう暦は弥生。

俺はカレンダーでこれを見る度に嫌になる。

この月は、両親が海外出張から戻るのだ。

郁人さんには気まぜいなら、その期間だけでもウチに来ないかと誘われたが、避けたい。どうにもならないので丁重にお断りした。

それに、ひとりの事もある。

俺も変わろうと決意したのだ。

なるべく俺からも歩み寄ってみなければ、永遠にこんな関係が続く。別に続いたって大問題ではないし、むしろ頑張るほど悪化する事態も想定できるから下手に触れるべきではない。

行動の如何については、彼らを見て決めよう。

去年のようなハプニングさえ無ければ、な。

先月の末には連絡があつたから、既に準備は出来ている。去年のように、山田リヨウの突発的な謎気遣いで寝過ごししてさらなる混沌が出来上がる可能性は未然に防げる筈だ。

今日はもう、起きている。

後は、両親の来訪を待つだけ。

俺は食事の用意も済まし、居間のソファアでその時を待つ。

予めリヨウへの連絡は済ませた。

今日だけは来るな、と。

また恋人ネタで弄られて調子を乱されてもストレスが倍増するだけだ。今日を乗り越えれば、彼らは勝手に旅行なり何なり自分の事で忙しくなる。

これが俺に出来る最善。

「来たか」

午前十時。

スマホには『着いたよ』というメッセージ着信、間もなくしてインターホンが鳴って俺は腰を上げる。

気合を入れろ、前田一郎。

今年唯一の『良い息子』を演じる期間、ここだけなのだからやるだけやれ。

俺は玄関へそそくさ向かい、扉を開ける。

「ただいま」

俺を迎えたのは、両親——と山田リヨウ。

彼らよりも前に立って俺に挨拶をする彼女の堂々とした姿に、さすがは通い慣れてるだけあつて違和感が無いなど思った。

俺は三人を家に入れる。

そのまま居間へと向かう彼らを見送り、玄関扉を施錠した。

さて、まずは彼らの荷解きを手伝うか。

「つて、ちよつと待て」

「どうしたの」

「どうしたのじゃねえよ、最大の違和感」

「……………?」

両親に続こうとしたリヨウの襟首を掴む。

服が伸びると嫌そうな美形顔を自室まで引つ張った。

「何でいるんだよ」

「スマホが壊れた」

「また？ 去年は自転車で今度は何だ、トラックか？」

「バイク」

「二輪繋がりかよ」

去年は自転車、今度はバイク。

運命的にも程がある損傷事情である。

これはリヨウ自身の問題ではなく、運命が俺に嫌がらせをしているからなのかと不思議な納得すらしてしまう。

……って、去年までの俺なら言うだろう。

残念ながら、その手には引っかからない。

昨日、ロインで連絡したのは夜中の十時。

既読が付いたのも見てるし、その時間帯は既に高校生が出歩いて良い時間ではなく、バイクなんか遭遇する可能性は一分たりとて存在しない。

つまり、壊れているのは嘘だ。

俺はリヨウに向かって手を差し出す。

「じゃあ、スマホ見せて」

「……………」、壊れてるから家に置いてきた」

「それで？」

「な、無いから見せろと言われても困る」
ほう。

俺はそうかと頷いて、指の骨をぱきりと鳴らす。

びくりとリョウウの肩が跳ねた。

……よし。

「この前の説教は足りなかったか」

「ち、違う。ほんとに壊れた」

「壊れてたとしても、前々からこの日は来るなって直接言つて念押ししてたよな」

「……………」

「今日は何で来た？ん？」

「……将来的にも一郎と一緒にいるワケなので根回ししようかと」

「想像の五百倍重い話かよ」

将来的にも寄生する宣言かよ。

山田夫妻が悲しむからやめて欲しい。

そんな魂胆で家に来られても俺と両親の方が困る話ではないか。ギスギスしてる親子間にそんな話題を持ち込まれても……。

第一、リヨウは却下。

まず俺が息子想いの人間ならリヨウはアウトだ。

絶対に認めたりしない。

「俺は将来、ひとりが困った時の為に独身でいるべきなので無理です」

今思いついて用意した言い訳を放つ。

成長していくひとりを見ると、もはや必要無い約束ではあるが、この場限りでは俺を守る盾にもなる。

果たして、それを聞いたリヨウは——目を細めた。

自分の服のボタンを一つずつ解いて胸元を広げると、そこにある素肌が見える。

白い肌に朱の花が点々と咲いていた。

いや……あの、それは……はい。

「こんな事していい?」

「……」

「写真撮って、結束バンドのグループに送信しよう」

「分かった。俺が悪かった」

スマホをチラつかせて山田リヨウが微笑む。

俺は全力で頭を下げ——る前に、スマホを持つリヨウの手を掴んだ。

「やっぱり持つてるじゃんか」

「こ、これは予備」

「ズボラなオマエがスペアなんて用意してるワケ無いだろ！」

ああ言えばこう言う。

俺は苛立ちながらも、冷静さを取り戻しつつあった。

両親と一緒に来たリヨウを直ぐ追い返しても変に勘繰られたりして面倒臭いし、このまま家に帰しても後日さらに将来的な根回しとか怖い理由で来るようなりヨウがどんな報復行動に出るか分からない。

何て厄介な生き物なんだ。

俺は諦めて、作った昼食用の食事がリヨウの分も足りるかどうかを考えた。コイツの食欲次第では、また量を追加分も拵えなければならぬ。

大体、本当は何の用で来たんだ。

将来の根回しというのも怪しいぞ。

「一応訊くけど、腹空いてる？」

「うん」

「……はあ。今日は大人しくしてろよ、ホントに」

「それを待ってた。この日のご飯が絶対豪華だと思って楽しみにしてた」

「やっぱり飯目的かよ」

「たんと食ってけバカヤロー。」

現在、両親と俺にプラスしてリョウ。

もう家族の一員もさながらの馴染み具合で、誰よりも俺が作った白菜カレー肉豆腐を白米に絡めて一口に堪能し、満足気に鼻を鳴らしている。

三人に出している料理は一緒だ。

ただ、一点だけリョウは違う。

昨晚に作った千切大根の煮物を小皿へ勝手に出しており、一緒に入っている人参が口の中でほろほろ溶けるのが白米と相性が良いとか豪語しており、最後まで残している。

「ホントに遠慮が無いな……」

「虹夏のご飯にも負けてない」

「別に競ってないけど、あの味と同じ評価なのは有り難いな」

「週七で食べたい」

「ああ。他所で毎日食ってくれ」

最近、居ない日を探す方が難しい。

俺の懐の甘さが招いた厄災だ。

正直、クラスではリア充なのかとか持て囃されるんだけど何も嬉しくない。一言で表すならば、夜には怪物と化す化け猫を周囲が可愛い猫だねと褒めちぎるような感じに似ている。

顔が良い。

神秘的。

女を殺せる女。

そんな評価が学年で通っているとか。

俺からすれば、顔が良いのは認めるが性格の方が壊滅的で、神秘的というより退廃的、女を殺せる女ではなく俺をストレスで殺せる邪神なのが適当な評価だ。

よく付き合ってるな、俺。

「二郎、おかわり」

「あら。リョウさん早いのね」

俺よりも両親と仲が良いのも困り物だ。

着実に前田家からの心象を良くして、本当に将来的な建前までも利用されたら恐ろしい。

恋人をここまで悪し様に言う男も珍しいのかもしれないけどさ。

俺がリヨウの茶碗を手に、台所の炊飯器まで運ぶ。

まあ、予想外な事にリヨウに興味が集中して両親があまり積極的に俺に絡んで来ない事かな。

……いや、リヨウが惹きつけてくれるのか？

思えば、不思議なのだ。

あまり他人と会話量が増える事自体を面倒臭がる程度には陰キヤで、俺を気に入ったのも特に構ったりしないからというのが理由なヤツだ。

それが今では律儀に両親との会話に応じている。

あの、普段は気を使えないリヨウがだ。

俺はリヨウへと振り返る。

「一郎、おかわり」

いや、単に好物でテンション上がってるだけか。

俺は茶碗に白米を盛り、リヨウの手元へと置いた。

さて、そろそろ両親も話し疲れと時差の調子狂いで眠くなってくる頃合いだ。

俺が時計を見ると、完食した両親が箸を置いて欠伸をする。

「ごめん、一郎くん」

「お疲れ様。片付けはやるから、ゆっくり休んで」

「ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えるわね」

両親が立ち上がって自室へと引つ込んでいく。

俺はそれを笑顔で見送って……隣のリョウを睨んだ。

「オイ、いつまで食べてるんだ」

「ん？」

「いつもより食欲旺盛じゃないか？」

「今日のご飯は豪華だから楽しみだって言ったじゃん」

「ああ。……それが？」

「だから、昨日は朝ごはん抜いてきた」

そんな重い楽しみ方されても……。

自分の飯に対する期待の大きさに俺が戦々恐々とする中、まだリョウの手は止まらない。
い。

まあ、特に嘔まれたり引つ搔かれたり迷惑してるワケではないから、まだマシか。
取り敢えず、洗濯物を干しながらコイツが完食するのを待とう。

「ん？」

インターホンが鳴って、俺は足を止める。

しかも、マンションのオートロックの方ではなく玄関扉前からだ。宅配便、ではない。

でも、今日ここに来るような人間がいただろうか。

隣の人のおすそ分け……は昨日あつた。

本当に何なんだろう。

「ちよつと出てくる」

リヨウに一言伝えるが、聞いていない。

アイツの世界は、今自分の中に響く咀嚼音で満たされている。

俺はため息をつきながら玄関に出て、扉を開けた。

「はい、どちら様——」

「あ、一郎くん。こんにちは」

心臓が止まるかと思つた。

目の前には、冬の寒気に鼻や頬が赤らんでいる虹夏。

可愛らしい手袋で包んだ手を挙げて俺に挨拶をした。

どうしてここに、という声は出ない。

俺が愕然としているのも気にせず、虹夏は手に何かを提げていた。

「『約束』^箱、持ってきちゃった」

……………俺の世界では滅びの呪文が聞こえた。

幸せになろうね

虹夏が袋を胸前に持ち上げて微笑む。

うっとり細められた目に、俺は背筋の肌が粟立つ。

去年の俺なら両手を挙げて喜んだだろう。

いや、喜んでないな。

多分、面食らって何も反応を返せずに流されて事に及ぶ姿が目には浮かぶ。

「家間違えてますよー！ツツ！」

だが、今現在の俺は違う。

全力で拒絶する。

俺は虹夏の肩を掴んでターンさせ、玄関扉の外に押し出して素早く閉め、施錠する。

我ながら一片の情も無い門前払いだが、これ以上の隙を許したら社会的にも肉体的にも

終わりそうだ。

今、リヨウと両親がいる。

もし家に入って来てても、この場合は凌げる。――が、そのまま外に連れ出されてあれよあれよの内に虹夏と変な空気になっているに違いない。

扉に背をつけて呼吸を整える。

心臓が早鐘を打ち、冷や汗が額に滲む。

ピコン、とスマホが鳴った。

勘弁してくれと思いつつアプリを開けば、虹夏から夥しい量のロインが来ていた。複数台で送信されているのかと錯覚する速度で次々と通知音が重なる。

怖くて見れず、俺は一旦スマホから目を背けた。

何ならスマホだって投げ捨てて、いつそリヨウみたく後日虹夏に壊れてたなんて嘘をつきたいくらいなんだが、その嘘すらも虹夏に対してどのような影響を与えるかわかったものではない。

恐らく『私と連絡すらしたくないんだ?』とか心にグサツと来る話し方で責めてくる。しばらくすると、音が鳴り止む。

あ、諦めたか……?!

俺がスマホ画面を恐る恐る見ると、最後の通知に悍ましい文が載せられていた。

『開けてくれないと、一郎くんに泣かされたって皆に言うよ』

内容を理解した瞬間、俺は玄関扉を開けていた。

そんな事されたら死んでしまう。

特にひとりに軽蔑なんてされたらこの世から自分を抹消したくなる。もう既に知られていないだけで全貌が伝わったら手遅れな状況なのだが、どうにか俺自身の手で食い止められる内は虹夏の暴走を止めなくてはならない。

向こう側では、変わらぬ笑顔の虹夏が佇んでいる。

まるで時間を逆行したかのような気分だ。

今度は無言で『箱』を見せつけてくるが、約束と言われても俺は合意していなかった。ので厳密には虹夏からの要求であり、『箱』を使ったある事がしたいらしいが断固として受け容れられない。

虹夏の魂胆は概ね読める。

俺が事に及べば、自責の念で虹夏に対して余計に弱くなり、ズルズルと関係が続けてしまう。その果てに望む物を手に入れようと虹夏は画策しているんだ。

割と冷静に考えれば、女子高生が考案し実行に移すレベルではない危険な作戦なのだ

が、そろそろ俺も虹夏の事を数少ない俺を好いてくれる貴重な一人ではなく、定期的に襲来する災害へと認識が変わりつつあったので奇妙にも納得すらしている。

「と、取り敢えず中で話そう」

「うん。……あれ？靴が多いね」

「出張から親が帰って来たんだ。寝てるから静かに頼む」

「ううん……じゃあ、私の家？」

「取り敢えずリビングでゆっくりしていつてくれ」

俺は虹夏の背中を押して居間まで向かう。

そこでは、俺の予想通り呑気に食事中的のリヨウがこちらを見て愕然としていた。

虹夏もリヨウを見て沈黙する。

テレビ画面は、恐らく俺がいない間にリヨウが入れたであろう映画『テ○ファイド』が流れている。ゴリツゴリのホラーなのだが、今にコレを集中して観れなくなるぞ。

「……………」

「……………」

「お、俺は飲み物用意するよ」

気まずい静寂の中、俺は逃げるように台所へと移動し、リヨウの食後の珈琲と共に虹夏用の紅茶の準備を始めた。

居間では、二人が会話を始める。

内容は学校だったり、『結束バンド』の事だったり。割と本当に世間話をしていて、微妙な空気になる瞬間が存在しない。

そう、空気だけは。

虹夏は、リヨウの顔を見ていない。

視線がリヨウの首辺りに固定されていた。アイツの首に何かあつ……………たよな、すみません。

アレは何かの気の迷いというか、誘われて一緒に行つた古着屋の男性店員とアイツがとても楽しそうに話しているのを見て、いつも俺には余所見するとか散々酷い事してきたくせに、とイライラしてしまい、その事で激しく責めてしまった結果であり生涯を通じて断言できる我が負の遺産。

思い出しただけで恥ずかしくなってきた。

あの時の俺は無我夢中だったのだ。

余計な回想に浸っていたら、薬缶が甲高い声を上げて蒸気を吹く。…………クソ、湯が早く湧いてしまった。

「リヨウ。こんな時も家にお邪魔してるの?」

「私は既に一郎のカノジョって認められてるから出入も自由だし、問題無い」

「面白がってないで誤解は解きなよ、まったく」

「誤解じゃないけど」

「それ、一郎くんが作ったご飯？」

「うん。いつもより豪華」

和気藹々と話しているが、合間に俺の事を挟むのはやめてくれ。

一瞬、心臓が止まりかけた。

何でそんなスパッと話題変えられるんだ。リヨウもあの虹夏に毅然と交際関係を主張できる辺りは珍しくカツコよく見えたが、それ以上に虹夏はアツサリと華麗に受け流す。

一体、何をしたら認めてくれるんだ。

目の前でカップルらしい事をする?……いや、そう言えば随分前もそんな事に挑戦しようとして、そもそもカップルって何するんだとかリヨウと迷走した日があったな。

迷走しまくった果てに、それを喜多さんに目撃されて「私の為だけにわざわざ見せて……ゾクゾクしちゃう」とか俺とリヨウが真つ青になる恐怖の思い出まで刻まれた。

それと同じで今の会話も新手の嫌がらせだろうか。

どちらにしろ、ずっと放置は出来ない。否、させてくれない。

眈を決して、俺は出来上がった紅茶と珈琲を運ぶ。

「はい、どうぞー……」

「ありがとう」

「ずっと待っていた」

「次から自分で淹れろよマジで」

生意気なりヨウの顔面に珈琲をブチ込みたくなる。

あと、襟を閉じろ！

さつきからチラチラ見せつけるように、襟元を引っ張って扇ぐな。全然暑くないだろ、まだ春の気配も薄い気候だぞ。

ニヤリ、とりヨウが笑った。

イラツとした……色んな意味で。

コイツ、後でベランダで物干し竿の終端に吊るしてやろう。夜になっても放置して、明日の朝まで回収なんてしてやらない。今までお仕置きしなかった方が可怪しいのだから、俺は間違っていない。

沸々と俺が怒りを煮え滾らせる横で、虹夏が紅茶を飲む。

視線がちらりとまたりヨウの首を一瞥した。

それから、マフラーも取り払って晒された自分の首を撫で始める。痒いのかとも思っ

たが、皮膚の上を滑る指の動きが明らかにある位置を何度も往復している事に気づいて俺の顔が引き攣る。

「何で私には無いんだろ」

何も聞こえていない事にした。

俺は意味もなく自分用の珈琲に指を突っ込んで己を罰したくなつた。第一印象の明るさも見る影のない寂しげな笑顔を虹夏にさせてしまっている。

実際、その憂いの陰りを取り払う方法はあるにはあるが、実行したらいいよ本物のクソ野郎になる。

聞こえなかった。

うん、聞こえなかった。

「あ、それ」

「ん？」

虹夏が俺を見つめていた。

だが、目は合わない。

俺の首元辺りを見ている。その視線に従って、俺も自分の何かついているのかと手で

探った時にはととした。

あ、コレは、リヨウが付けたヤツ……。

俺は立ち上がって、自室へと向かう。

颯爽とタートルネックの服に着替え、何事もなかった風を装いながら、再び居間へと速やかに帰還した。

何もなかった。

うん、何もなかった。

戻ると、リヨウが眠そうに瞼を擦っていた。

「一郎、寝てもいい?」

「ええ……満腹になったら眠くなるって、ホントにオマエ自由だな……」

「ベッド貰うね」

「借りるって言え。誰がやるか」

「もう私と一郎で共有してるも同然だし」

「俺、ここ最近自分のベッドに一人で寝れた事そう無いんだよな。何でかな?」

俺が尋ねるが、欠伸しながらリヨウが俺の部屋へと歩いていく。

答える、去年から俺がベッドで自由に寝れてない理由を!

去っていくリヨウを睨むのをやめ、俺は居間に向き直る。

虹夏は静かに紅茶を飲んでいた。

リヨウも寝てしまった、マズいぞ。

玄関扉で安易にまだ希望はあると考えていたが、頼みの綱のリヨウは自分勝手に寝てしまい、家には両親がいるにしても、この家を出ようと虹夏が強引に押し進めてしまえば完全に無策となってしまう。

大体、どうしてこんな急に。

いつかしようとして死刑宣告は受けていたが、具体的な日取りは伝えていなかった。明確にしたなら、俺がその日だけ煙に巻こうと考えると読んで、ならば何も開示せず急襲する事を選んだのだろうか。

つくづく信用が無いなどと思う。

いや、まあ、虹夏がこんな状態になる前から誤解とか重ねてしまったから言い訳の余地は無いんだけれども。

「ご両親が帰ってたんだね……場所どうしよう？」

こてんと小首を傾げて虹夏が思索している。

可愛い仕草だが、言っている事には一片も愛らしさを感じない。

このままでは流される。

本能が阻止しろと叫んでおり、俺は震える手足でソファーまで移動し、虹夏の隣に腰

を下ろす。

「虹夏。悪いけど、俺恋人がいるから無理、です」

「恋人……誰？」

「リヨウです」

「それは嘘だよ。だって、ずっと前から付き合ってもないって言ってたのにキスしたり家に泊めたりしてたじゃん。一郎くん、すぐ嘘ついて私から逃げようとするから信じられないよ」

「こ、これは本当だって。リヨウも言ってたろ？」

「リヨウは何だかんだで優しいから合わせてくれてるんでしょ」

お、おかしい。

リヨウの方が俺より信用されている！

幼馴染という補正が無駄なほどリヨウのあの性格による被害を誰よりも受けていそうな虹夏が、知悉した上で優しく俺よりも信用できると言っている。

存外シヨックだ……最近受けた言葉の中でダントツかもしれない。

比較対象がリヨウで、そのリヨウに信用で劣るだと……？

悪夢だな、夢だな、ならば覚めろ。

「な、ならそんな嘘つきなんて相手にしなくて良いだろう……」

少し自棄になって、そんな言葉が口をついていた。

はっとして、俺は虹夏の方を見る。

マズい、これでは俺の相手をしている虹夏の方が愚かだと言っているも同義だ。喧嘩を売っていると受け取られても仕方のない失言である。

だが、虹夏は笑顔だった。

この会話の雰囲気似つかわしくない、笑顔だった。

「好きなんだからしようがないよ」

「え……」

「一郎くんが寂しそうにしてるのを見ると一緒にいたくなる。この前も私のご飯を美味しそうに食べるの見てたらもっと作ってあげたくなってきた。寝顔なんて頭撫でたくなる」

さらっとこの前の宿泊で俺の寝顔を見ていた事をカミングアウトされた。

おかしいぞ、俺は虹夏より後に寝たし、別の部屋で就寝した上に自分で起床したのに。いつ見る瞬間があったんだ。

「むしろさ、これだけ私を突き放そうとしてる一郎くんが私を好きになった時、きつともう一郎くんが私を離れたくなくなるくらいに好きになってくれるんじゃないかって思うんだ」

そ、その予感は無意識にあつたが、その発想は無かつた。

「だから、一郎くんがまず逃げられないようにするよ」

「逃げられ、ない？」

「知ってるんだ。一人になりたいなんて言ってるけど、何だかんだで誰かの世話を焼いちゃう一郎くんだから、私から離れる理由さえ無くなれば後はもう向き直るしかなくなる」

「いや、それでも相手は出来ないんだって！」

「リヨウがいるから？」

「そ、そう」

そう言うと、虹夏が立ち上がって俺の正面に立った。

何事かと少し身を引いて見上げると、そのままぐつと距離を詰めるように俺を跨いでソファで膝立ちになる。

虹夏の瞳に映る俺の顔は、心底怯えている表情をしていた。

「一郎くん、おかしいよ。ぼっちちゃんには将来結婚しようなんて言ってるのに喜多ちゃんに粉かけて、リヨウとは付き合つてさ。今も将来もずっと、誰かがいる。い

つ？いつになつたら私には振り向いてくれるの？」

ぐうの音も出なかった。

喜多さんに粉かけた瞬間は一度も無いが、ひとりに対してはこの前の反応がもしある意味を持つていたとしたら取り返しの付かない事をしている気がする。

どうしよう、もう人生やめた方が良いかな。

いっそ、全員で俺の事を嫌いだと言つて突き放してくれたら何の躊躇いも無く終止符を打てた……とみんなを批難するのはお門違いだよな。

俺が固まっていると、虹夏に抱き締めてきた。

「ねえ、『約束』しよ？」

甘く囁いてくる虹夏から逃げるように顔を背ける。

そして、偶然にも居間の入口の方を向いた事である物が見えてしまった。

壁際に隠れてリヨウが立っていた。

さつき自室に入るのを見た筈なのに、音も立てずに再び戻つて来ていたらしい。虹夏は気づいておらず、俺が意固地になつて逃げていると思つているみたいで耳元に「こっち向いて」と囁いてくる。

リヨウは、黙つて俺たちを見ていた。

この二年間、アイツの無防備な表情を不本意ながら具に見てきた俺だからこそ、いつも表情が乏しいアイツが今どんな顔をしているかが分かる。

悲しそうに、痛みに堪えるように俺を見ていた。

あれは、多分俺に虹夏の誘いを断つて自分の下に戻つて来て欲しい……ということだろうか。いつも強引なアイツにしては、どうしてか俺に判断を委ねている。

単に虹夏だから強く出れないというのもある……？

どちらにせよ、あんな顔させてカレシを名乗るのは極刑物だ。

俺は意を決し、虹夏の肩を掴んで引き離す。

「ごめん!!」

覚悟と勢いのあまり、声を張り上げてしまった。

いや、親が起きるとか諸々の事で怖気づいては駄目だ。形振り構わず立ち向かうんだ。

驚いている虹夏に対し、俺は顔を正面に戻した。

「ずっと返事が言えてなかったけど、改めて言う。

俺は、虹夏の気持ちには応えられません。リヨウと付き合ってるし、これからもそのつもりだから。——本当にごめんなさい」

何度も喉が攣って呼吸も止まりそうだったが、言い切った。

反応が怖くて目を瞑りたくなるのも堪え、虹夏の顔から目を逸らさずに言った。

重い沈黙で居間の壁時計の音だけが聴こえる。

殺されても仕方ないという思いで、虹夏のリアクションを待った。

「そっか」

すると、思っていたどの反応よりもあっさりした言葉だった。

虹夏は俺の上から退いて苦笑する。

「返事は要らないって言ったのに」

「ひっ」

「でも、ありがと。真剣に考えて、答えてくれて」

「え……？」

「これで流されて『約束』が守られても私は良かったけど、リヨウにあんな顔されたらね」

虹夏の言葉に、さつとアイツが素早く隠れた。

どうやら気付かれていたらしい。

「勿論許してないけどね、振り回したこと」

「……ごめん。ありがと」

「一郎くんの為じゃなくてリヨウの為だからね？」

「あ、ハイ」

やはり、リヨウの方が俺より信頼出来るし大切なようだ。

その割に肉体関係に発展させて絡め取ろうとした策を思い至った辺りは少し疑わしくもなるが、結果がコレならもう考える必要は無いし考えてはならない。

何はともあれ、虹夏が納得してくれた。

勇気を出して逃げずに立ち向かったからだ。

こういう事だよな、ひとり！……あ、ひとりの事についてもまだ懸念があるんだった……。

「一郎くん、ありがとね」

久し振りに見る、綺麗まつさらな虹夏の笑顔だった。

まだ色々あるけど……取り敢えず、この笑顔を取り戻せたことを今は喜ぼう。

俺はそう思つて笑つていた——あんな事になるとも知らずに。

私——伊地知虹夏は、いつもよりスッキリした気持ちで学校にいた。

周囲のみんなは、春休みなのに特別清掃という仕事で呼び出された事への不満で顔が暗いし、ボランティアという名で先生に半ば指名されて担当する事になった一郎くんとリヨウなんかは目が死んでいる。

でも、私は気にしない。

以前なら、バンド関係以外で二人に会う度に少しだけモヤモヤした気分になっていたけど、今はそんな事も無い。

×

×

×

×

ちやんと気持ちに一区切り付いたから。爽やかな失恋って本当にあるんだなあ。

未だに一郎くんとリヨウ見ると羨ましいって思う事はあるけど、今までみたいな気分にはならない。

思えば、何だか随分暴走していた気がする。

ようやく客観的に自分を見れて、あの日は家で『箱』を机の上に置いてベッドでミノムシになってた。恋って人を盲目にするんだなあ。

先生の説明が終わり、各々が担当の配置へと向かい始める。

私はリヨウと一郎くんの所へ向かった。

「やつほ。リヨウと一郎くんは何処担当？」

「ああ。コイツと一緒に音楽準備室になってさ。先生が言うには、リヨウは楽器に造詣が深いから扱的にも適任だろうとかで、俺はサボらないようにいつも通り面倒を見る……って」

「もはや運命。生涯一郎は私に飯を食わせると天啓が示された」

「この通り、特別清掃が嫌すぎて頭がイカれてる」

二人ともこんな調子か……。

私は他の男女十人のグループに混じって体育館の清掃だ。

意外と大仕事になりそうで、昼休憩の時ぐらいいしか合流できなさそう。

「お昼は一緒に食べようね！」

「うん。一郎と虹夏の弁当、楽しみにしてる」

「ナチュラルに集るな」

苦笑しつつ、二人と手を振って別れた。

グループに合流する直前、肩越しに後ろを振り返った。

二人に会話は無さそうだが、リヨウはちよいちよいと自然に垂れている一郎くんの手を握るか握らないか動いては止まってを繰り返して、葛藤しているのが見て分かった。

思わず笑いがこぼれてしまう。

リヨウは何だかんだで一郎くん大好きだなあ。

実はあの日、私が『箱』を持って来たのはバイト後にリヨウから言ってきたからだ。

『ちゃんと一郎の話聞いて欲しい』

両親は帰ってきて食事をした後に疲れて寝るから、その後でなら一郎くんも疲弊して変に誤魔化したり逃げる体力も無くして真剣に答えるしかなくなってるって。

だから、私はあの日に前田家を訪ねた。

一郎くんが真剣に対応してくれて嬉しくて、でもそれ以上に言われた通りの状況に対してリヨウは彼を知り尽くしてるんだ、って悔しさと負けたなっただけだった。

だから、恋人になるのは諦めた。

こ、これでバンドに打ち込めるっ！……って、空元氣気味だけだと思ってたより辛くない。

一郎くんは去年のクリスマスとか聞いた話では人間嫌いな部分もあるし、そんな人が恋人なんて作ったくらいだから見守ってあげるべきだよな。

一郎くんにも非はあるんだけど、変に掻き回しちゃった……。

そりゃ、まだ好きかと言われれば好きだ。

そんな簡単に割り切れるものじゃない、だって理由が一目惚れだったから。性格が良いとか見た目じゃなくて、何か相性的に一目でパツとこの人だっただけだった。

そんな人をスパツと諦めるには、まだ私も人生経験が足りてない。きつと、これからも何かの拍子に暴走する事もある。

でも、二人の間に割り込む事は遠慮しよう。

「伊地知さん、もう昼休憩だよ」

「あ、もうそんな時間？」

グループの男の子に言われて、私は時計を見る。

考えながらやっていると、あつという間に時間は過ぎていくんだなあ。手が止まらずに作業し続けられたのは、バイトで培われた経験かもしれぬ。……恋愛もこれくらいスムーズだったら、あんな事にならなかつたのかも。

思い出したら顔が熱くなってきた。

グループの子たちに誘われたけど、私は断りながら体育館端に置いたりユックから弁当だけ取って、急いで二人のいる音楽準備室に向かう。

一郎くんがいるから大丈夫だと思ふけど、ちゃんと掃除してるかな。

何だかんだで振り回されて、終わってないってのも有り得る。

予想通りでリョウがだらしなかつたら叱ってやろう。

……無いとは思ふけど、流石にイチヤイチヤしてたらキレそう。

自分を客観視できるようなったとはいえ、まだ好きだし、多分そういうの見たら嫉妬でまた変な気分になって暴走しそう。

予感というか、確信だ。

まあ、そうなつたら——遠慮しないでおこう。

でも、特別清掃だから流石にサボってたりしないよね。

私は音楽準備室の前に立って、扉を開けた。

「おーい、お昼だぞー！一緒に食べよー！」

少し驚かそうと思つて声を張つたら、棚の向こう側からガタガタと凄く忙しない音が聞こえた。

ふつつつつつ、どうやら驚いちゃつたみたいだね！

私はそのリアクションに満足感を噛み締めていると、棚の影からリヨウが現れ………た………た………

「ふーっ、ふーっ………に、虹夏。もうお昼だっけ」

何故かリヨウは棚に縋るように立っていた。

膝は震えていて、顔も赤らんでいる。

呼吸も全力疾走の後みたいで変だし、暖房が効いているとはいえ、襟をかなり開いていた。………というか、急いでやつたみたいにボタンの掛け違いが酷い。

何か、色っぽく潤んだ瞳で私を見ていた。

まさか……冗談、だよね。

自省した筈なのに、胸裏で激しく何かが燃え盛る。

私は笑顔を作りつつ、拳を強く握りしめて堪えた。

「……掃除、大変だったんだ？」

「ま、まあ……ね」

私は部屋を見渡した。

四時間掃除をした……にしては、あちこちに埃が見えている。

さつとりヨウが視線を逸らした。

「掃除進んでないね」

「か、かもね」

「でも、リヨウを見るにかなり大変なんですよ。体育館は順調だからさ、先生や皆に頼ん

で午後からは私もそこ手伝おうか？」

「だ、大丈夫。私と一郎でヨユー」

リヨウは必死に誤魔化している。

何を誤魔化せてると思ってるんだ、この山田は。

私は状況から推察できる事実を理解したくないと思いつつリヨウの方へ、否、まだ姿を見せない一郎くんがいるであろう柵の後ろへと足を運ぶ。

「一郎くーん？」

「お、おお、虹夏か。集中していて忘れてた、もう昼だっけか」

正解。

一郎くんは、やっぱり棚の後ろにいた。

落ちて散らばったファイルを屈んで拾い集めている……風を装って、何だか汗だくだし彼のシャツも乱れている。

ああ——うん、大体読めた。

きっと、最初は真面目にやろうと一郎くんがあれこれ頑張るけど、面白がつてリョウがちよっかいをかけて、気付いたら途中から清掃じゃない事が始まったんだ。

私は頑張ってたのに。

私は真面目に働いてたのに。

どうしてこんな、こんな不真面目な連中に遠慮なんて馬鹿な事考えてたんだろ。

「一郎くん、あのね」

「は、はいー」

一郎くんがその場で正座する。

多分、私が怒ってるの察したな。

じゃあ、もう分かるよね？

「仕事サボってイチャつくのはどうかと思うよ」

「……いい、いや、イチャつくとかそんな事は」

「ふーん、言い訳するんだ？じゃあ、そんな人に温情は要らないよね」

「……？」

「この前さ、諦めるって話したでしょ？」

「あ、はい」

「でも、私に告白された後でも付き合っていないリヨウとあんな事やこんな事は出来たんだし、何かそもそも一郎くん相手にアプローチとかそんなまどろっこしい事する方がおかしいんだよね。——だから本当の恋人は諦める事にした」

「……？」

「一郎くんが真剣にならないなら、私も真剣に向き合う必要無い。勝手にやるね」

私は屈んで、一郎くと目線の高さを合わせる。

震えて目を逸らす一郎くんに、私は今度こそ自然な笑顔で正対していた。

そっか、そっか。

こういう時は、やっぱり真剣に向き合ってくれないんだね。

「一郎くん。バンドマンってロックに生きるべきだよね」

「え、あ、うん、そうだな」

「じゃあ」

もう、一切許してやらない。

「私も、一郎くんの恋人になるから。将来も、一郎くんのお嫁さんを名乗るし。嘘でも貫けば真実、ってね。——大丈夫だよ、恋人やお嫁さんが何人いたって………バンドマンだし、ロックに生きようね！」

私がそう告げると、一郎くんは啞然としていた。

俺、バンドマンじゃない………なんて声が聞こえたけど知らない。

うん、幸せになろうね一郎くん！

気味が悪いと思ったら

真面目に働く三月末。

俺のバイト先は、新季節を前に引越してきたので美味しい店を開拓する目的で足を運ぶ人の来店が多くなっており、特に夕方辺りの多忙さは凄まじい。

下北沢には夢を見て集まる人間が多いそうなの。

だからなのか、店内の空気も景色も濃い。

具体的に言うとなら、風貌がアーティストっぽい方々が多く、店内はカラフルな上に騒々しい会話の中で入り乱れる専門用語たちの所為で立ってるだけなのに五感が情報過多でショートしそうになる。店内で漫画を描き始める人間もいるが、配膳し難いから勘弁して。

そんな激務を終え、俺は裏の更衣室で着替える。

「ふーっ、軽っ」

もう制服のエプロンそのものが鉄だったかのように外した途端、肩がとても軽くなつたと錯覚した。

やつと、バイトから解放された……まあ、帰ったらまた人の飯を作る作業があるんだけどな。最近は春休みだからと許可無く虹夏も来るし。

いや、たしかに虹夏も厄介だ。

突然、俺の恋人を自称し始めて最初は冗談かと思つたが、この前なんて夕食の材料を買い込みにスーパーへ言つたらバツタリ遭遇し、流れで一緒に買物をしたのだ。

そのまま二人で道が別れるまで並んで歩いていたところを中学の時の同級生に見咎められて。

『あれ、伊地知さんと前田?』

『ん。ああ、久し振り』

『何だよ。二人で仲良く買い物かよ、羨ましい』

『羨ましいって』

あはは、と虹夏が照れ臭そうに笑う。

俺の隣にいるだけなのに巻き込んでしまつて申し訳ない気持ちになつた。

『クソ、オマエに可愛いカノジョが出来るなんて……! オレも頑張れば、まだ望みはあるのか!』

『違うって』

『はあ? どう見てもこれから二人で飯なんだろう! 家で!』

『偶然一緒になっただけだ。な、虹夏?』

誤解だと弁明し、俺は隣の虹夏に同意を求めた。

すると、虹夏が顔を赤らめた。

最近乙女な表情をされると何を言い出すか大体予測できる。予測出来たところで止められた例は一度だつて無いんだけどな。

『夜は長いだろって……言つたくせに』

言つてない。

君は何処の世界の前田一郎と会話したんだ。

悪いが、俺はそんなタイムトラベルも異世界トリップする映画みたいな事はした覚えが無い。大体、何だその恥ずかしい台詞……実際に言つたら、途中で自ら股間をラバーポールに突っ込んで自死するくらい気持ち悪い。

いよいよ虹夏の中の俺が分からない。

この前の一件以来、また変異している。

俺への認識が理解の外に出ていたのは以前からだったが、今では完全に次元の違う領域に行ってしまったような異質さだ。

何にせよ、そんな事を俺が言うワケが無い。

案の定だが同級生の男子たちもぼかんとしていた。

『そ、そだな。まだ夜は長いもんな』

『冬過ぎたばかりだしな』

じゃあ、頑張れよと言いい残して同級生は去っていく。

一瞬だけ見えた虚ろな目は、俺がフォローしたところで正常な光ではなく、憤怒の炎を灯すだけなのでそっとしておく事にした。

何でこんな風になってしまうんだよ。

しかも、その後は一旦家に帰ったと思ったら、星歌さん用の夕食だけ作って本当に俺の家に来てしまった。数分後に『虹夏を、虹夏を返せ……!』という呪詛が電話で来た時はいよいよ死にたくなかった。

星歌さんにも嫌われたくなかった……! !

頼れる大人の一人だったのに。

今じゃ、ロクでナシって評価じゃん。

「うわっ。……リョウかよ、驚かせやがって」

恐怖で独り震えていたらスマホが震動し、驚いて画面を見ればリヨウからのロインだった。

内容は、『虹夏以外にも女っているの?』だ。

えっと……何かの暗号か?

実は日本語表記に見えているだけで、本当は形が似ているヘブライ語だったり。そんな意味のない深読みをしつつ、まあ相手が山田リヨウだから深く考えるだけ無駄かと言葉の意味は額面通りに受け取る事にした。

他に女、ね。

取り敢えず『オマエ以外いません』と。

俺は送信してスマホをポケットにしまう。

バカにしやがって。

複数人と同時に付き合えたなら、そもそも中学生はバラ色の生活をしてただろう。してたか? いや、してないな、他人に興味が無かっただろうし。

あの頃が懐かしい。

常に薄暗い日常という感じだが、今と比べると平穏な気がする。

……いつそ人の世を捨てようか。

「先輩、顔色悪いですよ?」

「ん、ああ、ごめんね山さん」

着替え終えて更衣室を出ると、同じくバイトから上がった後輩の女子の山之内優佳——通称山さんに話しかけられた。

クラスで絶対に男子の視線を恣にしていそうなルックスを至近距離で見ても動じずにいられるのは、多分リヨウの影響だろう……実に不本意。

アイツ、顔だけは良いもんな。

性格はクズと定評があるのが玉に瑕。

山さんは新人研修で俺が面倒見たのもあって、他にいる後輩たちに比べて特に仲良くなった。一人暮らしで夜遅くに上がる彼女を、あの俺が家まで何度か送った事もあるくらいに。

「別に何も無いよ。心配かけてごめん」

「本当ですか……?」

「まあ、ちよつと人間関係に疲れて山で暮らそうか悩んではいるけどさ」

「それなら、私の家に来ます?」

「え、」

後輩の厚意が不意打ちで、思わず変な声が出た。

俺の失礼な反応に、山さんが上目遣いで見てくる。

「イヤ、ですか？」

「嫌ではないけど普通に駄目でしょ」

「私は良いですよ……前も話した通り、一人暮らししてるので」

「……………」

尚更駄目なのは。

それに、俺の家には今両親がいる。

二人に『知り合いの女の子の家にいるよ』とか意味不明な言い訳が通じるワケが無い。恋人もいる手前、無闇に他の女子の家に宿泊とか知られた日には何をされるか分からない。後藤家は除いて、後藤家は例外、後藤家だけは許して。

取り敢えず、山さんの家は駄目だ。

そんなワケで俺は丁重に断る事にした。

「有り難いけど気持ちだけで」

「泊まって、くれないんですか？」

「何回か死ぬ目に遭うと思うから遠慮する」

具体的に言うとう、虹夏と星歌さんとリヨウ。

最低でも三回は臨死体験する羽目になる。

山さんの厚意が誰かの殺意を招くというのなら是が非でも断るのが賢明な判断と言

える。

俺は何故か未だ粘り強く誘ってくる山さんに同じ返答をしつつ、ホールの方へ出れば待っていたと言わんばかりに立っていた店長が俺を見て目を細めた。……何??

「店先で待ってるよ、女の子」

「女……?」

後ろから山さんの低い声が聞こえる。

さつきより何トーンも違いがあるのが怖い。

店先で俺を待つ女の子……誰だ??

この状況は既視感がある、もしやと思うが虹夏だろうか。それとも勤務先を把握している喜多さん。或いは何かあつて俺を頼りに来たひとり?

是非とも最後者で頼む。

俺は早足で店を出ると、扉の隣の壁に少女が凭れていた。

退屈そうにスマホを弄っている。

ヘッドホンで音楽を聴くすらしとしたスタイルといい、やはり黙っていれば美人な横顔は様になっていた。

クソ、一瞬見惚れた自分を呪って下水に流したい。

意外な人物で驚きはしたが、平静を装って俺はヘッドホンに手を伸ばす。

「リヨウ」

「ん、やっと来た」

ヘッドホンを外された山田リヨウは嫌がる素振りも無く、俺を見るなり薄く微笑む。それから俺の後ろを一瞥した。

ん、何かあったっけ。

振り返ると、ひくひくと山さんが弧を描く口の端を痙攣させていた。そんな顔してるの初めて見たんだけど。

「何でここに？」

「時間合うから、一緒に帰ろうと思って」

「『STARRY』のシフト無いって言ってなかったか？」

「路上ライブしたから」

リヨウの言葉に総毛立つ。

け、『結束バンド』の路上ライブだと——!?

いつの間にそんな素敵なイベントがあったなんて。以前もひとりがきくりさんで行った路上ライブはサポートに専念していた所為で観れなかった屈辱もあったから殊更に悔しい。

そういうの告知してくれよ。

でも、『結束バンド』のトゥイッターってライブ告知とかじゃなくて、喜多さんの美容の話ばかりなんだよな……。

それにしても、今日のコイツ変だな。

リヨウのまとう空気が柔らかい。

路上ライブの反応がかなりの好感触だったか？

不気味なほど上機嫌な理由を思索しつつ、次こそは逃せないので路上ライブの予定を聞こうと思った。

「次いつ？」

「一郎は忙しいでしょ」

「暇なら行くつつの」

「……ふふ」

「え、怖……何が可笑しいんだよ？」

リヨウはマフラーに口元を隠して笑う。

「そんなに私に会いたいか」

不敵な言葉に、俺は嘆息する。

別に山田リヨウではなく、山田リヨウの音楽を目当てに行くのだから調子に乗らないで欲しい。

後輩の前で余計な事言いやがって。

俺は取り上げたヘッドホンを自分に付けた。これでもう何も聞こえません。

リヨウはそれを見て益々嬉しそうになると、徐ろに俺のネクタイを引つ掴んだ。思いの外強い力——ベースで鍛えたのか？——で下げられた俺の頭を包むように抱き締めてくる。

……何がしたいの？

ここ、家じゃなくて店前なんだが。

リヨウの胸で何も見えないし、ホールドしている腕でヘッドホンが押さえられて音も聴こえにくい。

ただ、微かにリヨウが何か話しているのが分かる。

「……何して……か！」

「……の力……か！」

「……は……ない……で」

「……それは昔で今は違うよ。……ごめんね」

駄目だ、聞き取れない。

あと、地味に耳に食い込んで痛い。

やがてリヨウが頭を解放してくれたので、俺はヘッドホンを取って彼女を睨んだ。

「一郎。今日は私の家で食べよ」

「は？え、えー……？」

「そのまま泊まっても良いし」

「いや……着替えとかどうするんだよ」

「お父さんの借りればいい。この前の豚と大根のやつ食べたい」

「豚バラと大根のニンニク味噌炒めな」

「そうそれ」

「んー……まあ、良いけど」

前田家よりは、気軽なのかな。

俺はそう思つて承諾する。

また後ろから低い声で「泊まり……」と聞こえた。やべ、そういえば山さんを忘れてた。

「山さん。今日はお疲れ様」

「お、お疲れ……様……でした……」

「え、急にどうした？大丈夫か？」

「何でも、アリマセン」

「何か急に体調悪そうだけど、不安なら家まで送——」

「結構です!!この三股男——!!」

「他は誰と誰!？」

三股男と吐き捨てて山さんが走り去っていく。

もしかして、リヨウの他にまさか喜多さんと虹夏の事を指して言ってるのか!?

置き去りにされた俺が遠く背中に固まっていると袖を引かれた。

見れば、満足げなりヨウ。

「何だその顔は」

「別に。ただ、『山さん』とは甘いな」

「は?」

「姓はもう一文字無いと同じ土俵にすら立てない」

「何で名字で競ってんだよ。あとあの人、山之内さん」

「なに……?」

一文字敗けただと、とアホな事を言っているの、呆れた俺はぶつぶつ呟くりヨウの言葉を無視し、その手を握って山田家へと向かった。

それはそうと、やはりコイツが上機嫌な理由が一向に分からない。

もしかして、何か企んでるのか？

意外と色んな策を頭の中に巡らせて、これから俺に何か仕掛けるつもりかもしれない。
い。

ちら、と隣のリヨウを盗み見る。

「まあ、良いか。一郎は私のだし」

頭空っぽだな、コレは。

やはり、深読みするだけ徒労に終える。

「今日は機嫌良いけど、どうした？」

「ん、別に」

「絶対嘘だろ。路上ライブが上手くいったか」

「意外に盛り上がったし、私力作の投げ銭箱にお金が入っていくのは病み付きの快楽になる」

言い方はアレだが路上ライブは成功なのか。

投げ銭箱……夜、俺の部屋でせつせと作業していたヤツで間違いない。バイトに行く前に完成品を一瞬見たが、本当に力作と呼んでいいのかと疑問を呈する清々しい低クオ

リテイだった。

まあ、本人の感性だし、兎や角言う言うのはやめよう。

バイト先の客と同じだ。

温かく見守ろう。

「その金は皆で山分け？」

「バンド経費として虹夏に没収された。折角、買ったかった楽器……じゃなくて、音楽の為に使おうと思ってたのに」

「……………」

「私なら正しく使える」

「オマエの手に渡っても碌な事にならないだろ」

「心外なんだけど。私はお金に誠実」

「えーと、今ので何回目の嘘だっけ？」

呼吸の数だけ嘘ついてる気がする。

もういつそ、金銭も無く俗世から離れた場所で生活させたら良いんじゃないか。コイツは一つの事へ集中力が傾けば、後は勝手に何かを極めてくれる。……本当に仙人になつてそうだが。

そろそろ新学期だ。

俺たちは、いよいよそれぞれの進路に向けて明確な一步を踏み出す年になる。

受験戦争で忙しくなり、次の年には新しい事で忙しくなり……こうして上機嫌なコイツを間近で見る事も無くなって、いつか貴重だと思っ日が出るのか？

俺は再びリヨウの方を盗み見る。

あれ……？

リヨウはスマホを見ながら歩いていた。——通称『ながらスマホ』の危険な例の一つそのもの。

危ないから前を見ろ、と言おうと思ってつい画面が見えてしまった。

プライバシーの欠片も無いが、見えてしまったものは仕方がない。

そこで俺が偶然目にしたのは、俺とのロインのトーク欄だった。

一文……『オマエ以外いません』を指でなぞっている。

「私以外……ね」

また上機嫌に笑うリヨウからスマホを取り上げ、後は黙って山田家までの道を急いだ。

おまけ「闇の引力」

結束バンドMV撮影の後日、下北沢の町で遭遇した。

「あ、アンタは……！」

「げっ」

買い物物の帰りに、小柄な女性と出会す。

相変わらず自分を幼く見せんとする努力に余念のない風采の彼女は、恐らく人違いでなければぼいずん♡やみとか言う毒々しいペンネームの取材記者だった気がする。

俺はため息をついて、彼女に向き直った。

「こんにちは。挨拶したのもうこれ以上は勘弁して下さい」

「開口一番に失礼なガキね」

「14歳の設定捨てた台詞ですね」

「もう知ってるヤツ相手に今さら猫被ってどうすんの」

「プロはそんな事言わない」

「コイツ、ムカつく……!」

わなわなと拳を震わせる彼女に背を向けて歩き始めた。

「ねえ、『結束バンド』は最近どうなの?」

「……知りたいですか?」

「そりゃ勿論」

「何で直接本人たちに尋ねないんですか?」

「それは……前の事でちよつと気まずいし……」

「14歳を名乗る度胸は何処行つたんですか」

「いい加減殴るぞ、マジで!」

「分かりましたから。もう闇とか毒とかここで解放しないで下さいね」

「その前にこの拳骨でも食らつとけ!!」

当たらなかつた。

そういう事だな、神よ

「んあ？——誰だよ」

四月——つまりは新学期だ。

アラーム時計をしつかり設定して起きようとしたのだが、俺を叩き起こしたのは時計ではなく、スマホの着信音だった。

壁掛け時計を見れば、まだ一分は寝れる。

一分という誤差とも言えない起床に億劫になりながら寝返りを打って、枕元のスマホの画面を見た。デカデカと『虹夏』と表示されたそれにまた眠りたくなる。

早朝から電話するほど重要な事あったか。

隣のリョウが呻き声を上げ、起こすのは可哀想だったので直ぐに『応答ボタン』を押しながら部屋を出る。

「も、しもっ」

『おはよう、一郎くん!』

「どうした?何かあった?」

『うん。一郎くんがいつも起きる時間を教えてくれたから、それで電話しようかなって』
「そうか。……何で?」

寝ぼけ眼を擦りつつ、ペランダへ出た。

たしかに、起床時間は教えたけどさ。

今の話からじゃ、電話した目的は未だ不明である。

『私が一郎くんを起こしたいな、って』

「俺を?」

『うん。ほとんどリヨウが独占してるなら、せめて朝の一言目は私が良いなーって思ってたんだ。ごめんね?』

「あー……うん、そっか」

それで補える優越感とは……。

実行するなら、せめて昨日くらいに予告してくれ。

今段々と脳が覚醒してきたところで、虹夏からの電話というのがかなりビックリな事であると理解できつつあった。

しかし、朝の一言目の独占……。

正直俺には何の価値があるのか微塵も分からないが、虹夏の声が嬉しそうなので良しとしておく。これをやめてくれと言ったら過激化しそうなので黙っておこう。

『明日からはアラームかけないでねっ』

「え……。まさか毎日？」

『うん、毎朝。スケジュール教えてくれたら登校日以外もやるよ！』

「……いや虹夏が疲れるだろ、コレ」

『嫌なの？』

「そんな事は無い」

急に声が冷たくなった。

朝から怖いから、本当にやめてくれ。

一気に目が覚めた。

最近の虹夏は、一体何が起動スイッチになっただけか分からない爆弾な部分もあるの
で、叶えられる限りの要望を叶えないと後にどんな危険行動に出るか分かったものでは
ない。

……いつから、こんな猛獣みたいな扱いしなくちゃいけなくなっただ。

俺の初恋、どうなってるんだ。

「じ、じゃあ登校日だけで」

『うん。後でスケジュール教えてね！おはよう！』

「ああ、おう。おはよう……それじゃ」

通話を切つて欄干に突つ伏す。

スケジュールなんて教えたなら、いつならば家にいると把握されて遭遇率百パーセントになりかねないから勘弁願いたい。

最低限、両親とは関わらせたくない。

理解してくれそうな郁人さんならば兎も角、俺の日常をほぼリヨウしか情報源のない彼らが最近俺の恋人を自称している虹夏の誤情報を叩き込まれても鵜呑みにしそうで恐ろしい。

スケジュール情報だけは死守だな。

俺はベランダから居間へ戻ろうと振り返つて、窓越しにこちらを見るリヨウと目が合う。

いつからそこに……てか鍵閉めるなアホ。

俺が窓をコツコツとノックするが、無視された。

代わりにスマホにロインで連絡してくる。窓一枚隔てただけの至近距離で、何故ロインでしか会話してくれないのだろうか。

呆れながらアプリを開くと。

『今の誰?』

『わざわざ離れて通話するくらいだから、知られたくない相手なんだ』

『白状するがいい、裏切り者よ』

腹立つなあ。

苛立ちながらも虹夏だと正直に伝える。

要件も話すべきか考え、登校日は毎朝アラーム時計替わりに虹夏コールが発動すると付け加えれば、リヨウが眉を顰めた。

リヨウと虹夏は大の仲良し。

虹夏の事なら仕方無しと納得する筈だ。

『分かった』

『最近は私が一緒に寝てるから起こさないで欲しい』

『つて虹夏に伝えとく』

ちよつと待てオイ。

慌てる俺の前で、涼しい顔のリヨウがスマホ画面に指を滑らせている。動き方からして確実にキーボード操作……虹夏に連絡していやがる。

俺的には有り難い提案だが、内容が駄目だ。

リヨウが隣で寝ているなんてプライベートな……というか家に帰って欲しいのに勝

手に寝泊まりし、あまつさえ俺のベッドに無断で入るリヨウこそ先に断罪されるべきなのだが。

そんな俺の不満も届かず、手元のスマホが震える。
えと……虹夏からの着信だ。

応答したくない、とリヨウに助けを求めろ。

だが、いつの間にか窓の前からアイツは消えていた。
やるだけやって逃げやがった。

よし、今日は朝食が出ると思うなよ貴様。

「もしもし」

『じゃあ、リヨウがいない日は教えてねっ』

「あ、はい……」

『改めて、おはよう！それじゃ』

ぶつりと切られる。

声は明るかったけど、きつと怒ってる。

なぜ高校三年生のスタート日の朝から、こんな心労を抱え込まなくてはならないんだ。こんな事なら、いつそ毎日リヨウが居る事にして……それも危険か？

もういいや……飯を作ろう。

両親も出勤があるらしいし。

取り敢えず、俺はリョウに電話をかける。

「もしもし」

『何?』

「窓、開けろ」

『そんな窓は君なら破れる』

「そうか、なら窓の次は貴様だ」

もう何も食えない体にしてやる。

そんな脅し文句が効いたのか、いや効いてないだろうけどリョウが眠そうな顔で戻って来て鍵を開けた。

俺が肩を回しながら、さてコイツにどんな制裁を与えようかと愉快に思案していると、リョウが欠伸をしながらスマホを弄り始める。

「二時間は寝れる……」

「遅刻スレスレで行こうとすんな」

「眠い……」

「今日は午前中だけだし、帰ってからにしろ。……と、早く飯作らないと」

俺が室内に入ると、リョウはソファアの上に座った。

キッチンへと移動し、バイトがある俺と両親の分の弁当作りへと取り掛かる。リヨウは午後の予定は無いらしい。

クソ、俺も休みたい。

いや、春休みを満喫したんだからその分働かないとな。念願のキャンプに行けたし、しかも後藤家から年明け以来ずっと遊べなかつたからとふたりを預けられ、一緒に一晩楽しめたのだ。

後藤家に帰す時なんか、珍しく泣いて「帰らないで」とワガママを言ってくれた時は俺が後藤家の地縛霊になりかけた。

うん、楽しかったマジで。

今度また行こう、ふたりと。

「……………ん？何だよ」

料理中、ふとリヨウと視線が合う。

いつの間にかオープンキッチンのカウンターテーブルに頬杖を突いて、俺の事を観察しているようだった。

オマエの分の弁当は無いぞ？

朝食はまだだし、何なら時間もあるから二度寝もできるのに、リヨウはいつも通りの何を考えてるか分からない表情の薄い顔でこちらを見ている。

「寝ないのか？」

「目、覚めたから」

「高三か……。俺、一応理系進学で授業組んでるから。オマエは虹夏と一緒だし、今年から別々になるからノート見せるとか言っても無駄だぞ」

「それは一郎もでしょ」

「いや誰がオマエに頼むかよ」

「一極集中状態でないとポンのコツであるオマエにノートを写させて貰う日など来るものか。」

「もしかしたら、クラスも違うかもな」

「……そうかな」

「そしたら、面倒見なくて済むから俺としては安心」

しかし、下北沢高校のクラス決めは基本的に成績順を念頭に置き、そこから人間関係、とか優先的な判断基準があるらしい。

成績不振なりヨウとは違い、それなりに頑張っている俺と虹夏が二年で同じ教室になった奇跡などが二度も起きるとは考え難い。

会えないと寂しいとは思わ……。思……。うん、思わないなりに。

清々しいほどリヨウの有無が気にならないと自分の気持を再確認していると、くすり

とリヨウが笑った。

「人見て笑うな」

「良いじゃん、別に」

「良くないんですけど」

俺が睨むが、リヨウは意に介さずじつと見てくる。

「ご飯作る時の一郎の顔、好き」

ベランダに閉め出したから俺はオマエ嫌い。



遅刻寸前を目指そうとするリヨウを引つ張り出しながら家を出て登校する。

まだ眠いと愚痴る声を無視し、下北沢高校——最後の登校の年となる道を歩きながら、俺は昇降口に張り出された紙を見る。俺とリヨウは『3—B』、名簿を確認すれば虹夏も同じだった。

また奇跡が起きている。

その分の不幸を別の所で受けて帳尻を合わせろ……：そういう事でしょうか、神様？
重い足というかりヨウを引き摺って教室に行けば、既に着席していた虹夏が手を振っていたが、リヨウの顔を見るなり固まっていた。

何だ、どうした？

「え——!? またリヨウと同じクラス!? あたし達ずつと同じじゃん! もくやだくくくくく」

「虹夏にここまで嫌がられるとは」

「よろしくね」

リヨウがVサインを手で作る。

コイツ、道中はクラス分けの事もあってナーバスだったのだ。

最悪の可能性である俺と虹夏両名とも別のクラスだった未来を想定し、孤独な高校三年に怯えて震えていたというのに、すっかり調子が戻っている。

「今年も私山田リヨウは、課題を写させてもらったり移動教室で起こしてもらったり寄生させて頂く所存です！」

「堂々と宣言するな！」

「校内では虹夏、校外では俺か……本当に害悪だな」

いよいよ駆除した方が良い気がする。

「もー！今年は絶対リヨウの面倒見ないからね!!」

「リボン直してくれてありがとう」

「はっ!?!」

「虹夏。オマエ、そこまで……」

もう体が反射的にリヨウの世話をするようになってる。

下手をすれば俺よりも重篤な症状だ。

流石は幼馴染、哀れだ。

「制服にアイロンかけてあげたり脱いだ服洗濯機に入れてあげたりもしないからね！」

「いやそれは虹夏が勝手にしてるだけ……というか最近は一郎がそれしてる」

「アイロンでシャツ焼き尽くしてやろうか何度も悩んだわ」

虹夏の役目が俺に継承されてるとか嫌味だな。

「もういいや、一郎くん行こ」

「ああ。と、俺の席は」

「私の隣だよ」

「はっ?……マジか」

黒板の張り紙を見て苦笑する。

席順的は、通路側から男子の五十音順、そして女子の五十音順となっており、俺の隣は丁度良く虹夏となっていた。

運命だな、これは。

その分の不幸を別の所で受けて帳尻を合わせろ……そういう事だな、神よ。

「えへへ、教科書忘れたら見せてね」

「虹夏が忘れる事あるか?」

「……無いかも。いつもリョウの為に自分はしっかりしておかなきゃって思ってるから。忘れ物とか無いか家出る前に二回確認しちゃうし」

「じ、重症だ……」

「一郎くんもでしょ」

俺の確認作業は一回だけだ。

でも、その内増えているかもしれないから他人事だと思つて笑うことができない。

それにしても、今朝の電話では怒つていと思つたのに虹夏の様子は至つて普通だ。リヨウもいたし、開口一番にその事で責められると内心では身構えていたんだが。

それが杞憂だったと胸を撫で下ろしていたら、担任の教師が入室してホームルームが始まる。

少し先生が高校三年生における心構えを説くと、毎年恒例の自己紹介の会が開催された。

席順から有馬くんより自己紹介が始まる。

次々と人が変わつていくが、やはり定番とも言うべきか趣味とか好物の話が多い。

俺の趣味……趣味……。

いや、抱負とか語るべきか。

将来はコレになる為に頑張ります！とか……去年も結局そんなに友だち作れなかったから、自己紹介で良いスタートを切りたいんだよな。将来の夢とか切り出して受験意識する皆を緊張させるような話するのもアウトだろうし。

将来、将来かあ……。

このまま順当に行ったら、恐らくリヨウの世話をしている気がする。

アイツ、絶対に未来でも俺に寄生してるよな。

そして、俺も高校一年の頃に比べたら着実に受け容れられるような感覚と体に作り変えられていつている。山田夫妻にも何か婿扱いされて退路も無くなっただけでいつてるし。

マズイよな……。

一人を養えるくらいは財力は蓄えておかないと。

「次、前田」

「はい」

とうとう俺の番だ。

えーと。

将来、山田、将来、財力……。

「前田一郎です。趣味はバンドのライブを観る事で……恋人を将来も養える良い職に付くために頑張ろうと思います。一年間よろしくおねがいします」

すらすらと語れた。

うん、というかほとんど無意識だった。

俺が着席して、次の人が始ま……らないけど、どうしたんだろうか。振り返ると、後ろの三輪くんが固まっている。

「……あの？」

「あ、ああつ、ごめんな」

慌てて三輪くんが立ち上がって自己紹介を再開した。

何だ、そんな俺の自己紹介が可笑しかったのか？

自分で何を言ったのか正直覚えてないけど。

やがて男子は終わり、次は女子一番目——伊地知虹夏の回である。

「伊地知虹夏です！これから一年間よろしく！『結束バンド』ってバンドやってて、一郎くんも観に来てくれてます！よかったらみんなも観に来てね！」

何故か俺の名前が出た。

まあ、知られても別に問題無いし良いか。

「バンド活動にうつつ抜かすのもいいけど受験頼むぞ。被り物とかしてダイブする色物バンドなんだろう？」

「知られてほしくない情報だけ広まってる！てかそれあたしじゃない！」

虹夏が悔しそうに着席した。

この学校は進学第一だからバンド活動をあまり推奨しないんだよな。去年もそんな感じで、進路相談から戻って来る時はいつも顔を曇らせていた。

音楽で食うのは大変だって言うのは分かる。

きくりさんを見て、それを痛感した。……ん、あの人は単に泥酔状態でライブして機材ブツ壊すから金欠なだけなんだけどな。

でも、『結束バンド』にそんなダメ人間はいないから、いつか『SICK HACK』に比肩するバンドになれば生活に困窮する程にはならないのかな。

いや、待てよ……ダメ人間いるじゃないか。

俺は思わず窓際最後列に座る人間を見た。

「じゃあ最後に山田〜」

「はい」

リヨウが席から立ち上がった。

「山田リヨウです。——将来は前田くんが養ってくれるそうなので今年一年気楽に過ごします」

瞬間、教室から音が消えた。

先生すら笑顔のまま固まっている。

アイツ、何て事を……てか俺は養うなんて一言も言つてねえぞ!!

しばらくして、再起動した先生が咳払いをする。

その音で全員がはつとした。

「お、お前らは山田みたいに力抜かず真剣に進路考えなきや駄目だぞ〜」

先生が冗談を一つ言つて、その他連絡事項を伝達してからホームルームは終了した。

すると、終わった直後に全員が席を立つて二つの席に殺到した。

男子は俺の席に、女子はリョウの席に。

「前田ツ！おま、カノジョいたのかよ!?!」

「しし、しかも山田つて羨ま……羨ましいのか？よくわからんけど妬ましい!」

「友だちはいないとか言つてたけど、女友達は沢山いるんだろ裏切り者め!!」

「あの日、俺たちと交わした『非リア同盟』の誓いを忘れたのか?!」

ちよ、怒涛の勢い過ぎて怖い。

特に最後のは身に覚えがないので訂正しておこう。

みんなと仲良くなりたい気持ちはあつたが、こんな形で注目集めても不服でしかない。

それにしても、俺の方は騒がしいが女子の方では啜り泣く声すら聞こえた。……そうだった、リヨウは女子からも人気が高いんだった。

「付き合ってるってホント？」

「うん」

「いいいいいつから!？」

「去年。……眠い」

「どっちから告白したの——!？」

「一郎。……おやすみ」

リヨウの方も大変そうだ。

俺はため息をついて、如何にして周囲に集まった男子たちを散らそうか悩んでいると、視界の隅で一人だけ大人しく着席している女子を捉えた。

それは——あ、虹夏……。

「あたしの事も養ってくれるんだね♪」

断固拒否します。

乙女にした男

最近は学校で肩身が狭い。

特に物を隠されたり等の実害は無いが、教室に入ると女子からの視線があまりにも冷たかった。

別に親しくない相手とはいえ怖いのだ。

しかも、席替えなんてして隣が女子だったとしてもガン無視される可能性も有り得るほど関係性は最悪と言っても過言ではない。

どうして、そんな事になったのか。

それは俺の与り知らぬ処で出回っている俺の異名の所為である。

その名も——山田リヨウを乙女にした男。

字面のインパクトもさる事ながら、読み返すと綺麗に意味が分からない。

山田はアレでも元々乙女なのだ。

どうせ、何処かの厄介な野次馬が流布したに違いない。年頃だから、こういった話題には男女共通で敏感なのだろう。特に普段から密かに注目度の高かった人間となれば尚更だ。

く、何もかも本を質せば悪意に満ちた山田の自己紹介の所為だ。

あれから俺に振られる話題は山田の事ばかり。

折角知らない人が話しかけてきたので、てつきり新しい友だちが出来るんじゃないかと胸を躍らせた俺に対して彼らは口々に「おめでとう、山田一郎」とか戯言を述べてくる。

おい、誰が何処に婿入するって？

「一郎。お昼食べよ」

諸悪の根源こと山田はいつも通り。

若干周囲の女子からの詮索に辟易しているが、コイツにしては珍しく律儀な質問への応対を見せている。

真面目になる所が違うんだよなあ。

オマエが積極的に情報提供をする効果は遺憾なく発揮され、山田リョウを信奉する女

子勢からの怨嗟の眼差しが俺にびしびしと突き刺さっている。かつて山田が家に入り浸り始めて女子が関係を疑ってきた頃なんか比ではないくらいだ。

今まで交際を隠していた……つもりは無いが、こういう経験が浅いのでどうしたらいいか最善が思いつかない。

でも、これで山田と一緒に飯食つてたら話題を提供する事になるんだろうな。

……無難に熱りが冷めるまで校内は距離を置こう。

「悪い、山田。俺ちよつと用事あるから」

俺は席を立てて教室を出る。

さて、何処で食べようかな。

生憎と教室で堂々と一人飯をするか、お情けで虹夏たちに交せて貰っていた俺が他に一人で昼食を安心して取れる場所など見当もついていない。

ひとりはこういうのやけに詳しいけどさ。

こんな事なら伝授してもらうんだつた……！

そんな風に手頃で静かな食事スペースを探そうと考え、歩を進めていたら服の裾に何か引つ掛かった。

ぐん、と後ろに引つ張られて立ち止まる。

こんな廊下の真ん中で何かに引つかかる事ある？

まだ教室を出て間もないから急いで距離を置きたい俺は慌てて払おうとして、服に引つ掛かった物が人の手である事に気付く。

手の主は……………陽キャ君だった。

「カノジョを置いて何処に？——山田一郎くん」

「悪魔か？」

「新婚からそれだと先が思い遣られるよ」

「悪魔か？」

堂々と周囲にも聞こえる声で言うのはやめろ。

俺が顔を引き攣らせてその場に立ち尽くしていると、話を聞いていたのか教室から虹夏が飛び出してきた。

「そうだよ。あたしを置いて何処行くのさ！」

やめろよPart. 2。

しかもカノジョって君の事ではないだろ。

誤解した周囲がざわざわと俺に怪訝な眼差しを向け始めているではないか。たった二人で地獄を作り出す辺り、本物の悪魔と墮天使なのかもしれない。

泣きたくなりながらも俺は陽キャ君を見る。

「何でここに？」

「早足で教室を出る君を見かけたから」

「何で止めた？」

「逃がしたくないなって」

「悪魔か？」

さては愉しんでいるな、陽キャ君。

俺は齒軋りしながら、諦めて教室に踵を返す。

戻ってきた俺にえへへと嬉しそうに顔を綻ばせる虹夏だが、もう一度言う君じゃないんだよ。

渋谷と室内に戻ると、やはり視線が痛い。

しょうがない、下手に策を弄した今日の己への罰として甘受しよう……と思っていたら、俺の机に腰掛けた山田が蒼白い顔で俺を見ていた。

な、何だそのリアクションは。

「い、一郎。どういう事」

「何がだ」

「に、虹夏と付き合ってるのは冗談だよね？」

「事実無根だ、俺は認めてない」

「じ、じゃあ何で山田って」

「いや……こうした方が恋人感無くて周りを刺激しないで済むかなって……」

ちっ、と何処からか舌打ちが聞こえた。

同時に、目に見えて山田……ではないリヨウの機嫌が悪くなっていく。

それ以上何かを言う事はなく、そっぽを向かれた。

俺の席なので退いて欲しいが、退けと言ったら逆に何が始まるか分からないので俺は近くの椅子を借り、机に寄せて座った。

「リヨウ」

「……」

「リヨウさん」

「何？」

敬称をつけないと駄目なのかよ。

「悪かったから機嫌直してくれ」

「……じゃあ、もう山田って呼ぶのやめて」

「そんなに山田呼び嫌なのかよ」

正直、始まりは両親に恋人と偽装する上で必要な事だからと本物の交際関係になる前から互いに下の名前で呼ぼうと決めたのが切っ掛けだ。

別に恋人になったから、なんて特別感が所以で始まった呼称ではない。

だが、そこが気に食わないらしい。

やはり分からね、リョウの地雷は。

「将来、山田になるから区別つかないじゃん」

ぼそりところぼされた山田の独り言に教室が凍り付く。

ここに来て三連続で地獄を畳み掛けてきた。

慄然とする俺の目の前で、仄かに赤く染まった頬を袖で隠すように頬杖をつくりョウの反応が尚の事教室の空気に多大な悪影響を及ぼしていく。女子の視線が孕む冷たさなんか氷点下にまで落ちきっていた。

いや、元は小賢しくも浅ましい回避を図った俺の愚考が招いた結果だ。

……もういいや。

何か疲れた、受け容れよう。

力が抜けて、俺は黙って弁当箱を取り出す。

ついでに用意していたリョウ用の弁当も本人に渡して昼食を始める事にした。ざわり、また教室に不穏な波紋が起こる。

え、何が……あ、弁当か。

駄目だ、何か自分で爆弾をセットしている気がする。

「おい、あたしを空気にして楽しいかー?」

虹夏の低い声に肩が跳ねた。

何処から出してるんだ、それ。

俺は彼女に謝ろうと振り返って——弁当箱を手渡された。

……………
????

「はい。一郎くんの分ねっ」

一郎くんの分……………!!?

固まる俺に対し、次は女子以外からも殺意の視線が俺へと殺到した。

な、んだと。

どうして俺の分なんて用意してるんだ。

依頼したワケでも無く、況してや食べたいだなんて最近記憶している限りでは言葉にだっけていない。

恐るおそる受け取ると、至近距離からも冷気を感じた。

見たくはないが、一応確認するとリヨウだった。

「二股は認めてないけど」

「俺だつて二股した記憶はない」

「言つたよね。私、一郎のロックは嫌いだつて」

「話を聞いて」

「この前、郁代が首に痕付いてるって照れ臭そうに自慢してたけどアレは何？」

「待て情報の処理が追いつかない」

喜多さんの謎ムーヴは置いておこう。

いや無視できるワケがない。

「それいつの話だよ」

「一昨日」

「喜多さんとここ二週間くらい会ってないんだけど」

「二週間前は会つたんだ？」

「会つたというか、バイト先に現れて」

そこから先は語りたくない。

山之内さんに殺されかけたから。

必死に弁明する俺に対し、面白くなさそうな顔のリヨウは始終黙って話を聞いた後に席から立ち上がった。

何事かと問う前に、肩に手を置かれるやりヨウの額と俺の額が触れ合う。

まるで王子様に壁ドンされる女子みたくなっているが、この状況は何なんだ。

「浮気は駄目。——分かった、一郎？」

え、はい。

普通に言えないのかと思いつながら首を縦に振る。

教室のそこかしこで女子の啜り泣きが聞こえ始めた。

明日から不登校になりそうだな、彼女らも……俺も。

♪

♪

♪

♪

散々だった学校から帰宅し、ソファアーの上に伸びる。

あれから何を思ったのか、「前田くんの方が乙女だったんだね」とか「惚れるのは分かるよ」とか謎の同情が女子勢の中で伝播しており、すっかり俺たちの交際が認められつつある。

結果オーライの筈だが、何かを失った気分だ。

取り敢えず、喜多さんが恐ろしい。

今日はバイトが無くて良かった。

これ以上の疲労を抱えたら、きつとパンクしていた。

俺は取り敢えず着替えようかと立ち上がるが、その途中で机の上に置かれた書き置きを発見する。

手に取って確認すれば、どうやら両親からだった。

内容は——もう海外支店に戻った旨の報告だ。

戻る日取を教えると、自分たちの為に俺が準備したりと苦勞をかけるからと秘密にしていたらしい。

そう、なのか。

突然居なくなっても困る物は困るのだが。

「また今日から一人か」

両親の分は作らなくていいとして、恐らく今日も夜頃に家に来るであろう山田の為に献立を考える。

アイツは最近、千切り大根の煮物といい肉じやがまで白飯にかけて食うのがお気に入りらしいから作ってやるとして、あとは一品メインの肉でも添えてやろう。

アイツが帰る頃に備え、まずは風呂に入った。

それからキッチンへと戻り、作業に取り掛かる。

四月に入ってから路上ライブによる知名度アップに力を入れて取り組んでいる彼女は、きつとまた何処かで演奏しているに違いない。

リヨウも体力を使って十分に疲れて帰るだろうから、大蒜と生姜を有りつたけ擦っておく。

ふ、明日のヤツの口は臭いだろうな。

ちよつとした今日の事への意趣返しとして一人笑いを堪えつつ、料理の手を進めていく。

「それにしても、リヨウ達も大変だな」

未確認ライオットは投票制とか言うが、具体的にソレがいつから始まるのか知らない。

でも、その頃になればリヨウ辺りが催促してくるだろう。客数からも察する通り、『SIDEROS』等に比べても知名度が不足しており、それは票数にも直結する。

最低でも身内で入れられる分だけ入れないと不安だろう。

俺も言われるがままではなく、予め調べて即投票しなくては。

アイツが帰ると連絡のあった八時頃、料理が完成する。

更に盛り付けた鶏もも肉に葱ダレをかけ、肉じゃがと炊いた白飯を碗にセットし、準

備完了だった。申し訳程度にキャベツの味噌汁を添えたが、鶏も肉か肉じゃが……
今日は白飯と食いたい物がどちらかで悩むリヨウにとつては眼中にないだろうな。

最近のリヨウは風呂より先に飯だ。

我ながら判断は誤っていない筈……冷めない内に着くと良いんだが。

「ただいま」

「来たか」

「おかえりは？」

「何だオマエ」

山田一郎じゃないので言いません。

疲れ切った顔で投げ銭箱を抱えて居間に入ってきたリヨウは、葱ダレの匂いを嗅ぎつけたのか一瞬で目を輝かせて椅子に座ろうとする。

その襟首を掴んで止め、まずは手を洗わせてから改めて食卓に着いた。

「ガッツリした物で助かる」

「今日そんなに疲れたのか」

「吐きそうになつてる廣井さんから逃げるので走つて体力使ったから」

「あの人置き去りにしたのか」

それもそれで可哀想だな。

呆れる俺の前で、リヨウは目論見通り肉じやかと鶏も肉を交互に見て悩んでいた。どうせどちらも選べず、最後は白飯をおかわりしてどちらも一杯分楽しむんだろう。二年も一緒にいれば手に取るように分かる。

二人で黙々と食べていたが、リヨウがテレビを点けると海外の映画が放送されていた。

「何これ」

「ああ、『ミ〇ト』だ」

「霧？」

「そう。一回観たけど、不気味な終わり方するんだよ」

「今日露骨に私を避けようとした一郎みたいなの？」

「……………」

そんな風に受け取られていたなら謝るしかない。

何も言えずにいる俺の前で、リヨウは淡々と箸を動かす。

「一郎、もう諦めなよ」

「何が？」

「もう自己紹介で私にプロポーズをした時点ですべて決めた。私もオーケーしてしまつた以上、責任を持って現実を受け止めなきゃいけない」

「どっちがプロポーズしたか分からん言い方だな」

「私を乙女にした男」

「知ってるか？ 蕁麻疹って内臓にもできるんだぞ？」

そのワードでいつか体調不良を起こしそうだ。

俺がため息をつくくと、予想通りリヨウが白飯をおかわりする。……………てか早すぎる
だろ。

相当空腹に悩まされていたのか、皿の上を平らげつつある。

俺の倍速で食べているのでは……………？

食べっぷりに驚嘆していたら、リヨウがじろりと俺を睨んできた。

「何だよ」

「郁代の首の痕」

「本当に身に覚えが無い」

「虹夏の弁当は？」

「頼んでもない。……………弁明すると、朝のコールも本当に虹夏の自発的行動だ」

断じて俺の意思は関与していない。

「……………ならいいけど」

納得したリヨウが箸を置く。

早、すぎる……。

そのままスタスタと歩いて風呂場へ向かった彼女を見送り、漸く肩の力が抜けた。虹夏は要注意として、そろそろ喜多さんの問題も片付けなくてはならないな。

触れると爆発しそうな危機感があって極力関わらないように動いてきたのが裏目に
出たのかもしれない。

言語化出来ないが、喜多さんの何かを刺激してしまっている。

……はあ、ひとりに会いたい。

今のところ、『結束バンド』としてバンド活動に取り組んだり、バイトに勤しんだりと成長は見せても、決して俺に変な負荷を掛けずに癒しだけを与えてくれる。

こんな状況だからこそ、変わらずにいてくれる物がなによりも有り難く感じるのだ。
最近、ロインもくれないけど大丈夫かな。

「一郎」

風呂も早いのかよ。

物思いに暮れていた俺は、後ろに振り返る。

例の如く薄着——俺のシャツ一枚で堂々と佇んでいるリョウにはため息しか出ない。

今まではその姿が日常化していて特に注意しなかったが、いざ両親が帰宅してリヨウも泊まるとなった時、彼らに指摘されて漸く問題として再認識できた。

シャツ一枚姿……やっぱり、他人からは異常に映るらしい。

本人が楽だからとその格好をしているが、目の毒には変わりないのだ。

こんな所をひとりや後藤家に見られたら死ぬんじゃないだろうか、俺。

「一郎」

俺の憂慮も知らず、にやにやとしているリヨウが襟を開いて首を晒す。

そこには……一点だけ朱色が滲んでいた。

「この痕、何だと思う？」

……ほう。

俺はリヨウの首の一点を凝視した。

あれは少なくとも俺が付けた物ではない……では、一体誰が？まさか悪戯で他のやつに付けられたとか。

思考すればするほど、不快感が湧いてくる。

あれだけ俺に注意していながら、自分はこの始末か。

俺は平らげた皿に箸を置き、立ち上がってリヨウの方へ歩む。

そんな俺を見るなり目を見開いて固まり、冷や汗を浮かべ始めたコイツの反応がイラツと来る。

俺は逃げられないようリヨウの肩を掴んだ。

「リヨウ。——ちよつと話がある」

俺はリヨウを担いで自室に移動した。

長い長い話になりそうだ。

翌日、乙女顔で登校したりリヨウを見たクラスメイトによって、校内に知られる俺の異

名は『山田リヨウをニンニク臭い乙女にした男』に更新された。
解せない。

夜中のソレは完全にアウト

「一郎先輩！お邪魔します」

路上ライブ後、疲れた体を癒しに喜多さんとひとりが俺の家に来ていた。

疲労を解消するなら自分の家が良いと思うが。

ひとりについては言わずもがな、喜多さんに引つ張られて来たという感じで疲れ以外の暗い色の滲む表情は正視に堪え難い。

灯台下暗しというのだろうか。

己の眩しさと活力の余り、身近で犠牲者が出ている事には気付いていないようだ。

何とも惨い。

「良いけど、補導される前に帰りなよ」

「いえ。今日は宿泊のつもりです」

喜多さんが手荷物を掲げて見せる。

なるほど、ただの学校やバイトだけでは収まらない物量に鞆が膨らんでいる。

んー、最初から泊まるつもりだったと。

なら事前に連絡して欲しいんだよな。

「予約の連絡も無かったぞ」

「リョウ先輩が今日は伊地知先輩の家に行くと言っていたから、ゴリ押しでイケるか
なって思ってたんです！どうですか!？」

「正気を疑う」

ゴリ押しでいける男だと思われる。

ここは怒るべきなんだろうが、あまりに澆刺としていて逆に毒気が抜かれてしまう。

門前払いした方がひとりとしては有り難いなら容赦なく喜多さんを外に突き出す事
も考えるが、彼女の絶望した顔は時間的にもう金沢八景駅行きを終電を逃しているので
逃れられない運命を受け容れようとしている風である。

うん、ひとりが帰れないなら仕方無い。

「良いよ。一晩ね」

「やった!」

「い、いつくん……ごめんなさい」

「謝る事は無い。ひとりには常に利用して良いんだぞ」

「私の時には渋ってひとりちゃんにはそんな厚遇……目に見える差別で体熱くなっちゃ

います……!」

たしかに、喜多さんには失礼な対応だったかも。

破滅的な快感を催しているのは、もうどうしたら良いか分からん。

逆にリヨウがいないと躊躇い無く俺の家に踏み込んでくる所は、流石は行動力の権化こと喜多郁代。ファンというだけで未経験ながら経験者と偽って推しと同じバンドに参加する度胸は侮れない。

それを俺の家に泊まる時に発揮して欲しくないよ。

俺は二人用のスリッパを用意する。

もうリヨウは使わなくなつて久しい物だし、来客も少ないから懐かしい感覚すらあつた。

居間へと誘導し、ソファアに座らせて飲んでいた麦茶を供するが、時間的に二人は夕食の方が嬉しいのだろうか。

「二人とも、お腹空いてるか?」

「え?」

「昨日作ったカレーとかひじきの和物で良ければ有るけど」

「あつ、うん」

「ええ! ご飯まで頂けるんですか!?!是非!」

「追加で米炊くから少し時間が要るけど、その間に風呂とか好きな事しててくれ」俺がそう言うと、二人は早速風呂場へ。

え、二人で入るのか？

女子だとそういうものなのか。

喜多さん曰くバンドは第二の家族とか言うし、当たり前なのかもしれない。あの図々しいリョウですら、俺の入浴中に突入してくるのを実行直前に躊躇っていたらしいから、第二の家族という絆の形は俺の常識では測れない。

まあ、仲が良いなら何よりだ。

我が家でギスギスされたら堪らないし。

しかし、ひとりは意外とよく食べるのは知っているが喜多さんの食事量つてどれくらいだ？

バイト先では、友だちに比べてやや少食だったし……二合くらい炊いておけばいいかな。

『きゃあああああ！』

「……………」

絹を裂くような叫び声が聞こえてきた。

おそらく、喜多さんだろう。

風呂場で虫でも出たであろうか……俺が入った時はいなかったんだけどな。

何事かと考えていると、ドタバタと騒音を立てて喜多さんが居間へと駆け込んできた。冷静さを失ったが故かスカートを脱いでシャツ一枚の姿で現れた彼女に思わず面食らう。

「先輩！脱衣所の棚にこんな物が……！」

「……服？」

「これ、リヨウ先輩のじゃないですよね!？」

うん、そうだが。

「それが、どうかした？」

「先輩、これは誰の物ですか!？」

「それは大槻ヨヨコのだよ」

「何で大槻さんのがここに!？」

え、そんなに驚く事だろうか。

喜多さんの様子は尋常ではない。

互いの息がかかる程の至近距離にまで詰め寄って来た彼女に、俺は仕方なく事情を説明する。

昨日だったかな。

またライブ前に緊張で二徹もしてしまい、しかもライブの反応は人気に変わりは無くとも客数が増えたワケでも無く、その現状と成長中の『結束バンド』を比較して不安になったのでライブ後も独りカラオケで猛練習し、疲れ切つて道端で倒れそうな所にバイト帰りの俺が鉢合わせたという顛末。

放置するのも可哀想なので、俺の家が近い上にリヨウもないから一先ず家で保護し、ぐつぐつと一晩寝させたのだ。

本人からは甚く感謝され、服は俺がリヨウの為に備えた予備服を着せて、取り敢えず親に身柄を回収して貰った。

そして、今喜多さんが掴んでいる服は俺が一時的に預かっている大槻ヨヨコの洗濯した服。後で郵送で大槻家に返す次第である。

「——というわけだ」

「大槻さんまで宿泊……!?!それ、リヨウ先輩は知ってるんですか?」

「ああ、今朝学校で説明したら拗ねた。だから今日も虹夏の家の方に行ってるんだと思う」

「破局の危機だわ!?!好機だわ!?!」

「好機……??!」

たしかに、リヨウとは喧嘩中……??!みたいな状況だ。

緊急につき大槻ヨヨコを泊めたと虹夏にも苦勞した世間話の調子で語ったら、二人に物凄い顔をされたのだ。

虹夏はともかく、リヨウに至ってはそんな顔をされる謂れは無い。

オマエだつて、道端で立ちながら寝ている状態だったのを俺に保護されてよく家に通うようになった人間だろうが。

危険な状態の知り合いを見つけても捨て置けるほどに人間嫌いを拗らせたワケじゃない。仮にヨヨコを見捨てて次から『SICKHACK』のライブを観に新宿『FOLT』まで足を運んだ時に幽々さん達を見るたび罪悪感とかに苛まれるのは嫌だから。

まあ、それで納得してくれるリヨウではない。

『私のいない夜に震えるといい』

キメ顔でそんな事を宣っていた。

よく臆面もなく言えるよな、そういうの。

だから、暫くは伊地知家の世話になるのだろう。いや家帰れよホントに。

俺としては負担が減って悪くないが、リヨウの機嫌を損ね続ける方が後々危ない気がするから、明日にでもしつかりと謝罪するつもりだ。悪くない事でも謝らなくてはならない不条理には目を瞑る他安寧は無い。

「ほら、二人とも早く入って来なさい」

「はいっ。綺麗にするのでちゃんと見て下さいねっ」

「ああ……うん？」

相変わらず言い回しが謎な喜多さんが脱衣所へと消えていく。

ヨヨコの服に喜多さんがあれだけ慌てていたが、静かという事はひとりの方は何も感じなかったみたいだから不幸中の幸いだ。

ようやく落ち着けるとソファアの上で寛ぎ、何をして暇を潰そうかと考えていたらスマホから着信音が鳴る。……げ、リヨウだ。

「もしもし」

『何で連絡しないの』

「何だと？」

『私が怒っても放置とか、一郎はやっぱロックだね。そういうところが嫌い』

「ええ……まさか、俺からの連絡が無いはずとスマホ見張ってたりしないよな？」

『……………』

「そうですか」

意外と寂しがり屋だからな。

まさかとは思ったが案の定だったよ。

「今家に喜多さんと終電逃したひとりが泊まりに来てるけど、今からでもこっちに来る

か?」

『は?』

「アポ無しで来た」

『つまらないダジャレは聞いてない』

「その“来た”じゃねえよ!」

むしろつまらん事言ってるのはオマエだろ!

不機嫌なのにこの調子だから相手にも真面目に受け取って貰えないんだぞ。

だが、リヨウの声色は一層不機嫌な色を濃くしている。

明日、大変な事になるかもな。

ここまでの流れが思惑通りならばとんでもない策士だぞ、喜多さん。いや、幾ら普段から様子が可怪しいとはいえ俺たちを敬めるような悪人ではない。

「どうする?」

『一郎は私に会いたい?』

「オマエがどうしたいかだろ」

『会いたい?』

「はい、おやすみなさい」

俺はブツリと通話を切った。

考えるのはやめよう、明日の俺がどうかしてくれと信じて現実逃避だ。炊飯器から音が鳴り、米が炊けた。

カレーにはもう火は通したし、後は二人が風呂から出てくるのを待つだけだ。……本
当に二人で入ったんだな。

「先輩、シャワーありがとうございました！」

温まった喜多さんが元気よく現れる。

ひとりは何故かぐったりしているが大丈夫か？

俺は二人分の器にカレー、所望したひとりにのみひじきの和物を用意する。

よほどお腹が空いていたのか、二人とも次々に口へと入れる。

まあ、リヨウもライブ後はよく食べるしな。

演奏はそれだけ体力を要するのだろう。

「そういうえば、二人とも二年生になったんだよな」

「はい！」

「喜多さんは文化祭でも人気だったし、もう後輩から慕われてたりするの？」

「あつ、撮影会はあつたよ……」

撮影会……？

喜多さんの代わりに答えたひとりの顔は死んでいた。

巻き込まれたのかは分からんが、あの顔からはかなりの心労があったと察せられる。クラスが変わる、顔触れや環境が変わっただけストレスがあるから、繊細なひとりには厳しい変化だ。

「二人ともクラスは一緒か？」

「はい！席順も私の後ろがひとりちゃんなんです」

「何かあったら助けてやってくれ。相談にも乗るから」

「えっ……乗ってくれるんですか？」

「え、早速何かあったのか」

「その、自己紹介というか事故紹介というか……」

今度は喜多さんの顔が死に始めた。

混ぜるな危険って聞いた事があるが、本当にあるんだな。助け合えると思いきや逆効果な場合があるとは思ってもよらなかった。

自己紹介で何かあったのは確実。

自己紹介……自己、紹介……——

「い、いっくん？顔が暗いけど大丈夫？」

「いや、良いんだ。何でも無い……何もなかった事にしたい」

「ひとりちゃん。先輩はね、自己紹介でリョウ先輩と伊地知先輩にプロポーズしたのよ」

「何で知ってるんだよ。あと虹夏にはしてない」

「大丈夫です。先輩が二股してたって、気にしないでですよ。むしろ私は三番目なのね！」
恍惚とする喜多さんにはもう口を閉じて欲しい。

駄目だ、ひとりに聞かせる内容じゃない。

てか誰だよ、自己紹介の時の話なんかしやがったのは。いや言わずとも分かる……十中八九、虹夏だ。リヨウが説明したなら、プロポーズの対象として虹夏が挙がるワケが無い。

リヨウにだってした覚えは無いけどな!!

こんな醜聞は校外にだって広がって欲しくないのに、よもや後輩にまで吹聴していたとは手抜かりないな虹夏。

「あ、そういえば先輩！」

「ん？」

「実は、今日の路上ライブ後に知らない箱からライブの誘いがあったんですよ」

「え、いつか教えてくれ。絶対に空けるから」

とうとう『STARRY』以外でもライブやるのか。

それだけ認知されているということだな。

着実な人気の上昇……うん、ヨヨコが不安になつて倒れていたのも強ち過剰ではない

という事だな。

時期的に考えると、未確認ライオットの前哨戦のような形になるのか。成功すれば本人たちのメンタル的にもかなり余裕を以て迎えられるだろうし。

「先輩って、ここ最近のライブ来れてませんよね」

「バイト辞めてく人が多くてさ。その穴埋めでかなり忙しいんだよ」

「その店に問題とか？」

「いや？何か知らんが好きな人にカノジョが出来てとか……職場内の恋愛模様によるストレスで辞めていくらしい。俺そういう話聞かないから驚いたけど」

「あ、なるほど……」

俺を見てニツコリと喜多さんが微笑む。

どうしてここにきて毒々しいキターン光線を放射するのは意味不明だが、きつと恋愛等に敏感な人にしか分からない事情という物を今の話から察したようだ。

俺はそういうのに鈍い……どころか愚鈍とまでリヨウに諺られたレベルらしいから。

その後、謎の沈黙が始まって食事を終わると二人は提供した母の部屋に行ってしまった。

……さて、喜多さん達の相手も終わったし、明日のリヨウについて考えよう。

夜中になつても結論は出ない。

現在のリヨウや虹夏の行動力は凄まじく、周囲にどんな認識をされても問答無用という勢いなので、明日学校で会った時にどんな事を言い出すか予測不能だ。

先んじて謝罪、その後にはたすら甘やかすのが得策。

問題は謝罪内容……的外れな事は論外として、気に障る言い回しも言語道断……リヨウの場合は普段から全く何を考えているか読めないから、何が琴線に触れるかなんて予想するのも難しいな。

ベッドの上で悶々としていると、扉が開く音がした。

「……………」

ノックも無しに入室だと。

非常識だと思いつつ、ゆっくりと開く扉から音を努めて出すまいとする意識と気配りをしてるのが分かる。

悪戯目的だろうか、俺に？

容疑者はふた……いや一人だ。

ひとりだけが俺に危害を加える事なんてあるワケがない。

俺は目を閉じて、ひたすら音に耳を澄ませる。

しばらくすると、布団の中に誰かが入って来た。

左を向いて寝ている俺の背中側でもごもごと蠢いている。

ふ、来やがったな……喜多さん。

これは多分、朝起きたら二人で寝ていて起き抜けに何かドツキリを仕掛ける心算に違いない。

だが、それは俺が今すでに寝ていたら可能な事であつて、俺が起きていると示せば作戦は意味を成さない。

残念だったな！——と俺は右へと寝返りを打った。

「んみゅっ……!?」

その時、唇に温かい感触が触れる。

暗闇だが、至近距離だからこそやつと見えるひとりの顔がそこにあった。

お互いに予想外の出来事で目を見開く。

「……………んえっ？」

私も一緒、だとさ

私——後藤ひとりは迷っていた。

恋人ができた親戚の男の子の家へ、気軽に遊びに行つても良いものなのかと。

しかも、恋人は私と同じバンドのリヨウさん。

変な誤解を与えて、バンド内にまで影響を及ぼしたら迷惑どころでは無い。その時は腹を切つて詫びるか、バンドを辞めるしかなくなる。

仮にリヨウさんといつくくんが堅固な絆で結ばれ、何があろうと揺るぎない信頼で築かれた恋人関係を作っているのならば私ごときの接触で危惧しているような事態にならない。

でも、私は知ってる。

リヨウさんが意外とギリギリな事に。

「リヨウ。それ何？」

「ん？ああ、これは……別に」

虹夏ちゃんが指摘すると、リヨウさんは自身の手首に飾ったブレスレットを一瞥して答えをはぐらかした。

その反応に全員が怪しいと思った。

会話を面倒臭がる時は多々あるし、逆に答える時はすつぱりと特に言い惑う事も無い彼女が濁す時点で、そこに深い事情があるなんて鈍くても分かる。

そういえば、以前まで付けていたのと違う。

いっくんとのお揃いは辞めたのかな。

「前は一郎くんとお揃いにしてたよね」

「そうなんですか?」

「そうだよ。自分から買って無理やり付けさせてたんだよね」

「無理やりじゃないし」

「今回のそれもお揃いにさせてるんでしょ」

「違う。今回は一郎の方から」

あ、アレって強引にやってたんだ……。

それくらい積極的じゃないといっくん相手は難しいんだろうな。……へへっ、私は気付くのが遅すぎた。

そっか、今度はいっくんからのお揃いなんだ。

何でもないつもりを装っているようで、自慢気なりヨウさんに三人で苦笑する。

さつきから虹夏ちゃんの握るドラムスティックから凄じい軋む音が聞こえるし、喜多ちゃんは失礼だけど横から手元のスマホ画面には何故か同じプレスレットを調べようとしているのが見えた。

「毎月やる『付き合って何ヶ月の記念日』とか?」

「そういうの私たち無いし」

「え、誕生日とかは?」

「……一郎も私も、お互いの誕生日知らない」

「え??恋人らしい事とかは?」

「んー、一緒に『寝る』とか」

「あはは、それは恋人じゃなくても出来る事でしょー?ホントに付き合ってる?」

虹夏ちゃんの声がいつもの明るい笑顔に反して冷たさを増していくばかりだけど、意外にもいつくんとリヨウさんはお互い恋人関係に特別な物を見出している風では無いのかも。

特に気を遣わず、一緒に居たい時に一緒にいるみたいな……ヴボロツ……青春コンプレックスを刺激されて危うく溶けた骨を吐き出すところだった。

というか。

「えっ。いつくんの誕生日、知らないんですか？」

私の一言に、リョウさんが固まる。

あれ、何か私まずい事言ったかな。

その場が沈黙に包まれて、ますます私は落ち着かない。虹夏ちゃんですら、私に対して見たことがないくらい光のない瞳をこっちに向けている。

でも、そっか……いつくんって誕生日についてあまり触れられたくない感じはしていた。

プレゼントとかも、多分嫌がるし。

以前教えてくれたけど、いつくんは自分が生まれた日ってだけで死にたくなるとか嫌そうな顔をして語っていた。

だから、私は毎年その日に「誕生日おめでとう」とは言わずに。

『い、いつくん。生まれてきてくれてありがとう』

誕生日とは言わずに、それだけ伝えている。

私にできる精一杯だし、お母さん達も私同様に彼の心情を理解した上で各々のやり方により誕生日に何かを伝えているらしい。

彼は自分の誕生日を後藤家に教えてないつもりだし、私たちのその言葉が誕生日に関する事だとも察していないから正直意味のない行為かもしれないけど。

「ぼ、ぼっちは知ってるんだ」

「えっ、あつ、は、はい」

「……………そう」

以降、リョウさんの口数が明らかに減った。

それを見て、私は気付いてしまった。

知らぬ間に『マウント』を取ってしまったのではないかと。恋人でもない女からの変なアピールな上に自分も知らない事を知っていたという事実に動揺しているんだ。

わ、悪い事をしてしまった……。

でも、気付いた後にそのつもりはなかったと弁明及び謝罪しようとは思わなかった……何でだろう。

それから家に帰って猛省した。

いっくんがリョウさんと付き合い始めてから、いっくんと連絡は控えている。

勿論、何か彼から来たら返信するよう努めてる。

でも、彼自身が特に私に用事なんて無いし……正直、結束バンドに入るまでいっくん

以外とあまり連絡だつてしてないからこそ自分の中で違和感が凄い。

今日あつた事を思い返して複雑な心境のままご飯を食べていたら、お母さんにも心配された。

話したつて仕方無い内容だけど、その日は少し自分でもポロツと簡単に言つてしまつた。

「ひとりちゃん……」

「ご、ごめん。変なこと言つて」

「確かに相手を思い遣るのも大事だけど、ひとりちゃんの気持ちを蔑ろにしちゃだめよ？むしろ、ここのう時の遠慮は苦しい展開を呼ぶの」

「……お母さん……」

「だから、『摘み食い』よ！たまにはひとりちゃんも大胆に悪い子になりなさい！人の物だつてわかつてても、少しくらい齧っちゃうの！」

「お、お母さん？」

「私、そういうドラマ何度も視たから分かるわっ」

「お母さん!!!」

一瞬だけ輝いて見えた気がしたけど、やっぱり錯覚だった。

お母さん、娘の人生をドラマ感覚で楽しまないで。

そんな事があつた翌晩、紆余曲折あつて私はいつくんの家に泊まりに来ていたけど……何も起きない。というか、何かする意思力も行動力も無くてすっかり就寝の時間になつていた。

喜多ちゃんも「ひとりちゃん、万が一があるから枕元にコレを置いておきましょう」とか言つて、何か『0・01』とか表記された箱を手渡された。何だっけ、コレ……思い出してはいけない気がしたので考えるのをやめた。

喜多ちゃんとお母さんの部屋で就寝。

私は箱をカバンの中に入れて、布団の中に入る。

ベッドで二人で寝る余裕もあるけど、喜多ちゃんと以前我が家でお泊り会をしたとはいえ、二人で一つのベッドを使うのはまだハードルが高いと感じて布団を貸して貰つたのだ。

本当はお父さんの部屋のベッドでも借りようかと考えたけど、喜多ちゃんに「他の男に体なんて許しちや駄目よ！」って猛反発されてしまったので諦めた……怖い。

私は布団の中でしばらく目を瞑つたけど、実はこの時間もギター練習してて寝る時間じゃないから、習慣の所為か眠れない。

というか……この布団、凄いいつくんの匂いがして落ち着かない!

この時、私はこれまで重なっていた懊悩と違和感、そして匂いによる刺激も混ざって、後の自分が聞いたら絶対に正気を疑うほどハイになっていた。

最近会えてすらいなかったいつくんと少しでも居られるように、と……つい出来心でいつくんの部屋へと足を運んでいた。

そして、そつと扉を開けてベッドに潜り込む。

……あ、何やってんだろ。

ここで冷静になり、私はベッドを出ようとして――。

「んみゅっ……!?!」

『摘み食い』の味を知ってしまった。

一瞬、何事かを理解するより先に口に広がった甘い味に驚く。次いで至近距離にあるいつくんの、久しぶりに自分だけを見る瞳と視線が合う。

「……………えっ?」

お互いに当惑の声が重なった。

いっくんは暫く黙って私を見つめ、やがて一回寝返りを打って反対側を見てしまった。

あ……無かつた事にされた。

な、無かつた事にされた方が穏便だけど……へ、へへ……何か、胸が痛い。

変な悲しさに私が一人悶えていると、再びいっくんがこちら側に向いた。

それから、私を抱き寄せて、ぽんぽんと背中を優しく叩く。まるで寝れない子をあやすような優しさと労りに満ちた仕草だった。

昔もこんな感じだった、逆だったけど。

昔、年末の我が家に泊まりに来たいっくんが斃されていた時に私がやった過去をなぞるような。

あの時、私は兄妹みたいだと思った。

いっくんも、きつと今同じ事を思っている。

嬉しい……と思つて、次の瞬間には言い表せないくらい苦しくなった。

呼吸ができなくなるくらいに。

だから、私はもう一度だけ。

「い、いつくん」
「んえっ？」

もう一度だけ、『摘み食い』をした。



俺——前田一郎は、ソファアの上で草臥れていた。

学校にもバイトにも行つたらしいが、その記憶が微塵も残っていない。気が付いたらここにいたという怪奇現象に見舞われている気分だ。

そうなる前の記憶は、昨日の夜の事だ。

ベッドに潜り込んで来たひとりと事故でキスをしてしまった……文化祭に続き、二度目である。どちらも偶然とはいえ、前回はひとりが失神した故に特段変な空気にはならず済んだが、今回はひとりも意識がはつきりしている状態だったので誤魔化し方が分からず、ただ戸惑つてしまった。

いや、二度目まではいいんだ。

その後、もう一回された。

言い逃れを許さないと言わんばかりに。

ベッドに潜り込むくらいだし、実は俺と同じで一緒にいられる事が少なくなつて寂しくなつたんじゃないかと思ひ、抱きしめて慰めようとした。

やり方は、うん、正直あれしか思ひつかかなかつた。

昔ひとりにやられて、とても安心したのを覚えていたからだ。

だが、それをしたら何故かひとりが齧り付く勢いで俺に再び……をして、直ぐ様反

対側を向いて寝てしまった。

あの事以外何も考えられない。

どういう意図なんだ？

ひとりは何談でも人にあんな事はしない。

何か、深い真意があつたに違いないのだ。

「どうして……」

「一郎」

「駄目だ。全然わからん」

「一郎」

「これは試練か？ひとりが何かを伝えようと……」

「一郎」

「本人に直接聞くのは論外？いやでも——いだだだだだだ」

沈思に耽っていると、横から頬を抓られた痛みではつとずる。

隣を見れば、いつの間にか俺が作ったであろう晩飯を食べながら、こちらを不満気に

睨んでいるリヨウがいた。

昨日は居らず、今日は記憶が無いので二日振りに会った気分だ。

「どうした」

「別に。私を無視したこの二日間は楽しかった？」

「無視したわけじゃないん……だが……」

恨めしそうに言うリヨウだが、今日に限っては弁明させて欲しいほど重要な案件があったのだ。

俺は心の内の混乱も含めて、リヨウに説明しようとして舌が固まった。平気そうな顔をしているが、心做しか目元が少し赤く腫れているのは気の所為だろうか。

いや、あのリヨウが泣くなんて事があるワケも無かろう。泣くのは金欠なのに誰も助けてくれなかった時だな。

「悪かった。悩み事で気が回らなかった」

「どうしようもないね、一郎は」

「今度は謝ろうかどうかで悩むぞ」

「私への謝罪の仕方では悩んでるなら、「ごめんなさい」とご飯と一日の奉仕だけで良い」「謝りたくない相手の鑑だな」

むしろ褒めたいくらいだ。

謝罪の求め方が人の神経を逆撫でする。

リヨウみたいにマイペースな人間なら、俺も今頃は気楽な気持ちでいられたかもしれない。羨ましいと思う反面で、やはりコイツみたいになりたくない気持ちを再認識す

る。

「今日は私が話しかけても上の空だった」

「話しかけてたのか……」

「椅子を寄せて隣に座った虹夏が腕を抱いても無反応だったし」

「上の空になつてる人間で何してんだよ……」

「私が耳を噛んでも駄目だった時は死んでるなと思つたよ」

「知らない間に俺で遊びすぎだろ」

それは、無視……って言えるのか？

そこまで来たら、様子がおかしいと心配するだろ。いや俺みたいな人間に心配するだけ無駄だと思う方が普通なのかもな。

ともかく今日の俺は誰にも反応しなかつたようだ。

昨日一日も無視した事にカウントされるらしく、虫の居所が悪い。虹夏から昔のリョウの話の散々聞かされたが、孤高なフリして実は寂しがり屋な性格なのは把握している。

相手の話は余裕で聞き流すくせに自分の話は聞け、と。

傍若無人だと言つてやりたい。

本当に手のかかるヤツ。

こんな異常状態の俺を見ても、今日どれだけ悩み抜いていたかも分からない彼女の察知能力を考えると、悩みを素直に共有できそうもない。

しかし、昨日の話をしたら浮気だなんだと騒がれるので、相談というのは実に悪手だ。一人で抱えきれぬ問題じゃないなあ……。

俺の話だと伝えると地雷確定の案件なのに独力では解決できず、他人の意見が必要な状況に陥っている。

考えろ、秘策を。

リヨウの危ない部分を刺激せず、この苦悩に対して実のある回答を引き出す為に自然な話題の出し方を編み出すのだ。

柔軟な発想が求められているぞ。

黙々と食事を続けるリヨウの横で黙考する。

よし……これだ。

「なあ、リヨウ」

「なに」

「これは、俺の友だちの話なんだが」

「一郎の話でしょ。一郎に友だちがいるわけがないから」

「いるわ。虹夏とか陽キャ君とか去年のクラスの子とか」

懐疑的に見られるのは業腹である。

「そいつ、久しぶりに親戚の女の子を家に泊めたらしいんだ」

「……へー」

「興味失くすの早くないか」

「展開が読めた。どうせ可愛かった、とか俺の生きる希望、とか言うやつでしょ」

「うん、半分違うね」

可愛かったし生きる希望なのは事実だ。

リヨウは早々に読めたと話を続けられる事を辟易しているみたいだが、現実はその簡単ではない。

「夜、その女の子がベッドに潜り込んで来たらしい」

「……………は？」

「だろ。驚くだろ？」

「なに、一緒に寝たの一郎？」

「俺の話じゃなくて友だちの話な？」

「どうやら、つくづく俺の話にしたいらしい。」

俺の話だけでも。

「そのベッドの中で、偶然にも寝返りを打ったらお互いの唇が触れてしまって」

「事故みたいな物だから、そのまま流そうと誤魔化したら、次はその子から意図的にまたキスをされたとか」

「それで……友だちには恋人がいるし、親戚の女の子もそれを知った上での行動らしくて……これ何の意図があつてやったのか分からない、つて相談をされたんだ。リヨウはどう思う？」

俺は振り返つてリヨウに尋ねる。

さあ、振り絞つたぞ勇氣と頭脳！

これならば、俺自身の話ではないと弁えた上でリヨウなりの見解を示してくれる筈だ。普段の様子から若干求める回答があるかは疑わしいが、コイツは人が本当に辛い時に光明を示してくれる事例が稀にある。

何より、人間的にはともかくリヨウは女子だ。

ひとり側の視点にも立つた答えをくれるやもしれない。

果たして、リヨウは——何も言わなかった。

食事を終えるや無言で立ち上がり、持つてきていたベースを片手にテレビの前を陣取ると俺に背を向けたまま弾き始める。

まさか、飽きたから答えるまでもない、とか？

キスだとか女子との接し方とか、こういう話題は女子等が盛り上がりそうなお話なのだが、リヨウの興味の琴線に触れもしないらしい。

「リヨウ？」

「一郎、これは例え話なんだけど」

「急にか」

「……実際にあった話」

「何でフェイント挟んだ??」

よくわからん。

「恋人が他の人間とキスをした話を聞かされた時ってどう思う?」

……………???

提供された話題に暫し固まる。

恋人が何処かの誰かとキスをした話、についての感想を述べろって事だよな。

俺の場合はリヨウが誰かと、か。

想像してみても、すぐにはつとした。

「リヨウ!」

「なに」

「金に困ったからって、そんな事するんじゃないぞ。そういう時は俺や虹夏、親にしつかり相談しろ」

「思ってた反応と違う」

金を得る為に体を差し出すなんてあつてはならない。

そんな事をした日には、虹夏も溺愛してくれる両親も阿鼻叫喚の地獄に叩き落され、相手は血祭りに上げられるだろう。

度胸の無いリヨウにそんな真似は出来ないが、追いつめられた人間は予想の範疇を越えた行動に出る。

「……お金の為じゃないとして」

「ん？」

「一郎は、私が他の男とキスしたらどんな気持ち？」

お金が関係ない場合。

俺は追加された条件を加味した上で、改めて想像力を働かせる。

相手の男は……そうだな、陽キャ君でいいか。

陽キャ君とリヨウが知らない所でキス。

そんな情景を思い浮かべた……いや、うん。

「え、凄い嫌だけど」

俺がそういうとリヨウが再びベースを弾き始めた。

その反応で、一体この例え話からリヨウが何を得たかったのか益々不明だ。俺は隣へと移動して、その顔を覗き込む。

ベースに向いていた視線が、ちらりとこちらを見た。

「一郎は嫌なんだよね？」

「え、あ、ああ」

再確認するような質問へ戸惑いがちに頷く。

すると、リヨウが俺へと手を伸ばして。

「私も一緒。——わかった？」

微笑みながら、ぱちりと俺の額を指で弾いた。
やっという意味が分かって、俺は謝った。

雑草食つてろ

「二郎。お話がある」

新たな『箱』でのライブを控えた夜だった。

山田リヨウは、いつになく真剣な眼差しで俺を見詰めている。虹夏も張り切っていたが、普段からマイペースで動揺しなさそうなコイツでさえも緊張しているのだ。

明日のライブは、俺も久々に予定が合う。

気合を入れて応援用の扇を鋭意制作中だった俺だが、真面目な雰囲気です室に来た彼女を無視しておくワケにもいかず、一旦手を止めて体の正面を向ける。

すると、リヨウはぼんぼんとベッドを叩いた。

随分と慣れた様子で俺のベッドの中央に寛ぐコイツだが、そういうのを見た男がどんな反応するか分かっていないのかというくらい警戒心が無い。

久々のライブ……俺もいつになくテンションが高い。

そのノリでベッドに乗ったらどうなるか。

「ここがいい。話せ」

「そこは駄目。動け」

「妙に頑固だな。話せる距離だろ、何が不満だ？」

「一郎こそ何を臆している。さては童〇？」

「誘い文句じゃなくて遺言とききたか」

今日の挑発はキレてるな。

俺は握っていたペンを手中でへし折ってしまった。

こんな調子でリヨウの相手をしていたら、明日には本当にはベッドが事件現場になりかねない。……あれ、いつの間にかアレ的な興奮が殺意へと遷移している気がするぞ。

そんな事は、さておいてだ。

埒が明かないので観念して俺もベッドに移動する。

アイツの隣に腰を下ろすと、リヨウはさらに視線を鋭くした。来いって言ったのオマエなんだけど。

「一郎。私の誕生日は9月18日」

「……………」

「一郎は、私と出会って既に二回も祝い逃しをしている」

「それ損してるの俺？」

「どう思った？」

「オマエがこの世に現れて十七年以上経ったところで何が喜ばしいのか全く以て分からん」

俺としては厄日とそう変わらない。

だが、山田リヨウは俺の返答に満足しない。

分かっているけどでも言いたげに、憐憫の眼差しを注いでくる。この世に自分が生まれた事をここまで尊大に言えるヤツなんて太古の王侯貴族ぐらいだろう。

誕生日の何が良いんだよ。

勝手に親が俺を産み落とした日、というだけだ。

祝われたって何の嬉しさの欠片も抱けない。捻くれていると言われても仕方無いが、生理的な不快感を拭いきれないのだ。

いや……他人の誕生日までそんな不快には思わないけどさ。

ただし、山田リヨウだぞ？

「大体、何で急に？」

「ぼっちに言われた。一郎の誕生日を知らないのかって」

「知らなくて良いだろ、そんなの」

「知りたい」

「何で」

「私が何ヶ月何日歳上か」

「なるほど、浅ましい」

誕生日を知りたい理由で、ここまで下らない理由が存在するなんて青天の霹靂である。というか年上前提かよ。

それでマウントつて取れるのかさえ疑問だ。

それにしても、ひとりが俺の誕生日を知らないのかつて発言した経緯を知りたい。まるでひとり把握しているかのような口振りだ。俺は後藤家に教えた事なんて……いや、親戚関係で俺の親から聞き及んでいても不思議ではない、か。

でも祝われた事なんて……。

『生まれてきてくれてありがとう』

……あれか。

毎年、たしかに誕生日……だったか？それくらいになるとひとりから唐突に生まれた事感謝される。急過ぎて嬉しいと感じるよりも戸惑いが勝っていた。

そうか、ひとりなりの祝福だったのか。

思い返すと、後藤家一同からも。

『一郎くん！万歳！万歳！』

『一郎くん、そっちにご飯作って送ったから。食べてくれると嬉しいな』

『いっくん。ケツコンまであと〇年だねっ』

『アウ！バウツ！ウガルルツ』

後藤夫妻は、万歳とか言ったり少し豪華なご飯を送ってきてくれたりしたな。ふたりは謎のカウントだし、ジミヘンはその時だけ聞いた事も無い鳴き声で話してくれる。

あれも祝いのつもりだったんだな……。

俺が鈍過ぎただけで、実は誕生日を祝ってくれる人はいたんだな。少なくとも前田家に来てからは。

「教えない」

「……」

「そんなに知りたいなら、俺のロインのプロフィール欄からでも探れば良いだろ。一応設定してあるし」

「なるほど」

「じゃあ、この話題は終わりだな」

「……一郎」

「ん？」

「一郎って今、何歳？」

「……まだ十七だけど？」

そろそろ誕生日だけどな。

呆れながら答えると、面白い物を眺めるような目で俺を見つつ、ニヤニヤと笑う口元を袖で隠しだす。目的が分からず、鳥肌の立つ腕を抱きながら少し距離を取ろうとする。と服の裾を掴まれた。

な、何なんだ一体。

「もう少しで十八。結婚はいつする予定ですか？」

びきり、と俺の中で亀裂の走る音がする。

何を言い出したかと思えば、コイツ……。

内心穏やかではない俺の心中など察する事無く、くつくつとリョウは喉を鳴らして笑いを堪えている。自己紹介の時からだが、プロポーズのネタで腐るほどイジられていた。

忘れかけていた殺意が蘇る。

「一郎、頑張らないとまずいよ」

「……何が？」

「今の内に私の身も心も物にしておかないと、いずれ世界的ベーストになってしまう私は引く手数多。頑張らないとね……」

「あ？」

まるで俺が必死にならなくてはならない立場のような言い方だな。

心底山田リョウに惚れているとでも言いたげだ。

生憎と第一印象変人、第二印象が寄生虫、そして現在に関してには恋人という名で寄生した害虫という認識の相手に、繋ぎ止める事に躍起になれという方が間違いだ。

一度分かせてやるか……？

やっぱり、最初は十字固めで絞め上げて……待て。

落ち着け、これは挑発だ。

一々取り合っていたら、明日の準備に間に合わない。

「ふ、そうかい」

「何……!?!」

「オマエの方も、俺がいなくなったら虹夏の美味しい飯しか食えないぞ」

俺は敢えて余裕な態度を装う。

む、とリョウの顔が曇る。……いやいや、俺も適当な事を言っただけど、よくよく考え

たら虹夏の飯食えるだけでもかなり役得な人生じゃないか？

外面だけ取り繕ったが、中身スカスカ過ぎた。

これだけじゃ足りない。

捻り出せ、コイツの牙城を崩す一撃を。

「第一、胃袋掴まれてるオマエが俺にデカイ口を叩けるのか？」

……これも駄目だ!!

いつも俺の飯をよく食べてはいるが、果たして胃袋を掴むと形容できる段階までコイツの味覚的幸福を満たせているかも疑問だ。実際にリヨウは食えれば何でも良い質なので、空腹が凌げれば雑草にまで手を伸ばす。

二撃目も失敗……。

ちらりとリヨウを見ると、顔面蒼白になって狼狽えていた。

く、コイツ……。「そんな事よくドヤ顔で言えたな」って引いてやがる。

次だ!

えーと。

「それに、いつもの反応的には物に出来ていると思うぞ。……何がと言わんが」

くそ、気持ちの悪い発言しか出ない。

ちらりと再びリョウの様子を窺う。

着ているシャツの裾を握り締め、顔は俯いていて分からないが、耳どころか見える限り全身真っ赤になっている。ド直球な変態発言で反応するのも危うい、という感じだな。

駄目だ、何も効いていない！

その証拠に、笑いを堪えて限界なのか真っ赤な顔のまま少し期待するような目でちらちらと俺を見てくる……何かエ………いやいやそうじゃない。

くそ、さつきから墓穴を掘っている。

何か有効打を……これだあ！

「油断してると、俺が他に相手を見つかるかもな」

その瞬間、室内に木枯らしでも吹いたかと思つた。

冷水でも落とされたように背筋を悪寒が駆け上がり、俺は小さな悲鳴が口からこぼれた。

リヨウの体は、さつきまでの赤みが引いていく。

代わりに、双眸から強い眼光が放たれた。心臓でも掴まれた錯覚に俺が全身を強張らせると、動けない獲物を見定めた肉食獣のようにじりじりとベッドの上を這つて躍り寄つて来た。

細い指が微かに震える俺の喉元を撫でる。

包むような優しさで顎を握られ、視界の隅ではアイツの顔と開きつつある口が迫つていた。

がり、と首筋に痛みが痛い痛い痛い！

逃げそうになる俺の肩と顎を強く掴み、リヨウは首筋に噛みついて離れない。

十秒ほどそのままだったが、やがて満足した彼女から離れていく。

「一郎」

「痛ア……は、な、何か？」

「私も本気出さないとね。……楽しみだ」

「た、楽しみ？」

リヨウの目が妖しく細められた。

「あと何年で、一郎は身も心も堕ちるかなって」

どうやら、眠れる肉食獣の尻尾を踏んでしまったらしい。
雑草食ってろ。



翌日、俺は件のライブハウスに来ていた。

既にリヨウ達が入っているらしく、俺も少し遅れて応援グッズを装備しながら来場した。

池袋なんて、初めて来たぞ。

新宿なら通い慣れてしまったが、ここの賑やかさも凄まじい。特にこのライブハウスも、俺と同時に入る人数もかなりある。

ある……んだが、様子が尋常ではない。

「今日は……ハロウィンか？」

可怪しい……まだ夏前だぞ。

愕然とする俺を他所に、次々と奇つ怪な衣装に身を包む人々が入って来る。いずれもスタツフらしき方々に挨拶をしている辺り、今日演奏する人たちなんだろうが………

ロック？ロックとは縁遠いジャンルがちらほらと見受けられる。

ライブハウスを間違えた、ワケないよな。

貰ったチケットは、ここで間違いない。

「これは、何が起きて……」

「あ、アンタはっ……！」

「その声はまさか、俺が会いたくない人間第六位……毒♡闇！」

「ぼいずん♡やみ！微妙な順位が逆にリアルでメンタルにくるんですけど!!？」

背後からの声に振り返ると、いつぞやの記者ぼいずん♡やみこと毒♡闇がそこにいた。どちらが本当のペンネームだったか覚えてはいないが、結束バンドに一度は亀裂を生んだちよつぴり危険人物なやつ。

俺が警戒に身構え、いつでも反撃できるように団扇を構える。

「あのっ……」

「動くな。それ以上こちらに近付いたら貴女の頭をアシシメトリーにしてやる」

「団扇で!!?てかそれ、応援用?」

「ええ、まあ」

俺は団扇を毒♡闇さんに見せる。

「これで応援しようかと」

『山田リヨウ、昨日殺すか、悩んだぞ』……う？……：……いや応援どころか通報レベルのメッセージ!! 俳句な感じで音揃えたんなら季語持つて来いや!?! 字余り!! 下手くそか!!』

「もう一つあります」

「何なに?……『ファイト! 結束バンド!』つてこつちは捻りも無いじゃない。もう少しアイデア無いわけ? 殺意マシマシの団扇といい、ちよつと頭おかしいんじゃない?」

「……ぽいずん♡やみ14歳なんて名乗つてる佐藤愛子23歳よりは正常ですが」
「ぶぼろばアツツ?!?!」

俺のカウンターに毒♡闇が吐血する。

ふ、貴女みたいなアクの強いキャラはネットにアンチが必ずいますからね。そういう人で迎つていけば本名も年齢も出てきますよ。

よほど効いたのか、毒♡闇の吐血が止まらない。

それを優秀なスタッフさんが速やかにモップで掃除してくれたが、あの手際からして死体処理に慣れているような後ろ暗さを感じる。何者なんだ……?」

いよいよライブハウス合つてるか疑わしくなってきたぞ。

もしかして、最近観たシリアルキラのいる玩具屋みたく入ったが最後のライブハウスだつたりしないよな。

「それで、毒♡闇23歳さんも誰か観に来たんですか？」

「前にあれだけあたしにギターヒーローさんのライブシー云々を語っておいて私のズケズケと明かすの何で?!」

「良いから答えて下さい」

「……け、『結束バンド』」

「え、本当ですか？でも団扇は貸しませんよ」

「誰がそんなトンチキなグッズに手出すと思ってるの？そんなので応援されて喜ぶの変人だけよ」

「あ、なら大丈夫ですね。喜びますから」

「『結束バンド』が!?!」

正しくは山田リヨウだけだが。

俺と毒♡闇が益体も無い会話をしていると、彼女が背後の誰かとぶつかってしまったようだ。

「あつ、ごめん」

「げ、ぶりっこメルヘン年齢鯖読みライター……」

「出会い頭にそんなすらすら暴言出る!?!」

「いや全部事実だし」

「あれ、星歌さん。ご無沙汰してます」

どうやら、『結束バンド』が拠点にしているライブハウス『STARRY』の店長こと虹夏の姉である星歌さんまで来ていたようだ。

やはり、妹が他の箱でライブをするとあつて心配して来たのかもしれない。

俺が挨拶すると、ギツと顔が険しくなる。

「一郎。虹夏と付き合ってるらしいな」

「付き合つてません」

「は？いやでも虹夏は」

「それは嘘です」

「オマエ……人の妹を嘘つき呼ばわりするの……！」

「星歌さん。俺はリヨウと交際中ですよ。二股もできる器量が俺にいますか

？」

「……

いや、虹夏は優しいからきつと何か甘い言葉でも囁いたんだろ」

「かなり悩んで絞り出すくらい無いんですね」

知らぬ間に最低評価だ。

虹夏は俺の事を家でも話しているらしい。

隣の毒♡闇も俺を汚物でも見るような目で睨んでくる。極めて心外だ。

「俺が浮気するようなクズなら、今頃は美人でカッコいいけど泊まる時に見た可愛い系の感じもある星歌さんにだって手が出てますよ」

イラツとしながらステージの方を見つつ吐き捨てるように身の潔白を弁解すると、何故か沈黙が下りた。

……何だ、信じられないって？

俺が改めて二人へと振り返ると、何故か顔を赤くして星歌さんが慌てふためいていた。

「ば、馬鹿野郎っ!?!こんな所でなに口説いてんだ!」

ええ……。

虹夏もそうだが、俺がただ普通に話しただけでも口説いたような言い回しだと誤解する。こういう部分は姉妹なのだろうか、それとも伊地知家の教育か。

少し呆れていると、隣で袖を引かれた。

「あたしは!?!」

「いや、自称14歳は流石に……」

「おまえ四通りの死を味わわせるぞ!」

ぼいずん♡やみなんてメルヘンな名前に似つかわしくない荒々しい脅し文句だ。その前にネットで炎上死させてやる。

「あ、結束バンドの番が来ますよ」

俺が言うのと、二人がステージ上に視線を向ける。

さて、茶番は終わりだ。

俺はさつと、紙袋からさらに追加で二本の団扇を取り出して掲げた。

『こんばんは!! 『結束バンド』ですっ!』

ライブが、始まる。

大人に頼ろう

「こんばんは!! 結束バンドですっ!」

虹夏の元気な挨拶が会場に響く。

俺はさっと手にしていた団扇を掲げるが、盛り上がっているのは俺だけらしく、周囲は今までよりも静かになっていた。

周囲と自身の温度差に少しだけ気恥ずかしさを覚えてしまうが、隣には同じように『結束バンド』を応援しに来てくれた同志が二名いる。

俺は独りじゃない!

心強き味方へと俺は振り返って……何で星歌さんも毒♡闇も若干距離を取ったのだろっか。

「次はロックバンドか」

「ロック聴かないしな〜……」

「このライブ何でジャンルがバラバラなの?」

そんな声が周囲から聞こえる。

ジャンルがバラバラなのは、俺も不思議に思っている。さっきの「黒髪以外はビ〇チ」？なる攻撃的な音楽を披露していたアイドルも、本当に『結束バンド』の出演するライブハウスが悩まされた。

出演者に統一性が無い。

だから、観客の興味もバラバラなのだ。

実際に『STARRY』で見る『結束バンド』のファンの顔がそこかしこに見受けられるが、ほとんど皆がロック自体に興味ある人間という訳ではなさそうであウェー感が少しだけ滲み出ている。

このライブハウスは、普段からこんな感じなのだろうか。

『今日は来てくれてありがとう！いきなりだけどメンバー紹介いきますー！』

お、来たか。

『ベース——山田リョウ！』

リョウのベースが鳴き声を上げる。

家で聞いている時とは段違いの本気のキレを感じる音に、俺はリョウ向けの団扇を掲げて大きく振る。

これだよ、これ。

最近はバイトで路上ライブも全然行けなかったのだからかなり間隔が空いていたが、俺はライブハウスに立って大胆に立ち回るリヨウたちを観たいのだ。

「ベースってあんな音出せるんだ〜……」

「スラップかっけー」

「あの人かっこいいかも……」

へー、スラップ？って言うんだな、あの演奏法。

つくづく自身の無知に呆れながらも、リヨウを見て恍惚としている女性たちに思わず忠告したくなる。

立派な見目に欺かれるな。

あれは一度懐を許せば際限なく搾取する寄生虫だ。

現に俺が持っている団扇は、日頃のアレコレに起因する殺意を乗せたメッセージである。決してフリでも冗談でもなく、ガチだ。

ふと、団扇を掲げる俺とリヨウの視線が交わる。

ふわりとリヨウが微笑んだ。

やや流し目で体を軽く揺すりながら見せた表情に、ますます周囲で女性たちの蕩けるような甘い嬌声上がる。相変わらず謎に女性の心を掌握する雰囲気とルックスを遺憾なく発揮しているようだ。

その反応にリヨウはというと、滅多に無いソロ演奏が出来た充実感に打ち震えている。……あと団扇がお気に召したようだ、変人だから。

『今日は私達の演奏で疲れた心を癒やし安らぎの一時をお過ごしください……』

「何言ってるんだアイツ」

「雰囲気で生きてる人間だからな」

いつの間にか元の距離に戻っていた星歌さんと一緒にアイツを鼻で笑った。

まあ、楽しそうなら何よりだよ。

『リードギター——後藤ひとり!!』

紹介に与ったひとりギターを弾く。

合わせるのが苦手と言っていただけあり、ソロ演奏ではやはり周囲をあつと言わせる演奏力だ。人目があるので未だ全力とはいかないが、俺が見た以前のライブの様子よりも大胆さがある。また成長してるんだな……と思ったなら恥ずかしくなったのか後ろを向いてしまった。背中が可愛い。

俺はもう一振りの団扇を振って応援を頑張る。

『ボーカル——喜多ちゃん!』

『はい! 不思議なライブだけど、これも何かの縁! 今日みんな一緒に楽しませんか! 東武? 西武? 池袋〜!』

「何だアレは？」

『『結束バンド』の前にやってた天使のキューティクル？とかいうアイドルがファンとやっていた掛け合いですね』

「なるほど。ああやって他のファンを引き込むのか、上手いな」

「あ、ひとりが歯ギター始めましたよ」

「ボトルネック奏法といい、ぼっちちゃん流石だな。引き出しがそこらのヤツと違う」
「冷静に分析するのやめろ。一周回って冷めてるように見えるからねアンタたち？」

喜多さんやひとりの立ち回りを評価していたら毒♡闇に盛り下げるなど注意された。
黙れ、オマエの年齢詐称ほど盛ってねえよ。

そんな口にしたら一瞬で殺し合いになりそうな雑言を心の中に仕舞いつつ、ライブに集中する。

『最後に、ドラムの伊地知虹夏です！それじゃあ、一曲目やりまーす！』
全員のメンバー紹介が終わったところで、早速曲が始まった。

本人たちの立ち居振る舞いが功を奏してか興味を引いたらしく、観客が減る事は無かった。面白そうだと思っただのか、最も危惧していた天使のキューティクル？とかいうアイドルのファン達も留まってステージを見上げている。

一曲目の演奏を俺が注目していると、隣から苦しい声が届いてきた。

「それはそうと、お前なんで来てんだよ」

「あ、たしは暇があれば色んなライブ観るようになってんの……!」

「お前が余計な事言ったせいでアイツら気にして……一郎?」

「べ、別に嘘は言っていないですよっ!」

「いや、年齢を誤魔化している」

「黙ってるよおまえ!」

何故か怒られた。

「ともかく、ギターヒーローさんが才能を無駄にして『結束バンド』で燻ってるの勿体ないじゃん。あんな才能持つてる人稀なのに……周りのメンバーも絶対差を感じて……」

差を感じる、か。

正直、バンド内で実力を発揮できないひとりに対し、それほど虹夏たちは差を感じてはいないだろう。動画の中のひとりとギターヒーローは、ある意味では別人だ。いつか本当の力を披露できる日は来るかもしれないが、何も虹夏たちだって成長していないわけじゃないし、動画もライブも見ている俺からすれば、いずれ実力の差を感じて本人たちの中に軋轢を生む事は無いと思っっている。

「だからギターヒーローさんは『結束バンド』以外の舞台が相応しい……っと思ってたんだけど、最近では下北沢でも評判らしいし、前よりは……その、いい感じじゃん。前より

はね!？」

「おお、初めて本音を……」

「嘘ばっか言ってるわけじゃないから!？」

記者なだけあり、しつかりと変化にも目敏く評価を改められる価値観があるようだ。嫌味なだけの人間でない事は、以前路上でぶつかって少し話した時に知ってはいたが。

俺と星歌さんが毒♡闇さんの素直でない態度にふ、と笑っていると。

「え〜お店以外でも会おうよ……いつも同伴してるのに……」

背後からそんな声を聞いて、三人で振り返る。

このライブハウスの店主が、隅に座って寝言を言っていたようだ。

呆れる俺の横で、星歌さんと毒♡闇さんが動く。

「いいライブ・真剣にやってんだから、ちゃんと見ろ!」

二人が寝ている店主を叩き起こし、説教を始めた。

ジャンルがバラバラな事といい、薄々とブッカーの方に問題があるのは察していたが、まさかいい大人二人にライブ中ガチ説教をされるとは哀れな……。

それはそれとして、俺は二人から少しだけ距離を置いて応援を続ける——が、両肩を掴まれた。

「私たちから距離を取るな!!」

「すみません」

何故か俺まで怒られた。

理不尽さに肩を落としつつも、会場と一体になって楽しげに躍動する四人に俺たちは思わず笑みをこぼす。

ライブを楽しんで、その上で楽しんで貰えるなんて、やっぱり素晴らしいバンドだと思う。応援していて良かったと思えるし、ここ最近のライブを観れなかった後悔が膨らむ程だ。

ちやらんぼらんな店主とか年齢詐称するヤツとか妹を盲目的に信じて俺を批難する人とか、今はそんなのどうでもいい。

今だけ。

「やっぱり凄いな。——『結束バンド』」

俺も感動して、団扇を激しく振って彼女たちの声に合わせた。

ライブは恙無く終わり、出演者同士が互いを称え合っている。

いつの間にか消えていた毒♡闇さんに取り残された俺と星歌さんは、壁際で他の出演者と交流する四人の様子を見守っていた。

「一郎。打ち上げくるか？」

「……団扇作るのに必死で放置してた学校の課題があるので心苦しいけど遠慮します」

「良いだろ、課題の一つや二つくらい」

「大人が言っちゃ駄目でしょ、その台詞」

「適度に力抜けて話だよ」

「え？」

だからといって課題の未提出は問題だと思いが。

「物事を真剣に受け止めて考えられるオマエの気質は褒めるべきだ。でも、何でもかんでも深刻に捉えて行動すると空回りして余計に事態が悪くなる事もある。……虹夏の

事といい、オマエはもう少し周りを頼れ」

「星歌さん……」

「百歩譲って虹夏がカノジヨを自称してるとしても、そういう時に姉の私でもいいから頼れ」

「……今度からちゃんと相談します。ありがとうございます」

「つたく、今回の虹夏も含めてオマエも大体そつなくこなせるからいぎって時に相談って選択肢が見えないからそうなるんだよ。気をつけな」

「はい。……今回の虹夏？」

俺の疑問に、星歌さんが少しだけ逡巡して答えた。

どうやら、『結束バンド』に來た誘いを見た時に、大体そのライブハウスがどんな物かを察して迂遠な言い回しで断念させようとしたが、それが逆効果になって虹夏が不貞腐れてしまったらしい。

それから相談も何もなく、きつとライブハウスに着いた時には事実を知って落ち込んだだろう、と。

「……俺も星歌さんみたいな姉がいたらって羨ましくなりましたよ」

「誰が義姉だ」

「やっぱり羨ましくくないです」

星歌さんがどん、と俺の肩を強く叩いた。

「取り敢えず、大人を頼れ。……お前の事も見守ってんだから」

……なんて優しい人なんだろう。

久しぶりに星歌さんが頼り甲斐のある大人に見えて苦笑してしまう。

「おねーちゃん！一郎くん！来てくれてたんだ!？」

俺たちを見つけた虹夏が駆け寄って来た。

「一郎くん、久しぶりのライブどうだった？」

「楽しかった。三ヶ月分くらいの活力は補給できたか」

「あはは、三ヶ月だけなんだね」

「うん。だから、次のライブも早めに頼むよ」

「っ、うん!!」

俺はそれだけ言って去ろうとしたが、虹夏に抱き着かれてしまった。

俺の胸にすりすりりと頭を擦りつけ始めたので、星歌さんに助けを求めると速やかに虹夏を引き剥がしてくれた。「あっ」と残念そうな声を漏らす彼女から颯爽と離れ、俺は出口へと向かう。

虹夏が不貞腐れたと話にあったが、きつと二人で話したいことも沢山あるだろう。俺は邪魔だろうし、課題の為に早く帰るか。

「一郎先輩♡」

「喜多さん、お疲れ様」

「どうでしたか？私、何度もライブ中に一郎先輩にウィンクしてたんですけど」

「えっ、あ、と……してた、っけ？」

「すまない、途中から星歌さんと毒♡闇に説教されたり、『結束バンド』全体に集中していたから、喜多さんがそんなサインを送ってきたなんて知らなかった。

「当惑する俺の反応で察したのか、喜多さんが自身の体を抱いてぶるりと震える。

「気付かないフリ……酷いです……♡」

もう、幸せそうだし何でもいいか……。

思考を放棄し、喜多さんを躲して出口に向か——服の裾を弱々しい力で後ろから引かれた。この慎ましい力加減から察するに、ひとり！

振り返ると、予想通りひとりがいた。

ま、まずいな。

あの夜のキス以来か。

「い、いっくん。どうだった？」

「カッコよかったぞ。やっぱり、ギター弾いてる時のひとは輝いてるな」

「うえへっ、うへへへ」

「元氣貰ったよ。ありがとう」

「あつ、じ、じゃあ、また今度、家行ってもいい？」

「そりゃ勿ろ、ん……」

あれ、流れでひとりを家に入れる約束を……。

でもひとりなら別にいいだろう。と思っていたが、えへへと嬉しそうに笑いながら自身の唇を指でなぞる仕草を見て、もしかしたら軽率だったかもしれないと俺は微かに危機感を憶えた。

前後をひとりと喜多さんに挟まれて、どうしようかと考えていたら、横から腕を強い力で引かれた。

どうやら、リヨウに引つ張られたらしい。

ライブ後なのに、やや不機嫌だ。

「一郎。ライブどうだった？」

「流石『結束バンド』。流石リヨウだ、また観に来て良かった」

「そう」

「そうだ。今日は家に来るのか？」

「うん、行く」

「飯は？」

「要る。お金無いし、打ち上げでもそんな食べられないと思うから作っておいて」
「俺の家でもそろそろ金払えよ」

ライブはカッコよかったが、コイツやっぱり寄生虫だな。

♪

♪

♪

♪

あのライブから十日経った。

何もする事が無い休日で、外の雨の所為で洗濯物も干せず、今日は憂鬱な気分である。家事をしないリヨウには共感できない気持ちだろう。

リヨウが珍しく家に帰っているのです、のんびりと一人で過ごせる事だけが不幸中の幸いともいえる。

俺は陽キャ君から借りていた小説『砂○女』を読み勧める事にした。

五感を刺激する窓を叩く雨粒の音と紙の手触りに安らぎを覚えながら、文章から伝わる情報に集中する。

いや、うん……相変わらずだな。

陽キャ君が凄くお勧めしてきただけあり、今まで貸してくれた本の傾向からも大体予測していたが、オブラートに包んでも中々に残酷な物語だ。

これを読んだ俺と、どんな感想会がしたいんだろうか。

最近では虹夏とリヨウの変なやり取りの所為で浮気野郎疑惑を向けられて居た堪れなくなり、教室を出ようとすると監視していたんじゃないかと思うほどピンポイントで陽キャ君が現れて阻止される。

まさか、いつかこの本みたいな内容で俺を苦しめるといふ遠回しなアピールもとい犯罪予告なのでは？と邪推してしまう。

「ん？」

インターホンが鳴り、思わず顔を顰める。

最近では郵便配達でも、リヨウかと思いい込んで条件反射でこんなリアクションになってしまうのを直したい。何もかもアイツの所為だ。

いやしかし、インターホンの音からしてマンション入り口の方からの呼び出しだ。リヨウや虹夏たちなら、そのまま暗証番号で素通りして玄関まで来ている……これも普通なら可怪しいことなだけだ。

俺は本を机の上に置き、インターホンを確認するとマンション入り口を映す画面には、濡鼠になった女性がいた。

あのスカジャン、まさか。

「きくりさん?」

『あつ、少年ー。助けてー』

「何事ですか」

『お金無いし、濡れちゃうしで死にそうだよ……』

呆れて物が言えないが、放っておくのも酷なので俺はきくりさんを迎えに行つた。

マンション入り口まで行くと、雨なのか涙なのか分からないがずぶ濡れの情けない顔で待っていた彼女を部屋まで案内し、風呂場へと直行させた。その間も散々腹を鳴らしてこれでもかと空腹を主張していたから、彼女が上がるまでに料理を用意しておく。

切り刻んだ長ネギと豚バラ肉を熱を通したフライパンのごま油の上で炒める。どうせ酒を飲むだろうから、相性が良いと思つてキムチ風にした。……酒飲んだ事が無いから、肴に何が良いかなんて正直想像でしかないけど。

きくりさんが上がる頃には出来上がっているの、ついでに昨日作っていたスパゲティサラダも一緒に机の上に出した。

風呂上がりでほくほくとしたきくりさんが卓上の料理を見て歓声を上げる。

「うはーっ！さすが少年！」

「お酒！お酒に合いそう！」

「我が家に酒はありませんけど……どうせ自分で用意してるんでしよう？」

「ここに来る途中で買ったよ〜」

「お金が無かつたのでは？」

「買ったからお金が無くなつたんだよ。うえーん」

「汚い涙ですね」

泣き始めたきくりさんの顔をタオルで拭いつつ、椅子に着かせる。

彼女が嬉しそうに飲み食いするのを尻目に、俺は再び本を読む。

「少年、今度ライブするから来てよー」

「是非」

「あ、大槻ちゃんが何で私のライブには来ないんだ〜！つて怒ってたよ？」

「そのまま放置しておいて下さい」

「いやー相変わらず大槻ちゃんにドライだね……」

俺は本に集中する。

集中する。

集中、する。

集中中………くそ、風呂上がりで妖艶なきくりさんに気が散ってしまう！普段から目も当てられないくらい情けない姿ばかり見ている所為で変なギャップがある。

そんな俺の内心を見透かしてか、ニヤニヤと笑いながらきくりさんがこちらを見ていた。

上気した頬と、酒で酔ってとろりと潤んだ瞳、ちらちらと覗く鎖骨に俺はため息しか出ない。

「少年も元気になったね〜」

「はい？」

「考えてみてよ。最初は私を部屋に入れて風呂に入れたって、特に何も反応無かったのにさ。今も同じ事してるだけなのに、前より思春期男子らしい狼狽えぶりじゃん」

「馬鹿にしています？」

いやでも、言われてみればたしかに。
やっている事は当初と何も変わらない。

だが、伊地知家に泊まっていた時といい、最近きくりさんやらひとりやら、異性として意識していなかった相手を妙にそういう目で見てしまうようになった気がする。……きくりさんは最初から薄着の事とか意識はしてたけどさ。

「段々さ、他人に興味持ててる証拠だよ」

「……そう、ですな」

「お、自覚アリ？」

「はい。ここ一年は特に、自分でも他人を受け入れて行動できるようになったな……と。勿論、グイグイ来る人が多いのが影響として大きいと思いますが」

それを聞いたきくりさんが嬉しそうに笑い、手招きする。

酒臭いだろうなと思いつつ、俺はきくりさんの隣に座った。

ぐ、色気が……っ！

香るような色気に、思わず目を閉じて呼吸も止めてしまう。だが、そんな俺の努力を嘲笑うようにきくりさんの細い体が肩に寄りかかってきた。

「なら、少年はもう大丈夫だね」

「そう、なんですかね」

「そうだよ。だってさー、酔ってたとはいえ私にキスするような乱暴までするしね」
「キス？ 乱暴!？」

「こんな風にさー。あぐ」

憶えの無い事に混乱する。

俺がきくりさんにキス、したけど？ その時はもしかしたら天地がひっくり返っていたかもしれない、と以前までの俺なら言うだろうが、今はこの隣の色香を漂わせるきくりさん相手だと断言できない。

俺が思考の迷路にハマっている間に、その時の事を思い出させるようにきくりさんが首筋に噛みついてきた。酔った時のこの人の噛み癖、後で志麻さんに連絡しよう。

……いや、ちよつと待て。

「俺に酒飲ませたんですか？」

「……し、知らない間に飲んじやったみたいでー」

「……後でとか言わず、もう志麻さんと相談しますね」

「やめてー!! 殺されちゃう!!」

「手遅れです。観念して………お？」

通報もとい志麻さんに報告しようとした時、再びインターホンが鳴った。

今度は扉の前からである。

まさか、リョウか……？

まずい、他の人間を家に上げるだけでも不機嫌になるのに。酒臭いきくりさんなんて言語道だ……いや、アイツ一応いきくりさんのファンだし大丈夫か？

それに、リョウとも限らない。

虹夏やひとり、喜多さんだつて暗証番号を知っているから普通に玄関まで来る。……

『結束バンド』で情報共有でもしてるのかな、やめて欲しい。

「はいはい！」

「あつ、ちよつと……!?!」

いきくりさんが俺の代わりにと玄関方面に向かう。

ま、待て！

虹夏だろうとリョウだろうと貴女が出ると事態がややこしくなる。折角この前のラ
イブでも楽しい雰囲気が終われるくらいには関係が修復できたのに、また余計な誤解を
生んでしまったら収集が付かなくなる！

慌てて追いかけたが、もう遅かった。

俺が廊下に出た先で、確認もせず玄関扉を開けたいきくりさんが客人を迎えていた。

「一郎、何してるの」

「あはは、楽しそうだね。一郎くん」

よし、星歌さん助けて。

他で浮気始めたんだ？

大変な夜を乗り越えて迎えた朝だ。

バイトも無いので、悠々と家事に勤めようとプランを組んでいた。

今も洗濯物を籠にぶち込み、ベランダで干す為に移動したいだが、その作業中もずつと俺の動きを背中に乗っている重みが阻害している。

「リョウ、邪魔なんだが」

「私は気にしない。続けて」

「害悪めが」

後ろから、リョウが寄りかかっている。

まるで俺を壁のように無警戒に背中を預け、呑気にスマホを見ていた。

肩越しに苦言を呈しても改める様子は無い。

朝起きてから、俺の傍を離れてくれない。ハッキリ言っただまじいくらいに邪魔だ。

原因は、おそらく昨晚の出来事だ。

きくりさんと虹夏とリヨウが一同に会した夜、諦めて飯だけ出して直ぐに敷布団を敷いて床に就いた。起きたら家が半壊してても良いやという諦めの境地だった。

幸いな事に、特に何もなく寝れた気がする。

まあ、起きたらリヨウと虹夏に挟まれて寝ていて、布団の傍では蹴り出されたみたいなのが好で倒れて眠るきくりさんがいる地獄絵図は朝から精神に堪えたが……。

そして、虹夏ときくりさんが帰った後で現在の状態に至る。

一箇所に留まって何かしているとぐりぐり体擦り付けてきたり、何処へ行くにも行く手を塞ぐように纏わりついてくるリヨウ……何かテレビで観たネコみたいだな。

虹夏も毛並みの良いスペシャルな野良猫とか言ってたが、まさか本当に??

どちらにしろ、猫や犬よりデカくて邪魔には違いない。

「あっち行つててくんない?」

「理由を聞きたい」

「邪魔」

「なら無問題」

「これからオマエもベランダに干そうか?」

俺の事情くらい汲めよ。

オマエだつて同じ事をされたら、十中八九嫌がるだろ。

呆れて無言で睨むが効果は無い。

「ていうか、準備しなくていいのか？」

「……何が」

「たしか昼過ぎから虹夏たちと予定があるんじゃないやなかったのか？えつと、遊園地の……」

「よみ瓜ランド」

「そう。そこで遊ぶんだろ」

「面倒臭い」

「行けよ。そして俺を解放しろ」

午前十時。

そろそろ動かないと本格的にマズいだろ。

顔も洗ったり何だりと、後は着替えるだけ。

だが、それが行われる気配だけが一向に無い。

今日は『結束バンド』と『STARRY』のスタッフにきくりさんを加えてよみ瓜ランドで慰労会を兼ねた休日を楽しむと虹夏から聞いた。

その際に、虹夏には「リヨウを絶対に寝坊しないよう送り出して欲しい」と頼まれたのだ。

『一郎くん、お願いしていい?』

『それくらいならお安い御用だ。俺も起きてるし』

『えへへ』

『ん?どうした?』

『何かさ、私とか一郎くんが甲斐甲斐しく面倒見てる感じが何か、リヨウって娘の面倒見てる感じだよな』

『ああ、それは同か——』

『私と一郎くんの子供、だねっ』

『……………』

同感、と言い切っていたら危なかった。

朝からしつかり俺の背筋を凍らせていく虹夏のきくりさんを引き摺って去る後ろ姿を見て、リヨウを必ず予定通り家から叩き出そうと誓ったのだ。

朝食は食わせたし、後は着替えて出ていくだけ。

だが、本人は未だ眠いだのダラダラしたいだの不満タラタラである。

しかし、俺は知っているぞ。

行く前は散々面倒だとか愚痴るが、雰囲気で生きている気質だから現地に行けば場の空気に流されてテンションが高くなり、気付けば虹夏たちとエンジョイしているに違い

ない。

どうでもいいが。

「ちゃんと行けよ」

「二郎しつこい。朝からそればかり」

「虹夏に頼まれたんだよ」

「……………」

「背中に頭ぐりぐりすんな。痛いから」

朝から面倒臭いテンションだ。

感情も読めないし、頼むから早く行け。

もしこれでリヨウを送り出せなかったら、虹夏にまた何を言われるか分からない。俺も不甲斐ないヤツだと言われ、世話を焼かれ始め、そのまま流れるように気付いたら虹夏に養われている最悪の未来まで直行してしまふ気がする。

それに、きくりさんの飲み散らかした酒と消臭と色々やりたい事が沢山あるんだよ。

洗濯機から籠に洗濯物を移し終え、そのままベランダへ移動するが一步前をリヨウが歩く。

窓辺に籠を置いて干す作業を遂行する間も、籠の横ですつと使いたいハンガーや洗濯バサミで遊んでいたりと……だから準備しろって！

「虹夏からお小言喰らうぞ」

「んー」

「何すればオマエは準備してくれるんだよ……」

「一郎も行こうよ」

「遊園地、苦手なんだよな」

「そうなんだ？」

「家族連れとか見ていると胸がムカムカする……」

夏祭りさえ苦手な人間なんだ。

遊園地なんて場所に対する拒絶反応は、その比ではない。後藤家とならば辛うじて行けるが、後日鬱気分になるのは防ぎようがない。

控え目に言って、人に見せられる顔にならないと思う。

想像しただけで胸がムカムカするし。

きくりさん曰く去年から少しずつ成長していると評価はされたが、未だに拭い切れな
い苦手意識や拒絶反応はある。

ライブハウスは、家族連れというより個人の趣味で集まる人間が多いから特にコンプレックスのような部分は刺激されなくて済む。初めて『S I C K H A C K』のライブで
楽しめたのも、そういった面が大きく影響している。

皆で楽しんでる方々もいるにはいるんだけどな。

「リヨウは遊園地嫌いか?」

「別に。遠くまで行くのが疲れる」

「そうか。行け」

「自分には甘いね、一郎」

「オマエにだけは言われとうない」

少なくとも俺は行く意味が無いから甘いと言われるのは心外だ。

「そもそも遊ぶ気分じゃない」

「ワガママだなあ」

「今日、『未確認ライオット』の審査結果が来るから」

「審査って、あの新曲の音源提出したアレか?」

「そう」

もうそんな日だったのか。

この前のライブを『未確認ライオット』前哨戦と謳っていた虹夏たちだから、自信があるのだと思っていたんだ。リヨウの反応を見るに、本人にとってまだまだ不安要素はあるらしい。

……いや、待てよ?

「みんな結果来てないのに遊ぶのか？」

「うん」

「自信あるのか無いのか分かんねえな……」

俺は嘆息しつつ、リヨウを両腕で抱え上げて運び、自室の床に下ろすとクローゼットを開けた。

すっかりコイツの服で占有された中は、ここ二年で如何に我が家が侵食されているか目に見える形で存在している場所だ。

無言で催促する俺の目に、渋々といった様子でリヨウが動き出す。

良かった、これで最悪の未来は免れたな。

部屋を出て胸を撫で下ろし、アイツの所為で今まで停滞していた分を片付けにかか
る。

でも、そうか。

そろそろ『未確認ライオット』なんだよな。

ヨヨコには、『結束バンド』か『SIDEROS』のどちらを応援するかを尋ねられて、悩んでいると言つて以降は考えもしていなかった。

ただ、白状するところのまま何も考えず『結束バンド』を応援する流れではある。

長く身近で触れているという如何にも公平性の無い理由ではあるのだが。

「一郎。お土産要る？」

「土産買う金なんて無いだろ」

「それはそう」

「こんな虚しい確認あるか普通？」

一分としないで出てきやがった。

そんだけ時間かからないなら着替えくらい済ませておけや。

「一郎」

「なに？」

「……何でも無い」

何でも無いと言う割には、その後もじつと俺を見ている。

着替えも済んだし、集合時間等を考えたらそろそろ出発すべきだろう。リヨウがまた動かず傍に貼り付き始めたので、仕方無く俺がよみ瓜ランドまでの電車時間を調べてスマホに転送した。

後は金が無いと宣う財布に往復分の交通費だけぶち込んでおいた。

本気でヤバいので、背中を押して玄関に追い詰める。

「財布とスマホ持ったな？」

「うん」

「折り畳み傘も持ってけ。帰り頃に降るらしいから」

「……はあ、行ってくる」

「何でため息つくんだよ……」

こんな甲斐甲斐しく世話しても不満らしい。

もういつそ何処かの王族にでも転生しろ……王族も責務とかやる事が多いから意味無いと思うが。

しかし、今日のコイツずっと俺の近くにべったり貼りついたり、さっきの無言の眼差しだったり、一体何なんだ？

いつにも増して意味不明だ。

まるで猫みたいだ、本当に。

ネコ……ネコに当てはめてやると、餌が欲しいとか構って欲しいとか、だな。

前者はすでに朝食を与えたから問題無いだろう。

後者は、たしかに昨日からきくりさんや虹夏への応対もあつたし、面倒臭くて直ぐに就寝したつてのもあつて全然相手していないが、リヨウに限って人に構われなくて寂しいとかそんなワケは……ないよな？

不審に思いつながら、ゆつくりと出ていくリヨウを見送り、俺は改めてアイツが居たから出来なかった掃除を始めようと掃除機を手にしたところでポケットのスマホが震

動した。

リヨウからのロインらしい。

『昨日から私のこと放つたらかし』

寂しかったのかよ。



リヨウも居ない夕方だった。

バイトも無く、休日でも寄生虫も不在——謎の奇跡が三つも揃うのは中々に無い。

本来はこれが当たり前なんだがな。

何の因果で女の子を家に泊めて、酒酔いのお姉さんを介抱しなくてはならないのか。雷が頭の上に落ちる事よりも確率の低そうな展開ばかりである……多分。

「どうすれば回避できたのか」

ストレスもかなりある。

だが、良い思い出もあった。

こんな事にならないよう回避するにはと思考しようにも、一概に悪い出来事だとは言えないので考える事自体が無駄に思えてしまう。

今夜もきつと、リヨウが来たらそのまま迎え入れてしまうくらいに自分は抵抗的な意識を放棄している。

しかも、今日のアイツは構って貰えなくてかなり不服だとか言っているので、間違い

なくいつも以上に厄介な怪物になっているだろう。

よみ瓜ランドでかなり体力を消耗している事を期待している。

俺と相対する時はへ口へ口になっていてくれ。

「……しかし、雨酷いな」

さつき辺りから雨が強くなっていた。

たしかに、予報で六時前くらいから降るといふ予報はあったが、ここまでの強雨だとは思わなかった。

暗い空に斜線を引く強い勢いから、傘を差してもまず足がぐつしより濡れるのは必至。無いとは思うが、傘を忘れた人間が居ようものなら全身お陀仏……川にでも飛び込んだレベルで濡れているに違いない。

リヨウには折り畳み傘持たせたが、それでは心許無い。

この分だとずぶ濡れだろうな。

でも、どうせ濡れてもここには着替えもあるし大丈夫だろ。

そう思っていたら、インターホンが鳴った。

やれやれ、どうやら帰って来たらしい。

意外と早かったな、とは思いつつ俺はソファから腰を上げてタオルを片手に迎えようと玄関に向かった。

「悪いわね、突然」

「ホントだよ」

リヨウじゃなくて、大槻ヨヨコだった。

しかも、居ないだろうと思っていた傘無しだったらしく、濡鼠となっている。

どうやら『結束バンド』の事が気になり、『STARRY』へそわそわしながら審査結果がどうなったか確認に来たらしい。……いやロイン使えよ、喜多さんや虹夏とは交換しただろうに。

結果、雨による強襲をモロに受けてしまい、ずぶ濡れになって絶望していた時に俺の家が近いことを知っていたらしく、近寄った次第……何で俺の家の住所知ってんだよ。呆れつつも、ヨヨコを風呂場へ直行させた。

その途中で。

「あ、イチロー」

「ん？」

『SIDEROS』は審査通ったわよ」

「そりやそうだろう」

「……ふんっ」

俺の返答にきよんとしたと思ったら、急に嬉しそうに鼻歌を響かせつつ脱衣所へと向かっていく。

うん、『SIDEROS』の実力なら間違いないとは思っていたから当然だと思っていた故の反応なんだが、どうやら調子に乗らせてしまったようだ。

浴室に入った頃を見計らって脱衣所に入り、着替えを置いておく。

因みに服はすぐ乾燥機にかけて……もう躊躇いも無く女性の服や下着に触れる辺り、慣れてしまったものだと言沁沁する。

それから居間に戻ったが、雨は今日一日は降っているらしいのでヨヨコはどのタイミングで帰るのだろうか。

まあ、出る時に声かけて貰えば良いか。

帰ってくるであろうリョウと自分の分の飯にだけ注意すればいい。

俺は手早くスープ餃子と鰹の竜田揚げ、魚肉ソーセージのサラダに取り掛かる。

「お風呂、ありがと」

「ああ、もう出たのか」

「服まで乾かしてもらって悪いわね」

「この時間帯は雨降るって予報で言ってたろ。もしかして傘でも壊れた？」

「——いや、朝から審査結果の待機でドギマギしてそれどころじゃ無かったのよ」

「何で俺より本人の方が不安なんだ……」

「こういうネガティブな部分はひとりに似ている。」

「実力は同年代じゃ頭ひとつ抜けていると調べた記事（ぽいずん♡やみ著以外の物も含めて）でも個人的にも思っているんだが。」

「出会った頃からだが、ライブ前から顔色が悪くなる程にナイーブになるヨヨコは、『結束バンド』を見て参加を決めるといった大胆な態度で臨んだ『未確認ライオット』でもやはり不安は膨らむようだ。」

「もつと自信持てよ」

「……そ、そう？」

「『SIDEROS』の凄さは誰よりも……ではないな、まあ一ファン……いや強く推してるワケではないからファンを名乗るのは烏滸がましい……まあ、うん、凄いのは知ってる」

「アンタ私を不安にさせたいの!!？」

「励ますって難しい。」

「あ、そう言えばだけど」

「ん?」

「イチローは、どっち応援するの? 『結束バンド』か、それとも『SIDEROS』か」

『結束バンド』

「がふツツ……そ、そう……」

「まあ、そもそも『結束バンド』が審査通過するかもまだ分かってないし。俺もこれから『SIDEROS』の楽曲とかネットに上げてるやつ再視聴して決めるつもり」

「優柔不断な男はモテないわよ」

「ヨヨコにモテても意味無いだろ」

「今日は世界が私に優しくない!!」

雨に降られた後でメンタルも弱いようだ。

「ところでヨヨコ」

「なによ」

「……そんな睨むなよ」

「眼の前でハッキリおまえは応援しないって言ってきたヤツ相手にしても文句ないで

しょ」

「悪かったな。……それで、雨は明日まで降ってる予報だけど、どうする?」

「どうするって」

「服が乾いたら俺が傘貸して帰るもよし。家族に迎えに来て貰うもよし」

「そうね。流石にまた濡れるのも面倒だし、申し訳ないけど家族に迎えに来てもらおうわ」
連絡の為に別室に移動したヨヨコから視線を外し、再び手元の包丁とまな板に意識を戻す。

迎えに来て貰う、か。

そういえば、何だかんだで俺ってバンドマンの家族とやけに面識があるよな。伊地知家といい、山田家といい、後藤家……この調子で行くと喜多さんの家族ともその内会うかもしれないな。自意識過剰かもしれないが、どんな風に俺が伝わっているか想像するのも怖い。

自分の想像で恐怖に震えていると、何故か蒼白い顔でヨヨコが戻って来た。

「どうした？」

「な、何か家族に連絡したら、同い年の男の子の家で雨宿りさせてもらってるって言ったら、黄色い声が聞こえてきて……迎えに行けないとか言われた……」

ちよつと何言ってるのか意味が分からない。

なぜ同い年の男の子の家にいる事を喜んでるんだ、その家族は……。

まあ、よく分からないが迎えに来て貰えないともなれば、この雨中に再び帰らせるの

も気が引けるし。

「ヨヨコが良ければ泊まって行くか？」

「へっ？いい、いいの？」

「まあ、連絡も無く人が泊まりに来るような時もあるから慣れてるし、全然問題無いぞ」

「そ、そう？じゃあ、お言葉に甘えてそうするわ」

「飯はもう少しで出来るから待っててくれ」

俺がそう言うと、何故かヨヨコは呆然と立ち尽くしていた。
まさか、この状況で追い出すような薄情な人間に見えたのだろうか。まあ、場合に
よってはそうするが。

「どうした？」

「い、いや別に。まさかご飯まで出るとは思わなかっただけよ」

「泊まるんだから普通だろ」

「そ、そう……っ！」

そう言っただけで何故かホツとした様子のヨヨコだったが、次の瞬間には盛大に腹が鳴っ
た。

居間に沈黙が降りる。

燃えるように真っ赤になったヨヨコにどんな言葉をかけて良いか分からず、俺も気を

紛らわせるように手元を動かし続けた。

「つ朝から気を張つててちよつと眠くなつたから何処かで横になつてもいい!」

「ああ、なら俺のベッド使つてくれ」

「アンタのベッド!?!」

「今朝シートも取り替えたりしたし汚くないと思うんだが……」

「あ、いや別にそういうワケじゃ……。そ、そうね、有り難く借りるわ」

逃げるようにヨヨコが俺の自室へと走り去っていく。いや、そこトイレだから。

一旦料理の手を止めて、ヨヨコを俺の部屋に送つてからキッチンに戻つた……。と。

ほぼ同時に玄関から扉の開く音が聞こえ、俺はそちらへとタオル片手に向かつた。

すると、予想通りリヨウが立っている。

意外な事に、あまり濡れていなかった。

「あれ、濡れてない」

「折り畳み傘以外に虹夏が傘用意してくれた。……足は濡れたけど」

「はいはい。風呂入るか?」

「ん」

タオルを敷いた後、キッチンへ戻ろうとした俺の背中にリヨウが抱き着いた。

急に何だ…….と思ったが、たしか出る前に構つてほしかつたというのを思い出した。

「飯作ってるから後で」

「……………わかった」

不承不承と離れたリヨウが、タオルで拭いた足でとことこと歩いて着替えを取りに自室へ行く。

やっぱり、今日のアイツはネコなんだな。

虹夏の言っていたスペシャルな野良というのが今になって妙にしつくりきた。

そんな冗談はさておき、今晩は三人だから一人前多く作らなきゃ……………つて、あ。

今さら気付いて、俺の自室の扉を開けるリヨウを止めようとしたが遅かった。

室内を見たりヨウが、固まっている。

それから、ゆつくりとこちらを見た。

「……………へえ、『結束バンド』だとバレるから、他で浮気始めたんだ？」

今晚も地獄確定だな。

やられたら、やり返す

ダイニングテーブルを挟んで俺の正面に座るヨヨコは、まるで信じられない物を見るような目で俺の隣を凝視している。

ヨヨコにとつて、これは異質な光景らしい。気になり過ぎて食事の手は止まっていた。

俺からすれば日常の風景なので、特に気に留めず行動できるが、やはり旅館でもない知り合いの家で自分以外にも宿泊客が居るといふのは存外気まずいかもしれない。

……そうらしいぞ、オイ。

俺も隣に視線を映す。——睨むように。

「……なに？ 一郎」

「いや、別に何も」

「欲しくてもあげないよ、竜田揚げ」

「欲しくて見てたんじゃない」

「……ああ、私が見惚れるほど綺麗だったんだ。何かごめん」

「俺には一生できない勘違いだな」

この自信は本当に何処から来るんだ、コイツ。

いつそ清々しくて見習いたくもなる。

俺が呆れてため息をつくとき、机の下で俺の足をヨヨコの足がつつく。何かと彼女の方に向き直れば、さつきよりも驚愕の色を深めた表情でぱくぱくと口を動かしていた。

口が動くなら早く食べなさい。

「あ、アンタ何も思わないの?」

「……?リヨウの事か?」

「それ以外あるワケないでしょ!何でアンタのシャツ一枚だけで普通に過ごしてるのよ、この子!」

「リヨウが俺の用意した物を着ないで勝手に服を借りてくのは日常茶飯事だ。一々そんな事で目鯨立てる意味無いだろ」

「え、嘘、あたしが異常なの?」

困惑するヨヨコだが、これは普通なのだ。

シャツ一枚姿なんて見慣れた物、むしろカツとなって食って掛かる方がリヨウの思う

壺だ。こちらの調子を崩して優勢の悦を味わいたい習性を知っているのです、こういう時はスルーが対寄生虫の心得である。

やはり、初見のヨヨコでは難しいか。

俺や虹夏……虹夏ももう手遅れ気味だが、それくらい経験値を詰まないとな。

冷静に対処でき……痛い!!

脇腹を抓られた痛みで隣を睨むと、無感情な目とかつちり視線が合う。

「まだ、ここに『SIDEROS』の人がいる理由聞いてないんだけど」

「近くに来た時、雨で濡れてここに避難したんだよ。親も迎えに来れないから、今晩は泊まる」

「理由なんて幾らでも作れる。一郎は怪しいと思わないの?」

「理由も無く泊まるヤツがいると大概どうでも良くなるんだよ。だから服を勝手に借りたりベッドを強奪するヤツがいても何も感じなくなっただけ」

そう言うのと、リヨウが悲しげに眉を下げた。

「そんな人いたんだ……私でもそこまですらない」

「全部オマエの所業だけ?」

該当してるだろ、全部。

羅列したんだよ、屈辱の記憶をな。

腕を持つ手が怒りで力みすぎて震え始めた。

「ねえ、イチロー」

「何だ？」

「アンタ、山田リヨウに何か弱味でも握られてるんじゃないでしょうね？」

「特に無い」

「無いの!？」

まさか、俺が弱味を握られてリヨウの強引な宿泊も看過していると思っただのか。

その方がまだ精神的にも安定しそうだ。

ところが、俺は全くそんな事が無い。

リヨウは至ってシンプルに正面突破で来て、こちらを根負けさせて宿泊しているのだから、これは俺自身の失態、精神力の問題である。

「なら、アンタが山田リヨウの弱点でも知ってればマウント取って家から追い出せるんじゃないの?」

「リヨウの弱点?」

「そう」

「弱点……耳?」

「っ」

「んなッ?!? 変態か!!」

「痛っ……え、これは駄目なのか。後は……」

「口を開いたらもう一発いくわよ!?!」

ヨヨコの投げじたティッシュ箱が顔面に炸裂した。

人に物を投げちやいけなんなんて今どき幼児でも教わる事を破るとは、やはりヨヨコも常識外れでロツクな部分があるんだな。

それにしても、リヨウの弱点か……。

ひとりや多方面に借金してる事とか、ビジュアルの良さで周囲を誤魔化してはいるが食で困窮すると雑草しか食べなくなるとか。

でも、割と周知されてるから弱みにならない。

俺が知るリヨウの弱点なんてそんなに知らないのだ。

それでも駄目となると、もうお手上げである。

自身の体を抱いて椅子ごと身を後ろへ引くヨヨコ。

隣では、リヨウがそっぽを向いていた。片耳を手で隠しており、首筋は真っ赤である……御立腹らしい。

かなりの失言だったようだ。

俺が謝ると、ヨヨコは視線の鋭さはそのままにテーブルの方へと戻って来てくれた。

リヨウはまだ許さないみたいでこちらを見ない。

「ま、お互いが良いなら何も言わないわ。異常だけど」

「良くはないけどな」

「そう。大槻さんに口を挟まれる謂れは無い」

「反応が逆過ぎて対応に困るんだけど!?!」

疲れたような顔でヨヨコがリヨウを見た。

「それで、『結束バンド』は審査どうだったのよ?」

「問題無く通過した」

「そ。でも残念ね、イチローは私たちを応援するらしいから!この次の審査は投票制だけど、そこでコイツを頼らない事ね!」

「は?」

「い、一郎?嘘だよな?お、お願いします。どうか我らに清き一票を……!」

急に青褪めたリヨウが俺の手を握って懇願し始める。

いや、たしかにネット上にある『SIDEROS』の楽曲なんかも聴いて、改めて決めるとは言ったが、まだ応援するとまでは言っていない。

これは、リヨウ……『結束バンド』の動揺を誘う作戦か?

ヨヨコの言う通りに投票制ならば、たしかに身近な人間を確保しておきたいだろう。

ヨヨコにしては大胆不敵な嘘というか。

「え、ちよ、じ、冗談のつもりで……」

だが、思いの外効きすぎたのを見てヨヨコも困惑していた。

それなら言うなよ。

「く、斯くなる上は……!」

「おい。食事中に行儀悪いぞ」

リヨウが何やらスマホを操作し始める。

俺が『SIDEROS』に投票すると確定していないのに、一体何を仕出かすつもりなんだ。

嫌な予感しかしない。

俺は平らげた皿を重ねて流し場へ運ぶ。

もう三人で会話していても碌な事が無いので、後は好きにやっつけてくれ。その間に俺も風呂に入ったたりして熱りが冷めるのを待つとしよう。

アタフタするヨヨコと、何やら不吉な気配を漂わせるリヨウが気付かないように俺は風呂場へと移動した。

全く、アイツら何なんだよ。

昨日今日と俺を虐めたいにしては酷い状況だ。

でも、ヨヨコは特に粗相しているワケでもないし、人の家に泊まるのが初めてという感じなのかギクシヤクシ過ぎな部分もあるが、その気遣いもあつて俺の方は迷惑していない。

昨日よりは、随分とマシだ。

ここに虹夏とかきくりさんが居たら大変だったが。

俺は苛立ちで頭を掻き毟るように洗いながら思考する。

『うー、濡れたー』

『どうしたの?』

『途中で車の水跳ね受けちゃつて。……それより、一郎くんという一票が危ないって本当?』

『うん』

『そうだよ。』

これはむしろ、状況が改善しているんじゃないか?

明日にはリョウウ一人となり、いつも通りとなる。

現在の面倒臭い状態を時間が解決してくれるなら、俺が特に労力を費やす事もない。

『なら、何とかしないとね。私も頑張つて説得するよ!浮気は駄目だもんね!』

『その前に虹夏、シャワー浴びてきたら?』

『そうしたいけど、一郎くんに許可を……一郎くんは？』

『何処行つたか分かんないけど、私が許可するから大丈夫』

『リヨウは前田家の人じゃないでしょ……』

『一郎が山田家になるから問題無い』

いや、でもさ。

どうして、今だけだとしても俺が堪えなければいけないんだろうか。

その時点で理不尽にも程がある。

やはり、明日からリヨウだけだとしても追い返すべきなのか。……これは二年前から久しく忘れていた抵抗心が蘇ってきているな。

『じゃ、シャワー借りるねー』

『うん』

『あれ、電気付いてる。もー、付けっぱにしたの誰？まあ、私を使うからいつか』

よし、言つてやろう。

風呂を出たら、厳しく言つてやるんだ。

もう俺は流されるだけの男じゃないぞ、と。……流石に今すぐ出て行けと鬼畜な事は言わない。

ただ、リヨウが抱いているであろう『押しに弱くて扱いやすい男』という認識を正し

てやるのだ。

やってやろうじゃないか！

そうと決まれば、手早く風呂を出て――

「二郎くんの為にも早く終わらせよーつと……え？」

ん、誰かの声が聞こえる。

シャンプーの泡が目に入らないよう瞼を閉じているし、洗っている音に紛れて一瞬気の所為かと思ったので、目を開けて扉の方を見る。

すると、そこには虹夏がいた。

いつもと違い、髪を解いていて雰囲気が違う……いや、いつもと違うと思うのはそれだけではない。

これは。

「……………めん」

「っひゃわああああああ!!？」

悲鳴を上げて、虹夏が風呂場を飛び出して行った。
ホント、何かゴメン。

♪

♪

♪

♪

虹夏を新たに加えた居間は静寂に包まれている。

私——山田リヨウは、真っ赤になつた顔を手で覆つて未だに混乱している幼馴染の姿に憐憫を覚えた。

前に一郎を誘惑する時、『箱』まで出して迫っていたとは思えない初々しい反応。

「虹夏、ドンマイ」

「い、一郎くんに責任取って貰う……絶対」

「下北沢在住以外の一郎でね」

私が慰めるが、それを聞く余裕も虹夏には無い。

そんな虹夏を見て、自分の場合でも想像したのか大槻さんも真っ赤になっていた。さつきから「本当にこんな事あるんだ」とか「は、裸見られたってホント?」とか変な独り言ばかり聞こえる。

この二人の相手が面倒臭くなってきた。

ご飯も食べたし、映画でも見ようかと棚を漁っていると後ろから足音が聞こえた。

振り返ると、風呂上がりの一郎がいる。

「出ましたー。虹夏もいらつしやい」

「は、はい!」

「ああ、うん……さつきはごめんな。風呂空いたから、使うならどうぞ」

「あ、あはは。じ、じゃあ借りるね……一郎くんは冷静なんだ……私の裸見たの……」

尻すぼみしていく声で虹夏がそう呟く。

一郎は聞こえなかったみたいで、首を傾げていた。

早足で去っていく虹夏を見送ると、私の方へと歩いて来る。

「何で虹夏も来たんだ？」

「私が召喚した」

「何故に？」

「一郎を説得し、あるいは力尽くで吸収して『結束バンド』に清き一票を」

「それは絶対清くないだろ」

一々小言が多い男だ。

勝てば官軍、負ければ何だったか忘れたけど、すべて勝てば結果オーライ。清濁なんてこの際どうでもいい……虹夏に怒られそうな台詞だけど。

怒らせると本当に怖い。

この前だって、虹夏の家でテレビで観た情報番組による結婚式に関する知識なる物を見た時に。

『結婚式って面倒臭い』

『リヨウはまず相手がね』

『……？一郎がいる』

『一郎くんは、ほら。将来的に、ね？』

『山田家になるって言いたいのか？なら大丈夫——唐突なバイオレンスぐふうツツ!!』
何故か虹夏にプロレス技をかけられた。

アレ以来、虹夏の間合いに入るのがふと怖くなる瞬間がある。

洗練された動きは、素人目の私でも明らかな達人感があると分かった。ドラムつて凄
い。

回想に浸っていると、一郎は大槻さんと会話を弾ませていた。

この二人……仲が良い。

お互いに気を使わず、ガミガミ言い合うところとか私以外に見た事が無かった。虹夏
やクラスメイトにだって当たり障りの無い反応するくらいなのに。

……何でそんな仲良いんだろ。

このままでは、『SIDEROS』に取られてしまう。

まだ『結束バンド』が彼女らに人気では勝っていないのは重々承知している。

だから、何としても一郎という身近な人間だけでも引き込まなければ。

「一郎……」

「何だよ」

「私は一郎の弱みを握ってる」

「……ほう」

さつきは、私の弱点が耳とか散々な嘘を……う、嘘じゃないけどトンデモないカミングアウトをしてくれたのだから、私もやり返さないと気が済まない。

弱みを握っていると宣告した私に対し、一郎は疑いの目を向けてくる。

ふ、生意気な。

今に見ているといい。

「一郎の弱み……それは」

「それは？」

「私の指が綺麗で好きだというところ。——でしょ？」

決まった。

素直じゃない一郎は、私のことに関しては特に認めたくないと変に反抗する部分がある。

学校でもクラスメイトに私の何処が好きなのかを尋ねられて、変に誤魔化していたくらいだし。気になって、それから一郎を観察していたら、よく私の指を見ていた。

だから、どうして見ているのか尋ねると「綺麗だなと思って」と言っていた。クラスメイトには答えず、私にしか言えない。

大槻さんの前でカミングアウトされたら困るでしょ……これでさつきの仕返し——。

「そうだけど？だって、ベーシストとかギタリストって指先まで配慮行き届いてて綺麗だよな。ひとりもヨヨコも指綺麗だし」

「そ、そう？..そう？」

「ああ」

私を他所に、大槻さんとイチチャつき始めた。

何でそれを出汁にして他の女子に尻尾を振るんだろうか。

私の指ではなく、ギタリストやベーシストの指全般って事か。……私は一郎の頬を抓る。

そっちがそうなら、私にも考えはある。

こうなれば、片っ端から暴露してやる。

「最近、一郎は女優の○○が好きでその人のSNSを見るのにハマってる」

「○○さんのキャンプ知識載ってて面白いんだよ」

「この前、綺麗なグラビアモデルが表紙だからって雑誌買った」

「その雑誌で連載されてる漫画のカルタが付録に付いてたから欲しかった」

「ば、バイト先で会う近所の女の人に鼻の下を伸ばしてる歳上趣味」

「その人が毎回連れて来るペットのチワワが可愛くて毎回撫でさせて貰ってる」

「っ……………」

悉く私の目論見を外れて、露呈しても一郎には一切の痛痒が無い事実みたいだ。これでは、空回りしている私が恥ずかしい。

大槻さんがこちらを憐れむような目で見ている。

えーと……………えーと……………ほ、他には……………。

「一郎は……………私に惚れている」

「……………まあ、遺憾ながら」

「私のベースが好き」

「二年前から推してる」

「私が私服でスカート履くと意外とテンションが高い」

「見慣れないし、似合ってるからな。家の中でしか着ないのが残念だが」

「他には……………えっと」

何当たり前の事言っただコイツ……………という顔をされている。

思いの外、私は一郎の事を知らないみたいだ。

悔しくて一郎を睨んでいたら、大槻さんの方から啜り泣きが聞こえた。

「どうした、ヨヨコ」

「り、リア充が！私に対する当てつけ!? 良いわよ、別に！私にはフォロワーとかバンドが

あるんだから!!私だつて魅力的で、友だちぐらい一万人いますけど!!」
「何で暴走してんの?」

……一郎にダメージは無かつたけど、大槻さんの反応で何だかスカツとした。

「ヨヨコが魅力的じゃなかつたら、投票も今頃は『結束バンド』一択になつてるだろ。何故にそんな自己評価低いんだオマエ……」

「……………えっ」

「……………」

「……………」

何か、きゅんとした顔で大槻さんが一郎を見ている。

丁度お風呂から出てきた虹夏は表情が無い。

うん……………やっぱり、これは浮気だ。

おまけ 『一郎の趣味』

俺——前田一郎は、陽キャ君に呼び出されていた。

彼の教室へと赴くと、彼以外のクラスメイトは既に帰宅していて、ポツンと中央の椅子に腰掛ける姿を見つける。

俺の来訪に気付くなり、笑顔で手招きした。

俺は陽キャ君の前の席に腰掛ける。

「どうしたんだ？」

「いや、ちよつとね。聴いて欲しい話があるんだ」

「はあ」

「この雰囲気は相談……か？」

まあ、いつも俺の方が相談に乗って貰っていたから、こういう時に恩返ししておくべきなのかもしれない。

「良いよ、俺で良ければ」

「ありがとうーじゃあ、まずこれを見てくれ」

明るい笑顔で、陽キャ君が何処からか取り出したノートを机に広げた。

俺に見せたページの上には、何やら一覧表のような物が記載されている。

よく見れば、四つのタイプの女の子について記されていた。

A——凄く人見知りで、普段から凄く消極的だったり緊張のあまり暴走してしまう悪癖があるが、他人が苦しくなって助けも求められずにいる時は誰よりも早く気付いて手を差し伸べてくれる女の子。

B——クラスのムードメーカー、何もかも勢いに任せた危うい行動力の持ち主だが、その反面あらゆる事に真面目に取り組み、強い責任感の下で自分に出来る事を必ず全う

しようとする強い心を持つ女の子。

C——ちぐはぐな面子でもしつかりまとめるリーダー、面倒見が良くて私生活でも母か姉のような存在で、時々自分独りで抱え込んで押し潰れそうになる弱さもある女の子。

D——ビジュアルは良く、それを行使して同性も誑し込む女の子。

……やたらとDだけ情報量が少なすぎないか？

まあ、こう見るとAからCまでの女の子は凄く応援したくなる魅力的な人たちだな。

しかし、こんな物を見せて陽キャ君は何がしたいんだ？

わざわざ一覧まで作るこの労力、これで相談……まさか陽キャ君の好みか？今彼が気になっている女子四名の特徴だとか。

それで俺に相談……だとすると、責任重大だな。

「一郎くんの好みを知りたくて」

「……………え？」

「ん？」

「……相談じゃないのか」

「うん」

潔く認める陽キャ君に呆れてしまう。

思ったより軽い話で拍子抜けだ。

まあ、別に答えても問題無い話か。俺の好みなんて有効活用できそうな場面も無いくらい価値のない話だろうから。

単に知りたくなっただけだろう。

「んー……AかCかな」

「へー、その心は？」

「Aは何ていうか、誰かに気遣う分だけ自分の事が疎かって感じだからその部分をフォローしてやりたくなる」

「Cは？」

「Cを選んだのは反射的で……多分俺が誰かに甘えたいというキモい欲望もあると思う……」

ふむふむ、と陽キャ君は頷く。

何やら予想通りという顔だ。

「Bを選ばなかった理由は？」

「俺が居なくても、ムードメーカーって言われるほど慕われてるなら、彼女を大切に思う誰かが助けてくれそう」

「Dは？」

「最悪過ぎるだろ。誰と一緒にいたいんだ、こんなの」

俺がそう言うと、彼はくつくつと笑う。

何かそんなに面白いんだよ。

「いやー、良いことが聞けたよ」

「そ、そうか？」

「うん。この先も一郎くんとは仲良くしたいね！」

「何で？」

完

【ボツ虹夏ルート】 違う道でも

普段から人通りの少ない非常階段。

俺はそこでも人が滅多に利用しない三階近くの段差に腰を下ろし、膝上で弁当箱を展開した。

梅雨の湿った空気で少し汗ばむ首元に、襟を緩めるや片手で扇いで風を送り込む。教室の方が湿気も凄いので、風通しが良いここは幾分か自由時間で賑わうクラスメイトより得をした気分になれる。

誰にも邪魔されず、心穏やかにいられる安息の時間。

入学早々にこのポイントを発見できたのは幸運だった筈だ。

だが、最近はその安寧を享受できないでいる。

弁当箱の中身も半分にし掛かったところだ。

下の階から、非常階段の段差を踏み鳴らす一つの軽やかな足音がし始める。

いつもの事だから、向かってくる人の気配の正体にも察しが付く。

黙って待つと、踊り場でひよつこりと金のサイドポニーを揺らして愛らしい笑顔が角から顔を覗かせる。

「今日もここにいたっ」

「ど、どうも」

「もーっ、教室にいてよ！この階段キツいんだよ？」

「ごめん。教室で待つ方が恥ずかしいというか……」

「何それ」

俺の返事に頬を膨らませ、如何にも不満な事を主張する表情のまま少女がこちらに近づく。

この少女は、伊地知虹夏。

クラスは違うが、ひよんな事で知り合った。

それまでお互いに面識は無かった……というより、一方的に俺が知っていた。

それは何とも恥ずかしい理由である。

入学して少しし、一目惚れなる物をした。

ただ、自分には縁の無き過ぎる事だと諦観して特に行動を起こさなかったが、唐突に奇跡は眼の前に降ってきたのだ。

手洗いで何となしに教室を出た先で、プリントを一人廊下でぶち撒けて転倒する少女

に出会した。

半ば反射的にプリントを手助けをしたのだが、その相手がまさか一目惚れをした相手こと——伊地知虹夏だと思いきもしなかった。

その後、職員室まで一緒にプリントを運んで……。

『ありがとう！ホントに助かったよ〜！』

『いや、大した事は別に』

『良かったらお礼させて！』

『え？だから別に大した事は』

『良いから！お礼させて！お願いします！』

『何でそっちが必死なの？』

よくわからないが、そんな事から交流が始まった。

何故かその日は一緒にご飯を食べ、連絡先を交換して次の日から昼休憩では会って話すようになっていた。

一緒に昼食でも食べるのかとか、初めて人に誘われるかもなんて少しドギマギしていたが、本人曰く「リヨウは私以外に友だち居ない上に大人数が苦手な子だから」と昼食が終わった後に会う事になった。

まあ、俺もアイツに会わずに済むのは有り難い。

以前、伊地知さんの友人である女子——山田リヨウを紹介された時にあつと叫びそうな声を飲み込んだ時の驚愕はまだ記憶にも鮮やかだ。

紹介される前から、アイツとは面識があつた。

奇妙な出会い方もあつたが、これ以上関わりたくないと思つていた故に最初は初対面を装つたけど、あちらも気付いている風で徒労に潰えた。

「前田くん？」

「いや、ちよつと昔を思い出してた」

「何か晩年のお爺ちゃんみたいだよ」

「老けてるって言いたいのか」

隣にスカートの裾を捌いて伊地知さんが座る。

「ここつて静かだよね」

「まあ、そういう場所を選んでるから。穴場の一つだな」

「前田くんつて、こういうところ幾つ知ってるの？」

「四つくらいは。友だち居ないから、全部自分調べ」

「入学して一月なのに独力でそこまで……」

なぜ伊地知さんが悲しそうな顔をするんだ。

……でも、彼女くらい明るくて人当たりが良い性格の人間なら、俺のように独りでい

たいなんて思うくらい他人をストレスに感じるほど苦しくない生活を送っているのだから。

俺みたいにコソコソ一人になれる空間を探すなんて変な努力は必要無いわけだ。

「でも、私ここ好きだなーって思うよ」

「何で？」

「この薄暗い感じ、ライブハウスに似てるし」

「ああ、バイト先がライブハウスなんだっけ」

「うん。お姉ちゃんが経営してるところ」

「じゃあ、我が家みたいなもんか」

「そうだね。まあ、他にもここがいい部分はあるけど」

「なに？」

俺が尋ねると、伊地知さんが照れ臭そうにはにかむ。

「二人つきりになれるから」

その一言に、呼吸が止まりかけた。

どういう意図で発したのか。

俺が固まっている間も、伊地知さんはこちらを見つめ続けている。冗談だとか言い出す空気が無くて、ただ生温い沈黙だけが流れる。

俺はどう応えたらいい？

大体、伊地知さんの真意が分からない。

「えへへ、ちよつと恥ずかしいね。暑いや」

伊地知さんは暑そうに首元を手で扇ぐ。

「でも、夏になったららもつと暑くなるね。ここも居づらくなるんじゃないかな？」

「そうなつたら別の場所に行くから」

「今度は段差のないところね」

「……ああ」

その時、予鈴が鳴った。

伊地知さんは立ち上がって、こちらに振り向く。

「あと、二人きりになれるところでねっ」

難しそうな注文だった。

パタパタと伊地知さんが去っていく。

俺を誂っているにしても、刺激が強すぎる。

一目惚れした相手との会話という難題を乗り越えて一人になれた事に胸を撫で下ろしている、上の階から足音がした。

「なんだよ」

「別に」

そちらを向かずに言えば、少しくすりと笑う声があった。

♪

♪

♪

♪

私——山田リヨウは春先にその人と出会った。

中学の同級生だったらしく、路上で眠る私を保護し、親が迎えに来るまで介抱してくれた献身的な行動に一応の感謝を伝えるべく住所先を親から聞いて訪ねたけど、どうやら私用で出かけていたらしくて会う事は叶わなかった。

タイミングが悪かったと見て、それ以降は足を運ばなかったのである。

下北沢に住んでいる事は分かったし、もし偶然でも会った時にしようと思った。

そして、彼とは意外な場所で再会する。

それは――。

「あつ、前田くん！」

「ん？伊地知さんか」

高校の廊下で先を歩く人物を虹夏が呼び止めた。

声に応じて振り返った顔に私は少なからず驚かされる。

あの日の男の子だったのだ。

あちらも私に気付いたのか、一瞬目を開いた後に駆け寄ってきた虹夏に視線を移す。

……何だか誤魔化したような気がする。

あの反応からして忘れたという可能性はゼロだ。

そこまでして隠したいのは何故……ちよつと面白そうなのでイジリたくなる。

「虹夏、知り合い？」

「うん！前田一郎くん、最近仲良しになったんだよ」

「へえ。前田一郎って言うんだ？」

私がそう言うのと彼の顔が引き攣る。

「あ、前田くんに紹介するね。山田リョウ、私の友だち」

「そ、そっか」

「初めまして。呼び方、前田でいい？」

「じゃあ、こっちも山田……で呼ばせてもらう」

「ん。よろしく」

あちらも私があの日の一事件を憶えていると察したようだけど、それ以上の追及はしなかった。

その廊下での会話以降、虹夏はよく前田について話すようになった。この前は家に行つて、一緒に料理をしたとか聞いてもいない話をする。

でも、あんなに楽しそうな虹夏も中々見ない。

最初は、唯一の友だちを盗られた気になった。

ぶつちやけると、嫉妬したのだ。

だから、気になって前田の家に足を運んだ。家の場所は知っているから、迷う事は無かったけど……梅雨ともあり、着く頃にはずぶ濡れでしばらく世話になる事になった。

「とりあえず、これで体拭いてくれ」

「分かった。またお世話になるね」

「……あれからもう路上で寝てないだろうか?」

「前田は私のこと猫か何かだと思ってる?」

シャワーも借りて、前田が用意してくれたジャージに着替えた。女子の中では身長も高い方だけど、やっぱりブカブカである。

服が乾くまでの間として一緒に少しだけ過ごしたけど、それがまた凄く快適だった。我が家とも違う、筆舌に表し難い独特な空気から得る安心感がある。

気付いたら、その日はご飯も食べて前田のベッドで熟睡していた。当の本人こと前田は、客用の敷布団で眠ったらしい。

「よく寝れた」

「人のベッドでな。許可もなく使いやがって」

「あれが前田のベッドだつて知らなくて」

「寝言でも限度があるぞ」

「さてはベッドで寝た私に嫉妬した?」

「普通に怒ってんだよ」

朝からイライラしている前田を眺っていると、椅子に座った私にココアが差し出され

た。

それを飲んで、また体が弛緩していく。

「前田、罪な男だ」

「何だ急に。罵倒か？」

「虹夏という女がいながら、私まで甘やかすとは。もうここに根を張りそうだな」

「ここって落ちれば死ぬ高さの階なんだって知ってるか？」

知ってるけど？

真意の分からない前田の変な言い回しを不思議に思いつつ、彼から差し出された朝食に手を付ける。口ではあーだこーだ言いつつも、何だかんだ来客には甘いようだ。

味は……意外と好み。

虹夏と同じ感じがする。

私はそれを堪能し、彼と一緒に登校の準備をして家を出た。……洗ったシャツは同じ洗剤の匂いがして、少し可笑しい。

「なに笑ってんだよ」

「別に。虹夏が見たら恨まれそうだなって」

「伊地知さん以前に俺が恨んでるからな。昨日も俺が楽しみにしてたカスタードプリン勝手に食いやがって」

「名前を書いてない前田が悪い」

「普段から家に他人居ないのに書くわけないだろうが」

中身のない会話だった。

でも、ここまで他愛のない話を楽しいと思った経験は少ない。

友だちやバンド仲間では大抵は音楽についてだったりするし、普通に友だちがいないからそもそも会話量が無かったりするけど。

「ご飯美味しかった」

「不味いとか言ったら叩き出したけどな」

「また隠れた名店を見つけてしまった」

「店って言うなら金払えよ」

心底疲れたように言う彼に、私は笑う。

それから度々、彼の家に足を運んだ。

泊まる事が多くなって、せめて家族に一報入れると怒られはしたけど、それ以外はもう諦めたように何も言わなくなったので私の完全勝利である。

二人で映画を観たり、たまに私のベースの音を耳に刻んでやつたり……楽しい時間だった。

それだけ一緒にいて、時間を共有するだけあって前田の事は自然と詳しくなる。

だから、虹夏が私へ上機嫌に語る前田の情報はほとんどが既に知っている事ばかりだった。そこに変な優越感もあつて聞いていたら、ドヤ顔していると指摘されてしまった。

……何でこんな事で優越感なんて覚えているんだらうか。

虹夏も前田の事ばかりだけど、何であんな気に入つてゐるんだらう。

最近みんなも自分も分からない。

そう、前田の全てを知っているワケじゃない。

だから、私は虹夏の話で新たに情報を得ると確認も兼ねて家を訪ねる。

やっぱりいい顔はされないけど、嫌嫌と言いながらも迎えてくれる様子は、俗に言うツンデレの体現のように思えた。

「おい、炬燵で溶けすぎだろ……」

「前田。ここに炬燵も備えたつてことは、もう私に住めと言つても同じだと思う」

「明日には撤去しとくよ」

「そしたら一郎のベッドに住み着く」

「ほぼ毎晩のように住み着いてるだらうが」

炬燵でぼーっとしながら、壁に掛けられたカレンダーを見る。

クリスマスが近いなあ。

外はいつも以上に騒がしくなるだろうし、私も家で……いやここで過ごそうかな。炬燵もあるなら文句無しだ、私はここに住む。

そんな風に思っていたら、テレビでもクリスマスについてニュースで報道されていた。

「クリスマスか」

「前田はどうするの？」

「特に予定は無い。ただ、店長にエンジョイしてきなさいってイブは休みは貰ったけど……山田は？」

「私はここでのんびりする予定」

「ここ以外の選択肢は無いのかよ……」

「じゃあ、前田。クリスマスケーキ二人で食べよう」

「俺が買うのそれ？」

クリスマスは予定無し、か。

前田はイケメンというワケじゃないし、クラスでもあまり友だちもいないって本人の口振りから異性として親密な関係になりたいと望んでいる人間はいなさそうである。

前田に恋人——……？

他の女子が隣にいる前田を想像して、違和感しかない。どんな子を想像しても、何か

頼まれ事をされただとか道を聞かれたとかって内容じゃないと不自然極まりないのだ。
じゃあ、逆にそういう関係としてしっくりくる女性って？——そう考えた時、一人だけなるほどって思った。

「そっか。じゃあ、私と前田だけでクリスマス過ごすの普通か」

それが自然な形なら、それでいい。



私は少し浮かれていた。

アプローチも順調だったから、教室でニヤニヤしてるのをリヨウにも指摘された。私だって浮かれてる自覚はある。

でもさ、これくらいは仕方無いと思う。

入学から気になっていた人と近づけて、やっと話せるようになったんだから。

次は休日になつていた人と誘うのが一番理想的な展開だ。

今日も、転びかけた時に前田くんが受け止めてくれて急接近もしてしまった。

意外と体があつしりしてるとか、洗剤良いの使ってるなーとか……私は変態か!!

「虹夏、楽しそうだね」

「え、そ、そうかな〜?」

「浮かれすぎて花が見える」

「馬鹿にしてるでしょ!?!リヨウもいつかこうなりますー!」

流石にリヨウがそうなるとは本気で思つてはいないけど。

でも、リヨウの指摘通りだと思う。

前田くんと過ごせる様になって、仲良くなって、あと一步のところだ。

「前田くん、クリスマス……イブに誘っても大丈夫かな……？」

「え、前田？」

「うん！」

「でも、前田はイブに予定あるよ」

「ええ!?!そ、そうなの？」

「うん」

「あー、そっかあ」

それは、物凄く残念……何でリヨウが予定知ってるのかわからないけど、この本人の答え方からして嘘ではないみたいだ。幼馴染として、嘘ついた時はすぐ分かるくらいには表情も読み取れるし。

「じゃあ、25日は良いかな!?!」

「バイトだから、夜は遅いと思う」

「うう、そっかあ……って前田くんのスケジュールに詳しくない？」

「本人が言ってた」

「へ?そ、そうなんだ？」

そりゃ、遊びの約束とかするから私もある程度は知ってるつもりだけど、スケジュールの確認って話題を選んで誘導したりして私はいつも聞き出してる。

クリスマスの前定って、リヨウと前田くんが一体どんな話したらそうなるんだろう???

私が当惑していると、リヨウが立ち上がる。

「喉乾いたし、何か買ってこよう」

「え、リヨウ飲み物買うお金あるの?」

「虹夏……私を何だと思ってるの? それくらい自分で払えるよ。前田に持たされたし」

「自分のお金じゃないじゃん!?!」

やれやれとリヨウは呆れたように去っていく。

人に借りた金で威張るな山田!!……って、あれ? 何でリヨウの為に前田くんがそんな親身になってお金を持たせるなんてして——!?!

その時だった。

リヨウが私の隣を通り過ぎた時、あの匂いがした。

「何で、リヨウから前田くんと同じ匂いがするの……?」

BADEND 『やさぐれ悪魔と天使様』 2

一郎くんとの秘密の同棲生活が始まって二年以上が経っている。

それなのに、私は駄目だ。

未だに彼を心配するみんなに報告出来ていない。

二人での生活を心地好く思っていて、手放すのを惜しくなっている気持ちが私を躊躇わせる。

「我ながら駄目人間だなー」

洗濯物を畳みながら、私はため息をついた。

結局、自責の念に駆られるのはこの時だけで少し経てば二人でいる時間の幸福を噛み締めて、これからも続けばなんて夢想する。

リヨウには酷い事をしている自覚はある。

ぼっちちゃんの涙を止めるなら話すべきだ。

喜多ちゃんに気遣わせる必要も無くなる。

そんな諸々の悩みの解消を一挙に行える手段が手元にあるのに、私は甘美な優越感から幾度となく事情を打ち明けるタイミングを見送ってきた。

「……虹夏」

「あ、一郎くん。その格好は……！」

「何だよ、その反応」

洗面台の扉が開いて、一郎くんが現れる。

久し振りに髭も剃って、身形を整えていた。

叔父さんの郁人さんに似てきた彼だが、何と見慣れないスーツに身を包んでいる。

うわあ、物珍しさと着込んだ彼が思いの外似合っていて興奮に思わず拍手してしまつた。

訝しむその顔だけは、二年間と変わらなくて可笑しいけど。

「スーツ着て何処行くの？もしかして就活？」

「……いや、謝ってくるというか」

「謝る？」

一郎くんが気まずげに視線を逸らして頭を搔く。

「……これから山田家に行ってくる」

……………え？

聞き間違い、だろうか。

私の困惑顔に言葉が届いていないと思った一郎くんが、再度「山田家に謝罪して」と告げた。

さあつ、と私の全身から血の気が引く。

たしかに、いつかはやるべきだと考えていたけれど。

どうして、『今』なの？

「ど、どうして急に」

「…………虹夏に十分助けてもらったからな。『結束バンド』が軌道に乗ってきてるのも知ってるし、流石に立ち直って虹夏の夢に集中させてやろうって…………ようやく思い直した感じだ」

語られているのは嬉しい内容なのに、胸は張り裂けそうなくらいの悲しさに痛む。

自分でもかなり呼吸が浅くなっている事に気付いた。

駄目だ、こんな動揺見せたらいけない。一郎くんに余計な心配をさせてしまう。

彼がようやく前向きに生きようとしてくれてるんだ。

その為に、まず一步目である山田家への挨拶に行くだけ。だから、邪魔なんてしちやいけないんだから何とかして止めないと。

どうしよう、どうしよう。

でも、混乱した頭では何も思いつかない。

玄関へと向かう一郎くんへと伸ばした手を彷徨わせて、気づいたら彼が飲み干した酒瓶を手に取っていた。

そのまま無防備な彼の背中へ飛びつくように近付き、気付いたら片手のそれを振り上げて――。

『ピンポーン』

「ん、誰だ？」

「え？」

鳴り響いたインターホンに振りかぶった酒瓶を止める。

私はさつとそれを近くに置き、彼より先に玄関へと向かった。

誰だろう、近所の回覧板かな。

でも、このタイミングは助かる。対応している間は一郎くんも家を出ないだろうし、少し考える猶予が増える。

混乱に騒いでいた心臓を落ち着かせるように胸を撫で下ろし、私は玄関扉を開けた。

「あつ、伊地知先輩！ 一郎先輩も、おはようございますっ♪」

私を迎えた眩しい笑顔に思わず顔が引き攣る。

この家知らない筈の後輩にしてバンド仲間の喜多ちゃんが目の前でにこやかに私とそのウシロにいる一郎へと挨拶した。

私はあまりの衝撃と動揺のあまり、無意識に声にならない声で「どうして」と尋ねていた。

その反応を見た喜多ちゃんは恍惚とした表情に変わる。

「だって、一郎先輩の話題が上がるとみんな内心穏やかじゃられないのに、伊地知先輩だけ妙にその時は落ち着いてるんですよ。リーダーとしてみんなを余計に混乱させない為になのかな、とも思ってたんですけど『女が見せる変化』って、いつもその裏には『男』がありますよねっ！」

「っ、あ……」

「何で伊地知先輩が隠してたかは、凡そ見当がついてます。きっと、一郎先輩とみんながちゃんと会えるまでの心の準備が整う時間を作るためですよね」

「あ、そ、そう——」

「だから」

感動したような喜多ちゃんに抱き締められる。

熱い吐息が耳朶を擦った。

「もう大丈夫。みんなで、仲良くしましよ」

喜多ちゃんの台詞に、私は何も言えなかった。

ただ、抱きしめられた状態でふと玄関扉の影からこちらを覗いている眼差しに気付く。——ふたりちゃんだ。

「ふたり、ちゃん？」

「喜多ちゃんに教えたんだよ？」

「え……」

「ここ二年間、友だちのお姉ちゃんといっくんが一緒にお酒を飲んでたら、いつつも可愛くて明るくて面倒見の良さそうな金髪の女の人が迎えに来るって聞いたの」

えへへ、とふたりちゃんが無邪気に笑う。

この日、私と一郎くんの生活は唐突に終わりを迎えた。

それから二年、あつという間に時間は過ぎていった。

心配をかけた山田家や後藤家等の方に報告と謝罪をした一郎くんは、今までの時間を取り返そうとする勢いで自分の生活環境を整えていく。

最初は山田家に部屋を借りてリョウの両親のところまで働き始め、ある程度の資金が手に入ると一人で部屋を契約して。

すっかり私の助けなんて要らない人になっていた。

そう、私なんて。

「一郎。いつ山田になるの？」

「ならないと駄目なのかよ。結婚しなくてもオマエずっと粘着してきそうだよ」

「連絡も無く置き去りにされた最愛の女が影でやけ酒していたとも知らず」

「……………」

「泣いた事はないけど。お酒美味しくて」

「飲みたかっただけじゃん」

隣にはリョウがいる。

私の入る隙間なんて、一切ない。

ああ、いつか来るこの瞬間に怯えていたのに、今は悲しくも何とも無い。

ただ、胸の中で一つの感情だけが育っていた。

みんな、どうか？

今の一郎くん、私がいだから立ち直れたんだよ。私がいだから、今みんなと笑い合えているんだよ？

ねえ、一郎くん。

だからさ、私も欲しいな。

謝罪じゃなくて、もう一つの方を……ね。

ある程度生活が落ち着いてきたところで、一郎くんは私のところにも戻って来た。

あの部屋は名残惜しくて解約しておらず、二人きりで落ち着いて話せるし、懐かしいからとそこに彼を招いた。

一郎くんはこれまで私が費やした生活費分を入れた封筒と一緒に訪れた。

「本当に世話になった。人生やり直せたのも虹夏のお蔭だ」

「それは何度も聞いたから、良いんだって。一郎くんが一番頑張ったんだよ。立ち直れて偉い！」

「……その言葉だけで胸がすくよ」

苦笑する一郎くんにも私も笑って、机の上に酒瓶を出す。

「よし、今日はもう飲んじやお？」

「え、今から？」

「今日はオフでしょ」

「まあ、そうだけどさ」

「じゃあ、乾杯！」

「ええ……？」

強引に一郎くん用のコップにお酒を注ぐ。

私の勢いに気圧された彼が、渋々といった感じでコップに口をつけて、ん？と小首を傾げる。

「何か妙に……」

「ん？どうしたの？」

「……いや、まさかな」

何か違和感があったのか、でも気の所為だという事にした一郎くんが一杯を飲み干す。

私は間髪入れずに彼のコップを再び満たしながら、昔話に花を咲かせた。ここでぐー

たら過ごしていた彼の恥ずかしいエピソードといい、高校の時に積み重ねた二人の友情の始まりについても語り、二人だけだということのにとても盛り上がった。

そんな楽しい酒宴は、一郎くんが机の上に突っ伏して眠りについた事で幕を下ろす。そう、彼の宴は。

「うん。準備万端だね」

私はようやくだ、と内心でほくそ笑んで一郎くんの襟に手をかけた。

翌朝、お互い生まれたままの姿で起床する。

狭いベッドを二人で共有していた事と、この状況に顔色を青くした一郎くんと目が合った。

ようやく、胸の中で育ち膨らんでいた感情が花開く時が来た。

私は一郎くんの素肌に自分の素肌をすり合わせながら、彼の胸にとんと頭を置く。

「どうしよう。一郎くん、やっちゃったね」

今度は、一郎くんが私の面倒を見てね？